

五目牛清水田遺跡

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書
（古代・中近世編）

1993

建設省
群馬県教育委員会
（助）群馬県埋蔵文化財調査事業団

資料	財群馬原理識文化財	01-330
	調査事業団保管	25
98-	平成10年5月13日	>(7)
U.4919		

五目牛清水田遺跡

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書
（古代・中近世編）

1993

建設省
群馬県教育委員会
（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

目 次

I. 発掘調査と遺跡の概要

1. 発掘調査に至る経過……………1
2. 遺跡の位置と周辺の地形……………1
3. 周辺の遺跡分布……………2
4. 調査の方法と経過……………10
5. 基本土層……………12

II. 縄文時代の調査

1. 調査概要……………13
2. 竪穴住居……………16
3. 土 坑……………66
4. 集石土坑……………71
5. 配 石……………79
6. 包含層出土遺物……………82
 - (1) 土 器
 - (2) 石 器
 - (3) その他の出土遺物
7. 包含層の遺物分布……………191

III. 古代の調査

1. 調査概要……………211
2. 竪穴住居……………215
3. 掘立柱建物……………332
4. 竪穴状遺構……………345
5. 特殊遺構……………347
6. 祭 祀 跡……………350
7. 前方後円墳……………365
8. 土 坑……………376
9. 溝……………387
10. 畠……………390
11. 旧 河 道……………403
12. 水 田……………412

IV. 中・近世の調査

1. 調査概要……………488
2. 2区の調査……………489
3. 3区の調査……………490
4. 4区の調査……………496
5. 5区の調査……………501

V. 考 察

1. 花積下層式土器について……………531
2. 1H水田を埋める
 氾濫堆積物について……………538
3. 五日牛清水水田遺跡に認められた
 条里地割りの施行年代について……………539

遺物観察表

付載 科学分析……………別冊

- 付図1 縄文時代包含層の遺物分布
付図2 縄文時代包含層の遺物分布 (花積下層式)
付図3 縄文時代包含層の遺物分布 (前期土器)
付図4 縄文時代包含層の遺物分布 (中期土器)
付図5 縄文時代包含層の遺物分布 (後期土器)
付図6 縄文時代包含層の遺物分布断面図 (土器・石器)
付図7 縄文時代包含層の遺物分布 (礫)
付図8 縄文時代包含層の遺物分布断面図 (礫)
付図9 縄文時代包含層の遺物分布 (剥片石器)
付図10 縄文時代包含層の遺物分布 (礫石部)
付図11 縄文時代包含層の遺物分布 (打製石斧)
付図12 縄文時代包含層の遺物分布 (石鏃・石材)
付図13 縄文時代包含層の遺物分布 (黒曜石)
付図14 縄文時代包含層の遺物分布 (チャート)
付図15 縄文時代包含層の遺物分布 (黒色頁岩)
付図16 縄文時代包含層の遺物分布 (安山岩・玄武岩・頁岩)
付図17 縄文時代包含層の遺物分布 (粘土塊・片岩)
付図18 4号住居と包含層の遺物分布 (土層)
付図19 4号住居と包含層の遺物分布 (礫)
付図20 4号住居と包含層の遺物分布 (石器・石材)
付図21 縄文包含層下の確認調査状況と土層堆積状況
付図22 6世紀後半以後の居住域全体図
付図23 旧河道部の土層堆積状況 (2区東壁)
付図24 遺跡周辺の地割りに残る条里地割り
付図25 1H水田に見られる条里地割り
付図26 中・近世の主な遺構と条里地割り

表 目 次

第 7 表	古代の土地利用の変遷	211	第 10 表	竪穴住居外形寸法表	540
第 8 表	古代土坑一覧	384	第 11 表	竪穴住居外形分類基準	540
第 9 表	中・近世土坑一覧	525	第 12 表	古代竪穴住居一覧	541

挿 図 目 次

第166図	想定される微高地の範囲と居住域	212	第215図	15号住居と出土遺物	262
第167図	古代の微高地上の遺構配置 (上は古墳以前、下は古墳以後)	213	第216図	21号住居と出土遺物	263
第168図	2号住居	215	第217図	23号住居と出土遺物	264
第169図	2号住居と出土遺物	216	第218図	24号住居	265
第170図	3号住居と出土遺物	217	第219図	24号住居	266
第171図	11号住居	218	第220図	24号住居出土遺物	267
第172図	11号住居と出土遺物	219	第221図	25号住居	268
第173図	16号住居	220	第222図	25号住居出土遺物	269
第174図	16号住居	221	第223図	26号住居	270
第175図	16号住居	222	第224図	26号住居	271
第176図	16号住居出土遺物	223	第225図	26号出土遺物	272
第177図	17号住居と出土遺物	224	第226図	27号住居と出土遺物	273
第178図	18号住居と出土遺物	225	第227図	28号住居	274
第179図	19号住居と出土遺物	226	第228図	28号住居出土遺物(1)	275
第180図	19号住居出土遺物	227	第229図	28号住居出土遺物(2)	276
第181図	20号住居	228	第230図	29号住居	277
第182図	20号住居炭化材・遺物の出土状況	229	第231図	29号住居出土遺物	278
第183図	20号住居出土遺物	230	第232図	30号住居	279
第184図	1号住居	232	第233図	30号住居出土遺物	280
第185図	1号住居	233	第234図	31号住居と出土遺物	281
第186図	1号住居竈	234	第235図	32号住居	282
第187図	1号住居出土遺物(1)	235	第236図	32号住居出土遺物	283
第188図	1号住居出土遺物(2)	236	第237図	33号住居	284
第189図	4号住居	237	第238図	33号住居出土遺物	285
第190図	5号住居と出土遺物	238	第239図	34号住居と出土遺物	286
第191図	6号住居	239	第240図	35号住居	287
第192図	6号住居	240	第241図	35号住居	288
第193図	6号住居出土遺物	241	第242図	35号住居出土遺物(1)	289
第194図	7号住居	242	第243図	35号住居出土遺物(2)	290
第195図	7号住居出土遺物	243	第244図	36号住居	291
第196図	8号住居	244	第245図	36号住居出土遺物	292
第197図	8号住居	245	第246図	37・38号住居	293
第198図	23号住居出土遺物	245	第247図	37・38号住居	294
第199図	8号住居出土遺物(1)	246	第248図	37・38号住居出土遺物	295
第200図	8号住居出土遺物(2)	247	第249図	39・40号住居	296
第201図	9号住居	248	第250図	39号住居遺物の出土状況	298
第202図	9号住居と竈	249	第251図	39・40号住居	299
第203図	9号出土遺物	250	第252図	39号住居出土遺物(1)	300
第204図	10号住居	251	第253図	39号住居出土遺物(2)	301
第205図	10号住居	252	第254図	39号住居出土遺物(3)	302
第206図	10号住居出土遺物	253	第255図	40号住居出土遺物	303
第207図	12号住居	254	第256図	41号住居	304
第208図	12号住居出土遺物	255	第257図	41号住居	305
第209図	13号住居	256	第258図	41号住居出土遺物	306
第210図	13号住居竈	257	第259図	42・43号住居	307
第211図	13号住居遺物の出土状況	258	第260図	42号住居遺物の出土状況	308
第212図	13号住居出土遺物(1)	259	第261図	42号住居	309
第213図	13号住居出土遺物(2)	260	第262図	43号住居出土遺物	310
第214図	13号住居出土遺物(3)	261	第263図	42号住居出土遺物(1)	311
			第264図	42号住居出土遺物(2)	312

第265図	42号住居出土遺物(3)	313	第327図	5区49号土坑と出土遺物	377
第266図	42号住居出土遺物(4)	314	第328図	5区60号土坑と出土遺物(1)	378
第267図	44号住居	315	第329図	5区60号土坑出土遺物(2)	379
第268図	44号住居出土遺物	316	第330図	5区60号土坑出土遺物(3)	380
第269図	45号住居	317	第331図	5区60号土坑出土遺物(4)	381
第270図	45号住居	318	第332図	5区60号土坑出土遺物(5)	382
第271図	45号住居出土遺物(1)	319	第333図	5区60号土坑出土遺物(6)	383
第272図	45号住居出土遺物(2)	320	第334図	5区141号土坑	384
第273図	46号住居	321	第335図	土坑(1)	385
第274図	46号住居と出土遺物	322	第336図	土坑(2)	386
第275図	46号住居出土遺物	323	第337図	3区微高地上の溝	387
第276図	47号住居	324	第338図	5区微高地上の溝	388
第277図	47号住居と出土遺物(1)	325	第339図	5区85号溝出土遺物	389
第278図	47号住居出土遺物(2)	326	第340図	3・4区島の土層断面図	390
第279図	48号住居と出土遺物	328	第341図	3・4区島と土層断面図	391
第280図	49号住居	329	第342図	1期島(3区)	393
第281図	49号住居	330	第343図	1期島の断面図	394
第282図	49号住居出土遺物	331	第344図	1期島の断面図	394
第283図	6号孤立柱建物	333	第345図	1期島と断面図	395
第284図	7号・8号孤立柱建物	334	第346図	1期島	396
第285図	9号・10号孤立柱建物	335	第347図	1期島	397
第286図	12号孤立柱建物	336	第348図	4区遺構確認面出土遺物	398
第287図	11号・13号孤立柱建物	337	第349図	5区低地1期島	399
第288図	14号・15号孤立柱建物	339	第350図	5区低地1期島と断面図	400
第289図	16号・17号孤立柱建物	340	第351図	5区低地1期島	401
第290図	18号孤立柱建物	341	第352図	5区低地1期島の分類と断面図	402
第291図	19号孤立柱建物	342	第353図	周辺の地形と旧河道	403
第292図	20号・21号孤立柱建物	343	第354図	1～3区旧河道全体図	404
第293図	22号孤立柱建物	344	第355図	1区旧河道全体図	406
第294図	1号竪穴式溝溝	345	第356図	1区旧河道出土の杭と木製品	408
第295図	2号竪穴式溝溝	346	第357図	1区旧河道出土の土器	409
第296図	1号特殊溝溝	347	第358図	3区旧河道真木の出土状況と出土遺物	410
第297図	2号・3号特殊溝溝	348	第359図	3区旧河道土層断面図	411
第298図	4号特殊溝溝	349	第360図	3区8号水田耕土下出土遺物	412
第299図	5号特殊溝溝	350	第361図	3区8号水田耕土下全体図	413
第300図	1号祭祀跡	351	第362図	3区8号水田耕土下断面図	415
第301図	1号祭祀跡遺物の出土状況	352	第363図	3区8号水田に見られる変形的な区画	416
第302図	1号祭祀跡出土遺物(1)	353	第364図	3区8号水田全体図	417
第303図	1号祭祀跡出土遺物(2)	354	第365図	3区8号水田出土遺物と出土状況	419
第304図	2号祭祀跡断面図	354	第366図	3区7号水田全体図	420
第305図	2号祭祀跡	355	第367図	3区7号水田断面図	421
第306図	2号祭祀跡遺物の出土状況(土師器片)	356	第368図	3区7号水田出土遺物と出土状況	422
第307図	2号祭祀跡遺物の出土状況(土師器)	357	第369図	3区6号水田全体図	423
第308図	2号祭祀跡遺物の出土状況(須恵器)	358	第370図	3区5号水田断面図	426
第309図	2号祭祀跡出土遺物(1)	359	第371図	3区5号水田全体図	427
第310図	2号祭祀跡出土遺物(2)	360	第372図	3区4号水田全体図	429
第311図	2号祭祀跡出土遺物(3)	361	第373図	3区4号水田断面図	431
第312図	2号祭祀跡出土遺物(4)	362	第374図	3区4号水田に伴う水溝	432
第313図	3号祭祀跡遺物の出土状況	363	第375図	3区4号水田に伴う水溝	433
第314図	3号祭祀跡出土遺物	364	第376図	3区18・19・60号溝及び出土状況	434
第315図	1号古墳位置図	366	第377図	3区4号水田出土遺物	435
第316図	1号古墳全体図	366	第378図	3区2号水田水口8	436
第317図	1号古墳周壕土層断面	367	第379図	2～3区2号水田全体図	437
第318図	1号古墳石室覆瓦部分断面図	368	第380図	2区2号水田	439
第319図	1号古墳周壕出土遺物(1)	369	第381図	3区2号水田	440
第320図	1号古墳周壕出土遺物(2)	370	第382図	3区2号水田出土遺物	441
第321図	1号古墳周壕出土遺物(3)	371	第383図	5区2号水田	442
第322図	1号古墳石室覆瓦部分出土遺物(1)	372	第384図	5区2号水田断面図	443
第323図	1号古墳石室覆瓦部分出土遺物(2)	373	第385図	5区2号水田耕土下出土遺物	445
第324図	1号古墳石室覆瓦部分出土遺物(3)	374	第386図	2区1号水田耕土下溝断面図	446
第325図	1号古墳石室覆瓦部分出土遺物(4)	375	第387図	2区1号水田耕土下溝	447
第326図	島以前の土坑	376	第388図	3区1号水田耕土下溝(1)	448

第389回	3区1号水田耕土下溝(2)	449	第427回	3区6号溝出土遺物	493
第390回	3区1号水田牛の足跡	450	第428回	3区8~10号溝	494
第391回	1号水田及び畝全体図	451	第429回	3区1・2号竪立柱建物	495
第392回	1区1号水田	453	第430回	3区井戸・土坑	496
第393回	1区1号水田牛の足跡の方向	454	第431回	4区中~近世の遺構	497
第394回	1区1号水田牛の足跡	455	第432回	4区111~113号溝	498
第395回	3区1号水田大畹の新断面図	456	第433回	4区111~113号溝出土遺物(1)	499
第396回	2~3区1号水田全体図	457	第434回	4区111~113号溝出土遺物(2)	500
第397回	3区1号水田歩行を示す人の足跡	460	第435回	5区中~近世溝断面図	501
第398回	2区1号水田牛の足跡の方向	461	第436回	5区中~近世溝断面図	502
第399回	3区1号水田大畹欠落部の状況	462	第437回	5区中~近世の遺構	503
第400回	3区1号水田大畹欠落部断面図	463	第438回	5区中~近世溝断面図	505
第401回	2~3区1号水田出土遺物と出土位置	464	第439回	5区42・43号溝出土遺物(1)	506
第402回	2~3区1号水田出土遺物と出土状況	465	第440回	5区42・43号溝出土遺物(2)	507
第403回	131~134号溝断面図	466	第441回	5区42・43号溝出土遺物(3)	508
第404回	4区1号水田・畝全体図	467	第442回	5区42・43号溝出土遺物(4)	509
第405回	4区132号溝	469	第443回	5区42・43号溝出土遺物(5)	510
第406回	4区132号溝	470	第444回	5区42・43号溝出土遺物(6)	511
第407回	4区1号区画畝	471	第445回	5区42・43号溝出土遺物(7)	512
第408回	4区2号区画畝	472	第446回	5区42・43号溝出土遺物(8)	513
第409回	4区1号水田下で確認された水田	473	第447回	5区42・43号溝出土遺物(9)	514
第410回	4区1号H-2水田断面図	474	第448回	5区110号溝出土遺物	515
第411回	5区1号水田	475	第449回	5区4号竪立柱建物出土遺物	516
第412回	5区1号水田出土遺物	476	第450回	5区3・4号竪立柱建物	517
第413回	5区1号水田断面図	477	第451回	5区5号竪立柱建物	518
第414回	1~4区As-B下水田全体図	479	第452回	井戸の深さと透水層	519
第415回	1区As-B下水田	480	第453回	5区中~近世井戸	520
第416回	1区As-B下水田断面図	481	第454回	5区井戸出土遺物 (1:5号、2・4~7:8号、3:7号)	521
第417回	2区As-B下水田	482	第455回	5区井戸出土遺物 (8・9・11:7号、10:9号)	522
第418回	3区As-B下水田	483	第456回	5区1号基壇	523
第419回	4区As-B下水田	484	第457回	5区2号基壇	524
第420回	5区As-B下の状況と短刀出土位置	485	第458回	5区中~近世土坑(1)	526
第421回	5区As-B層直下出土短刀	486	第459回	5区中~近世土坑(2)	527
第422回	5区遺構外出土遺物	487	第460回	5区中~近世土坑(3)	528
第423回	2区中~近世の遺構	488	第461回	5区中~近世土坑(4)	529
第424回	2区1・2号土坑	489	第462回	5区中~近世遺構外出土遺物	530
第425回	3区6号溝	490			
第426回	3区中~近世の遺構	491			

写真図版

PL113	1. 2号住居 全景	3. 同1 掘形	
	2. 同 遺物出土状況	4. 同3	
	3. 同2	5. 同 掘形全景	
	4. 同 埋没土	PL117	1. 17号住居 全景
	5. 同 砂		2. 同 掘形
	6. 3号住居 全景		3. 同 床下土坑
	7. 同 貯蔵穴		4. 18号住居 全景
	8. 同 掘形		5. 土坑 貯蔵穴上面の遺物出土状況
PL114	1. 11号住居 遺物出土状況		6. 土坑 貯蔵穴
	2. 同1		7. 土坑 床面出土の遺物
	3. 同1		8. 土坑 掘形
	4. 同 炉	PL118	1. 19号住居 遺物・炭化材の出土状況
	5. 同 掘形		2. 同1
PL115	1. 16号住居 遺物出土状況		3. 同1
	2. 同 梯子穴		4. 同1
	3. 同2		5. 同1
	4. 同2	PL119	1. 20号住居 遺物・炭化材・焼土の出土状況
	5. 同1 床面出土遺物		2. 同 埋没土の状況
PL116	1. 16号住居 西側縁部床面の状況		3. 同1
	2. 同 焼土化した床面		4. 同1

5. 同1
- P L 120 1. 20号住居 遺物・炭化材・焼土の出土状況
2. 同1
3. 同1 貯蔵穴内
4. 同 貯蔵穴内埋没土の状況
5. 同 全景
- P L 121 1. 5区古代の遺構全景
2. 1号住居 全景
- P L 122 1. 1号住居 遺物出土状況
2. 同 電の埋没状況
3. 同 電全景
4. 同 電掘形
5. 同 貯蔵穴
6. 4号住居 全景
7. 同 掘形
8. 同 床下土坑1埋没土の状況
- P L 123 1. 5号住居 全景
2. 同 電全景
3. 同 掘形全景
4. 同 床下土坑の調査状況
5. 同 床下土坑2の埋没土の状況
- P L 124 1. 6号住居 全景
2. 同 磁石の出土状況
3. 同 紡錘車の出土状況
4. 同 電全景
5. 同 掘形全景
- P L 125 1. 6号住居 床下の調査状況
2. 同 床下土坑1の埋没状況
3. 7号住居 全景
4. 同 遺物の出土状況
5. 同4 竈周辺
6. 同 電の埋没状況
7. 同 掘形全景
8. 同 床下で確認された柱穴
- P L 126 1. 8号住居 遺物の出土状況
2. 同1
3. 同1
4. 同 住居に投げ込まれた群衆の調査
5. 同5
- P L 127 1. 8号住居 群衆下出土の遺物と炭化材
2. 同 電全景
3. 同 竈わき床面出土の土器
4. 同1 群衆下出土の炭化材
5. 同 電掘形の調査
- P L 128 1. 9号住居 全景
2. 同 電
3. 同 電掘形の調査
4. 同 電下の状況
5. 同 電下勾玉の出土状況
- P L 129 1. 9号住居 貯蔵穴全景
2. 同1 炭器の出土状況
3. 同 床下土坑3の埋没状況
4. 同 床下土坑4の埋没状況
5. 同 掘形全景
- P L 130 1. 10号住居 全景
2. 同 電
3. 同2 埋没状況
4. 同 旧電
5. 同 掘形全景
- P L 131 1. 12号住居 全景
2. 同 電
3. 同2 埋没状況
4. 同 貯蔵穴
5. 同 掘形全景
- P L 132 1. 12号住居 床下の調査状況
2. 同 電下の状況
3. 13号住居 全景
4. 同 遺物の出土状況
5. 同 床面出土遺物の状況
- P L 133 1. 13号住居 電
2. 同 電の使用状況(手前から)
3. 同2(後道部から)
4. 同住居 床下の状況
5. 4区住居集中区(上方が5区)
- P L 134 1. 15号住居
2. 同1
3. 21号住居 全景
4. 埋没土の状況
5. 24号住居 全景
- P L 135 1. 24号住居 埋没状況
2. 同1 東壁部分
3. 同 遺物の出土状況
4. 同 電掘道(上方から)
5. 同 電の埋没状況
6. 同 電全景
7. 同 貯蔵穴
8. 同住居 掘形
- P L 136 1. 25号住居 全景
2. 同 埋没状況
3. 同 電
4. 同 電掘石
5. 同住居調査風景
- P L 137 1. 26号住居 全景
2. 同 埋没状況
3. 同 電
4. 同 電使用箇下の状況
5. 同住居 掘形
- P L 138 1. 27号住居 全景
2. 同 電の確認状況
3. 同住居の埋没状況
4. 同 電の埋没状況
5. 同 電全景
6. 同 東壁下床面出土の土器
7. 土器 南西隅床面出土の萬福石
8. 28号住居 南東隅床面出土の萬福石
- P L 139 1. 28号住居 全景
2. 同住居の埋没状況
3. 同 電
4. 同 東壁際遺物の出土状況
5. 同 電掘石
- P L 140 1. 29号住居 全景
2. 同住居の埋没状況
3. 同 電
4. 同 電右袖下埋没土器
5. 同 床下の調査状況
- P L 141 1. 30号住居 全景
2. 同住居の埋没状況
3. 同 東壁際の遺物出土状況
4. 同 電
5. 同 床下の調査状況
- P L 142 1. 31号住居 全景
2. 同住居の埋没状況
3. 同 遺物の出土状況
4. 同 電

- P L 143 5. 32号住居 全景
1. 32号住居 埋没状況
2. 同 電
3. 同 電の埋没状況
4. 同 床下の調査状況
5. 33号住居 全景
- P L 144 1. 33号住居 埋没状況
2. 同 電
3. 同 床下の調査状況
4. 同 3
5. 34号住居 全景
6. 同住居 埋没状況
7. 同 電
8. 同 南東隅の状況
- P L 145 1. 35号住居 全景
2. 同住居 埋没状況
3. 同 電の埋没状況
4. 同 電全景
5. 同 電右袖部の埋没土器
- P L 146 1. 35号住居 貯蔵穴
2. 土器 電軸に使用された長壺
3. 土器 電使用面下の状況
4. 同 床下の確認状況
5. 同 床下の調査状況
- P L 147 1. 36号住居 全景
2. 同 遺物の出土状況
3. 同 北西隅床面出土の磨盤み石
4. 同 電
5. 同住居 掘形
- P L 148 1. 37号(右)・38号(左)住居 全景
2. 同住居の重複状況
3. 37号住居 電(埋没部に土器を使用している)
4. 同 電軸石
5. 同 電支脚に使用された土器
- P L 149 1. 37号・38号住居 掘形
2. 38号住居 新旧電使用面下の調査状況
3. 39号住居 全景
4. 同住居 埋没状況
5. 同 4 部分
- P L 150 1. 39号住居 電
2. 同 電右側床面出土の土器
3. 同 柱の根元に重ねて置かれた杯
4. 同 旧電
5. 同 旧電使用面下の状況
6. 同 新電使用面下の状況
7. 同 6
8. 同住居 掘形
- P L 151 1. 40号住居 全景
2. 39号(手前)・40号(奥)住居 重複状況
3. 40号住居 電
4. 同電 埋没状況
5. 41号住居 全景
- P L 152 1. 41号住居 埋没状況
2. 同 電
3. 同 電埋没部の断面
4. 同住居 掘形
5. 42号住居 全景
- P L 153 1. 42号住居 埋没状況
2. 同 遺物の出土状況
3. 同 2
4. 同 2
5. 同 電前の遺物出土状況
6. 同 電
7. 同住居 掘形
8. 43号住居 全景
- P L 154 1. 44号住居 全景
2. 同 南壁下遺物出土状況
3. 同 電周辺の遺物出土状況
4. 同 3
5. 同住居 掘形
- P L 155 1. 45号住居 全景
2. 同 遺物の出土状況
3. 同住居 掘形
4. 同 電
5. 同 柱穴の柱痕
- P L 156 1. 46号住居 全景
2. 同 電
3. 同 北壁際遺物出土状況
4. 同 南壁際ベンガラ出土状況
5. 同住居 掘形
- P L 157 1. 47号住居 全景
2. 同 埋没状況
3. 同 南壁際遺物出土状況
4. 同 電
5. 同 電使用面下の状況
- P L 158 1. 47号住居 柱穴際の礎
2. 同住居 掘形
3. 48号住居 全景
4. 同住居 埋没状況
5. 同 南壁際遺物出土状況
- P L 159 1. 48号住居 電の埋没状況
2. 同 電埋没部(横から)
3. 同 2 (掘出し部分)
4. 同 2 (焚き口部から)
5. 49号住居 全景
- P L 160 1. 49号住居 電前床面出土の土器
2. 同住居 埋没状況
3. 同 2 中央部分
4. 同 電と貯蔵穴
5. 同 電
6. 同 電軸に使用された土器
7. 同 電下掘形に残る跡痕
8. 同住居 掘形
- P L 161 1. 6号孤立柱建物
2. 同 柱穴埋没土
3. 7号孤立柱建物
4. 同 柱穴埋没土
5. 9号孤立柱建物
6. 10号孤立柱建物
7. 12号孤立柱建物 柱穴内の土器
8. 同 7 柱穴内の礎
- P L 162 1. 12号孤立柱建物
2. 13号孤立柱建物
3. 14号孤立柱建物
4. 14号(上)・15号(下)孤立柱建物
5. 15号孤立柱建物
- P L 163 1. 16号・17号孤立柱建物
2. 18号孤立柱建物
3. 19号孤立柱建物
4. 20号孤立柱建物
5. 21号孤立柱建物
6. 22号孤立柱建物
7. 1号壁穴状遺構
8. 同 7

- P.L164 1. 2号竪穴状遺構 全景
2. 同 出土遺物
3. 同 埋没状況
4. 同3
5. 同3
- P.L165 1. 1号特殊遺構
2. 2号特殊遺構
3. 3号(上方)・4号(下方)特殊遺構
4. 3号特殊遺構
5. 4号特殊遺構
6. 同5 断面
7. 5号特殊遺構
8. 同7 断面
- P.L166 1. 1号祭祀跡 全景(東から)左側の棚は1号古墳岡堀
2. 同1(西から)
3. 同 遺物分布範囲に認められた落ち込み
4. 同 落ち込み内の遺物
5. 同4
- P.L167 1. 2号祭祀跡 確認状況(Aa-B直下面)
2. 同 全景
- P.L168 1. 1号祭祀跡 全景
2. 同 部分
3. 同2
4. 同2
5. 同2
- P.L169 1. 1号祭祀跡 最下面の遺物出土状況
2. 同1 部分
3. 同2
4. 同 土層断面
5. 同4
- P.L170 1. 2号祭祀跡 出土物の総量
2. 3号祭祀跡 全景
3. 同2 断片を取り去った状態
4. 同3 部分
5. 同3 最下面の状態
- P.L171 1. 1号古墳の選地
2. 1号古墳 全景
- P.L172 1. 1号古墳 調査風景
2. 同 周縁内遺物出土状況(西側)
3. 同2(北側)
4. 同 周縁の状況(前方部西側から)
5. 同3
- P.L173 1. 1号古墳 周縁埋没土
2. 同1
3. 同1
4. 同1
5. 同 石室擾乱部 全景
- P.L174 1. 1号古墳 石室擾乱部確認状況
2. 同1 調査状況
3. 同2
4. 同2
5. 同 石室の擾乱状況
6. 同5
7. 同5
8. 同5
- P.L175 1. 51号土坑 埋没土
2. 同 全景
3. 56号土坑 埋没土
4. 同 全景
5. 119~122号土坑
6. 119号(右)・120号(左)土坑 確認状況
7. 119号土坑 確認状況
8. 同 埋没土
- P.L176 1. 119号土坑 全面に粘質土を貼り付けている
2. 同 貼られた粘質土の厚み
3. 同 粘質土を取り去った状態
4. 120号土坑 土層断面
5. 121号土坑 確認状況
6. 同 埋没土
7. 同 完備状況
8. 122号土坑 埋没土
- P.L177 1. 49号土坑
2. 60号土坑 埋没状況
3. 同 遺物出土状況
4. 同3
5. 同 完備状況
6. 66号土坑 完備状況
7. 土坑 埋没土
8. 70号土坑
- P.L178 1. 70号・85号土坑
2. 71号土坑
3. 87号土坑
4. 88号・89号土坑
5. 91号・92号土坑
6. 93号土坑
7. 95号・96号土坑
8. 97号土坑
- P.L179 1. 98号土坑
2. 100号・101号土坑
3. 102号土坑
4. 104号土坑
5. 106号土坑
6. 109号土坑
7. 141号土坑
8. 同 埋没土
- P.L180 1. 3区微高地上の溝 全景
2. 同 62号・63号溝
3. 同 71号溝
4. 同 72号溝
5. 同 73号・74号溝
6. 同 74号溝
7. 同 79号溝
- P.L181 1. 5区 51号溝
2. 同 埋没土
3. 5区 85号溝
4. 同 埋没土
5. 同 遺物の出土状況
6. 同5 部分
7. 同5 部分
- P.L182 1. 3区微高地 浅間C継石の落ち込み調査状況
2. 同1 平面確認状況
3. 同 断面
4. 同2
5. 同3
- P.L183 1. 3区微高地 I期鼎
2. 同1
3. 同 II期鼎
4. 同3
5. 同3
6. 同3 手前はII期鼎
7. 同3 II期鼎に伴う落ち込み
8. 同7
- P.L184 1. 3区微高地 II期鼎全景

2. 同 Ⅱ期島を覆う白色シルト (沼澤層)
- P L 185 1. 3区低地島 Ⅱ期沼澤層全景
2. 同 確認状況
3. 同 2
4. 同 2
5. 同 完形状況
6. 同 5
7. 同 5 サクの底面に礫痕が見られる
- P L 186 1. 4区Ⅱ期島 (東から)
2. 同 1 (南から)
3. 4区島 断面
4. 同 3
5. 同 3
- P L 187 1. 4区Ⅲ期島 全景 (東から)
2. 同 1 (西から) 中央を横断するのは1号道
- P L 188 1. 4区Ⅲ期島と道 (北から、中央の道は1号道)
2. 1号道 (南から、正面は洞山)
3. 2号道 (左手は131号・132号溝)
4. 3号道 (南から、正面は洞山)
5. 同 4 部分
- P L 189 1. 4区Ⅲ期島重複状況 (東から)
2. 同 1 (北から)
3. 同 1 確認状況
4. 同 1
5. 同 4 サクの状況
- P L 190 1. 4区西側Ⅲ期島の重複状況 (東から) 白線はⅡ期島
2. 同 1 Ⅲc期島
3. 同 1 Ⅲb期島
4. 同 1 Ⅲd期島
5. 同 1 Ⅲe期島
- P L 191 1. 4区Ⅲ期島 確認状況
2. 同 1
3. 同 1
4. 同 1 北西部 右手の高まりは1号特殊遺構
5. 同 1 北西部 中央の住居は48号住居
6. 同 1 中央部 手前の住居は46号住居
7. 同 1 南東部 手前の住居は26号住居
8. 5区Ⅲ期島 確認状況
- P L 192 1. 5区低地島の確認状況 全景 (東から)
2. 同 1 断面
3. 同 1 断面
4. 同 1 西側部分 (南から)
5. 同 1 東側部分 (南から)
- P L 193 1. 5区低地島 Ⅲ期島 西平部
2. 同 1 東平部
3. 同 1 Ⅲd・Ⅲe期島
4. 同 Ⅱ期島
5. 同 Ⅲb島
6. 同 Ⅰ期島
7. 同 島下の確認調査
8. 同 7 土層断面 島下にFA層確認
- P L 194 1. 1区旧河道 全景 (南から)
2. 1区旧河道埋設前の状況
調査時も掘削であり、水みちとなっていることが判る
- P L 195 1. 1区旧河道 FA下砂層最下部出土土器 (3)
2. 同 1
3. 同 旧河道縁辺部土器の出土状況
4. 同 3 (2)
5. 同 3 (4)
6. 同 3 (1)
7. 1区旧河道に横たわる流木
8. 同 7
- P L 196 1. 1区旧河道調査風景
2. 同 1
3. 同 杭確認状況
4. 同 3
5. 同 3
- P L 197 1. 1区旧河道 杭確認状況
2. 同 1
3. 同 1
4. 同 1
5. 同 1
6. 同 1
7. 同 1
- P L 198 1. 1区旧河道 東壁土層断面
2. 同 1
3. 同 1
4. 同 1 流木の出土状況
5. 同 1 沼澤層の土層
- P L 199 1. 2区旧河道 FA下砂層埋設前の状況
2. 2区旧河道 東壁土層断面
- P L 200 1. 2区旧河道 東壁土層断面
2. 同 1 最下部に基盤の砂層が見える
3. 同 1 下層に流木が見られる
4. 同 1 北側の立ち上り
5. 同 4
6. 大型の流木
7. 同 1 一夜にして池と化した旧河道
- P L 201 1. 3区旧河道 調査状況
2. 同 1 土層断面
3. 同 1 流木の出土状況
4. 同 1 黒色粘質土下シルト層から土器出土
5. 同 4 中央のベルト上手前に土器がある
- P L 202 1. 3区8H水田耕土下で確認された水跡と水田区画の痕跡
2. 同 1 上方が8H水田、下方が耕土下の痕跡
3. 同 2 8H水田耕土下の確認面
4. 同 1 147号溝
5. 同 1 小門跡の出土状況
- P L 203 1. 8H水田に伴う117号溝 (3区)
2. 同 1 断面
3. 8H水田耕土の層厚 (3区)
4. 3区8H水田 全景
- P L 204 1. 3区8H水田の区画
2. 同 1
3. 同 1
4. 3区8H水田耕土内遺物出土状況
5. 同 4
- P L 205 1. 3区7H水田
2. 同 1 6H水田との比較 (左手上方が6H水田、手前が7H水田。比高差は5cm程度)
- P L 206 1. 3区7H水田 水田区画と水跡
2. 同 1
3. 同 1
4. 同 1 アゼの状態
5. 同 4
6. 同 1 アゼ上の足跡
7. 同 1 6H水田 (上方) と7H水田 (下方) の重複状況
8. 同 1 7H水田の耕土
- P L 207 1. 3区6H水田 6H層 (白色シルト) と水田面の状

- 題
 2. 同1 全景 (南から)
 P L 208 1. 3区6号水田の区画
 2. 同1 変則部分
 3. 同1
 4. 同2
 5. 同1 アゼ上の足跡
 6. 同1 積土
 7. 3区5号水田の区画
 8. 同7 積土
 P L 209 1. 3区5号水田 全景
 2. 同1
 P L 210 1. 3区東平4号水田 全景 (東から)
 2. 同1 (北から)
 P L 211 1. 3区西側旧河道上面の4号水田
 2. 3区東平4号水田
 3. 同2
 4. 同2 水田面の状態
 5. 同2 アゼの確認状況
 P L 212 1. 3区4号水田 90号溝に伴う6号水堀
 2. 同 19号溝に伴う1~3号水堀
 3. 同 19号溝内の様
 4. 同 90号溝敷石
 5. 同4
 P L 213 1. 3区4号水田 19号溝
 2. 同1
 3. 同1
 4. 同1
 5. 同 18号・19号溝の合流部分
 6. 同5
 7. 同 19号溝 土器 (6) の出土状況
 8. 同7
 P L 214 1. 3区4号水田 18号溝
 2. 同 18号溝 土器 (3・4・5) の出土状況
 3. 同2
 4. 同2
 5. 同 18号溝 土器 (1・2) の出土状況
 6. 同5
 7. 同 64号溝
 8. 同7
 P L 215 1. 2区2号水田 全景 (東から)
 2. 同 アゼと水田面の状況 (手前は1号水田)
 3. 同 2号層と水田積土 (2区西壁)
 4. 同2
 P L 216 1. 2区2号水田 2号層とアゼ (上方は1号水田面)
 2. 同 水口の状態
 3. 同2
 4. 同2
 5. 3区2号水田 全景 (東から)
 P L 217 1. 3区西側旧河道上面の2号水田
 2. 同1 調査風景
 P L 218 1. 3区中央部の2号水田
 2. 同1
 3. 同1
 4. 同1
 5. 同1
 P L 219 1. 3区2号水田 28号溝の確認状況
 2. 同 28号溝 完形状況
 3. 同 28号溝 土器 (2) の出土状況
 4. 同 28号溝 埋没土
 5. 同 30号溝
 6. 同5 埋没土
 P L 220 1. 5区2号水田 全景 (西から)
 2. 同 58号・59号溝
 3. 同2
 4. 5区2号水田 水口1
 5. 同4 埋没土
 P L 221 1. 5区2号水田
 2. 同1 縁辺部の段差
 3. 同1 水口2
 4. 同1 南北方向アゼの状況
 5. 同1 水田面に残る足跡
 P L 222 1. 5区2号水田 83号溝確認状況
 2. 同1
 3. 同1 埋没状況
 4. 同1 2号水田下での再確認
 5. 同4 完形状況
 6. 同5
 7. 同5 先端部に付く水落ち状のくぼみ
 8. 同7
 P L 223 1. 2区1号水田積土下 12号・13号・14号溝確認状況
 2. 同 12号溝の切り込み面
 3. 同 13号・14号溝
 4. 同 31号溝
 5. 同 12号溝
 6. 同 13号・31号溝の切り込み面
 7. 同 13号溝底面に残る輪痕
 P L 224 1. 3区1号水田積土下 15号溝
 2. 同1 埋没状況
 3. 同 29号溝
 4. 同 26号溝
 5. 同 27号溝
 P L 225 1. 3区1号水田積土下 21号溝
 2. 同 22号溝
 3. 同 24号溝
 4. 同 25号溝
 5. 同4
 P L 226 1. 1区1号水田 全景 (南から)
 2. 同 牛の足跡の調査
 3. 同2
 4. 同2
 5. 同2
 P L 227 1. 1区1号水田 牛の足跡
 2. 同1
 3. 同1
 4. 同1
 5. 同1
 6. 同1
 7. 同1
 P L 228 1. 2・3区1号水田 全景 (西から)
 中央よりやや上方に大アゼ (横方向)、
 中央部縦方向にのびるのが半折りの小アゼ
 2. 2区1号水田 南北方向アゼの走向
 3. 同1
 4. 同2
 P L 229 1. 2区1号水田 (上面) と2号水田 (下面) の重畳状
 態
 2. 同1
 3. 2区1号水田 人の足跡確認状況
 4. 同3 1号層を取りきった状態
 5. 2区1号水田 牛の足跡確認状況
 6. 同5 1号層を取りきった状態
 P L 230 1. 2区1号水田 水田面出土の土器 (4)
 2. 2区1号水田 水口2

- 3, 同2
4, 同2
5, 同 水口7
6, 同5
7, 同5
8, 同 水口10・11
- P L 231 1, 1～3区1H水田 全景(北側上空から)
2, 同1(東から)
- P L 232 1, 3区1H水田 大アゼ付近の状況
2, 同 段差のないアゼの確認状況
3, 3区1H水田 大アゼ(南から) 遠方の山は岡山
4, 同3
5, 同3 大アゼ前平部の状況
6, 同5 削平部を埋める1H層
7, 同5
8, 同5 削平部に流れついた球状ローム堆
- P L 233 1, 3区1H水田 大アゼ断面A(北壁)
2, 同1 近接
3, 3区1H水田 小アゼの断面
4, 同3
5, 同3
6, 3区1H水田面を覆う1H層
7, 3区1H水田 小アゼ側面に残る銅板
8, 同7
- P L 234 1, 3区1H水田 水口3
2, 同1
3, 同 水口5・6
4, 同3
5, 同 水口15・18・19
6, 同 水口18・19
7, 同 水口24
- P L 235 1, 3区1H水田 大アゼ際を歩行する人の足跡
2, 同1
3, 同 小アゼ上から水田面を横断する人の足跡
4, 同1
5, 3区1H水田 大アゼの削平調査
6, 同 大アゼ内土器(2)の出土状況
7, 同 小アゼ内土器(3)の出土状況
8, 同 耕土で埋没した水口内土器(5)の出土状況
- P L 236 1, 3区1H水田 大アゼ断面B
2, 同1
3, 同 大アゼ内出土の礫
4, 同 大アゼ断面E
5, 3区南延長区 大アゼの状況
6, 同 北側断面
7, 同 大アゼ際土器(6)の出土状況
8, 同7
- P L 237 1, 4区1H水田(東から)
2, 4区1H-1水田 全景(南から)
3, 4区1H-2水田 全景(南から) 手前は耕土下の
島
4, 同3 水田の区画状況
5, 同3 アゼと水口
- P L 238 1, 1区1H水田 4号溝
2, 同1 4号溝確認状況
3, 3区1H水田 7号溝(右側は6号溝)
4, 同3(南から)
5, 同3 南壁断面
6, 4区1H水田 131～133号溝
7, 同6
- P L 239 1, 4区1H水田 131～134号溝 全景(南から)
遠方の山は岡山
- 2, 同 132号・134号溝
3, 同 134号溝
4, 同 132号溝土器(2)の出土状況
5, 同4
- P L 240 1, 4区1H島(南から)
2, 同1(東から)
3, 同1(東から)
4, 4区1H島 154号溝
5, 同 152号溝
6, 同 152号・154号溝の重複状況
7, 同 152号溝出土の礫
- P L 241 1, 4区1H島(1号区画島)
2, 同 確認状況
3, 同 断面
4, 同3
5, 同 掘形
6, 同 付属する溝
7, 4区1H島(2号区画島)
8, 同7
- P L 242 1, 4区1H島(2号区画島) 掘形
2, 同 付属する溝
3, 4区1H島 156号・157号溝
4, 同 156号溝埋没土
5, 同 157号溝埋没土
6, 同5
7, 同 158号溝
8, 同 159号溝
- P L 243 1, 5区1H水田 確認状況(東から)
上面はAa-B下面 手前には散乱する礫は36号溝
内からかき出された基盤層の礫
2, 同 36号溝内からかき出された基盤層の礫
3, 同 36号溝上面の土層地積状況
4, 同 水田面を覆う1H層
5, 同 1H層の層厚
- P L 244 1, 5区1H水田 36号溝の調査状況
2, 同1
3, 同1
4, 同 36号溝断面の状況
5, 同 36号溝断面に流れ込んだローム堆
- P L 245 1, 5区1H水田 36号溝内礫の堆積状況
2, 同 断面
3, 同2
4, 同2
5, 5区1H水田 36号溝全景
36号溝は水田を横切って掘削されている
- P L 246 1, 5区1H水田 調査状況
2, 同 1H層中の球状ローム塊
3, 同 37号溝の調査
4, 同 水田面検出状況
5, 同 1号水口確認状況
6, 同5 完備状況
7, 同6
8, 同 37号溝と36号溝の関係
- P L 247 1, 5区1H水田 全景(東から)
2, 同1(西から)
3, 同 直線的な南北アゼ
4, 同 くい違う東西アゼ
5, 同 変形的なアゼ交点
- P L 248 1, 1区 Aa-B下水田 全景(東から)
片側に溝を伴うアゼが見られる
2, 同1(南から)
3, 同 水田面の調査

	4. 同 水田面の状態		3. 同1 埋設状況
	5. 同 アゼ上に置かれた礫		4. 4区111～113号溝 全景
P L 249	1. 4区 As-B下水田 西側縁辺のアゼ	P L 291	1. 3区111～113号溝
	2. 同 片側に溝を伴うアゼ		2. 同1 礫の出土状況
	3. 同2		3. 4区121号・122号・123号溝
	4. 2区 As-B下水田 全景(東から)		4. 4区137号溝
	5. 同 中央に溝を伴う大アゼ		5. 4区136号溝
	6. 同 田面とアゼの状態		6. 4区139号溝
	7. 同 アゼに置かれた礫	P L 292	1. 5区43号・44号・53号溝 Aセクション
P L 250	1. 3区 As-B下水田		2. 同1 Bセクション
	2. 同1 水田面とアゼの状況		3. 5区44号溝
	3. 4区 As-B下水田		4. 同3
	4. 同3		5. 5区45号溝
	5. 同3 人の足跡確認状況		6. 5区46号溝
	6. 同5 完備状況		7. 5区53号溝
	7. 5区 As-B下の調査風景		8. 5区110号溝
	8. 5区 As-B直下 短刀(第421図)の出土状況	P L 293	1. 5区中・近世の遺構 全景(東から)
P L 251	2号・3号・11号・16号住居出土遺物		2. 同1 3～5号獨立柱建物の配置(東から)
P L 252	16～19号住居出土遺物		3. 同2(西から)
P L 253	19号・20号住居出土遺物		4. 同1(西から)
P L 254	1号住居出土遺物		5. 5区52号溝 全景
P L 255	1号・6号住居出土遺物	P L 294	1. 3区1号井戸(大アゼの左側)
P L 256	6～8号住居出土遺物		2. 3区2号井戸
P L 257	8～10号住居出土遺物		3. 5区3号井戸
P L 258	10号・12号・13号住居出土遺物		4. 同3 完備状況
P L 259	13号・15号住居出土遺物		5. 5区4号井戸
P L 260	13号・15号・21号・24号・25号住居出土遺物		6. 同5 完備状況
P L 261	26～28号住居出土遺物		7. 同5 墓面付近の砂礫層
P L 262	28～30号住居出土遺物		8. 5区5号井戸
P L 263	30～34号・39号住居出土遺物	P L 295	1. 5区6号井戸
P L 264	35号住居出土遺物		2. 同1 墓面付近出土の礫
P L 265	35～38号住居出土遺物		3. 5区7号井戸
P L 266	37～39号住居出土遺物		4. 同3 墓面付近出土の石臼
P L 267	39号住居出土遺物		5. 5区8号井戸
P L 268	39～41号住居出土遺物		6. 同5 墓面付近出土の人骨
P L 269	41号・42号住居出土遺物		7. 5区9号井戸
P L 270	42号住居出土遺物		8. 同7
P L 271	42号・44号住居出土遺物	P L 296	1. 2区1号土坑
P L 272	44～46号住居出土遺物		2. 2区2号土坑
P L 273	46号住居出土遺物		3. 3区3号土坑
P L 274	46～48号住居出土遺物		4. 同3
P L 275	49号住居出土遺物		5. 3区4号土坑
P L 276	1号・4号・5号特殊遺構 1号祭祀跡出土遺物		6. 5区10号土坑
P L 277	1号・2号祭祀跡出土遺物		7. 5区11号土坑
P L 278	2号祭祀跡出土遺物		8. 5区12号土坑
P L 279	2号・3号祭祀跡出土遺物	P L 297	1. 5区13号土坑
P L 280	古墳周堀出土遺物		2. 5区14号土坑
P L 281	古墳周堀出土遺物		3. 5区15号土坑
P L 282	古墳周堀・古墳石室出土遺物		4. 5区16号土坑
P L 283	古墳石室出土遺物		5. 5区17号土坑
P L 284	古墳石室 49号・60号土坑出土遺物		6. 5区19号土坑
P L 285	60号・66号土坑 85号溝 4区遺構確認面出土遺物		7. 5区20号・42号土坑
P L 286	1～3区旧河道・8号水田出土遺物		8. 同7
P L 287	7H・4H・2H・1H水田出土遺物	P L 298	1. 5区21号土坑
P L 288	1H水田出土遺物 5区 As-B直下出土短刀		2. 5区22号土坑
P L 289	1. 2区1～3号溝 全景		3. 5区23号土坑
	2. 同1 土層断面		4. 5区31号土坑
	3. 2区3号溝と1号土坑の重複		5. 5区33号土坑
	4. 同2		6. 5区34号土坑
	5. 3区8～10号溝 全景		7. 5区35号土坑
P L 290	1. 3区6号溝 全景		8. 5区36号土坑
	2. 同1 溝内の枕列	P L 299	1. 5区37号土坑

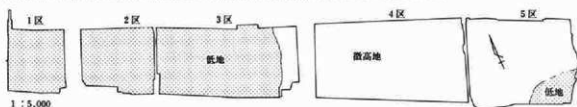
- 2. 5区39号土坑
 - 3. 5区40号土坑
 - 4. 5区41号土坑
 - 5. 5区41号土坑
 - 6. 5区47号土坑
 - 7. 5区47号土坑
 - 8. 5区48号土坑
- P L 300
- 1. 5区52号土坑
 - 2. 5区54号土坑
 - 3. 5区55号土坑
 - 4. 5区59号土坑
 - 5. 5区61号土坑

- 6. 5区67号土坑
 - 7. 5区63号土坑
 - 8. 5区63号土坑
- P L 301 2~4区出土遗物
- P L 302 4区·5区出土遗物
- P L 303 5区出土遗物
- P L 304 5区出土遗物
- P L 305 5区出土遗物
- P L 306 5区出土遗物
- P L 307 5区出土遗物
- P L 308 5区出土遗物
- P L 309 5区出土遗物

Ⅲ 古代の調査

1. 調査の概要

本章では弥生時代終末から平安時代までの調査内容を扱う。発掘調査により発見された遺構は、住居47軒（4世紀後半8軒、6世紀末～8世紀前半39軒）、掘立柱建物17棟、竪穴遺構2基、特殊遺構5カ所、祭祀跡3カ所、古墳1基、畠、水田9面、旧河道1本の他に、溝・土坑・ピットがあり、遺構の分布は調査区の全域におよんでいる。各々の時期は概略下図のとおりである。本遺跡における水田の開始は3世紀代に遡るものと思われ、以後低地部では現在に至るまで水田が継続されている。これに対し、微高地上の土地利用はめまぐるしい。まず4世紀後半に居住域となる。調査した住居8軒はいずれも粕川寄りの5区に占地しており、西側は畠地化されていた可能性が高い。その後、微高地は全域が畠地化されるが、6世紀後半には5区に前方後円墳が築かれ、一時基域となる。6世紀末からは再び居住域となり、7世紀後半から8世紀前半のピーク時には微高地のほぼ全域が居住域化される。居住域には掘立柱の倉庫や祭祀場が設けられた。8世紀中葉以降は微高地の全域が耕地化され、居住域は別地点に移されたと考えられる。

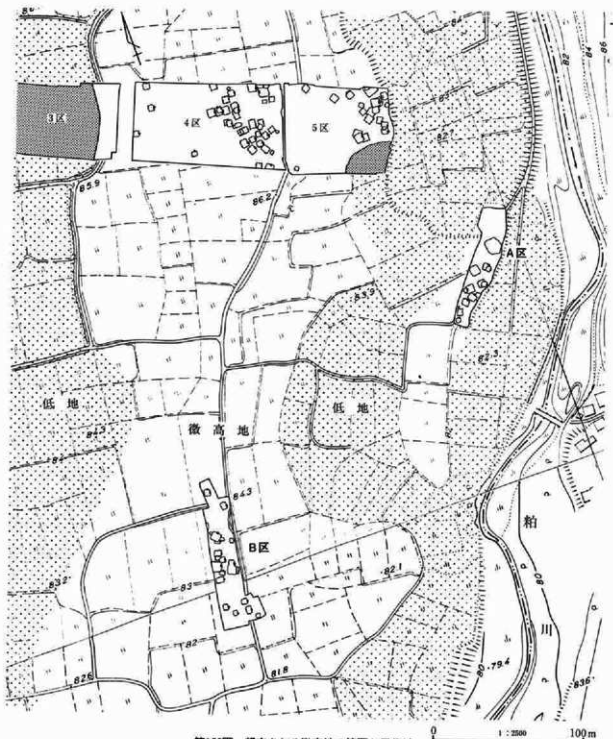


第7表 古代の土地利用の変遷

地形	遺構	世紀											
		3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
微高地	住居		—			—	—						
	掘立柱					—	—						
	竪穴						—						
	特殊						—						
	祭祀						—						
	古墳					—							
	畠		—	—	—	—	—						
	水田				—			—	—	—	—	—	—
低地	水田	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
	旧河道	—	—	—									
低地(5区)	畠					—							
	水田						—	—	—	—	—	—	

III 古代の調査

以上が古代の五目牛清水田遺跡の概要である。なお、本調査に先立って1979年赤堀町により本遺跡の隣接地が発掘調査されている（第166図）。粕川に面したA区では古墳時代前期の住居3軒と同後期の住居9軒、南方のB区では古墳時代後期から奈良時代にあたる住居22軒および道1本が各々発見されている。A区は5区谷地の対岸にあたるが、遺構の時期は5区微高地上的の内容と一致している。B区の遺構も本遺跡の居住域がピークをむかえる時期と一致しており、同一微高地上一連の住居群とすることができる。以上のことから両地点とも本遺跡を構成する一部と考えてよいだろう。



第166図 想定される微高地の範囲と居住域



第167図 古代の微高地上の遺構配置（上は古墳以前、下は古墳以後）

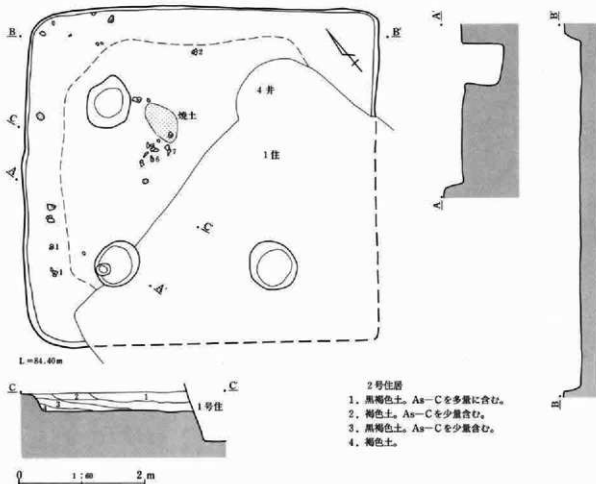
0 1:500 40m

2. 竪穴住居

今回の発掘調査で発見された古代の住居は47軒である。このうち8軒は4世紀後半、39軒は6世紀末～8世紀前半の住居で、両者には明らかな断絶期間が認められる。ここでは4世紀後半の8軒の住居を先に報告するが、住居名は調査時のものを使用しているため、番号が前後するものがある。また、調査後の検討で変更になったものや欠番となったものもある。第12表の一覧を参照していただきたい。

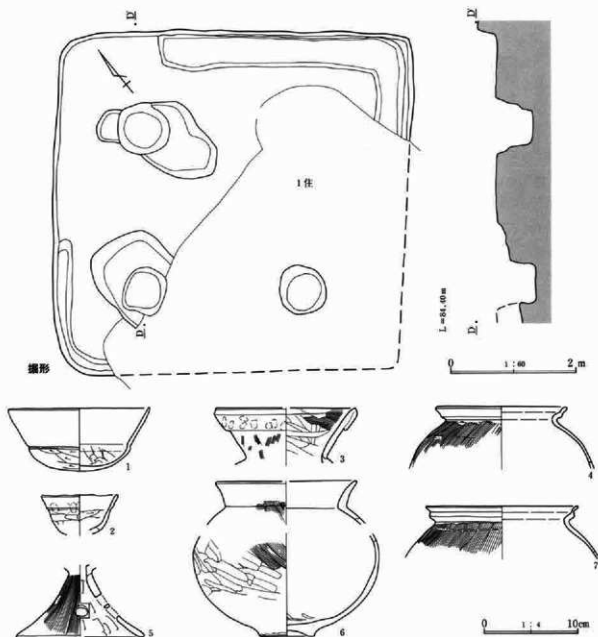
2号住居 (第168・169図)

R-36グリッドに位置する。長軸56.56m、短軸5.53mの大形正方形住居で、確認面からの深さは28cmである。南側の約半分を1号住居と4号井戸に切られるが、1号住居内で柱穴1本が確認された。住居の対角線上に4個の柱穴を配置するが、1本は4号井戸により消滅。芯々を結ぶ長さは2.5mで、正方形となるであろう。床面は平坦で、周縁部以外は土間状の堅い面となっている。炉は確認できなかった。床下の調査では、東側コーナー付近で壁に沿った幅50cm、深さ10cmほどの浅い溝状の掘り込み、西側コーナー付近で幅25cm、深さ15cmほどの周溝状の掘り込みが認められた。遺物の出土量は少なく、大半は覆土中からの出土である。7個体を図化したか、このうち2は床面出土、他は覆土中からの出土である。なお、住居中央付近の覆土中に多量の焼土の廃棄が認められた。



第168図 2号住居

III 古代の調査

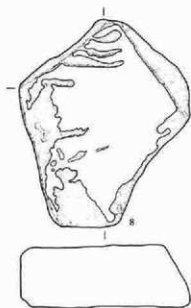
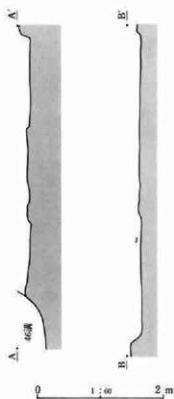
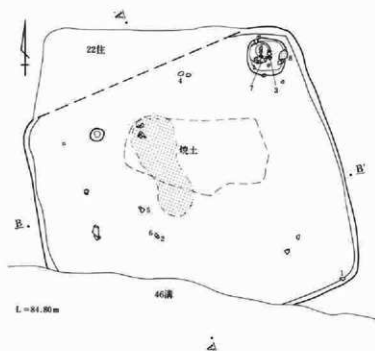


第169図 2号住居と出土遺物

3号住居 (第170図)

P-36グリッドに位置する。長軸4.76m、短軸4.36mの中形正方形住居で、確認面からの深さは10~15cmである。南側コーナー部分の中〜近世の46号溝に切れ、北側には22号住居が重複している。住居北西側で柱穴らしき穴1個が確認されたが、本住居に伴うかは不明である。確認面からの掘り込みが浅く攪乱が所々に及んでいるため、良好な床面は確認できていないが、中央部付近にやや硬質の面が一部認められた。この部分にやや広い範囲で焼土の分布が認められ、これが炉にあたるものと思われる。貯蔵穴は北東隅に設置されている。60×55cm、深さ10cmほどの隅丸形状の掘り込みのなかに、直径30cm、深さ35cmの掘り込みをもつ2段の構造である。床下に掘形等は存在していない。遺物の出土量は少なく、覆土中および貯蔵穴内に少量認められたにすぎない。3・7は貯蔵穴覆土中からの出土、8の置砥石は貯蔵穴上面からの出土である。

2. 竪穴住居

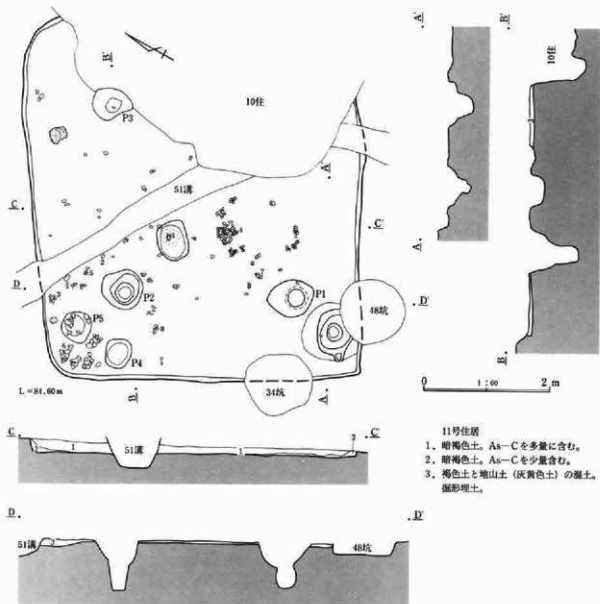


0 1:3 10cm

0 1:4 10cm

第1700図 3号住居と出土遺物

III 古代の調査



11号住居

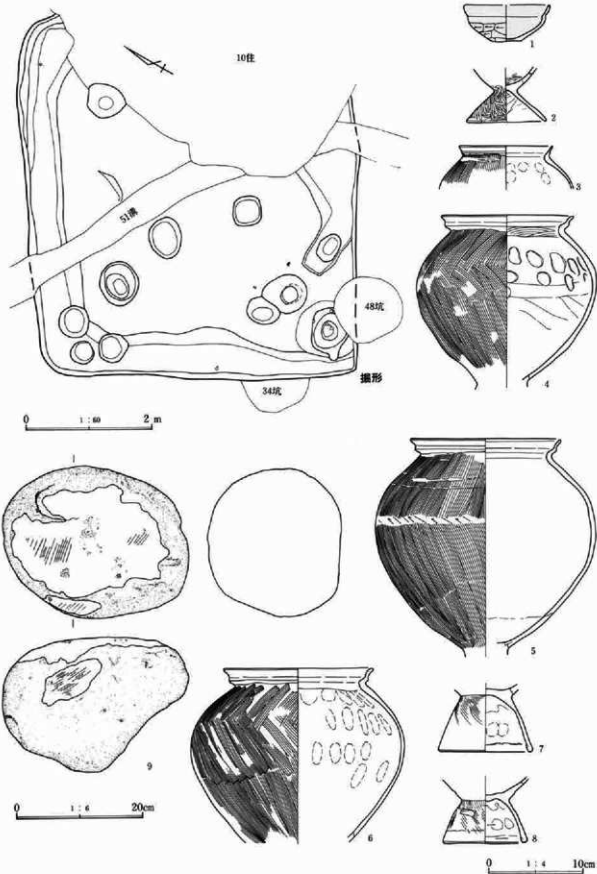
1. 暗褐色土。As-Cを多量に含む。
2. 暗褐色土。As-Cを少量含む。
3. 褐色土と地山土（灰黄色土）の混土。掘形埋土。

第171図 11号住居

11号住居 (第171・172図)

Q-37グリッドに位置する。長軸5.68m、短軸5.22mの大形正方形住居で、確認面からの深さは10~20cmと浅い。東側を10号住居に切られ、柱穴1本が消滅している。3本の柱穴はいずれも80cmと深く、P₁・P₂では2段の築造となっている。芯々を結ぶ長さはP₁~P₂が2.75m、P₂~P₃は3mである。床面は平坦で、全体によくしまっている。炉は中央よりやや西側寄りに設けられている。長軸60cmの浅い掘り込みをもつが、焼土の残存はわずかであった。貯蔵穴は南西隅に設置されている。直径50cmの円形を呈する掘り込みのなかに、直径25cm、深さ20cmの掘り込みをもつ2段の築造で、開口部には幅20~30cmのドーナツ状の高まりが認められた。なお、その他に直径45cmの円形の掘り込み2本が、住居北西隅で確認された。深さはP₄が18cm、P₅は25cmで、P₅からは台付壺1個体分(5)が出土している。床下の調査では浅い掘り込み4個と住居周縁

2. 竪穴住居



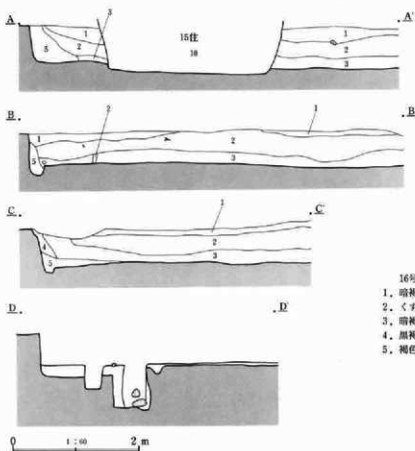
第172図 11号住居と出土遺物

III 古代の調査

をめぐる掘形を確認した。掘形は幅50~70cm、深さ5~10cmの規模で周縁部をめぐるが、貯蔵穴付近は掘り残されており、北側隅付近では壁との間に若干のずれが生じている。出土遺物はほとんど多くないが、床面直上からの出土が多く、接合率は比較的高かった。4は細片状態で住居中央の床面に密着した状態で出土、2・3・5・6・8は床面直上からの出土、5はP₁内出土、1は覆土中からの出土である。9の台石はP₂と壁の間の床面に据えた状態で確認された。

16号住居 (第173~176図)

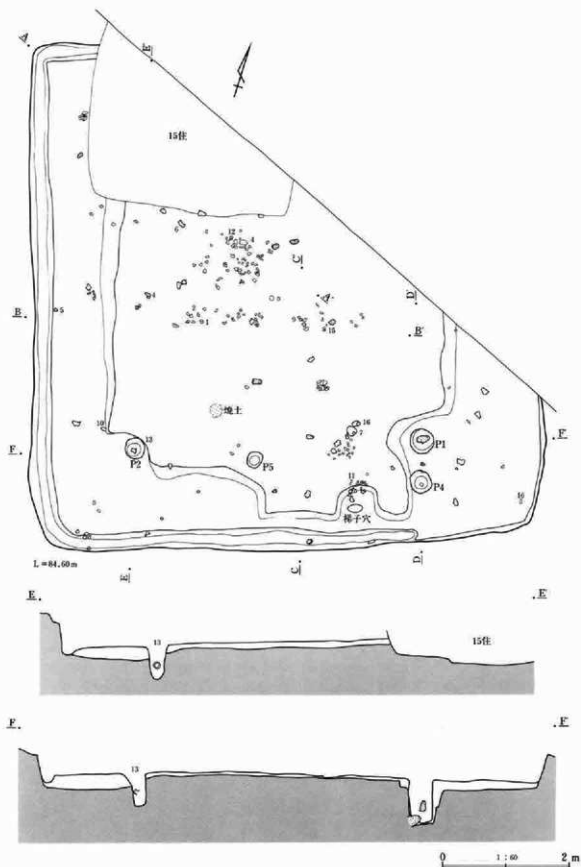
P-38グリッドに位置する。長軸8.18m、短軸8.04mの超大形正方形住居で、確認面からの深さは50~60cmである。今回調査した4世紀後半の8軒の住居のなかで最も大形である。北東の1/3は路線外で調査できなかった。北西の一部を15号住居に切られるが、床下の調査で本住居に伴う柱穴(P₁)を確認している。住居対角線上に柱穴4個を配置するが、1本は路線外となる。3本の柱穴の芯々を結ぶ長さは4.5mである。柱穴のうち、P₁の底面から20cmほどのところから礫1点が出土、P₂の底面から15cmほどのところからは台付臺の台部が出土した。これらは柱の撤去後の埋設過程に入り込んだものと思われる。また、本住居では南壁下の東寄りに梯子穴が確認された。横幅25cm、縦10cmの楕円形を呈し、傾斜をもった掘り込みが深さ30cm確認できた。壁からの距離は約50cmである。掘り込みは梯子の大きさを示しており、傾斜と壁からの距離を勘案すると、長さは130cm前後であろうと思われる。床面はほぼ平坦であるが、周縁部がやや低くなっており、中央部が硬質であるのに対し、周縁部は軟質面となっている。硬質面は柱P₁・P₂を回り込み、梯子穴を中心に



16号住居

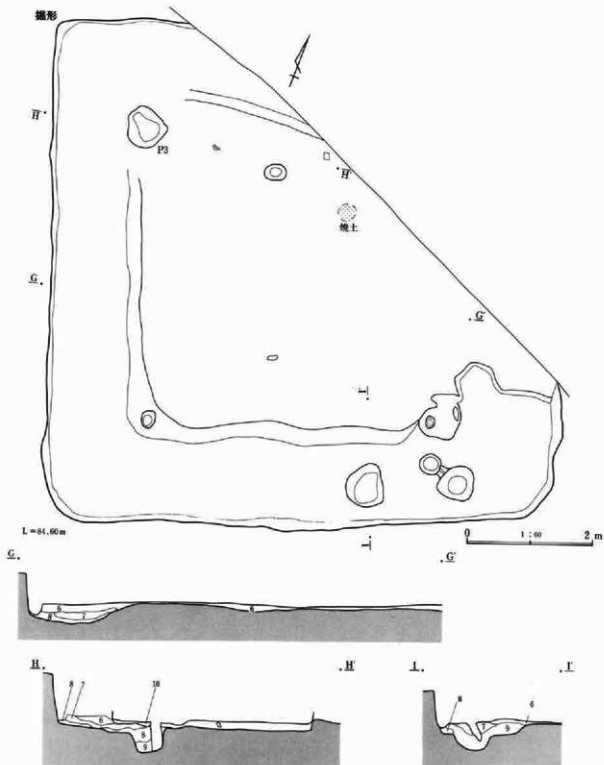
1. 暗褐色土。As-Cを少量含む。
2. くすんだ褐色土。As-Cを少量含む。
3. 暗褐色土。As-Cを多量に含む。
4. 黒褐色土。As-Cを多量に含む。
5. 褐色土。As-Cを少量含む。

第173図 16号住居



第174图 16号住居

III 古代の調査



16号住居断面

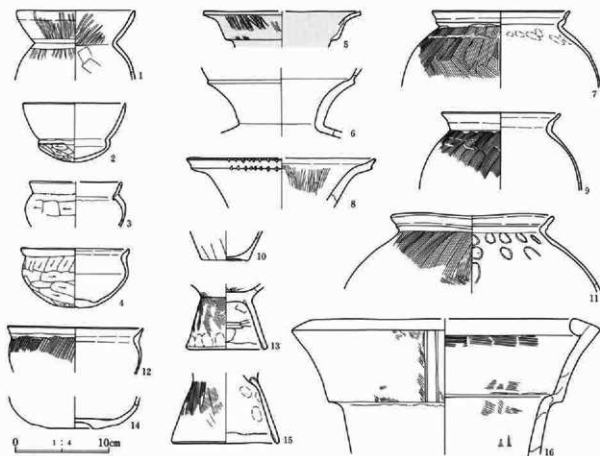
6, 暗褐色土と黄褐色土の混土。やや硬質。

7, 暗褐色土と黄褐色土の混土。

8, 黒褐色土。黄褐色土を少量含む。

9, 黒褐色土。As-Cを含み、粘性あり。

第175図 16号住居



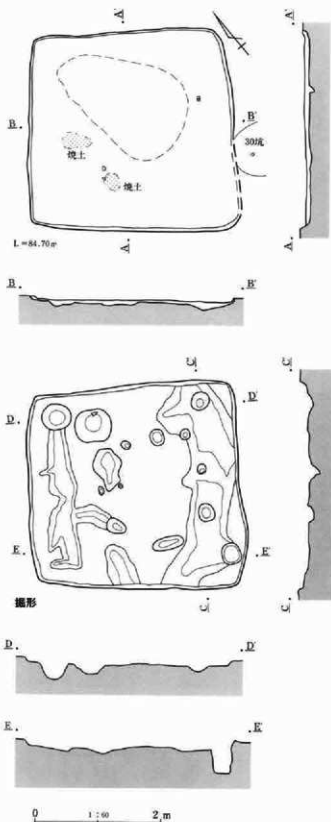
第176図 16号住居出土遺物

幅2.3mにわたって張り出している。この張り出し部分は土間状に硬化しており、出入口にあたることを示している。P₁・P₂はこの張り出し部の両側に位置するが、その性格は判然としない。深さはP₁が36cm、P₂は10cm。P₂の北東に床面が20cmの範囲で焼土化している部分が認められたが、明確な炉は確認されていない。周溝は出入口部分から西側に認められる。床下の調査では、東壁部分をのぞく周縁部に幅1.3mほどの掘形を確認した。出土遺物は少なく、大半は覆土上層からの出土である。床面からは台付甕の上半部2個体(7・11)が出入口部前方から、小形の底部片(10)がP₂の西側から出土している。なお、16は7と共に床面に密着した状態で出土した破片と、南東隅の覆土上層出土の破片、および覆土中出土の破片が接合している。

17号住居 (第177図)

Q-37グリッドに位置する。長軸3.22m、短軸3.20mの小形正方形住居で、確認面からの深さは5~10cmである。東壁の一部を中世の土坑および擾乱により切られている。柱穴は確認されていない。床面は平坦で中央部にやや硬質な面が認められた。覆土中に2カ所の焼土が確認されたが、炉は認められなかった。床下の調査では東西の壁に沿った掘形の他に、北西隅に直径1mほどの土坑2カ所、南東隅に直径30cm、深さ35cmの穴1カ所を確認した。土坑は断面形がいずれも摺鉢状を呈し、東側の土坑からは器台(1)が出土した。南東隅の穴はその形状と位置から、貯蔵穴の可能性もある。遺物は床下土坑から出土した器台1点の他に、覆土中から古式土師器破片が少量出土している。

III 古代の調査



第177図 17号住居と出土遺物

18号住居 (第178図)

P-34グリッドに位置する。東側2/3ほどを43号溝に切られているため、住居形態は不明である。また、畚と重複関係にあり、畚に切られている。確認面からの深さは5cmで、かろうじて壁が確認できた。柱穴はそれらしき位置に2本確認されたが、いずれも深さ10cmほどと浅く、これが柱穴にあたるかは判然としない。貯蔵穴は南西隅に設置されている。直径70cmの円形に浅く掘りくぼめ、その西隅に直径30cm、深さ32cmの柱穴状の掘り込みをもつ2段の構造である。床面は不明確で、硬化した面は確認できなかった。床下の調査では北壁と西壁に沿って周溝が確認された。遺物は貯蔵穴上面で台付甕(1・3・4)がまとも出土、また北西隅付近からも少量出土している。

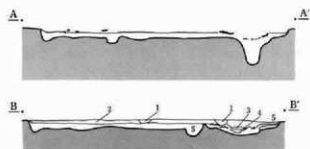
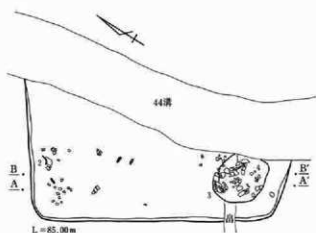
19号住居 (第179・180図)

N-34グリッドに位置する。長軸4.82m 短軸4.40mの長方形に近い中形正方形住居で、確認面からの深さは28cmである。住居の西側半分を43~45溝に鉤の手状に切られるが、北西隅がかろうじて確認された。外形は平行四辺形状にやや歪んでいる。床面は北東側に向かってかなりの傾斜が認められるが、面はほぼ平坦に築かれている。柱穴、炉、貯蔵穴は確認できなかった。本住居からは遺物とともに多量の炭化材が出土している。土器は台付甕8個、甕2個、小形カメ1個があり、遺存状態の良好なもの



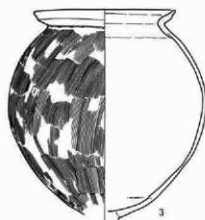
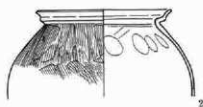
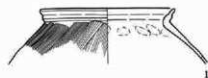
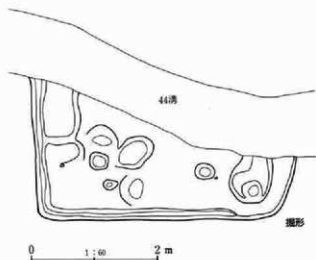
0 1:4 10cm

2. 竪穴住居



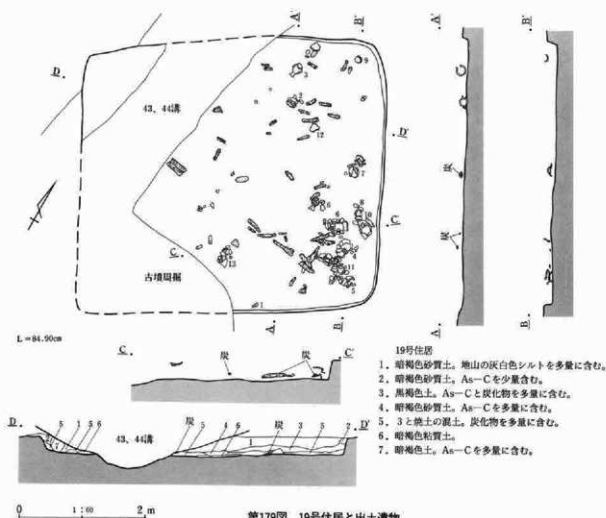
18号住居

1. 暗褐色土。As-Cを多量に含む。(島の埋設土)
2. 暗褐色土。粘性があり、As-Cを少量含む。
3. 2と灰層の混土層。
4. 黒褐色土。As-Cを少量含む。
5. 4と地山(黄褐色土)の混土。細形の埋土。



第178図 18号住居と出土遺物

III 古代の調査

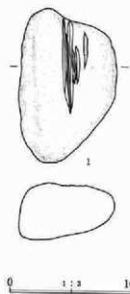


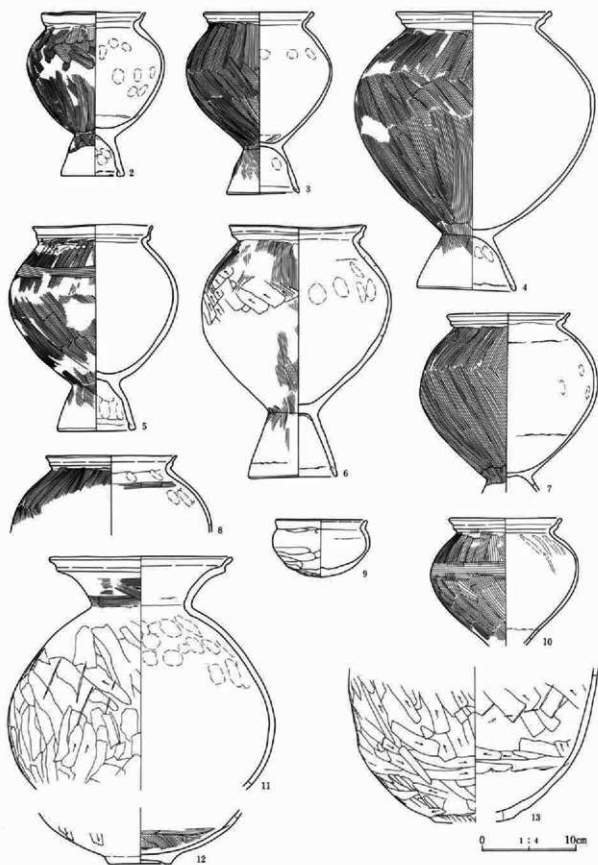
第179図 19号住居と出土遺物

が多い。土器の出土位置は北東隅と南東隅の2カ所に集中しており、北東隅からは2・3・9・12の4個体、南東隅からは4〜8・10・11の7個体が出土している。このうち床面からの出土は2〜6・10・11の7個体で、北東隅の2・3はたおれた状態で、南東隅の4〜6・10・11は一括状態で大形の破片となって出土している。炭化材は大半が床面から5cmほど浮いた状態で出土しており、床面出土の土器の下位に炭化材は認められない。以上のことから、本住居は焼失家屋と考えられ、床面出土の土器は焼失前に置かれていたものと考えられる。なお、9・13は明らかにその後破棄されたものである。

20号住居 (第181〜183図)

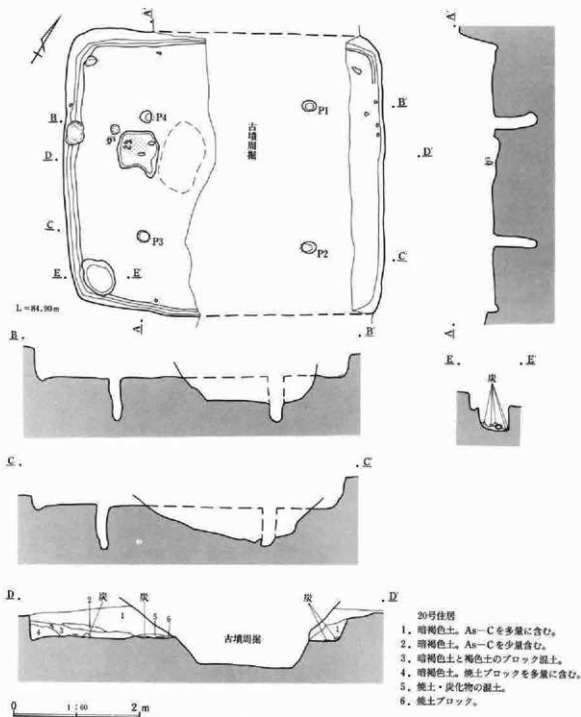
P-35グリッドに位置する。長軸5.08m、短軸4.44mの中形縦長方形住居である。確認面からの深さは高い部分で50cmを測る。中央部を古墳周堀に切られるが、柱穴はかろうじて確認できた。住居の対角線上にP₁〜P₄の4個の柱穴を配置する。炉はP₂とP₄の軸線上のP₃寄り位置する。65×60cmの方形に浅く掘り込んだ炉で、底面がわずかに焼土化していた。床面は平坦で、炉の西側に硬化した面が認められた。貯蔵穴は南西隅に設置されている。直径50cmほどのゆがんだ





第180图 19号住居出土遺物

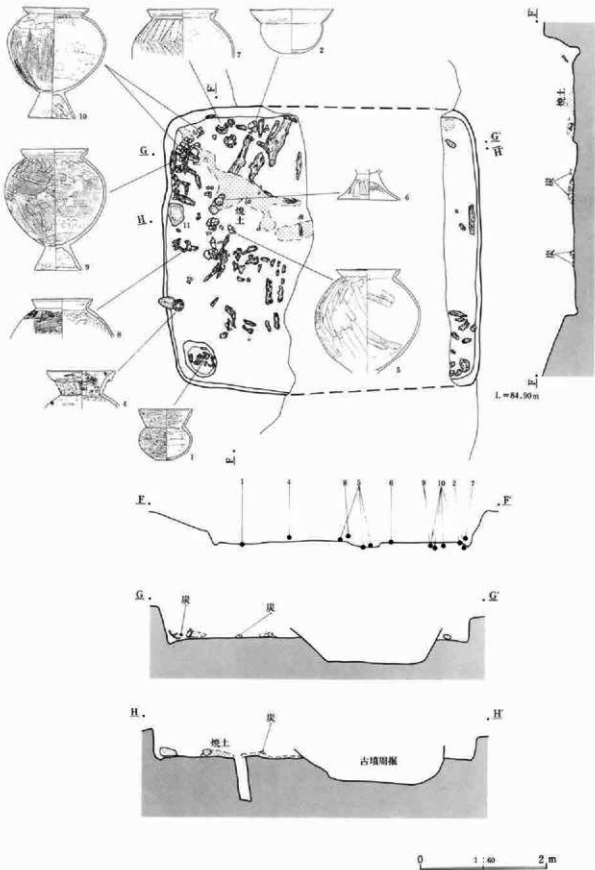
III 古代の調査



第181図 20号住居

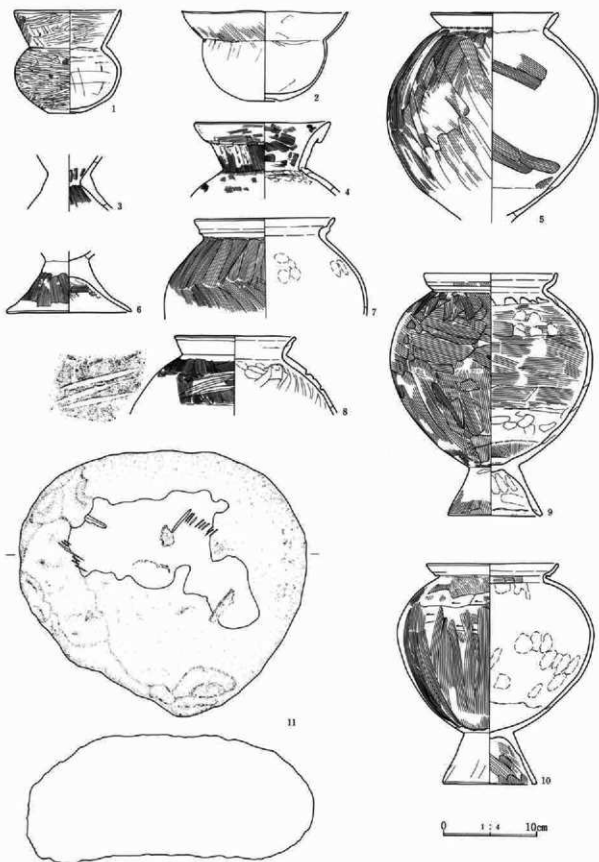
円形を呈し、深さは38cmである。周溝は幅15cm、深さ8cmで、東壁と南東隅を除く壁下をめぐっている。床面上に多量の炭化材と炉土が認められることから、焼失家屋と考えられる。遺物は攪乱をまぬがれた北西側を中心に出土している。土器の出土量はさほど多くはないが、接合するものが多く、10個体が図化できた。このうち9・10はほぼ完形に復したもので、ともに北西隅の炭化材下から出土した。4は西壁の床面に密着した状態で出土、1は貯蔵穴内から炭化材とともに出土した。その他はいずれも炭化材上からの出土である。なお、西壁下の床面にすえられた状態で台石(11)が出土している。

2. 竪穴住居



第182図 20号住居炭化材・遺物の出土状況

III 古代の調査



第163図 20号住居出土遺物

1号住居 (第184~188図)

S-36グリッドに位置する。

長軸5.96m、短軸5.70mの大形正方形住居で、確認面からの深さは深いところで65cmである。北側に重複する2号住居を切り、北東隅を4号井戸に切られる。

床面は平坦で、竈周りに住居中央部にわたって土間状の硬化面が確認できた。

柱穴は住居の対角線上に4個配置されており、各々の芯々を結ぶと住居外形と相似形となる。

竈は東壁の中央よりやや南寄りに設置されている。遺存状態が良好で、その構造がほぼ理解できる。住居の荒掘りの段階で竈両袖にあたる部分を一部掘り残し、その上に長壺2個づつを設置して袖の芯材とし、その上に長壺3個を連結して乗せ、焚き口を構築している。これらを芯材として粘土混じりの土で竈を構築しており、その規模は横幅2.2m、奥行き0.8mほどである。焚き口の幅は45cm、奥行き60cmで、燃焼部奥の北寄りに石製の支脚1個が設置されている。煙道は壁内に40cmの長さまで確認できた。この部分から出土した胴下半を欠失する壺(16)は、煙道部出口に設置されていたものであろう。また、焚き口の天井部に使用された長壺3個は、手前の床面に落ちた状態で出土している。

貯蔵穴は南東隅に設置されている。床面を径70cmの不正円形状に浅く掘り込み、さらに長径56cm、短径35cmの楕円形に掘り込んだ2段の構造をもつ。深さは168cmである。周溝は幅10cm、深さ5cmで、東壁と北壁の一部を除く壁下にめぐっている。

床下の調査では西壁側を除く各壁に沿って、床面からの深さ15cmほどの掘形が確認された。また、 $P_1 \cdot P_2 \cdot P_3$ の内側に柱穴が確認された。これらの芯々を結ぶと平行四辺形状にやや歪んだ方形となることから、本住居はそれから大形正方形住居に対角線上に拡張改築されたものと考えられる。

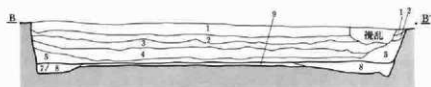
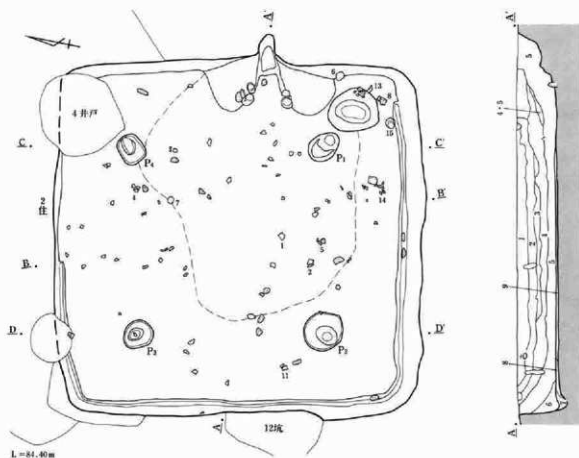
遺物は貯蔵穴周辺の床面から3・6・8・15が出土、またその西側床面から14が出土している。その他の土器は大半が覆土土層から円礫と共に散在状態で出土した。



1号住居竈



III 古代の調査

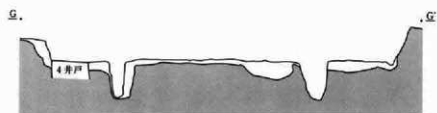
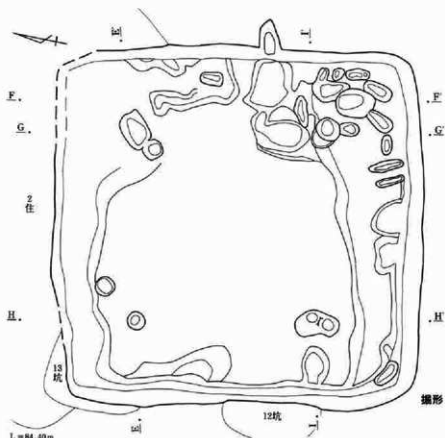


0 1:60 2 m

- 1号住居
1. 黒褐色土。二ツ岳軽石を多量に含む。
 2. FAと褐色土の混土。
 3. 黒褐色土。As-Cを少量含む。
 4. 黒褐色土。As-Cを多量に含む。
 5. 褐色土。As-Cを少量含む。
 6. 褐色土。
 7. 黒褐色土。(周溝埋土)
 8. 黒褐色土。As-Cを多量に含む。
 9. 黒褐色土。As-Cを少量含む。
- * 8・9は築形埋土。

第184図 1号住居

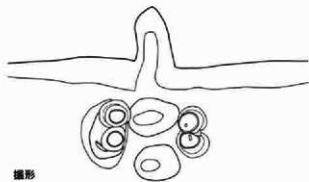
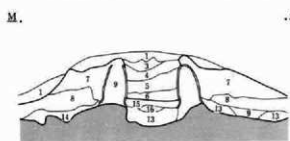
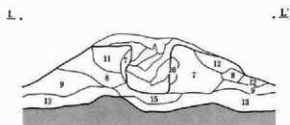
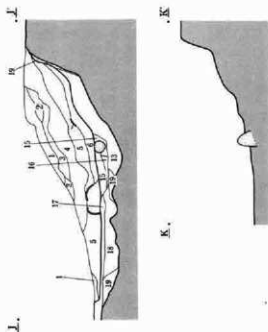
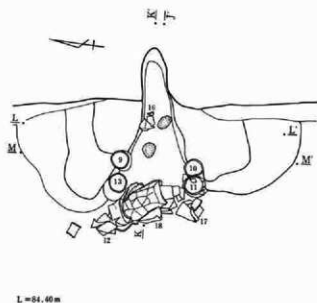
2. 懸穴住居



0 1:60 2m

第185図 1号住居

III 古代の調査

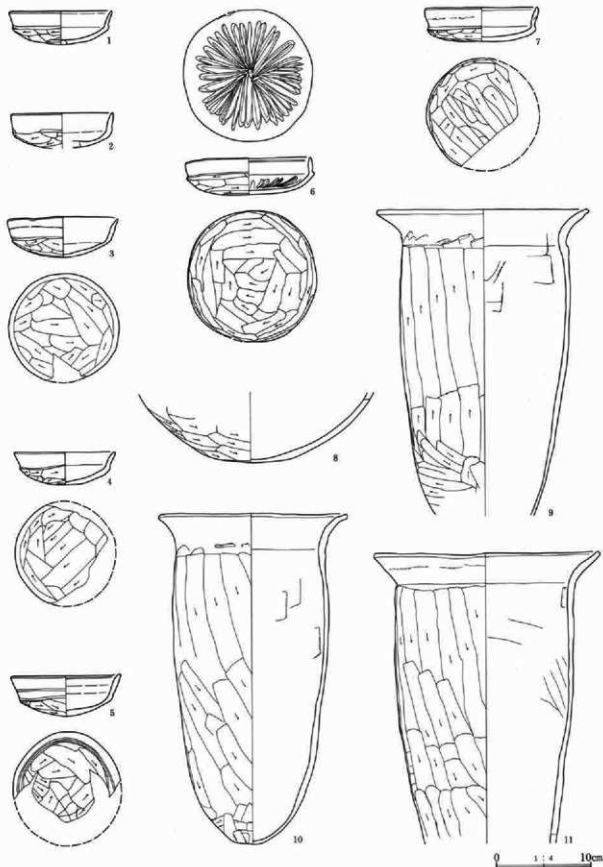


撮形

0 1:30 1m

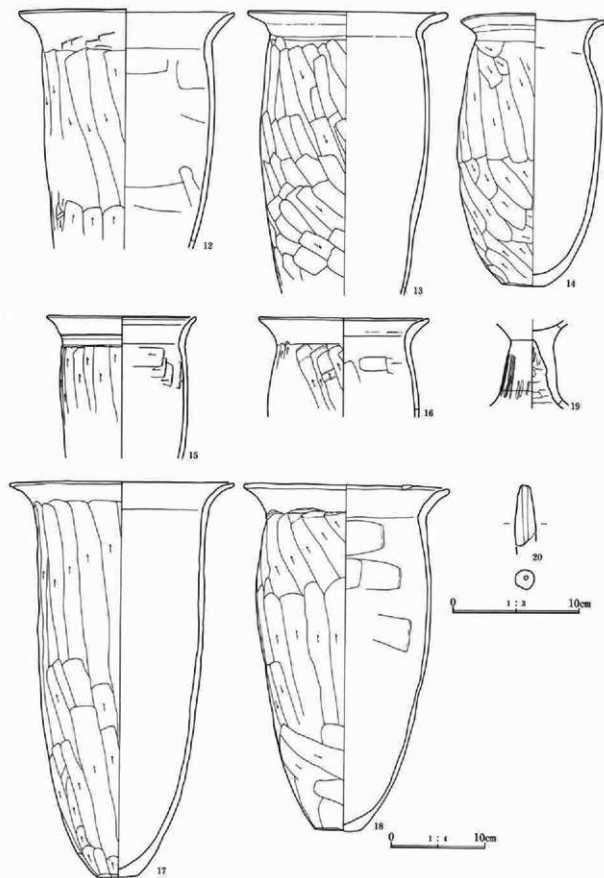
- 1号住居カマド
1. 黒褐色土。焼土・炭化物を少量含む。
 2. 1と3の混土。
 3. 淡い黄褐色シルト質土。焼土を少量含む。
 4. 淡い黄褐色シルト質土。焼土ブロックを少量含む。
 5. 灰白色シルト質土。
 6. 灰白色シルト質土。焼土小ブロックを多量に含む。
 7. 灰白色粘土。
 8. 暗褐色土と灰白色粘土の混土。
 9. 暗褐色土と黄褐色質土の混土。
 10. 焼土化した灰白色粘土。
 11. 灰白色粘土と焼土の混土。
 12. 8と1の混土。
 13. 地山土と9の混土。
 14. 地山土と焼土・灰の混土。
 15. 焼土と灰の混土。
 16. 焼土塊。
 17. 貼り床。
 18. 14と同質。
 19. 地山と灰の混土。
- 7~12は袖材、13~19は床下にあたる。

第186図 1号住居竈

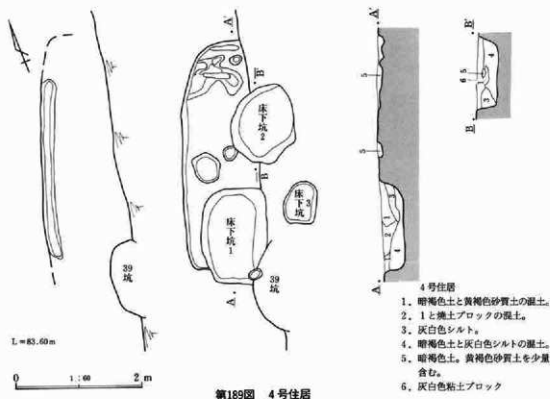


第187圖 1号住居出土遺物(1)

III 古代の調査



第186図 1号住居出土遺物(2)



第189図 4号住居

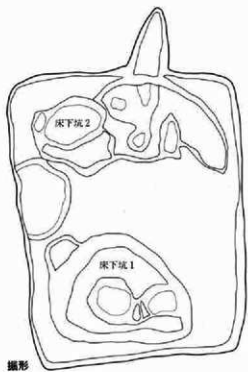
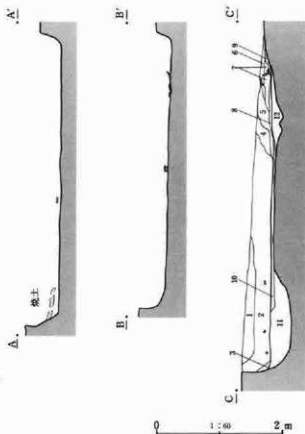
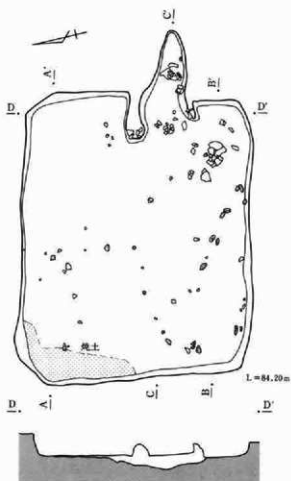
4号住居 (第189図)

S-38グリッドに位置する。微高地縁辺に住居の西壁の一部がかろうじて確認できたが、耕作等による削平が及んでおり、形状・規模等は不明である。確認できたのは西壁下の周溝の一部と3基の床下土坑のみである。床下土坑1は長軸1.50m、短軸1.06mの長方形、床下土坑2は長軸1.24m、短軸1.06mの楕円形、床下土坑3は斜面に一部がかかったのみで形状は不明であるが、いずれも埋土はブロック混土であり、一括埋めもどされた状態を示している。出土遺物は土器小片がわずかであり、時期判定の材料はない。

5号住居 (第190図)

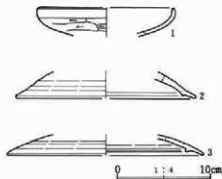
S-38グリッドに位置する。長軸4.60m、短軸3.64mの中形縦長方形住居で、確認面からの深さは46cmである。北側に同形態の6号住居と近接し、両住居に重複する1号竪穴により北壁の一部を切られる。柱穴・貯蔵穴・周溝は認められない。竈は東壁の中央よりやや南寄りに設置している。壁内へ付けられた軸は左右が異なっており、左側は80cm、右側は30cmで、燃焼部の幅は60cmである。煙道は燃焼部よりやや南寄りに軸をもち、壁外へ1mの長さで緩やかに立ち上がっている。床面は平坦で、中央部を中心に貼り床が認められる。床下の調査では、竈前と北壁中央に浅い掘形を確認、住居西側と北東隅で床下坑2基を確認した。床下坑1は長軸2.25m、短軸1.7mの不定形を呈し、中央部と南側に径1~1.2mの円形の掘り込み2個が認められた。床面からの深さは32cmで、円形の掘り込みはそこからさらに18cm掘り込んでいるが、重複関係は不明。床下坑2は竈前の掘形を切って構築されており、長軸1.2m、短軸0.75mの楕円形で、床面からの深さは20cmである。遺物の出土量は少なく、竈内も含め、覆土下層を中心に出土した。1は煙道部出土、2・3は床面直上からの出土である。なお、住居北西隅に床から10cmほど浮いた状態で、焼土・炭化物のブロック状の堆積が認められた。

III 古代の調査

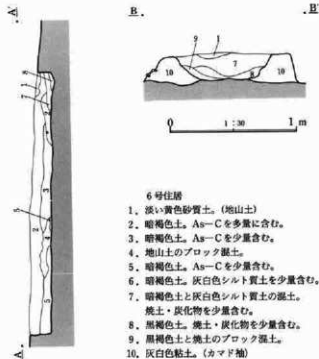
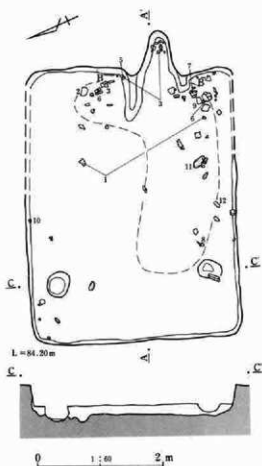


5号住居

1. 黒褐色土。As-Cと炭化物を少量含む。
2. 褐色土。As-Cと炭化物を少量含む。
3. 黒褐色土。均質でやや硬質。
4. 黒褐色土と灰白色粘質土の混土。
5. 黒褐色土。灰白色粘土とAs-Cを少量含む。
6. 黒褐色土と灰白色粘土と焼土の混土。
7. 焼土と灰の混土。
8. 黒褐色土。焼土を少量含む。
9. 焼土と灰白色粘質土の混土。
10. 黄褐色砂質土と灰白色シルトのブロック混土。硬質。(貼り床)
11. 地山土を主体に、暗褐色土ブロックを少量含む。(床下坑埋め土)
12. 暗褐色土と黄褐色砂質土の混土。



第190図 5号住居と出土遺物



6号住居

1. 淡い黄色砂質土。(地山土)
2. 暗褐色土。As-Cを少量含む。
3. 暗褐色土。As-Cを少量含む。
4. 地山土のブロック凝土。
5. 暗褐色土。As-Cを少量含む。
6. 暗褐色土。灰白色シルト質土を少量含む。
7. 暗褐色土と灰白色シルト質土の凝土。
焼土・炭化物を少量含む。
8. 黒褐色土。焼土・炭化物を少量含む。
9. 黒褐色土と焼土のブロック凝土。
10. 灰白色粘土。(カマド袖)

第191図 6号住居

6号住居 (第191~193図)

R-38グリッドに位置する。

長軸4.32m、短軸3.38mの中形縦長方形住居で、確認面からの深さは35cmである。

5号住居の北側に近接し、南壁を1号竪穴に切られ、北西隅に重複する7号住居を切る。

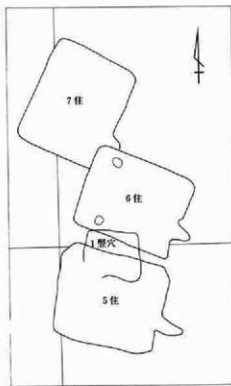
床面は平坦で、竈周りから南側にかけて硬化面が確認された。

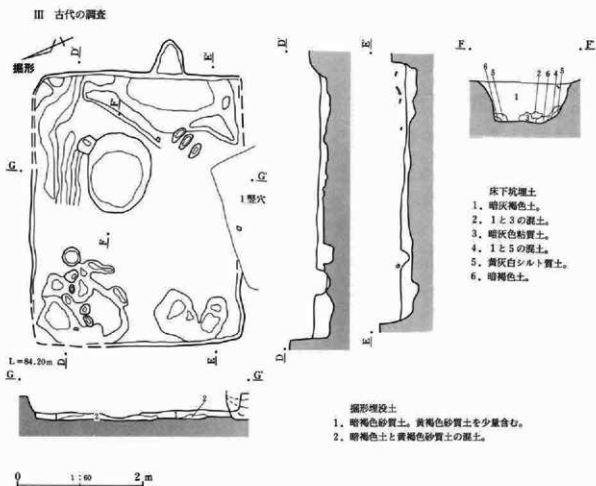
西側の両隅に柱状の穴を2個確認したが、10~15cmと浅い。

竈は東壁中央よりやや南寄りに設置する。5号住居と同様に壁内へ付けられた袖は、左右の長さが異なっており、左側が70cm、右側は25cmで、燃焼部の幅は55cmである。煙道は壁外へ65cmの長さで、緩やかに立ち上がる。

貯蔵穴・周溝は認められない。

床下の調査では中央部と南壁下を除く周縁部に、不定形な掘形が認められた。また、中央部北東寄りに長軸1.25m、短軸1m、深さ60cmの楕円形の床下坑が認められた。埋土は黒





第192図 6号住居

褐色土と褐色土のブロック混土で、上面に貼り床は認められない。

遺物の出土量は少なく、竈の両側に集中している。北側からは2・5・6が床面直上から、南側からは1・6・7が覆土中から出土している。6は両側の接合例である。3は煙道部覆土中から出土している。紡錘車(10)は北壁中央の床面から、砥石(12)と敲石(11)は南壁寄りの床面からの出土である。

なお、5号住居と6号住居は竈の位置や袖の特徴にいたるまでほぼ相似形を示す。

7号住居 (第194・195図)

R-38グリッドに位置する。

長軸4.56m、短軸3.50mの中形横長長方形住居で、確認面からの深さは52cmである。竈南半から南東隅を6号住居に切られる。

床面は平坦で竈周りから中央部に硬化面が認められた。

竈は東壁南寄りに設置する。燃焼部は壁外に50cmの長さで延び、ほぼ中央部に石製の支脚を1個設置している。

柱穴・貯蔵穴は認められない。

周溝は幅30cm、深さ10cmで、竈周辺を除き全周する。

床下の調査では中央部と西壁下の一部を除く周縁に、幅1～1.5m、深さ10cmの掘形と柱穴状の穴4個を

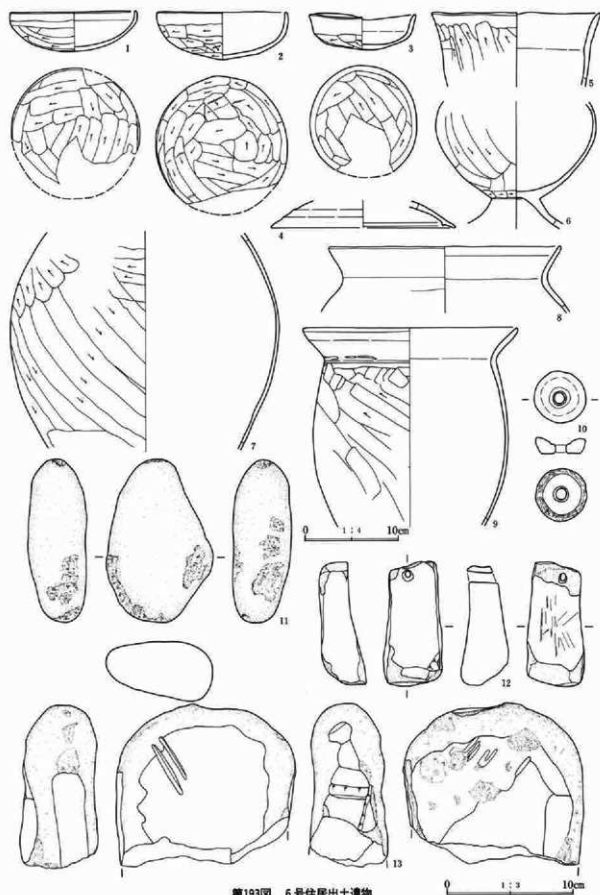
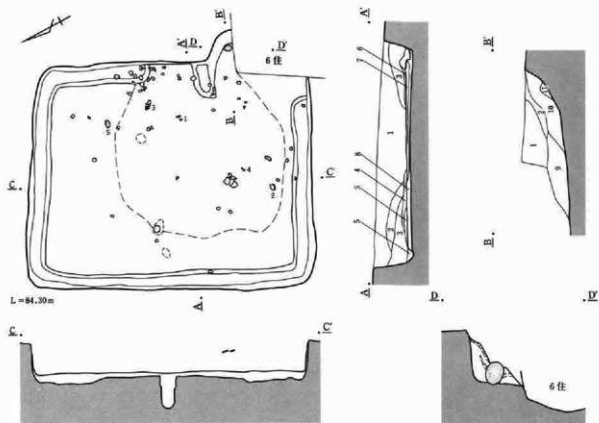
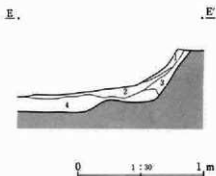
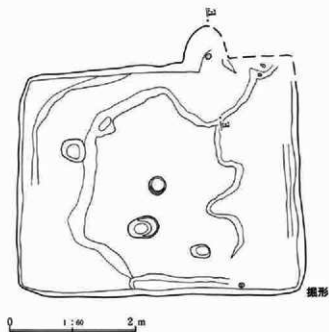


圖193 6号住居出土遺物

III 古代の調査

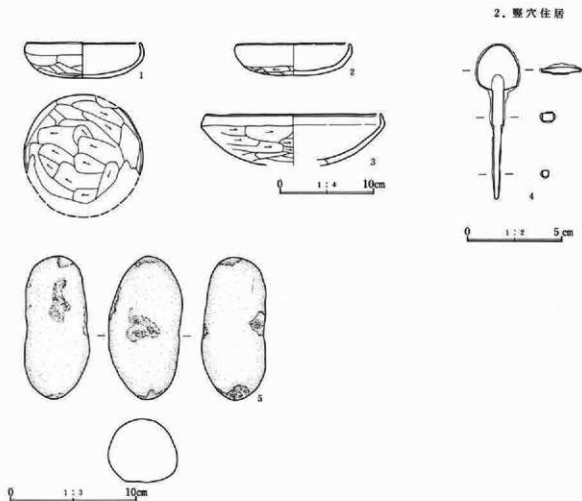


- 7号住居
1. 暗褐色土。
 2. 暗褐色土。黒褐色粘質土を少量含む。
 3. 暗褐色土。茶褐色砂質土を少量含む。
 4. 暗褐色土。焼土粒を少量含む。
 5. 暗褐色土。焼土粒・炭化物を少量含む。
 6. 暗褐色土と灰白色粘土の混土。
 7. 地山上のブロック凝土。硬質。(貼り床)
 8. 黄褐色砂質土。暗褐色土を少量含む。(掘形)
 9. 灰白色粘土。(カマド袖の崩落土)
 10. 灰白色粘土。暗褐色土・焼土粒を少量含む。
 11. 焼土ブロック。



- カマド掘形
1. 焼土化した灰白色粘土。
 2. 灰と焼土の凝土。
 3. 暗褐色土と地山の混土。
 4. 暗褐色土。

第194図 7号住居



第195図 7号住居出土遺物

確認した。掘形は北東隅の周辺に掘り残しが認められた。柱穴の深さは P_1 が52cm、 P_2 が34cm、 P_3 が38cm、 P_4 が17cmで、いずれも上半をロームブロック土で埋められていた。

遺物の出土量はわずかで、いずれも覆土中～上層からの出土である。

8号住居 (第196・197・199・200図)

Q-38グリッドに位置する。

長軸5.58m、短軸5.40mの大形正方形住居で、外形に菱形状の歪みが認められる。確認面からの深さは62cmである。

本住居は9号住居の内側にすっぽりと入り込んでおり、9号住居の西壁をそのまま利用する形で構築している。南に近接する10号住居との間には23号住居があり、これを切っている。

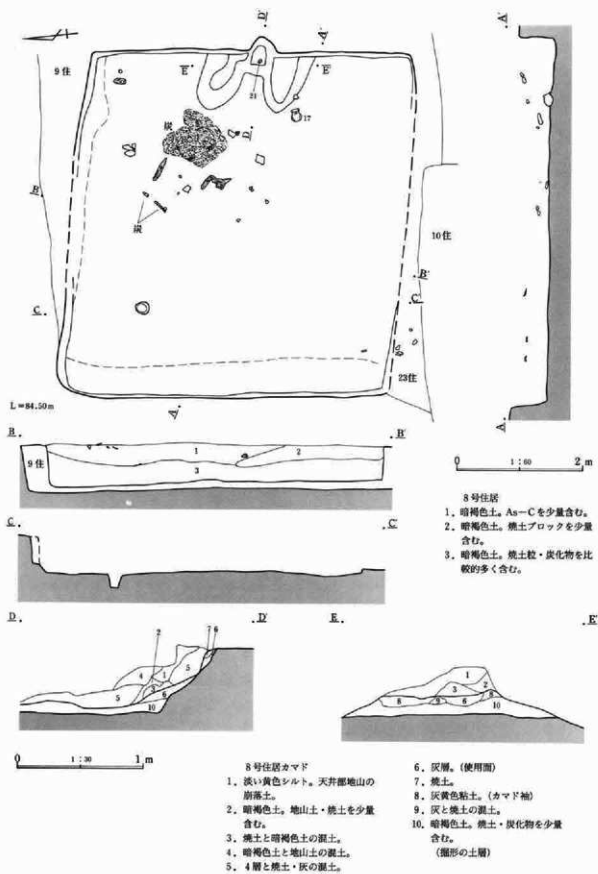
床面は平坦で全面に貼り床が認められる。

柱穴は北西隅対角線上に1個確認できたが、他は不明である。竈は東壁中央に設置している。両袖の幅は1.65m、長さ85～90cmで、住居の外形と同様の歪みが認められる。煙道部は壁外へ25cm突出し、燃燒部から煙道部にかけて急傾斜で立ち上がる。

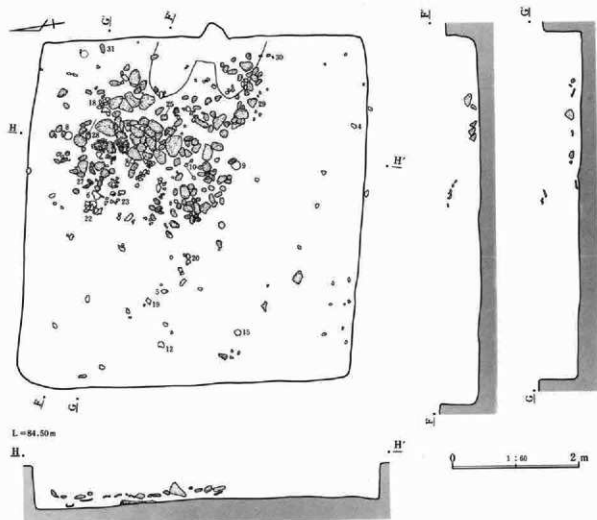
貯蔵穴・周溝は確認できない。

住居内には北東寄りの床面上に、大形礫を含む大量の円礫が認められた。礫は床面から10cm程浮いており、

III 古代の調査



2. 竪穴住居



第197図 8号住居

3 m程の範囲の中に集積されたような状態を呈するが、他に特殊な遺物等は認められない。礫下には炭化材と焼土が認められることから、焼失家屋と考えられる。遺物は大半が覆土上層あるいは礫群上からの出土であり、床面からの出土は17のみである。以上のことから、礫群は出火に伴い住居内に投げ込まれたものと思われる。なお、礫群の中には25～31の石器が含まれていた。



23号住居 (第196・198図)



8号住居と10号住居の間にあるが、両住居に大きく切られ、わずかに西壁の一部と床面が確認できたにすぎない。出土遺物も少なく、復元しえたのは杯1個(第198図1)のみである。



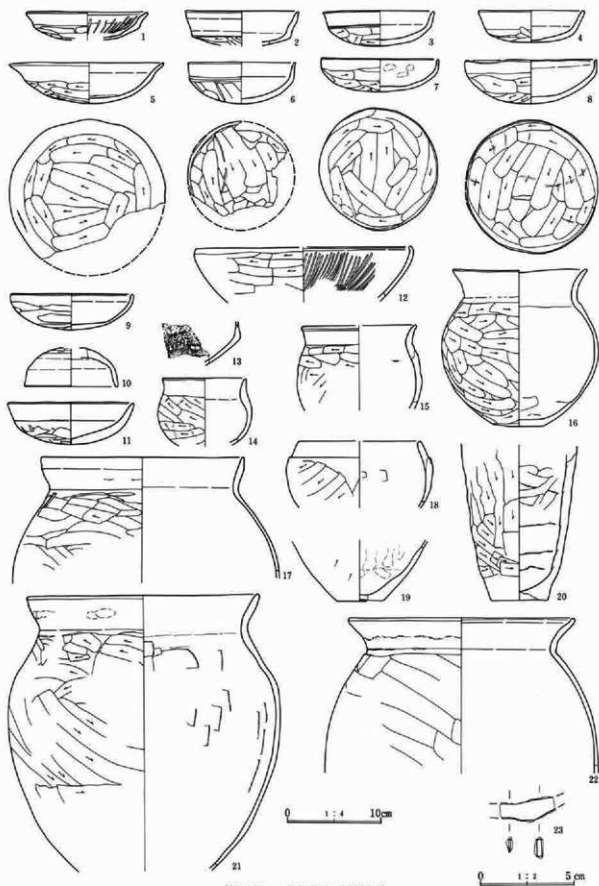
9号住居 (第201～203図)

第198図 23号住居

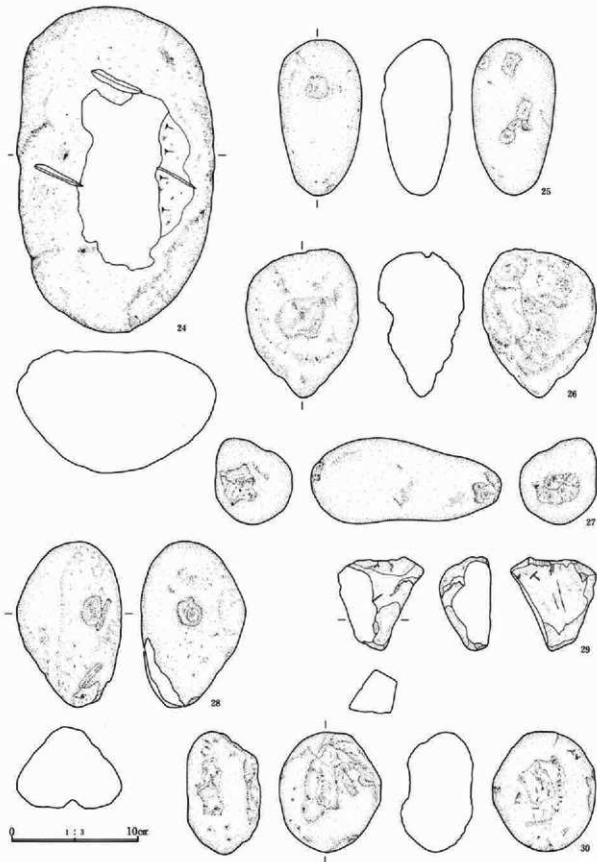
出土遺物

Q-38グリッドに位置する。長軸7.12m、短軸6.40mの超大形縦長方形住居で、確認面からの深さは55cmである。

III 古代の調査

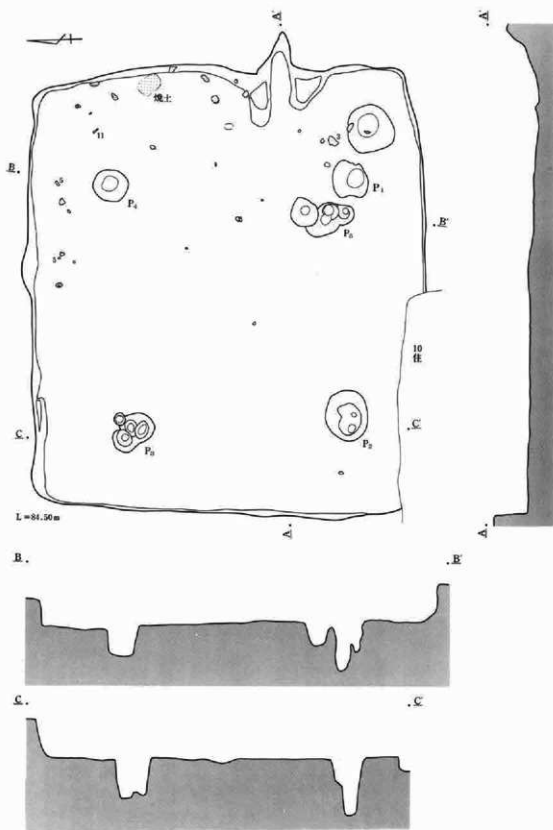


第199図 8号住居出土遺物(1)

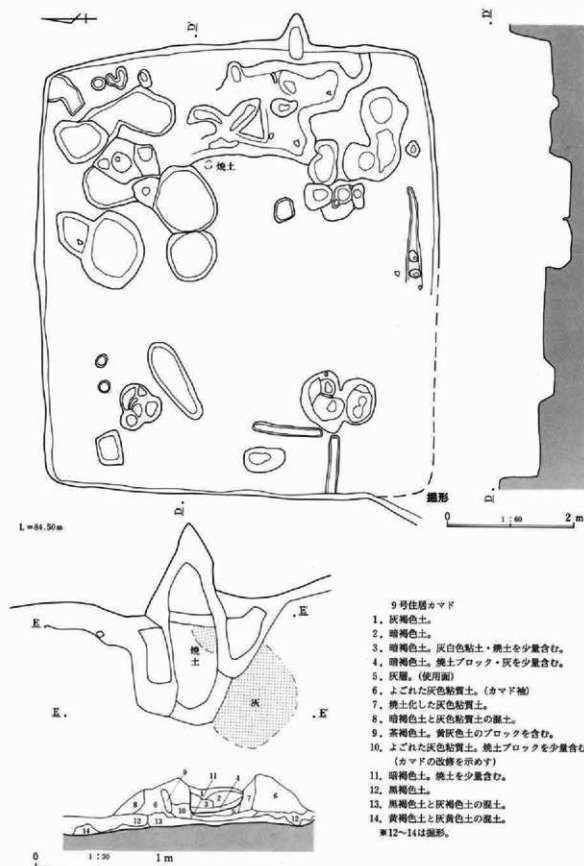


第200圖 8号住居出土遺物(2)

III 古代の調査

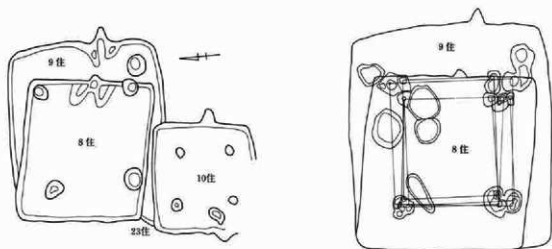
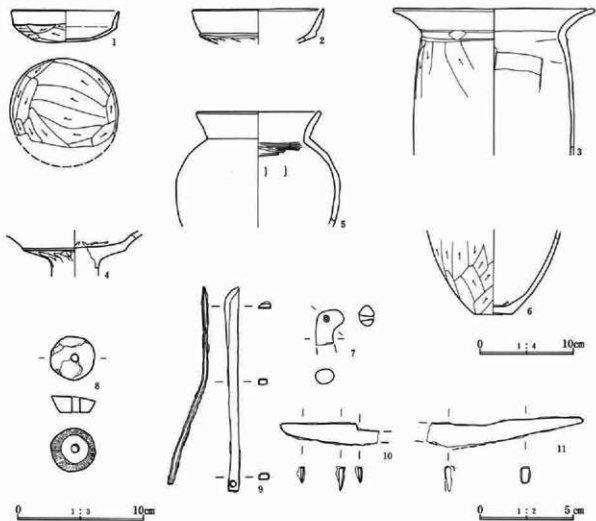


第201図 9号住居



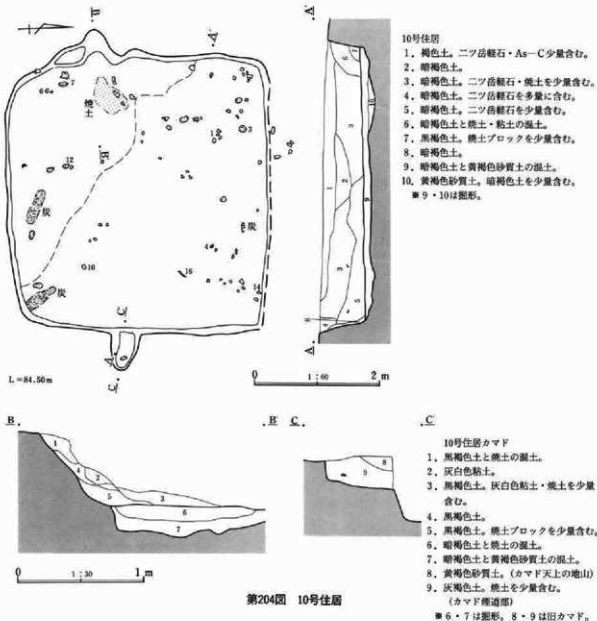
第202図 9号住居と竪

III 古代の調査



第203図 9号住居出土遺物

2. 竪穴住居



第204図 10号住居

住居中央部に8号住居が重複し、南側を23号住居と10号住居に切られる。

床面は大半を8号住居と重複し、若干削平されているが、他は平坦となっている。

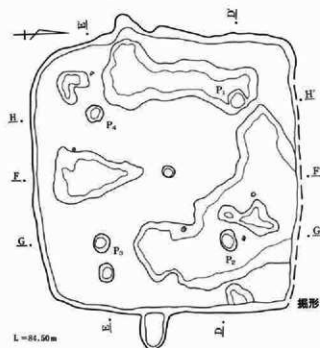
柱穴は床面および掘形調査で総数20本を確認したが、最終段階の住居に伴うものは $P_1 \sim P_4$ の4個である。

竈は東壁中央よりやや南寄りに位置する。壁内に付けられた袖は左右長さが異なっており、左側が70cm、右側が50cmである。燃焼部は幅33cm、奥行88cmで、煙道部は壁外に30cmの長さで急激に立ち上がっている。なお、右袖の周辺にかき出された灰が認められた。

貯蔵穴は南東隅のやや内側寄りに設置されている。直径70cmの円形状に35cmの深さで掘り込まれており、中位から壁の胴下半部破片(6)は出土した。

床下の調査では、東壁に沿った浅い不定形な掘形、 P_1 周辺から床下坑4基、 P_2 と西壁との間で鉤の手状に折れ曲がる溝、20本の柱穴などを確認した。床下坑はいずれもブロック混土で一括埋めもどされており、1

III 古代の調査



L=24.50m

E. F.



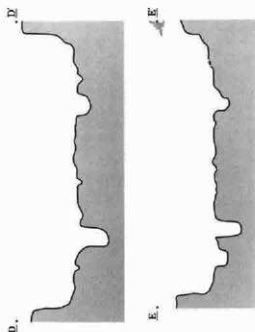
G. G.



H. H.



0 1:50 2m



10号住居断面

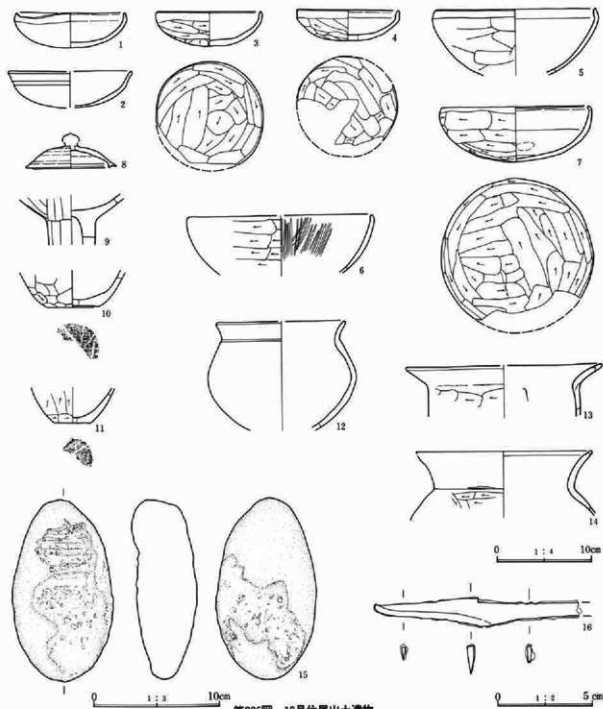
1. 黄褐色砂質土と灰白色粘質土の混土。硬質。(貼り床)
2. 暗褐色土と黄褐色砂質土の混土。(彫形)

第205図 10号住居

を切っている。2は上面に貼床が認められる。柱穴はP₁~P₄の各々の周囲に各4~5本づつ重複しており、すくなくとも4~5回の増改築が行われたと考えられる。これとほぼ同数の床下坑も増改築に関連するかもしれない。

遺物の出土はわずかで、1・3・4・5は覆土中からの出土である。床面からの出土は刀子片1点(11)のみである。なお、竈前の彫形から杯(2)と勾玉(7)、刀子片(10)が、床下坑から紡錘車(8)が、P₂に重複する柱穴埋土中から鉄鎌(9)が出土している。

2. 竪穴住居



第206図 10号住居出土遺物

10号住居 (第204~206図)

Q-38グリッドに位置する。

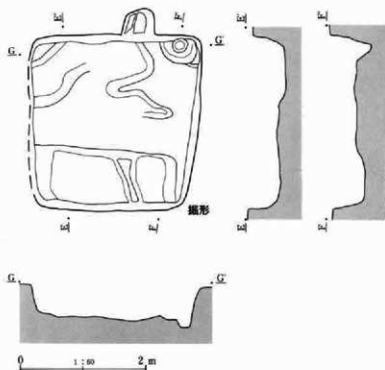
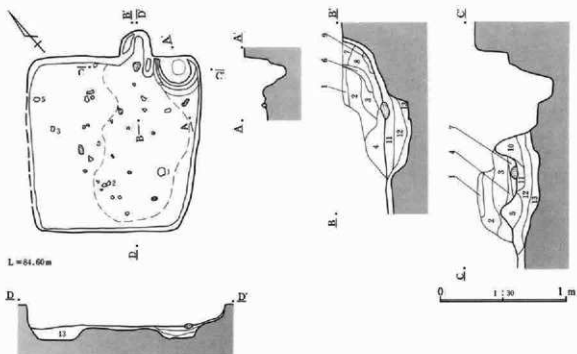
長軸4.42m、短軸4.22mの中形正方形住居で、確認面からの深さは70cmである。

北壁を9・23号住居と重複し、これらを切っている。

床面は平坦で、南東側半分に硬化面が認められた。

竈は西壁の南寄りと東壁の南寄りの2つを確認、前者が新しく、後者が古い竈である。新竈は造作が総て取り払われており、燃焼部の底面がわずかに残存していた。煙道部は旧竈が直角に立ち上がるのに対し、新

III 古代の調査

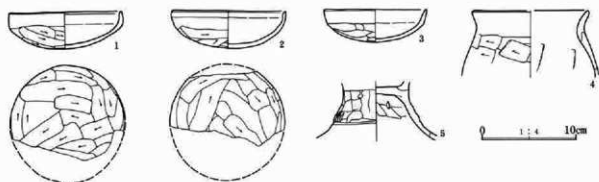


12号住居カマド

1. 黒褐色土。焼土を少量含む。
 2. 淡い褐色土。焼土・灰白色を少量含む。
 3. 濃い褐色土。焼土粒を少量含む。
 4. 灰白色粘土と暗褐色土の混土。(袖のくずれたもの)
 5. よごれた灰白色粘土。(袖のくずれたもの)
 6. 焼土・灰・暗褐色土の混土。
 7. 灰色シルト質土。
 8. 灰白色粘土と暗褐色土の混土。
 9. 灰白色粘土ブロック。
 10. 灰白色粘土。(カマド袖)
 11. 暗褐色土。上面に灰層がのる。
 12. 暗褐色土。地山土を少量含む。
 13. 暗褐色土と地山土の混土。
- 12・13は掘形。

第207図 12号住居

2. 竪穴住居



第208図 12号住居出土遺物

竈は傾斜しながら立ち上がる構造となっている。

柱穴・貯蔵穴・周溝は認められない。

床下の調査では、旧竈に伴う柱穴4個と全面におよぶ掘形が確認された。

出土遺物は少なく、いずれも覆土中から出土している。

12号住居 (第207・208図)

S-31グリッドに位置する。1号古墳の南側で単独で確認された。

長軸・短軸ともに2.80mの超小形正方形住居で、確認面からの深さは34cmである。

床面は平坦で、竈前を含めた東半にやや硬化した面が認められる。

竈は北壁の中央寄りやや東寄りに設置されている。左袖を欠失し、石製の支脚は手前に倒れた状態で確認された。左袖の長さは30cmである。煙道部は壁外へ42cmの長さでのび、燃焼部から急激に立ち上がっている。

貯蔵穴は北東隅に設置されている。直径60cm、深さ37cmで円形に掘り込み、周囲には幅16cm、高さ7cmの黄色地山土を貼った高まりをめぐるしている。

柱穴・周溝は認められない。

床下の調査では、竈前に不定形な掘り込みと、南壁に沿って幅88cm、深さ15cmの長方形の掘り込みが確認された。いずれも黒褐色土のブロック混土を埋土とし、上面には弱い貼り床が認められた。

出土遺物の量は少なく、いずれも覆土中からの出土である。

13号住居 (第209～214図)

Q-39グリッドに位置する。

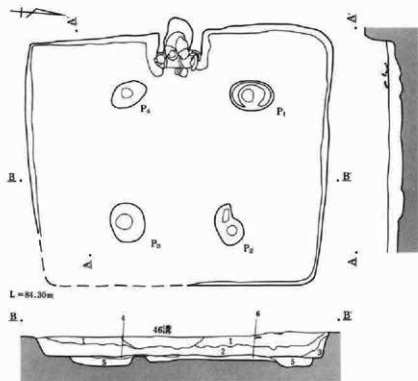
長軸4.82m、短軸4.00mの中形横長方形住居で、確認面からの深さは西壁で35cmを測るが、東壁は微高地縁辺にあたるため、著しく削平されている。

床面は細かな起伏は認められるものの、大略平坦な面となっている。

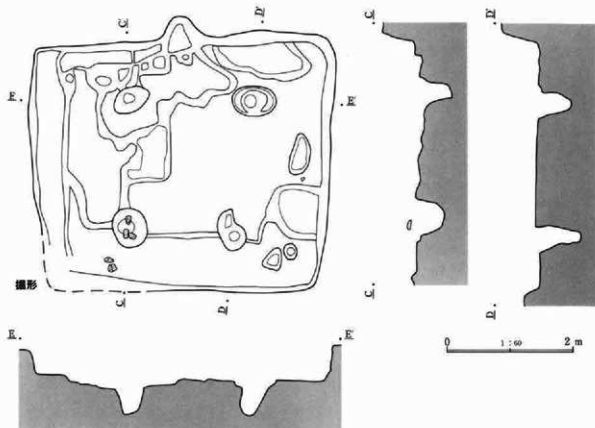
柱穴は4個確認されたが、 P_2 ・ P_4 は住居対角線上からずれており、各柱穴の芯々を結ぶと、やや歪んだ正方形となる。

竈は西壁の中央に設置されている。土器をかけたまま放置されたらしく、土圧で天井部はつぶされ、土器は手前に押したおされてはいるが、使用前の状況を良く止めている。まず長壺(24・25)を40cmの間隔で正位に据えて両袖の芯材とし、その上に長壺2個(18・21)を連続してのせ、焚き口を構築している。竈全体

III 古代の調査

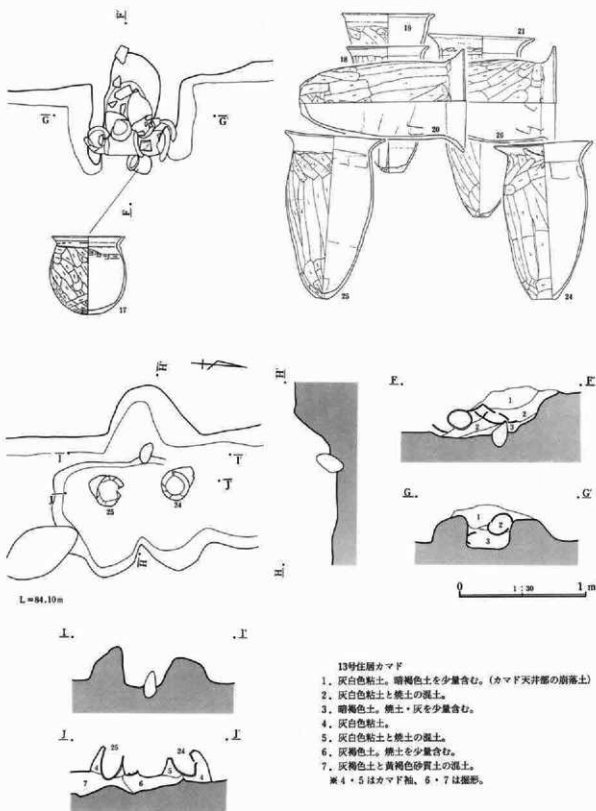


- 13号住居
1. 黒褐色土。焼土粒・二ツ岳
礫石・地山土を少量含む。
 2. 灰褐色土。灰黒色地山土を
多量に含む。やや硬質。
 3. 灰褐色土と灰黒色地山土の
混土。
 4. 灰黒色地山土と灰白色シルト
の混土。硬質。(貼り床)
 5. 灰黒色土。灰白色シルトの
ブロックを含む。
 6. 灰褐色砂質土。
- 5・6 は掘形。



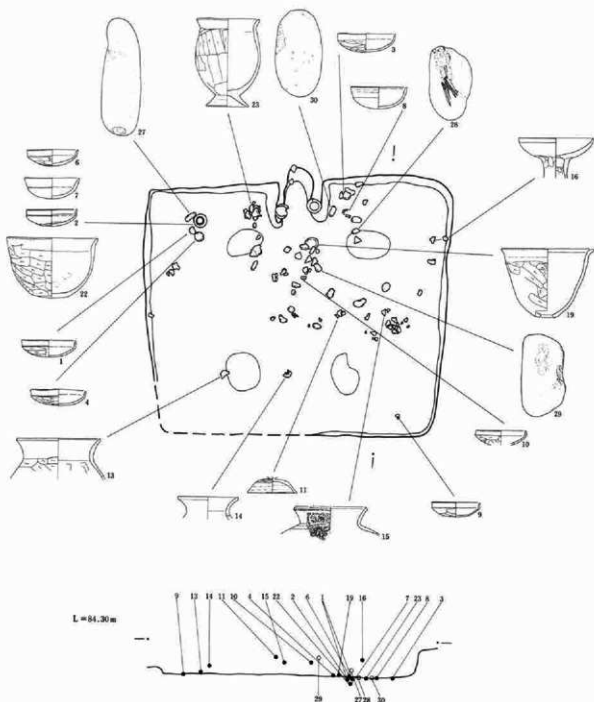
第209図 13号住居

2. 竪穴住居



第210図 13号住居竈

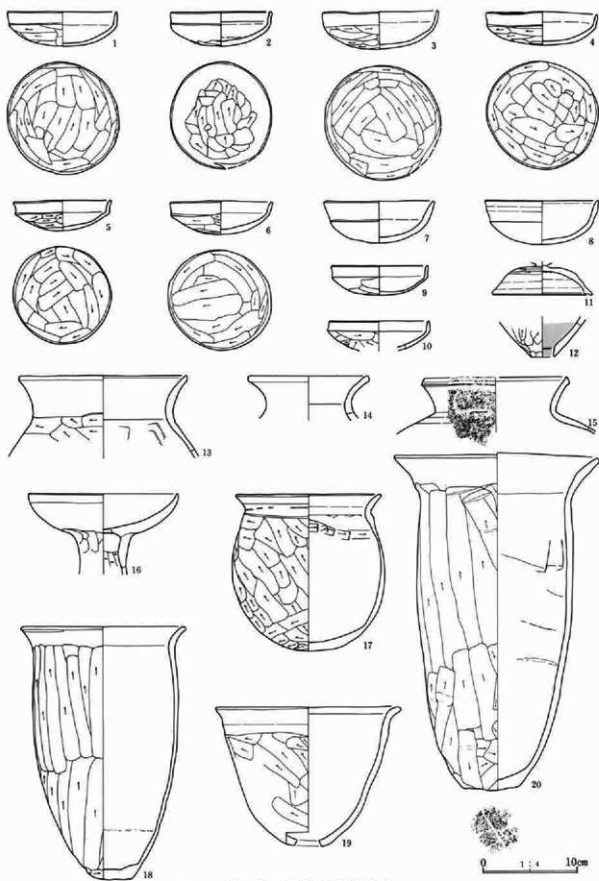
III 古代の調査



第211図 13号住居遺物の出土状況

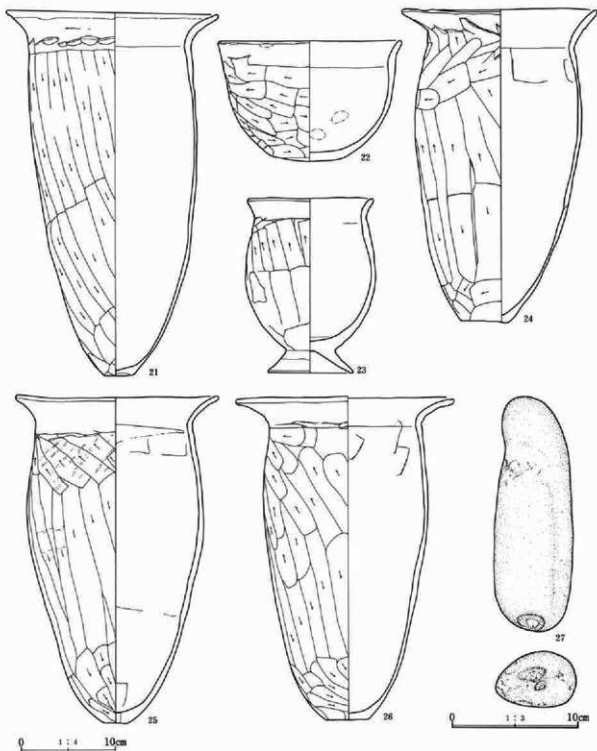
は幅約1m、高さ45cmほどの規模であろう。燃焼部は幅35cm、高さ30cmほどで、中央よりやや左側に棒状円磔を使用した支脚を設置している。煙道は壁外に40cm掘り込み、燃焼部底面から緩やかに立ち上がっている。この竈には長壺2個が並列でかけられており、そのうちの1個は支脚に底部がさきった状態で出土している。このことから、長壺1個を支脚にかけ、もう1個はそれと竈内壁の間にかませて使用していることが理解されよう。竈前にある壺(17)は長壺にかけてあったものが転げ落ちたのであろう。なお、燃焼部から出土し

2. 墓穴住居



第212图 13号住居出土遗物(1)

III 古代の調査

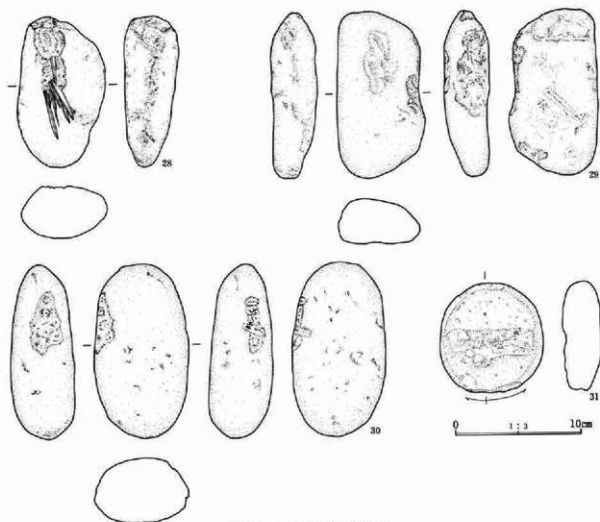


第213図 13号住居出土遺物(2)

た杯(5)は、これらに伴って使用されていたものかどうかは不明である。

貯蔵穴・周溝は認められない。

出土遺物のうち実測可能な土器は26個体で、他に石器5点がある。このうち住居床面から出土した土器は、杯8個(1~4・6~9)、鉢1個(22)、小形の台付甕1個(23)、甕1個(19)の11点で、これに竈にかけ



第214図 13号住居出土遺物(3)

た長壺2個と壺1個、竈内出土の杯1個が加わるであろう。このうち、鉢と杯5個は住居南西隅からまとまって出土しており、杯4個(1・2・6・7)は鉢(22)のなかに重ねて置いた状態で出土し、その横に杯(4)が床面に伏せて置かれていた。竈左の床には小形の台付壺(23)、右の床には杯2個(3・8)があり、北東隅の床から杯(9)が出土している。櫃(19)は竈前の床から出土しており、これも竈にかけられていたものが前方に転げおちた可能性が強い。これら床面出土の土器はいずれもほぼ完形であり、各々の出土状況や竈の状況は生活時の状態をとどめているとして良いだろう。

床下の調査では、中央部と北壁下を除く各周囲に掘り方が認められた。南壁下と南東隅に認められる掘り残し部分は、荒掘り時と完成時の修正によるものか、住居の増築によるものかのいずれかであろう。

15号住居(第215図)

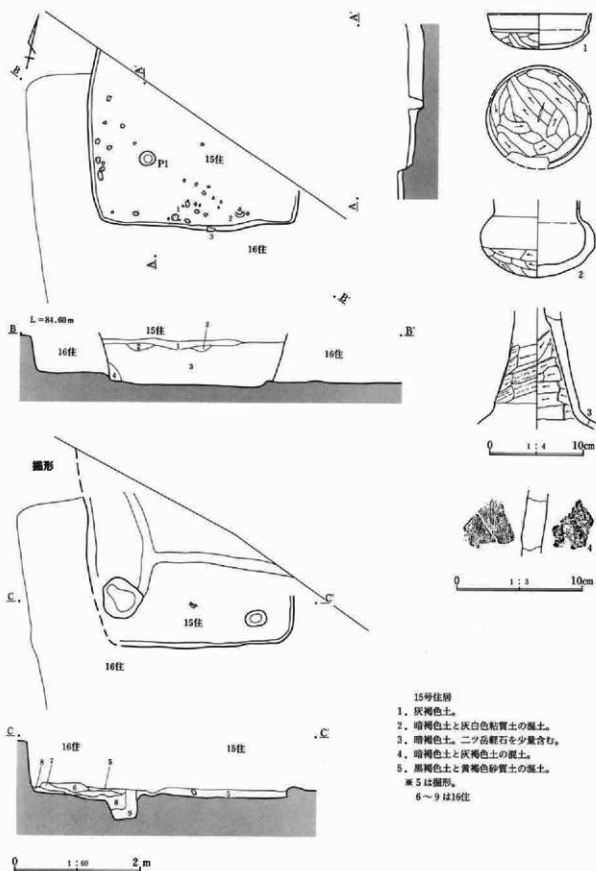
P-38グリッドに位置する。

16号住居に重複して構築されており、北東側の半分は路線外のため未調査である。

東西の長さは3.34mで、確認面からの深さは70cmである。

床面は平坦で、硬化面は確認されていない。柱穴を1個確認したが、その他の施設は調査区内では認めら

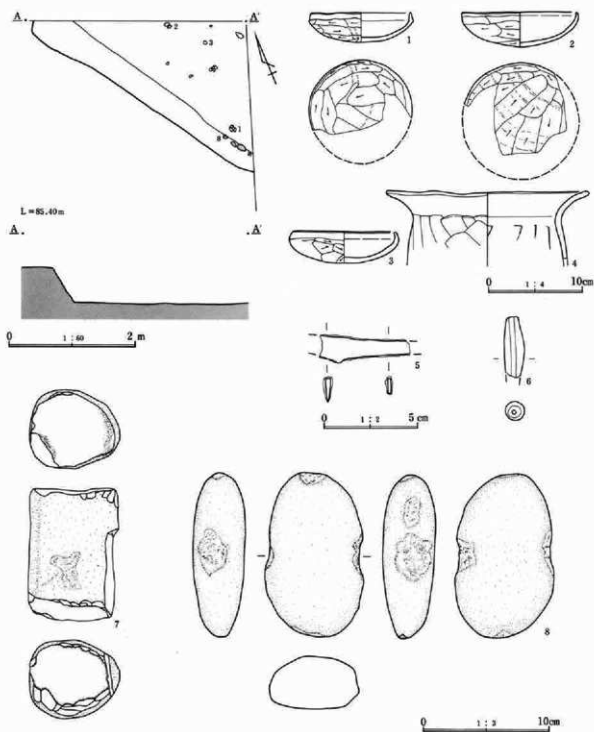
III 古代の調査



- 15号住居
1. 灰褐色土。
 2. 暗褐色土と灰白色粘質土の混土。
 3. 暗褐色土。二ツ瓦軽石を少量含む。
 4. 暗褐色土と灰褐色土の混土。
 5. 黒褐色土と黄褐色砂質土の混土。
- ※ 5 は擬形。
6~9 は16住

第215図 15号住居と出土遺物

2. 墓穴住居



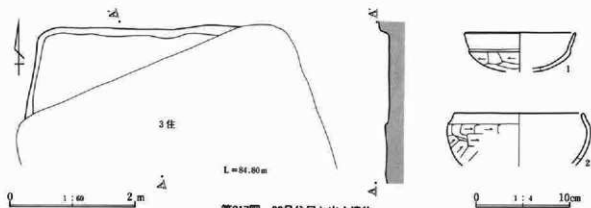
第216図 21号住居と出土遺物

れない。

床下の調査では、南壁と西壁に沿う掘形と、南東隅で浅いピット状の掘り込みを確認した。

遺物の出土量は少なく、実測可能な土器は杯1個、小形の壺1個、高杯の脚部片1個で、他に埴輪片1点があり、いずれも覆土中からの出土である。

III 古代の調査



第217図 22号住居と出土遺物

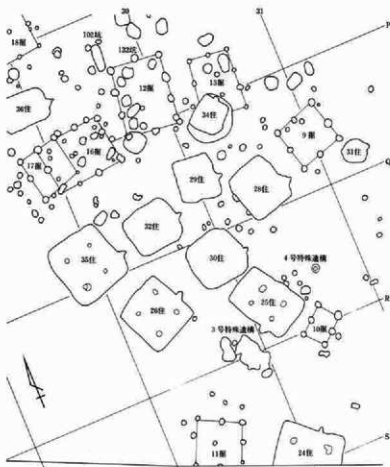
21号住居 (第216図)

M-32グリッドに位置する。

東側を既存の水路で切られ、北側は路線外となるため、調査範囲は西壁下の一部のみである。

確認面からの深さは55cmで、床面はほぼ平坦である。

遺物の出土量は比較的多く、実測可能な土器は杯3個、壺1個の合計4個があり、他に刀子片1点、土錘1点、敲石2点が出土している。いずれも覆土中からの出土である。



22号住居 (第217図)

P-36グリッドに位置する。

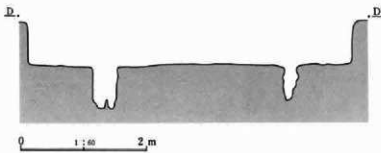
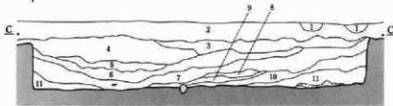
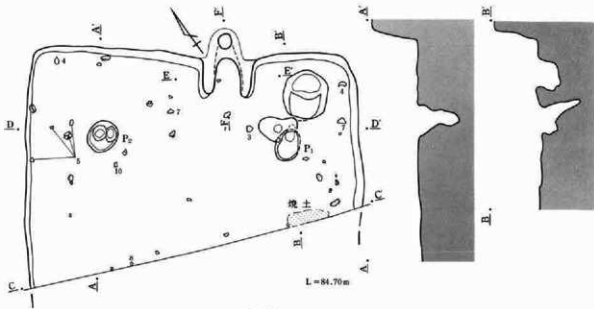
3号住居の北側に重複し、同住居を切っている。確認面からの深さは15cmと浅く、北壁と西壁の一部以外は確認できない。

床面はほぼ平坦であるが、軟質で不明瞭であった。

遺物量はわずかで、実測可能な土器は杯2個のみである。いずれも覆土中より出土。

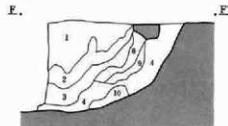
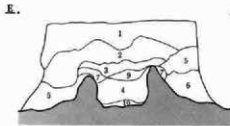
調査時から住居として扱ってきたが、電等の施設の根柢が認められず、住居としての必要条件に欠けている。また、同時期の他の住居に較べて掘り込みがかなり浅く、本報告で特殊遺構としたものにあたる可能性もある。

2. 墓穴住居



24号住居

1. 暗褐色土。As-Bを多量に含む。
2. 黒褐色土。二ツ岳軽石・As-Cを比較的多く含む。
3. 暗褐色土。炭化物を少量含む。
4. 灰褐色土。
5. 暗褐色土。As-Cを少量含む。
6. 灰褐色土。
7. 暗褐色土。
8. 暗褐色土と灰褐色土の混土。
9. 灰褐色土。やや硬質。
10. 暗褐色土。灰褐色土ブロックを少量含む。
11. 暗褐色土。地山土ブロックを含む。



24号住居のマド

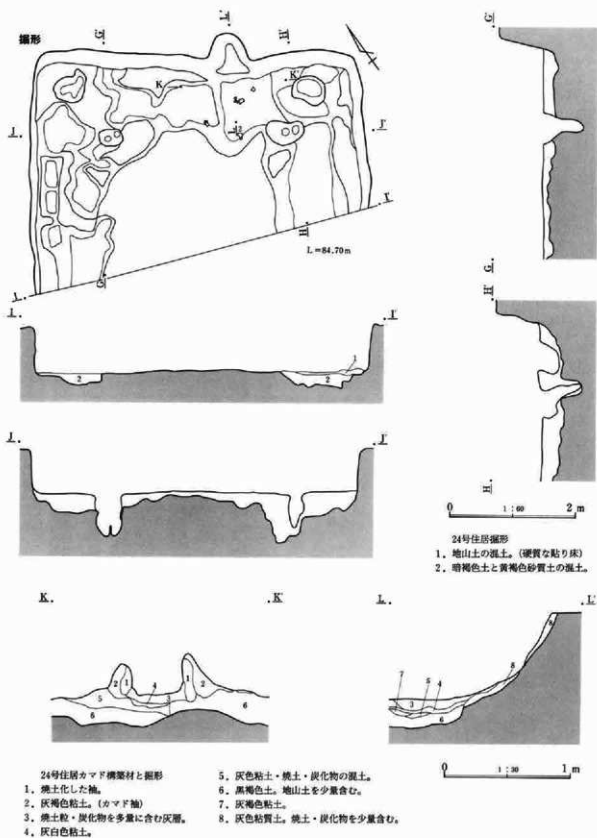
1. 暗褐色土。炭化物を少量含む。
2. 暗褐色土と灰色粘土の混土。焼土を少量含む。
3. 暗褐色土。焼土を少量含む。
4. 灰褐色土。焼土・炭化物を少量含む。
5. 暗褐色土。灰色粘土粒を少量含む。

6. 暗褐色土。
7. よごれた灰色粘土ブロック。
8. 暗灰色粘質土。
9. 焼土ブロック。
10. 焼土と灰の混土。

※ 2・8・9は天井部の崩落。

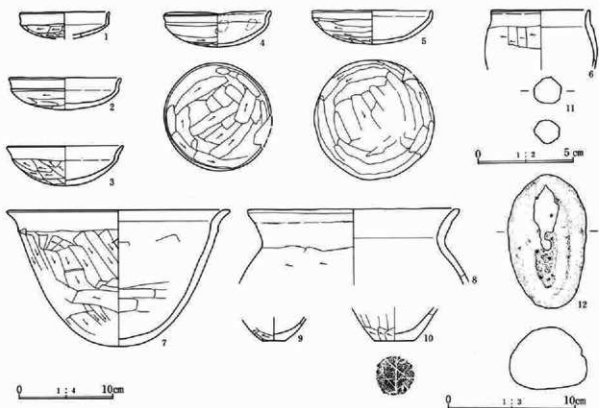
第218図 24号住居

III 古代の調査



第219図 24号住居

2. 竪穴住居



第220図 24号住居出土遺物

24号住居 (第218~220図)

Q-38グリッドに位置する。

南側 1/3 は路線外のため未調査。

東西幅5.22m、確認面からの深さは65cmである。

床面は平坦で、竈前から住居中央にかけて、土間状の硬い面が認められた。

柱穴は2個確認された。いずれも柱痕は2本づつあり、改築が行われたことを示している。

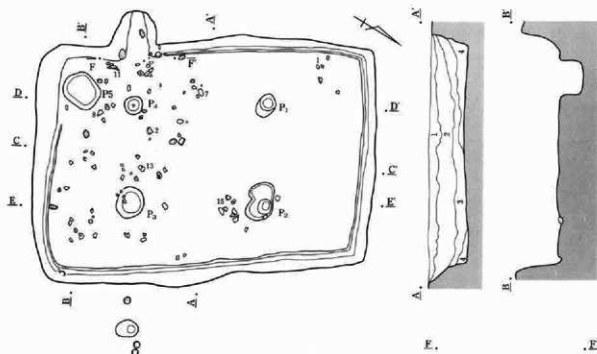
竈は北壁の中央よりやや東寄りに設置されている。遺存状態が良好で、煙道部の天井が残っていた。竈の横幅は90cmで、袖は壁内に60cmの長さで構築されている。燃焼部の幅は40cmである。煙道は壁外に40cmの長さで地山を掘り込み、粘質土と地山のブロック混土で天井部を構築している。排煙口は直径20cmの円形を呈す。

貯蔵穴は北東隅に設置されている。形状は長軸75cm、短軸70cmの楕円形で、深さは南側で30cm、北側の深い部分で40cmである。柱穴が重複していることを考えると、これも新旧の2つが重複している可能性もある。周溝は認められない。

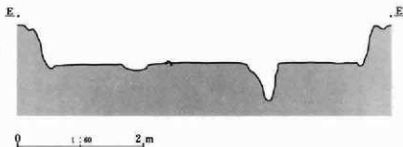
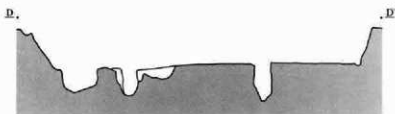
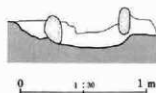
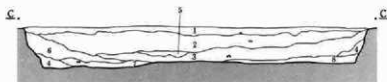
床下の調査では、中央部を除く周囲に幅1.2~1.4m、深さ15~30cmの掘形が認められた。

遺物の出土量は少なく、実測しえた土器は10個で、他に球状鉄製品1個と礫石1個がある。いずれも覆土中からの出土であるが、2は竈前の掘形からの出土である。なお、東壁下の路線外との境の床面上に焼土化した地山土のブロックが認められた。

III 古代の調査



L = 84.70m

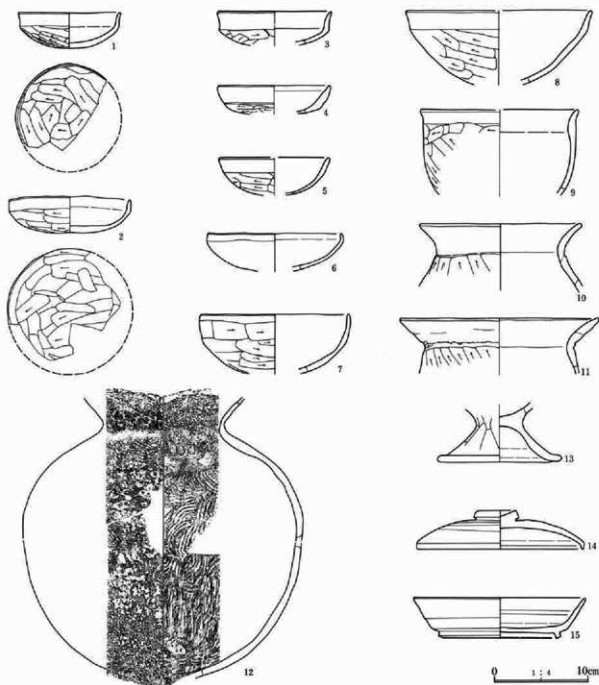


25号住居

1. 赤褐色土。ニツ岳軽石を少量、As-Cを多量に含む。
2. 暗褐色土。
3. 暗褐色土。焼土粒を多く含む。
4. 暗褐色土。やや硬質。
5. 黒褐色土。
6. 灰褐色土。炭化物を多く含む。
7. 暗褐色土。焼土粒・炭化物を少量含む。
8. 灰褐色土。やや硬質。

第221図 25号住居

2. 竪穴住居



第222図 25号住居出土遺物

25号住居 (第221・222図)

Q-30グリッドに位置する。

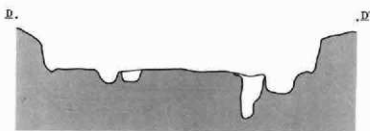
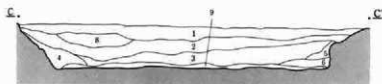
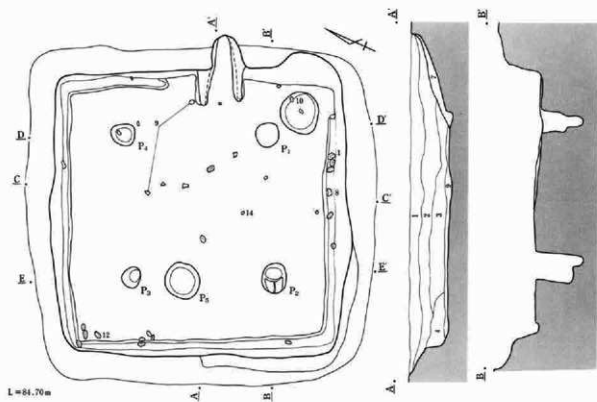
明確な重複関係は認められないが、東側に4号特殊遺構が接し、北側に30号住居、西側に3号特殊遺構、南側に10号掘立柱建物が各々1m以内に近接している。

外形は長軸5.48m、短軸3.58mの大形横長長方形住居で、確認面からの深さは55~60cmである。

床面はほぼ平坦で、全体によくしまっている。また、南西隅は他に比べて10cmほど低い面となっている。

柱穴は住居のほぼ対角線上に4個設置されているが、P₁は深い掘り込みを確認できなかった。

III 古代の調査

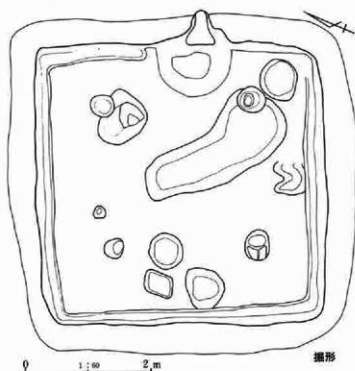


0 1:50 2m

26号住居

1. 暗褐色土。二ツ岳軽石・As-C・焼土粒・炭化物を少量含む。
2. 黒褐色土。二ツ岳軽石・As-Cを少量含む。上位の地山土にあたる。
3. 灰褐色土。均質。
4. 黒褐色土。地山の黄褐色砂質土のブロックを含む。
5. 暗褐色土。上位地山の黒褐色土ブロックを含む。
6. 暗褐色土。粘性あり。
7. 暗褐色土。灰白色粘土・焼土・炭化物を多量に含む。カマド上面の土層。
8. 暗褐色土。焼土・炭化物を多量に含む。
9. 暗褐色土。焼土粒を少量含む。

第223図 26号住居



第224図 26号住居

竈は西壁の南寄りに設置されている。袖や天井の構築土は全て取り払われていたが、棒状の河原石を使用した袖石と支脚が確認された。竈は壁を70cm掘り込み、袖石を壁の内側ライン上に設置して構築しており、支脚は壁外30cmの中央よりやや右寄りに置かれている。袖石や支脚の位置には、新しい様相が伺える。

貯蔵穴は竈に近い南西隅に設置されている。直径55cmの歪んだ円形を呈し、深さは35cmである。

周溝は幅10cm、深さ5cmで、竈と貯蔵穴の周辺を除く部分に全周している。

床下の調査では、竈前とP₁の周囲に不定形の掘り込みが認められた他は、地山を直接床面としている。

遺物は住居南半の覆土中を中心に出土した。土器類はいずれも破片状態で出土しており、そのうち3個の須恵器を含む15個体を図化した。礫は棒状のもの2個を含む12個が出土しており、このうち8個は床面出土である。

26号住居（第223～225図）

Q-29グリッドに位置する。

北側に32号・35号住居、東側に30号住居が各々2m以内に近接する。

外形は長軸4.68m、短軸4.58mの中形正方形住居で、確認面からの深さは62cmである。壁面は下半部はほぼ垂直に立ち上がるが、上半部は幅約80cmにわたって斜めに削平されている。

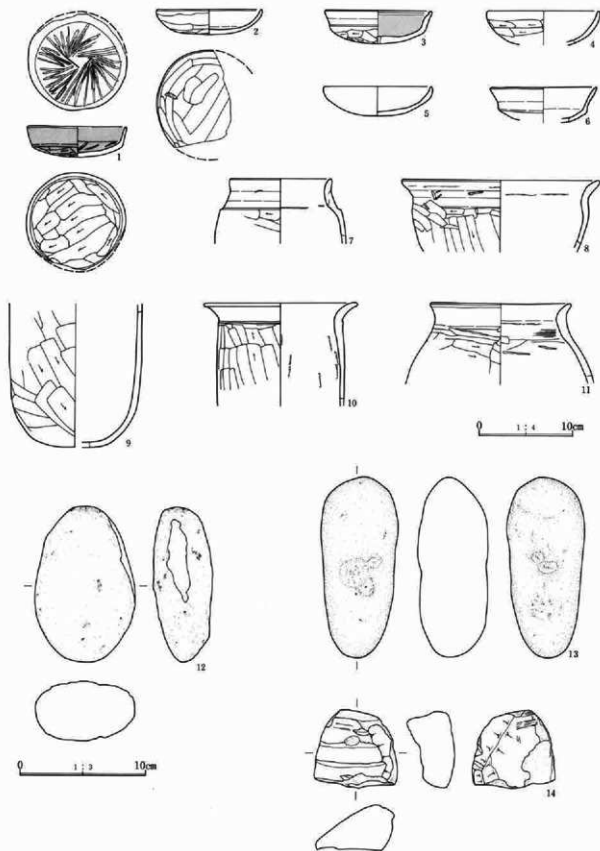
床面は平坦に構築されている。

柱穴は対角線上に4個配置されており、芯々を結ぶと住居外形と相似形となる。P₁は床面の段階では不明瞭であったが、床下調査時に確認できた。掘形は2段の構造をもつ。P₂も片側に寄った2段の構造である。

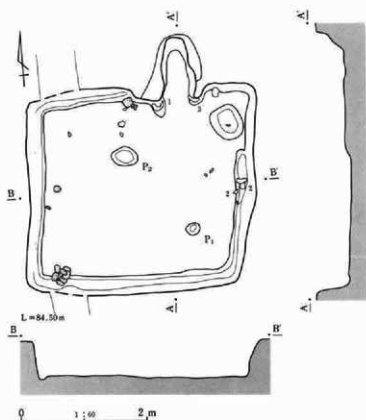
P₄は深さ20cmで、他に較べて浅い。

竈は東壁の中央よりやや南寄りに設置されている。焚き口の幅は50cmで、袖は壁内に45cmの長さで構築さ

III 古代の調査



第225図 26号住居出土遺物



第226図 27号住居と出土遺物

れている。煙道部は壁を62cm掘り込んでおり、燃焼部から緩やかに傾斜しながら立ち上がる。

貯蔵穴は南東隅に設置されている。直径65cmの円形で、深さは30cmである。

周溝は幅12~18cm、深さ5cmで、竈と貯蔵穴の周辺を除く壁下めぐっている。

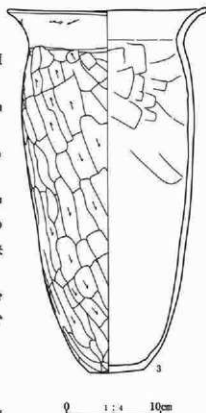
床下の調査では、竈前に径1.2mの半円形の掘り込み、P₁から住居中央部にかけて浅い掘り込みの落ち込み、P₄に接して深さ17cmの円形状の掘り込み、P₃とP₄の間に円形と方形状の3個の掘り込み、南壁下中央に不定形の落ち込みが各々検出された。

遺物量は少なく、実測したのは土器は11点で、他に棒状礫を含む円礫33点が出土している。遺物はいずれも床上3cm以内からの出土であり、このうち7・10は貯蔵穴内から出土している。

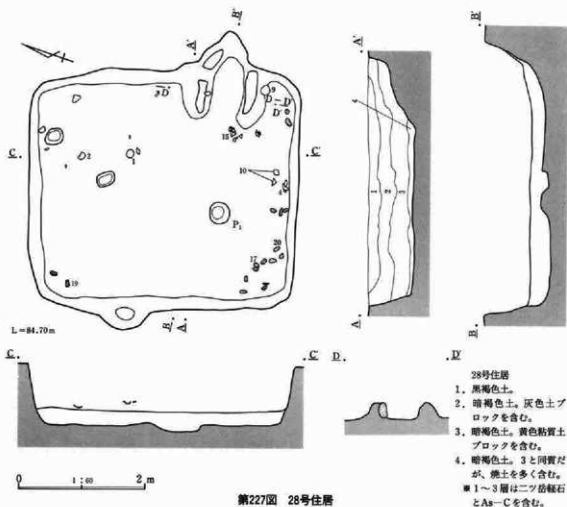
27号住居 (第226図)

P-25グリッドに位置する。他の住居から離れた位置に単独で検出された。最も近い住居から26m離れている。

外形は長軸3.54m、短軸3.08mの小形横長方形住居で、わずかに



III 古代の調査



- 28号住居
1. 黒褐色土。
 2. 暗褐色土。灰色土ブロックを含む。
 3. 暗褐色土。黄色粘質土ブロックを含む。
 4. 暗褐色土。3と同質だが、焼土を多く含む。
- 1～3層は二ツ房緑石とAs-Cを含む。

平行四辺形状の重みが認められる。確認面からの深さは58cmである。

床面は地山を調整してほぼ平坦にしているが、竈前にやや高まった硬質な面が認められた。

柱穴は住居対角線上に1本(P₁)確認されたが、深さは15cmと浅い。また、竈前左側に浅い掘り込み(P₂)が認められた。

竈は北壁の東寄りに設置されている。黄白色粘土と地山土の構築土が押しつぶされた状態で良く残っていたが、使用状態は示していない。丸胴の壺(1)と長甕(3)を伏せて袖芯材とし、壁を1.1m掘り込んで燃焼部と煙道を構築している。

貯蔵穴は北東隅の竈脇に設置されている。長軸54cm、短軸47cmの楕円形を呈し、深さは32cmである。

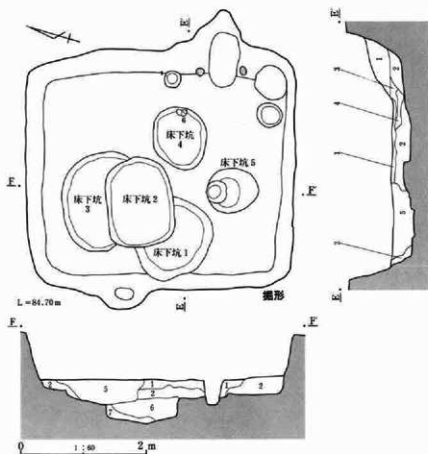
周溝は幅20cm、深さ5cmで、竈と貯蔵穴の周辺を除いてめぐっている。

遺物量はわずかで、覆土中からの出土はほとんど認められなかった。土器は東壁床面から台付壺(2)が出土した。壺は棒状のもの9点を含む15点が出土しており、いずれも床面からの出土である。このうち棒状壺9点は、南西隅の1カ所に置かれた状態で出土している。

28号住居 (第227～229図)

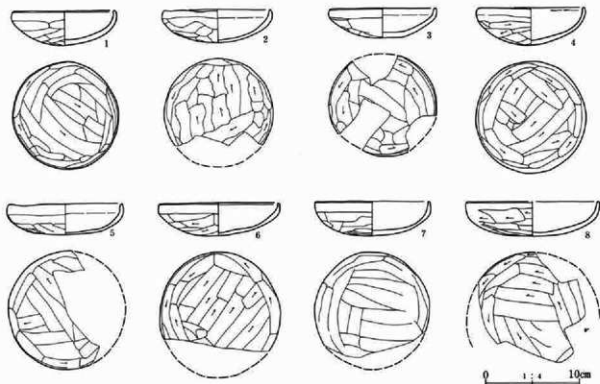
P-30グリッドに位置する。西側に29号住居、東側に9号掘立が各々2m以内に近接している。

2. 墓穴住居



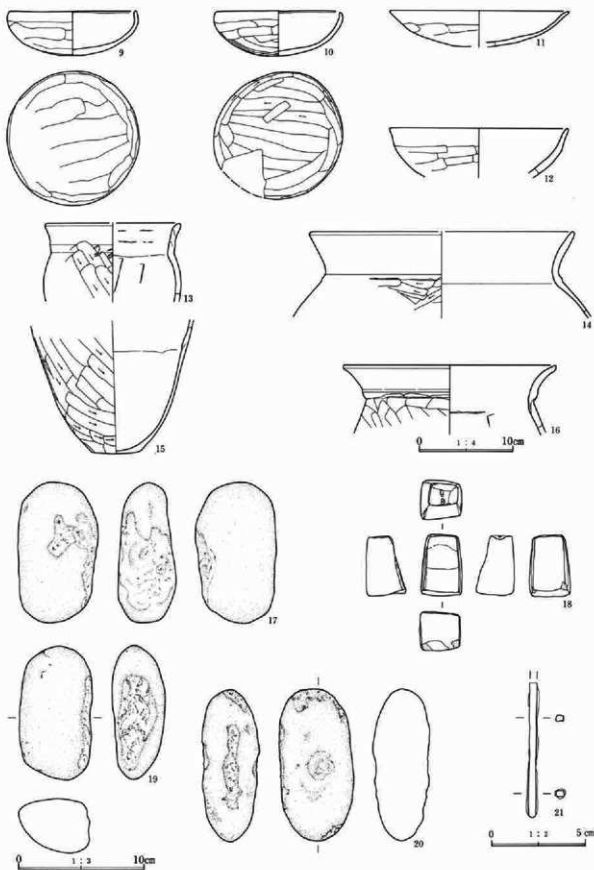
28号住居概形

1. 暗褐色土。黄土粒を多く含む。上面は床で堅い。
2. 暗褐色土。地山ブロックを多く含む。
3. 褐色粘質土。
4. 黒褐色粘質土。
5. 暗褐色土。黄土粒を多く含む。(床下坑3)
6. 暗褐色粘質土。均質。
7. 褐色粘質土。赤色土を含む。
※ 6・7層は床下坑2。

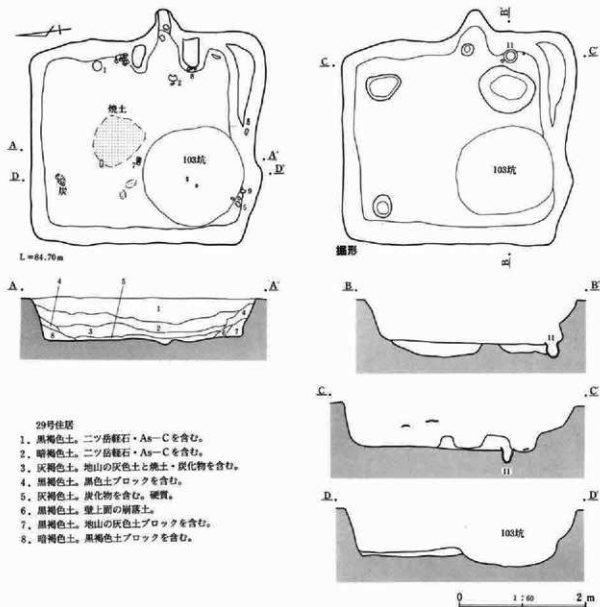


第228図 28号住居と出土遺物(1)

III 古代の調査



第229図 28号住居出土遺物(2)



第230図 29号住居

形状は長軸4.32m、短軸3.52mの中形横長方形住居で、確認面からの深さは73cmである。西壁の北寄りに掘り込みが確認されたが、本住居に伴うものかどうかは不明である。

床面は平坦で、特に硬質な部分は認められない。

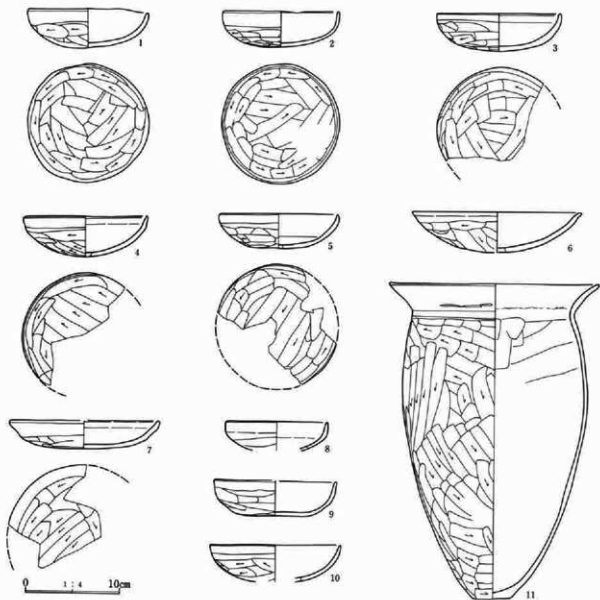
柱穴は明確なものは見あたらないが、電軸線上に深さ40cmの穴(P₁)が確認されている。北側の2つの掘り込みはいずれも深さ10cm未満の浅いものである。

竈は東壁の南寄りに設置されている。壁を1.2m掘り込んで構築しており、両袖の幅は1.15m、袖の長さは右側で1.2mである。燃焼部は幅50cm、奥行き1mで、煙道部は急傾斜で立ち上がっている。なお、両袖内には壁内側線上に棒状の円礫が芯材として使用されている。

貯蔵穴、周溝は認められない。

床下の調査では、床下坑5基が確認された。本住居は全面にわたって15~20cmの土を充填し、その上に床

III 古代の調査



第231図 29号住居出土遺物

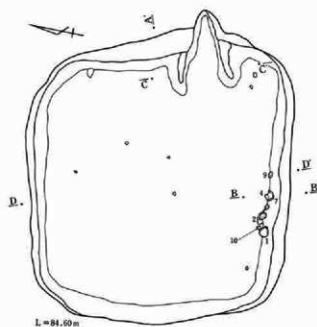
面を張っているが、その充填土と床下坑の切り合い関係から、床下坑2が最も古く、次いで床下坑4・5が充填土で埋めもどされ、床下坑1・2はその充填土を切って構築されていることが判明した。

遺物は覆土中を中心に散在状態で出土している。土器のうち実測しえたのは16個体で、9・10・15は床面出土である。9は竈右袖の外側から、15は右袖の前方から、10は南壁際から出土している。礎は棒状礎16個を含む総数28個が出土した。このうち棒状礎10個は南西隅の床面にまとまって出土しており、その東側でも棒状礎3個が床面から出土した。また、北西隅でも床直上から棒状礎2点が出土している。これら棒状礎の中には敲打痕が認められるものもあり、17・19・20はその代表的なものである。なお、その他紐穴をもつ小形砥石1個と鉄鎌の中茎1個が覆土中より出土している。

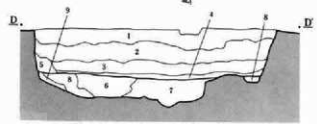
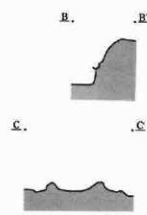
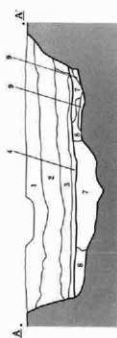
29号住居 (第230・231図)

R-30グリッドに位置する。北側に34号住居、東側に28号住居、西側に32号住居が各々1m以内に近接す

2. 竪穴住居

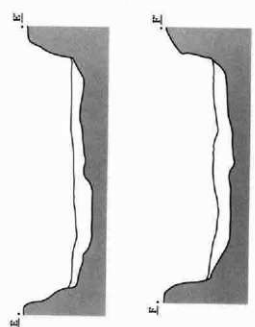
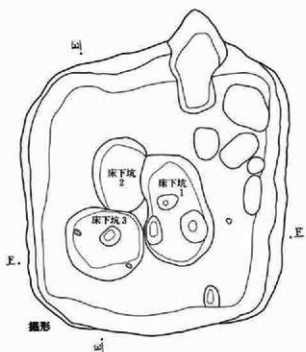


L=84.60m



30号住居

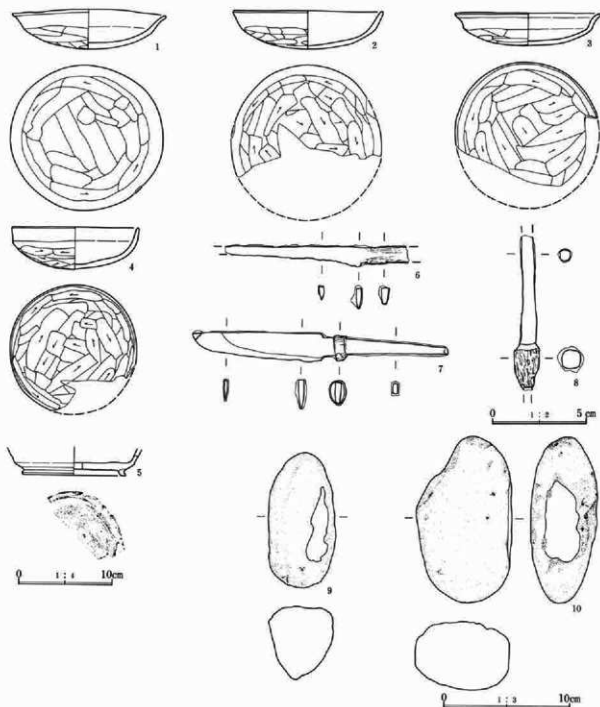
1. 黒褐色土。二ツ岳礫石・As-Cを含む。
2. 暗褐色土。地山の灰色土と礫土を少量含む。
3. 暗褐色土。地山の黄色土ブロックを含む。
4. 暗褐色土。黄色粘質土を多量に含む。
5. 黒色粘質土と地山灰色土の混土。
6. 暗褐色土。焼土粒を多量に含む。(床下坑3)
7. 暗褐色シルト質土。地山ブロックと礫土を含む。(床下坑1)
8. 暗褐色粘質土。
9. 暗褐色粘質土。地山土と灰色粘土を含む。



0 1:00 2:m

第232図 30号住居

III 古代の調査



第233図 30号住居出土遺物

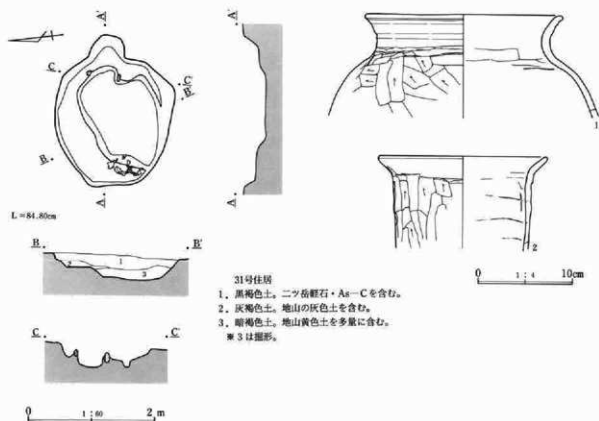
る。また、住居内南西隅に103号土坑が重複し、これに切られている。

外形は長軸3.30m、短軸3.22mの小形正方形住居で、確認面からの深さは67cmである。南東隅の壁に幅45cm、深さ40cmの段があり、埋没土は本住居と同一である。

床面は平坦で、住居中央部とその周辺に床上に、焼土の堆積が認められた。

竈は東壁の南寄りに設置されている。壁面を1.2m掘り込んで構築されており、両袖の幅は1.1mである。燃焼部の幅は45cm、奥行き65cmで、煙道部は急傾斜で立ち上がっている。

柱穴、貯蔵穴、周溝は認められない。



第234図 31号住居と出土遺物

床下の調査では、南西隅を除く住居の各隅に、円形状の掘り込みが認められた。また、竈石袖の付け根の下に、瓦形の礎（11）が正位で埋設されていた。礎は口縁部を床面に出した状態で埋設されていたが、目的は不明である。

遺物は覆土中を中心に少量出土した。実測しえたのは杯10個で、7以外は全て覆土中からの出土である。このうち、5・9は103号土坑に含まれる可能性が高い。他に礎2個が覆土中より出土している。

30号住居（第232・233図）

Q-30グリッドに位置する。北側に32号住居、南側に25号住居が1m以内に近接する。

外形は長軸4.48m、短軸4.26mの中形正方形住居で、確認面からの深さは75cmである。壁はやや開きざみに立ち上がる部分が多く、上位1/3には斜位の削平が認められた。

床面は平坦で、竈前にやや硬化した面が認められた。

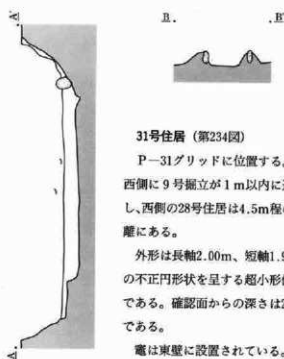
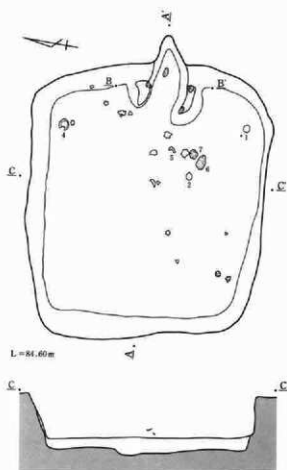
竈は東壁の南寄りに位置する。壁面を80cm掘り込んで構築しており、両袖の幅は90cmである。燃焼部の幅60cm、奥行き55cmで、煙道部は急傾斜で立ち上がっている。

柱穴、貯蔵穴、周溝は認められない。

床下の調査では、床下坑3基と全面にわたる掘形が確認された。床下坑1と3には切り合い関係が認められ、1は床下の充填土を掘り込んでおり、さらに3が1を切って構築されている。床下坑2は不明である。

遺物は覆土中を中心に少量出土している。特に南壁に貼り付くようにして杯3個（1・2・4）と刀子1点（7）と砥石2点（9・10）を含む円礫8点がまとまって出土しており、これらは住居埋没に伴って一括投棄された可能性が高い。その他も覆土中からの出土である。

III 古代の調査



31号住居 (第234図)

P-31グリッドに位置する。北西側に9号掘立が1m以内に近接し、西側の28号住居は4.5m程の距離にある。

外形は長軸2.00m、短軸1.90mの不正円形状を呈する超小形住居である。確認面からの深さは20cmである。

竈は東壁に設置されている。壁面を35cm掘り込んで構築しており

り、壁内25~30cmの位置に棒状の円礫を利用した袖石2個が、幅50cmの間隔で設置されていた。焼土や構築用土はわずかしか残されていなかったが、明らかに竈を使用している。

床面は不明確で確認できず、調査は床下まで及んだが、袖石の位置から周縁部の高い部分が床面に相当するものと考えられる。

柱穴、貯蔵穴、周溝は認められない。

遺物は西壁際の床面に相当するレベルから、壺2個体(1・2)がまとまって出土した以外は、覆土中も含めてほとんど出土は認められなかった。



第235図 32号住居

32号住居 (第235・236図)

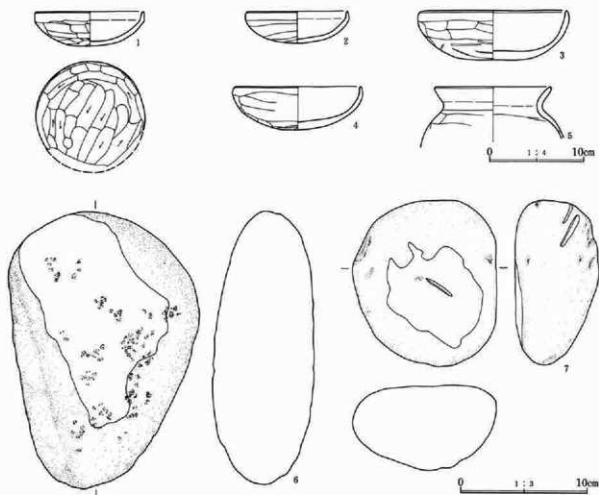
P-29グリッドに位置する。東側に29号住居、西側に35号住居、南側に26号・30号住居が、各々2m以内に近接している。

外形は長軸4.40m、短軸3.80mの中形縦長方形住居で、確認面からの深さは70cmである。

床面は平坦に築かれている。

竈は東壁の中央よりやや南寄りに設置されている。壁面を43cm掘り込んで構築しており、両袖の幅は1.2mである。袖は左右で長さが異なっており、左

2. 竪穴住居



第236図 32号住居出土遺物

側は36cm、右側は65cmである。両袖とも壁下に棒状の円礫を芯材として設置しており、右側の袖には先端部分にもう1個袖石が使用されている。燃焼部の幅は50cm、奥行きは1.0mで、中央よりやや左寄りに円礫を使用した支脚を1個設置している。煙道部は急傾斜で立ち上がっている。

柱穴、貯蔵穴、周溝は認められない。

床下の調査では、小さな落ち込み数カ所と、中央部に大形の床下坑1基が確認された。床下坑は長軸1.9m、短軸1.5mの楕円形を呈し、東側では掘形とレベル差は認められないが、西側では15cmの掘り込みが確認できた。床下充填土との関係は不明である。

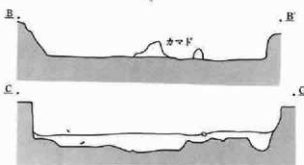
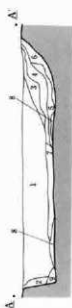
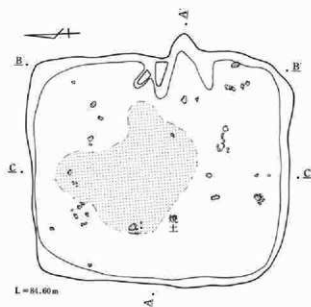
遺物は覆土中を中心に少量出土した。土器のうち実測しえたのは杯4個体と壺1個体で、このうち1は北東隅の床面から、3は竈内から、その他は覆土中からの出土である。また、住居中央の覆土中から研磨面をもつ台石2個が出土している。

33号住居 (第237・238図)

O-28グリッドに位置する。22号掘立と重複するが、切り合い関係は不明である。また、北西側に2号特殊遺構、南東側に36号住居が1m以内に近接する。

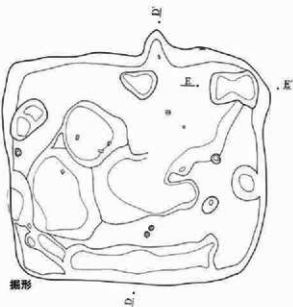
外形は長軸4.16m、短軸3.56mの小形横長方形住居で、確認面からの深さは50cmである。

III 古代の調査



33号住居

1. 暗褐色土。二ツ岳緑石を多量に、As-C・焼土・炭化物を少量含む。
2. 暗褐色土・青灰色シルト・黒色粘質土の混土。
3. 暗褐色土。焼土粒を多量に含む。
4. 灰白色粘土。(カマド天井部の崩落)
5. 灰白色粘土。暗褐色土と焼土を含む。(同上)
6. 焼土層。(同上)
7. 暗褐色土。焼土粒・灰を含む。
8. 褐色粘土ブロック。
9. 暗褐色土と青灰色シルトの混土。

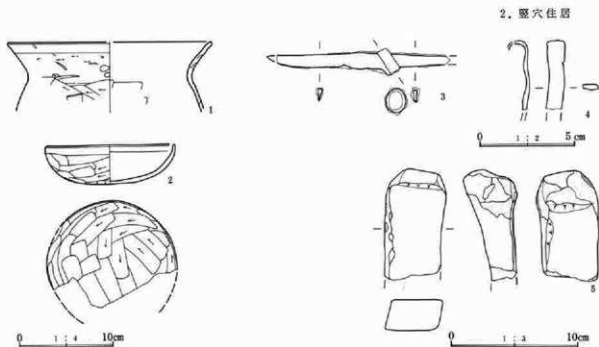


33号住居掘形

1. 黒褐色土。焼土粒を少量含む。
 2. 黒褐色土。二ツ岳緑石・褐色粘土を少量含む。
 3. 黒褐色土。二ツ岳緑石を少量、焼土・灰を多量に含む。
 4. 焼土・灰の混土。
 5. 褐色粘土と焼土の混土。
- ※この部分では褐色粘土が底面地山。

0 1:50 2m

第237図 33号住居



第238図 33号住居出土遺物

床面は平坦で、特に硬質な部分は認められない。なお、住居中央から北側の床面上に、かなり広範囲にわたって焼土の堆積が認められた。

竈は東壁中央のやや南寄りに設置されている。壁面を33cm掘り込んで構築されており、両袖の幅は約1mである。燃焼部の幅は50cm、奥行きは70cmで、煙道部は緩やかな傾斜で立ち上がっている。

柱穴、貯蔵穴、周溝は認められない。

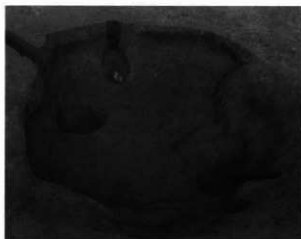
床下の調査では、ほぼ全面にわたって掘形と大小様々な掘り込みが認められた。これらのなかには床下坑も含まれていると思われるが、形状は判然としない。

遺物は覆土から少量出土した。実測しえた土器は2個で、他に刀子1点(3)、金具状の鉄製品1点(4)、砥石1点(5)と円礫11点がある。

34号住居 (第239図)

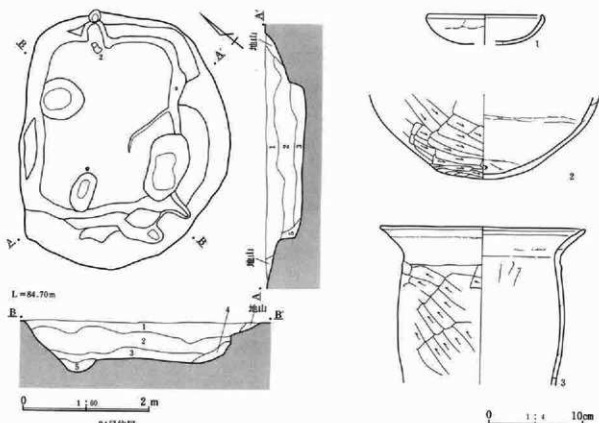
P-30グリッドに位置する。13号掘立と重複するが、切り合い関係は不明である。また、西側に12号掘立、南側に29号住居が1m以内に近接している。

外形は長軸4.04m、短軸3.32mの小形縦長長方形住居で、確認面からの深さは60cmである。北壁を除く周縁部に幅30～80cmの緩やかな傾斜面がめぐっており、東壁では幅30cmの段となっている。また、傾斜面をもたない北壁は、壁面が緩やかに傾斜しており、一部に段状の部分も認められる。これらの傾斜面や段の埋没土は住



34号住居

III 古代の調査



34号住居

1. 黒褐色土。ニツ岳軽石・As-Cを含む。
2. 黒褐色土。粘性あり。
3. 暗褐色土。地山の黄色土・焼土粒を含む。
4. 暗褐色土。焼土粒・炭化物を多量に含む。
5. 黄褐色土と地山土の混土。

第239図 34号住居と出土遺物

居覆土と同一であり、重複や切り合いは認められない。

床面はほぼ平坦で、北壁下と西壁下、および南西隅に大小の浅い掘り込みが認められた。このうち南西隅の掘り込みは土坑の重複とも考えられたが、確認できなかった。

竈は東壁の北寄りに設置されている。住居内側の壁面を25cm掘り込んで構築している。煙道部の先端に直径20cmのピットがあるが、本住居に伴うものとは考えられない。なお、袖等は取り払われていた。

柱穴、貯蔵穴、周溝は認められない。

遺物量は少なく、実測しえた土器は3個体である。いずれも覆土中からの出土である。

35号住居 (第240～243図)

Q-29グリッドに位置する。東側に32号住居、南側に26号住居が各々2m以内に近接する。

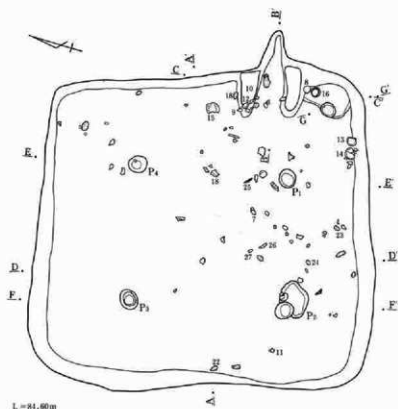
外形は長軸5.38m、短軸4.90mの中形正方形住居で、確認面からの深さは55cmである。壁面はほぼ垂直に立ち上がるが、上半部が斜位に削平されている部分も認められる。

床面はわずかに起伏が認められるものの、ほぼ水平に保たれている。

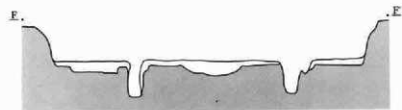
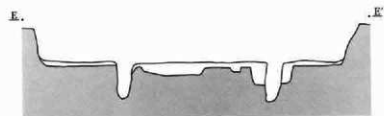
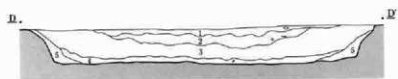
柱穴は住居の対角線上に4本設置されており、各々の芯々を結ぶと住居外形と相似形になる。深さはいずれも約60cmである。

竈は東壁の南寄りに設置されている。壁面を60cmほど掘り込んで構築されており、両袖の幅は約1mであ

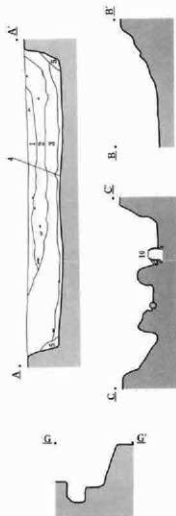
2. 竪穴住居



L=91.90m



0 1:40 2 m

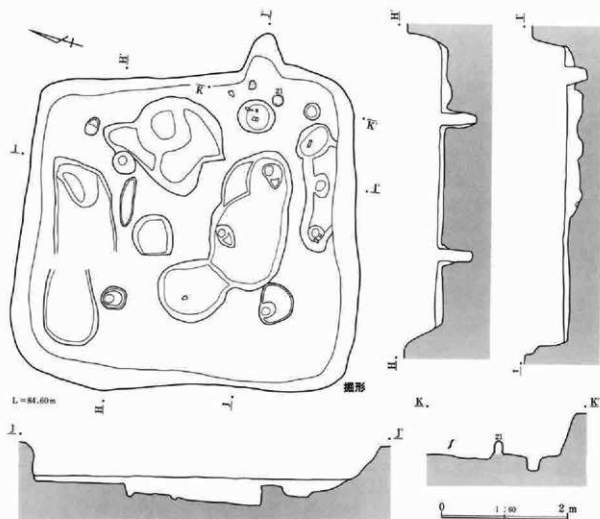


35号住居

1. 暗褐色土。As-Cを多量に、焼土・炭化物を少量含む。
2. 暗褐色土。As-Cを多量に含む。遺物を比較的多く包含する。
3. 赤褐色土。二ツ品軽石・As-Cおよび焼土・炭化物を少量含む。
4. 3層と同質だが、炭化物の量が多く、硬質。
5. 暗褐色土。地山の灰白色シルト砂を多く含む。

第240図 35号住居

III 古代の調査



第241図 35号住居

る。燃焼部は幅45cm、奥行き90cmで、中央の左寄りに棒状の円礫を使用した支脚が1個設置されている。煙道部は壁外に緩やかな傾斜で立ち上がっている。なお、同袖には壔(20・21)が芯材として使用されていた。

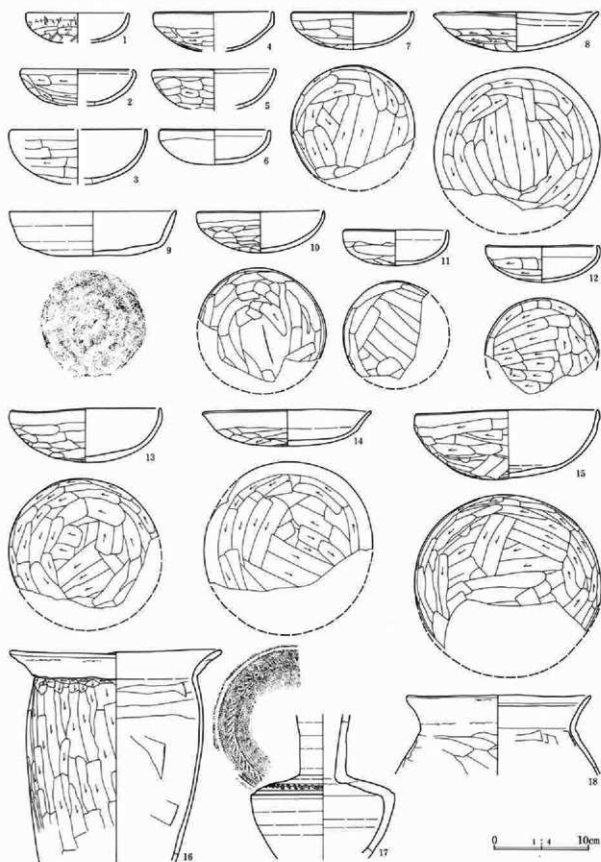
貯蔵穴は南東隅に設置されている。この部分は床面よりも10cmほど低くなっており、貯蔵穴はその段差に接して、直径25cm、深さ30cmで掘り込まれている。また、電右袖の脇に、胴下半を打ち欠いた壔が埋設されていた。壔は打ち欠いた部分を上にして、口縁部を5cm埋設されており、電にかける壔等の置き台として使用されていたものと考えられる。

周溝は認められなかった。

床下の調査では、床下坑6基の他に浅い掘り込みが数カ所認められた。床下坑は1～4が重複しているが、切り合い関係はつかめなかった。

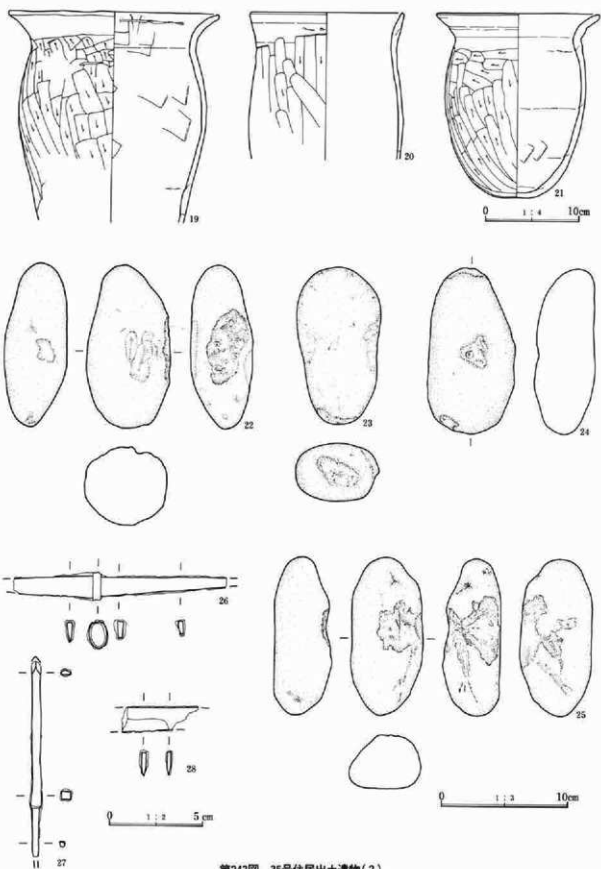
遺物は床面および覆土中から比較的多量に出土している。このうち実測しえた土器は須恵器1個を含む杯15個体、壔2個体、須恵器の長頸壺1個体があり、他に刀子2点、鉄鍔1点、棒状のもの6点を含む円礫21個が出土している。土器のうち、10と5は壔内から、3は壔前の掘形から、10・11・13・15は床面からの出土である。なお、須恵器の長頸壺は25号・30号住居覆土出土の破片との接合資料である。

2. 竪穴住居

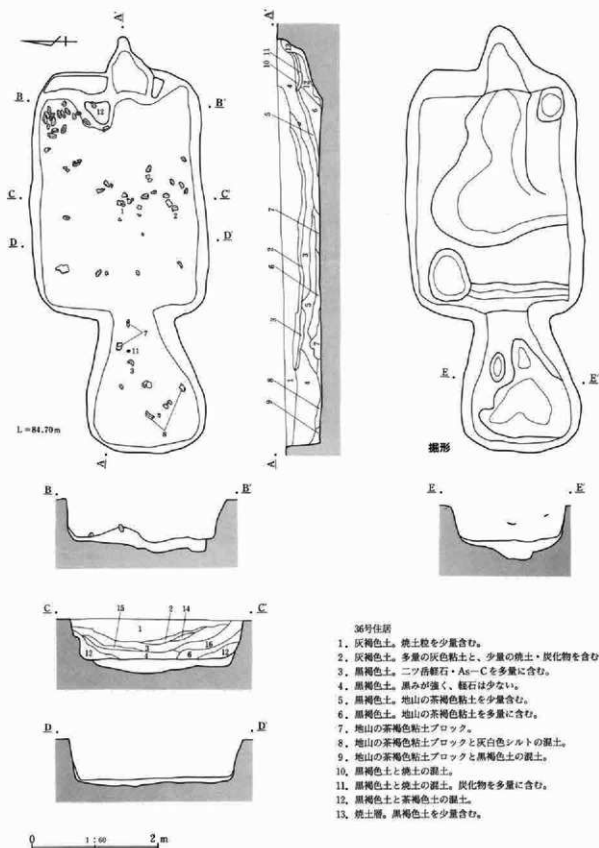


第242图 35号住居出土遺物(1)

III 古代の調査

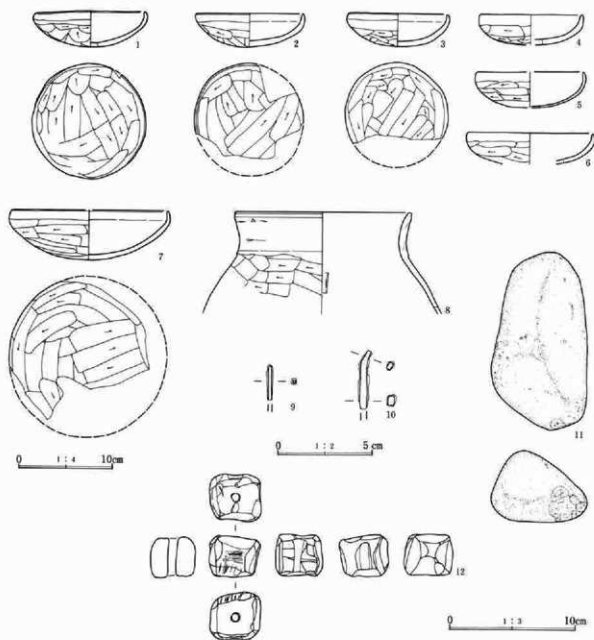


第243図 35号住居出土遺物(2)



第244図 36号住居

III 古代の調査



第245図 36号住居出土遺物

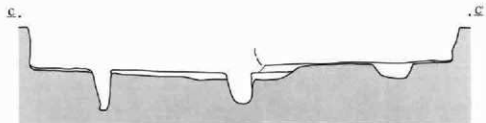
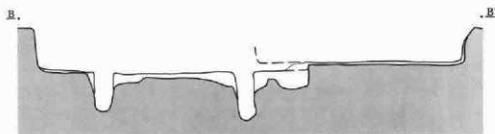
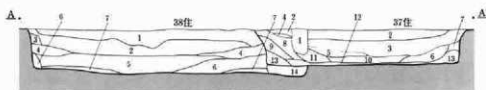
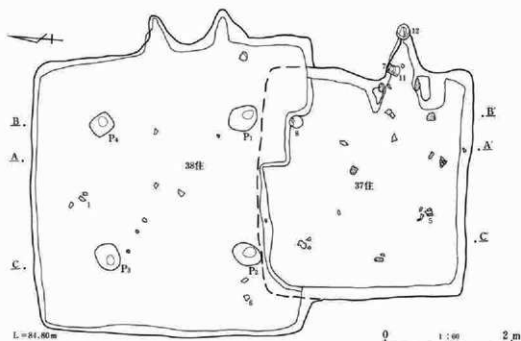
36号住居 (第244・245図)

〇-28グリッドに位置する。北西側に33号住居が1m以内に近接する。

外形は長軸3.24m、短軸2.28mの小形縦長長方形住居で、確認面からの深さは60~70cmである。西壁に長軸2.1m、短軸の広い部分で1.9mの張り出しが付随しており、当初重複住居として調査を進めたが、床面は連続しており、覆土も明瞭な切り合いが認められないことから、本住居に付随する張り出しと結論した。また、竈のある東壁には幅30cm、深さ10cmの、テラス状の段が付く。

床面は張り出し部も含めてほぼ水平となっているが、西から東に向かってわずかに傾斜が認められる。

竈は東壁の中央よりやや南寄りに設置されている。壁面を85cmほど掘り込んで構築されている。袖部は左



38号住居

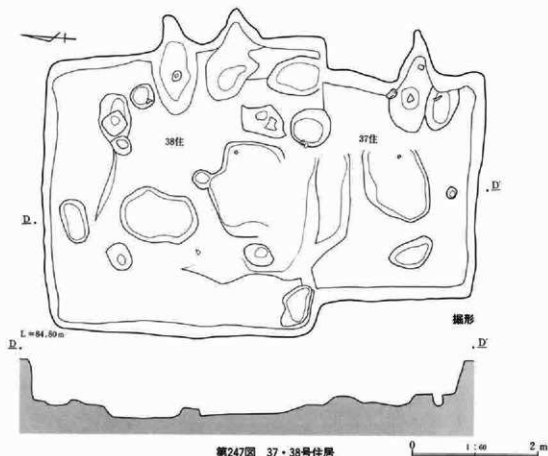
1. 暗褐色土。二ツ岳輝石・As-Cを多量に含む。
2. 暗褐色土。輝石・地山土を少量含む。
3. 暗褐色土。地山の茶褐色粘土を少量含む。
4. 地山の青灰色礫砂土のブロック。
5. 暗褐色土。地山土ブロック・燧土を含む。
6. 暗褐色土。
7. 灰褐色土。燧土粒を少量含む。

37号住居

1. 暗褐色土。(組立柱の柱穴)
2. 暗褐色土。燧土粒を少量含む。
3. 暗褐色土。輝石を少量含む。
4. 暗褐色土。燧土・炭化物を多含。
5. 暗褐色土。
6. 黒褐色土。
7. 黒褐色土。輝石を少量含む。
8. 暗褐色土。茶褐色粘土を少量含む。
9. 黒褐色土。炭化物を少量含む。
10. 暗褐色土。地山土を多く含む。
11. 暗褐色土。茶褐色粘土を多く含む。
12. 暗褐色粘質土。
13. 黒色粘土と茶褐色粘土の混土。
14. 茶褐色粘土と灰褐色土の混土。二ツ岳輝石を多く含む。(38号住居)

第246図 37・38号住居

III 古代の調査



第247図 37・38号住居

側の一部が残っているが、燃焼部は判然としない。煙道は床面から一段のテラスをもち、そこからほぼ垂直に立ち上がっている。

柱穴、貯蔵穴、周溝は認められない。

床下の調査では、本体と張り出し部の中央に不定形の掘形、西壁にそって張り出し部を仕切るような幅45cmの溝状の掘り込み、北西隅と南東隅に円形の浅い掘り込みが認められた。

遺物は覆土中を中心に出土した。実測した土器は9個体で、そのうち3・7・8は張り出し部からの出土である。1と7は床面から出土しており、1は床上12cmから出土した破片と接合した。漆は棒状礫23個を含む総数37個が出土しており、そのうち29個は床面出土である。特に北東隅の床面には棒状礫15個を含む18個が集中しており、南壁際から中央部の床にも棒状礫3個を含む10個が認められた。その他には棒状の鉄製品2点と円孔のある砥石1点が、覆土中より出土している。

37号住居 (第246～248図)

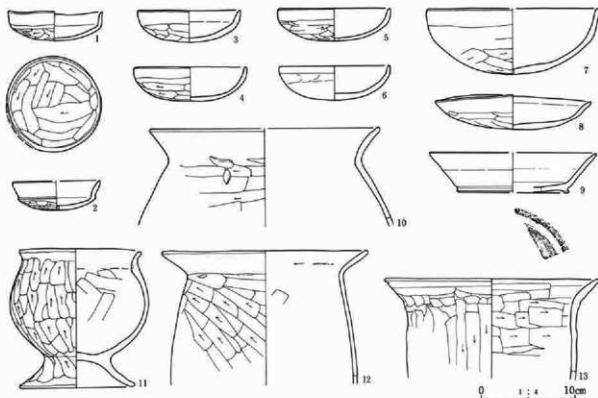
N-29グリッドに位置する。38号住居と重複し、これを切っている。また、南側の18号掘立とも重複しているが、切り合い関係は不明である。

外形は長軸3.54m、短軸は推定3.30mで、小形正方形住居であろう。確認面からの深さは56cmである。

床面は水平で、38号住居にかかる部分では貼り床が認められたが、特に硬質の床面は認められない。

竈は東壁の南寄りに設置されている。壁面を60cm掘り込んで構築されており、両袖の幅は1.2mである。両袖部には棒状の円礫を使用した袖石が認められた。燃焼部は幅55cmで、中央部の左寄りに小形の台付臺(11)

2. 厩穴住居



第248図 37・38号住居出土遺物

を伏せて支脚としていた。また、煙道部先端には胴下半部を打ち欠いた甕(12)が利用されていた。

柱穴、貯蔵穴、周溝は認められない。

床下の調査では、竈燃焼部下の掘り込みと、住居中央に床下坑1基が確認された。

出土遺物は少なく、本住居に伴うのは5・7～13の8個体である。このうち5は南壁寄りの床面から、9・10・13は竈掘形から、7・8は覆土中からの出土である。

38号住居 (第246～248図)

N-29グリッドに位置する。南壁に37号住居が重複し、床上18cmまで切られている。

外形は長軸4.46m、短軸4.30mの中形正方形住居で、確認面からの深さは68cmである。北壁に対して南壁が50cm長い台形状を呈する。

床面はほぼ水平に築かれており、特に硬質な面は認められない。

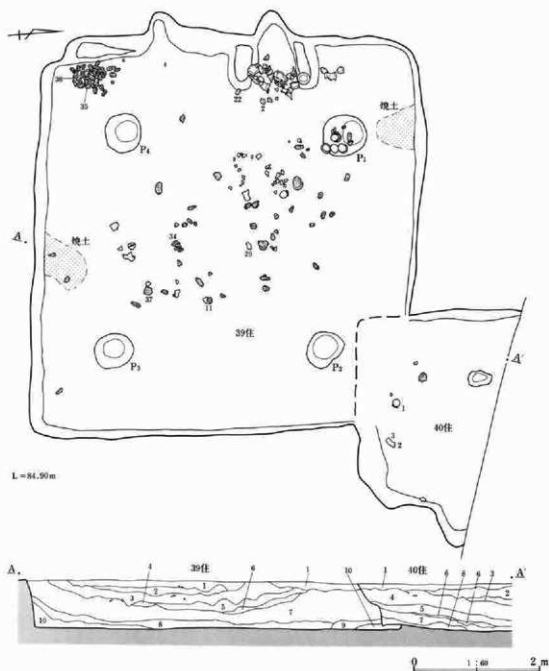
柱穴は住居の対角線上に4本配置されており、各々の芯々を結ぶと住居外形と相似形となる。

竈は東壁に新旧2つが確認された。床面に対して火床がやや高位にある南寄りのが旧竈、中央に設置されているのが新竈である。いずれも袖は取り払われているが、煙道部の状態は良好である。双方とも壁面を50cm掘り込んで構築されており、煙道はほぼ垂直に立ち上がっている。

貯蔵穴、周溝は認められない。

床下の調査では、住居中央部に床下坑2基、周縁部で径50～80cmの掘り込み4カ所、新旧両竈燃焼部下の掘形、P₁・P₂とずれる柱穴2本を各々確認した。床下で確認された柱穴2本は、旧竈使用時の柱穴であろう。

III 古代の調査



- | 39号住居 | 40号住居 |
|--------------------------------------|-----------------------------------|
| 1. 灰褐色土。二ツ岳軽石・焼土粒・炭化物を少量含む。硬質。 | 1. 灰褐色土。二ツ岳軽石・As-Cを少量含む。 |
| 2. 褐色土。地山の黄色シルトのブロックを多く含む。硬質。 | 2. 褐色土。二ツ岳軽石・As-Cを少量含む。 |
| 3. 褐色土。焼土ブロック・炭化物・遺物を多量に含む。 | 3. 灰褐色土と焼土の混土。 |
| 4. 暗褐色土と黒褐色粘質土の混土。 | 4. 灰褐色土。二ツ岳軽石・As-Cを多量に含む。 |
| 5. 黄褐色土。地山の黄色シルトのブロックを多く含む。 | 5. 暗褐色土。地山の黄灰色シルトブロックを多量に含む。 |
| 6. 黄灰色シルト砂層。 | 6. 黄灰色シルト砂層。 |
| 7. 灰褐色土。二ツ岳軽石とAs-Cを多量に含む。 | 7. 暗褐色土。焼土粒を少量含む。 |
| 8. 灰褐色土。7と同質だが、粘性が強い。 | 8. 暗褐色土。地山の黄灰色シルトと黒色粘土のブロックを多く含む。 |
| 9. 黄褐色土。二ツ岳軽石とAs-Cを多量に含む。 | |
| 10. 灰褐色土・黒灰色土（地山）・黄白色シルト（地山）のブロック混土。 | |

第249図 39・40号住居



39号住居新竪の構築に使用された
土器の出土状況

39号住居P₁の根元に重ねて
置かれた杯



また、南東隅に位置する掘り込みは、貯蔵穴の可能性が高い。
出土遺物は少なく、本住居に伴うのは1～4・6の5個体である。このうち3は旧竪前の床面から、2は掘形から、その他は覆土中からの出土である。

39号住居（第249～254図）

N-31グリッドに位置する。北東隅を40号住居と重複し、同住居に切られている。

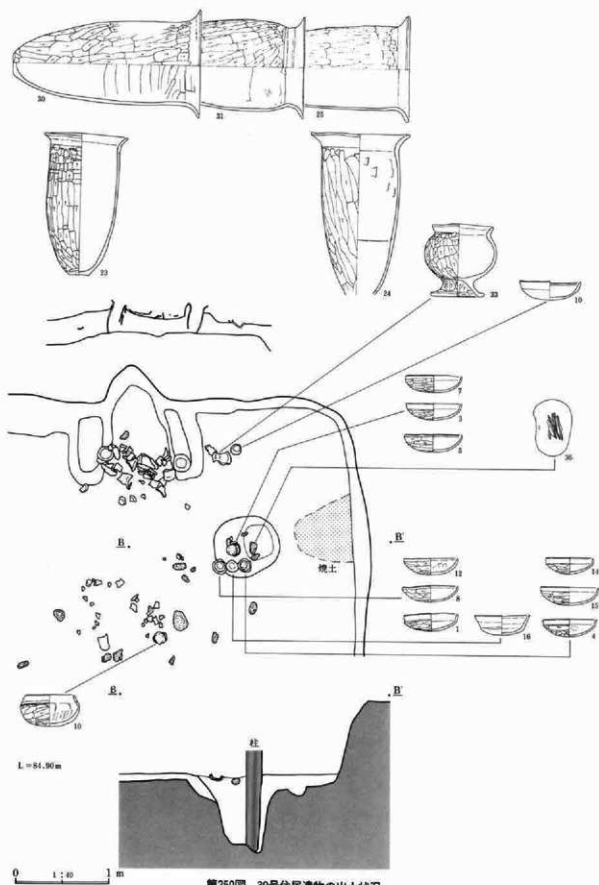
外形は長軸6.24m、短軸6.16mの大形正方形住居で、確認面からの深さは76cmである。外形は平行四辺形状の歪みがわずかに認められる。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、西壁の南半と北壁の位置部に傾斜する部分が認められる。

床面は水平に築かれており、竪前から住居中央部にかけて硬化した面が認められた。また、北壁と南壁の壁直下床面上に、焼土の薄い堆積が認められた。

本住居は覆土中に炭化物を多く含んでおり、特に中層には黄色地山土のブロックと炭化物を多量に含む層が認められた。

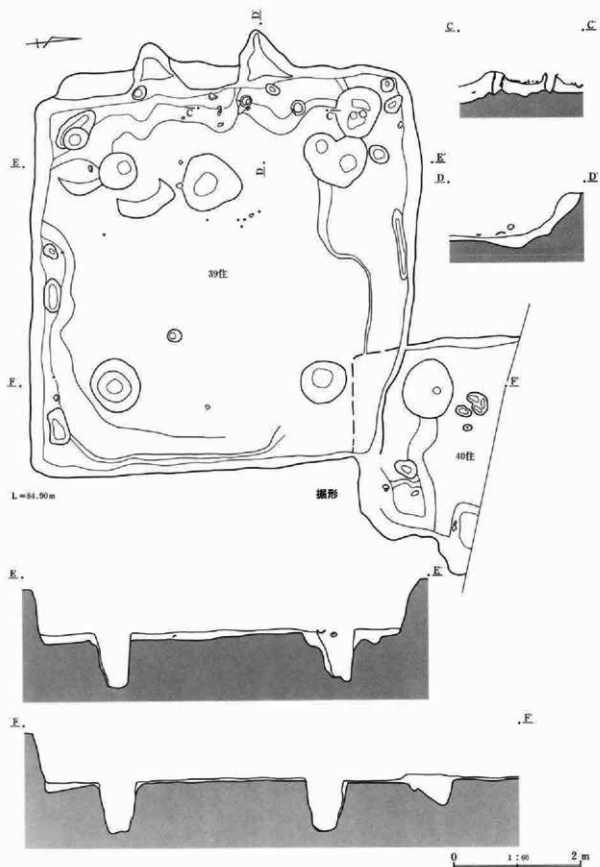
柱穴は住居の対角線上に4本配置されており、各々の芯々を結ぶと住居外形と相似形となる。

III 古代の調査



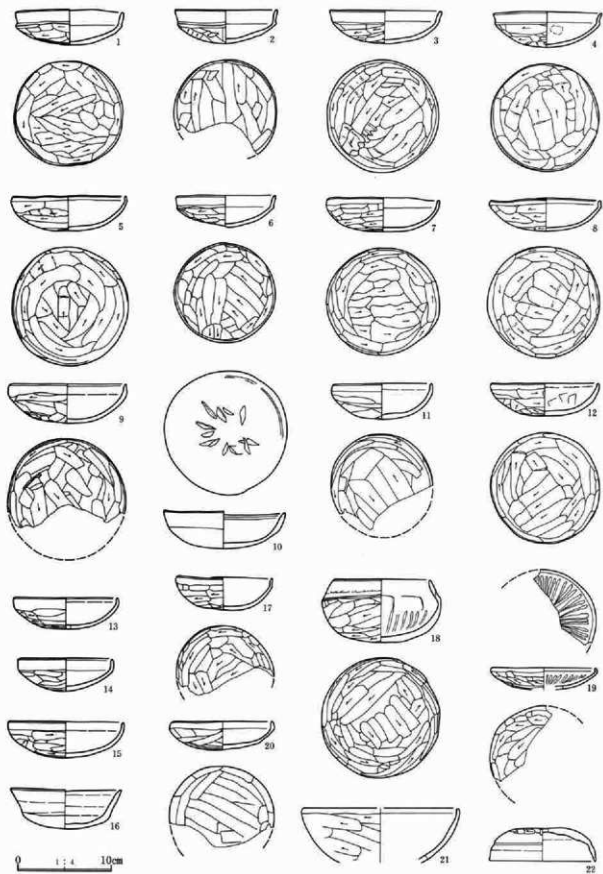
第250図 39号住居遺物の出土状況

2. 竪穴住居

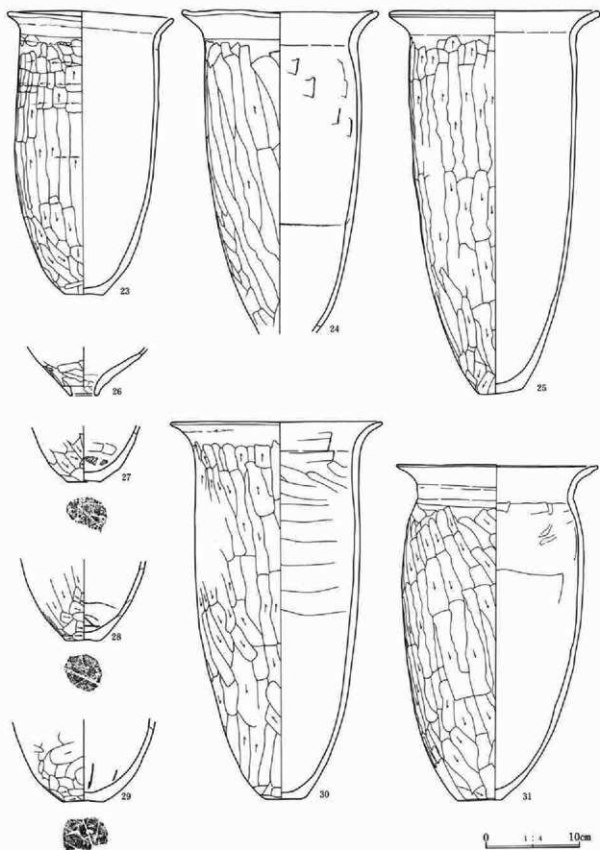


第251図 39・40号住居

III 古代の調査

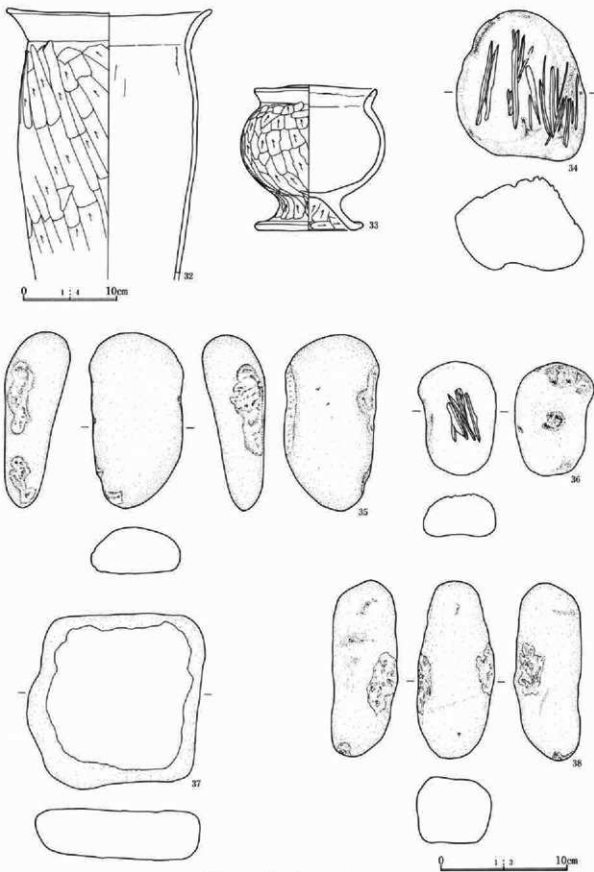


第252図 39号住居出土遺物(1)

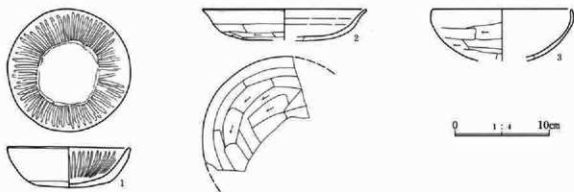


第253图 39号住居出土遺物(2)

III 古代の調査



第254図 39号住居出土遺物(3)



第255図 40号住居出土遺物

竈は西壁に新旧2つが確認された。南寄りの袖がないのが旧竈、中央よりやや北寄りに設置されているのが新竈である。いずれも壁面を40cmほど掘り込んで構築しており、煙道部はほぼ垂直に立ち上がっている。新竈は両袖の幅が1.08mで、袖には長堿1個づつを芯材として設置し、そのうえに長堿3個を連結してのせ、焚き口を構築している。燃焼部は幅45cm、奥行き75cmである。なお、図化されていないが、胴下半を打ち欠いた長堿(32)は竈内から一括出土しており、煙出しに使用されていたものであろう。

貯蔵穴、周溝は認められなかった。

床下の調査では、周縁部に不規則な掘形、北西隅に貯蔵穴状の掘り込み、P₁の南側に柱穴1本が各々確認された。貯蔵穴と柱穴は旧竈使用時のものかもしれない。

遺物は床面を中心に多量に出土している。図化した土器は杯21個、須恵器の蓋1個、甕9個、甕1個、小形の台付甕1個の合計27個体である。このうち、竈の構築に使用されていた甕6個を除くと、床面から出土した土器は13個体である。このうち杯10個体はP₁上面の床に重ねて置かれた状態で、小形の台付甕(33)と杯(10)は竈左脇の床から、杯(2)は竈前の床から各々出土している。また、本住居からは榲状礫61個を含む116個の礫を出土している。このうち53個が床面から出土しており、住居南西隅の床から棒状礫27個を含む円礫35個がまとまって出土、その他中央部床から9個、南壁際から2個が出土している。また、磁石(34)は住居中央の床から、36はP₁内からの出土である。なお、掘形から杯2個(6・9)が出土しており、このうち6は覆土中出土の破片と接合している。

40号住居 (第249・251・255図)

M-31グリッドに位置する。39号住居と重複し、これを切っている。北側半分は路線外のため、外形は不明だが、東西長は3.05mで、確認面からの深さは75cmである。

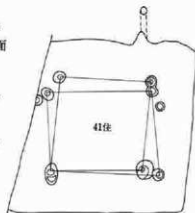
竈は東壁に設置されており、壁面を60cm掘り込んで構築されている。

柱穴、貯蔵穴、周溝は認められない。

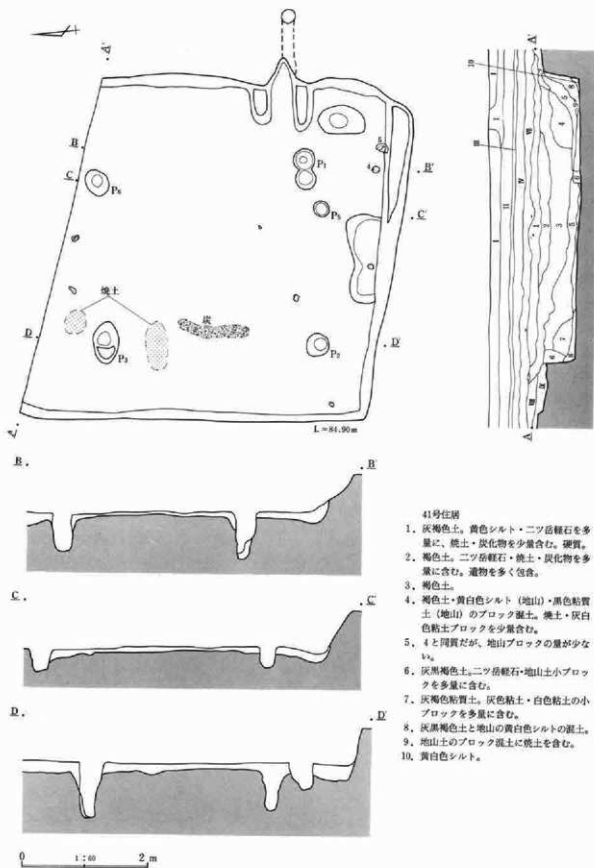
遺物は杯3個が出土しており、このうち1は床面からの出土である。

41号住居 (第256～258図)

M-30グリッドに位置する。東側1mに39号住居が近接する。

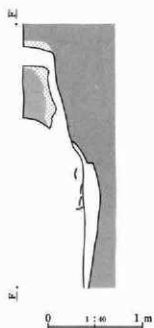
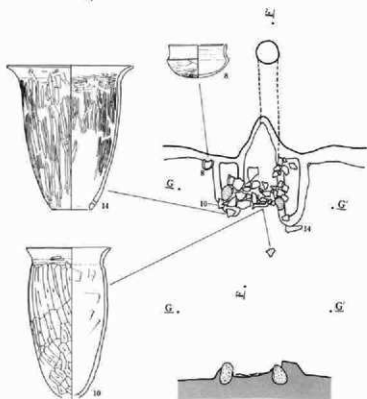
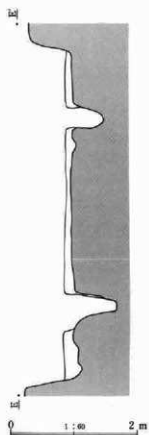
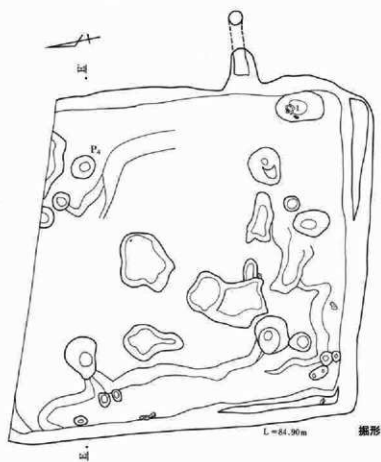


III 古代の調査



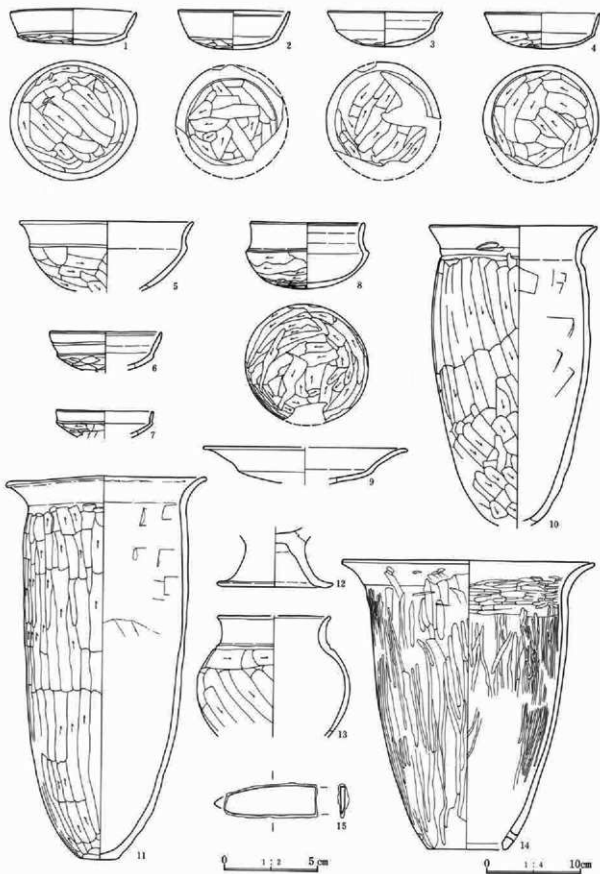
第256図 41号住居

2. 竖穴住居



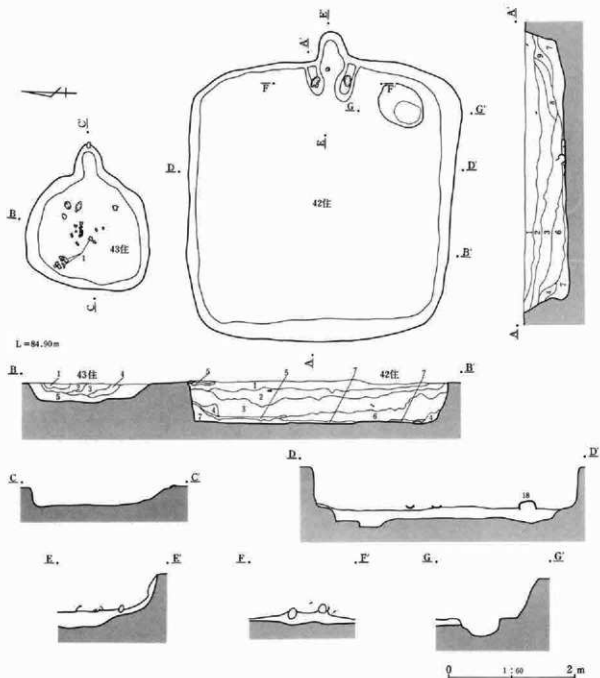
第257图 41号住居

III 古代の調査



第258図 41号住居出土遺物

2. 竪穴住居



43号住居

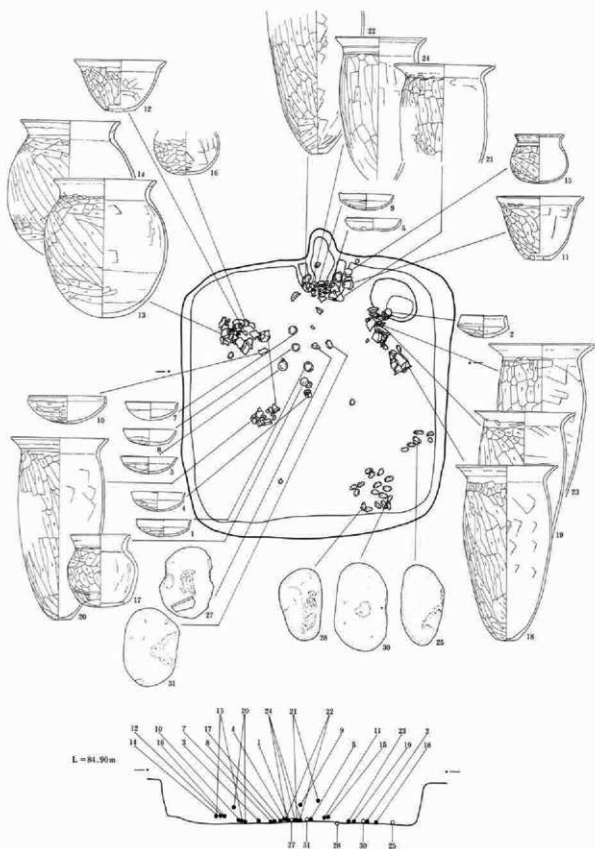
1. 灰褐色土。二ツ岳軽石・As-Cを含む。
2. 褐色土。地山の茶褐色粘土を含む。
3. 黒褐色土。地山の黒色粘土を含む。
4. 地山の黄灰砂質土と灰褐色土の混土。
5. 灰褐色土。1層と同質。

42号住居

1. 褐色土。二ツ岳軽石・As-Cを多量に含む。
2. 褐色土。二ツ岳軽石・As-Cを少量含む。
3. 暗褐色土。黄灰色シルトブロックを少量含む。
4. 暗褐色土と地山の黄灰色シルト砂の混土。
5. 黄灰色シルト砂層。(地山)
6. 暗褐色土。地山の黄灰色シルト砂と黒色粘土を比較的多く含む。
7. 褐色土。
8. 2層と3層の混土。
9. 1層と7層の混土。

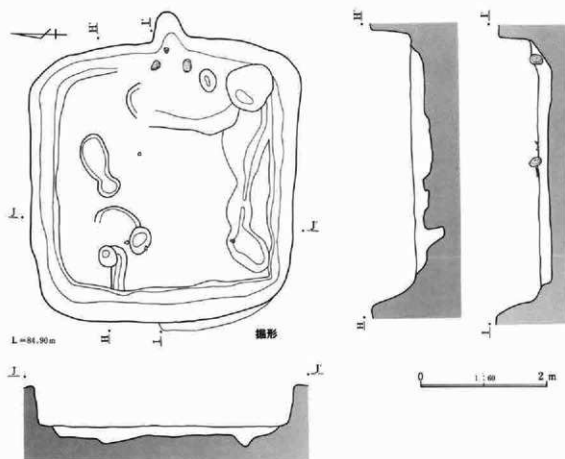
第259図 42・43号住居

III 古代の調査



第260図 42号住居遺物の出土状況

2. 竪穴住居



第261図 42号住居

北壁が路線外となるため長軸は不明だが、短軸長5.26mの大形住居で、確認面からの深さは60cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、南壁は傾斜が認められ、特に東半部は段状を呈している。

床面はほぼ水平で、床面上には焼土・炭化物の分布が数カ所に認められた。

柱穴は6本確認されており、このうち $P_2 \sim P_3$ が主柱穴にあたる。

竈は東壁の南寄りに設置されている。壁面を42cm掘り込んで構築しており、両袖幅は1mで、袖には棒状の円礫が袖石に使用されていた。燃焼部は幅40cm、奥行き1mである。煙道は軸線をやや南にずらし、壁面を横に約80cm掘り込み、上方に垂直に立ち上がっている。排煙口は直径20cmである。煙道部上面と排煙口の地山は焼土化していた。また、竈内から長壺(10)と甕(14)がつぶれた状態で出土しており、これらは竈にかけられたまま遺棄された可能性が強い。

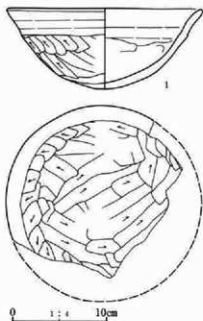
貯蔵穴は南東隅の竈わきに設置されている。長軸75cm、短軸45cmの楕円形を呈し、深さは35cmである。

周溝は認められない。

床下の調査では、不明瞭ながら周縁部をめぐる掘形と中央部に浅い掘り込み、および3本の柱穴を確認した。このうち、柱穴 $P_6 \cdot P_7$ としたものは $P_1 \cdot P_4$ と組み合うものと思われる。

遺物は覆土中を中心に出土しており、そのなかから14個の土器と鉄器1点を図示した。このうち、1は貯蔵穴覆土から、4は南壁際の床面から、8は竈左の床面から、10・14は竈内からの出土、その他は覆土中からの出土である。他に棒状礫12点を含む円礫14点が出土しており、そのうち7点は床面からの出土である。

III 古代の調査



第262図 43号住居出土遺物

42号住居 (第259～256・263～266図)

M-29グリッドに位置する。西壁に19号掘立が接し、北側1m以内に43号住居が近接する。

外形は長軸4.44m、短軸4.20mの中形正方形住居で、確認面からの深さは63cmである。西壁と南壁は上半部が外傾している。

床面はほぼ水平で、特に硬質な部分は認められない。

竈は東壁の中央に設置されている。壁面を30cm掘り込んで構築されており、両袖は幅80cmで、棒状の円礫を袖石に使用している。燃焼部は幅40cm、奥行き90cmで、中央部の左寄りに棒状の円礫を使用した支脚が設置されていた。煙道部はほぼ垂直に立ち上がっている。燃焼部に対して焚き口の幅が狭く、20cmである。

貯蔵穴は南東隅に設置されている。長軸80cm、短軸60cmの楕円形を呈し、深さは28cmである。

柱穴、周溝は認められない。

床下の調査では、各壁下から10～20cmほど内側を、全面にわたって深さ15cmほど掘り込んでいることが判明した。この面にはさらに

柱穴・溝状の落ち込みが認められた。

遺物は床面を中心に多量に出土しており、土器は杯11個、甕2個、丸胴の壺2個、小形の甕3個、長胴壺7個の合計25個体を図示した。これらは数か所にブロック状態で出土しており、散乱した状態で出土したものはない。その状態を第260図に示した。床面から出土したものが多く、覆土中出土のものと同接した例(14・21)もあり、また北西隅の13～15・17のブロックは北側で床から13cm浮いており、住居中央に向かって傾斜する状況を示している。住居中央部の杯類も床面から完形品で出土しているが、生活時の状況を示しているとは考えにくい。これらは第一次埋没度流入後、中央部の床がまだ見えている段階で廃棄されたものではなかろうか。また、竈前出土の一群には長甕3個が含まれるが、本遺跡では袖石使用の竈の焚き口に甕を使用する例はなく、また、竈にかけた土器とも思われないことから、これらは廃棄されたものと考えられる。礫は棒状礫24個を含む総数36個が出土しており、このうち30点が床面から、残り6点は床から4cm浮いた状態で出土している。棒状礫はいずれも床面に密着して出土しており、住居南西隅から17個、その横から7個がまとめて出土している。これらのなかから、特に加工痕・使用痕の明瞭なもの7点を図示した。

43号住居 (第259・262図)

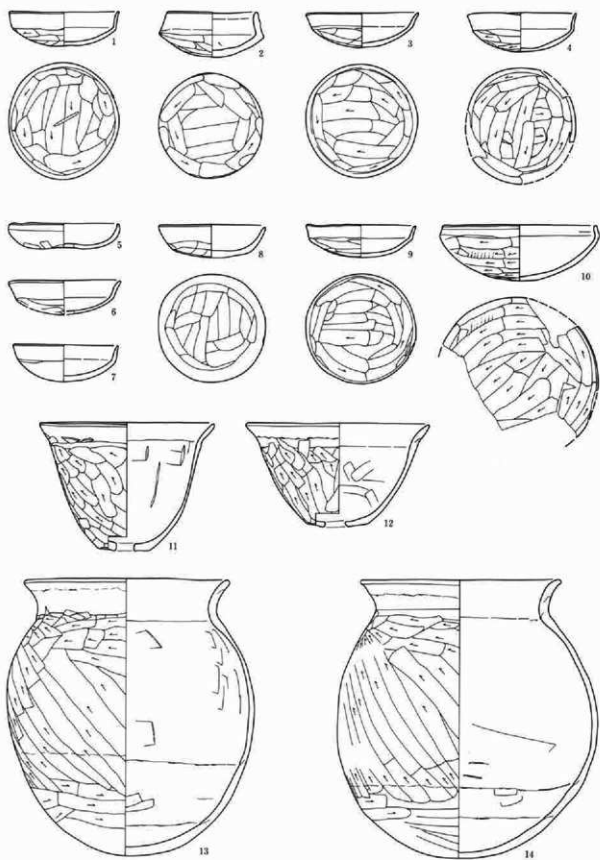
M-29グリッドに位置する。42号住居の北側60cmに近接する。

外形は長軸2.00m、短軸1.86mの方形状を呈する超小形住居で、確認面からの深さは28cmである。壁はなだらかに傾斜しながら立ち上がっている。外形とおよび他の住居に較べて掘り込みが浅い点など、31号住居と共通する部分が多い。

竈は東側の中央に設置されており、42号住居と同一軸となる。壁面を45cmほど掘り込んで構築しており、掘り込みの幅は43cmである。

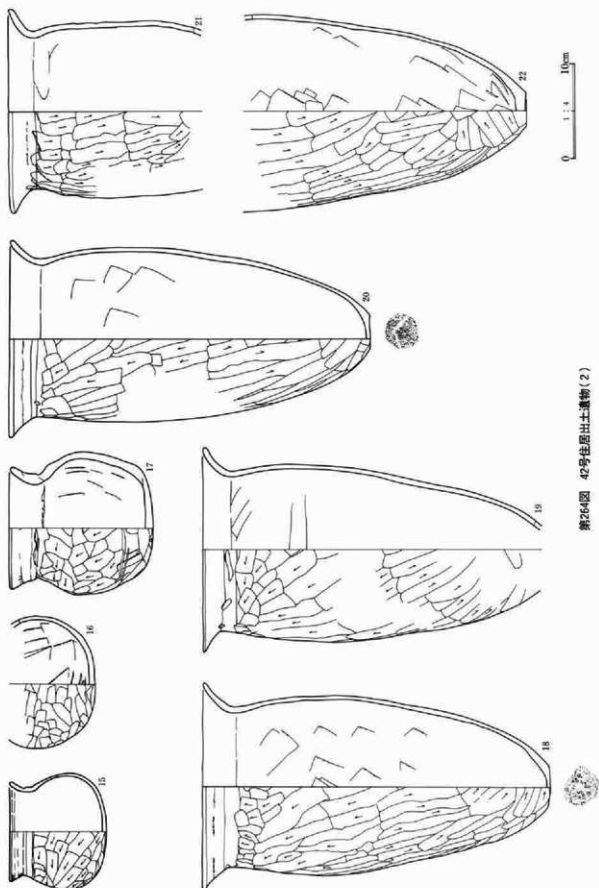
床はほぼ水平に築かれているが、硬質な面は認められなかった。

柱穴、貯蔵穴、周溝は認められない。



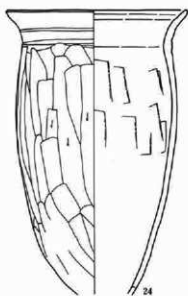
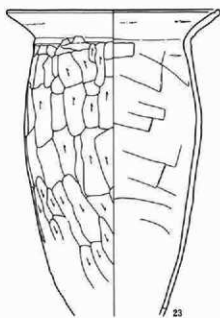
第263图 42号住居出土遺物(1)

III 古代の調査

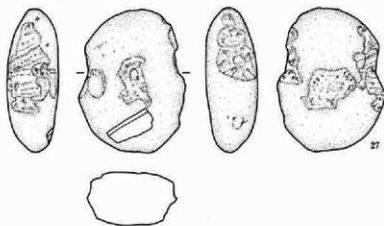
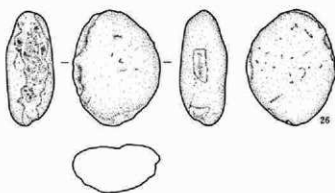
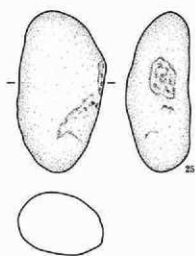


第264図 42号住居出土遺物(2)

2. 竪穴住居



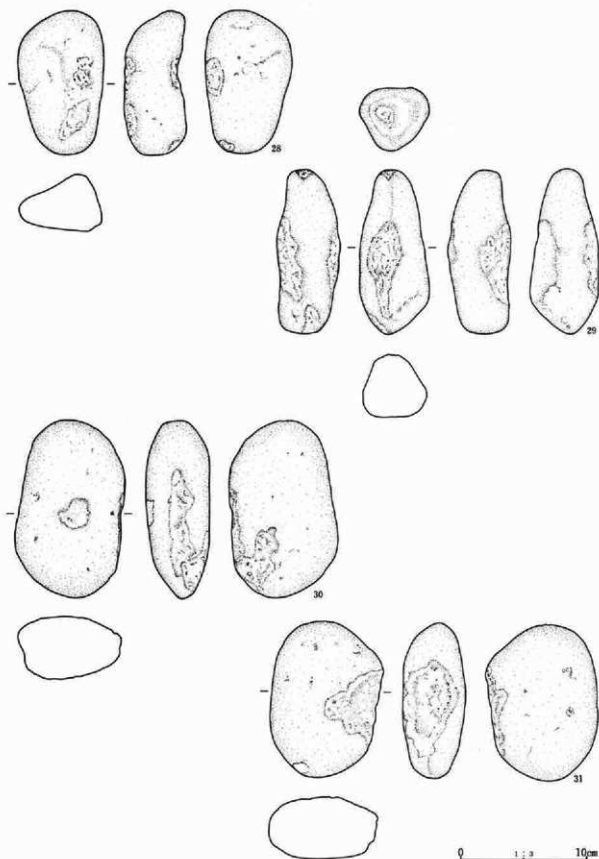
0 1:4 10cm



0 1:3 10cm

第265图 42号住居出土遺物(3)

III 古代の調査



第266図 42号住居出土遺物(4)

2. 竪穴住居

遺物は土器と円礫数点が覆土下層より出土したが、量は少なく、図化したのは床面上5cmから出土した杯1個(第262図1)のみである。

44号住居 (第267・268図)

N-28グリッドに位置する。21号掘立、46号住居と重複し、46号住居を切っている。また、45号住居が西側1mに近接している。

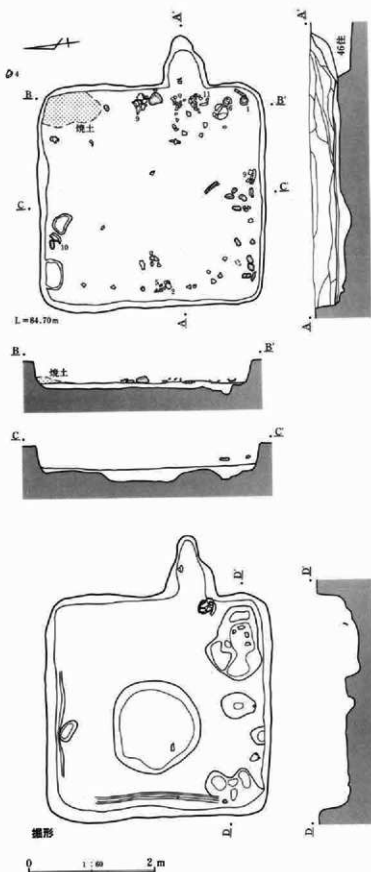
外形は長軸3.58m、短軸3.54mの小形正方形住居で、確認面からの深さは35cmである。

床面は水平で、竈前から住居中央部を中心に、所々に硬質な面が認められた。また床面には炭化物や焼土の散布がいたる所に認められ、炭化材の出土も数点あることから、焼失家屋と考えられる。

竈は東壁の南寄りに設置されている。壁面を95cm掘り込んで構築されており、掘り込みの幅は77cmで、煙道部は緩やかな傾斜で立ち上がっている。掘り込みの右手前から、口縁を下にしてつぶれた状態で出土した長甕(11)は、袖の芯材として使用されていたものであろう。

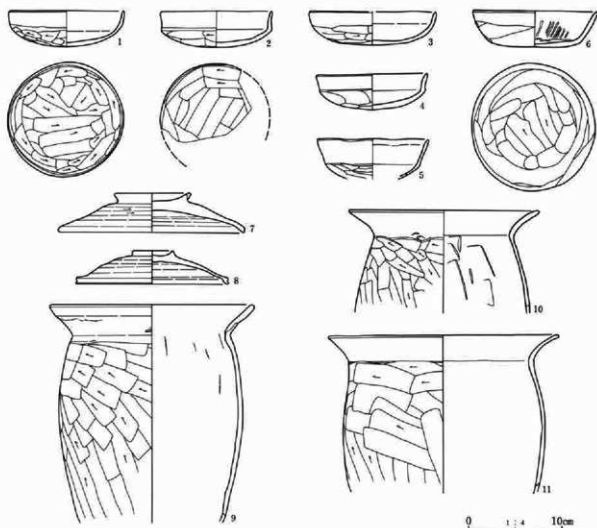
床下の調査では、中央部西寄りに円形の床下坑1基、南東隅に楕円状の落ち込み、北壁下と西壁下に周溝状の溝を各々確認した。南東隅の落込は貯蔵穴の可能性が高い。

遺物は竈周辺の床面と壁際の覆土中を中心に出土している。土器は杯6個、須恵器蓋2個、甕3個の11個体を図示した。このうち、1・6・7は竈右側の床面から出土、10は北壁下床面から出土、その他は覆土中からの出土であ



第267図 44号住居

III 古代の調査



第268図 44号住居出土遺物

る。襖は棒状礎を中心に15点が覆土中を中心に出土している。

45号住居 (第269～272図)

N-27グリッドに位置する。21号掘立と一部が重複するが、切り合い関係は不明である。また東側1mに44号住居が近接する。

外形は長軸5.40m、短軸5.38mの大形正方形住居で、確認面からの深さは62cmである。

床面は平坦で水平に築かれており、特に硬質な面は認められない。

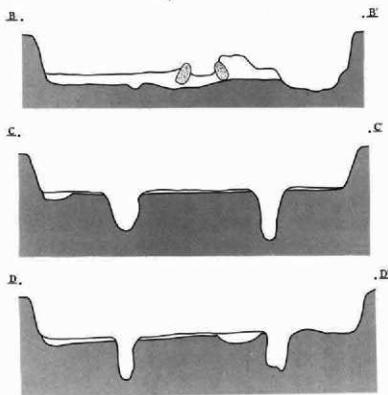
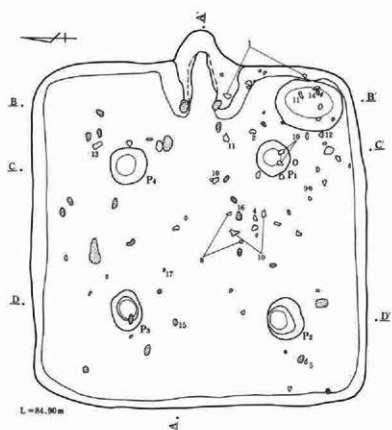
柱穴は住居対角線上に4本配置しており、各々の芯々を結ぶと、住居外形と相似形になる。なお、P₂では埋土断面に柱痕を示す堆積が確認されている。

竈は東壁のほぼ中央に設置されている。壁面を45cm掘り込んで構築されており、袖の幅は1.4mである。両袖には先端に棒状の円礎を芯材として使用している。燃烧部は幅45cm、奥行き1mで、煙道は段をもって緩やかな傾斜で立ち上がっている。なお、竈周辺の床には、竈構築に使用した黄白色粘質土が貼られている。

貯蔵穴は南東隅に設置されている。長軸1.05m、短軸0.75mの楕円形を呈し、深さは37cmである。

周溝は認められない。

2. 竪穴住居



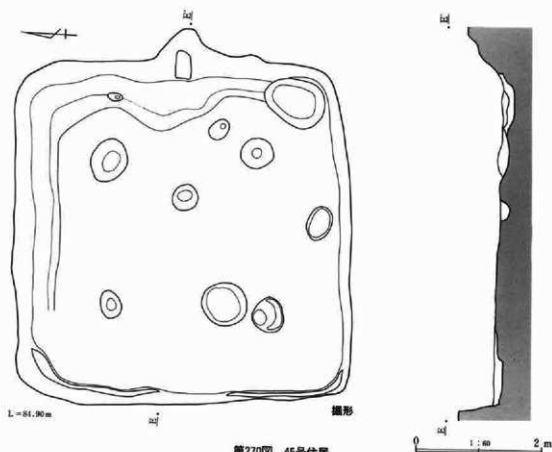
0 1:60 2m

45号住居

1. 暗褐色土と赤褐色砂層の混土。
2. 暗褐色土。赤褐色砂層と二ツ岳軽石を多量に含む。
3. 黒褐色土。二ツ岳軽石と炭化物を含む。
4. 暗褐色土。二ツ岳軽石・As-C・焼土粒を多く含む。
5. 黒褐色土。混入物は4層と同様。
6. 4層と7層の混土。
7. 灰白色粘土。下部に焼土粒を含む。
(崩壊したカマド材)

第269図 45号住居

III 古代の調査

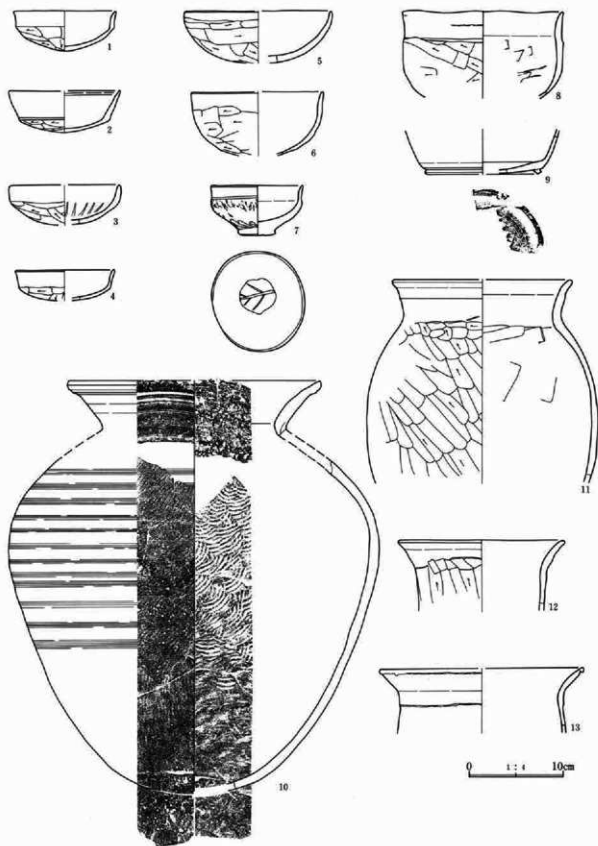


第270図 45号住居

床下の調査では、周縁部に幅50cm前後、深さ10cm前後の掘形、南壁下中央で長軸55cm、短軸38cm、深さ15cmの楕円形の落ち込み、P₁の北側で直径70cm、深さ13cmの円形を呈する皿状の落ち込み等を確認した。周縁部の掘形は全周するが、南壁下と西壁下では掘り込みが浅く、不鮮明である。南壁下中央の落ち込みはその位置や形状から、梯子穴の可能性が高い。なお、西壁下には壁と掘形とに若干のずれが認められる。

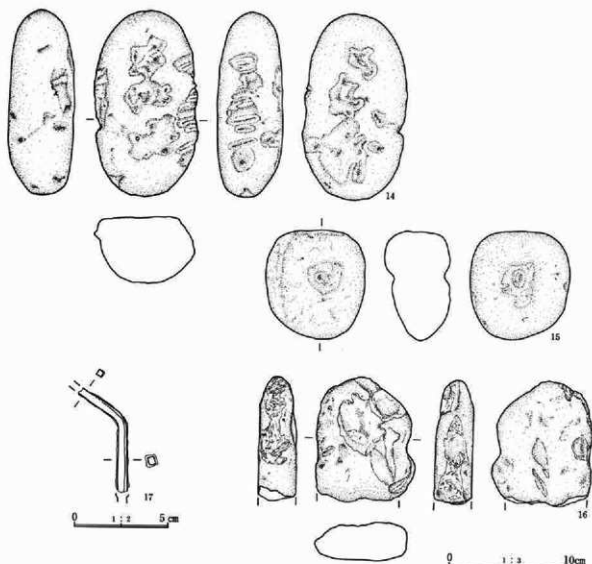
遺物は覆土上層を中心に出土している。土器は杯8個、須恵器杯1個、甕3個、須恵器甕1個の計13個体を図示したが、いずれも覆土中からの出土である。土器は破片で散乱した状態で出土したものが多く、例えば10は床上2.4cm出土のものから床上55cm出土のものまでが接合の中に含まれている。礫は棒状礫13個を含む総数37個の円礫が出土しており、そのうち11個は床面から出土している。この他に、折れ曲がった鉄鍬の基が1点、覆土中より出土している。





第271図 45号住居出土遺物(1)

III 古代の調査



第272図 45号住居出土遺物(2)

46号住居(第273~275図)

N-28グリッドに位置する。西側の44号住居と重複しており、これに切られている。

長軸5.19m、短軸4.90mの南北にやや長い中形正方形住居で、確認面からの深さは55cmである。

床面は平坦で、ほぼ水平に築かれている。

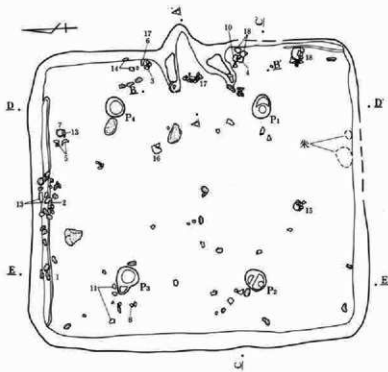
柱穴は4本確認されたが、いずれも住居対角線上からずれている。柱間は $P_1 \cdot P_2$ 間2.75m、 $P_3 \cdot P_4$ 間2.70m、 $P_1 \cdot P_4$ 間2.35m、 $P_2 \cdot P_3$ 間2.15mで、各々の芯々を結ぶと東西に長い長方形となり、住居外形とは長軸が異なっている。

竈は西壁のほぼ中央に設置されている。壁面を40cm掘り込んで構築しており、両袖の幅は1.05mほどである。左袖は竈の軸線に沿ってのび、先端に甕(16)を伏せ芯材としているが、右袖は北側に大きくずれており、芯材も見あたらない。火床の状況から判断して、本来の袖は取り払われたものと考えられる。煙道部は比較的急傾斜で立ち上がっている。

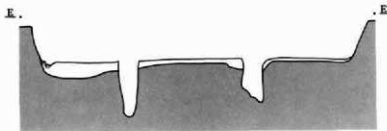
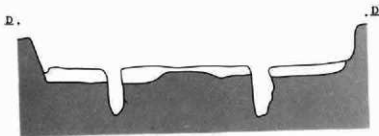
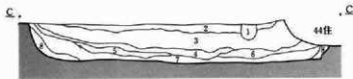
貯蔵穴は認められない。

周溝は南壁下のみに認められた。幅10cm、深さ5cmである。

2. 竪穴住居



L=84.70m



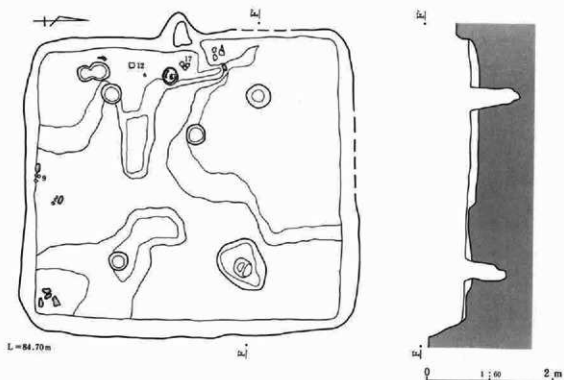
0 1:60 2m

46号住居

1. 灰褐色土。ニツ岳軽石を多量に含む。
2. 暗褐色土。ニツ岳軽石と焼土・炭化物を少量含む。
3. 灰褐色土。ニツ岳軽石・As-Cの他に、地山の黒色・褐色粘土小ブロックを均質に含む。
4. 暗褐色土。裏入物は3層と同様だが、粘土小ブロックの量が多い。
5. 褐色土。
6. 灰褐色土。ニツ岳軽石を少量含む。
7. 灰褐色土。地山の黒色・褐色粘土小ブロックを多量に含む。
8. 灰褐色土と黒色粘土の混土。

第273図 46号住居

III 古代の調査

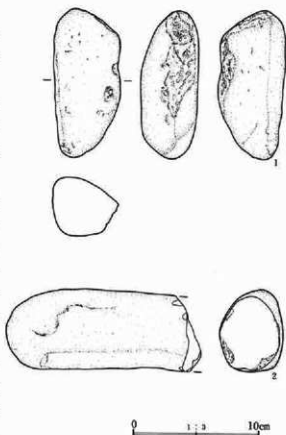


第274図 46号住居と出土遺物

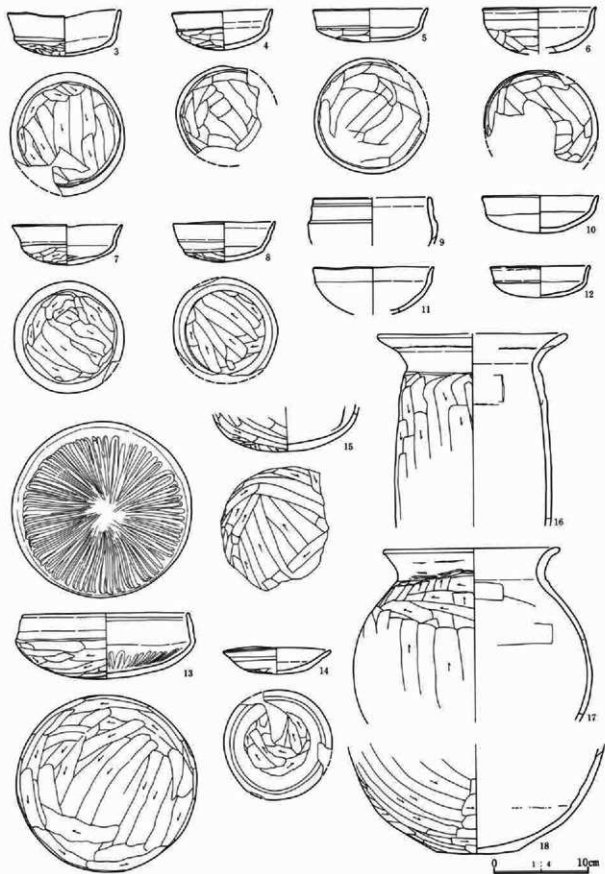
床下の調査では、北壁下から南西隅にかけて、また南東隅から中央部にかけて、深さ10～15cmの不規則な掘形が確認された。

遺物は覆土下層を中心に、散在した状態で出土している。土器は杯15個、長壺1個、丸胴の甕2個の合計18個体を図化した。このうち床面から出土したのは8・11の2個体で、床上5cm以内から出土したのは3・4・7・10・14の5個体である。5は床面出土と床上4cmと17cm出土の接合、18は床面出土と床上7cm出土の接合である。9・12・17は掘形中からの出土である。その他は覆土中から出土している。竈は棒状竈39個を含む総数47個が出土しており、このうち21個は13の一部とともに南壁際に投げ入れられた状態で出土、7点は南東隅掘形中から出土している。

なお、住居北壁下の床面上10cmほどの土層中に、朱が確認された。朱は2カ所に分布しており、1つは直径30cmほどの範囲に、もう1つはそれから10cmほど離れて直径10cmの範囲に認められた。化学分析の結果を参照されたい。

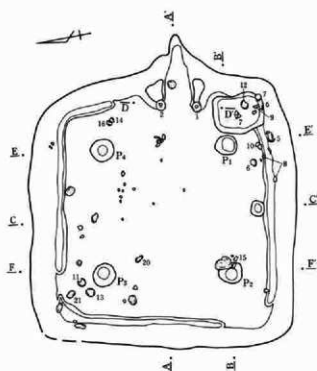


2. 整穴住居

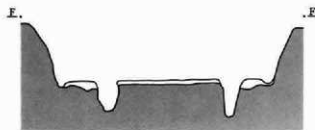
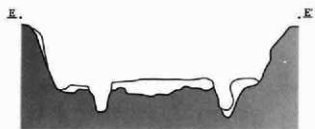
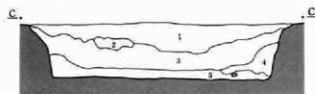


第275图 46号住居出土遺物

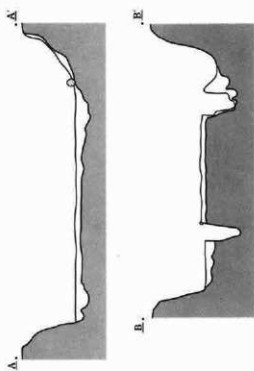
III 古代の調査



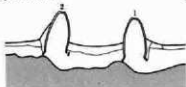
L=84.70m



0 1:00 2 m



D, L=84.10m



0 1:200 1 m

47号住居

1. 暗灰褐色砂質土。二ツ齒軽石・As-Cを多量に、焼土・炭化物を少量含む。
2. 黄白色シルト砂層。
3. 暗灰褐色土と黄白色シルト砂の混土。シルト砂はラミナ状を呈する部分が多く、地山の黒色粘質土を少量含む。
4. 暗灰褐色土。黄白色シルト砂を少量含む。
5. 黒灰褐色土。黄白色シルト砂と炭化物を少量含む。

第276図 47号住居

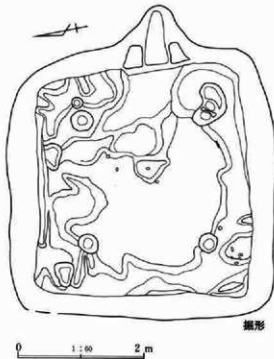
47号住居 (第276~278図)

M-22グリッドに位置する。

長軸3.56m、短軸3.50mの小形正方形住居で、確認面からの深さは85cmである。壁は全周におたって35~40cmの幅で外傾しており、また覆土中央には多量のシルト砂を含むブロック混土が認められた。このシルト砂は住居確認の島に動き込まれている土層であり、確認面がほぼ当時の旧地表であることを考慮すると、本住居は人為的に埋めもどされた可能性が高い。床面は平坦で、ほぼ水平に築かれている。

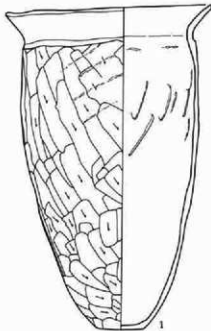
柱穴は住居対角線上に4本配置されている。各々の芯々を結ぶ距離はいずれもほぼ2mで、住居外形と相似形をしている。

竈は東壁の中央よりやや南寄りに設置されている。地山を70cm掘り込んで構築しており、両袖の幅は1.05mである。袖の先端部には竈(1・2)を1個ずつ伏せて芯材としている。燃焼部は幅50cmで、中央の左寄りに棒状の円隙を1個設置して支脚としている。煙道部は急傾斜で立ち上り、煙出しはほぼ垂直となる。

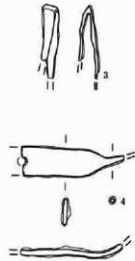
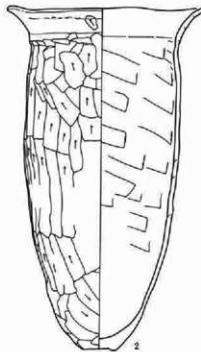


平面形

0 1:00 2 m



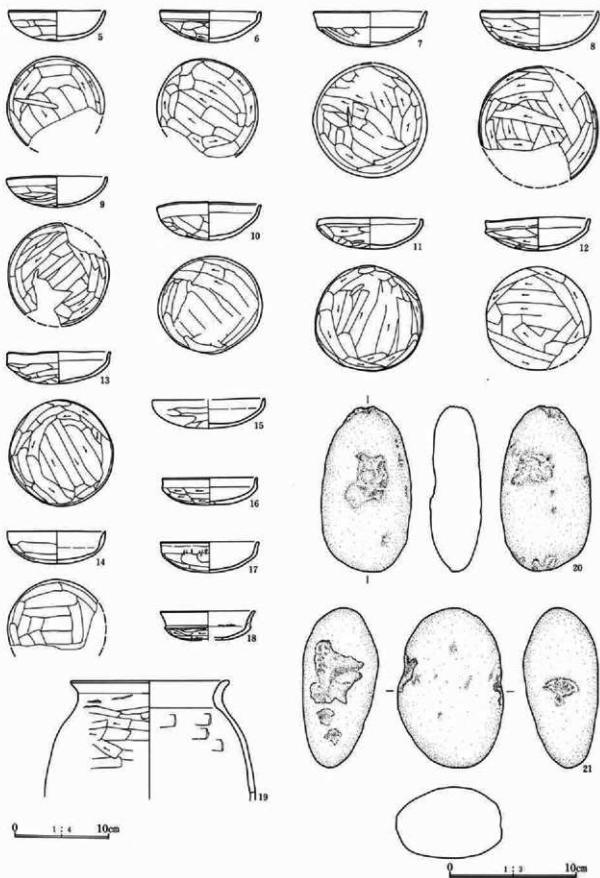
0 1:4 10cm



0 1:2 5cm

第277図 47号住居と出土遺物(1)

III 古代の調査



第278図 47号住居出土遺物(2)

貯蔵穴は南東隅に設置されている。長軸80cm、短軸60cmの長方形を呈し、深さは35cmである。

周溝は幅15cm、深さ7cmで、竈周辺を除き、2カ所の断続部分を含んでめぐっている。なお、南壁下中央で、周溝に接して梯子穴を確認した。直径23cmの円形を呈し、深さは15cmである。

床下の調査では、周縁部をめぐる掘形と、P₁に接してもう1本の柱穴を確認した。

遺物は周縁部の覆土中を中心に出土している。土器は甕袖に使用されていた長甕2個、杯13個、丸胴の壺1個の合計17個を図化した。このうち15が床面から出土しているが、その他は第一次埋没土中からの出土である。礫は棒状礫4個を含め総計10個が出土しており、このうち3個は床面からの出土である。その他に鉄製品2点(3・4)が出土しており、4は床面から、3は覆土からの出土である。

48号住居 (第279図)

L-23グリッドに位置する。北側5.5mに同期の1号特殊遺構がある。

長軸3.70m、短軸3.64mの小形正方形住居で、確認面からの深さは76cmである。壁は上半部が全周にわたって、45~70cmの幅で大きく外傾しており、47号住居と同じ状況が認められる。また、シルト砂は認められないものの、覆土中層はブロック混土で占められていた。

床はほぼ平坦で、水平に築かれており、特に硬質な面は認められない。

竈は東壁の中央よりやや南寄りに設置されている。壁面を70cm掘り込んで構築しており、両袖の幅は1.10mである。燃焼部の幅は50cmである。煙道は火床から10cmほど上位のレベルで真横に掘り込み、上方から垂直に掘り込んだ孔と連結している。煙道部の直径は20cm前後で、煙出し口は壁外1.05mに位置する。煙出し付近の埋没土に認められる竈構築粘土は、煙出し口の用材であろう。なお、覆土の5・6層に竈構築粘土が多量に含まれることから、竈は埋没時に崩壊していたものと考えられる。

貯蔵穴は竈右袖に接して設置されている。直径55cmの円形を呈し、深さ12cmで皿状に掘り込んでいる。

柱穴、周溝は認められない。

遺物は覆土下層から少量出土している。1は南壁下の床面直上から、2は北東隅の床面直上からの出土である。他に円礫19点が出土している。

49号住居 (第280~282図)

K-24グリッドに位置する。

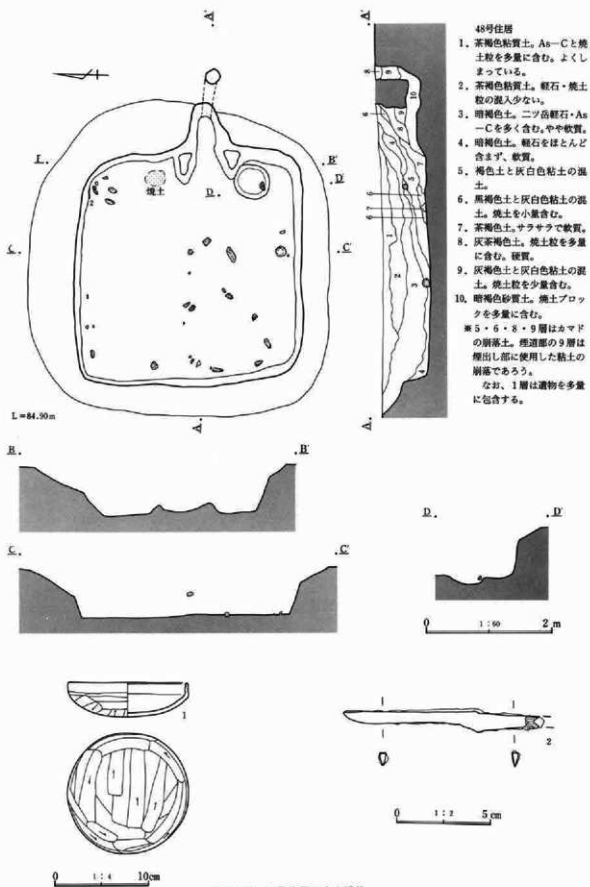
長軸4.72m、短軸4.32mの中形正方形住居で、確認面からの深さは87cmである。壁は上半部が全周にわたって0.2~1mの幅で外傾しており、覆土中層にはブロック混土の堆積が認められる。

床はほぼ平坦で、特に硬質な面は認められない。

柱穴は住居対角線上に4本配置されているが、P₁とP₂の位置はかなりずれている。また、南壁下中央に直径36cm、深さ22cmで

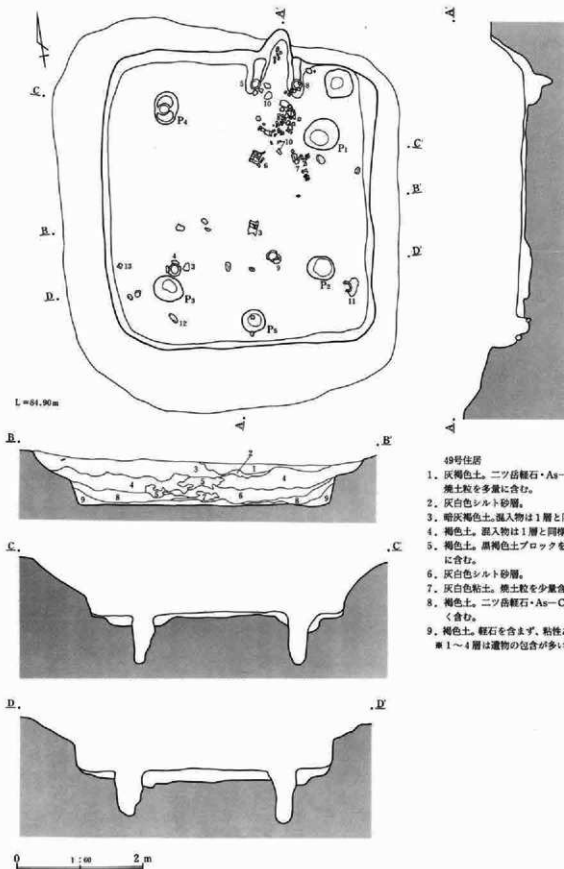


III 古代の調査



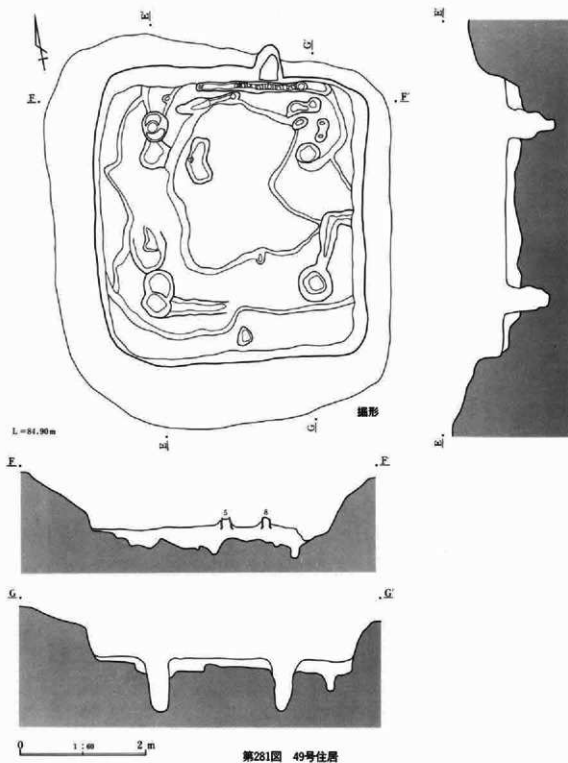
第279図 48号住居と出土遺物

2. 竪穴住居



第260図 49号住居

III 古代の調査

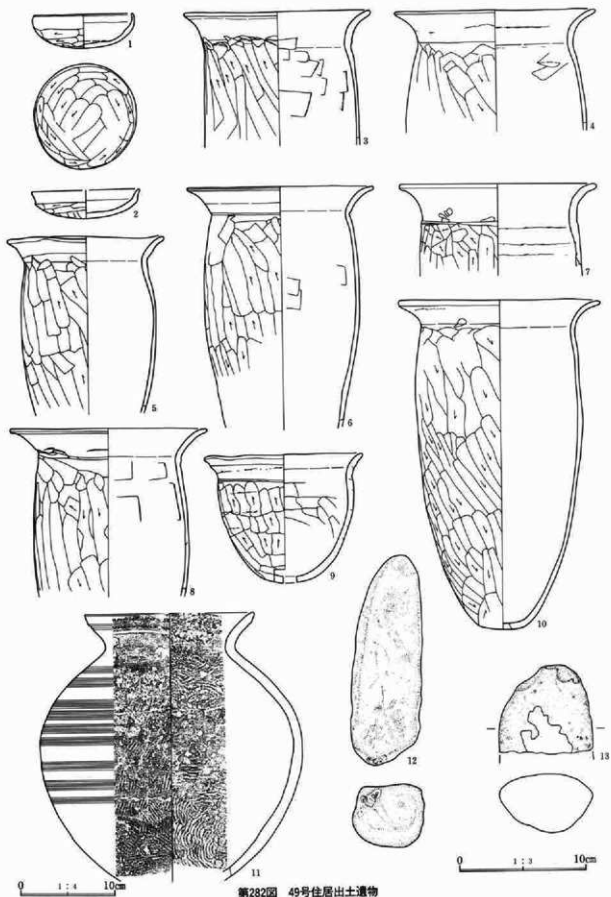


第281図 49号住居

円形に掘り込んだ梯子穴を確認した。

竈は北壁中央よりやや東寄りに設置されている。壁を40cm掘り込んで構築しており、両袖の幅は90cmである。袖は先端部に長礎（5・8）を伏せて芯材としている。燃焼部は幅45cmで、煙道は急傾斜で立ち上がっている。

貯蔵穴は北東隅に設置されている。一辺43cmの方形状を呈し、深さは17cmである。



第282図 49号住居出土遺物

III 古代の調査

床下の調査では、周縁部をめぐる掘形と、北壁下に溝状の掘り込みを確認した。北壁下の掘り込みは、幅12cm、深さ25cmの溝を、竈を中心に2.17mにわたって掘り込んでおり、底面には掘削時の跡痕が明瞭に残っていた。

遺物は覆土下層と床面を中心に出土している。土器は杯2個、長胴甕7個、甕1個、須恵器壺1個の合計11個体を図化した。長胴甕のうち、5・8は竈の袖芯材に使用されていたものである。6・7・10は竈前の床につぶれた状態で出土しており、竈用材あるいは竈にかけられていた可能性が高い。4はP₃の横の床面から、9はP₂横の床面から各々出土している。その他は覆土中からの出土である。円礫は12点出土しており、このうち9点は床面からの出土である。

3. 掘立柱建物

古代の掘立柱建物は合計17棟を検出した。内訳は1×2間が2棟、2×2間が7棟、2×3間が5棟、3×3間が1棟、不明が2棟で、2×2間と2×3間が主体となるごく一般的なあり方を示している。配置は4・5区の住居群が集中する部分に付随するような状態を示しており、本遺構のみが集中するようなあり方は認められない。本遺構同士が重複するのは1例のみであるが、住居等と重複するものは6例ある。本遺構は時期を確定することが難しい遺構であり、本遺跡でも確証の得られたものは少ない。なお、9・12・14・18・19号では、柱内から遺物が出土している。

6号掘立 (第283図)

5区S-36グリッドに位置する。西側の一部を1号住居と重複するが、切り合い関係は不明である。東西3間(5.0cm)、南北3間(4.9cm)のほぼ正方形である。柱間はP₁~P₂間とP₃~P₄間が1.5m、P₂~P₃間が1.8m、P₄~P₅間が1.55m、P₆~P₇間が1.65m、P₈~P₉間はP₂~P₃間と同じ1.8mで、北辺と南辺の柱間是对応関係にある。柱掘形はいずれもほぼ円形で、P₃で直径47cmである。深さは最も浅いP₅が16cm、最も深いP₇で46cmである。なお、柱痕は検出されていない。

7号掘立 (第284図)

5区Q-37グリッドに位置する。南側1mに8号掘立柱建物が近接する。形状は西辺と南辺が3.5m、北辺が3.8m、東辺が3.85mのやや歪んだ台形状を呈す。北辺と西辺の間柱はほぼ等間隔に位置するが、南辺はかなり片寄っており、東辺では検出できなかった。なお、北辺のP₇は芯々線より30cm外側に位置している。柱掘形は重複するP₃を除いてほぼ円形を呈し、平面形は小さいが深いものが多い。P₅は直径40cm、深さ80cmである。

8号掘立 (第284図)

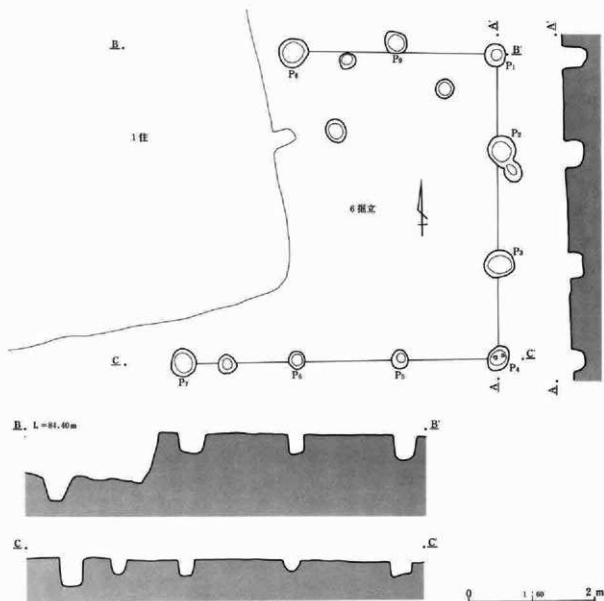
5区R-37グリッドに位置する。形状は西辺4.6m、東辺5.0m、南・北辺4.5mの整った台形状を呈する。西・東辺の間柱は各々等分の位置にあり、長辺にあたる東辺の間柱(P₂)は、P₁・P₃の芯々を結ぶ線上より30cmほど外側に設置されている。また、南・北辺の間柱(P₄・P₆)は、西辺から1.8mの位置で対応している。柱掘形はいずれも大きく、各辺とも間柱が他よりもやや深い構造が看取される。平面形は円形と楕円形(P₂・P₃・P₄)とがあり、規模はP₃で直径45cm、深さ36cm、P₄で長軸73cm、短軸55cm、深さ58cmである。なお、本遺構中央部で検出された礎のつまった柱が併うかどうかは不明である。

9号掘立 (第285図)

4区P-30グリッドに位置する。東西2間(3.50m)、南北2間(3.50m)の正方形の建物である。柱間は各辺ともほぼ1.6mと1.9mに割りふられているが、東・南辺では向かって左側に1.6mをとるのに対し、西・北辺ではP₁から各々1.6mをとっている。柱掘形はいずれもほぼ円形で、P₁で直径50cm、深さ63cmである。明確な柱痕は確認できなかったが、P₁・P₂では柱を据える段状の掘り込みが検出された。なお、P₂の埋没土中から小形の壺(1)が出土している。

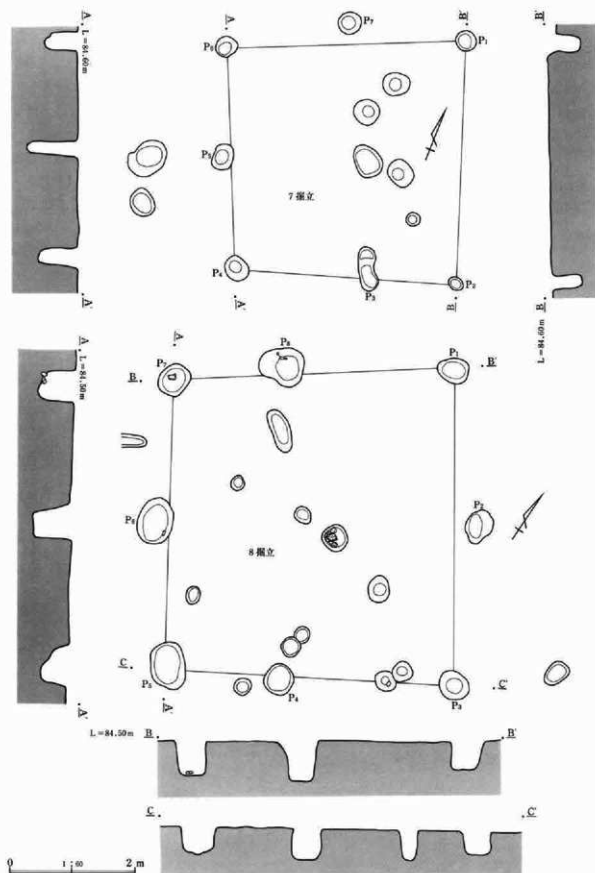
10号掘立 (第285図)

Q-30グリッドに位置する。東西2間(2.60m)、南北1間(1.90m)の長方形の建物である。南・北辺の間柱はいずれも二等分(1.30m)の位置にある。小形の建物であるが柱掘形は円形でしっかりしており、P₂



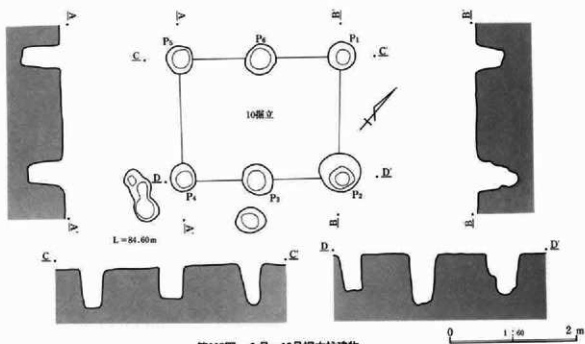
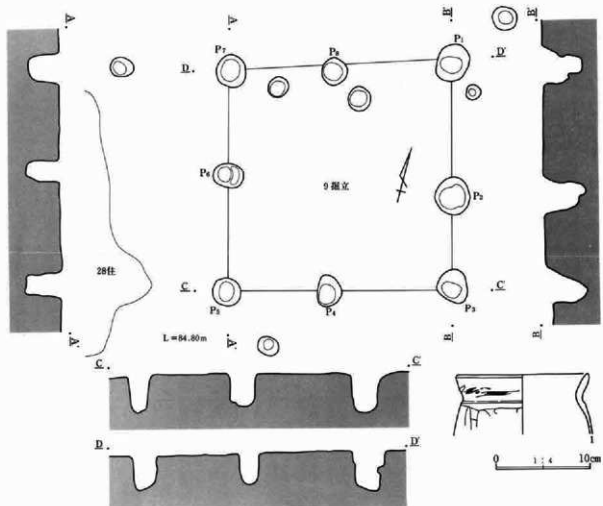
第283図 6号掘立柱建物

III 古代の調査



第284図 7号・8号根立柱建物

3. 掘立柱建物



第285图 9号・10号掘立柱建物

III 古代の調査

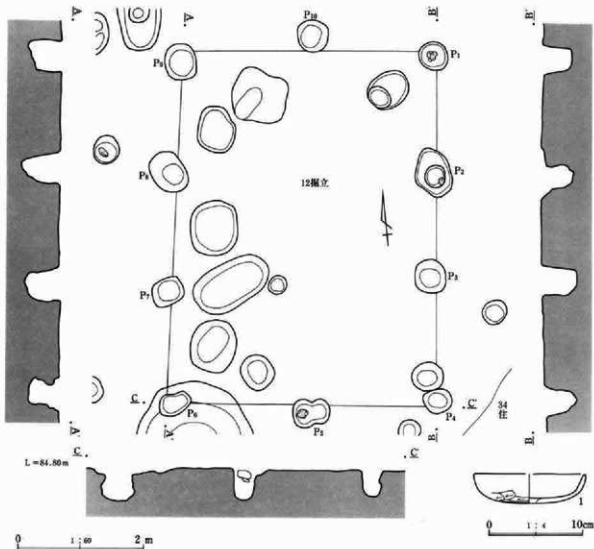
で直径45cm、深さ78cmである。

11号掘立 (第287図)

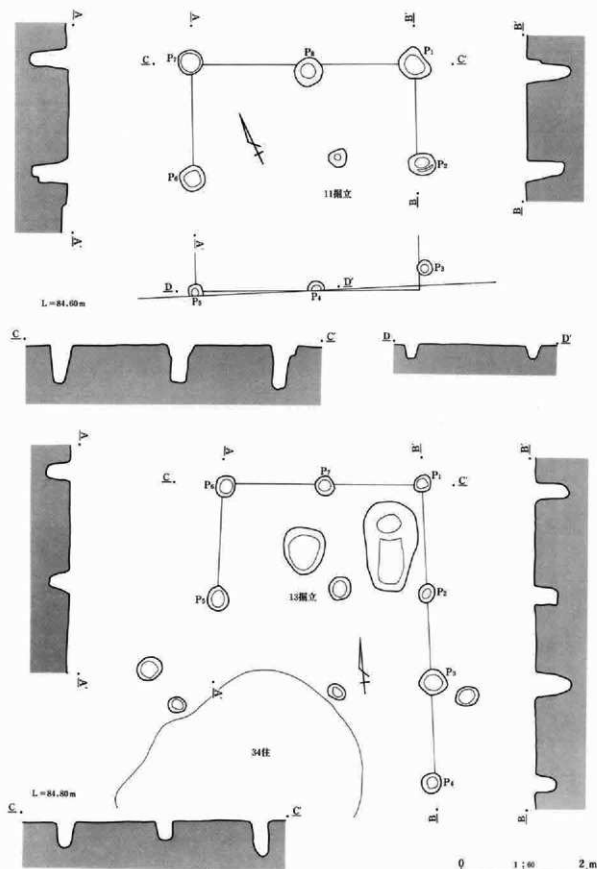
R-29グリッドに位置する。東西2間(3.60m)、南北2間(3.60m)の正方形の建物と考えられる。南・北辺の間柱は西辺から1.9mの位置に対応しているが、東・西辺の間柱はややずれている。柱掘形はいずれも円形で、 P_1 で直径42cm、深さ68cmである。

12号掘立 (第286図)

O-29グリッドに位置する。東側に13号建物、西側に17号建物が各々2m以内に近接する。東西2間(南辺4.3m、北辺4.0m)、南北3間(5.5m)の、ほぼ南北に長軸をもつ長方形の建物である。西辺はほぼ等間隔(1.8m)に柱を配置するが、東辺は中央の $P_2 \cdot P_3$ 間が1.6mと狭く、その両側は1.9mと2.0mで配分している。南・北辺は等分の位置に間柱を設置し、いずれも中軸線より外側にずらしている。柱掘形は円形で、 P_3 で直径47cm、深さ65cmである。なお、 P_1 の埋没土中より杯1点(1)が出土している。



第286図 12号掘立柱建物



第287図 11号・13号掘立柱建物

III 古代の調査

13号掘立 (第287図)

O-30グリッドに位置する。南西隅が34号住居と重複するが、切り合い関係は不明である。東西2間(3.15m)、南北3間(4.75m)の、ほぼ南北に長軸をもつ長方形の建物である。北辺の間柱は等分の位置に配置し、東辺では中央部の $P_2 \cdot P_3$ 間を1.4mと狭くし、その両側を1.6mと1.75mに配置している。柱掘形は円形で、直径25~40cm、深さ32~56cmである。

14号掘立 (第288図)

N-31グリッドに位置する。南辺が2号祭祀と重複し、2号祭祀が本掘立柱建物の上ののっている。東辺の2本は未確認であるが、東西3間(5.6m)、南北2間(3.5m)の、東西方向に長軸をもつ長方形の建物であろう。柱間は1.7~2.1mとまちまちで、南辺の中央 $P_2 \cdot P_3$ 間は1.4mと狭い。柱掘形は円形で、 P_2 で直径40cm、深さ40cmである。なお、 P_1 の埋没土中より杯(1)が出土している。

15号掘立 (第288図)

N-31グリッドに位置する。14号建物の西側1.5mに近接する。 $P_1 \cdot P_2 \cdot P_3 \cdot P_4$ が深さ60cmほどの掘形をもつことから建物を想定したが、これらに対応する柱は明確でない。 $P_2 \cdot P_3$ 間2.0m、 $P_3 \cdot P_4$ 間3.1mである。

16号掘立 (第289図)

P-29グリッドに位置する。17号建物と重複するが、先後関係は不明である。東西3間(5.75m)、南北2間(東辺3.8m、西辺4.0m)の、東西方向に長軸をもつ長方形の建物である。東・西辺の間柱は等分の位置に配置し、南・北辺では中央部を1.75m、両側を2mの間隔で柱を配分している。柱掘形は円形で、 P_2 で直径45cm、深さ50cmである。なお、 $P_1 \cdot P_2$ では重複する柱が認められることから、建替が想定される。

17号掘立 (第289図)

東辺の2本の柱が未検出だが、東西2間(3.5m)、南北2間(3.6m)の方形の建物になるであろう。南・北辺の間柱は等分の位置に配置してあるが、西辺では北側に寄っており、 $P_2 \cdot P_3$ 間は1.55mである。柱掘形は円形で、 P_2 で直径50cm、深さ45cmである。

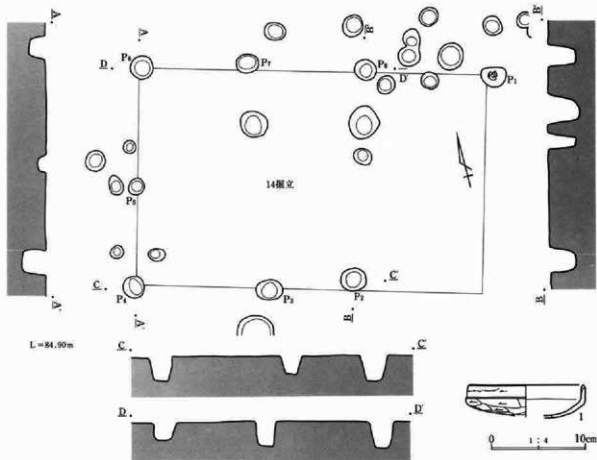
18号掘立 (第290図)

N-29グリッドに位置する。北東隅が37号住居と重複しており、その部分にかかる柱3本は未確認である。東西2間(南辺3.4m)、南北3間(6.0m)の南北方向に長軸をもつ長方形の建物である。柱は各辺とも等間隔に配置されており、柱間は東・西辺が2.0m、南辺が1.7mである。柱掘形は円形で、 P_2 で直径30cm、深さ25cmである。なお、 P_1 の埋没土中より杯(1)が出土している。

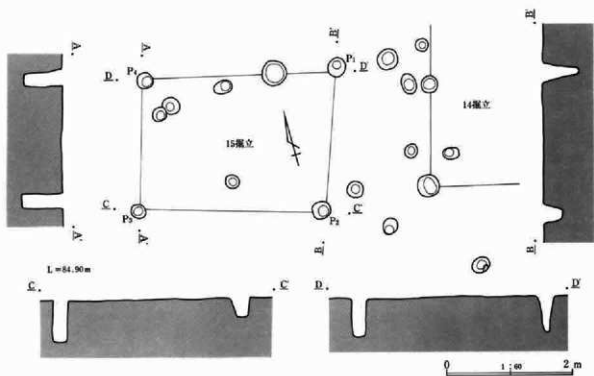
19号掘立 (第291図)

M-28グリッドに位置する。2×2間の方形の建物である。建替が行われており、 $P_1 \sim P_2$ で組むものと、 $P_1 \sim P_2 \cdot P_3 \sim P_4$ で組むものの二通りが考えられる。先後関係は不明である。柱間はいずれの場合も1.7~2.0mの範囲にほぼおさまっており、一辺2m内外の建物が想定できる。柱掘形は円形で、上面に10cm前後の浅い掘り込みをもつものが多い。深さは最も深い P_1 が1mである。なお、 P_1 の埋没土中より壺(1)が出土し

3. 獨立柱建物



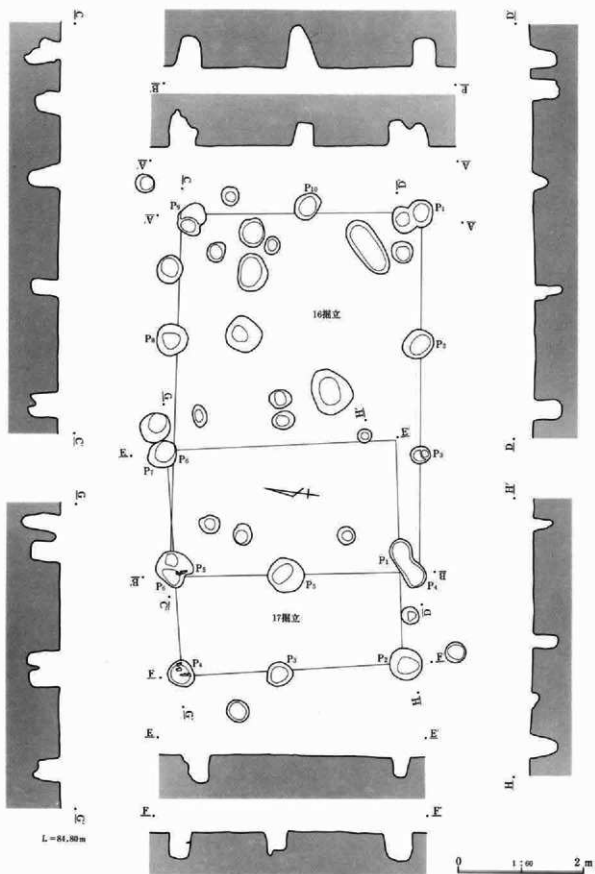
L=84.90m



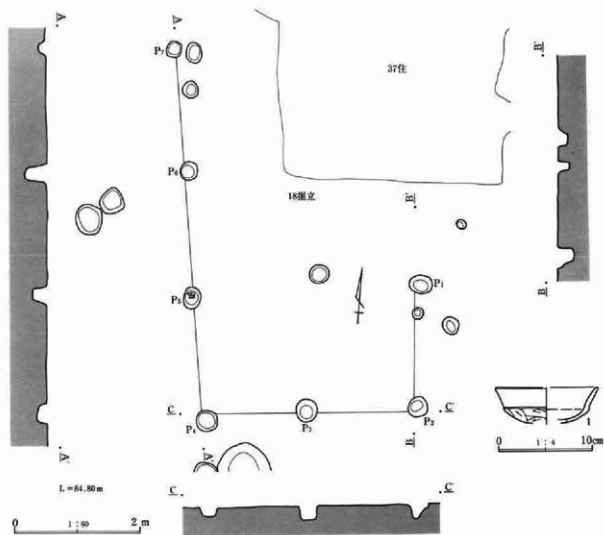
L=84.90m

0 1:60 2m

第288圖 14号・15号獨立柱建物



第289図 16号・17号据立柱建物



第290図 18号掘立柱建物

ている。

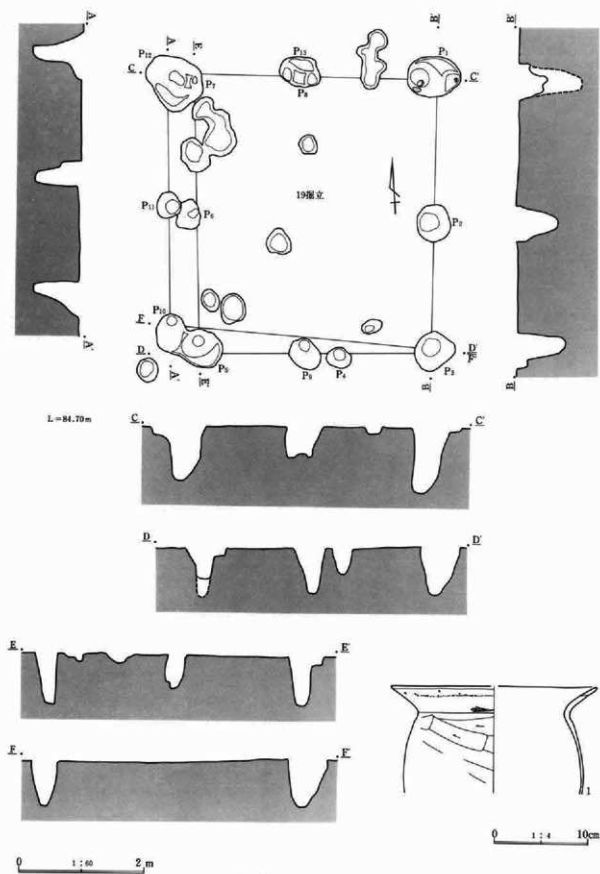
20号掘立 (第292図)

L-29グリッドに位置する。北半が路線外となるため、南半の柱5本を調査した。柱間は $P_1 \cdot P_2$ 間が2.3m、 $P_4 \cdot P_5$ 間が2.5m、南辺は4mを等分して P_3 を設置している。柱掘形は円形で、直径45~55cm、深さ35~50cmである。なお、 P_3 を除く4本の柱で柱痕を示す痕跡が認められた。 P_1 では掘形底面に長軸23cm、短軸13cmの楕円形の掘り込みが認められ、ここでは板材が使用された可能性がある。 P_2 では埋土中に直径15cmの円形の柱痕が認められた。 P_4 と P_5 では掘形底面に直径15cmと20cmの掘り込みを確認した。

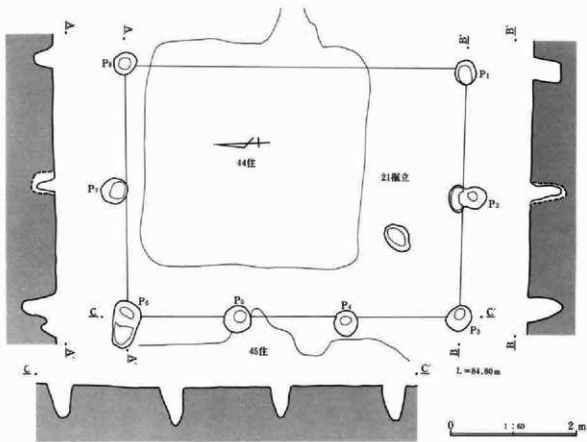
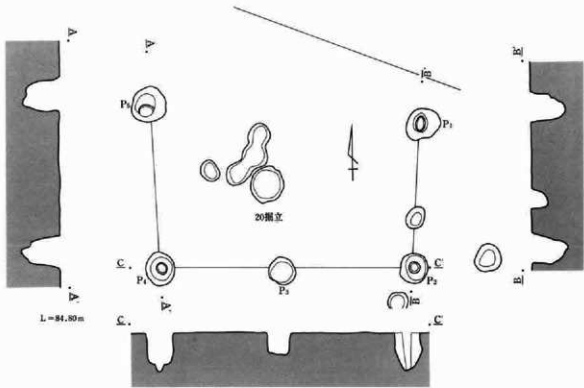
21号掘立 (第292図)

N-28グリッドに位置する。44・45号住居と重複するが、切り合い関係は不明である。また、44号住居と重複する東辺の柱2本は未検出である。東西2間(南辺3.8m、北辺4.0m)、南北3間(5.3~5.4m)の、ほぼ南北に長軸をもつ長方形の建物である。南・北辺の間柱はほぼ等分の位置にあり、軸線上より外側に設置

III 古代の調査

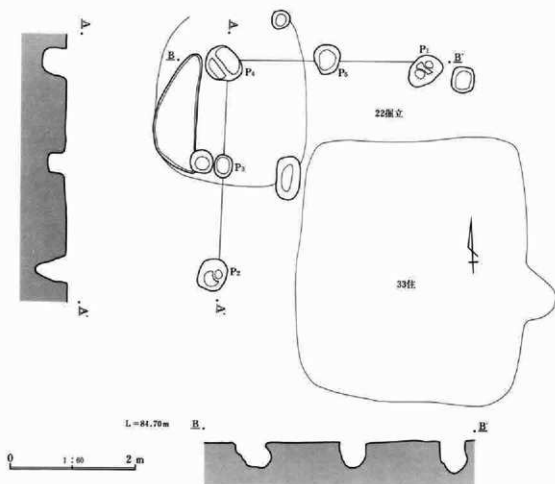


第291図 19号掘立柱建物



第292図 20号・21号掘立柱建物

III 古代の調査



第293図 22号掘立柱建物

されている。西辺の柱間は中央のP₄・P₅間が1.7mとやや狭く、その両側は1.8mで設置している。柱掘形は円形で、直径35～40cm、深さ30～55cmである。

22号掘立 (第293図)

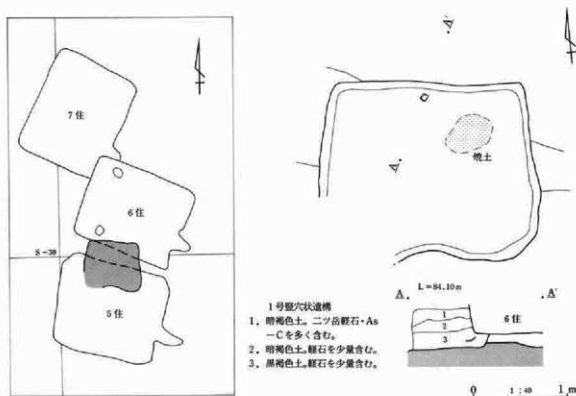
O-28グリッドに位置する。2号特殊遺構および33号住居と重複するが、切り合い関係は不明である。また、33号住居と重複する柱3本は未検出である。東西2間(3.3m)、南北2間(3.3m)の正方形の建物であろう。柱間はいずれも等間隔(1.65m)に設置されている。柱掘形はほぼ円形で、P₅で直径40cm、深さ35cmである。なお、P₁・P₂・P₄で柱穴の重複が認められることから、本建物は建替が行われた可能性がある。

4. 竪穴状遺構

方形の掘り込みをもつが、住居と認定できないものを便宜的に竪穴状遺構とした。今回の調査区内では2基認定された。いずれも長軸3m未満の方形を呈し、竈をもっていない。分布は粕川に面した5区微高地の東側縁辺に位置している。3m未満の小形住居は4区の住居群中で2軒確認されているが、2軒とも他の住居に比べて掘り込みが浅く、竈が付設されている。これに対し、本遺構は住居と同程度あるいはそれ以上の深度をもっており、竈は認められない。

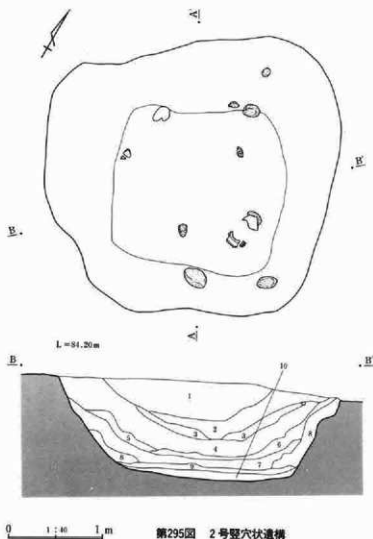
1号竪穴状遺構（第294図）

S-38グリッドに位置する。近接する5・6号住居間に重複し、両住居を切っている。両住居調査時に壁の不明確な部分があり、掘形調査の時点で両住居間に別の遺構が存在することが判明した。当初、住居として調査を進めたが、遺物の出土がほとんどなく、両住居調査時に焼土等も確認されていないため、竈をもたないと判断した。外形は長軸2.35m、短軸1.85mの、東西方向に長軸をもつ長方形を呈すと思われる。住居掘形調査時に確認したため、南辺と南西隅の立ち上りは不明確であった。両住居の床面を掘り込んで構築しており、確認面からの深さは40cmである。底面は地山面をそのまま使用しており、硬化した面は認められなかった。遺物は覆土中から土器小片が少量出土しているが、図化可能なものはない。また、覆土下層に焼土が集中する部分が認められた。



第294図 1号竪穴状遺構

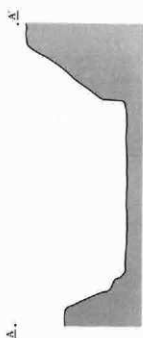
III 古代の調査



第295図 2号竪穴状遺構

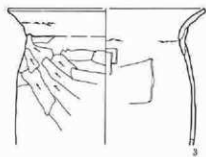
2号竪穴状遺構 (第295図)

Q-38グリッドに位置する。北側に13号住居、西側に9号住居が近接する。規模は確認面で東西3.1m、南北2.8m、底面で東西1.8m、南北1.6mで、確認面からの深さは最も深い部分で約1mである。立ち上りは大きく外傾しているが、底面付近に直立する立ち上り部分が残っており、本来はこの角度で立ち上がっていたものと思われる。つまり、底面形が示す東西方向にやや長い方形を呈し、深さ1m前後の形態であったと考えられる。埋没土はレンズ状の堆積状態を示しており、自然埋没と考えられるが、覆土中層に黄灰色粘質シルト層がほぼ全面を覆う状況が認められ、埋没過程で何らかの人為的行為が行われた可能性がある。遺物は杯の破片2個と長胴甕の胴上半部1個の他に、大形円礫3個を含む円礫数個が出土したが、これらはいずれもシルト層の下位黒褐色土中からの出土である。なお、大形円礫にはいずれも炭化物の付着が認められた。



2号竪穴状遺構

1. 黄灰褐色土。地山土ブロックを多量に含む。
2. 灰黒色土。地山土ブロックを少量含む。
3. 灰黒褐色土と地山土のブロック混土。
4. 灰黒褐色土。二ツ品軽石・As-Cを多量に含む。焼土・炭化物を少量含む。
5. 灰黒褐色土。軽石を少量含む。
6. 焼土ブロックを含む灰層。
7. 灰黒褐色土。軟質で焼土ブロック少含。
8. 褐色土と黒色土の混土。焼土粒・軽石を多量に含む。軟質。
9. 灰黒褐色土。粘性があり、均質。
10. 9と地山の混土。

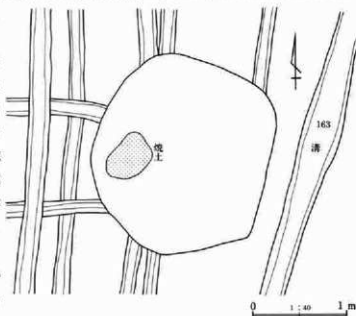


0 1:4 10cm

5. 特殊遺構

本遺跡では、5区の一部を除く微高地上のほぼ全面にわたって畠が確認されており、祭祀跡も3カ所検出されている。このことは、遺構確認面が当時の地表に近いことを示している。また、6世紀後半以降の住居等の遺構は畠を切って構築しているため、畠の切れている部分が遺構の輪郭を示していることになり、遺構の確認は畠の確認と同時に進められた。こうして発見された遺構のうち、掘り込みの認められないもの、焼土と若干の遺物のみだけが認められたもの等が数カ所で確認された。当時、調査担当の間では不明遺構として一括されていたが、その後子持村黒井峯・西組遺跡や渋川市中筋遺跡等で平地式建物の存在が明らかになり、本遺構もそれに類する可能性があると考えられるに至った。

本遺跡では、以上のような要素を含む遺構が5カ所確認されている。黒井峯・西組遺跡では、平地式建物に住居・竈屋・牛小屋等の種別があることが明らかにされており、いずれも周縁に小溝や柵状の区画が認められる。平地住居は長方形を呈し、内部に竈状の燃焼施設やベッド状の施設（転がし根太）が設置されている。竈屋は円形で、内部に竈状の燃焼施設が設けられている。本遺跡では周縁の区画は検出されていないが、焼土や土器を伴うものは4カ所確認されている。

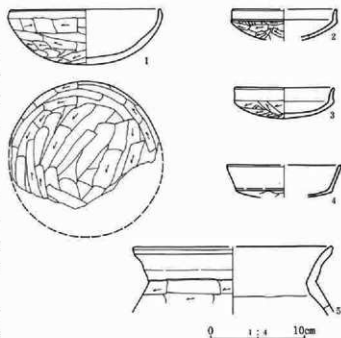


1号特殊遺構 (第296図)

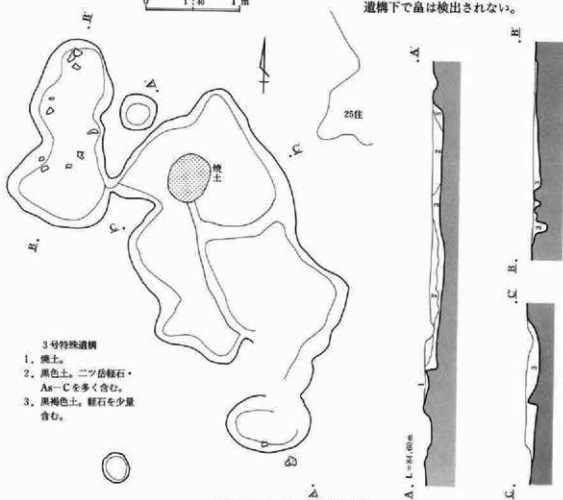
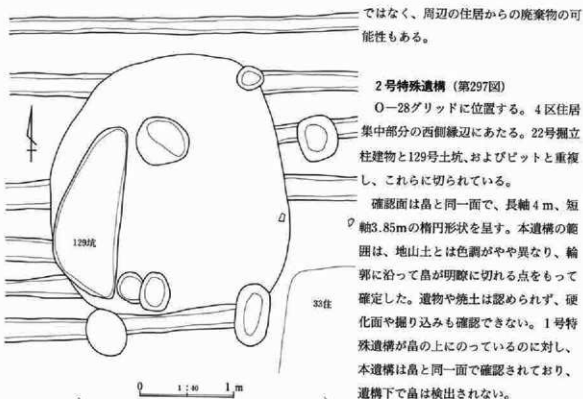
K-24グリッドに位置する。住居分布の西端にあたる地区にあり、北側2mに49号住居が近接する。畠の確認面より10cmほど上位で、土器片を少量伴う焼土の散布する範囲として確認された。輪郭は長軸2.1m、短軸1.8mの不正円形状を呈す。

精査の結果、西側寄りに焼土の集中する部分が認められたが、硬化した面や明確な掘り込みは検出できなかった。遺物は焼土混じりの土層から少量出土しており、そのうち杯4個と壺1個を図化した。

なお、本遺構下からは畠が確認されており、本遺構は旧地表面にあった可能性が高い。柵列等を伴わないことから輪郭は明確



第296図 1号特殊遺構

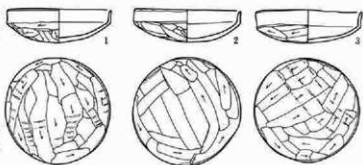
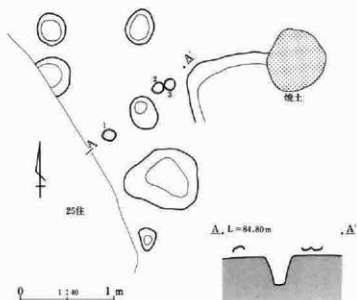


第297図 2号・3号特殊遺構

3号特殊遺構 (第297図)

Q-29グリッドに位置する。4区住居集中部分の南端にあたる。北東側1mに25号住居が近接する。

畠の確認作業中に、直径50cmの範囲で地山の焼土化した部分が検出され、精査したところ、周辺に染み状の黒褐色土が認められた。古墳時代前期住居の壁をとぼしてしまったか、あるいは屋外施設の一部の可能性が考えられたが、古式土師器の出土は認められず、黒褐色土中から出土する土器はいずれも古墳時代後期のものであった。焼土確認面は畠の確認面と同一面であり、出土する土器の年代から畠よりも新しいものと判断した。染み状黒褐色土の範囲は不定形で浅く、長軸5m、短軸3mの範囲に収まっている。



第298図 4号特殊遺構

4号特殊遺構 (第298図)

Q-30グリッドに位置する。25号住居の南東隅に接する位置にあり、25号住居を挟んで3号特殊遺構と隣接している。

遺構確認作業中に、畠の確認面より10cm前後高位で、杯形彩形品3個(1~3)

と焼土の散布が認められた。杯は1個が25号住居寄りの位置に伏せた状態で出土、他の2個はその東側70cmのところと並べて置かれた状態で出土している。焼土はさらに東側1mのところと位置しており、直径60cmの範囲で認められた。土器と焼土は2.5mの範囲にあるが、この下位で検出されたピットや落ち込みとの関係は不明である。なお、本遺構下からは畠が検出されている。

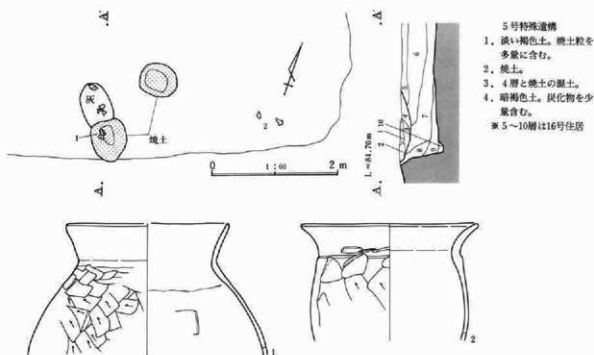
本遺構は、畠確認面より10cmほど高位に位置しており、旧地表面に近いこと、遺構下で畠が確認されていること、土器と焼土が狭い範囲で伴出していることなどの点で、1号特殊遺構との共通性が看取される。しかし、本遺構出土の土器はいずれも完形品であり、廃棄物とは考えにくい。

5号特殊遺構 (第299図)

5区P-38グリッドに位置する。古墳時代前期の15号住居の南東部覆土上で確認された。5区微高地上で畠が確認されたのは、1号古墳墳丘部分の一部のみであり、3・4区に比べて削平の及んでいる地区ではあるが、本遺構の確認された地区は台地縁辺部ということもあって遺存状態が良く、住居の壁高も4区と同程度である。

15号住居の確認作業中に、覆土上に2カ所の焼土と灰の分布が認められた。これらには遺物も伴っており

III 古代の調査



第299図 5号特殊遺構

住居の竈と考えて14号住居として調査を進めた。東側2mに同時期の土器数片(2)を検出したが、掘り込みや床は確認できなかった。2カ所の焼土のうち、西側のものは直径60cmの範囲で土壌が焼土化しており、ここで直接燃焼が行われていたことを示している。下部には掘形状の落込があり、焼土混じりの土壌が認められる。また、北側に接して長軸60cmの浅い楕円形の掘り込みがあり、灰混じり黒褐色土で埋没している。これらの上面に接して、壺(1)が散乱した状態で出土している。その東側の焼土は、直径60cmの範囲に焼土・灰が混土状態で散布するもので、ここで直接火を扱ったものとは考えられない。

燃焼が行われた点では3号特殊遺構と共通しており、子持村黒井峯・西組遺跡で確認された平地住居や竈屋との類似性が伺える。

6. 祭祀跡

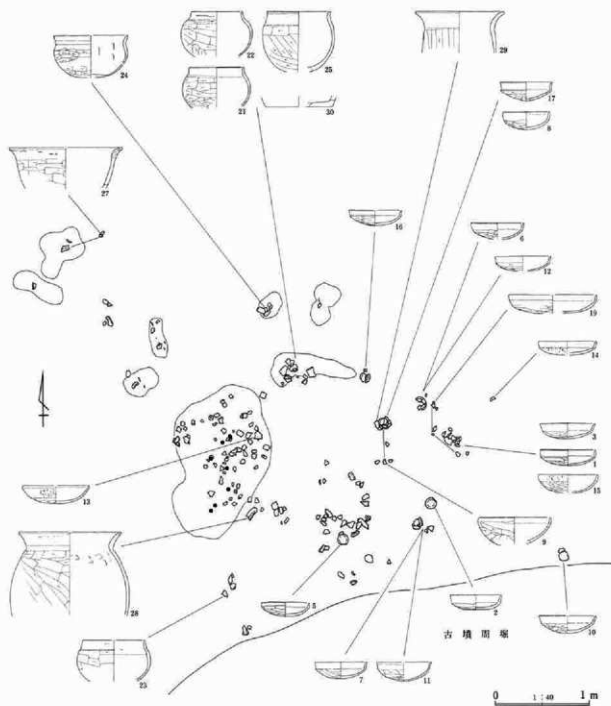
1号祭祀跡(第300~303図)

5区N-32~33グリッドに位置する。1号古墳北西の周堀外に接する位置に設置されており、祭祀場としてふさわしい空間にある。遺構確認時に土器が集中する部分として把握され、精査の結果その下から多数のピット状落ち込みと土坑状落ち込み1カ所が確認された。これらの落ち込みは不定形なものも多く、大半がその後の畑耕作や木の根による攪乱も考えられるが、土坑状の落ち込みは人為によるものと思われる。遺物は杯を中心に高杯・小型壺・長胴壺・丸胴壺・甕等の多量の土器類、少量の須恵器、鉄製品2点、鉄滓32点の他大・小の円鏝数点を含んでおり、その分布範囲は直径4mにほぼおさまっている。遺物の主体は遺構確認面より土層の黒褐色土中に認められ、ほぼ水平の状態で出土しているが、ピット・土坑状の掘り込み内から出土するものもある。土器は破片で散乱した状態で出土したものが多く、また遺物量にたいして接合率が低い点は、その後の攪乱を大きく受けていることを示していると言える。器形がある程度復元できたものは数カ所にまとまって出土する傾向があり、本来はこのような状態であったことが想定される。なお、本遺



第300図 1号祭祀跡

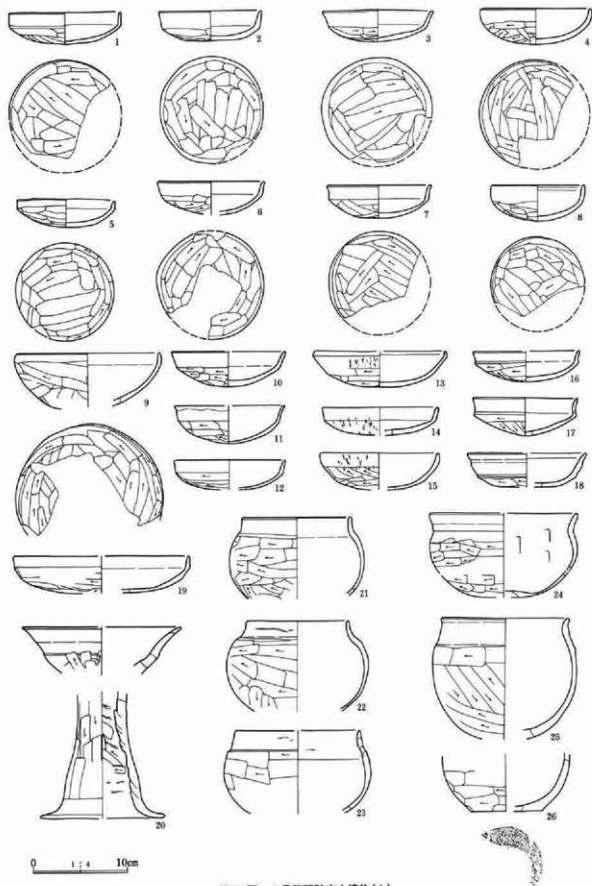
III 古代の調査



第301図 1号祭祀跡 遺物の出土状況

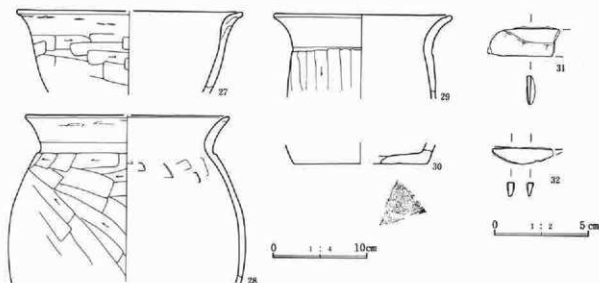
構からは大型品2点を含む32点(165g)の鉄滓が出土しており、そのうち7点は土坑状落ち込みからの出土である。この落ち込みの性格は不明だが、鉄滓の存在は遺跡内で小鍛冶が行われていたことを示していると言えよう。

6. 祭祀跡



第302图 1号祭祀跡出土遺物(1)

III 古代の調査

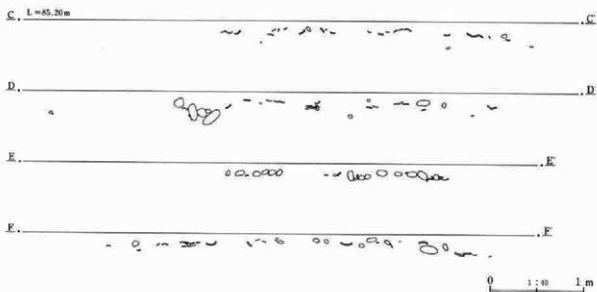


第303図 1号祭祀跡出土遺物(2)

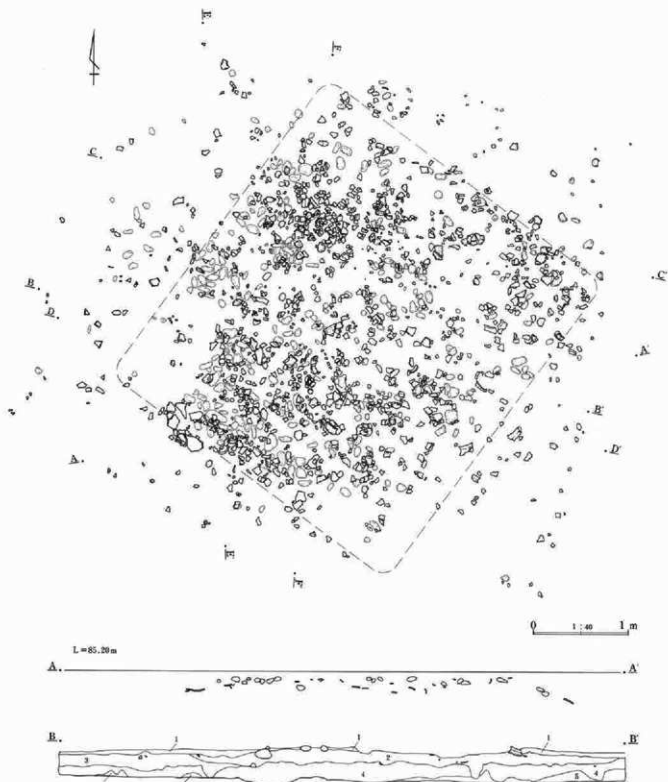
2号祭祀跡 (第304~312図)

4区O-31グリッドに位置する。居住域のほぼ中央部にあたる、4区住居群に取り囲まれた空間に設置されている。1号祭祀の西側約10mのところにあたる。北側で14号掘立と一部重複するが、本遺構はその上の上のっている。

本遺構は浅間B軽石(As-B)下の調査時にいち早くその存在が確認され、他の遺構に先立って調査を開始した。調査は遺物の集中部分にベルトを設定し、周辺部を拡張しながら掘り下げていく方法をとった。全景が明らかになった段階で、上面の遺物を記録化して取り上げ、下面の遺物についても同様の工程をふんだ。セクションは遺物が全て取り上げられてから観察し、図化した。1層はAs-Bを多量に含む土壌で耕作土と考えられるが、本遺構上面は土器や礫が多く、耕作が及ばなかったのであろう。遺物の大半を含む2層は焼土粒を多量に含んでおり、ここで火が使用された可能性もある。3・4層は自然堆積土と考えられるが、こ

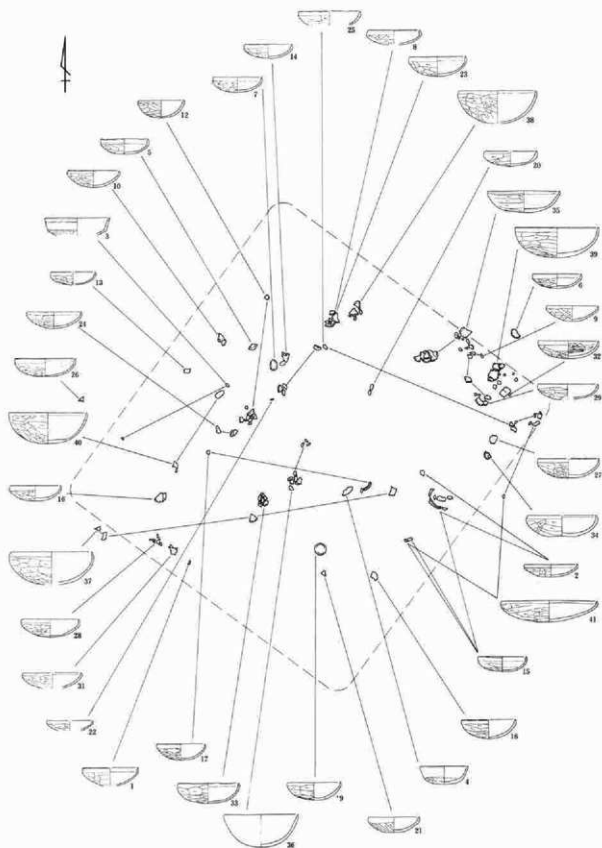


第304図 2号祭祀跡断面図

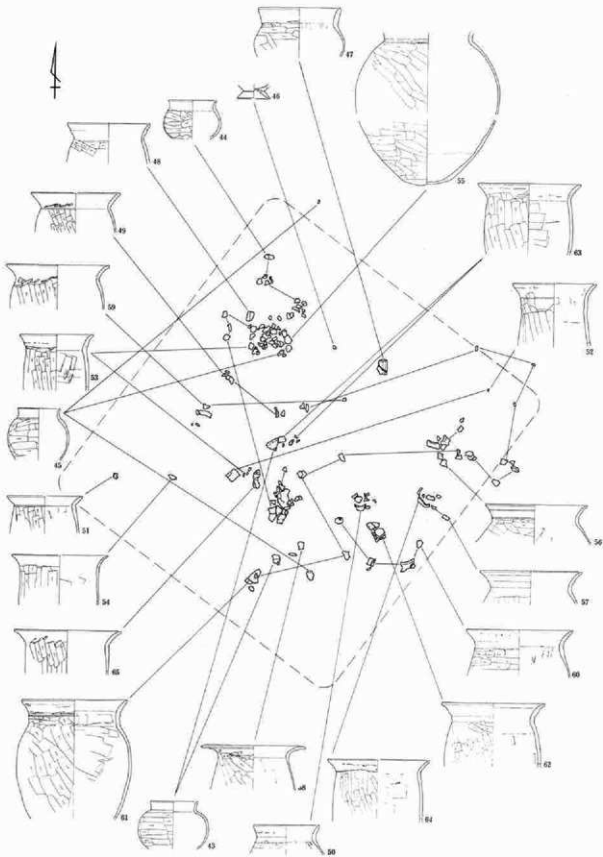


1. くすんだ黒褐色土。As-B下水田耕土 (IV層) に対比される。
2. くすんだ灰褐色土。燧土粒・炭火物・軽石を少量含む。
3. くすんだ灰褐色土。軽石を少量含む。
4. くすんだ灰褐色土。二ツ岳軽石・As-Cを少量含む。
5. 黒褐色土。二ツ岳軽石を少量、As-Cを多量に含む。

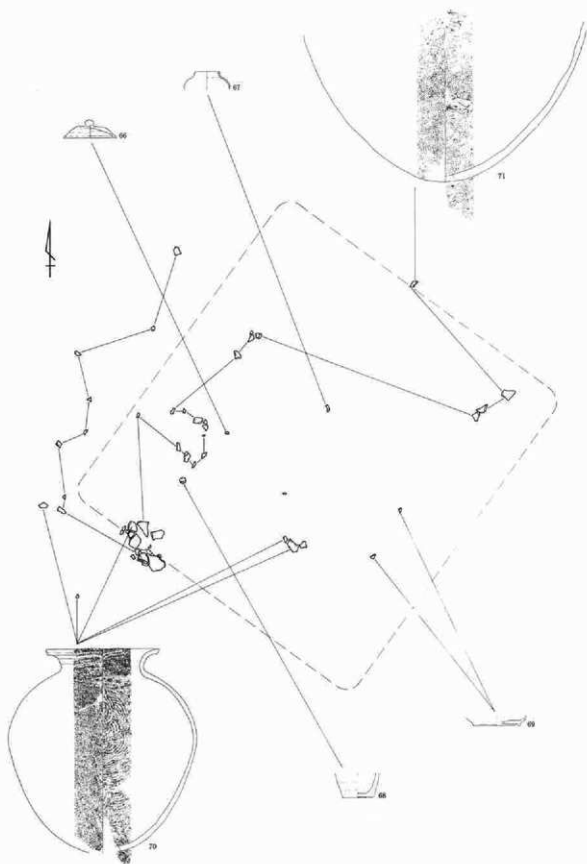
第305図 2号祭祀跡



第306図 2号祭祀跡遺物の出土状況(土師器杯)

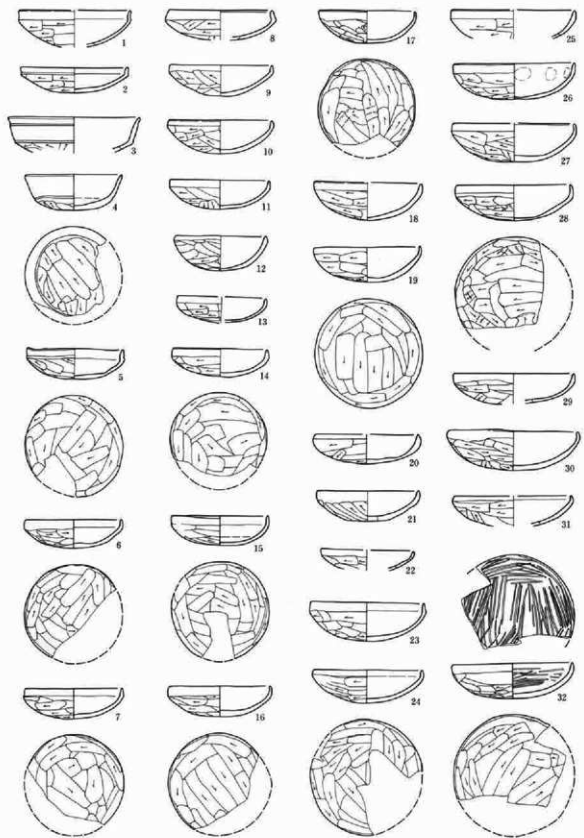


第307図 2号祭祀跡遺物の出土状況(土器器種)



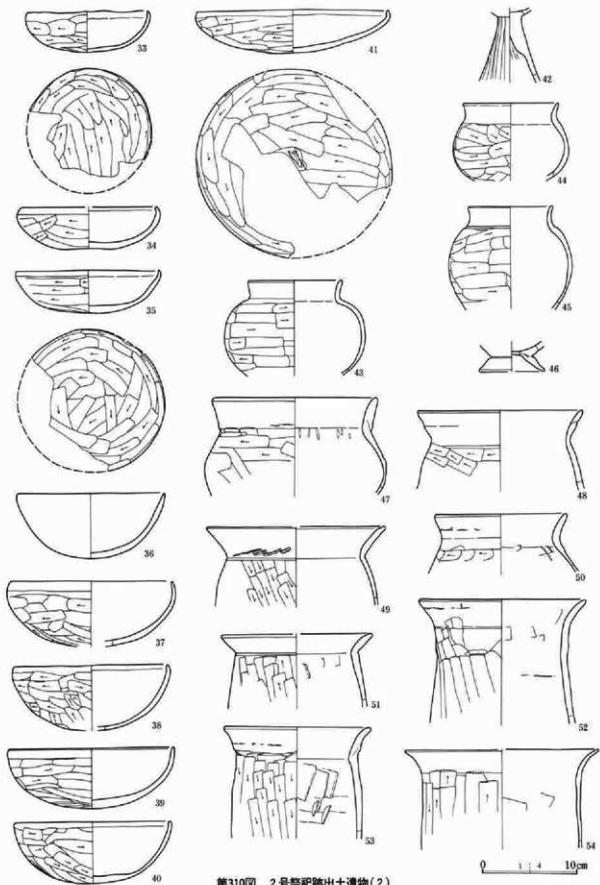
第308図 2号塚跡遺物の出土状況(須恵器)

6. 祭祀跡

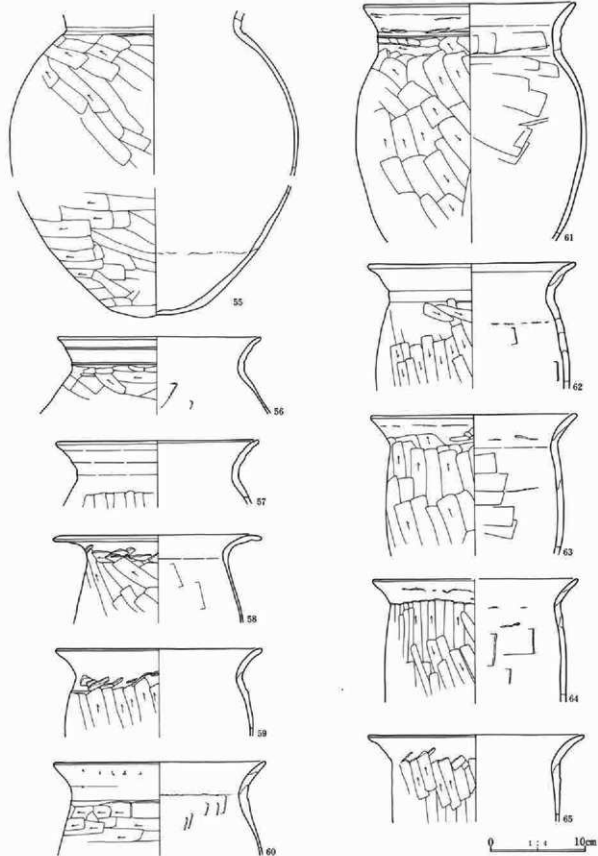


第309図 2号祭祀跡出土遺物(1)

III 古代の調査

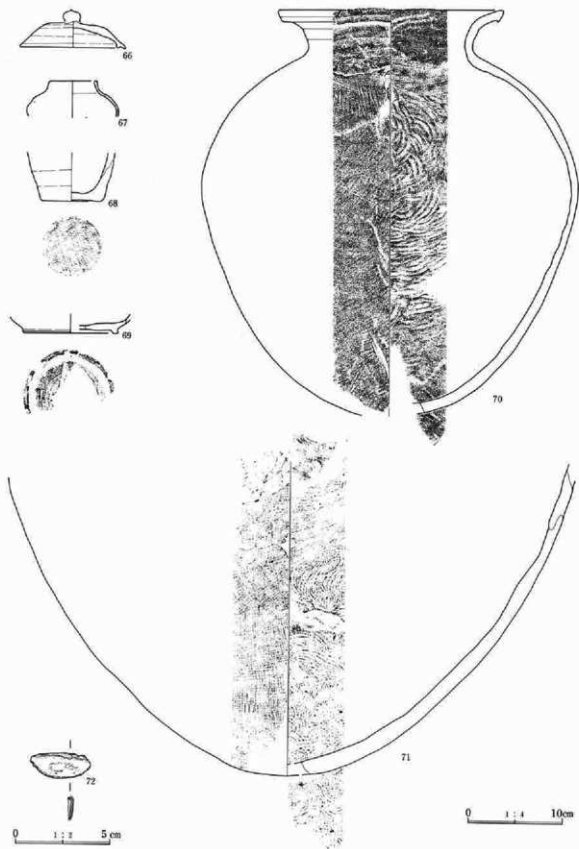


第310図 2号祭祀跡出土遺物(2)

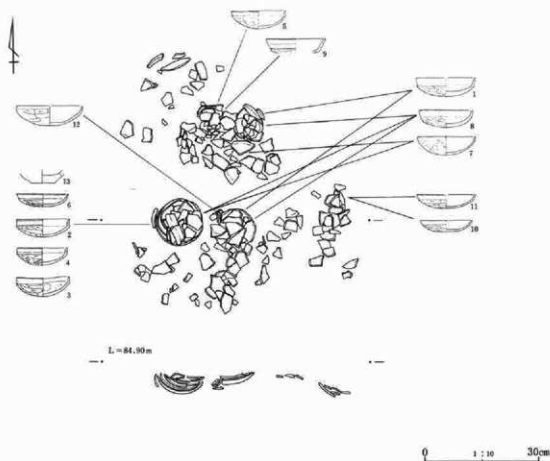


第311图 2号祭祀跡出土遺物(3)

III 古代の調査



第312図 2号祭祀跡出土遺物(4)



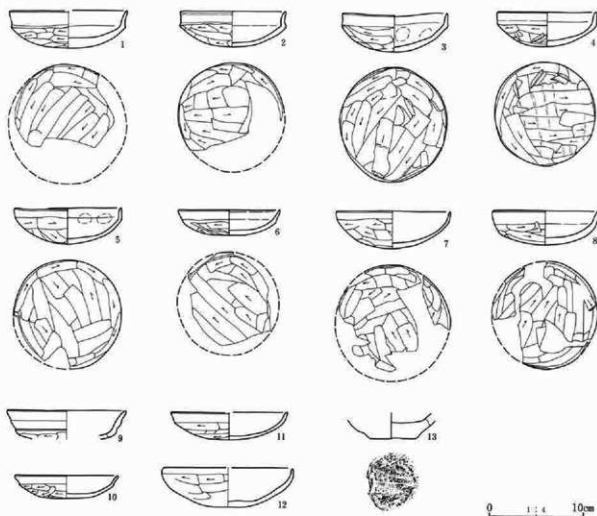
第313図 3号祭祀跡遺物の出土状況

の層に落ち込んで出土する例も少なからず認められる。

本遺構は大量の土器および礫の集合で構成されるが、これらの中には埴輪片3点、鉄片2点、鉄滓2点も含まれていた。土器はほとんどが破片で出土しているが、一定の範囲に集中しており、同一レベルにある礫の分布状況も一致している。土器に比べて移動性の少ない礫は、数個から10数個が40～50cmの範囲にかたまっ
てブロックを構成している。遺存状態の良い西半ののを見ると、縁辺部に直線的な配列を示すものがあり、それらはほぼ直交する位置にある。東半ではブロックを構成するものが少ないが、礫の分布は西半の直線にはほぼ平行するラインが読みとれる。これに土器の分布を重ねて、図のような方形の区画を想定した。規模は長軸3.9m、短軸3.67mで、長軸線はN+37°を測る。区画内に分布する遺物は大半が2層中に含まれ、一定のレベルを保つが、周辺に散乱した遺物はそれより10～15cmほど低位レベルで出土している。このことは、方形区画が一段高い構造であることを示している。本遺構下では畠が調査されているが、その確認面は5層上面である。本遺構構築時の地表は、周辺に散乱した遺物面と考えられ、本遺構は段状の区画をもつ構造であった可能性が強い。

土器は図化して取り上げたものが509点あり、一括取り上げも含めると土師器杯類9,010g、同壺類52,993g、須恵器77片が出土している。杯類・壺類は平均的な完形品に換算すると各々72個・33個になり、完形品で持ち込んだとすれば100個体以上の土師器が集積されたことになる。これら土器類のうち、完形で出土したのは杯1点(19)のみであるが、接合状況を見ると、須恵器壺以外はさほど散乱しておらず、破損して一括

III 古代の調査



第314図 3号祭祀跡出土遺物

状態で出土するものも少なくない。礫は321点含まれていた。いずれも円礫で、焼成や敲打痕の認められるものはない。このうちの約60%が鹿角石状の棒状円礫で、他に大型の円礫数個が含まれていた。

3号祭祀跡 (第313・314図)

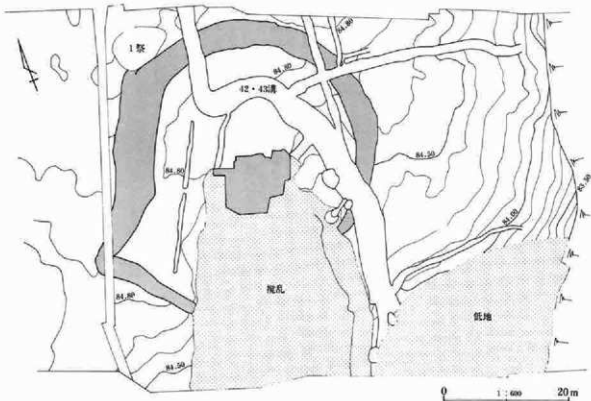
3区J-21グリッドに位置する。3区台地縁辺に単独で存在する。確認面は1H水田耕土直下で、この下では畠が確認されている。

50cmほどの範囲内に、土師器杯が折り重なった状態で確認された。上面に散乱した小破片を取り除くと、これらは4つの単位で構成されることが判明した。そのうちの1つは杯4個を重ねた状態で出土していることから、その他の単位も同様の状態で押しつぶされ、その一部が散乱したものと考えられる。出土位置により若干の高低差は認められるが、単位間で接合するものもあり、同時期の一群と考えてよいだろう。なお、杯とともに壺の底部1点(13)が出土したが、この他に杯以外の器種は認められず、本遺構にともなうかどうか不明である。本遺構中および周辺に焼土は確認されていない。

7. 前方後円墳 (第315～325図)

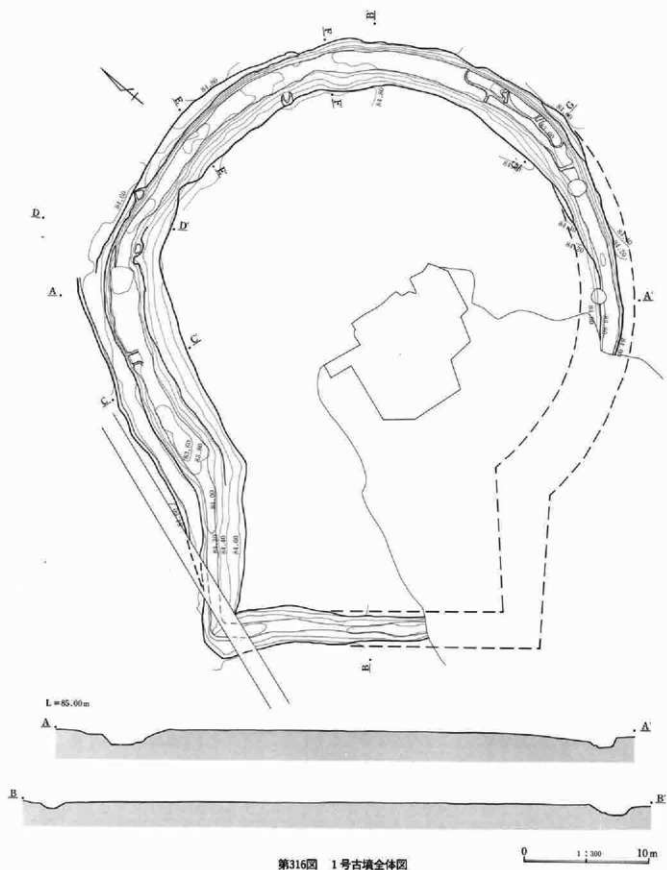
現在の粕川をのぞむ微高地東寄りで前方後円墳1基を確認した。本遺跡周辺は有数の古墳密集地域であるが、それらはいずれもローム台地上に占地しており、本遺跡のようなたびたび河川氾濫を被る微高地に、しかも前方後円墳が選地することは、当時予想もしなかった。当然のことながら、上毛古墳総覧にも記載はない。発掘前の現地地下見の段階では、本地区は低平な畠地であり、石室に伴う大型の礫も見あたらなかった。発掘調査が始まり、本地区では中・近世の溝等が多数確認されたが、その下に古代と目される大規模な溝の存在が確認された。中・近世の溝はほとんどが直線的な走向をとるが、最も規模の大きい42・43号溝は北側から直線的に南下し、古代の大溝を越えたところで東側へ直角に折れ、弧を描きながら南下する不自然な走向をとっていた。その後の調査で古代の大溝が前方後円墳の周廻であることが判明し、42・43溝の不自然な走向は後円部の内側に沿っていたことがわかった。この溝がどの時代までさかのぼるかは判然としなが、掘削当初はまだ古墳の盛土の一部が残っていた可能性が高い。

古墳の墳丘部は全て削平されており、埴輪列等の痕跡すら残されていなかった。本古墳の西側と後円部の一部では畠が検出されており、北半は旧地表面に近いものと考えられるが、南半は周廻の幅が示すように、かなり削平が及んでいる。また前方部東半から石室部にかけて大規模な擾乱が及んでおり、石室部分と想定される地点で、本古墳に伴う遺物の一部と石室を構築した大型礫の一部がころうじて確認できた。平面形は擾乱の及んでいない周廻下面を基本ラインとして復元した。全長41m、前方部幅21m、後円部径33mの規模をもつ前方後円墳で、軸はN+51°である。前方部は短く、括れ部との差が小さいため、平面形は帆立貝式に類似している。周廻は、後円部では幅の広い部分が多く、深く掘削してあるのに対し、前方部は幅が狭く



第315図 1号古墳位置図

III 古代の調査



第316図 1号古墳全体図

7. 前方後円墳

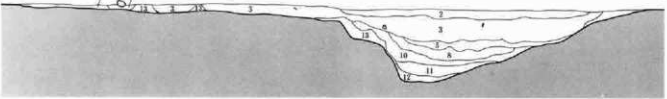
C, L=45.00m

C



D.

D



E.

E



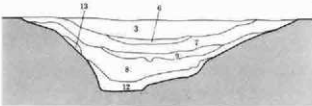
F.

F



G.

G



0 1:60 2 m

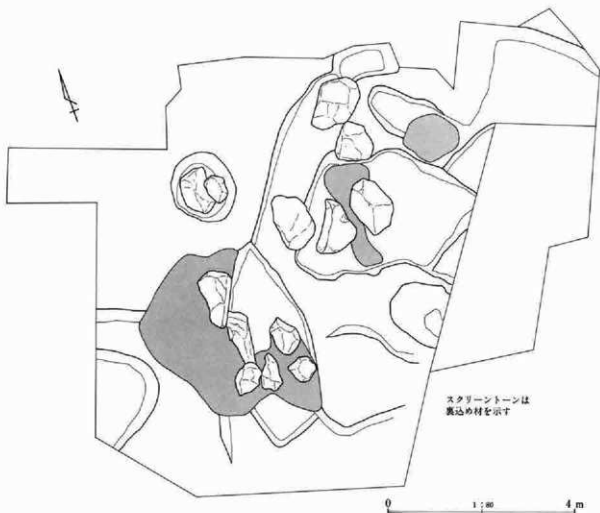
1号古墳周堀

1. 黄灰褐色土。二ツ岳軽石・As-C・焼土粒を少量含む。
2. 黒褐色土。二ツ岳軽石・As-C・焼土粒を比較的多く含む。
3. 灰褐色土。軽石・焼土粒を少量含む。
4. 灰黄色シルト砂と灰褐色土の混土。
5. 灰褐色土。
6. 灰黄色シルト砂層。
7. 灰褐色シルト質土と灰黒色の混土。As-Cを多量に含む。
8. 灰黒色土。軽石を少量含む。緻密で均質。
9. 黄褐色シルト質土。
10. 灰褐色シルト質土。黄白色シルト・黒色粘質土を粒状に多量に含む。
11. 黄灰褐色シルト質土。
12. 地山の灰白色シルトと黄灰色シルト質土・黒色シルト質粘土のブロック混土。
13. 地山土のブロック混土。立ち上りの崩落土。

※ 6・9層は河川氾濫層の可能性が高い。
遺物の多くは埋没土上層の1～3層から出土しており、古墳構築後の居住域に伴う1号祭壇跡や築堀によるものが多い。

第317図 1号古墳周堀土層断面

III 古代の調査



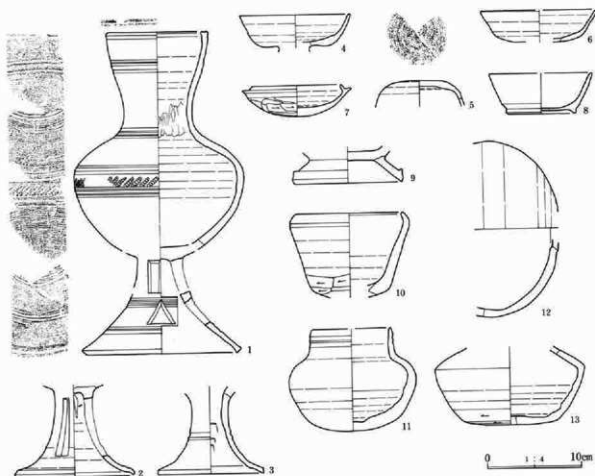
第318図 1号古墳石室攪乱部分平面図

浅い作りとなっている。後円部のうち最も幅が狭いのは主軸線上で、幅3m、深さは80cmである。最も幅の広いのは括れ部に近い部分で、幅6.8m、深さ1mである。なお、幅の広い北西側では、深い掘削を意図した段掘工法がとられている。また、東側周堀底面には、掘削作業の最小単位を示す区割り状の区画が認められ、当時の作業状況を見ることができる。先述したように、後円部では盛土下に帛が確認されており、本古墳は周堀の掘削土を直接地表面に盛って墳丘を構築したものと考えられる。周堀の外周に較べて内周の立ち上りが緩やかになっている状況は、掘削土を内部に搬入したことを示唆しており、その場合、周堀の規模から推測される土量は少なく、墳丘はかなり低いものであつたろう。なお、周堀から礫の出土は少なく、葦石は施されていないと考えられる。

本遺跡確認時に、後円部中央よりやや南寄りの地点で大型の礫が確認されたため、トレンチを設定して礫の分布範囲と掘り込み面を確認しながら調査を進めた。精査の結果、石室構築に使用された大型の礫10数個と裏込めに使用したと考えられる破砕礫が認められたが、それらは全て攪乱坑に落ち込んでおり、原位置を保つものはなかった。礫の下に坑を掘り、そこに落とし込んだのであろう。周辺に掘形も認められないが、これらが石室の位置をほぼ示していると考えられる。

遺物は周堀と石室部攪乱中から出土している。周堀では後円部北東側に集中しており、前方面と南西側で

7. 前方後円墳



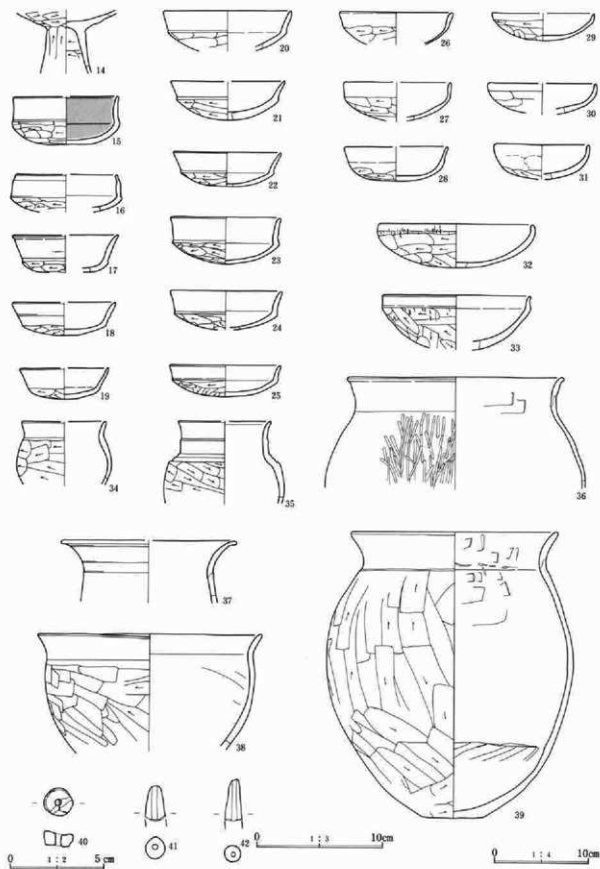
第319図 1号古墳周堀出土遺物(1)

はほとんど認められなかった。底面から出土したものはなく、大半が覆土中層から上層の出土である。遺物は土師器を中心に、須恵器、少量の埴輪片、玉、土錘、石製品などが出土している。このうち、本古墳に伴うと考えられるものは、第319図1～4・6・11の6個体の須恵器、第320図14～18・20～25の12個体の土師器、および埴輪である。

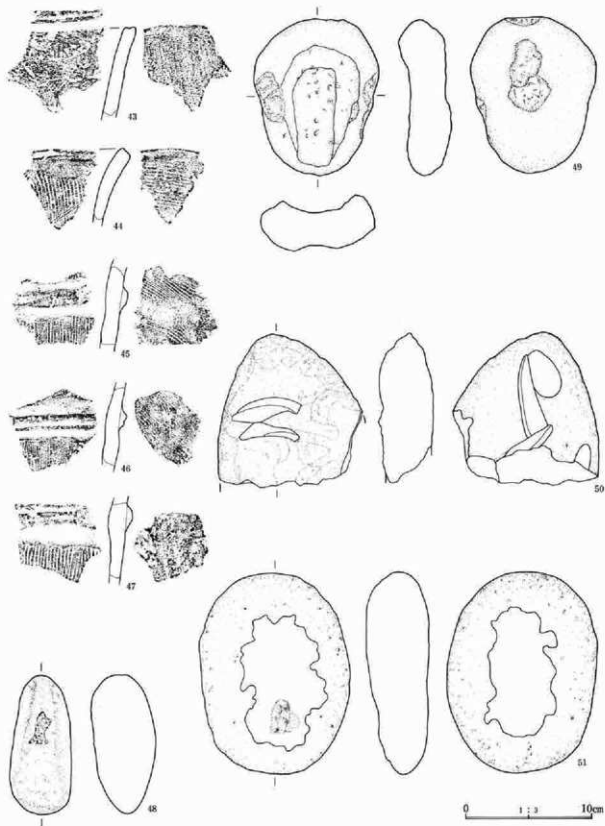
石室部擾乱中からは、本古墳に伴う金銅製耳環2点(第322図1・2)、土製小玉5点(第322図3～7)、玉軸装勾玉1点(第322図8)、鉄片4点(第322図9～12)、弓金具2点(第322図13・14)、鉄製籠1点(第322図15)、鉄製鞘口1点(第322図16)、木刀1点(第322図17)、埴輪片(第323図18～21、第324図22～31)、土師器杯2点(第325図37・38)の他、古墳時代前期の土器(第325図32～36)、中世の土器(第325図39～41)、近世の陶器(第325図42)、銭貨(第325図43・44)、石製品(第325図45～48)が出土している。埴輪は円筒埴輪の他に、人物・馬形・器財形と判断できる形象埴輪を含んでおり、これらが本古墳墳丘上に配置されていたことはまづまちがいない。

また、本古墳上で確認された中・近世の溝等からも形象埴輪を含む多量の埴輪片が出土している。これらも含めると、器財形には太刀・盾・劔が認められ、また家形埴輪の一部と思われるものもあることから、ひとつおりの形象埴輪が揃っていたものと考えられる。

III 古代の調査

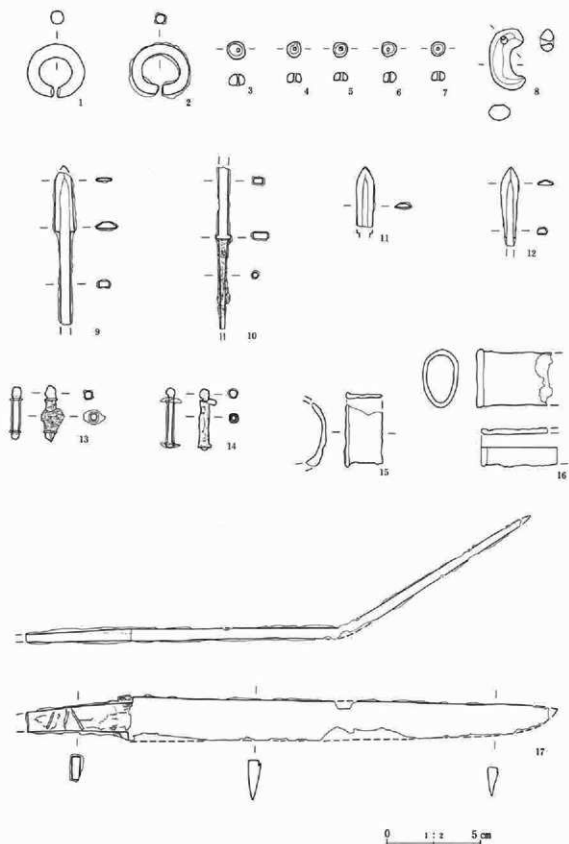


第320図 1号古墳周堀出土遺物(2)

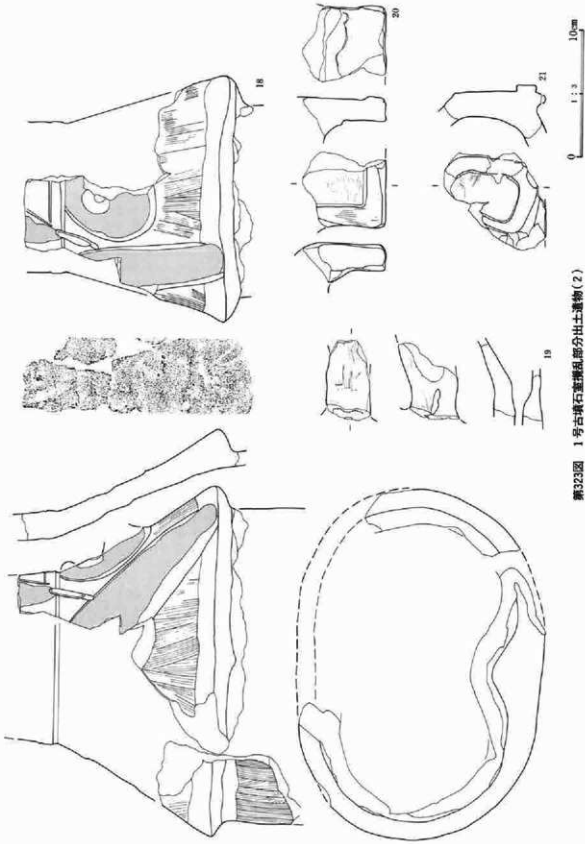


第321図 1号古墳周堀出土遺物(3)

III 古代の調査

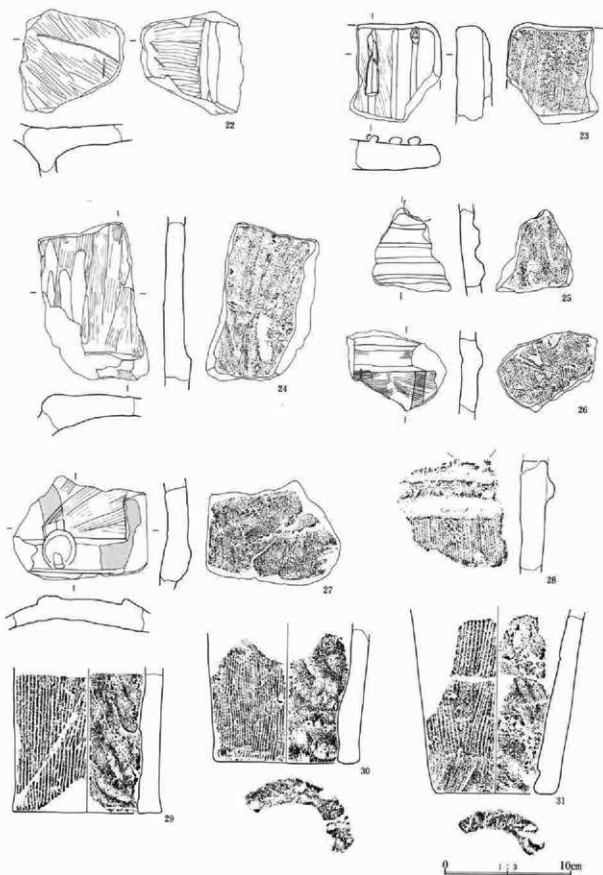


第322図 1号古墳石室攪乱部分出土遺物(1)

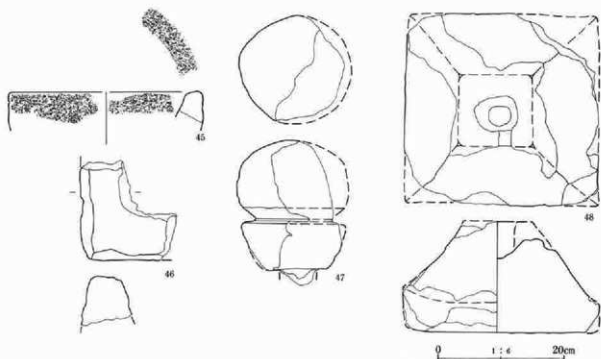
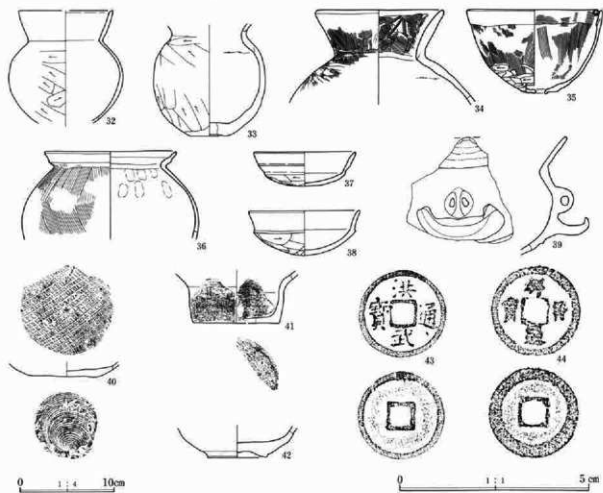


第323図 1号古墳石室掘削部分出土遺物(2)

III 古代の調査



第324図 1号古墳石室攪乱部分出土遺物(3)



第325图 1号古墳石室攪乱部分出土遺物(4)

8. 土 坑

古代の土坑と認定したものは合計34基である。これらは畠以前のものとそれ以後のものに、時期的に大別される。畠以前の土坑は4基確認されており、そのうち1基は古墳時代前期の住居群に、他の3基は畠に、各々関連するものと思われる。畠以後の土坑は微高地全域が居住域化された段階のものと考えられるが、その中には居住域以後のものも認められる。

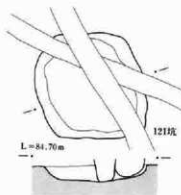
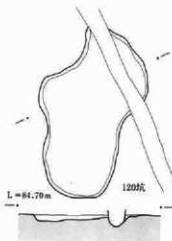
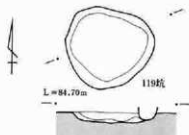
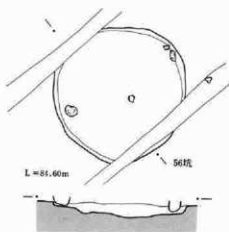
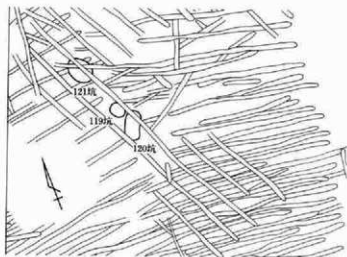
(1) 畠以前の土坑 (第326図)

56号土坑

5区P-34グリッドに位置する。1号墳後円部北東寄りで畠とともに確認された。東側1mに4世紀代の16号住居が近接しており、ともに畠に切られている。直径1.4mの円形を呈し、確認面からの深さは8~12cmである。埋土は浅間C軽石(As-C)を多量に含む黒褐色土で、地山土のブロックを含んでいる。埋土中から4世紀代の土器小片が出土しており、同期の住居群に伴うものであろう。

119号土坑

4区M-22グリッドに位置する。120号・121号土坑とともに南北方向の畠下で確認された。平面形は90cmほどの不正円形状で、確認面からの深さは10cmである。掘形全面に黄白灰色粘質土を2cmほどの厚さで貼り付けており、防湿を必要とした用途が考えられる。埋土は畠埋土と同様のブロック混土である。遺物は出土していない。



第326図 畠以前の土坑

0 1:40 1m

120号土坑

119号土坑の南に近接する。長軸1.8m、短軸0.8mの不正楕円形状を呈し、確認面からの深さは2～5cmである。本土坑も掘形の一部に黄白灰色粘質土が認められることから、本来は119号土坑と同様に全面に貼られていたものと思われる。埋土はやや白いが畠埋土と同質である。

121号土坑

119号土坑の北側1.7mに近接する。東西方向の畠を切って構築しており、119号土坑を切る畠を含む2方向の畠により切られている。平面形は径1.1mの不正円形状で、確認面からの深さは17cmである。本土坑も120号土坑と同様に、掘形の一部に黄白灰色粘質土が認められた。埋土は畠埋土と同質である。

119号～121号の3基の土坑は、Ⅲ期の畠との重複関係および埋土の共通性から、Ⅲ期畠の耕作期間内の一定時期に、畠地に作られた土坑と考えられる。また、いずれも掘形に黄白灰色粘質土を貼って使用しており、畠作物を一定期間収納するムロであった可能性が高い。

(2) 畠以後の土坑 (第327～336図)

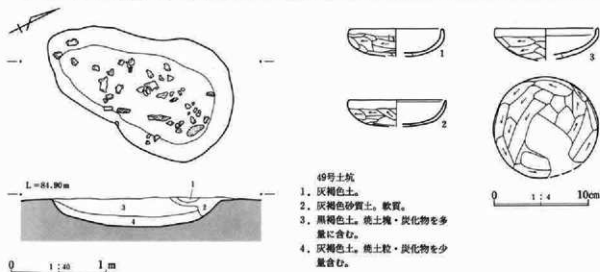
合計30基が確認されており、4区に分布する土坑が26基、5区に分布する土坑が4基である。4区の土坑は住居が集中する部分から多数のピット群とともに検出されたもので、平面形は円形・方形・楕円形・長方形のものがあり、大小様々である。確認面からの深さは浅いものが多く、ほとんどが榛名二ツ岳軽石を含む黒褐色土で埋没している。長楕円形を呈する102号土坑では底面から炭化材が少量出土しているが、その他に時期判定可能な土器等の遺物を伴うものはない。4区の土坑については、位置や規模を一覧表にまとめた。

49号土坑

N-32グリッドに位置する。北側に20号住居、南側に1号祭祀跡が近接する。長軸2.1m、短軸0.9～1.24mの茄子形を呈し、確認面からの深さは30cmである。覆土中から比較的少量の土師器片と炭化材数点が出土した。土師器はいずれも破片で散乱した状態で出土しており、このなかから3個の杯が復元できた。土器は7世紀後半期に該当する。

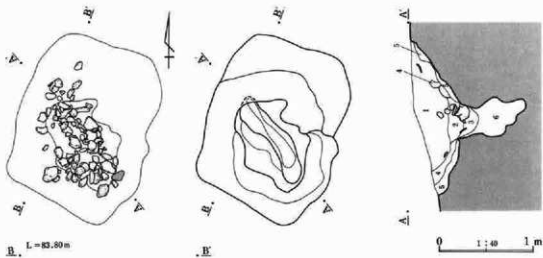
60号土坑

T-35グリッドに位置する。5区低地に面した台地縁辺部にある。確認面の平面形は長軸1.8m、短軸1.4



第327図 5区49号土坑と出土遺物

III 古代の調査



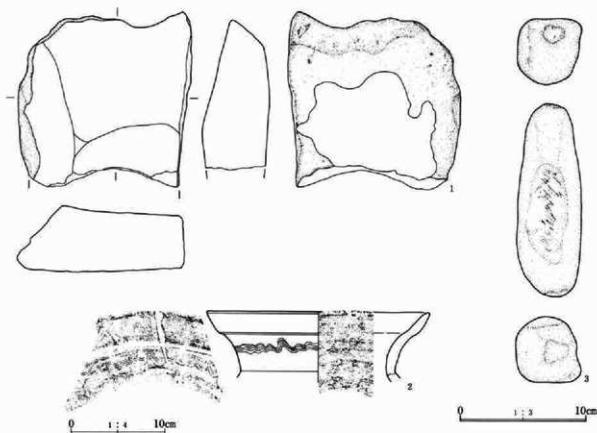
B. L=83.50m

0 1:40 1m

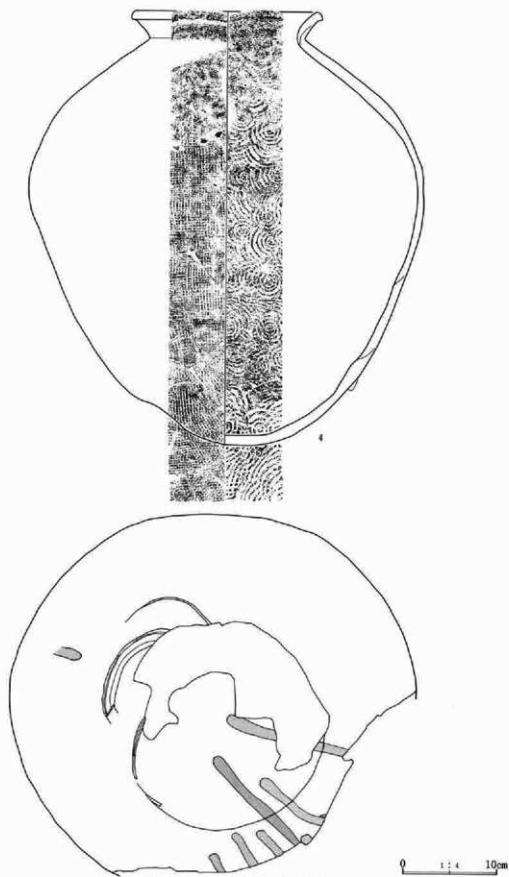


60号土坑

1. 灰黒褐色土。As-Cを少量含む。軟質。
2. 灰褐色土。地山土を比較的多く含む。軟質。
3. 灰褐色土。灰色粘質土を少量含む。軟質。
4. 灰褐色土。地山土を少量含む。
5. 灰褐色土と地山土の混土。シルト砂を多く含む。軟質。
6. 灰褐色土と地山土の混土。シルト砂を多く含む。軟質。

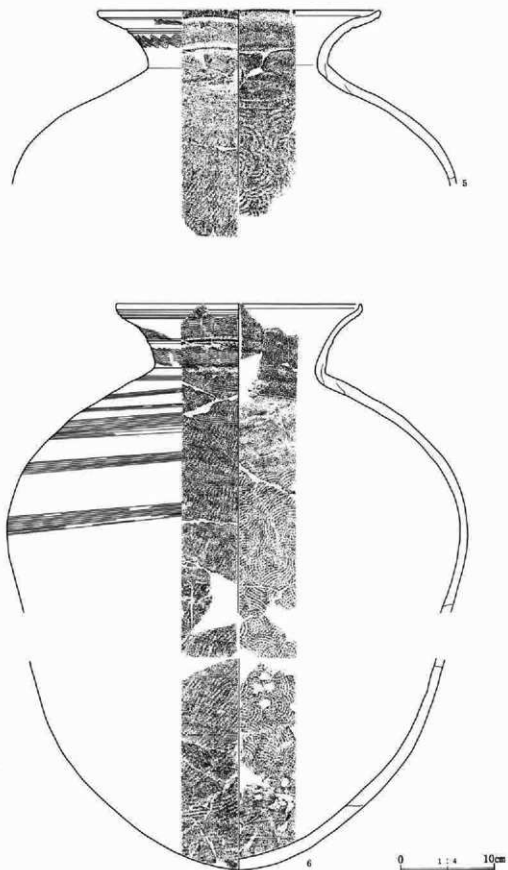


第328図 5区60号土坑と出土遺物(1)

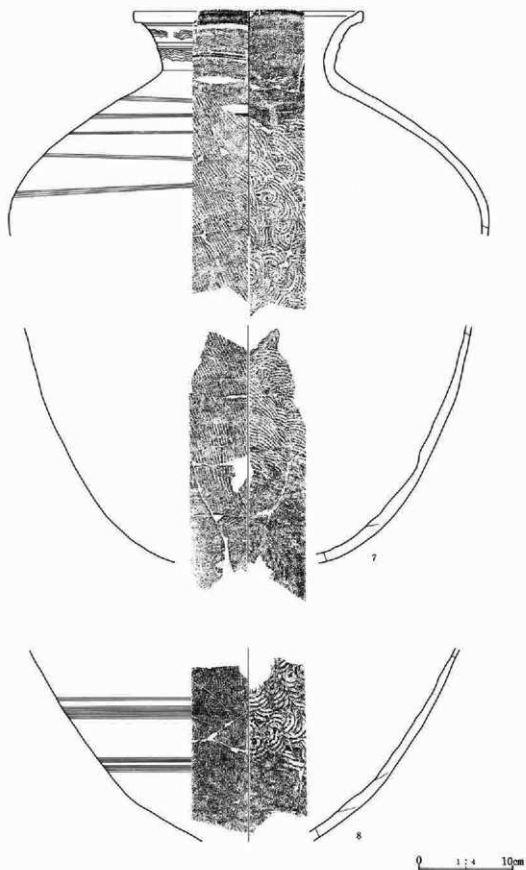


第329图 5区60号土坑出土文物(2)

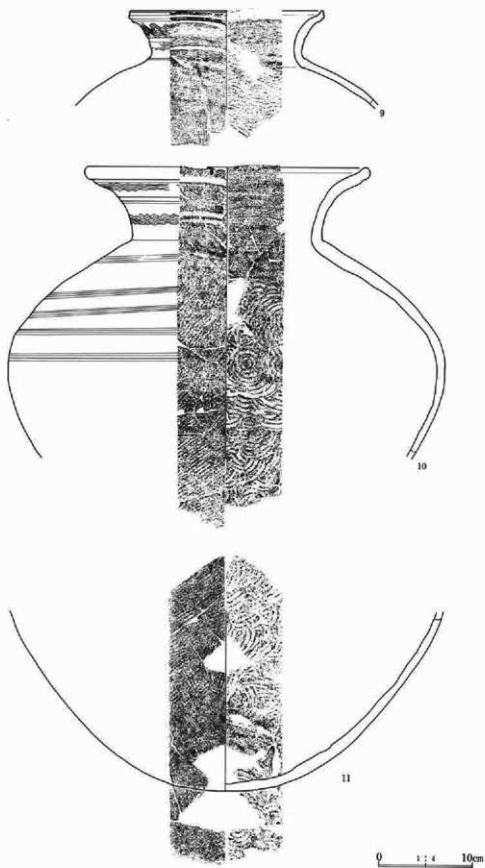
III 古代の調査



第330図 5区60号土坑出土遺物(3)

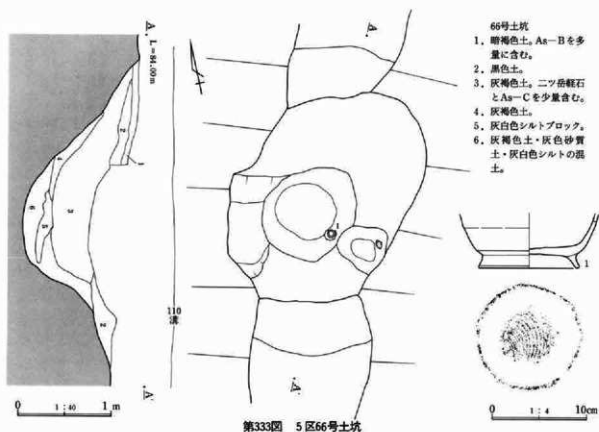


第331图 5区60号土坑出土遗物(4)



第332図 5区60号土坑出土遺物(5)

8. 土 坑



第333図 5区66号土坑

mの長方形を呈する。浅いすり鉢状を呈する上半部に、長軸90cm、幅25cm、深さ70cmの掘り込みが付く特異な形態の土坑である。遺物は覆土中位から底面にかけて、大量の須恵器破片と数10個の大小礫が投げ込まれた状態で出土した。須恵器はいずれも甕の破片で、合計9個体が復元できたが、いずれの個体も別地点出土のものとの接合関係をもっている。接合したもののうち、最も多いのは低地内1H水田および耕土出土のもので、他に台地縁辺、141号土坑、49号土坑、85溝、1号墳周堀、42・43号溝からも数片ずつ出土している。このことから、須恵器甕は別地点で破砕され、その主要なものを本土坑と低地へ投げ込んだものと考えられる。この他に土師器片数片と埴輪片3点が出土しているが、これらは流入土中に含まれていたものであろう。なお、礫群のなかに砥石1個(1)と礫石1個(3)が含まれていた。

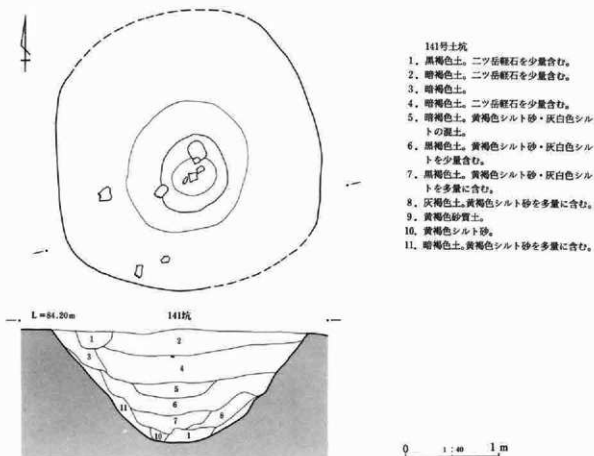
66号土坑

T-34グリッドに位置する。60号土坑と同様、5区低地に面した台地上にある。東西両側を中・近世の溝に切られ、かろうじて中央部分のみが残された。直径3.3mの円形を呈する大形の土坑で、確認面からの深さは1.08mである。断面形はすり鉢状で、底面東側に直径50cmの円形を呈する浅い掘り込み、西側に幅1.08mの溝状の掘り込みが認められた。後者は110号溝掘削後の崩落であろう。なお、口縁を欠失する須恵器杯が、底面から3cm厚いた状態で出土している。

141号土坑

S-35グリッドに位置する。85号溝と重複し、同溝を切っている。長軸2.94m、短軸2.80mのほぼ円形を呈する大形の土坑である。深さは1.19mで、断面形はすり鉢状である。埋没土は自然埋没の状況を示しており、覆土中から少量の土器と礫が出土しているが、時期判定の材料とはなり得ない。形態および覆土中位に灰白色シルトを含む点は66号土坑と共通しており、それとほぼ同時期の土坑と考えられる。

III 古代の調査

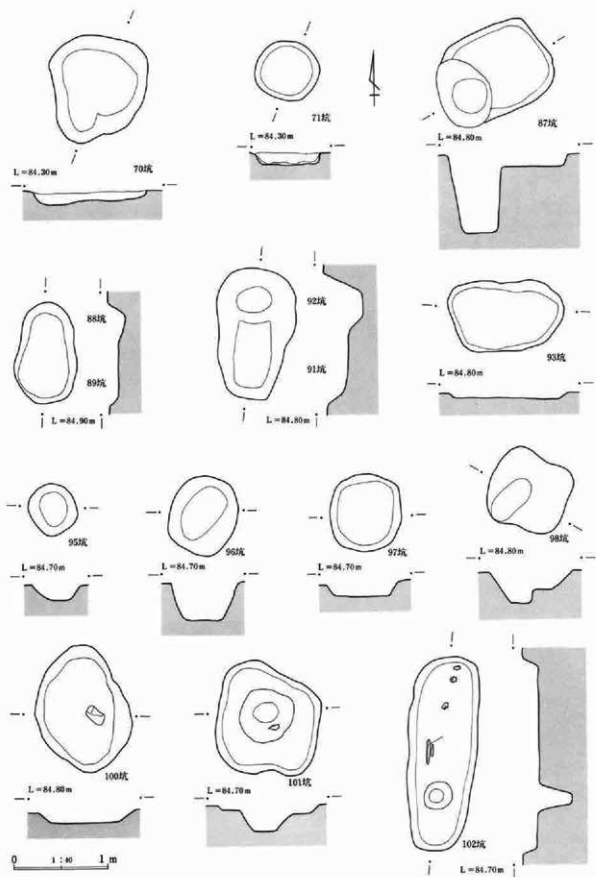


第334図 5区141号土坑

第8表 古代土坑一覧

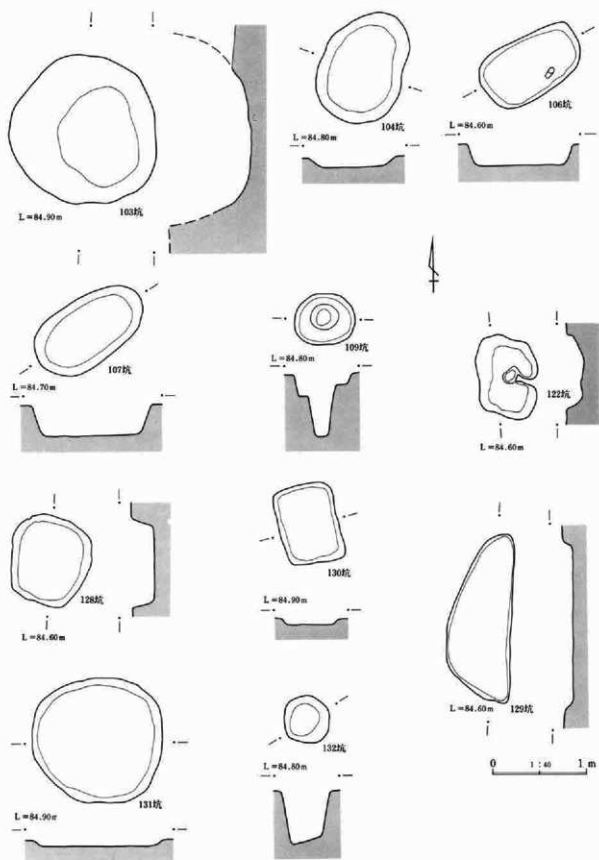
土坑 No.	位置	平面形	規 模		土坑 No.	位置	平面形	規 模	
			長軸×短軸×深さ (cm)					長軸×短軸×深さ (cm)	
70	4区	楕円形	120 × 100 × 12		101	4区	楕円形	112 × 110 × 10 (28)	
71	4区	円形	70 × 67 × 12		102	4区	楕円形	206 × 74 × 16 (32)	
87	4区	楕円形	128 × 94 × 13 (83)		103	4区	円形	156 × 158 × 41 (86)	
88	4区	円形?	58 × × 18		104	4区	楕円形	124 × 90 × 10	
89	4区	円形	68 × × 10		106	4区	長方形	112 × 64 × 23	
91	4区	楕円形	75 × × 23		107	4区	楕円形	128 × 70 × 36	
92	4区	円形	85 × × 40		109	4区	円形	64 × 54 × 25 (68)	
93	4区	円形	125 × 72 × 8		122	4区	長方形	85 × 63 × 20	
95	4区	円形	54 × 54 × 17		128	4区	楕円形	94 × 84 × 25	
96	4区	楕円形	84 × 73 × 40		129	4区	楕円形	178 × 70 × 11	
97	4区	円形	82 × 78 × 16		130	4区	長方形	86 × 62 × 8	
98	4区	正方形	86 × 76 × 35		131	4区	円形	140 × 132 × 8	
100	4区	楕円形	138 × 95 × 12		132	4区	円形	52 × 50 × 56	

8. 土 坑



第335图 土坑(1)

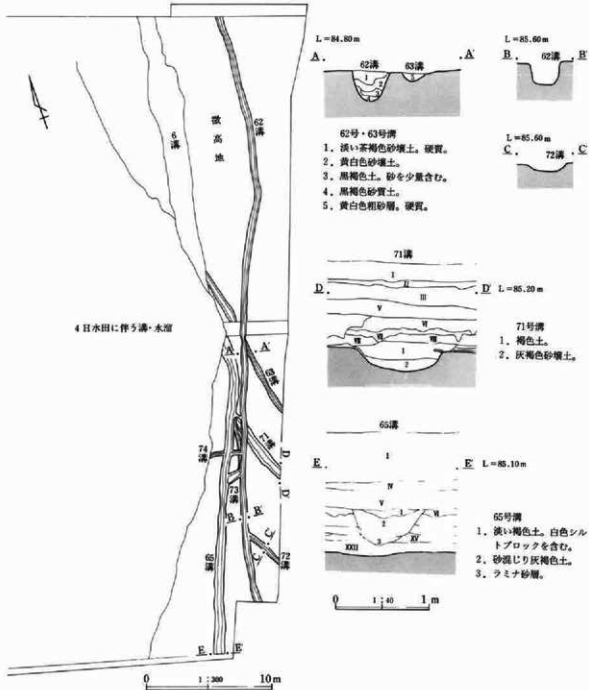
Ⅲ 古代の調査



第336図 土坑(2)

9. 溝

古代の溝と認定できたものは総数76条である。そのうちの大半は低地で確認されており、水田と切り離して扱うことができないため、それらは水田の項目で報告することにした。ここでは微高地上で確認された溝のうち、生産遺構との直接的な関連が考えにくい単独の溝を報告する。対象となる溝は3区および5区の微高地上にあり、ここでは区毎に順番に従って報告していきたい。



第337図 3区微高地上の溝

III 古代の調査

62号溝

3区微高地上を調査区に沿って南北方向に走向する。63号・71～74号溝と重複し、71号溝を切り、63号溝に切られている。溝幅は35～40cm、確認面からの深さは30cmで、断面形はU字状である。氾濫砂層で埋没しているが、どの氾濫に伴うかは不明である。III a・III b期島を切って構築しているが、III c期島はこの溝に沿った区画を示しており、これらに伴う可能性が高い。

63号溝

3区微高地上を斜めに横切って走向する。溝幅は25cm、確認面からの深さは東壁寄り20cmである。III c期島と62号溝を切って構築しており、III d期島に切られている。

65号溝

南半は62号溝に並走し、北半は北に向かって走向を変えている。溝幅は76cm、確認面からの深さは35cmである。確認面はAs-B下水田耕土下で、重複する74号溝を切っている。

71号溝

63号溝の南側にあり、走向はほぼ同方向である。65号溝以西は確認できない。溝幅は90cm、確認面からの深さは30cmである。確認面はIII期島と同一面で、重複する62号溝に切られている。

72号溝

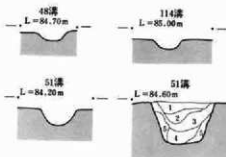
71号溝の南側にあり、同走向をとる。溝幅は40cm、確認面からの深さは8cmである。62号溝と重複し、それ以西では確認できない。III期島との関係は不明である。

73号溝

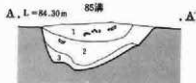
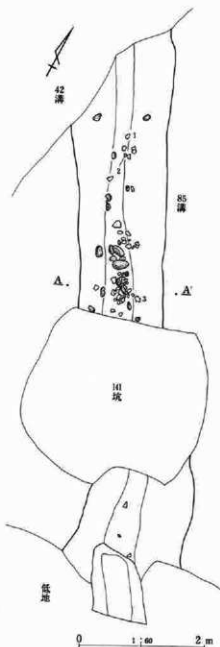
62号・65号両溝の間で、南北方向から東西方向へ直角に折れ曲がる部分が確認されたが、それ以外は確認できない。溝幅は25～58cm、確認面からの深さは10cmで、灰白色シルトで埋没している。

74号溝

62号溝以西で東西方向に走向をとる一部を確認した。溝幅は24cm、確認面からの深さは15cmで、灰白色シルトで埋没している。

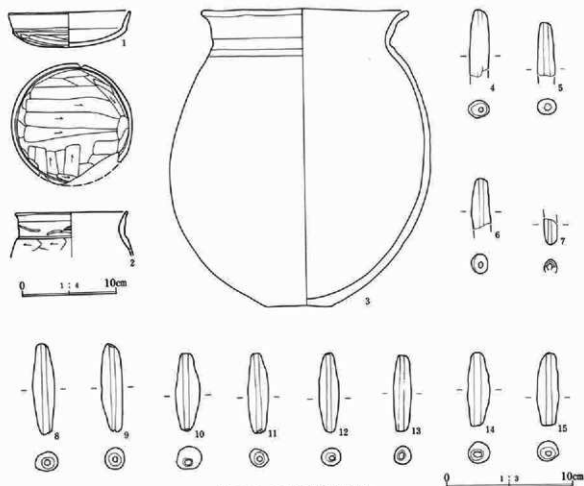


- 51号溝
1. 薄い褐色土。二ツ房軽石・As-Cを多く含む。
 2. 褐色土。As-Cを少量含む。
 3. 黒褐色土。
 4. 灰褐色土。As-Cを少量含む。
 5. 地山土と4層の混土。



- 85号溝
1. 暗褐色土。二ツ房軽石・As-C・焼土粒を多く含む。
 2. 暗褐色土。地山土を少量含む。
 3. 暗褐色土と地山土の混土。

第338図 5区微高地上の溝



第339図 5区85号溝出土遺物

48号溝 (第167図、第338図)

5区北側の中央部で、東北方向に走向する一部を確認した。溝幅は32cmで、確認面からの深さは10cmである。22号住居と重複し、同住居に切られている。時期・性格は不明である。

51号溝 (第167図、第338図)

5区東側の住居群が集中する部分で確認された。南半は南北方向に走向するが、北半はくの字状に折れて北西へのび、途中で消滅している。7号・10号・11号住居と重複し、古墳時代前期の11号住居を切り、7号・10号住居に切られている。溝幅は北西方向の部分で68cm、確認面からの深さは43cmで、断面形は逆台形状である。底面に流水の痕跡は認められない。

85号溝 (第338図、339図)

5区南東部、中・近世の42号溝から低地へぬける一部を確認した。重複する141号土坑に切られている。溝幅は1.3～1.7m、確認面からの深さは北側で47cmであるが、南側では1m以上あり、低地へぬける部分ではさらに段差を付けている。また、底面には流水による凹凸が認められる。以上のことから、本溝は古墳周囲の天水を低地の水田へ引く水路であったとも考えられる。なお、覆土中より6世紀後半の土器と土鍾12個が出土している (第339図)。

114号溝 (第167図、第338図)

5区北西部で一部を確認した。走向は北西方向で、重複する古墳時代前期の19号住居を切り、古墳周堀に切られている。溝幅は26cm、確認面からの深さは8cmである。

10. 畠

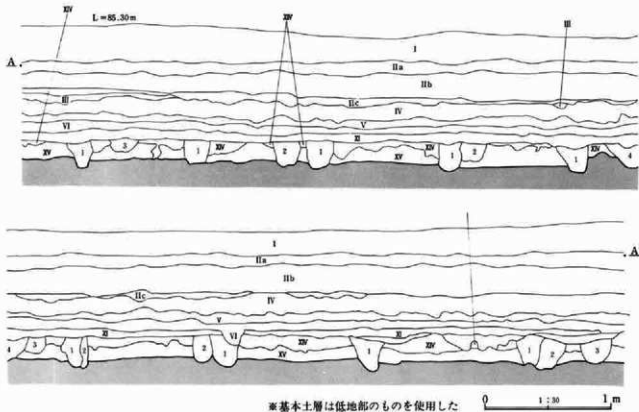
畠は微高地のほぼ全域と5区低地で確認されている。微高地と5区低地では土層の堆積状況が異なるため、これらを即座に対比することはできない。ここでは両者を分けて報告する。

(1) 微高地上の畠

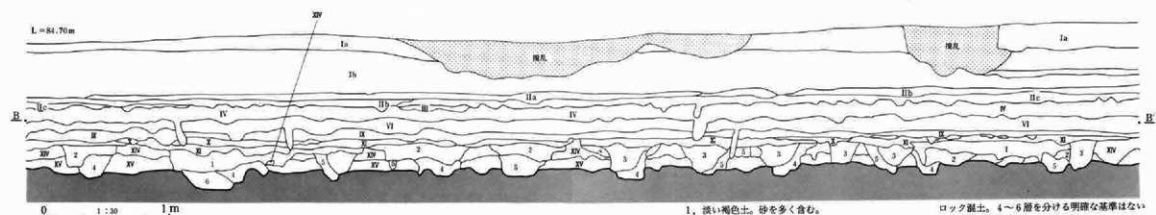
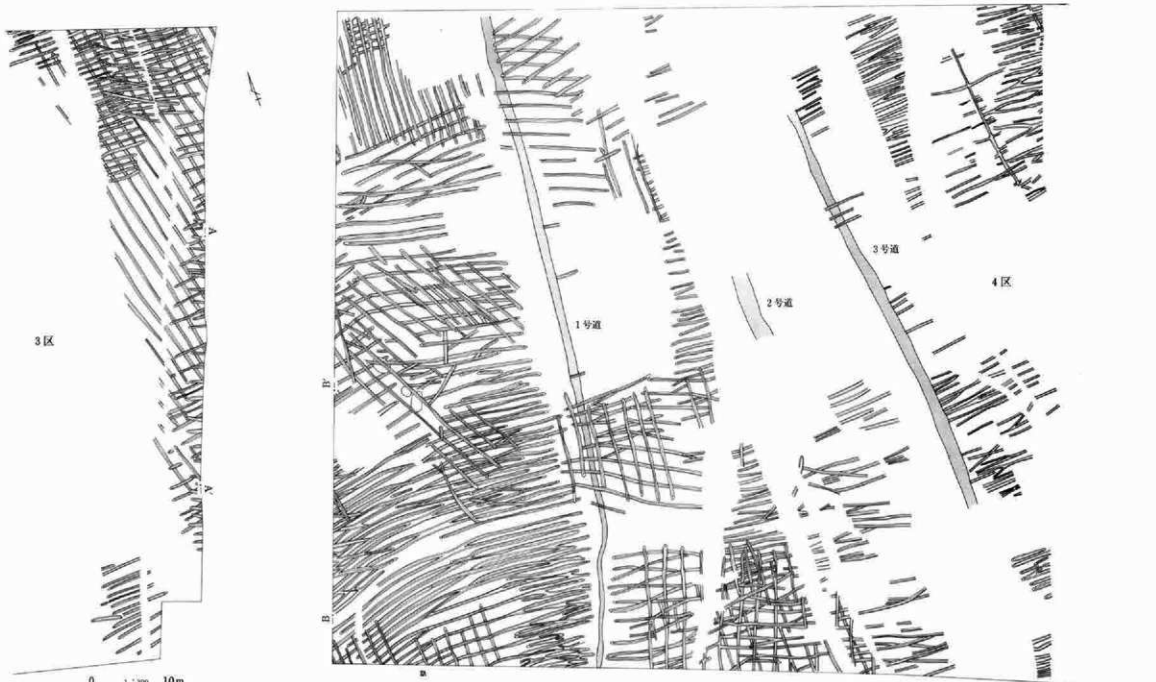
微高地上では4面にわたって畠が確認されている。最下層の畠はX XIV層上面で確認しており、明確なものも3区にのみ認められた。これをI期畠とする。次いで4H層(XIV層)で埋没した畠が、3区から4区の一部で確認された。これをII期畠とする。この4H層を踏み込む上層の畠は微高地のほぼ全域に認められ、良好な部分では4種類以上のさくが確認されている。これをIII期畠とする。その後微高地には古墳が築かれ、間もなく全域が居住域化される。再び微高地が生産域となるのは1H水田開削時で、3区から4区西側の一部は水田化され、それから東側は畠地となる。これをIV期畠とする。

ところで、古代の微高地上で最も古い遺構は古墳時代前期の住居群である。これらは粕川寄りの5区に分布するが、その頃3区・4区がどのような状況であったか、明確な遺構がないため判断としないが、3区から4区西側では4世紀代の土器片の散布が認められた。

1. 黄白色シルト(4H層)と褐色土の混土。(III期畠)
 2. 褐色土。黄白色シルト(4H層)を少量含む。(IIIb期畠)
 3. 黄白色砂土と褐色土の混土。(IIIc期畠か)
 4. 灰褐色砂混じり土。
- ※IIは2H水田耕作土対比層、XIVは4H層。



第340図 3・4区畠の土層断面図



第341図 3・4区畠と土層断面図

1. 淡い褐色土。砂を多く含む。
 2. 淡い褐色土。黄白色シルト(4日層)を少量含む。
 3. 褐色土。XIV・棕色ニツ虫化石・As-Cを少量含む。
 4~6. 褐色土・XIV・棕色ニツ虫化石・As-Cのフ
 ロック層土。4~6層を分ける明確な基準はないが、各層の土層割り合いが異なる。
 ※基本土層は仮地層を使用。Xは2日層、XIVは4日層。

I期畝 (第342・343図)

X XIV層上面で確認された。X XIV層は3区から4区西側にかけて認められる土層で、その他の地区では上層のX V層と混在している。3区では両層が明確に分層でき、X V層を削除し、X XIV層上面を精査した段階で、X V層とX XIV層の混在するさくが確認できた。4 H層 (XIV層) の混在はなく、III期畝とは明らかに異なる。このような状態で検出できたのは3区のみであり、4区側にこの様子は認められなかった。さくの底面部分のみの検出であり、畝の形状は不明である。確認されたさくは幅18~20cm、深さ4~8cmである。走向は南北方向のものと、北側の一部でそれらを切る東西方向のものとがあり、さく間の幅は前者が1

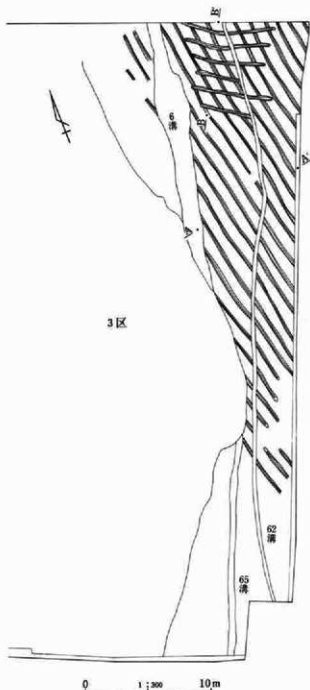
m前後、後者が1.2~1.3mである。両者ともさくの埋土中に榛名二ツ岳軽石を微量に含んでいることから、6世紀初頭以後の年代が与えられる。

II期畝 (第344・345図)

4 H層 (XIV層) で埋没した状況で確認された。畝を埋める白色シルトを4 H層としたのは、榛名二ツ岳軽石を多量に含む黒褐色土を耕土とし、上層のIII期畝が7世紀中葉の47号住居に切られていることによる。4 H層は3区の中央部から南側にかかる部分と、4区西側寄りの南半部のみ認められ、その他の部分は上層の畝等に働き込まれ、消滅している。畝は4 H層の範囲で確認されているが、3区南半と4区の一部では4 H層下に畝が認められなかった。

3区側では台地縁辺の傾斜に直交する方向に畝を立てている。畝の幅は1m前後で、高低差は8~12cmである。この南側では4 H層下に畝立てが認められなかった。休耕地と考えられる。なお、畝の北側で4 H層で埋没した直径10~30cmの円形を呈する浅い落ち込みが、10基ほどまとまって検出されている。

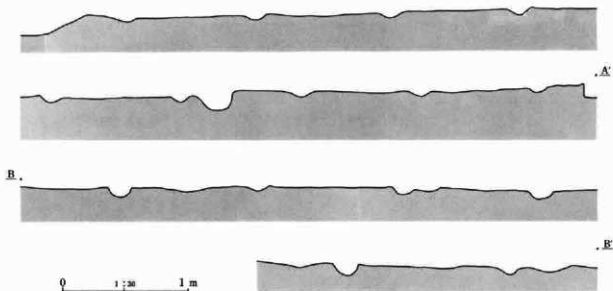
4区側では直角に折れる区画とそれに沿った畝が検出された。畝の畝幅や高低差は3区の畝と同様であるが、走向は3区のものに比べてややふれている。区画は畝とそれに沿った浅いさくで行われ、屈曲部には長軸8.4m、短軸2.5mの長方形の区画が付随している。南西隅の区画内は畝立てが認められず、休耕地と考えられる。その東側の畝のない空間では不定形な浅いピット状の落ち込みが多数検出された。3区畝の北側で検出された落ち込みと同様の状況であり、これらは作物の抜き取り痕の可能性が高い。



第342図 I期畝 (3区)

III 古代の調査

A, L=84.70m



第343図 I期島の断面図

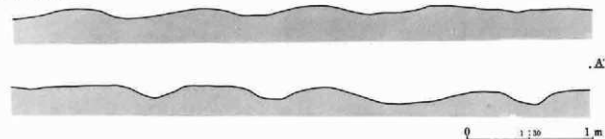
III期島 (第340・341・346・347図)

微高地のほぼ全域にわたって確認されている。その後の遺構等により削平された部分も多いが、一定期間にわたって全域が高地化されたものと思われる。3区および4区西側では、I期・II期の島を明らかに切っているが、4区東側と5区ではXV層とXXIV層は混在しており、層として確認できない部分も認められた。5区では1号墳後円部下で一部が検出され、4世紀代の住居と土坑を切っているが、4区東側ではさく内に榛名二ツ岳軽石が認められない部分もあり、古い島が含まれている可能性もある。

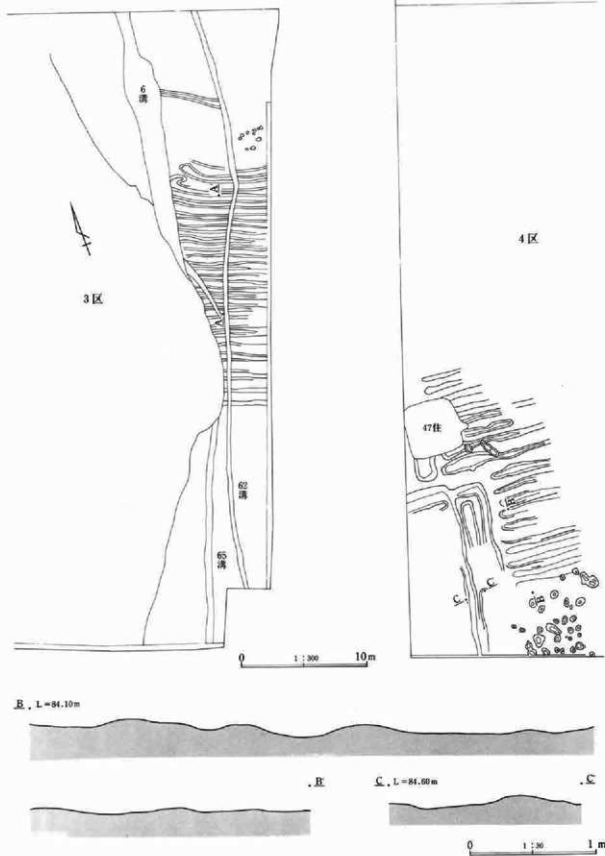
なお、島の調査に伴って道が3本検出された。2号・3号道は部分的な検出にとどまったが、1号道は全走向が確認できた。いずれも70cm前後の幅で硬化しており、硬化面には榛名二ツ岳軽石が認められた。走向は1号道は南北方向よりやや東に振れるが、2号・3号はほぼ南北方向をとっている。最も西側に位置する1号道は西側台地縁辺に沿って走向しており、その距離は40m前後である。2号道はその東側15mにあり、3号道はさらに10m東側に位置する。これらが同時に存在していたかどうかは確証がない。また、道を切る島があることから、III期の島の全時期を通じて存在した訳ではないが、道に沿って区画する島もある。

島は重複するものが多く、特に3区および4区西側では著しいが、この部分は下層に4H層があるため、

A, L=84.80m

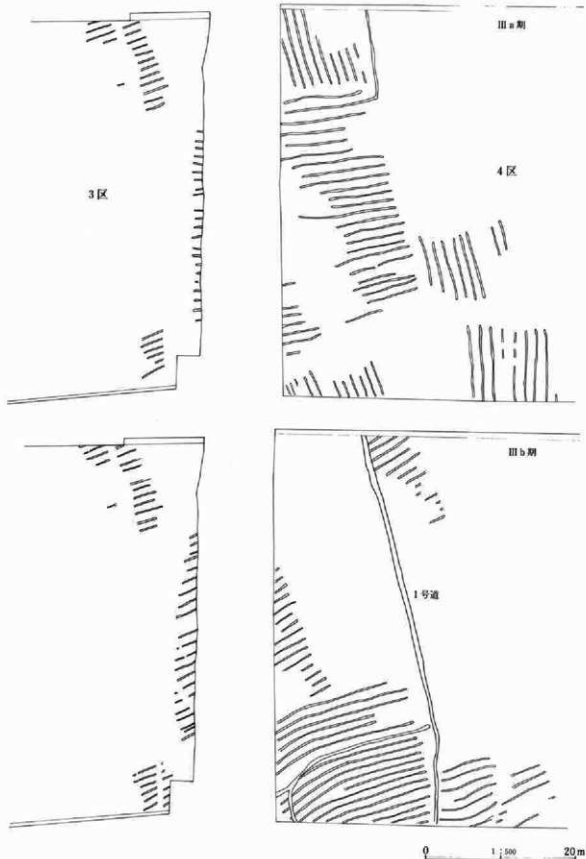


第344図 II期島の断面図

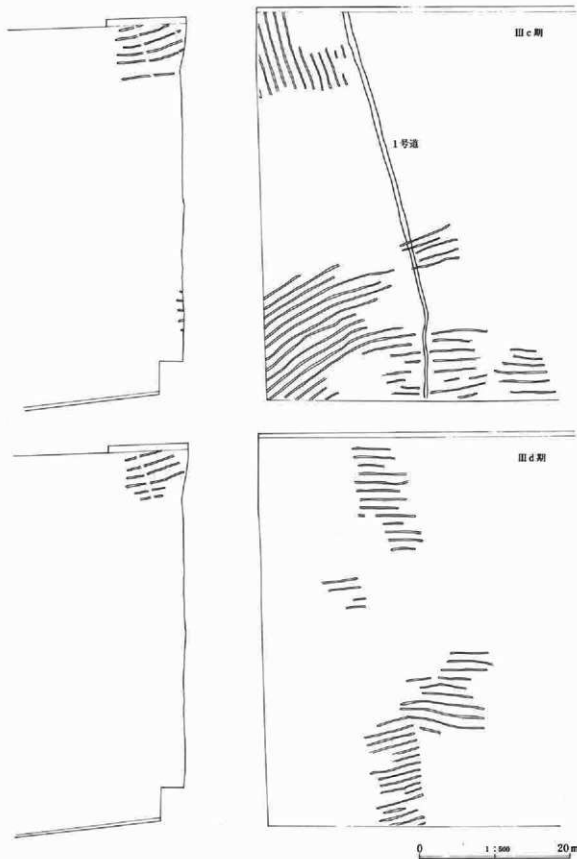


第345図 II期畠と断面図

III 古代の調査

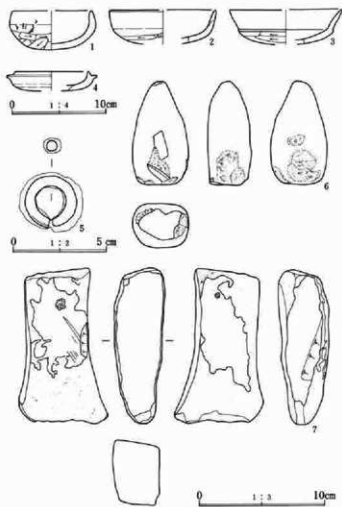


第346図 III期畠



第347图 III期墓

III 古代の調査



第348図 4区遺構確認面出土遺物

(2) 5区低地の畠 (第349～352図)

2H水田耕土下から榛名二岳火山灰 (FA) の間で確認された (第384図セクション図参照)。この間には2枚の灰白色粘質土があり、畠の確認にこの層が役立つ。調査面は大略3面に分けられる。下層の灰白色粘質土 (XVI層) 上面で確認したものをI期畠、上層の灰白色土 (XIV層) 下面で確認したものをII期畠、その上面で確認したものをIII期畠とする。

I期畠は畠間の狭いもの (I a) と広いもの (I b) とがある。一部で重複関係が認められ、I bがI aを切っている。いずれも部分的な確認にとどまるが、走向は南北方向をとっている。I aは畠間が一定せず、間隔も狭いことから、重複の可能性が高い。I bの畠間はほぼ1mである。

II期畠は畠間が1mでほぼ一定している。走向は南北方向をとるものを主に、西側の一部で走向の異なるものが確認されている。

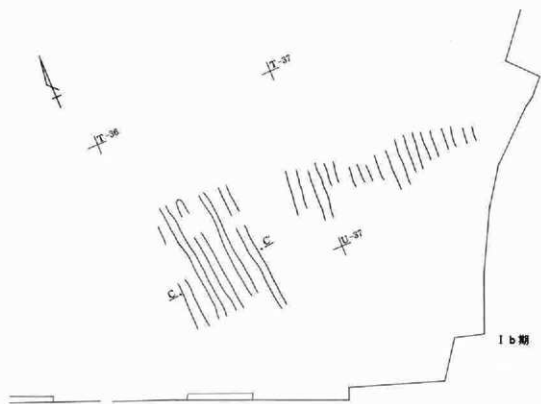
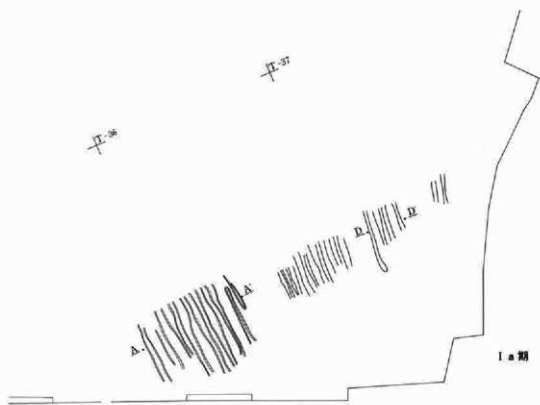
III期畠は数段階のものが重複しており、切り合い関係をもとに5段階まで判別できた。III aが最も古く、順に従ってIII eが最も新しい。畠間は1～1.2mである。またIII cとIII dでは、微高地上III期畠と同様に、直交する方向の組み合わせが認められた。なお、T-36グリッドで、畠と同時期の楕円形の落ち込みが検出されている (第351図)。

新旧関係の把握は比較的容易であった。その成果をもとに、III期畠を4段階に区分した (第346図・第347図)。重複関係はIII aが古く、III bが新しい。畠間はいずれも全走向を使用できた訳ではないが、大まかな傾向を見ることができる。畠の走向は各段階とも直交する方向を組み合わせており、全面に畠が存在する段階は認められない。空白部が多いのはその後の削平や発掘技術上の問題も含まれるが、子持村黒井峯・中組遺跡でも集落内に休耕地が認められた。本遺跡でもII期の畠に休耕地と考えられる空白部が存在しており、これが当時の畠地の実態であると考えたい。

なお、畠や住居等の確認作業に伴って遺物が出土している (第348図)。

IV期畠 (第404・407・408図)

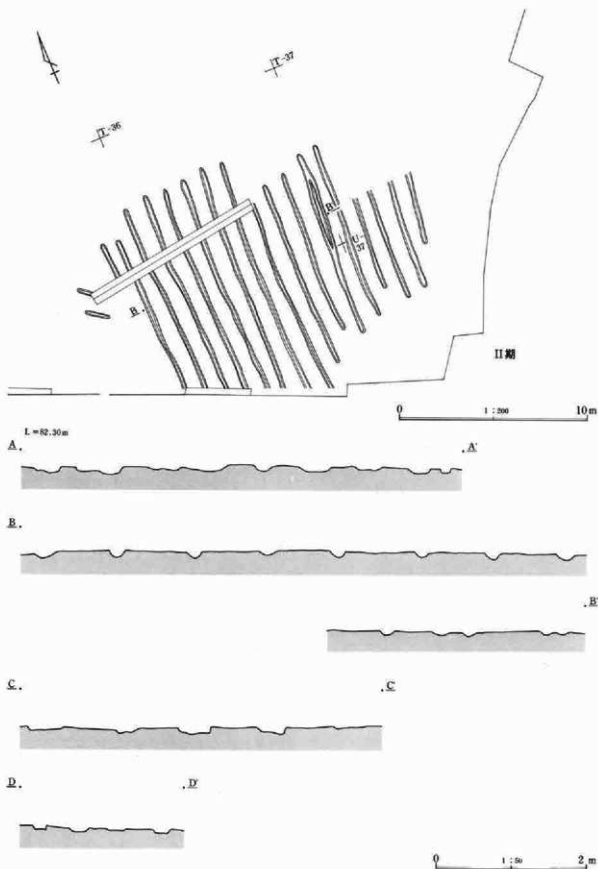
1H下で確認された。1H水田は一部微高地上にもあんでおり、131～133号溝を境に西側に水田、東側を畠とし、全域を耕地化している。この段階の畠は水田と有機的な関係をもつため、1H水田の項目で一括して報告することにした。



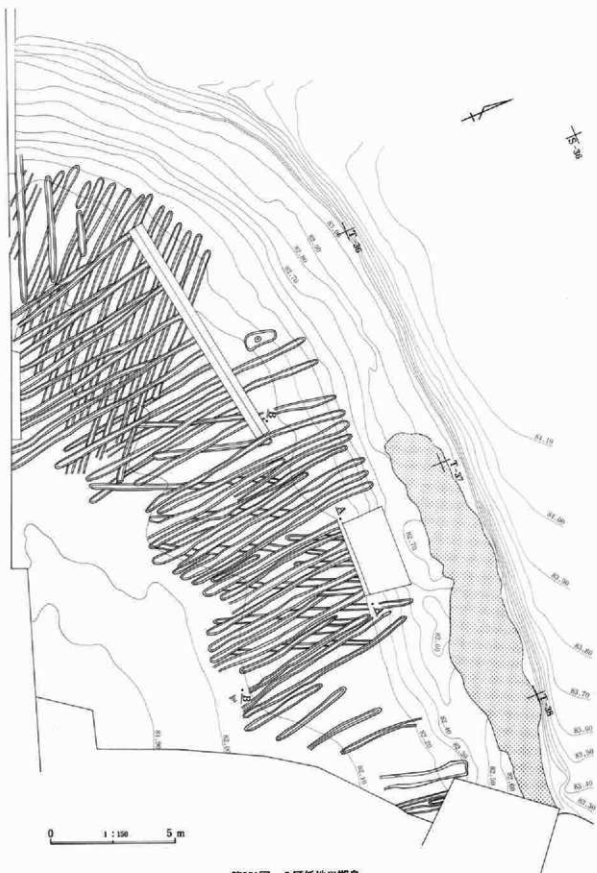
0 1:300 10m

第349图 5区低地I期畠

III 古代の調査

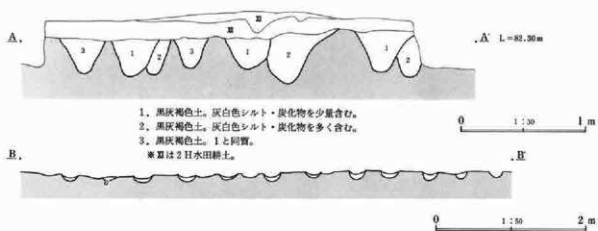


第350図 5区低地II期農と断面図

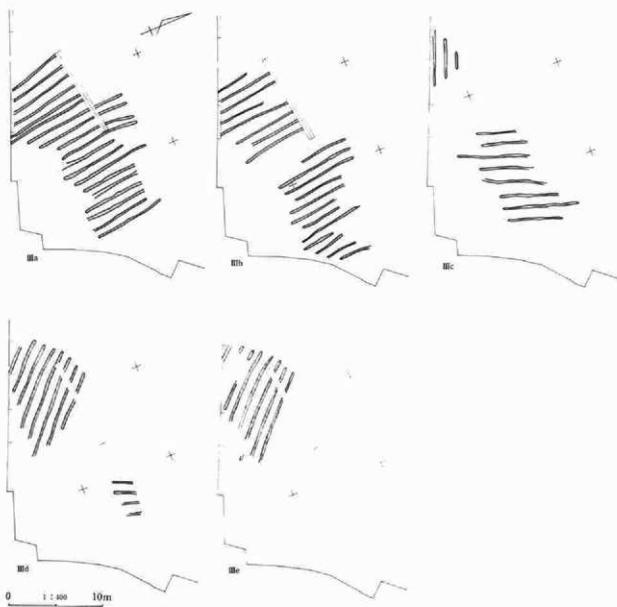


第351图 5区低地III期畠

III 古代の調査



1. 黒灰褐色土。灰白色シルト・炭化物を少量含む。
 2. 黒灰褐色土。灰白色シルト・炭化物を多く含む。
 3. 黒灰褐色土。1と同質。
- * Ⅲは2日水田耕土。



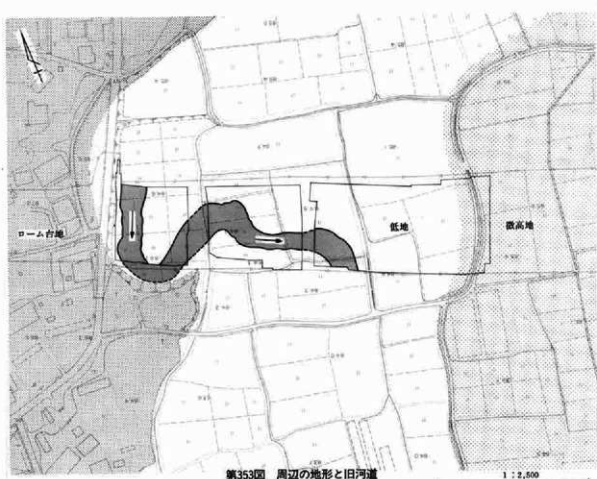
第352図 5区低地Ⅲ期農の分類と断面図

11. 旧 河 道

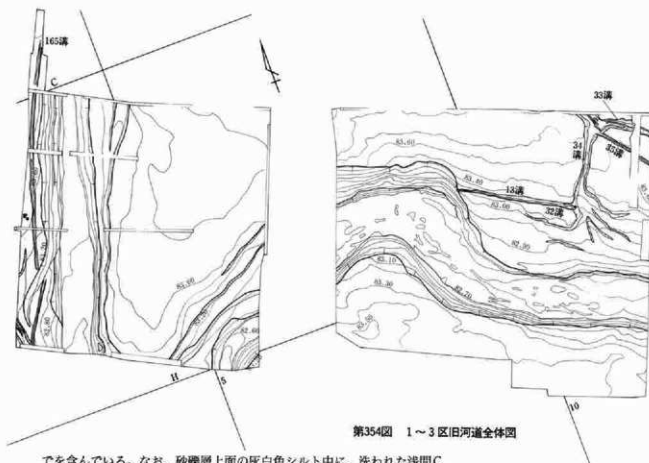
西側低地部の1区・2区から3区南西隅の水田下に河道があることが判明し、確認された遺構との関係、および埋没時期の確定を目的に調査を行った。

河道は幅14～16mの規模で、西側のローム台地に面した部分では、基盤の砂礫層（X XVIII層）を切り込んでいる。調査区内の流路は、西側のローム台地に沿って南下し、1区南側の台地にあたって北東方向に大きく折れ、3区南西隅を迂回して再び南下している。

河道上では浅間B軽石（As-B）下水田、1H水田、2H水田、および3区部分では4H水田が確認されている（各水田全体図および第354図参照）。河道の存在は1H水田調査時に、すでに想定できた。1H水田は一定の規格のもとに造成された水田で、基準となる南北方向の畦は直線的に配置されているが、その間を区割りする東西方向の畦には河道に沿った走向が認められた。2H・4H水田では全域が河道に沿って造成されており、これらの状況が当時の地表面の状態を最も良く示している。4H水田耕土下には、若干の間層を挟んで樺名二ツ岳火山灰（FA）が、層厚3cmの純層で堆積している。地表面下1.3mにあたる。この純層下に水田は作られていない。FA層下には若干の間層をはさんで、層厚20～30cmの粗砂層が堆積している。FA層より上位は水平堆積であるのに対し、この粗砂層以下はレンズ状に堆積しており、この層の堆積でほぼ河道が埋没したと考えて良い。粗砂層以下は、灰白色シルトと黒色粘質土の互層が40cmほどの走向で堆積し、それ以下は大型の流木を多量に伴う砂礫層となっている。流木は枝類から直径80cm以上の大型のものま



III 古代の調査



第354図 1～3区旧河道全体図

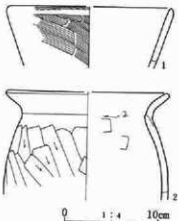
を含んでいる。なお、砂礫層上面の灰白色シルト中に、洗われた浅間C
軽石 (As-C) の薄層が認められたが、純層で堆積したものは確認されて
いない。

(1) 1区の調査 (第355～357図)

河道の調査に伴って、FA下粗砂層 (5H層～7H層) 直下から黒色粘
質土上半部にかけて、溝2本 (11号溝・166号溝)、杭と若干の木製品およ
び土器を検出した。

溝は河道の西側縁辺に沿って走向するもので、切り込み面は確認できな
かった。遺物等の出土も認められない。

杭は西側の南北に走向する河道の底面付近を中心に8本検出された。確
認面は粗砂層下15～20cmの黒褐色粘質土中である。杭の配置に規則性は認められないが、8本のうち7本が
中央部の一定範囲に集中しており、ここに何らかの人為的遺構があったものと考えられる。太さは直径3～5
cm大のものが多く、地中に残っていた長さは10～15cmほどである。最も良好な状態で出土したのが杭7で、
直径8cm、長さは約1mである。全面に金属器による削りが認められ、先端は鋭利にとがっている。もとは
腐食でやせていることから確認面より上位は腐食で欠失していることがわかる。この杭はその後紛失し、現
在手元がない。なお、この他に加工痕の認められる木製品2点 (第356図4・5) と流木が若干検出されてい
る。南東隅で直径15cm、長さ5mの倒木が確認されたが、腐食が著しく木質がほとんど残っていなかった。
この面の流木は枝等の小型のものが多く、流木はほとんどなかったと判断されることから、これは周辺の木





第354図 1～3区旧河道全体図

が倒れたものと思われる。

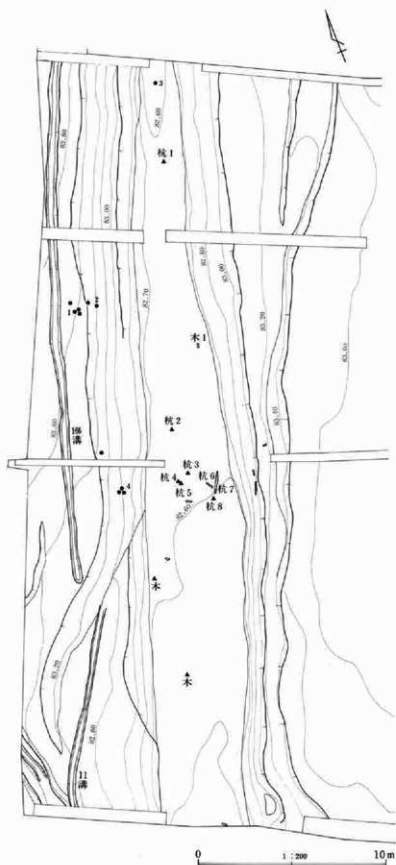
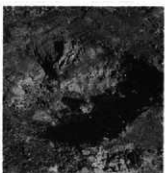
土器は西側河道の西側縁辺を中心に出土した（第357図）。北西隅の拡張部分で縄文前期から後期の土器片が少量出土しているが、これは西側台地からの流入であろう。その他はいずれも土師器で、杯1個（3）、有段口縁の壺1個（1）、小形丸底の壺1個（2）、甕1個（4）の4点が復元できた。3は河道底面の黒色粘質土面およびその直上から破片状態で出土したが、完形に復している。粗砂層の年代を知る手がかりとなる。1・2・4は河道西縁辺の黒色粘質土中からの出土である。このうち1・2は1.5mの範囲に散乱したものが接合し、2はほぼ完形に復した。4はその南側10mの位置で確認され、2m離れて出土した破片が接合している。縁辺部には粗砂層がおよんでいないが、この4個体は5世紀代のほぼ同時期の年代が与えられる。

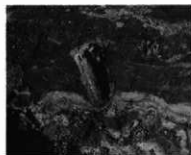
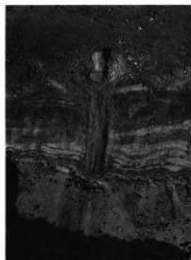
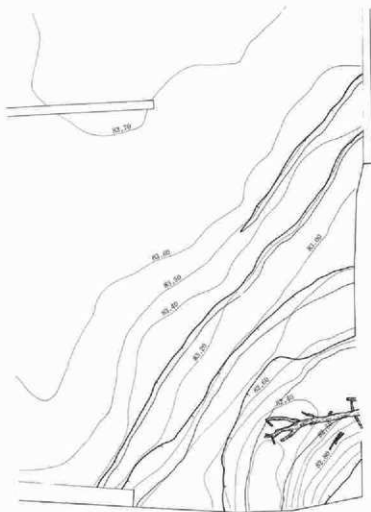
これらの土器がどのような活動に伴うものか判然としないが、河道中の枕や木製品もこれらに伴う可能性が高い。

(2) 2区の調査（第354図）

河道縁辺と北側低地面で土器および溝状の落ち込みを確認した。出土した土器は弥生後期後半樽Ⅱ式土器の口縁部破片1点（第354図1）と、7世紀前半の土師器甕（同図2）1点で、いずれも北西部河道縁辺からの出土である。溝状の落ち込みは北東部の広い平坦面で確認された。確認面は浅間C緑石（As-C）を含む灰白色砂壤土面である。4区へつながる33号溝以外に、数方向に直線的に走向する溝が存在するようである。いずれも底面のみ確認であり、切り込み面や遺物は確認できない。

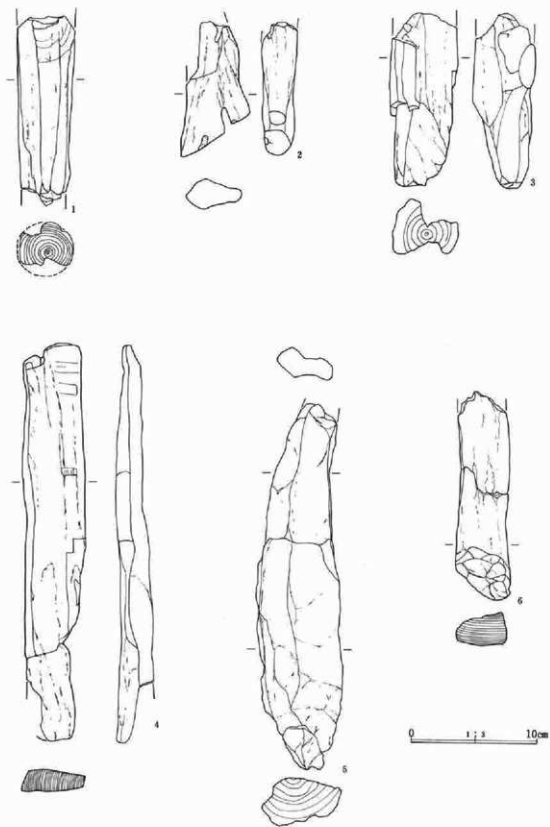
III 古代の調査





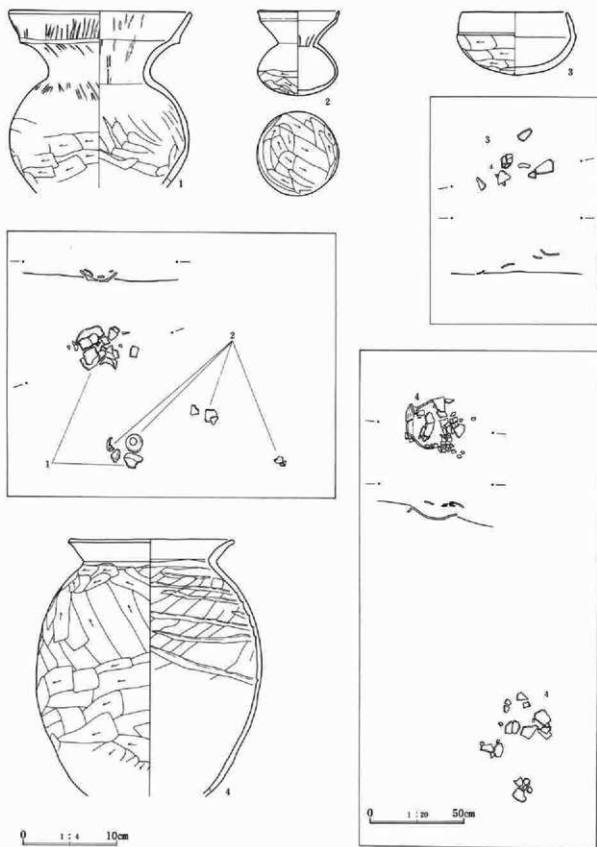
第355图 1区旧河道全体图

III 古代の調査



第356図 1区旧河道出土の杭と木製品

II. 旧河通



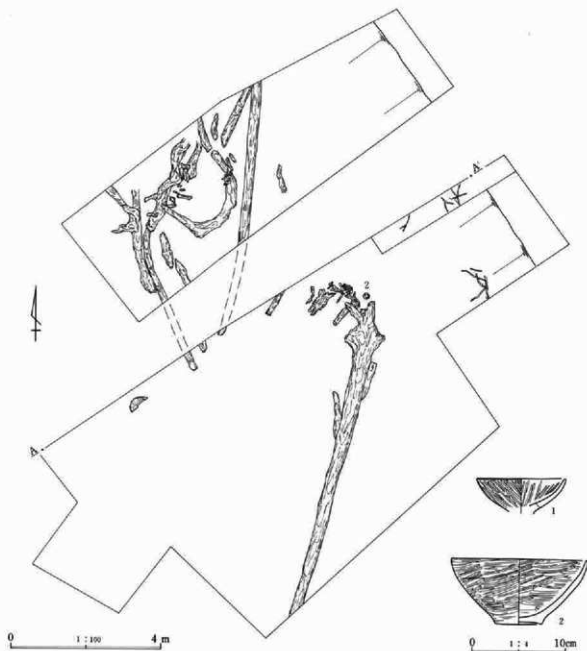
第357図 1区旧河通出土の土器

III 古代の調査

(3) 3区の調査 (第358・359図)

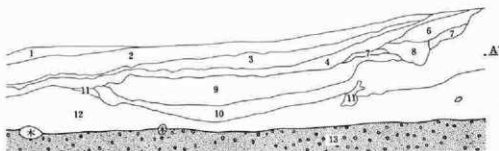
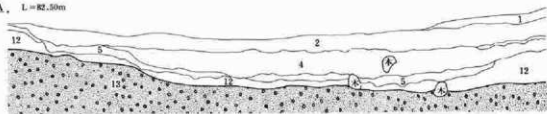
3区では南側に回り込む一部が確認されたが、湧水が著しいため面的な調査は断念し、部分的な確認調査を行った。ここでも砂礫層 (X X VIII層) 中に多量の流木が認められた。直径20~50cmのものが多く、長さ5m以上のもも含まれている。なお、砂礫層上面の灰白色シルト中から弥生時代末~古墳時代前期前半に比定される罌台 (1) と杯 (2) が出土している。2は完形状態での出土である。

河道底面の確認はできなかったが、以上の調査状況から、本河道は弥生時代後期以前に活動していた粕川の一部と考えてよい。その頃の本遺跡は粕川の中州にあったのかもしれない。その後、本河道には砂礫とと



第358図 3区旧河道流木の出土状況と出土遺物

A, L=82.50m



0 1:50 2 m

- | | |
|------------------------------|----------------------------|
| 1. 灰白色粘質シルト。 | 9. 灰黄白色砂質シルト。 |
| 2. 黒色粘土と灰白色シルト質粘土の縞状堆積互層。 | 10. 灰黒色シルト・灰白色シルトの縞状互層。 |
| 3. 灰黄白色細シルト。 | 11. 灰黒色細砂ブロック。 |
| 4. 緑褐色シルト。均質。右側縁辺部ではAs-Cを含む。 | 12. 灰白色シルト。3~5cm大の円礫を多く含む。 |
| 5. 暗緑褐色シルト。 | 13. 砂礫層。 |
| 6. 暗灰褐色土。シルト質で、As-Cを含む。 | |
| 7. 灰褐色土。As-Cと砂を含む。 | |
| 8. 暗褐色土。シルト質で、As-Cを含む。 | |
- ※泥木は12・13層に含まれる。

第359図 3区旧河道土層断面図

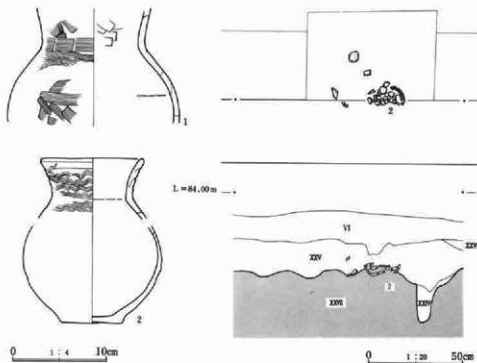
もに大量の流木が流れ込んで河道を埋めつくし、流路は現河道に一本化した。その後、低地では水田耕作が開始され、河道には時折襲ってくる鉄砲水が流れ込む以外は湿地状の状態が続き、灰白色シルトをはきみながら黒色粘質土が堆積した。3区河道の灰白色シルト層（XII層）もこの鉄砲水の一つであり、出土した土器の年代から、8H層に該当する可能性が高い。湿地と化した河道も生活領域の一部として何らかの活動にかかわっており、1区の杭群や木製品・土器はその活動を示している。河道は5世紀代に流れ込んだ粗砂層でほぼ埋没し、平坦化する。この粗砂層は出土土器の年代から7H層に該当する可能性が高い。榛名二ツ岳火山灰（FA）降灰後、河道部は生産域の一部として水田化される。

本遺跡名の一部である「清水田」は、この河道が存在した1~3区の小字である。地元では干ばつ時でもここは潤潤であり、毎年他の地区に先がけて田植えができたという。河道の伏流水がそれを可能にしたのである。その土地柄からつけられた「清水田」の正体は、この河道であることが判明した。

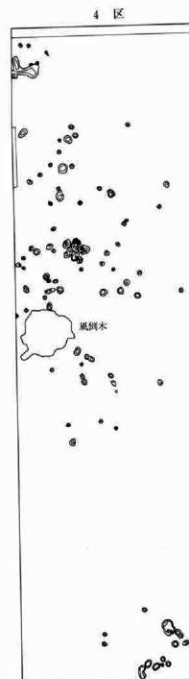
12. 水 田

本遺跡では11時期の面で水田を調査している。水田は1～3区の低地部を中心に、4区西側の一部と5区低地でも数時期の面が認められた。このうち9面の水田は河川氾濫層で埋没しており、発掘調査時に氾濫層の頭文字を冠して「1H水田・2H水田」と称した。本報告でもこの名称を踏襲することにする。今回調査した水田は、年代的には弥生時代後期後半から平安時代末期までの間に含まれる。このうち最も新しいのは浅間B軽石(As-B)で埋没した水田で、その耕土下で発見された河川氾濫層を、上層から順に1H・2H・4H・5H・6H・7H・8Hとした。4Hと5Hの間には、6世紀初頭に降灰した榛名二ツ岳火山灰(FA)が純層堆積している。3Hは3区の一部で確認されたが、3H下から水田は検出できなかった。微高地上と低地では土層の質感や層厚が異なるため対比は非常に難しく、これらは上位のものを1H-1、下位のものを1H-2とした。2区・3区低地では1H水田耕土下で多数の溝が確認されており、1H-1・1H-2はこれらと同時期の可能性が強い。3区では8H水田耕土下から、8H水田とはまったく異なる

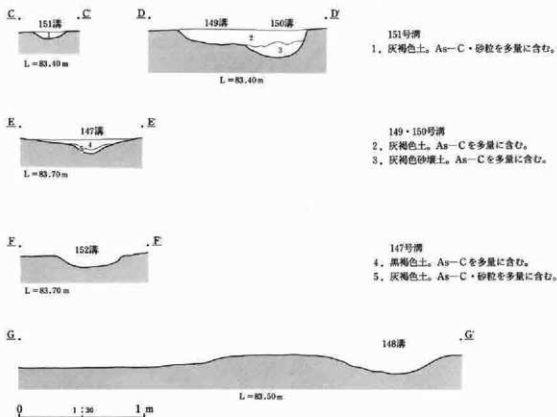
区	1区	2区	3区	4区	5区
水田名	低地	低地	低地	微高地	低地
As-B下	●	●	●	●	
1H	●	●	●	●	●
1H-1		○	○	●	
1H-2				●	
2H	○	●	●		●
3H					
4H		○	●		
FA					
5H			●		
6H			●		
7H			●		
8H			●		
8H耕土下			●		



第360図 3区8H水田耕土下出土遺物



第361图 3区8水田耕土下全体图



第362図 3区8H水田耕土下断面図

る水田区画の痕跡が確認された。これらも含め、ここでは古いものから順次報告していきたい。

なお、水田の調査に伴って確認された溝は、水田と不可分の関係にあると考えられることから、本項で扱うことにする。

8H水田耕土下の水田区画 (第361～363図)

8H水田の耕土である浅間C軽石を多量に含む黒色土層を取りさった面で、8H水田とはまったく異なった水田区画の痕跡が確認された。痕跡が確認された範囲は3区低地部のほぼ中央、117号溝と119号溝の間である。この範囲は東側に比べてやや高い面となっており、北から南に向かって僅かに傾斜している。119号溝の西側は旧河道の低地になっている。

水田の区画は、主要水路と考えられる148号溝の両側に付く大アゼと、そこからほぼ直交方向にのびる小アゼで構成されるものと考えられるが、一区画が明瞭に確認されたものはない。直交するものが多いことから、方形状の区画が主体になると思われるが、大アゼから鋭角にのびる区画も見られ、一様ではない。アゼの規模は、大アゼが幅1～1.2m、高さ10cm、小アゼが幅60～90cm、高さは遺存良好な部分で6cmほどである。なお、148号溝と119号溝間では、段状の区画や溝状の落ち込み、および大小の浅い土坑状の落ち込みが多数検出されており、これらも水田区画等の痕跡の一部と考えられる。

水路は148号溝が主要な導水路と考えられ、152号・147号・151号溝は導水路から取水して各水田に用水を配る水路であろう。

なお、旧河道に近い位置から樽皿式土器2個(第361図1・2)が出土している。この時期の調査範囲から



ややはずれているが、いずれも浅間C軽石を多量に含む黒色土層の最下面から出土しており、本遺構に伴う可能性が高い。また、西側の微高地縁辺では浅間C軽石を埋土上位に多量に含むピット状の落ち込みが多数検出されており、この部分では畝耕作が行われていた可能性が高い。

8 H水田 (第364・365図)

旧河道部と微高地を除く3区のほぼ全面で確認された。水田面は117号溝と119号溝の間の主要部分に対して、117号溝の東側はやや低い面となっているが、全体に北から南に向かって僅かに傾斜しており、水田はこの傾斜に沿って造成されている。本水田は旧地表面に直接のっているが、東側が低い面となっているのは、この下部に古い河道が存在するためであろう。

新土は浅間C軽石を多量に含む黒色粘質土で、層厚はほぼ6～8cmである。微高地西側部分はその後の水田や溝により破壊されており、確認できない。119号溝の西側では、緩やかな傾斜部分では新土と同様の土層が存在するが、上面を1 H水田耕土に動き込まれており、この部分にも8 H水田が存在したかどうかは不明である。

水田面を覆う白色シルト層(8 H層)は上面を7 H水田に動き込まれており、現存する層厚は2～3cmであったが、水田面のほぼ全面にわたって認められた。そのため、アゼは当時の状況をそのまま残していると言ってよいが、117号溝東側では白色シルト層がほとんど認められないため、確認できなかった部分が多い。

水田の区画は、2mほどの間隔で帯状に走向する縦アゼの間を横アゼで区切っていく、いわゆる「開田型小区画」の典型である。アゼは全て小アゼで構成されており、アゼの規模は幅40～60cm、高さ5cmほどである。縦アゼは傾斜に直交する走向をとるが、地形の起伏や溝の湾曲に沿って造成されているため、数カ所に変則的な区画を設けて調整を行っている(第363図)。なお、横アゼは縦アゼよりやや低い作りになっている。



A. L=84.00m

119溝



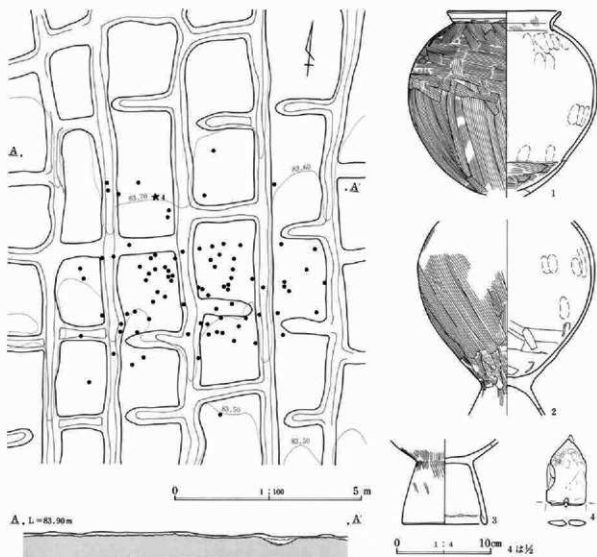
120溝

117溝

A

0 1:300 4m

第364図 3区8H水田全体図



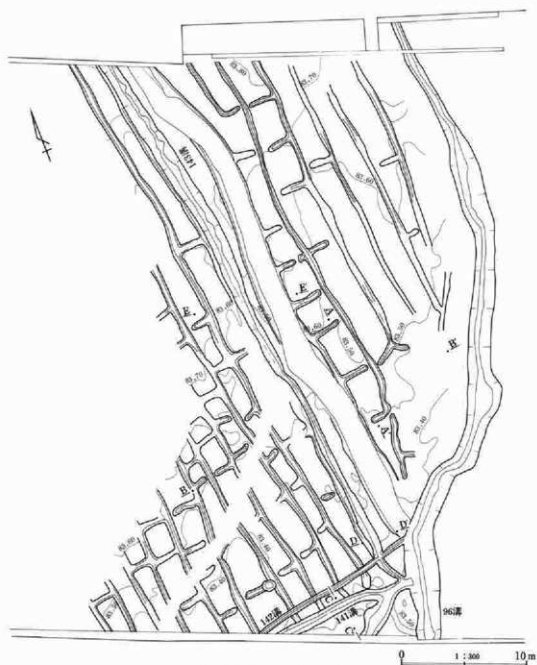
第365図 3区8H水田出土遺物と出土状況

水田区画の全形が確認されたものは191区画あった。形状は長方形がほとんどであるが、区画の変則部分や水路沿いでは形が変形している。このうち最小区画の面積は1.60㎡、最大区画の面積は11.55㎡で、平均面積は4.06㎡である。191区画のうち、約7割の132区画が2.5～5.0㎡に集中しており、比較的均質な区画で造成されていると言えよう。

本水田に伴う水路は117号溝と119号溝の2本が該当する。いずれも北から南に向かって緩やかに蛇行しながら並走しており、その間の距離は25～29mである。水田域側では水路の縁にアゼが付けられていることから、この水路は取排水の役割と大区画の役割の双方を兼ねていたと考えられる。なお、全体には認められなかったが、横アゼの左右いずれかにアゼの切れる部分があり、縦アゼに沿ってかけながす配水方法をとっている。なお、117号溝にかわって145号溝が使用された時期もあるようだ。

遺物は水田域の中央部を中心に、耕土中から古墳時代前期の土器細片が散乱した状態で多量に出土している。器種は台付甕がほとんどである。特に集中する部分は、第365図に示した地点と141号溝の南側の壁際で、前者からは台付甕の体部（2）と脚部（3）および岩製の磨製石鏝1点（4）が、後者からは台付甕1個体分（1）が復元できた。出土土器の年代は、いずれも4世紀後半に位置づけられよう。

III 古代の調査



第366図 3区7H水田全体図

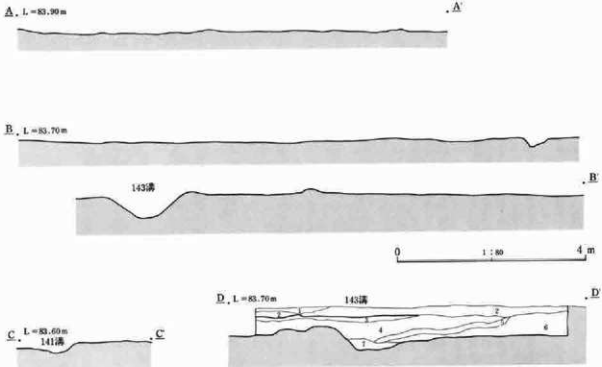
7H水田 (第366～368図)

3区低地東半のやや低い部分で確認された。3区中央のやや高い部分は6H水田およびその上位の水田により踏み込まれたものと考えられる。地形面は8H水田と同様である。

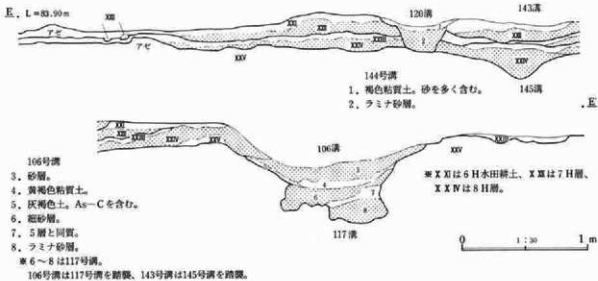
耕土は8H水田面をおおう白色シルト(8H層)をかなり踏み込んでおり、灰褐色粘質土と白色シルトの混土となっている。層厚は5cm前後である。

水田面を覆う灰白色シルト砂層(7H層)の層厚は、平均5cm前後であるが、厚い部分では10cmほどあるため、水田面の遺存状態は良好であった。アゼ上を歩行する足跡も数カ所で確認されている。

水田の区画は8H水田とほぼ同様の「開田型小区画」で構成される。アゼは全て小アゼで構成され、アゼ

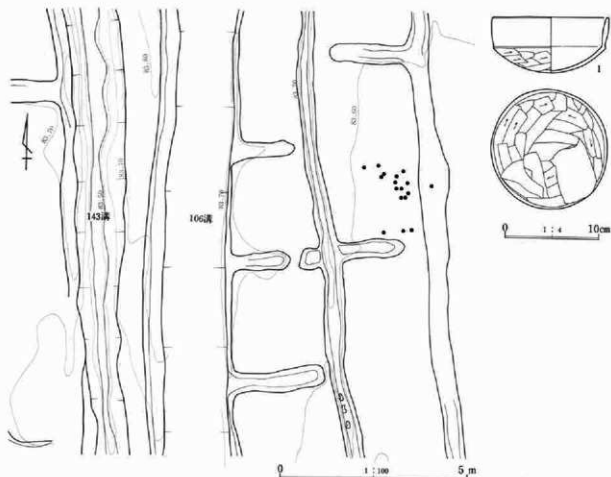


- 143号溝
- | | |
|----------------------|-------------------|
| 1. 黄白色砂層。(5H層) | 5. 灰褐色砂混じり粘質土。 |
| 2. 灰褐色砂混じり土。(5H水田耕土) | 6. 灰白色シルト砂層。(7H層) |
| 3. 淡い褐色粘質土。(6H水田耕土) | 7. 粒砂層。(143号溝の砂層) |
| 4. 灰白色シルト砂層。(7H層) | 8. 褐色粘質土。(7H水田耕土) |



第367図 3区7H水田断面図

III 古代の調査



第368図 3区7H水田出土遺物と出土状況

の規模は幅40cm前後、高さは最も良好な部分で8cmであった。縦アゼの間隔は2～3mで、8H水田に較べてやや広い部分が多い。横アゼが縦アゼに較べて低い作りになっている特徴は、8H水田と同様である。

水田区画の全形が確認されたものは31区画であった。形状は長方形がほとんどであるが、水路沿いでは変形したものが認められる。このうち最小区画の面積は1.36㎡、最大区画は9.66㎡、平均面積は5.98㎡で、8H水田よりやや区画が大型化している。

本水田に伴う水路は、96号・141号・143号溝が該当する。このうち96号溝と143号溝は、8H水田の117号・119号溝と同様に、水田の大区画を兼ねていたものと思われる。143号溝の両側にはアゼが付けられており、96号溝が蛇行する部分では溝の走向に合わせた変則的な区画が見られる。また、両溝は調査区南側で合流するが、この合流点での高低差や規模から、96号溝が主水路と考えられる。141号溝はこの合流点から西へ分水する水路で、北側縁辺には縦アゼが取り付けられている。配水方法は8H水田と同様のかけ流し方式がとられており、北側から配水した水を141号溝に落とし、必要に応じて主水路である96号溝から取水し、それらを南側の水田へ配る方法が取られていたのであろう。

遺物は調査区中央部の耕土中から、5世紀後半の杯1個体が散乱した状態で出土している（第368図）。

6H水田（第369図）

3区低地部の中央で確認された。低地部東側は上層の5H水田に働き込まれ、西側は1H水田に働き込まれて確認できない。地形面は8H水田時と同様である。



A, L = 83.90m



0 1:80 4m

L = 84.00m



L = 84.40m



A' D', L = 84.20m



92号溝

1. 褐色土。(4日水田耕土)
2. 褐色土。As-Cを少量含む。
3. 淡い黄褐色土。
4. 白色シルト。
5. 淡い褐色土。
6. 7日水田耕土。
7. XX層。

120号溝

1. 黄色粘質土。
2. 灰色シルト砂層。
3. 淡い褐色土と灰白色シルト砂のタネナ状互層。
4. 灰白色シルト砂層。

耕土は7H層を踏み込んでいるため、シルト砂混じりの褐色粘質土となっている。層厚は南側では5cmほどの部分も認められたが、中央部から北側では厚い部分でも1~2cmであり、アゼ部分以外は下の8H層が露呈している部分が多く見られた。つまり、この部分では7H水田耕土をそのまま6H水田が使用していたことになる。

水田面は層厚2~4cmの白色シルト層(6H層)でほぼ全面が覆われており、遺存状態は比較的良好であった。水田面やアゼ上を走行する足跡も数カ所で確認されている。

水田の区画は8H水田以来の「開田型小区画」を踏襲しており、アゼの構成・規模・縦アゼの間隔等の特徴は7H水田と同様である。

水田区画の全形が確認されたものは58区画であった。形状は長方形がほとんどであるが、120号溝に沿う部分では変形が認められる。このうち最小区画の面積は1.78㎡、最大区画は8.69㎡、平均面積は4.60㎡である。

本水田に伴う水路は61号・92号・120号・107号溝の4本が該当する。61号・92号溝は微高地縁辺に沿って1.5~3.0mの間隔で並走しており、この間は道であった可能性が高い。120号溝は、北半部では7H水田に伴う143号溝を踏襲しているが、南半部では流路を大きく南西方向へ湾曲させており、この部分の水田区画もそれに沿った走向をとっている。107号溝は8H水田に伴う119号溝を踏襲している。水路の使用法や配水方法は7H水田と同様であろう。

なお、本水田に伴う遺物は出土していない。

5H水田(第370・371図)

3区低地東側で確認された。ほぼ7H水田の範囲にあたるが、4H水田以降の水路等により破壊された部分が多く、遺存状況はあまり良くない。また、中央部にも水田域が広がっていたと思われるが、耕土は上層の水田に踏み込まれて残っていない。地形面は基本的に8H水田時と同様である。

耕土は6H水田と7H層の一部を踏み込んでおり、シルト砂を多量に含む褐色粘質土となっている。層厚は東側部分では5cm前後であるが、西側では下層の7H層が露呈している部分も多い。水田面を覆う白色シルト層(6H層)は層厚1~2cmほどであった。アゼ上を走行する足跡も数カ所で確認されている。

水田の区画は基本的に7H水田と同様であるが、南半部では地形に沿って南西方向に走向する区画がとられており、この部分は6H水田の区画を踏襲している。前述のように遺存状況が悪いため、水田区画の全形が確認されたものは少ない。そのため、水田面積の資料化は行わなかったが、基本的には6H・7H水田と同様と考えてよいだろう。

本水田に伴う水路は33号・98号・105号溝が該当する。各溝は前段階の溝を踏襲しており、33号溝は6H水田に伴う107号溝を、98号・105号溝は7H水田に伴う96号・143号溝をほぼトレースしている。水路の使用法と配水方法は、基本的に6H・7H水田と同様と考えられる。

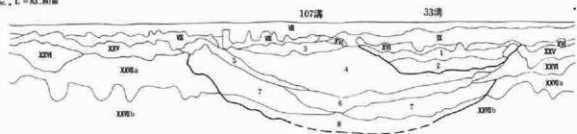
なお、本水田に伴う遺物は出土していない。

4H水田(第372~377図)

3区5H水田の範囲と中央部の一部、および南西隅の旧河道上で確認された。榛名ニツ岳火山灰(F A)降灰後の最初の水田である。それまで窪地であった旧河道は灰白色シルト砂(5H~7Hのいずれか)でほぼ埋没し、その上面に黒色粘質土が形成されたことにより、この部分でも水田化が可能になった。河道部はF A降灰後に全面が水田化されたと考えられるが、1・2区では上層の水田に踏み込まれているため確認で

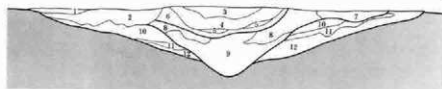
III 古代の調査

C. L = 33.80 m



- | | |
|---|---|
| <p>33号溝</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 灰褐色粘質土。 2. 粗砂層。 | <p>167号溝</p> <ol style="list-style-type: none"> 3. 灰褐色粘質土。 4. 細砂層。 5. 灰白色シルト。 6. 淡い褐色粘質土。 7. 灰褐色シルト。 8. 灰白色シルト。 |
|---|---|

D. 98・105号溝 D



- | | |
|---|--|
| <p>98・105号溝</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 灰褐色土。 2. 褐色土。 3. 淡い褐色土。 4. 淡い褐色土。砂粒を多く含む。 5. 粗砂層。 6. 淡い褐色土。粗砂を多く含む。 | <ol style="list-style-type: none"> 7. 褐色粘質土。 8. 淡い褐色砂壤土。 9. 8層と青灰色砂層のクミナ互層。 10. 褐色粘質土。 11. FA 純層。(XVI層) 12. 灰褐色砂層。 |
|---|--|

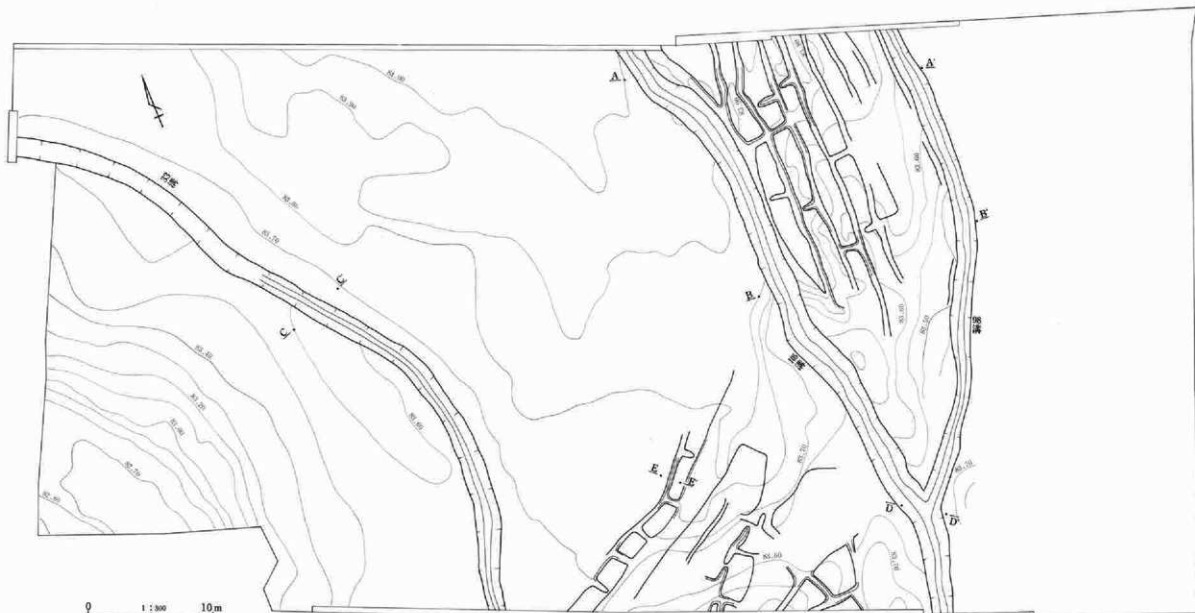
※本測はFA降下後も踏襲されるが、4H水田時には埋没している。

E. E



1. 茶褐色粘質土。(5H水田耕土)
2. 黄白色細砂層。(6H層上半)
3. 灰白色粗砂層。(6H層下半)
4. 灰褐色粘質土。(6H水田耕土)

第370図 3区5H水田断面図

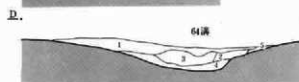


第371图 3区5H水田全体图





L=81.20m



- 64号溝
1. 茶褐色砂礫じり土。
 2. 茶褐色土。
 3. ラミナ層精粗砂層。
 4. 粗砂層。下部に礫を含む。
 5. 1層と同質。

- 80号溝
6. 深い黄褐色土。
 7. 黄色シレット質土。
 8. 深い褐色砂礫じり土。

- 78号溝
9. 灰白色シレット砂層。
 10. ラミナ地塊粗砂層。
 11. 深い褐色土。

第372図 3区4H水田全体図

きない。3区も全面が水田化されていたであろう。地形面は、旧河道部を除いて基本的に8H水田時と変化はない。

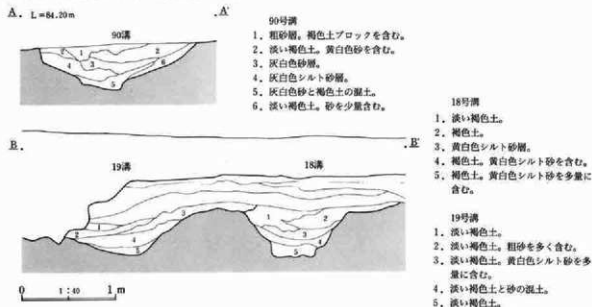
耕土は黒褐色粘質土で、層厚は5～10cmほどであるが、旧河道部では20cmの厚さが認められる。

水田面を覆う白色シルト層（4H層）は、大半が上層の水田に働き込まれており、水田面では斑状に認められたにすぎない。そのため、アゼの高まりが認められるものは少ない。なお水田面には足跡状の窪みが多数見られたが、歩行がたどれるものは認められなかった。

水田の区画はこれまでの「開田型小区画」とは異なっている。「開田型小区画」では帯状の縦アゼを主に、その間を区切る横アゼは従の関係にあったが、本水田では区画が大型化するとともに、縦アゼと横アゼが各々独立した区画として設置されている。東側部分の北半では、縦アゼと横アゼが直交する位置で直線的に配置され、南半では地形の傾斜や水路の区画に合わせて、縦アゼと横アゼを必要に応じて配置もされている。また、南半と北半を区画する水路を伴うアゼや南半に見られる太アゼは、区画の基本となる大区画を示しているものと思われる。なお南半の南東隅に中割りを伴うアゼが見られるが、このような形態のアゼは浅間B軽石下水田でも認められた。旧河道上の水田は傾斜に沿って細長い区画を行っているが、その間を区画するアゼは「開田型小区画」に比べて少なく、一区画の面積は大型化している。アゼの規模は大アゼが幅60cm、小アゼが幅30cm前後である。

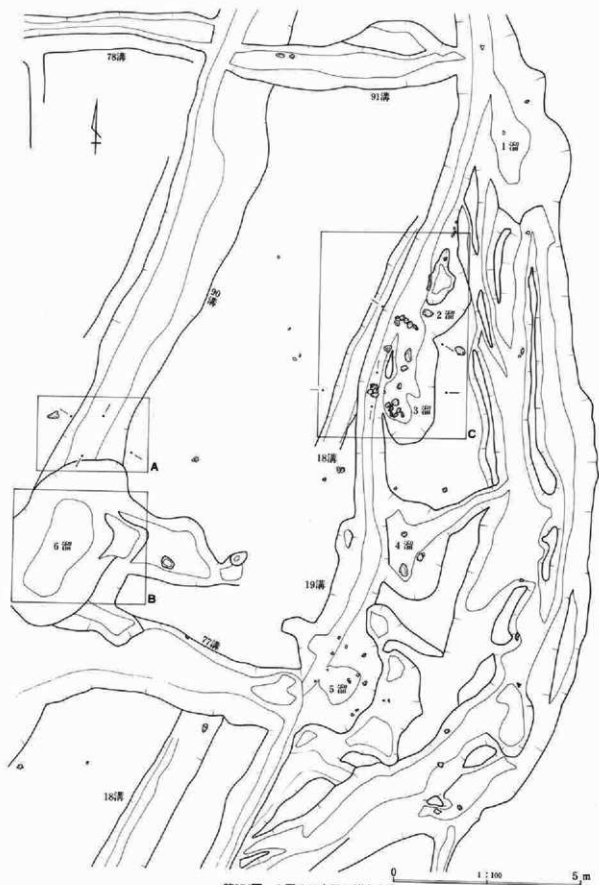
水田区画の全形が確認されたものは19区画であった。形状は長方形を主体に、三角形、台形、不正形が含まれている。このうち最小小区画の面積は10.41㎡、最大区画は34.70㎡、平均面積は18.4㎡である。平均面積と比較すると、6H水田の約4倍の面積に拡大している。

本水田に伴う水路は64号・78号・90号・91号・64号・18号・19号溝が該当する。79号・80号溝は本水田のアゼを切っており、87号溝も含めて本水田より上位の水田に伴うものであろう。64号・90号溝は水田域を区画する主水路で、両水路ともアゼを伴っている。78号溝は先述のように水田を大区画する溝で、64号・90号溝を連結している。18号・19号溝には新旧関係が認められ、18号溝が古く19号溝がその上の上っているが、両溝とも本水田に伴うと判断した。19号溝は微高地縁辺をめぐる水路で、91号・77号の両溝で90号溝と連結されている。以上のように南北方向に流路をもつ64号・90号・19号溝は、流路に直交する78号・91号・77号

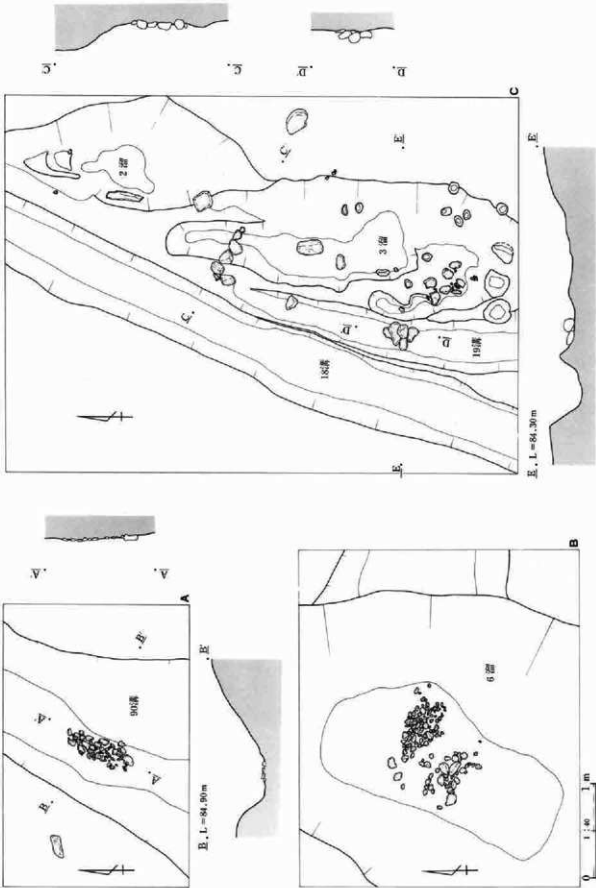


第373図 3区4H水田断面図

III 古代の調査

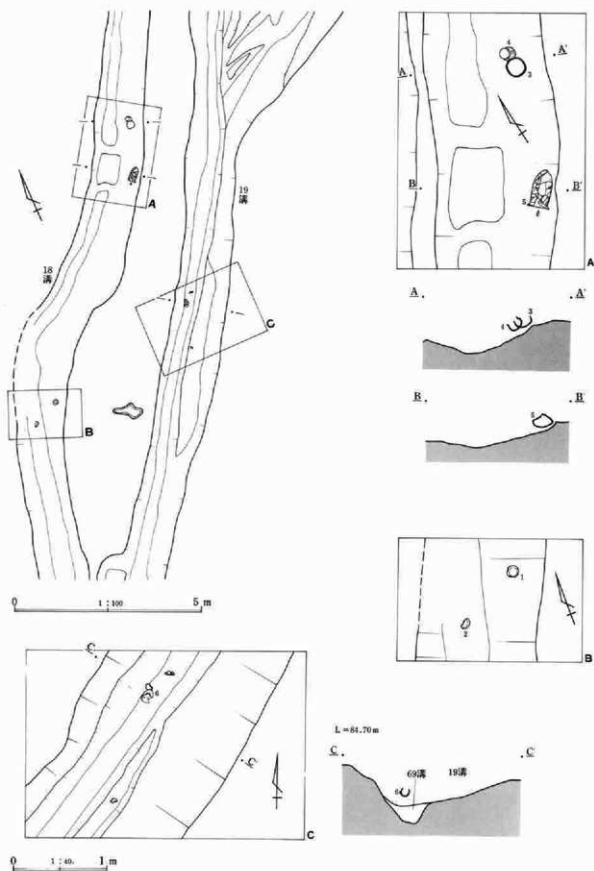


第374図 3区4H水田に伴う水溜

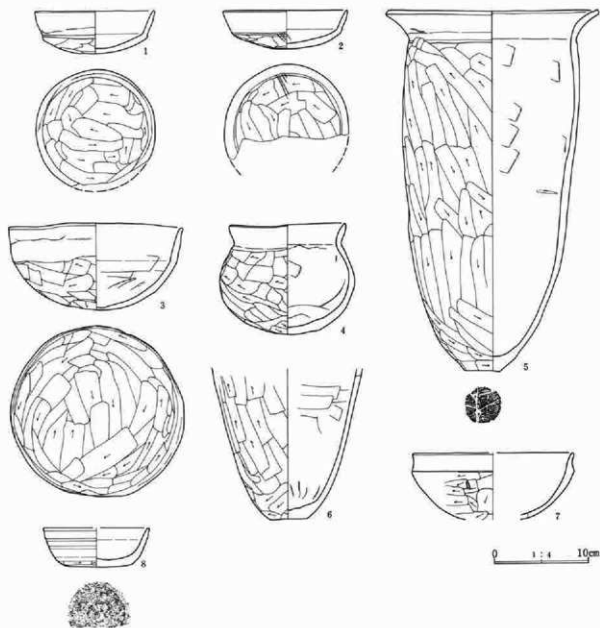


第375図 3区4H水田に伸う水溜

III 古代の調査



第376図 3区18号・19号・69号溝及び遺物出土状況

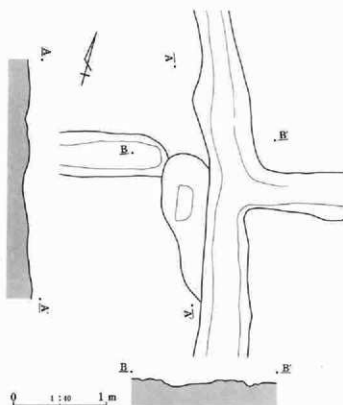


第377図 3区4H水田出土遺物

溝により連結される一連の水路群であると言えよう。

なお、19号溝には水場と考えられる施設が伴っている。この水場は東西6m、南北24mの規模で、東側の台地縁辺部に三日月状に張り出している。水場の構造は、台地縁辺沿いを乱流状に走る数条の流路と、19号溝本流に伴う5カ所の水溜で構成される。水溜は北から順に1号・2号・3号・4号・5号とする。1号水溜は縁辺沿いをめぐる流路の取り付け部分にあり、それらとの関連が考えられる。底面は19号溝底面と同じレベルで、流路底面より10cmほど低い。2・3号水溜は19号溝に沿うように近接しており、一連の遺構となる可能性が高い。いずれも礫を伴っており、特に3号水溜の取り入れ口には20cm大の礫4個を含む7個の礫を横位1列に配置し、南側の出口にあたる部分には19号溝の底面に15～25cm大の礫5個をまとめて設置して

III 古代の調査



第378図 3区2H水田水口8

いる(第374図)。これらは水位を上げることで水溜内に水を回遊させるための造作と考えられる。この他に3号水溜中央付近に30cm大の大型隙1個と、南側に10~15cm大の隙7個がまとめて置かれていた。底面のレベルは2号水溜が19号溝底面よりやや低いが、3号水溜はほぼ同じレベルである。4号水溜は台地縁辺沿いをめぐる流路から分岐した溝に伴うもので、底面のレベルは19号溝より10cmほど高位にある。5号水溜は77号溝と19号溝との連結部の直前の位置に設置されており、底面は19号溝と同じレベルである。以上のように、1~5号水溜は形状や19号溝あるいは台地縁辺をめぐる流路との関係も異なるが、19号溝に付随して水を回遊させる点では共通性をもっていると見えよう。これらが全て同時に機能していたかについては確証はないが、いずれも水田での諸作業に伴う水場として機能したものと考えられる。

このような水溜は90号溝にも認められる。77号溝との連結部北側に接した位置にあり、90号溝の中央に設置されている。これを6号水溜とする。形状は長軸4.9m、短軸2.8mの楕円形を呈し、底面のレベルは90号溝底面より18cmほど低い。底面の一部には小隙が敷きつめられており、本水溜の北側80cmの90号溝底面にも長軸80cm、短軸30cmの範囲に小隙を敷きつめた部分が認められた。なお、本水溜には東側に溝状の落ち込みが伴っており、その東端部はちょうど18号溝の延長上にあたっている。このことから、本水溜は18号溝から90号溝へ分水する交点に設置されたものと考えられる。つまり、19号溝から77号溝を使用して分水する以前に、18号溝から90号溝へ分水する構造があったと考えたい。

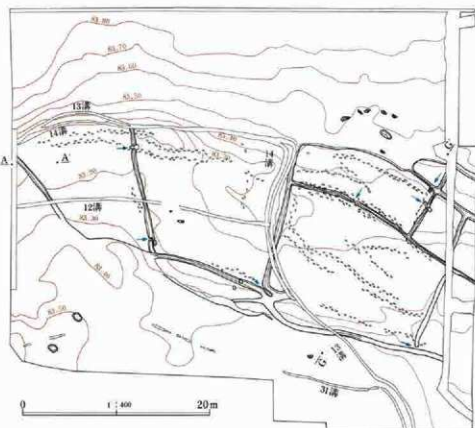
本水田および水路からは土器8個体が出土した(第376図・第377図)。1~5は18号溝出土の土器で、1・2は南側の覆土中から近接した位置で出土、3~5は中央部の東側縁辺に置かれた状態で出土しており、4はH層直下の出土である。3・4は正位で接するように置かれ、5はその南側1mの位置に横倒していた。この3個体は溝に一括供献されたものと考えられる。6・7は19号溝覆土中からの出土、8は水田面からの出土である。

2H水田(第378図~第385図)

2・3区旧河道部上面と3区東半部、および5区低地で確認された。両地区は微高地をほさんで170mほど離れており、低地の形成過程や土層の堆積状況も異なるため、ここでは低地毎に説明を行う。

東側低地(1~3区)

2・3区旧河道部上面と3区東半部で水田が確認されたが、それ以外の地区でも1H水田耕土下に本水田



A, L = 83.00m

.A



断面A-Aは1日水田耕土、Xは2日解

E, L = 84.60m



F, L = 84.30m



G, L = 83.70m



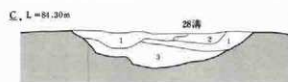
E, L = 84.20m



.E

- 28号溝
1. 灰白色砂礫層。(2日解)
2. 淡い褐色砂礫じり土。
3. 灰白色細砂と淡い褐色土の混土。

C, L = 84.20m



.C

D, L = 84.10m



.D

0 1:20 1m

0 1:400 4m

第379図 2~3区2H水田全体図



第380図 2区之水田



第381図 3区2H水田

の耕土に対応する土層が部分的に認められており、本来は全面が水田化されていたと考えられる。地形は4 H水田時と基本的に変化はないが、旧河道部はその後の土圧で中央部を中心に圧縮されていると考えられ、当時の起伏をそのまま止めている訳ではない。

耕土は灰色～灰褐色土で、層厚は10cmほどである。土質は旧河道上面では粘質性であるが、東半部の平坦面では砂を含むシルト質である。

水田面を覆う白色シルト層（2 H層）は10～15cmの層厚があり、アゼの多くはすっぽりとシルト層に覆われていた。アゼの高さは良好な部分で7～10cmである。

水田の区画は基本的に地形の起伏に沿って造成されているが、形態は地区によって違いが認められる。旧河道部上面では4 H水田と同様の大型化した区画となっているが、東半部平坦面では5～7 H水田時の「開田型小区画」を採用している。両地区の耕土は前述のように、旧河道部上面では粘質性の土質であるのに対し、東半部平坦面では砂を含むシルト質土となっており、前者はその下層にも粘質性の4 H水田耕土が厚く堆積しているのに対し、後者では下層が氾濫層と薄いシルト質の耕土で、明らかに漏水性の土壌となっている。つまり、東半部平坦面では漏水性の土壌に適した「開田型小区画」が選択されたものと考えられる。

また、この区画の違いは水口にも表れている。両地区とも水口は基本的に短辺のアゼの中央付近か片側に寄せて設置されており、長辺のアゼに沿った掛け流しの方式をとっているが、旧河道部上面の大型化した水田では水口が水落ち痕を示す窪みが伴っている。これは一区画の水量の違いを示している。

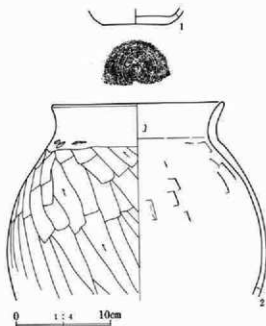
なお、本地区では水田面に無数の人の足跡が残されていた。そのうち遺存状況が良好で歩行をたどれるものについて図化した。2区では水田の長軸方向に歩行するものが多く、アゼに沿ったものやほぼ等間隔に平行して歩行するものなどがある。一地点から逆方向に歩行したのも1カ所認められるが、一区内面を通して歩行する例が多く、僅かに蛇行しながらも直線的に歩行している。歩行の状況は歩幅が狭くほぼ一定で、両足の間隔が開いていることから、まっすぐ立った状態での歩行ではなく、中腰の状態での歩行したものと考

えられ、一定の距離を置いて直線状に歩行していることを勘案すると、除草作業に伴う足跡の可能性が考えられる。なお、歩行状況はいわゆる内股のものと外股のものがあり、複数人の歩行であることを示している。以上の観察所見は3区東半部でも同様であるが、この地区ではアゼを踏み越えた歩行が認められ、このアゼが水田の基本区画ではないことを示している。

本地区では37区画の水田を確認したが、全形が判明したものは16区画であった。形状は長方形を中心に三角形、扇状など様々で、このうち最小区画の面積は3.35㎡、最大は209.51㎡であった。

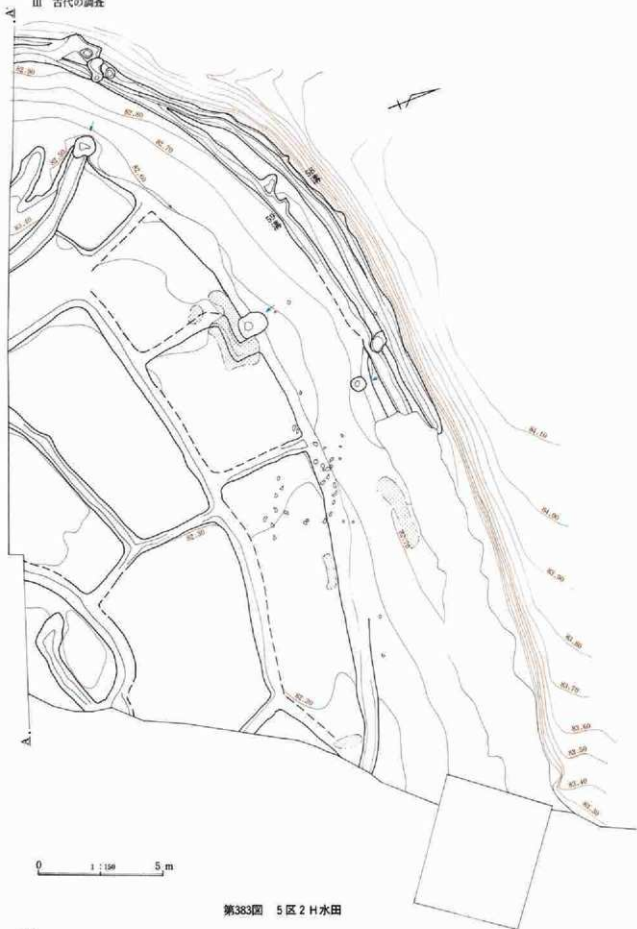
本水田に伴う水路は、本地区では28号溝・30号溝の2本が該当する。北側で両溝は重複しており、28号溝を30号溝が切っている。30号溝はアゼを伴い、湾曲しながら南流するが、各水田の端部毎に水口があり、北側から掛け流した水の排水方法を良く示している。

なお、本地区では水田および水路に伴って、土器2点

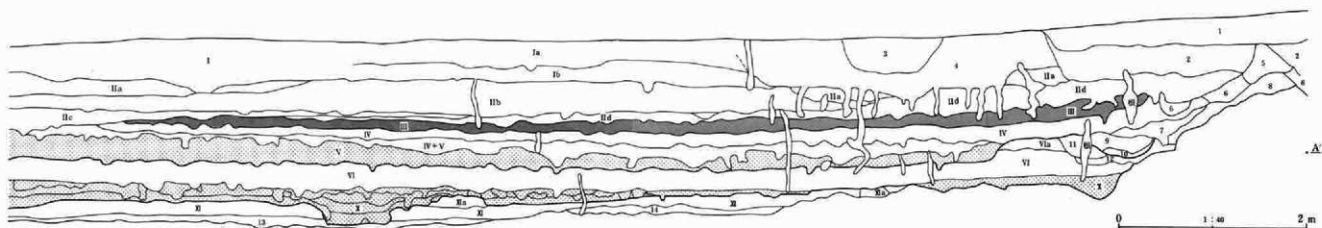
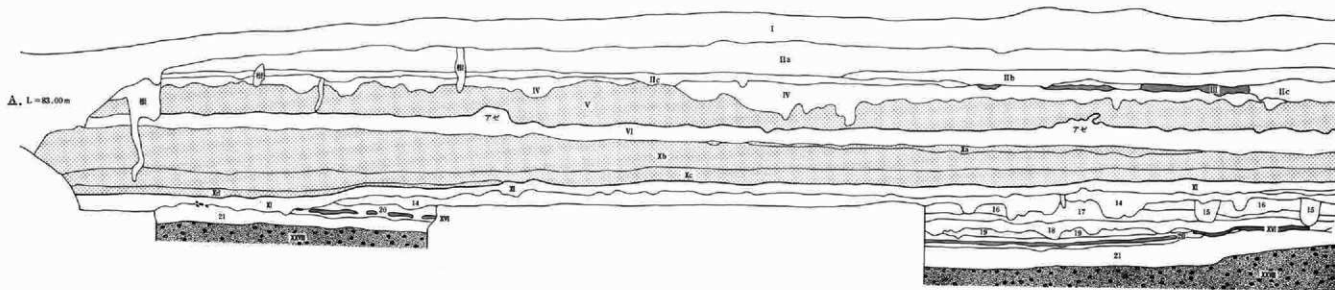


第382図 3区2 H水田出土遺物

III 古代の調査



第383図 5区2H水田



- I, 黄灰色砂礫土。
- I a, 黄灰色砂質土。
- II a, 灰褐色土。
- II b, 灰褐色土。As-Bを多く含み、斑紋が認められる。
- II c, 黒褐色土とAs-Bの混土。
- II d, As-Bに黒褐色土を含む。
- III, As-B純層。
- IV, 黒色土
- V, 黄白色シルト質土。黄色礫石を多量に含む。(1日層)
- VI, 灰色粘質シルト。(1日水田耕

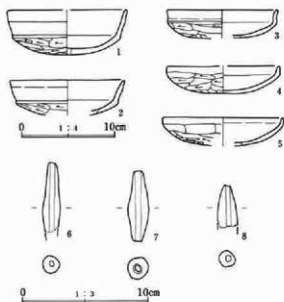
- 土)
- W a, 白灰色粘質シルト。(1日水田耕土)
- X a, 灰白色粘質シルト。(2日層)
- X b, 灰白色シルト。
- X c, 白灰色粘質シルト。
- XI, 白灰色シルト質粘土。(2日水田耕土)
- XII a, よごれた白灰色粘質シルト。
- XIV, Hr-F A 純層。
- X X W, 砂礫層。(基盤層)

- 1, 盛土。
- 2, 覆土。
- 3, 灰褐色砂礫土。大小円礫を多量に含む。(42号溝か)
- 4, 灰褐色砂礫じり土。(43号溝か)
- 5, 灰褐色土。
- 6, 褐色土。As-Bを少量含む。
- 7, Vと8の混土。
- 8, 黄褐色土。
- 9, 灰褐色土と黄灰色シルト質土の混土。
- 10, 黄灰色シルト層。(1日層)

- 11, 灰褐色土。シルト砂を多量に含む。
- 12, 灰色粘質土 (W層) と黄褐色土の混土。
- 13, 淡い灰褐色シルト質土。
- 14, 淡い灰色シルト質土。
- 15, 14層と17層の混土。
- 16, 淡い灰色シルト質土。17層を少量含む。
- 17, 白色シルト質粘土。
- 18, 灰褐色シルト質土。
- 19, 16層と同質。
- 20, 14層と同質。
- 21, 灰色と白色の粘質シルトの互層。

0 1:40 2m

第384回 5区2H水田断面図



第385図 5区2H水田耕土下出土遺物

面を覆う2H層は下半が白色シルト、上半が白灰色粘質シルトで、南東側の最も厚い部分では70cmの層厚で堆積している。水田面は縁辺部では傾斜があるため、高低差10cmほどの段状の作りとなっている。そのため、比高の高い縁辺寄り的一段目には氾濫層が及んでおらず、アザは確認できなかったが、その他の部分はすっぽりと氾濫層に覆われていた。しかし、大半のアザは僅かな段差や高まりが認められるにすぎなかった。また、水田面の数カ所に炭化物の散布が認められ、調査区西側隅では水田区画を切って水口3を伴う水路が掘り込まれている。以上の状況から、本水田は氾濫層堆積時には休耕していた可能性が強い。なお、本水田には無数の足跡状の窪みが認められるが、特に水田区画4の北西隅の北側との段差部分は著しく、段差を踏みつぶすようかなり深い足跡が集中している。

水田の区画は、前述のように縁辺部では確認できなかったが、その他の部分で9区画が確認された。このうち6区画ではほぼ全形が把握される。形状は正方形・長方形が主体で、一部にかぎの手状の区画をもつものがある。区画は地形に沿って各々独立した区画となっており、いわゆる「開田型小区画」とは異なる。1区画の面積は、区画2で16㎡、区画6で約40㎡である。

本水田に伴う水路は58号溝・59号溝の2本が該当する。両溝は重複関係にあり、58号溝が59号溝を切っている。59号溝は本地区開田当初の水路と考えられる。水口1はこの59号溝に伴う。用水は微高地縁辺をめぐる水路から引水し、南側へかけ流す配水方法が取られていたものと思われるが、水口が確認できたのは水田区画2に伴うもの1カ所のみである。水口2は長軸1.2m、短軸0.9m、深さ30cmと大型であり、水田面に段差があり、ここからかなりの水量を引水していたことを示している。ちなみに、水口1は直径50cm、深さ45cm、水口3は長軸1.0m、短軸0.8m、深さ20cmである。

なお、本地区水田面および耕土中から、土師器杯5点と土鏝3点が出土している(第385図)。土師器杯はいずれも7世紀前半に位置づけられよう。

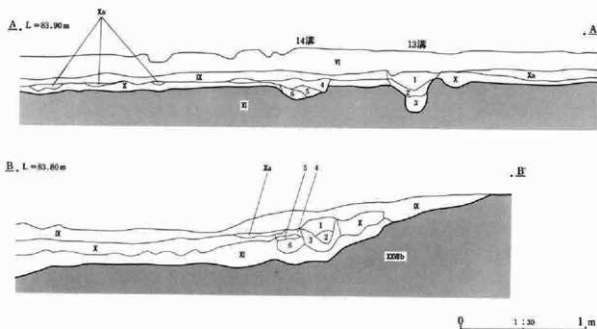
が出土している(第382図)。このうち須恵器杯の底部破片(1)は、3区東半部平坦面の水田域西端の水田面から出土した(第379図)。土師器罐の体部上半部(2)は28号溝覆土中からの出土である(P L219-3)。いずれも7世紀前半に位置づけられよう。

東側低地(5区)(第383~385図)

本地区は榛名二ツ岳火山灰(FA)降灰後、畠地として使用されていたが、この時期から水田化された。この低地は乱流する粕川の河道の一部が、河床低下に伴い取り残された部分にあたり、微高地との高低差は本水田面で1.5mほどである。東側はその後の耕作等により寸断されているが、本来は微高地東側縁辺から続く低地であったと思われる。地形面は縁辺で緩やかに傾斜するが、南側部分は比較的平坦である。

耕土は灰色粘質土で、層厚は10~15cmである。水田

III 古代の調査



13号溝

1. 灰褐色土。鉄分の沈着が認められる。
2. 灰褐色土。白色細砂（2層）を多く含む。
3. よごれた灰白色細砂層。灰褐色土ブロックを含む。

14号溝

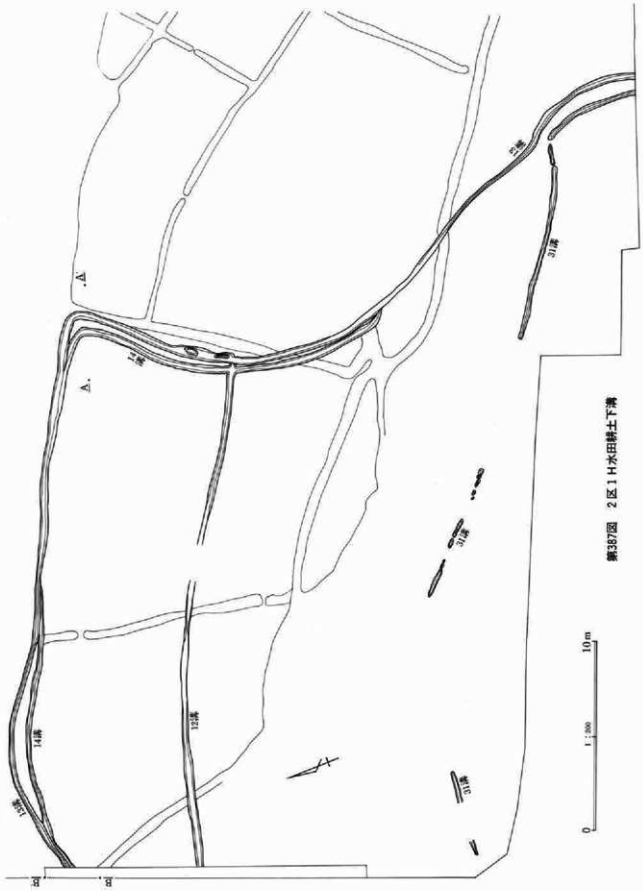
4. よごれた灰白色細砂層。
5. 灰褐色粘質土。
6. 灰白色細砂層。灰褐色粘質土ブロックを含む。

第386図 2区1H水田耕土下溝断面図

1H水田耕土下（第386図～第389図）

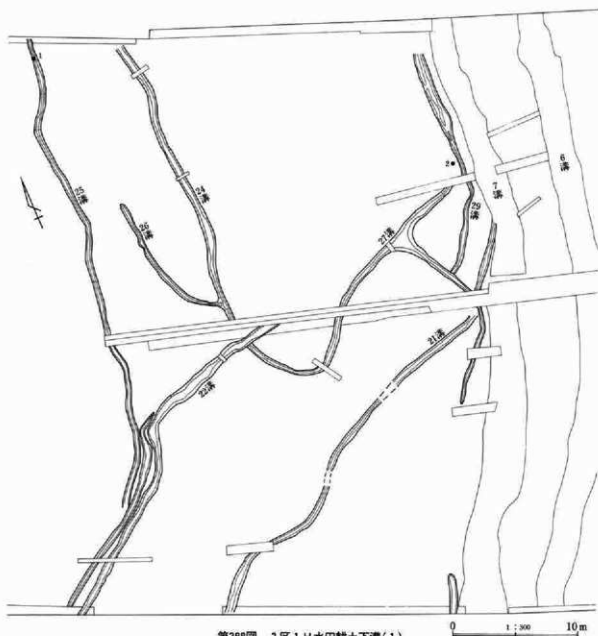
2・3区1H水田の耕土を取りさった面で多数の溝が確認された。これらの溝はいずれも2H水田およびそれに相当する土層を切っており、1H水田造成初期の水田に伴う可能性が強いと考えられた。しかし、その走向は1H水田の区画とは明らかに異なっており、2H水田の区画に近似している。しかも確認された範囲は2H水田の確認範囲にはほぼ一致している。

2区では12号・13号・14号・31号の4本の溝が確認された（第387図）。いずれも幅30cm前後の同規模の溝で、確認面からの深さは地点によりまちまちであるが、南東隅の最も深い部分では13号・31号溝とも40cm前後である。断面形はU字形を呈し、両溝とも底面に凹凸が明瞭に認められた。13号・14号溝は2H水田の区画に沿って一部で重複しながら並走し、南側では13号溝に1本化して2H水田の区画からはずれ、31号溝と一部並走して調査区外へぬけている。12号溝は2H水田の中央部を、13号・14号溝と平行に東西方向に走向し、13号・14号溝に合流している。14号溝は13号溝に切られるが、12号溝との切り合い関係は確認できなかった。31号溝は南側の高い部分を2H水田の区画（旧河道の縁辺）に平行して東西方向に走向し、前述のように13号溝と一部並走しながら、調査区外へぬけている。以上の溝は幅や断面形状が近似し、走向においても各々に関連をもっており、一連の溝群と考えられる。また、いずれもU字状の鋤一本分の幅で深く掘られているが、底面に水の流れた痕跡は認められない。溝の配置は旧河道部に沿って平行するように設置されており、それらを連結させながら一定方向に集約する意図が見られることから、これらは暗渠の可能性がある。



第387回 2区14水田跡土簿

0 1:500 10m



第388図 3区1H水田耕土下溝(1)

3区では2H水田の確認された範囲から微高地縁辺にかけて14本の溝が確認されている(第388図・第389図)。このうち低地部の溝は重複が認められ、第388図に示した7本が古く、第389図に示した2本が新しい。15号溝は幅1.2m、深さ60cmの規模をもち、埋没土の下半にラミナ状堆積の砂層が認められることから、水路と考えられる。その他の溝は幅50~70cm、深さ10~25cmと、他の水田に伴う水路に較べて規模が小さく、また走向が蛇行するものや連結するものが多い。いずれも覆土中は砂層が認められるが、明瞭なラミナ状堆積の認められるものはない。これらの溝は規模や走向の特徴、および3区なかでも最も低い湿潤な地区に分布している点でも





第389図 3区1H水田耕土下溝(2)

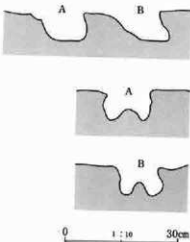
2区の溝群と近似していることから、暗渠の可能性もある。なお、溝の調査に伴って土師器杯2点が出土している。1は25号溝覆土中からの出土、2は29号溝の西側に近接した位置からの出土である。いずれも7世紀中葉から後半に比定されよう。

この他に東側微高地上から5本の溝が確認されている。これらの溝も1H水田耕土下で確認されており、時間的には近似するものと考えられるが、その性格は不明である。

III 古代の調査

1 H水田 (第390図～第413図)

1 H層は As-B下水田耕土下で認められた大規模な洪水氾濫層で、本遺跡では5区微高地を除く調査区のほぼ全域を覆っていた。8 H～2 H層は均質なシルト～粗砂層であるのに対し、1 H層はローム層中に含まれる軽石やロームブロックを含む特徴をもち、他の氾濫層と容易に識別できる。この氾濫層下からは、1区から4区の西側および5区低地部では水田が、4区東側では畠が確認されており、これらの区画には一定の基準に従った計画性が認められた。区画の基準は3区で確認された幅2m前後の南北方向の大アゼと4区の同方向を示す大溝によっており、その間の距離が約109mであることから、条里地割りに該当することが想定される。4区では大溝を境に、西側では水田、東側では畠が確認されているが、同一文化層と認められることから、この項で扱うことにした。また、4区西半水田域では3面の水田を確認しているが、いずれも本水田の耕作期間内に含まれる可能性が強いため、ここで扱う。これについては後でふれたい。なお、報告は西側低地(1～3区)・微高地(4区)・東側低地(5区)に分けて述べることにする。



第390図 3区1H水田牛の足跡

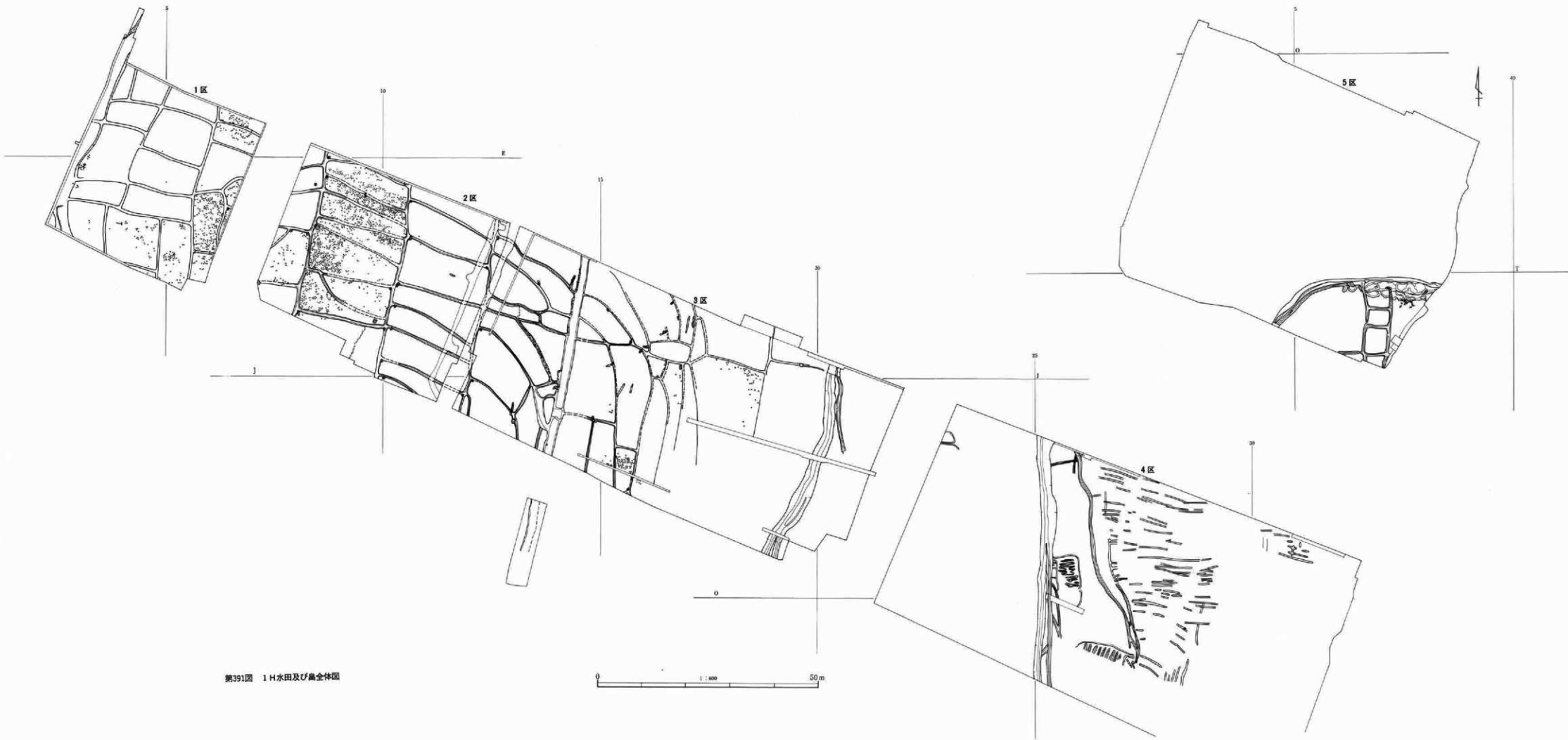
西側低地部 (1～3区) (第391図～第402図、付図23)

地形面は1・2区では北から南に向かって緩やかに傾斜しており、まだ旧河道部の名残りが窪みとして明瞭に残っている。ただし、調査時の等高線はその後の土圧による沈み込みも含んでいる点を考慮しなければならない。3区は東側微高地から西に向かって傾斜が認められる。

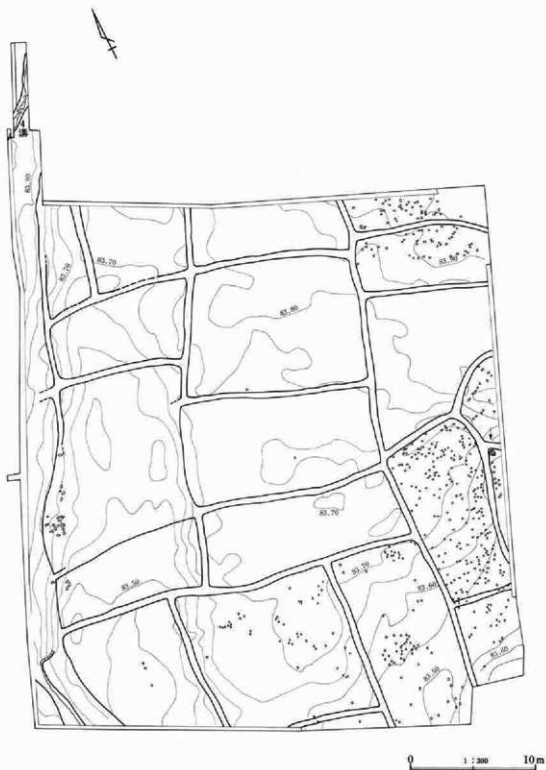
耕土は灰褐色土に包括されるが、旧河道部上面と平坦部では層厚等に違いが認められる。旧河道部上面では各区とも30cmの層厚が認められる。1区では土質が均質で、耕土下には若干の混土をはさんでFA純層がブロック状に堆積している。これに対し、2・3区では耕土を2～3層に分層可能であり、3区西壁では各層間に薄い砂層が認められた。また、耕土下には2 H層が堆積している。平坦部は1～3区とも層厚10cm前後であり、耕土下はFA混土となる部分が多いが、3区東側微高地縁辺では2 H層が認められた。以上のように本水田耕土は、平坦部の大部分ではそれ以前の水田を働き込んで耕土化しているにもかかわらず、旧河道部と平坦部の層厚の差が著しい。このことは、かなり大がかりな造成(切り盛り)が行われたことを暗示している。また、2～3区で認められる耕土の分層やその間の砂層の存在は、本水田がかなり長期にわたって継続されていることを示していると言えよう。

水田面を覆う氾濫層は、平坦部では層厚5cm以下であり、ブロック状に認められるにすぎない部分もあるが、旧河道部では10cm前後の層厚が認められる。氾濫層上面はいずれも上層の水田に働き込まれている。氾濫層は2～8mm大の黄色軽石を多量に含むよれた黄褐色ローム質土で、黄色軽石が集積した部分や、直径20cm大のローム塊を含む部分もあった。また、最下層に層厚2cmほどの灰色細砂層を伴う部分もある。これらの存在により水田面は保存状態が良好で、ほぼ当時の原形面が保たれていた。そのため、水田面には人の足跡の他に無数の牛の足跡が残されており、他にアゼ側面に残る鋤痕も一部で確認されている。

人の足跡は各区で認められたが良好なものは少ない。そのうち、2区南側中央部と3区西側で歩行を示す足跡が良好な状態で確認された(第396図・第397図)。前者は東西方向のアゼから南に向かって歩行したもので、50cm前後の歩幅で直線的に歩行している。これについては、身長162m前後の男性の足跡との分析結果が



第391図 1H水田及び畠全体図



第392图 1区1H水田

III 古代の調査

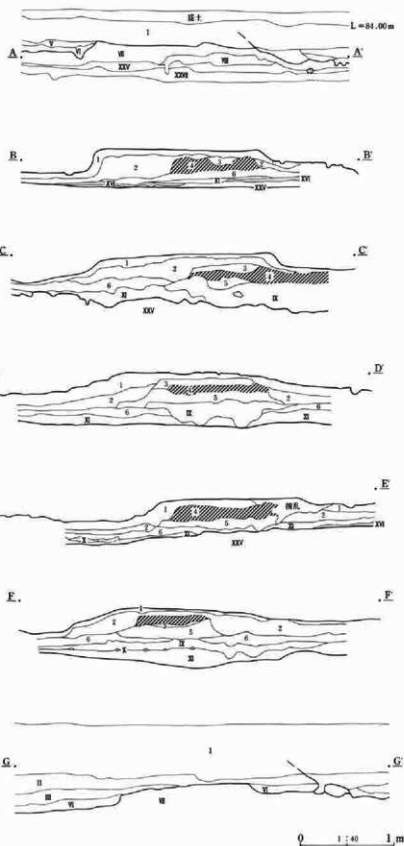


第393図 1区1H水田牛の足跡の方向



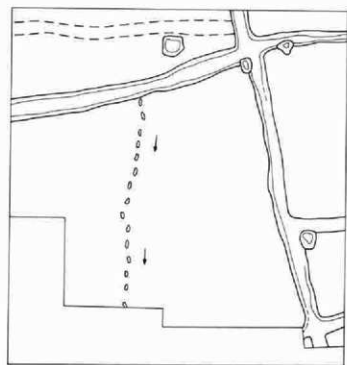
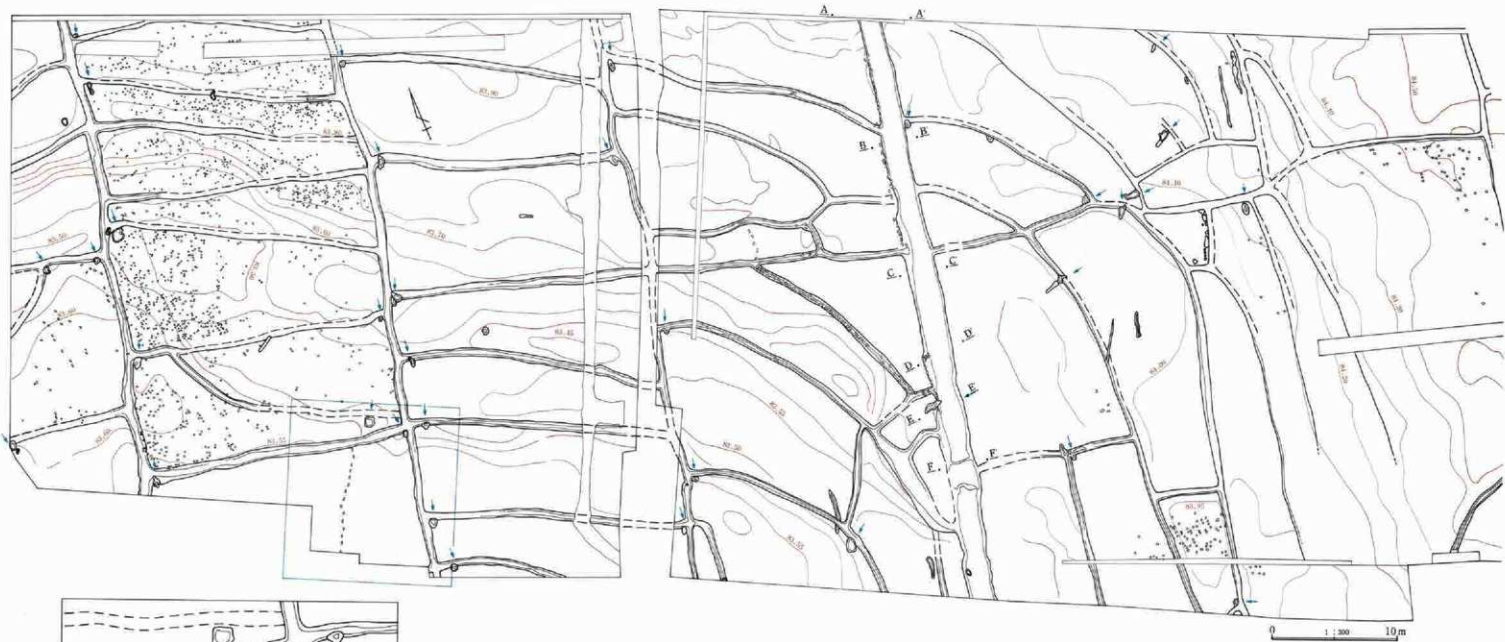
第394図 1区1H水田牛の足跡

III 古代の調査



1. 淡い黄灰褐色土。軟質。
 2. 淡い灰褐色土。やや硬質で、砂粒を含む。
 3. 淡い灰褐色土。ラミナ状堆積の白色細砂を含む。硬質。
 4. 淡い灰褐色土。埋込が認められ、いたって硬質。
 5. 3層と類似するが、やや軟質。
 6. 4層と同質。白色細砂を含む部分もある。
- 大アゼ内に硬質化した部分(4層)を含むのは、長期にわたって使用された結果であろう。A・G断面図では細かな分層を行っていない。なお、両断面の右側の溝は9号溝である。

第395図 3区1H水田大畦の断面図



歩行を示す人の足跡

第396図 2~3区1H水田



でている(付編 科学分析8)。後者は大アゼの西側際に沿って、北から南に向かって小アゼをまたぎながら15mほど歩行し、3本目の小アゼとの交点でいったん大アゼ上にあがって9mほど南下し、再び大アゼ際を南へ歩行し、水口部分で折り返して小アゼ上を20mほど進み、東西に長い水田を横断して再び小アゼ上を西へ進んでいる。この足跡は歩行の状況から同一人による一連の所作と考えられる。歩幅は明瞭な部分で50cm前後である。以上2例の歩行は、大アゼ際・小アゼ上・水田面の直線的な横断を含んでおり、田植えから刈り入れまでの農作業に伴う所作とは考えにくい。

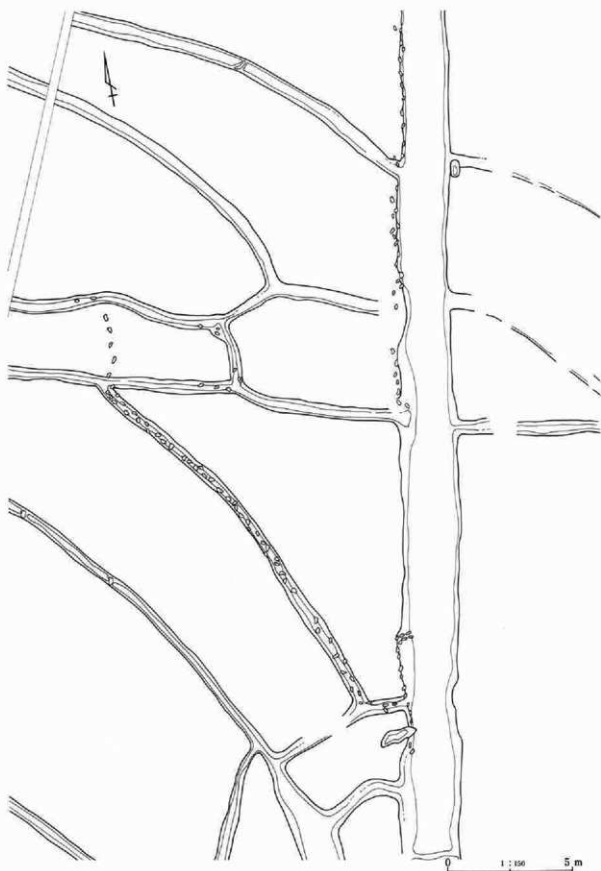
牛の足跡は1区東半から2区西半にかけて集中しており、その他の部分では散発的には認められるものの、数が少なく状態も良好ではなかった。このような分布の量比は、1H層の残存状況や調査精度の違いに起因する部分もあり、図化されていない部分にも散発的に少量の足跡は存在したが、1区東半から2区西半に著しく集中する傾向に変わりはない。足跡は牛蹄類特有の形状を示しており、大きさは10cm内外である(第390図)。歩行状況の検討を目的に、1区の良い部分では一部精緻な図(第394図)を作成し、他の集中部分については足の方向をマークで示した(第393図・第398図)。足跡は水田面に集中しており、アゼ上に付くものはほとんどない。歩行は区画内を往復するものや回転するものは認められるが、水田区画を横断して歩行する例は調査区内では認められない。今回の調査では、どのような目的で牛を水田に入れたかについて解明できなかったが、水田面に無数の足跡が認められることから、本水田埋没時に稲は存在していなかったと言えよう。

水田の区画は2H水田以前の水田に認められた地形に沿った区画とは異なり、一定の基準にしたがって計画的に造成された様相を呈している。それは特に南北方向のアゼに顕著に示されている。区画は15ラインの西側に位置する南北方向の大アゼを基準に、東西両側に21~22m間隔で小アゼを設定し、その間を梯子状に刻んで一枚の水田を造成することを基本としている。大アゼの方位は $N+10^\circ$ である。大アゼの西側の3本目まではこの基本に沿った間隔を保っているが、その西側にある1区では台地縁辺部の傾斜と旧河道の影響により乱れが生じている。また、大アゼの東側では2本目にあたる44mの位置に直線的な小アゼが認められるが、その間には乱れが生じている。これらの間を刻む東西の小アゼは、2区中央部では比較的均等に区画されているが、旧河道をはじめとする地形面の影響が随所に認められる。そのうち、大アゼのほぼ中央部に直交する状態で東西に連続して伸びる小アゼが認められる。若干のずれ込みやくい違いは認められるものの、直接的に連続する点で他の東西小アゼとは異なっており、このアゼがいわゆる「半折型」の横アゼに相当するものと考えられる。以上の調査所見から、坪交点の確認を目的として、大アゼの南側延長上に拡張区を設定した。調査の結果、大アゼの延長は確認できたが、坪交点と想定される「半折」横アゼから54mの地点は、中〜近世の東西方向の溝により削平されていることが判明した。つまり、坪交点は中〜近世まで継続されていた訳であり、この部分が交点にあたることを暗示していると言えよう。

アゼの規模は大アゼが幅2m前後、高さは状態の良い部分で23cm、小アゼは幅40~60cm、高さは良好な部分で12~15cmである。なお、大アゼの南側部分に、幅2mにわたって15cmほど低くなった部分が認められた(第399図・第340図)。周辺部も含めて精査を行ったが、この部分も直接1H層で埋没しており、性格は不明である。

水田区画の全形が確認できるものは41区画であった。形状は東西に長軸をとる長方形を基本とするが、旧河道部をはじめとする地形面の傾斜に影響を受ける部分では、扇形状に変形したり、長方形の区画内を三角形形状あるいは正方形形状に仕切って調整している。また、東西のアゼの付く位置が一致する部分とくい違う部分とがあり、後者の例が多く認められる。このような水田区画の変形や調整は、本水田が長期にわたって継

III 古代の調査



第397図 3区1H水田歩行を示す人の足跡

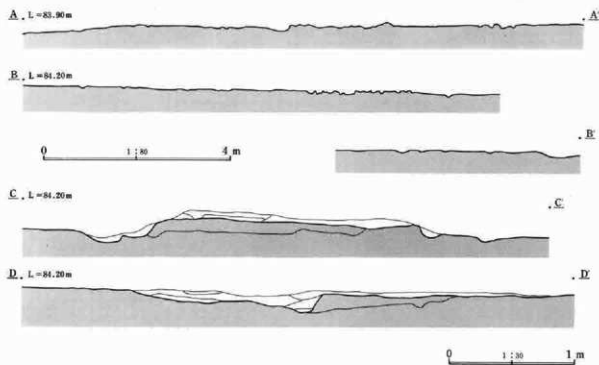


第398図 2区1H水田牛の足跡の方向

III 古代の調査



第399図 3区1H水田大睦穴落部の状況



第400図 3区1H水田大畦欠落断面図

続されていることを暗示するものであろう。41区画のうち、最小区画の面積は11.10㎡、最大区画は183.81㎡で、平均面積は94.80㎡である。水田面積にかなりのばらつきが認められるが、41区画の70%が60~160㎡のなかに含まれる。

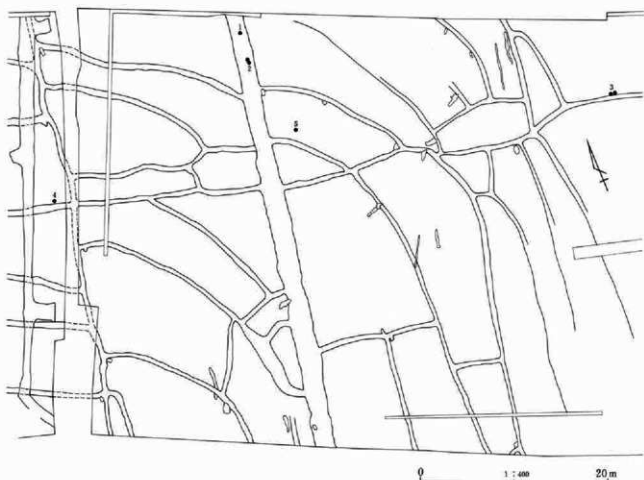
水口は2区の比較的整然とした区画部分では、南北方向の小アゼに沿って設置されている。位置は水田区画の西隅に付くものが多いが、東隅に付くものや、隅隅に付くものも認められる。この部分では南北方向の小アゼに沿って北から南へかけ流す配水方法がとられていたと考えられる。3区大アゼの東側地区では水田区画が北東から南西に向かって傾斜しており、水田区画もその傾斜に沿った長軸のとり方をしている。水口は区画の長辺アゼに設置されるため、2区とは異なった方向の配水となっている。本水田に伴う水口は、アゼに接して長軸80cm前後、短軸40cm前後、深さ5~18cmほどの水落ち痕を明瞭に残しており、水田1区画が大形化したこと、用水が豊富であったことを良く示している。この水落ち痕はいずれも1H層で埋没しており、水田埋没時に窪みが残っていたことは明らかだが、これに伴うアゼの切れ目は1~3区では確認されていない。アゼの切れ目は埋めもどされていたと考えられる。

1~3区では本水田に伴う水路は、7号溝1条のみである。7号溝は低地と微高地の境に設置されており、微高地上では1~3の水田とは異なる小区画の水田が造成されている。この位置に水路を設置する理由は2つ考えられる。1つは微高地上の小区画水田と低地の水田域を画すこと、1つは大アゼと7号溝の間は地形の傾斜が複雑であり、北東から南西へ傾斜する部分では東側からの用水の供給が必要とされる点である。つまり7号溝はこの両者の性格をもつ水路と考えられる。溝の規模は幅2~3m、深さ50~70cmである。なお、西側縁辺にアゼ状の高まりを伴う部分があり、本来は両側にアゼを伴っていた可能性が高い。

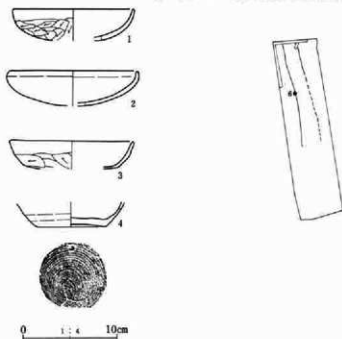
なお、大アゼの構造を把握するため、断ち割り調査を実施した(第395図・第396図)。大アゼは6層に分層可能で、現存部上面から10cmほどのところに硬化した土層(4層)があり、その上下には白色細砂層が認められた。この細砂層は水田耕土中でも確認できる部分があり、4区1H水田下の2面の水田を覆うシルト層

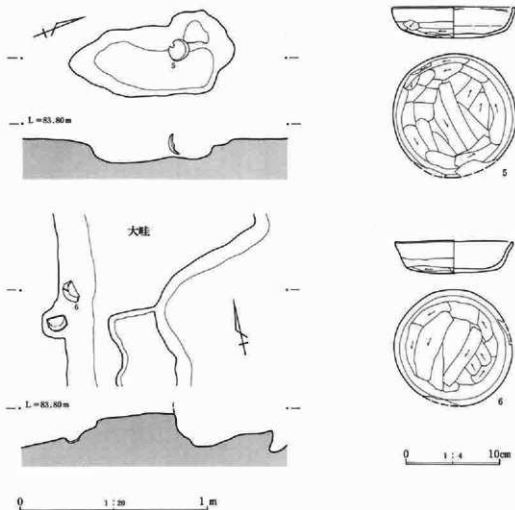
III 古代の調査

に対応する可能性が高い。



第401図 2～3区1H水田出土遺物と出土位置





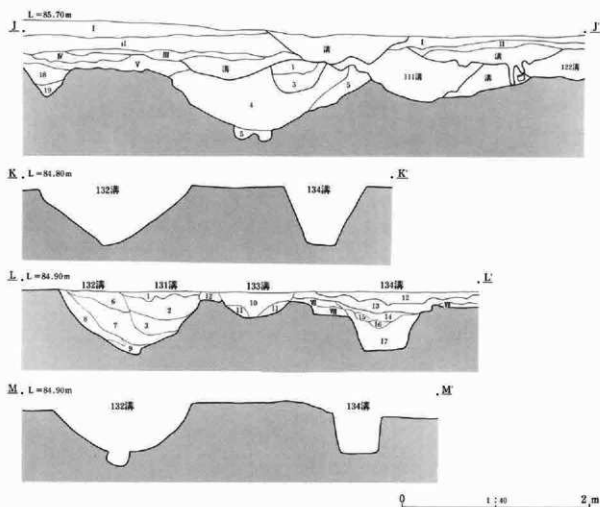
第402図 2～3区1H水田出土遺物と出土状況

本水田に伴う遺物は、土師器杯5点と須恵器杯1点の合計6点が出土している。第401図1・2は、いずれも大アゼ内2層最下部からの出土である。3mほどの至近距離から出土しており、2は近接して出土した2点が接合した。第401図3は、3区東寄りの小アゼ縁辺の耕土中からの出土で、近接して出土した2点が接合した。第401図4は、4区東寄りの小アゼ縁辺の水田面に密着した状態で出土した。第402図5は、大アゼ東側の埋没した水落ち痕内から出土した。この水落ち痕はシルト砂を少量含む耕土で埋没しており、本水田埋没時にはすでに埋め戻されていたものである。第402図6は、南側拡張区内大アゼの西側縁辺に、埋め込んだような状態で出土した2点が接合した。以上のうち、大アゼ内から出土した土師器杯2点(1・2)は8世紀後半に、その他から出土した土師器杯3点(3・5・6)と須恵器1点(4)は9世紀前半に、各々比定できよう。大アゼは本水田の基本区画を構成するものであり、本水田造成の時期は8世紀後半を下ることはないと考えられる。また、4は1H層で直接覆われており、本水田埋没の時期を示していると言えよう。

微高地(4区)

4区微高地上では、ほぼ南北に走向をとる131号・132号・134号溝を境に、西側では水田、東側では畠を確認した。水田は本地区では層的に3面確認している。このうち第404図に示した最上面の水田が、1～3区

III 古代の調査



第403図 131～134号溝断面図

- | | | |
|-----------------------------------|-------------------|--|
| 1. 黄灰褐色シルト。 | 8. 灰褐色土。 | 17. 黒褐色土と白色細砂の混土。下半は白色細砂が主体となる。 |
| 2. 黒色土。灰褐色土ブロックを含む。 | 9. 砂礫層。 | 18. 4層と同質。 |
| 3. 黄白色シルト（1H層の流れ込み）と黄灰色粘質土の混土。 | 10. 褐色土。 | 19. 淡い灰褐色土。軟質。 |
| 4. 黄灰色と白灰色シルトのラミナ状堆積互層。（1H層の流れ込み） | 11. 粗砂層。 | ■ 1～3層は131号溝、4～9層は132号溝、10～11層は133号溝、12～17層は134号溝。 |
| 5. 4層（1H層）と1H水田耕土の混土。 | 12. 灰白色細砂層。 | 132号溝は1H層の流れ込みで埋没、134号溝の白色細砂は1H-1あるいは1H-2水田を覆う起源層と考えられる。 |
| 6. 黄白色シルト（1H層）と砂の混土。 | 13. 褐色土。 | |
| 7. ラミナ堆積砂層。 | 14. 褐色土と白色細砂の混土。 | |
| | 15. 灰褐色土。 | |
| | 16. 灰褐色土と白色細砂の混土。 | |

および5区低地の1H水田と同時期の水田である。水田面を覆う黄色あるいは黄灰色シルト層は、大半が上位上層と混土化しており、純層はブロック状に認められるにすぎない。そのため、水田区画が面的に確認できたのは北西隅の一部のみであるが、耕土は広範に分布しており、西側全域に水田が展開していたと考えられる。耕土はやや粘性のある灰褐色シルト質土で、層厚は5～10cmである。この耕土下から確認された水田を1H-1水田、さらに下層の水田を1H-2水田とする。いずれも1H水田の耕作期間内に含まれると考えているが、確証はない。これらについては後でふれる。

本水田に伴う水路は132号溝が該当するであろう。132号溝は測量基準ラインに沿って南北方向に走向をもつ大溝で、西側の水田域と東側の畝域を区画する基本地割りと考えられる。3区の大アゼが真北より10°東へふれるのに対し、この溝はほぼ真北に走向をとるが、大アゼとの距離は条里地割りの基本単位である108mに



L=85.00m A. 154溝 152溝 A

1. 灰褐色シルト砂。
2. 灰褐色シルト砂。
3. 灰褐色シルト砂。

L=85.19m B. 154溝 B

L=85.00m C. 154溝 C

L=85.00m D. 156溝 D 156号溝

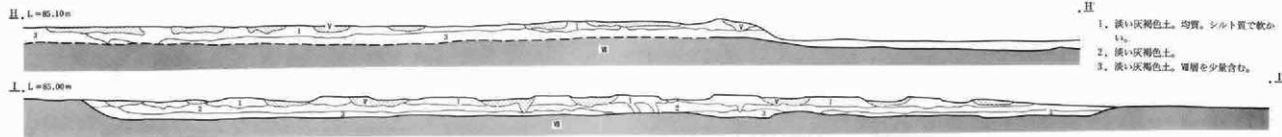
1. 灰褐色砂質土。
2. 褐色砂質土。
3. 灰色シルト砂。
4. 灰褐色土。
5. 1層と地山の混土。
6. くすんだ灰褐色土。

L=85.60m E. 157溝 E 157号溝

1. 褐色砂質土。
2. 灰色シルト砂。
3. 灰褐色砂質土。
4. くすんだ褐色土。

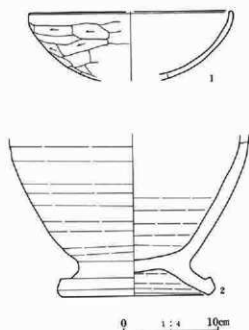
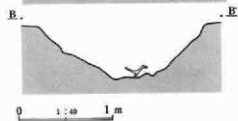
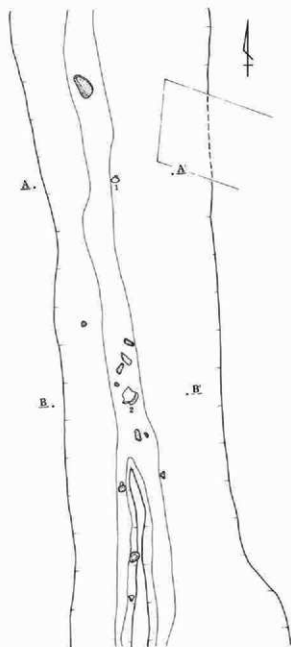
L=85.10m F. 159溝 F 159号溝

1. 灰色シルト砂。
2. 灰色シルト砂。
3. 灰褐色土。



第404図 4区1H水田・扇全体図

0 1:50 2m



第405図 4区132号溝

符合する。また、この溝の位置は、中・近世の111号～113号溝および圃場整備以前の主要水路とも符合しており、本地域の基本地割りとしてその後に踏襲されている点においても、3区大アゼと共通している。溝の規模は上端部幅1.5～1.8m、深さ60～70cmで、断面形は上端部が大きく開いたU字形を呈する。砂層を混じえた1H層のラミナ状堆積土で埋没しており、下部には通水を示すラミナ状堆積の砂礫層が認められた。出土遺物は、溝底面付近から土師器杯の破片(第405図1)と須恵器台付壺の胴下半部(第405図2)が出土している。いずれも8世紀後半に比定されるもので、3区大アゼ内出土土器の年代とほぼ一致している。なお、134号溝と重複する地点の南側5mほどの位置に、拳大から人頭大の円礫数10個を、長さ3m、幅80cmほどの範囲に敷きつめた集石状の施設が認められた。

132号溝と関連をもつ溝として、131号・133号・134号溝がある。131号溝は、132号溝の覆土上面東寄りに重複する溝で、132号溝埋没直後に復旧を目的に開削された溝の可能性が強い。幅50～85cm、深さ35～45cmで、断面形はU字状を呈す。134号溝は132号溝開削以前の溝で、北半部は132号溝と重複する。

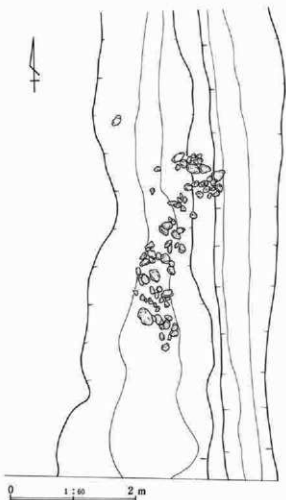
III 古代の調査

断面形は逆台形状を呈し、規模は上端幅90cm、下端部30~45cm、深さ50~60cmである。埋没土中に白色細砂を多く含むことから、1H-1あるいは1H-2水田に伴うものと考えられる。132号溝に匹敵する規模を有しており、直線的な走向をとることから、132号溝の前身と考えられ、1H水田開削当初の基本地割りを示す溝と考えられる。132号溝は、132号溝と134号溝の間を斜位に連結する溝で、重複関係および性格は不明である。規模は幅80cm、深さ25cmで、断面形は半円状を呈す。

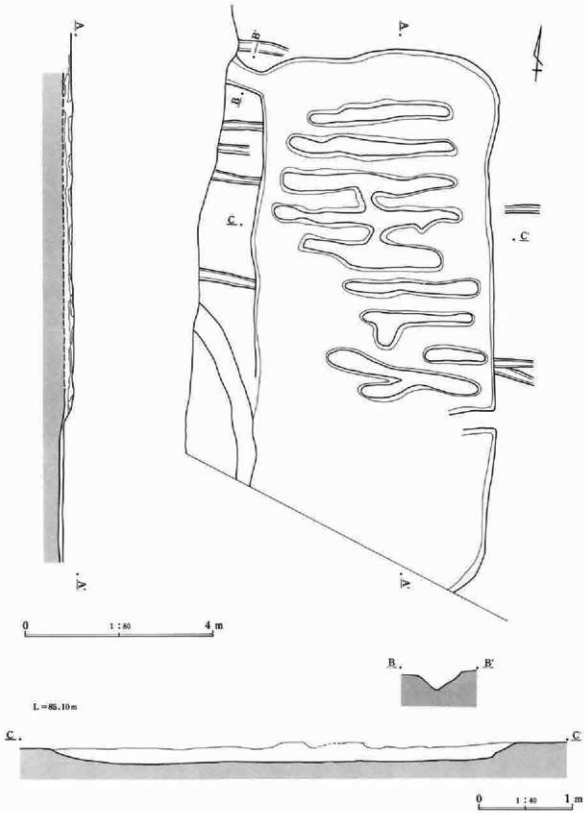
これらの東側に展開する畝には、一定間隔のサクが連続する通常の畝と長方形の区画を伴うものがある。ここでは後者を区画畝として別に扱う。

通常の畝は132号溝東側のかなり広い範囲にわたって認められたが、遺存状態はさほど良好ではない。さくの方角は、東西方向を主体に南北方向のものも認められる。重複する部分もあることから、新旧関係があることは確かだが、切り合い関係は不明である。さく間は一定している部分が少なく不明瞭だが、平行してのびる良好な部分で1m前後である。なお、これらの畝と同一面で152号、154号、156号、157号、158号、159号の6条の溝を確認した(第404図)。溝幅は40~60cmほどで、いずれも覆土にシルト砂が認められる。159号溝は132号溝の間を東西方向に走行するが、その他はほぼ南北方向に走行をとっている。一定の走向が認められる152号・154号溝は、緩やかに蛇行しながら畝地を横断しており、畝と接する部分もあるが、切り合い関係は不明である。推定の息を出ないが、これらの溝は132号・134号溝から導水して畝に水を配る用水路の可能性を考えておきたい。

区画畝は2区画を確認した。1つは134号溝の東1mに近接し、長軸を南北方向にとるもので、これを1号とする。もう1つは1号の南東10mに位置し、長軸を東西方向にとるもので、これを2号とする。1号区画畝は長軸約11m、短軸5mの長方形を呈し、北西隅に溝が付設されている。通常の畝、157号溝、134号溝と重複しており、134号溝と畝を切り、157号溝に切られている。2号区画畝は南半が不明だが、1号と同規模と思われる、北東隅に溝が付設されている。両区画畝とも区画内に短軸方向に規則的に並ぶ畝が作られており、畝以外の区画内は1H層で埋設していた。畝幅は30~60cm前後とばらつきがあり、1号区画内では中央部が連絡するものや乱れる部分も認められた。上面が削平されているため、畝の高さや形態は不明である。また、断ら割り調査により、本区画畝は深さ30cmほどの掘形をもち、その中に淡い灰褐色土を敷き込み、その上面に均質で軟らかいシルト質の灰褐色土を入れて畝を作っていることが判明した。以上のことから、本遺構は苗代と考えられる。また、この苗代には導水と排水の溝が付設されており、132号溝あるいは134号溝から引水する構造であったと考えられる。

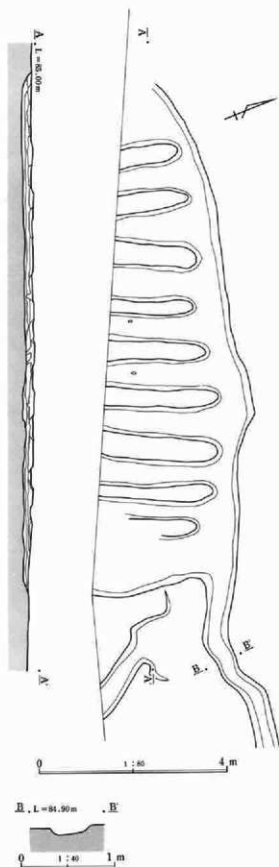


第406図 4区132号溝内集石状施設



第407图 4区1号区画图

III 古代の調査



第408図 4区2号区画畠

1 H-1 水田 (第409図上)

1 H水田耕土下で確認された。分布範囲は4区北東隅の一部のみで、131号・132号溝の西側地区に限られている。本地区の地形面は北東から南西に向かってわずかに傾斜しており、水田区画のなかにはこの傾斜に符合する部分もある。

耕土はくすんだ灰色～灰褐色土で、層厚は5cmほどである。

水田面を覆う白色シルト層(1 H-1層)は1 H水田耕土と混土化しており、かろうじてアゼが確認できる程度の残存状況であった。アゼの幅は40cm前後で、高まりが確認できた部分は少ない。

水田の区画は、西側寄りの基本となるアゼは1 H水田の基本区画に一致するが、その東側の区画は地形に則した区画となっている。また、基本アゼに沿って水口とそれに伴う水落ち状くぼみが数カ所確認できた。水田区画の大きさは4 H水田の区画に類似している。なお、北側の一部に弧をえがく溝状の落ち込みが確認されたが、水田との関係は不明である。

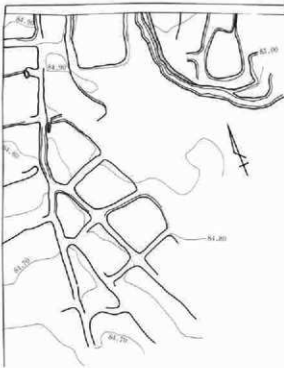
1 H-2 水田 (第409図下)

1 H-1 水田の耕土下で確認された。水田の範囲は1 H-1 水田に較べて広く、131号・132号溝の東側にも認められた。

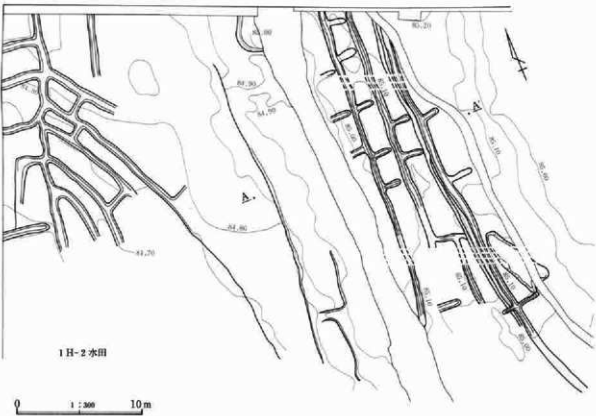
耕土はくすんだ灰褐色土で、層厚は北側で10cmほどである。

水田面を覆う白色シルト(1 H-2層)は1 H-1層に較べてやや粗く、134号溝中のシルトや2 H層に類似している。層厚は厚い部分で5cmほどあり、アゼも比較的良好に保存されていた。

水田の区画は、西側地区では1 H-1水田と同様であるが、東側地区では5 H～8 H水田と同様の小区画となっている。これは微高地上の土質は低地に較べて粗いため、漏水に対する対応の必要性があったためであろう。



1H-1水田



1H-2水田

0 1 : 300 10m

第409図・4区1H水田下で確認された水田

III 古代の調査



第410図 4区1H-2水田断面図

東側低地（5区）（第411図～第413図、第384図）

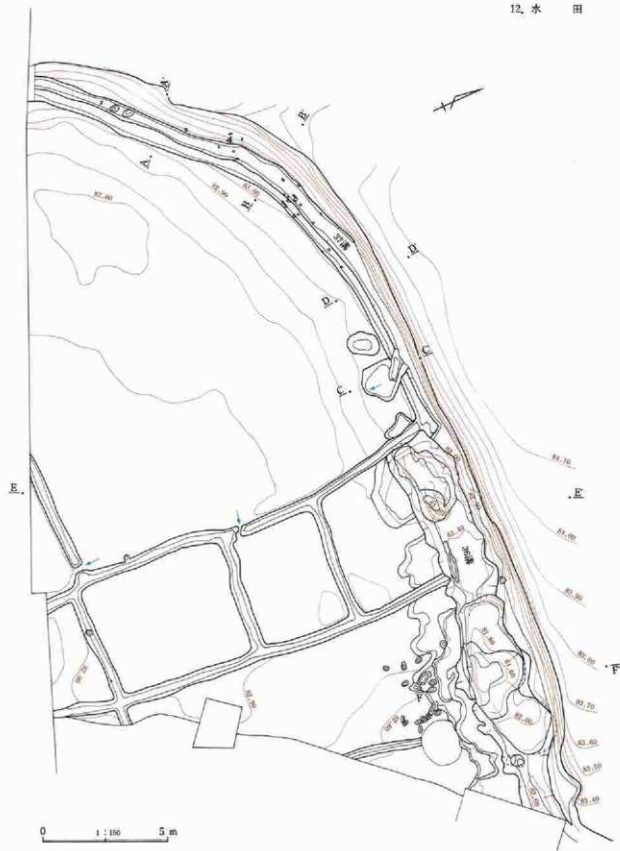
5区東側低地の1H水田時の地形面は、縁辺部では比較的傾斜は認められるものの、中央部では平坦な地形面となっており、その全域が水田化されている。

耕土はやや粘性のある灰色シルト質土で、2H層までの層厚は厚い部分で25cm、薄い部分では12cmである。耕土下半はやや白みをおびるが、土質はいたって均質である。

水田面を覆う1H層は、上位層にかなり混土しているものの、粕川寄りの厚い部分では45cmの層厚で堆積しており、水田面はすっぽりとこれに埋没している。土質は西側低地と同様、2～8mm大の黄色・赤褐色の軽石を多量に含むよごれた黄色ローム質土で、本地区でもこの層中に直径20cm大のローム塊が数個認められた。なお、水田面の保存状況はきわめて良好であり、田面のほぼ全域に小さな窪みや凹凸が多数認められたが、足跡と確認できる状態のものは存在しなかった。

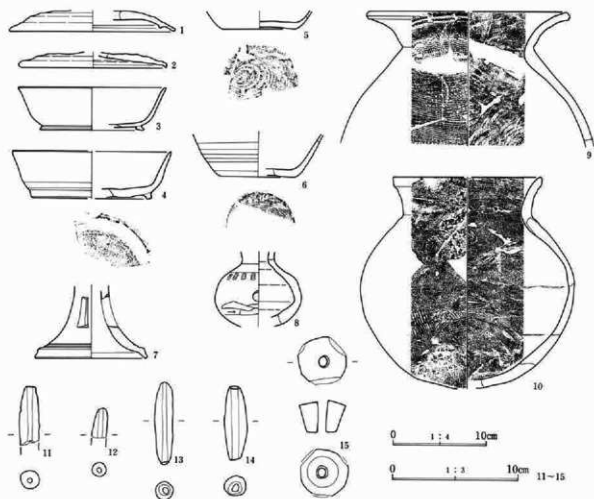
調査面積が狭いため、水田区画の全容はつかめないが、2H水田を踏襲していない点は西側低地と共通している。本地区では低地内の縁辺に水路（37号溝）をめぐらし、東西アゼを基軸にそれと直交する南北方向のアゼを5m間隔に配置し、南北に長軸をもつ区画を構成している。西側部分は南北方向の区画を設けていないが、理由は不明である。また、中央部の南北アゼ間は梯子状に区画されている。南北方向に長軸をもつ区画としたのは、地形面の傾斜との関係であろうか。アゼの方向はほぼ真北を基準としており、西側低地での1H水田の方向とは異なっている。水口は、水路のほぼ中央部に、大きな水落ち状の窪みを伴うものが1カ所、水田区画内に2カ所の合計3カ所が確認された。

なお、本水田の調査に伴って、縁辺部を東側から中央付近まで連する大規模な溝状の掘り込みを確認、36号溝とした。掘り込みは幅2m前後、長さ15mにおよんでおり、そのなかに楕円状の深い掘り込みが2カ所確認できた。深さは2カ所とも1.4m前後で、一方は地山裸層を60cmほど掘り込んでおり、もう一方は底面が砂礫層に達していた。その他の部分は深さ50cm前後で、地山の硬質砂礫土の面とまっていた。この掘り込みの南側縁辺には浅い不規則な掘り込みが認められ、そこから南側の水田面には地山の礫が散乱していた。楕円形の掘り込み内にもかき出しきれなかった地山礫がたまっており、その上を1H層が覆っていた。この溝は水田を破壊して掘削されており、当初は氾濫時の水流によって生じたものとも考えられたが、1H層の状態から、この溝を作るほどの水量と圧力は考えられず、人が掘削したものと理解するに至った。何の目的で水田を破壊してまでこの溝を掘削し、またなぜ途中で中断したのかについては、今のところ結論はでないが、掘削直後に1H層で一括埋没していることはまちがいない。



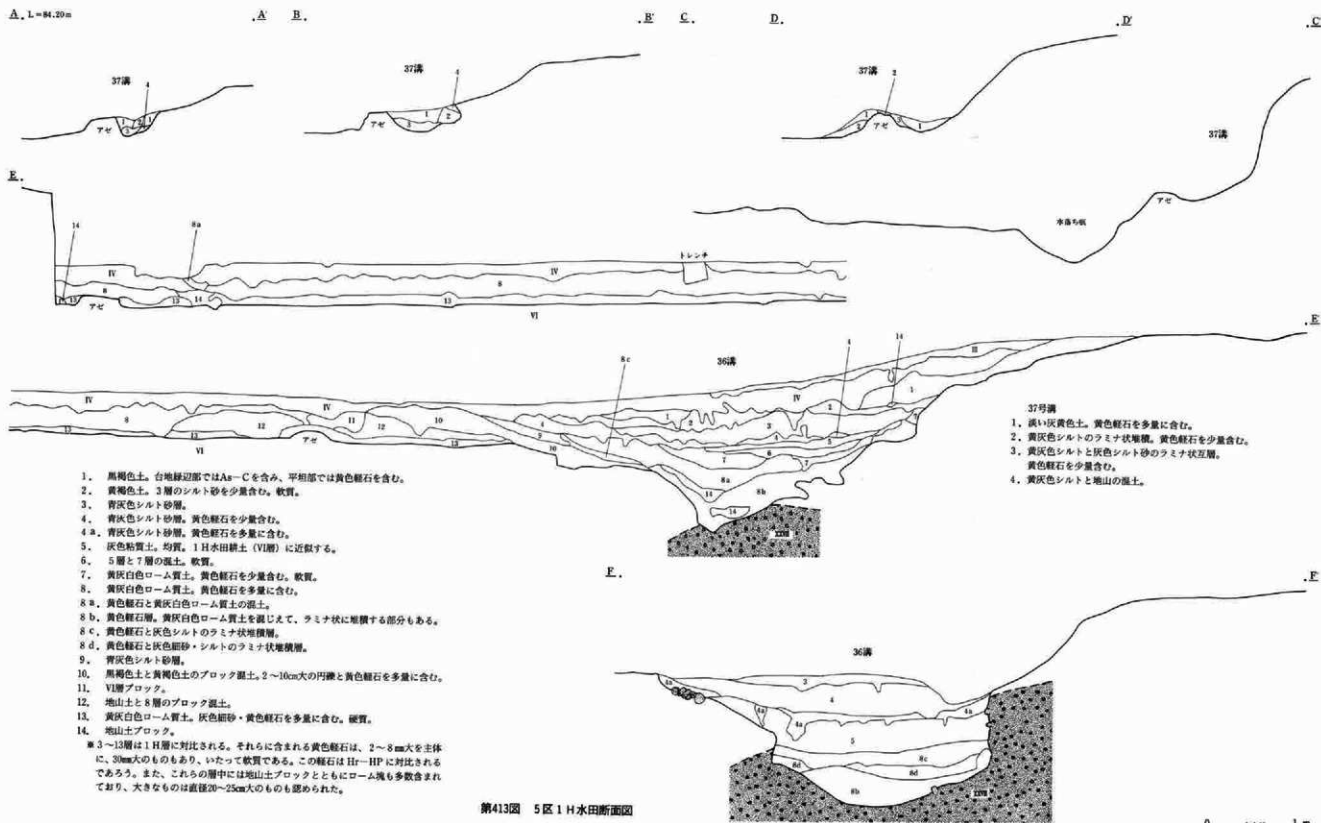
第411图 5区1H水田

III 古代の調査

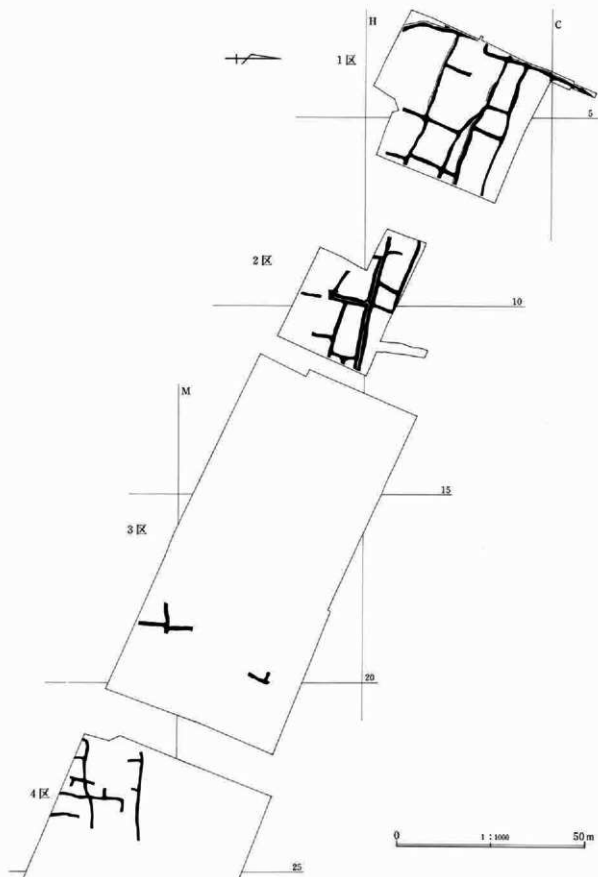


第412図 5区1H水田出土遺物

なお、1H水田に伴って多量の遺物が出土した。大半は耕土内からの出土であるが、本地区は集落に面した低地であるため、1H水田以前の遺物の流れ込みを多量に含んでいる。出土遺物のなかから主だったものを第412図に示した。1・2は須恵器蓋、3・4は須恵器高台付杯、5・6は回転糸切り底の須恵器杯、7は須恵器高杯の脚部、8は須恵器底、9・10は須恵器壺、11~14は土錘、15は石製紡錘車である。このうち4・6は1H層内出土、3は1H水田面出土、1・5は37号溝出土、2・7~15は1H水田耕土内出土である。以上のうち、1~7が本地区1H水田に伴うものと考えられる。

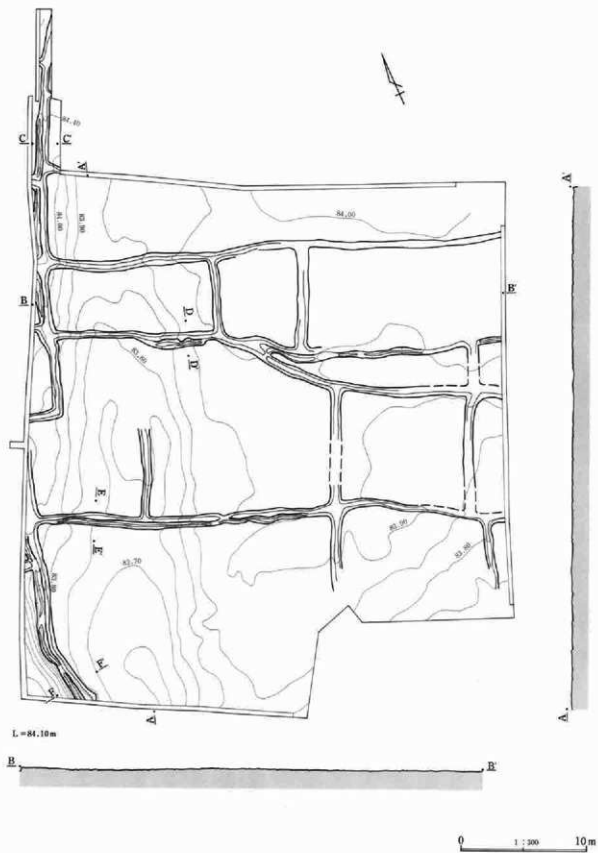


第413図 5区1H水田断面図

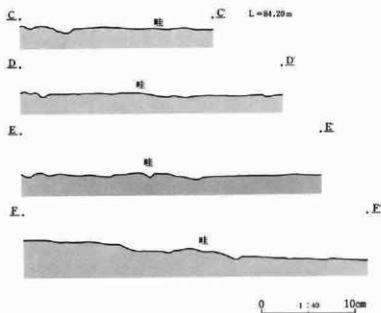


第414図 1～4区 As-B下水田全体図

III 古代の調査



第415図 1区 As-B下水田



第416図 1区 As-B下水田断面図

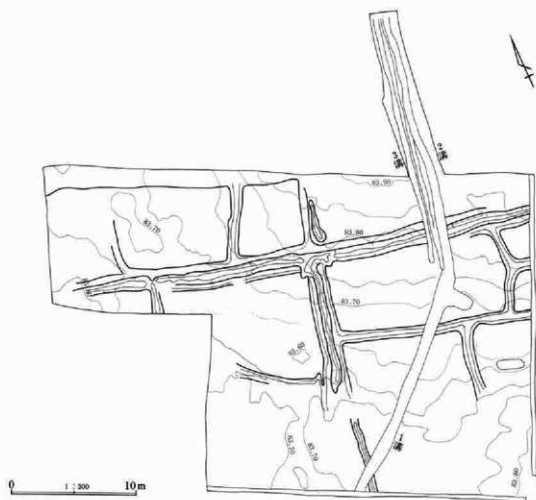
浅間B軽石 (As-B) 下水田 (第414図～第422図)

天仁元(1108)年に降灰した浅間B軽石(以下As-Bとする)は、5区微高地上を除くほぼ全域に認められたが、各区とも上位土層にかなり混土化されており、純層が認められるのはごく一部であった。As-B上面の水田が確認されていないため、As-B降灰後直ちに復旧されたか否かについて、直接的な確認は得られていない。水田区画は1区では全域にわたって確認できたが、2～4区では一部の確認にとどまっている。ただし、水田耕土は2～4区の全域に認められることから、1～4区の全域が水田化されていたと考えてよいだろう。下層の1H水田の区画との関係は、1区では縁辺をめぐる西側の南北アゼ、および東西アゼの北側の1本と南側の1本の一部がほぼ符合、2区では中央で交差する主要アゼがほぼ符合している。このうち、2区の東西アゼは、1H水田の「半折り」にあたるアゼであり、1区の南北アゼは1H水田の西側の限界を示すアゼに相当する。3区・4区の坪に相当する部分では手懸かりが得られなかったが、1区・2区では1H水田の主要ラインを踏襲していると言えよう。なお、5区低地では1H後に水田化されなかったが、As-B直下から短刀が出土しており、調査経過と合わせてここで扱うことにする。以下、区毎に報告する。

1区(第415図、第416図)

調査区全域にわたって水田が確認された。地形面は北から南に向かってわずかに傾斜しており、コンタでは旧河道部の混成が明瞭に残るが、水田の区画はそれに左右されておらず、耕作時はかなり平坦化していたと考えられる。As-B層は3～5cmの層厚で認められ、旧河道部上面も同様である。耕土は黒褐色粘質土で、1H層をかなり混土化している。層厚は10～15cmである。水田の区画は、1H水田と同様の直交する直線的な区画を基本とするが、地形面の起伏に沿って様々な区割りが認められる。水田の大きさは1H水田よりばらつきがあるが、区画はより直線的になっている。アゼの大きさは幅30～50cm、高さ5cm未満で、主要アゼには片側に浅い溝が付く。これは水まわしの工夫であろう。なお、明瞭な水口は認められない。アゼの方位

III 古代の調査

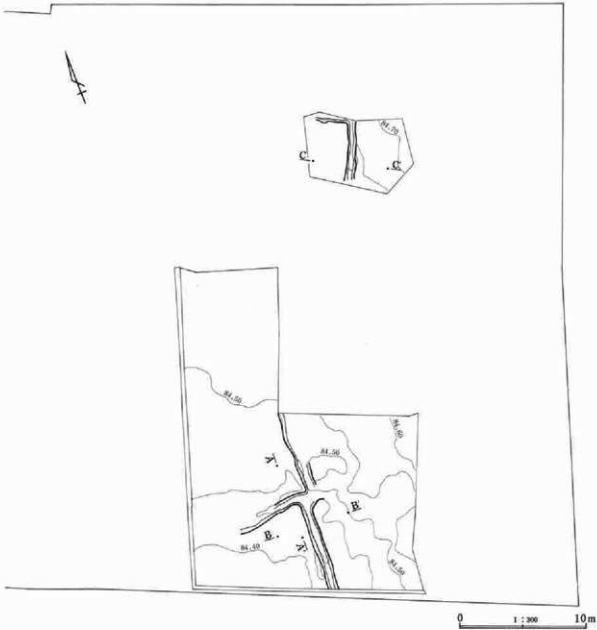


第417図 2区 As-B下水田

は1H水田とほぼ同様であり、西側縁辺の南北アゼおよび、東西アゼのうち北側のアゼと南側のアゼの一部は、1H水田のアゼとほぼ重複している。なお、西側縁辺の南北アゼの西側にもアゼの延長が認められることから、さらに西側に水田域が拡張されたことが判る。田面には無数の凹凸が認められるが、明瞭な足跡は認められない。

2区 (第417図)

南東の一角で水田が確認できた。地形面の状況や As-B層および耕土の状況は1区とほぼ同様である。水田の区画も1区から連続するもので、直交する直線的な区画を基本に、その間を必要に応じて刻んでいる。このうち、中央で十文字に直交するアゼが主要アゼであり、これらには1区で見られた浅い溝が付くが、2区では溝の両側にアゼが付く構造となっている。アゼの方位も1区と同様であり、直交する主要アゼは1H水田のアゼとほぼ重複する。このうち東西方向のアゼは、1H水田の「判折り」にあたるアゼと重複しており、西側に延長すると1区の東西アゼに連続している。アゼの規模、田面の状況は1区とほぼ同様である。水口はここでも確認されていない。



A. L = 84.80m

.A'



B.

.B'



C.

.C'



0 1:40 1m

第418図 3区 As-B下水田

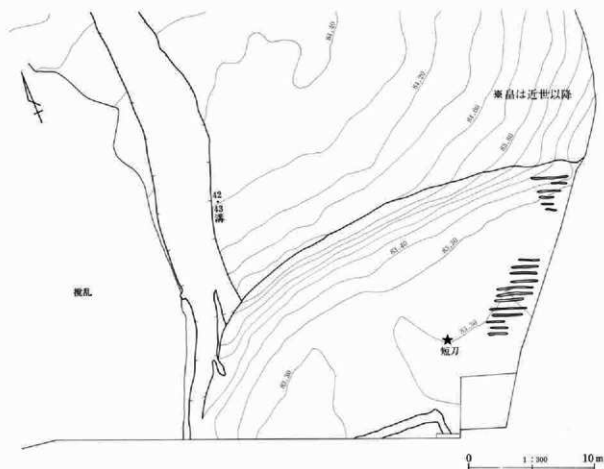
III 古代の調査



第419図 4区 As-B下水田

3区 (第418図)

東側の2カ所でアゼの一部が確認されたにとどまる。この地区は微高地から低地に変化する位置にあたるが、本水田面では北東から南西に向かう緩斜面になっており、地形的変化はさほど感じられない。2カ所ともアゼの交差部分にあたっており、いずれも直交している。方位は、北側の1カ所は東にかなりふれているが、南側ではほぼ南北方向に走向している。なお、水田耕作土は1区・2区と同様の層厚で3区全域に認められることから、この段階に全域が水田化されていたと考えてよいだろう。



第420図 5区 As-B下の状況と短刀出土位置

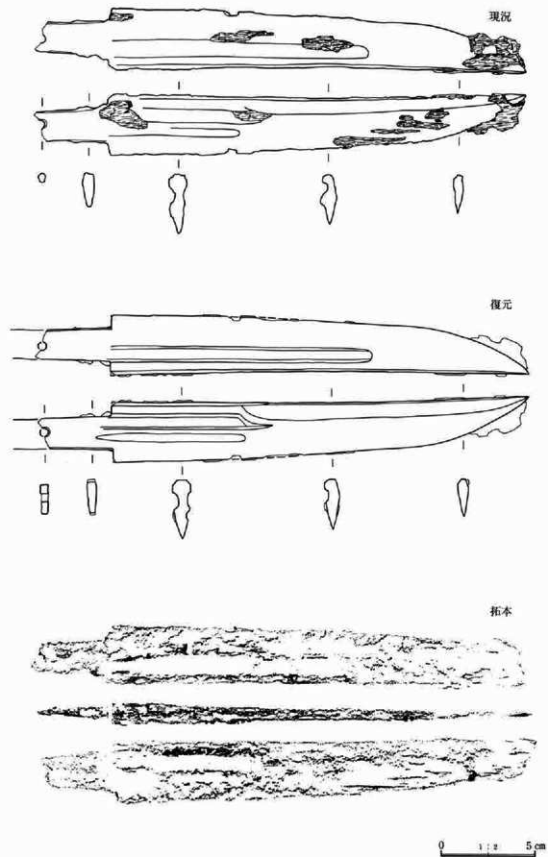
4区 (第419図)

本地区では As-B層はほとんど上位土層と混土化しているが、その下層の耕土にあたる灰黒色シルト質土は、10~15cmの層厚で4区のほぼ全域に認められることから、本来は全域が耕地化されていたと考えられる。水田区画が確認できたのは南東隅の一角で、アゼの高まりは削平されてほとんど認められないため、傾斜面に沿った僅かな段差や、火山灰下水田面に特有の凹凸の有無を手懸かりに、区画の痕跡を検出した。水田の区画は1区・2区に比べてやや小さく、方位はやや東にふれるものの、南北方向に近いものであった。また、本地区では水田面に人と牛の足跡が残されていた。第419図の細長いのが人の足跡、丸で示したのが牛の足跡で、牛の足跡には爪先の方を示した。いずれも作業内容が理解できるようなあり方は認められない。この水田区画の東側は1H水田時の坪にあたるが、As-B層で埋没した溝は確認できない。中・近世の111~113号溝のいずれかがこれにあたり、その後も継続使用されたものと考えたい。なお、第419図の溝は、いずれも本水田を切る中・近世のものである。

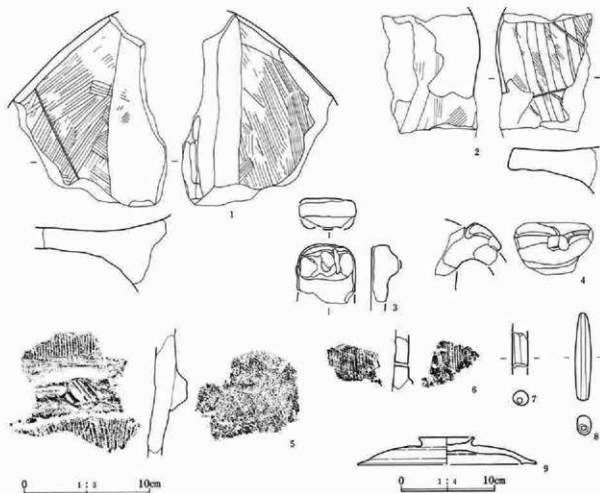
5区 (第420図、第421図)

5区微高地上は上面が削平されており、As-B層および耕土相当層は確認できないが、低地部分では両層が認められた。As-B層は、低地内の西半部では層厚10~15cmの純層状態で認められたが、東半部ではかなり純層に近い状態で混土化していた。As-B層および混土層を除去すると、無数の足跡状の窪みが全面に認

III 古代の調査



第421図 5区 As-B層直下出土短刀



第422図 5区遺構外出土遺物

められ、混土層部分でもこの窪みには純層の As-B層が充填していた。As-B層下に水田の区画は存在しなかったが、第421図に示した短刀が As-B層下灰黒色シルト質土の直上に単独で置かれた状態で出土した。この地点（第420図）は As-B層が純層から混土層へと変化する地点にあたるが、短刀の周辺部には As-B純層がブロック状に認められること、短刀は As-B層下灰黒色シルト質土に接して置かれていることから、As-B層降下直前に何らかの理由でここに置かれたと考えてよいだろう。

刀身は刃渡り22.2cm、茎は現存部3.9cmで、腐食が進んでいるものの、原形をよくとどめている。目釘穴以下を欠失するが、これは取り上げ時の不注意によるもので、刀身に残る木質が示すように、本来は拵に納められていたものと考えられる。作行は身の7分におよぶ冠落しが特徴的で、片面に棒樋、もう一方には冠落しに合わせて長刀樋と添え樋が彫られている。樋は真の棟をなし、切先は高瀬作りである。棟区と刃区はともに深く明瞭で、肉厚な作りとともに、作刀時の姿をよくとどめていると言えよう。以上の特徴は作刀者の技量の深さを示しており、五ヶ伝初期の作となる可能性が高い。

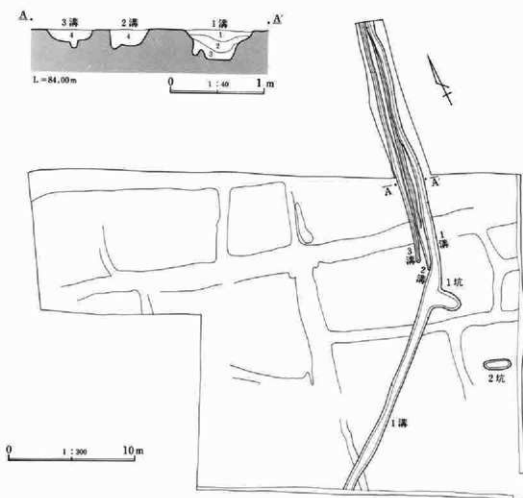
この短刀は1108年降下の浅間B経石（As-B）直下から出土しており、平安時代後期の作と考えてよい。そしてこの短刀を特徴づける冠落しや表裏に彫られた樋は、鎌倉時代の作刀につながる技法であり、古代から中世にわたる日本刀史の流れのなかで、重要な位置を占めていると言えよう。

IV 中・近世の調査

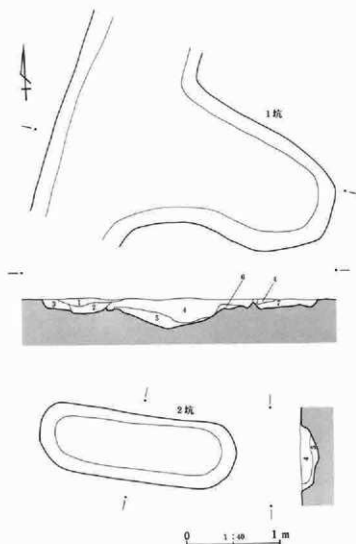
1. 調査の概要

発掘調査により確認された中・近世の遺構は、溝27条、掘立柱建物5棟、井戸9基、土坑49基、墓墳2基である。分布は1区を除く各区に認められたが、なかでも5区は調査区のほぼ全域にわたって遺構が展開しており、当該期はこの地区が中心域であったことが判明した。一方、その他の地区では溝を中心とする遺構分布が認められる。溝は開場整備以前の地割りに対応するものが多く、特に南北方向の主要な溝は条里地割りとの対応関係が想定される。

遺物は13世紀以降の各期のものが認められるが、総体として18世紀以降の遺物は少ない。本遺跡の西側台地上に立地する五目牛南組遺跡では近世の屋敷地が調査されているが、ここでは18世紀以降の遺物が主体となっており、本遺跡との相互補完関係が想定される。なお、5区では8世紀代の瓦や1号古墳の遺物と考えられる埴輪・土器類が、中・近世の遺構から多く出土している。



第423図 2区中・近世の遺構



第424図 2区1・2号土坑

2. 2区の調査

浅間B軽石下水田の調査に伴って溝3条と土坑2基を確認。溝の走向に従って北側の一部を拡張し、全走向を調査した。確認面は浅間B軽石純層の上面で、いずれも同軽石と耕土を切り込んで構築している。

1～3号溝は北半部では南北方向よりやや東へ振れる角度で3条が並走するが、南半部では1号溝のみが西へ角度を変えて走向する。1号溝と2号溝は一部を重複しており、1号溝が切っている。断面形はいずれも逆台形状で、規模は1号溝が幅70cm、深さ30cm、2号溝は幅40cm、深さ16cm、3号溝は幅50cm、深さ12cmである。

土坑はいずれも溝の東側に位置し、1号土坑は1号溝の一部を切られている。形状は2基とも長軸の長い楕円形で、東西方向に長軸をとっている。1号土坑はやや規模が大きく、長軸2.5m前後、短軸1.25m、深さ8cmで、中央部に深さ30cmのくぼみを伴っている。2号土坑は長軸2.12m、短軸0.7m、深さ18cmで、底面には小さな凹凸が認められる。

以上の遺構からは遺物の出土は認められなかった。

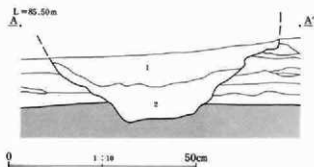
3. 3区の調査

本調査区では溝4条、掘立柱建物2棟、井戸2基、土坑2基を確認した。溝4条は表土層下に切り込み面が確認できるが、平面的な確認は他の遺構とともに1H層上面で行った。

溝は微高地縁辺に沿って南北方向に走向する6号溝と、1H水田大アゼに沿って南北方向に走向する8号・9号・10号溝がある。

6号溝は粕川から本地区に引水する主要水路としても古くから存在していたと考えられる溝で、明治3年の村絵図にも記入されており、圃場整備以前まで機能していた水路である。溝の幅は2.2m前後、確認面からの深さは70cm前後で、断面形は上端の開いた逆台形状を呈する。溝内には1mほどの閣下区で土留め用の杭列が認められ、北側の部分には馬入れに伴うコンクリート製の基盤が設置されていた(第424図)。出土遺物は古代から近世のものまで混在しており、最近まで継続使用されていたため、遺物量も比較的少ない。そのなかでも中世の青磁・陶器類が目立っており、溝の開削はその頃までさかのぼる可能性もある。

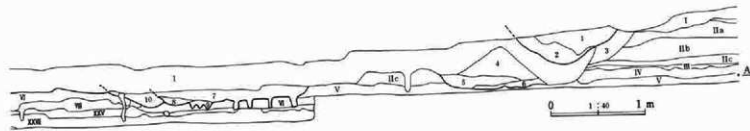
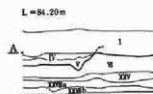
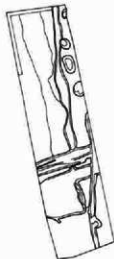
8号・9号・10号溝は1H水田大アゼに沿って、各々3~4mの間隔をもって平行に走向しており、東側から8号・9号・10号とした。いずれも平面で確認できたのは底面の一部のみであるが、断面の観察により底面が平坦で逆台形状に開く溝であることが判明している。また、いずれも底面にラミナ状堆積の粗砂粒を多く含んでおり、水路として機能していたことを明瞭に示している。最も東側の8号溝は、その東側部分を圃場整備以前の水路と重複し、それに切られていることから、この走向位置が最近まで継続使用されていたことが判る。平面確認では、幅1.5mほどの間に2~3条の流路が認められるが、これが溝の幅を示すのか、あるいは数回の復旧・重複を示すのか、確認できない。



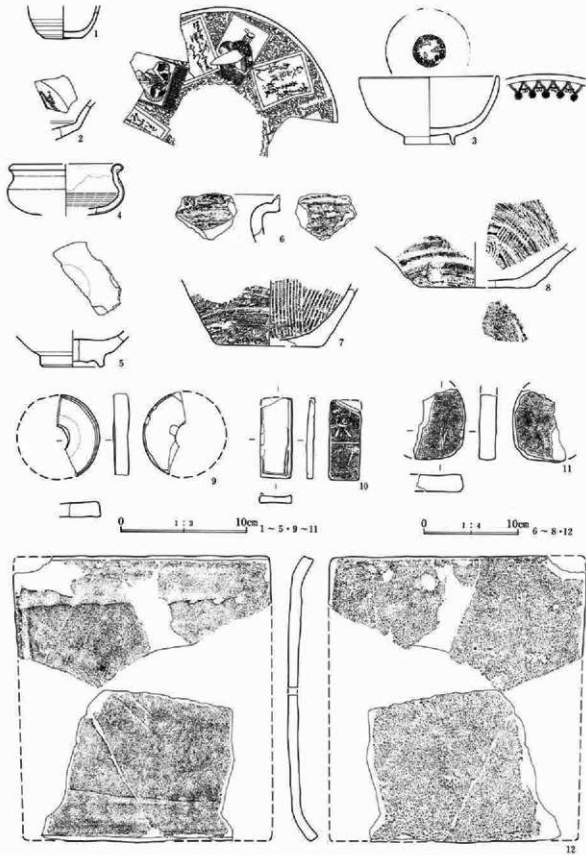
第425図 3区6号溝



1. 黒灰色土。
 2. 黄灰色シロト質土。黒灰色土ブロックを含む。
 3. 灰白色土。
 4. 黒灰色土。砂粒・As-Bを多量に含む。
 5. 4層と同質だが、4層より硬質。
 6. 黒灰色土。
 7. 灰褐色土。砂粒・As-Bを多量に含む。
 8. 黄褐色土。砂粒・As-Bを多量に含む。
 9. 灰色土と砂粒の混土。
 10. VI層と砂とAs-Bの混土。
- ※ 3～6層は5号溝、7～10層は9号溝。
10号溝はここでは確認できない。
田はAs-B、VはI土層、WはI日水田耕土。



第426図 3区中・近世の遺構



第427図 3区6号溝出土遺物

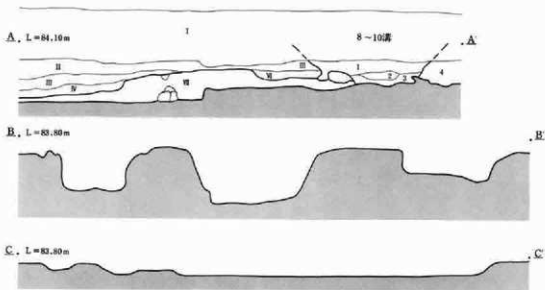
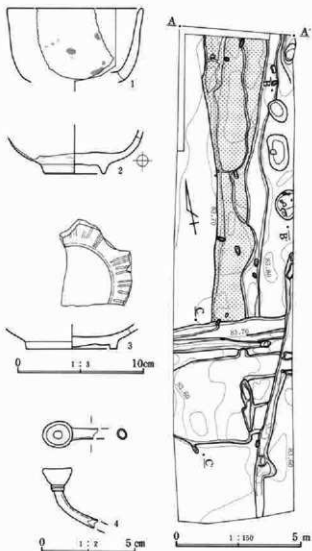
IV 中・近世の調査

中央の9号溝は明らかに複数の溝が重複しており、東寄りのものが新しい。北壁部分では底面幅が1.4mである。大アゼ西側の10号溝は、平面では断続的な走向が確認できたが、断面では確認できなかった。

3区南拡張区では、9号溝の延長とそれに直交する東西方向の溝が確認できた。9号溝は1H水田大アゼの一部を破壊して走向する流れとその東側に沿う流れの2条があり、前者は東西方向の溝に近接しているが、後者はそれをつきぬけて南へ延びている。東西方向の溝は2～3条の浅い溝の集合で構成されており、その南側は3mほどの幅で一段低くなっている。この地点は条里地割りの交点にあっており、圃場整備以前の地割りもこれを踏襲している。

8号・9号・10号溝の出土遺物は少なく、17～18世紀前半の陶器類少量とキセル雁首1点が出土している。

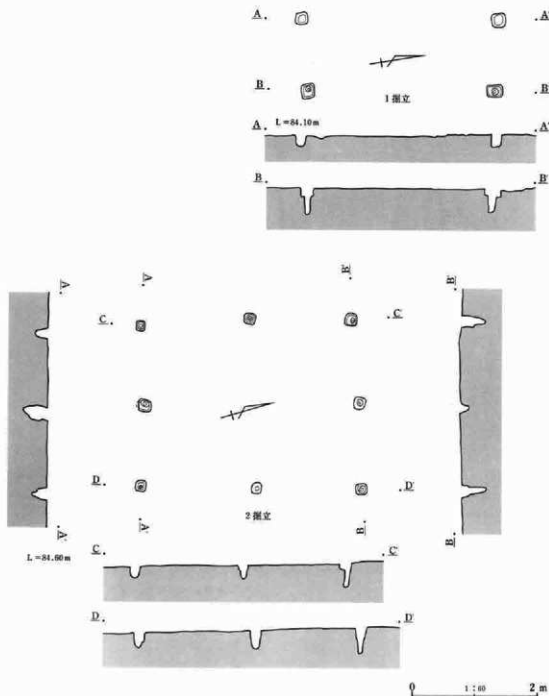
掘立柱建物は2棟確認された。1号掘立柱建物は1×1間の小形長方形を呈するもので、8号溝の東側真近に位置する。柱間は長軸の一方が3.0m、他方が3.15m、短軸はいずれも1.1m



第428図 3区8～10号溝

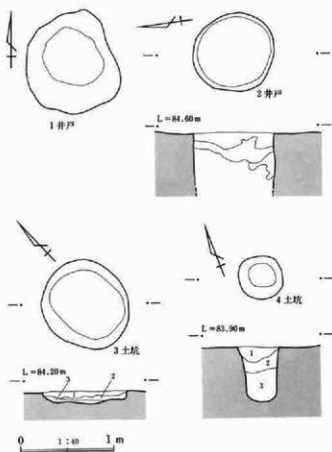
3. 3区の調査

で、長軸を東西方向にしている。柱穴はいずれも20~25cmの方形を呈し、長軸の片方の2本にはそのなかに円形の掘り込みが認められた。2号掘立柱建物は2×2間の長方形を呈するもので、6号溝寄りに位置する。柱間は長軸方向北側が1.75mと1.67m、南側が1.88mと1.7m、短軸方向東側が1.3mと1.38m、西側が1.22mと1.33mであり、やや歪みが認められる。柱穴は1号とほぼ同様であり、8本中5本に円形の掘り込みが認められた。なお、1号・2号とも出土遺物は認められなかった。



第429図 3区1・2号掘立柱建物

IV 中・近世の調査



第430図 3区井戸・土坑

1号井戸は9号溝の北側寄りのところに位置する。当初は9号溝の一部として扱っていたが、直径1mの円形状を呈する井戸であることが判明。深さは未確認。重複関係では9号溝により切られている。覆土はA s-Bを多量に含む黒灰褐色砂質土で、出土遺物は認められない。

2号井戸は6号溝寄りの北側にあり、2号掘立柱建物の北側18mほどのところにあたる。平面形は直径85cmの正円形を呈す。底面は未確認。覆土は、1号井戸と同様にA s-Bを多量に含む黒灰褐色砂質土を主体としており、出土遺物は認められなかった。

土坑は2基とも8号・9号・10号溝に近接した位置にある。3号土坑は1号掘立柱建物の東側に位置する。平面形は直径95cmの円形を呈し、深さは123cm前後と浅い。4号土坑は10号の西5mの位置にある。平面形は直径48cmと小形で、確認面からの深さは57cmである。いずれも土坑も遺物の出土は認められない。

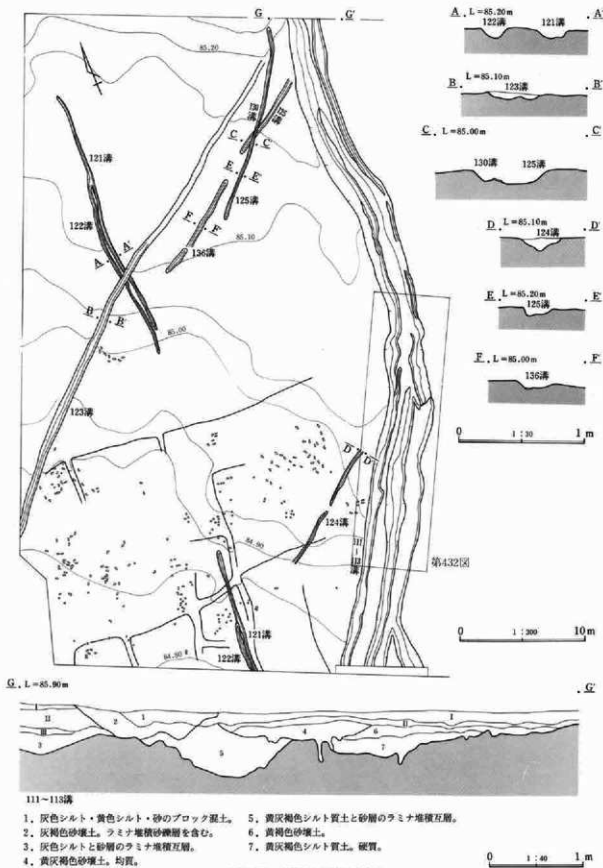
4. 4区の調査

4区ではA s-B面が確認面に相当する。中・近世の遺構分布は111～113号溝の西側地区に限られている。確認された遺構は全て溝で、合計10条である。

主要水路と考えられる111～113号溝以外は、溝幅20～40cm、確認面からの深さ5～10cmほどの小規模な溝で、これらは走向の特徴や覆土により3種類に分けられる。まず南北方向に走向する121号・122号溝は覆土中に通水を示す砂粒を多く含んでおり、水田区画に伴う水路の可能性が高い。これに対し、等高線に直交する方向をとる123号・130号・136号・124号溝は、覆土中に砂粒を含まず、水路とは考えられない。130号溝と136号溝は同一の溝と考えられ、123号溝と2mの間隔で平行することから、これらは道に伴う根切り溝かもしれない。以上の2種類と異なる走向をもつ125号溝も、覆土中に砂粒は含んでいない。

重複関係は、121号溝を122号溝が切り、この2本の溝を123号溝が切っている。また、123号溝と平行する130号溝を125号溝が切っている。なお、以上の溝から遺物の出土は認められなかった。

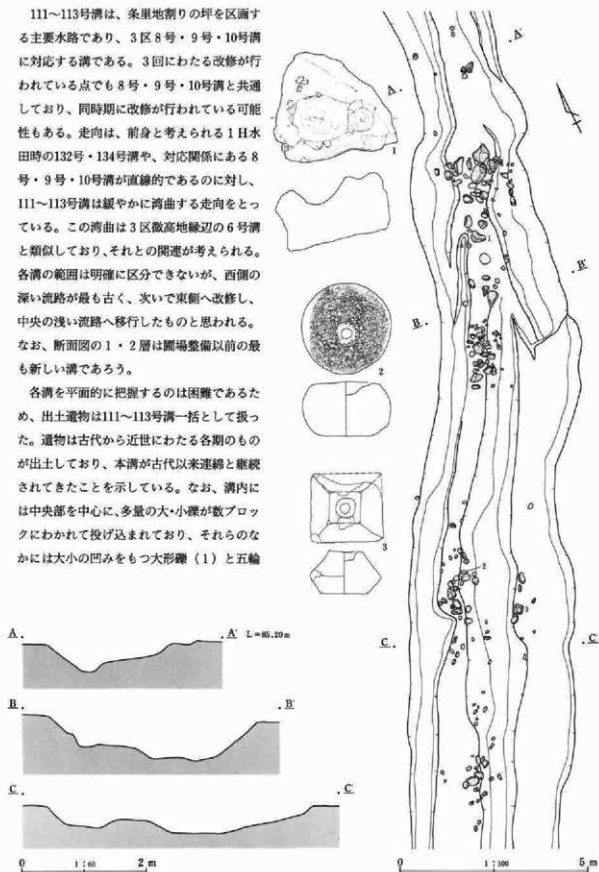
4. 4区の調査



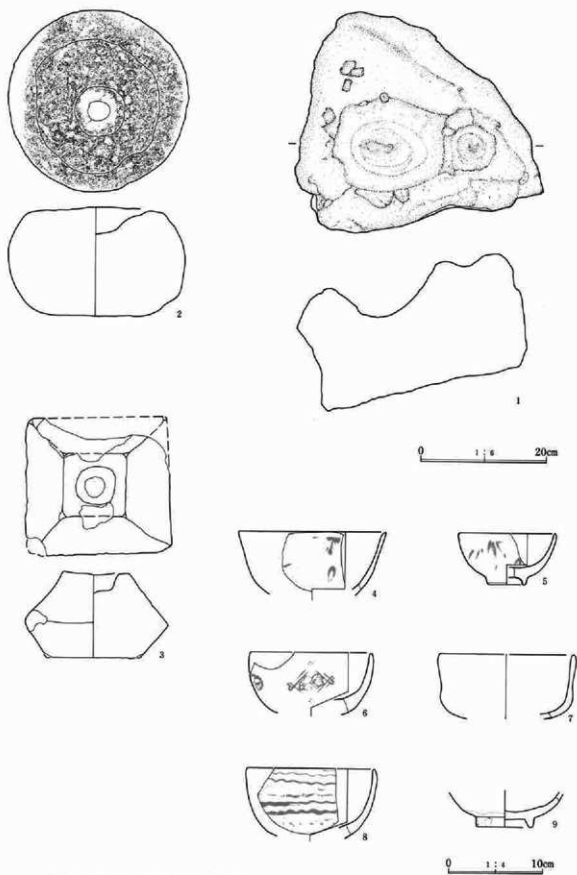
IV 中・近世の調査

111～113号溝は、条里地割りの坪を区画する主要水路であり、3区8号・9号・10号溝に対応する溝である。3回にわたる改修が行われている点でも8号・9号・10号溝と共通しており、同時期に改修が行われている可能性もある。走向は、前身と考えられる1H水田時の132号・134号溝や、対応関係にある8号・9号・10号溝が直線的であるのに対し、111～113号溝は緩やかに湾曲する走向をとっている。この湾曲は3区微高地縁辺の6号溝と類似しており、それとの関連が考えられる。各溝の範囲は明確に区分できないが、西側の深い流路が最も古く、次いで東側へ改修し、中央の浅い流路へ移行したのと思われる。なお、断面図の1・2層は圃場整備以前の最も新しい溝であろう。

各溝を平面的に把握するのは困難であるため、出土遺物は111～113号溝一括として扱った。遺物は古代から近世にわたる各期のものが出土しており、本溝が古代以来連続と継統されてきたことを示している。なお、溝内には中央部を中心に、多量の大・小礫が数ブロックにわかれて投げ込まれており、それらのなかには大小の凹みをもつ大形礫(1)と五輪

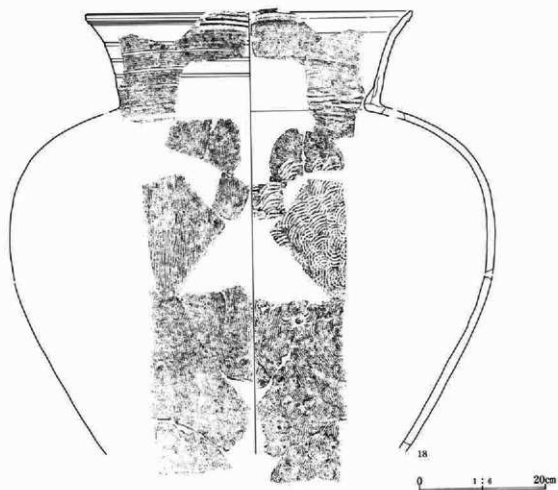
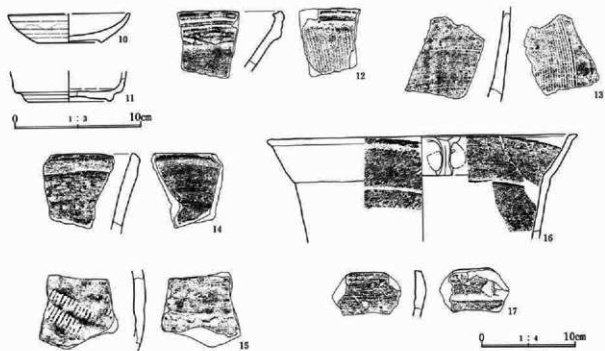


第432図 4区111～113号溝



第433図 4区111~113号溝出土遺物(1)

IV 中・近世の調査



第434図 4区111~113号溝出土遺物(2)

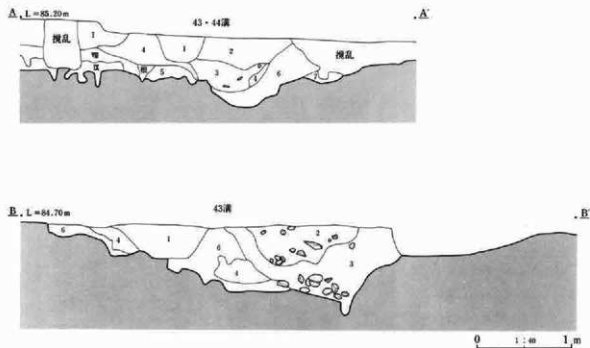
塔の火輪(3)・水輪(2)各1点、および焼人骨少量が含まれていた。周辺部に墓域が存在していたと考えられる。

5. 5区の調査

5区でA s-B層の純層が認められたのは低地部分のみであり、中・近世遺構の大半は古代遺構と同一面での確認となったが、古代遺構の埋土が褐色系で榛名山二ツ岳軽石とA s-Cを含むのに対し、中・近世遺構の埋土は灰色系ブロック混土、あるいはA s-Bを含む特徴をもっており、比較的容易に区別ができた。中・近世遺構の覆土には数種類の特徴的な違いが認められ、調査時にそれらのチェックを試みたが、貫徹できなかった。

検出した遺構は溝11条、掘立柱建物3棟、井戸7基、墓墳2基、土坑45基である。溝はほぼ全域にわたって展開するが、その他の遺構は46号溝、45号溝・53号溝の区画内にまとまる傾向を示しており、この部分は屋敷地であったと考えられる。この区画を構成する溝のうち、45号溝は条里型地割りの坪ライン上にある溝であり、46号・53号溝はそれにほぼ直交している。

出土遺物は13世紀以降の各段階の生活雑器類がほぼ出揃っており、遺構のあり方から見てもこの地区が中・近世の居住域であったと考えてよいだろう。ただし、18世紀以降の遺物量が減少する点は3区・4区と共通しており、それ以降は東側ローム台地上に移動したものと考えられる。注目される遺物としては、中世の青磁、香炉、瓦、天目茶碗、茶臼、戦時下統制番号付陶器鍋(第440図-36)などがある。なお、中・近世遺構出土の古代遺物もここに示してある。



第435図 5区中・近世溝断面図

溝 (第435図～第447図)

溝は11条が確認された。このうち44号・46号・47号・53号溝は圃場整備以前の地割りに対応しており、その段階まで使用されていた可能性が高い。また、先述のように45号溝は条里地割りの坪ライン上についており、46号・52号溝はそれに直交している。

44号溝は42号・43号溝の流路を踏襲しており、この3条の溝は本地区の主要水路と考えられる。規模はいずれも幅1.5m前後、確認面からの深さは50～70cmで、新旧関係は古いほうから42号・43号・44号となるであろう。規模が大きく、3回にわたり踏襲される特徴は3区8号・9号・10号溝および4区111～113号溝と共通するが、それらが条里型地割りの坪ライン上を直線的に走行するのに対し、42号・43号・44号溝は南半部では45号溝と合流（あるいは重複）して坪ライン上を走行するが、北半部は大きく屈曲して坪ラインの19m西側を併走している。その理由は不明だが、屈曲部はちょうど前方後円墳の後円部にあたることから、この溝が開削された時期にはまだ後円部埋土が残っていたと言えよう。出土遺物は13世紀以降の各段階のものが含まれており、本溝が古くから継続されてきた証と考えたい。なお、本溝から多量に出土した埴輪・須恵器は大半が1号墳に伴うものであろう。他に8世紀代の布目瓦（第445図78・79）と黒笹14号窯式灰釉陶器（第441図45）の出土があるが、本溝が条里型地割り施行当初のプランだとすれば、これらも本溝に伴う遺物かもしれない。

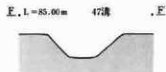
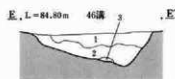
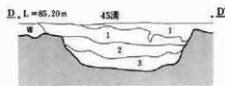
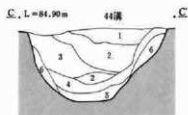
45号溝は条里プラン上を南北方向に直線的に走行する溝である。46号溝と直交し、42号溝に接続するが、それらの溝との重複関係は不明である。規模は幅1.2m、確認面からの深さ40cmで、開削時期を示す遺物の出土はない。

46号溝は東西方向に直線的に走行する溝で、45号溝と同様に42号溝に接続しているが、重複関係は不明である。規模は45号溝とほぼ同規模で、覆土中から17世紀代の皿等が出土している。

47号溝は45号溝の東側を併走し、46号溝に接続している。重複関係は不明である。規模は幅80cm、確認面からの深さ25cmで、遺物の出土は認められなかった。

48号溝は46号溝から鉤手状にのびて併走する溝で、幅は75cm、確認面からの深さは6cmである。出土遺物はない。

52号溝は微高地の縁道を低地に沿ってのびる溝で、幅は70cm、確認面からの深さは10cmである。21号・37号土坑を切る。



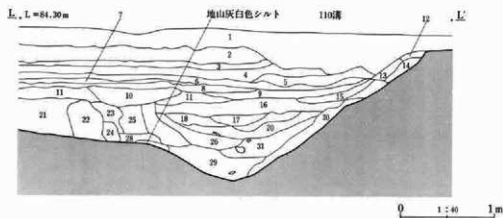
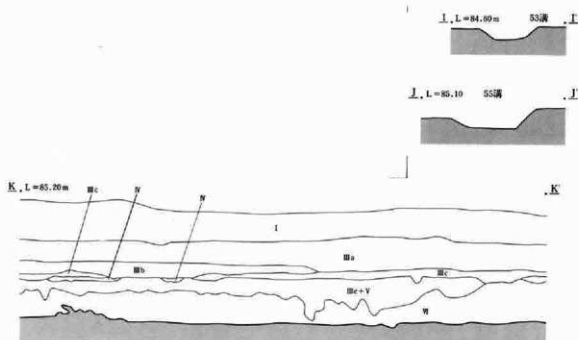
0 1 : 40 1 m

第436図 5区中・近世溝断面図



第437図 5区中・近世の遺構

5. 5区の調査



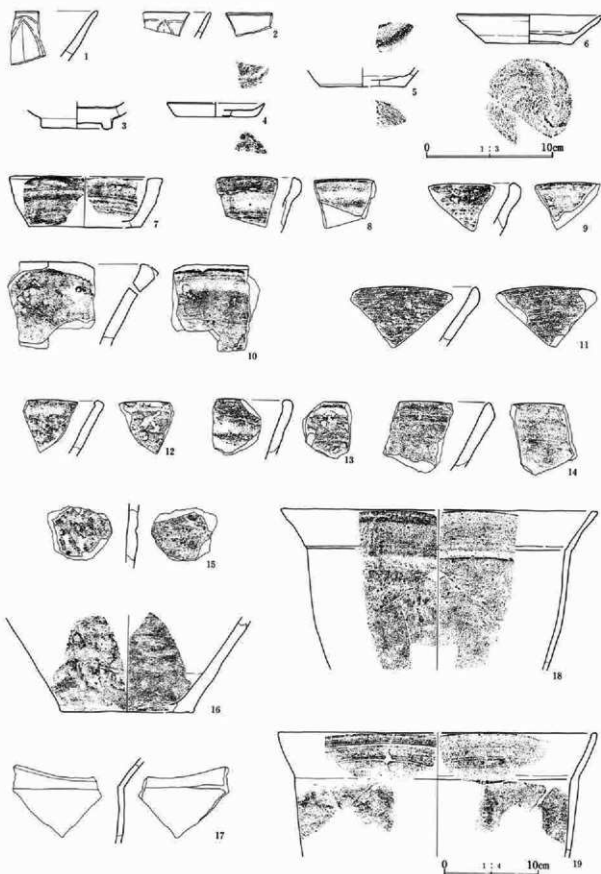
第438図 5区中・近世溝断面図

掘立柱建物

北側を46号溝に、西側を45号・42号溝に区画された空間に、多数のピットが確認された。東側台地縁辺部及び南側低地部は削平がおよんでいるため、厳密な範囲は不明であるが、この区画内に集中する傾向は変わらないであろう。ピット群のうちで建物として組めたのは3号・4号・5号の3棟である。

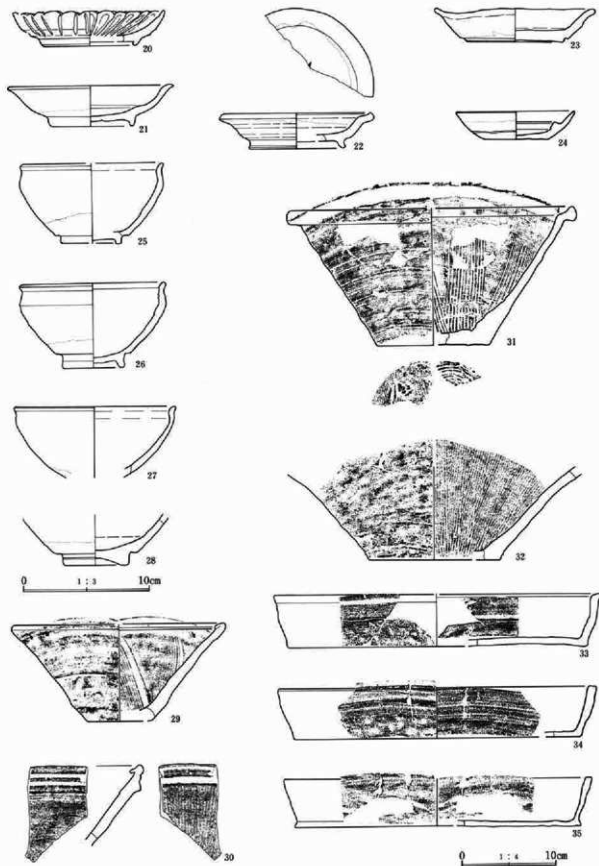
3号掘立柱建物は区画内の北西隅に位置する。北東側の大半を4号掘立柱建物と重複するが、新旧関係は不明である。また、西側の2本の柱は45号溝に重複するが、これも新旧関係は確認できなかった。東西3間（北辺6.4m、南辺6.2m）、南北1間（東辺3.6m、西辺3.75m）の、東西方向に長軸をもつ長方形の建物である。全体にわずかに歪みが認められる。両短辺の外側60cmの位置に各々ピットがあり、これを結ぶと建物

IV 中・近世の調査



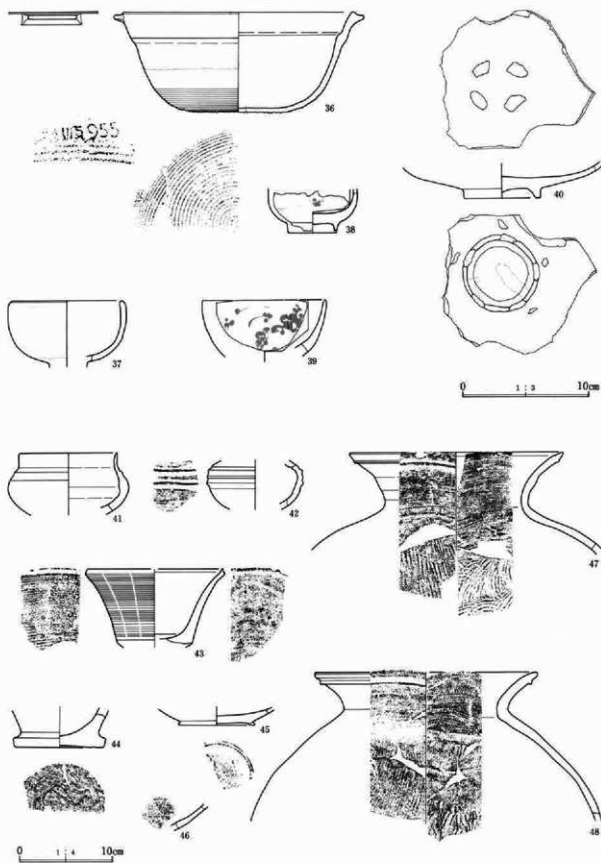
第439図 5区42・43号溝出土遺物(1)

5. 5区の調査



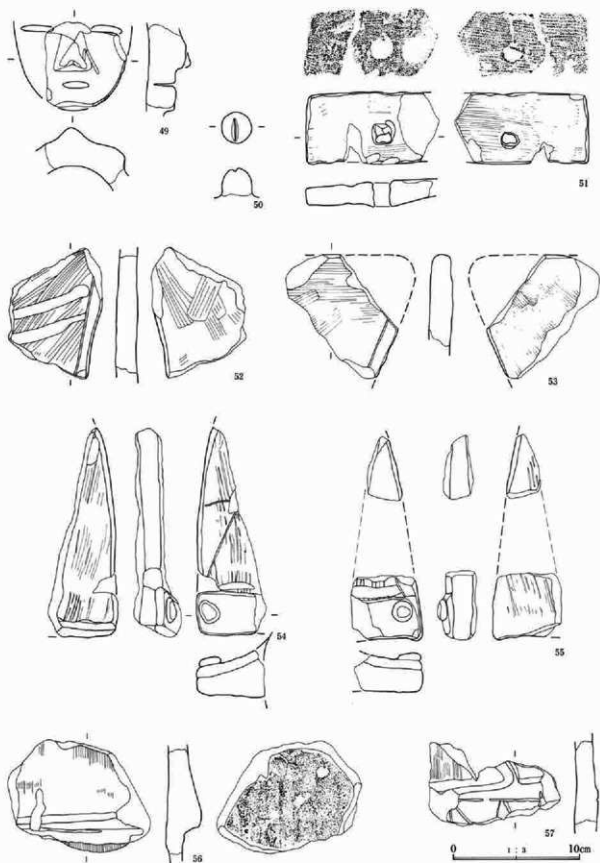
第440図 5区42・43号清出土遺物(2)

IV 中・近世の調査

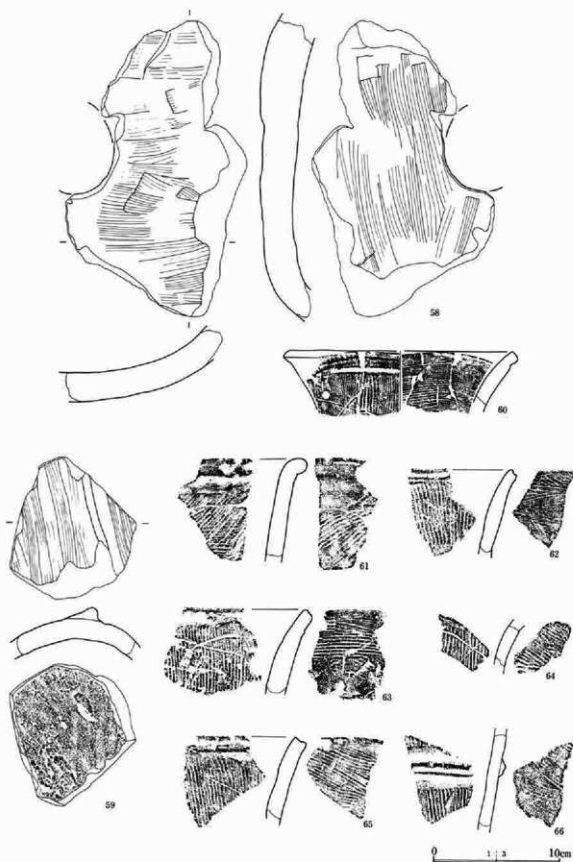


第441図 5区42・43号溝出土遺物(3)

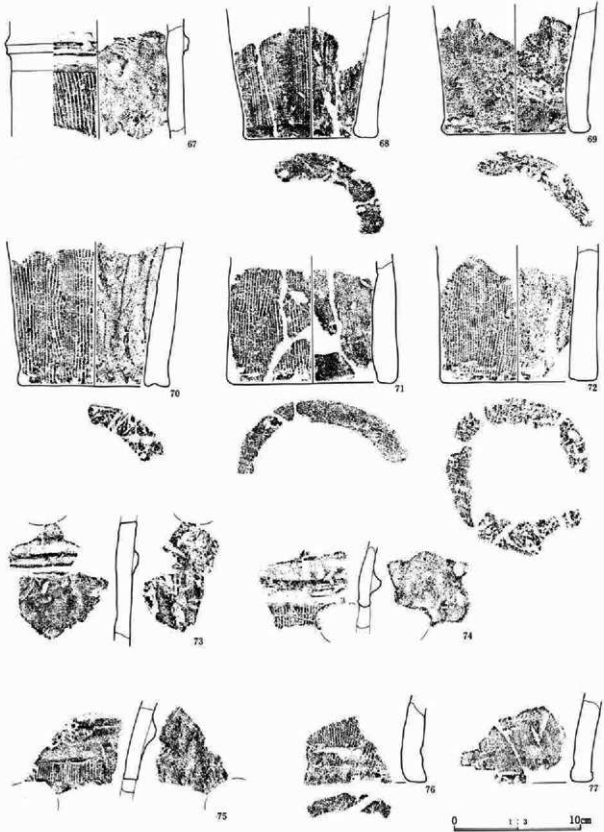
5. 5区の調査



第442図 5区42・43号出土遺物(4)

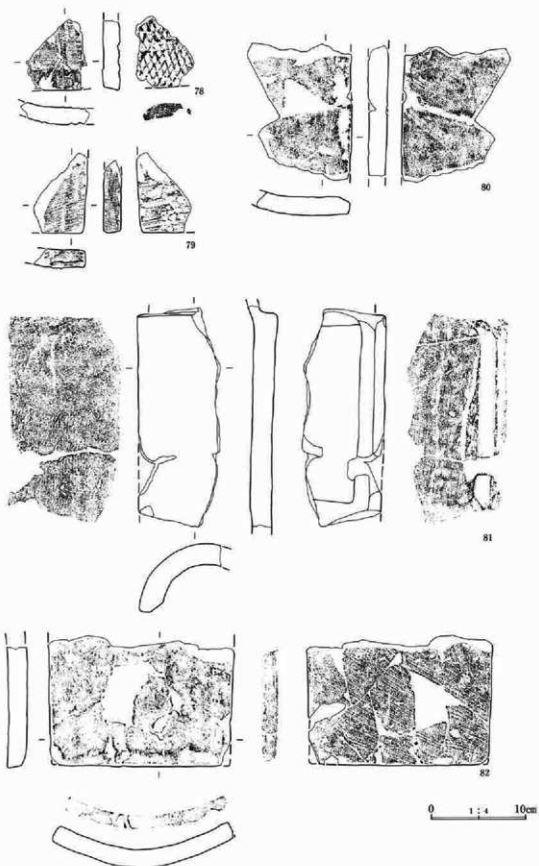


第443図 5区42・43号溝出土遺物(5)

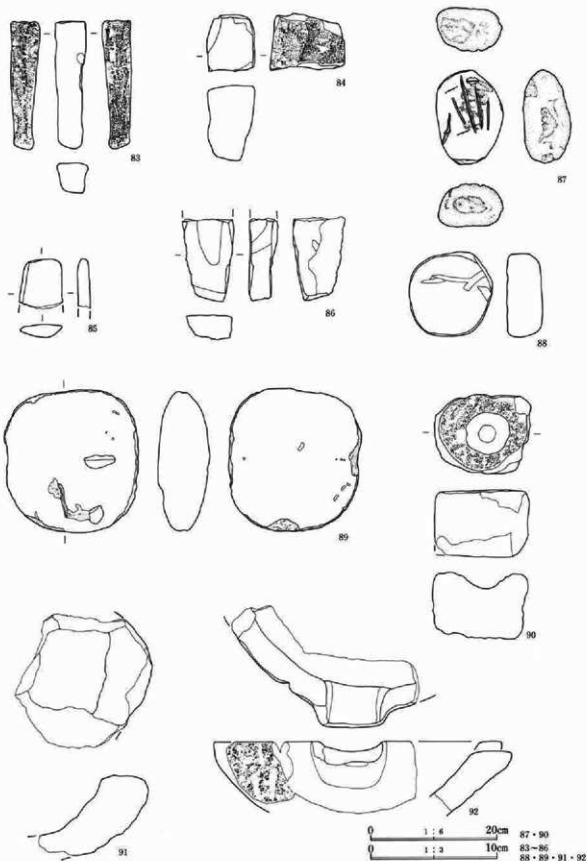


第444図 5区42・43号清出土遺物(6)

IV 中・近世の調査

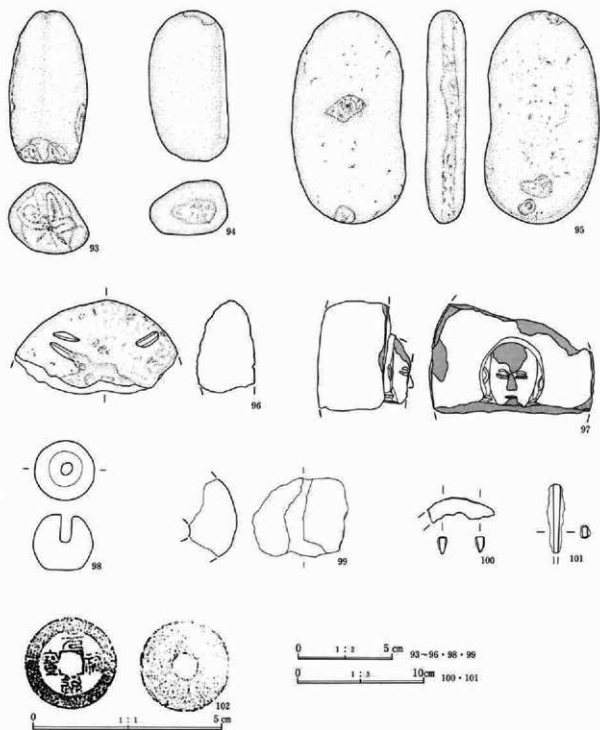


第445図 5区42・43号溝出土物(7)

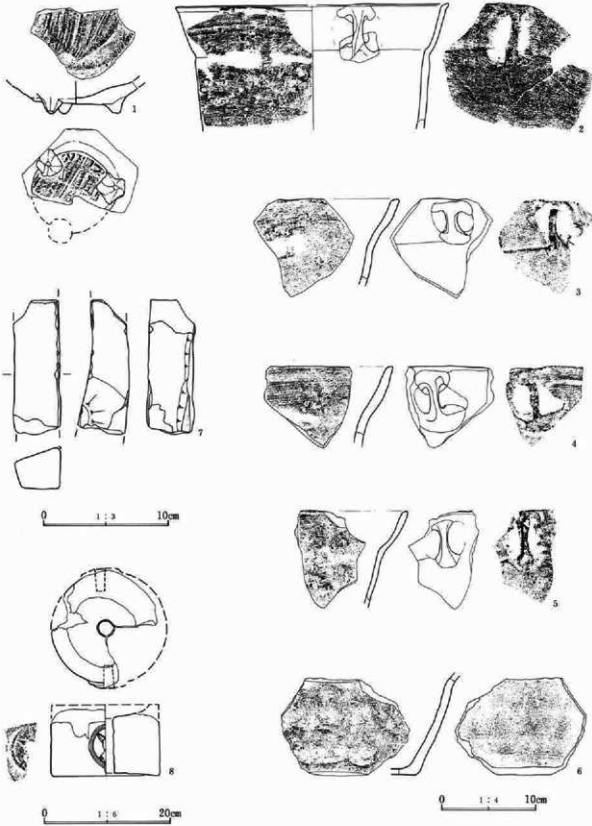


第446図 5区42・43号溝出土遺物(8)

IV 中・近世の調査



第447図 5区42・43号溝出土遺物(9)



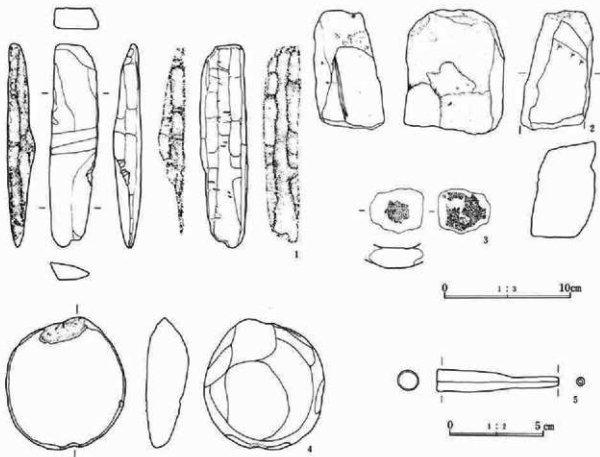
第448図 5区110号溝出土遺物

中央のビット1つがかかり、その軸線は建物の長軸線上よりややふれるものの、これらの3つのビットも本建物に伴うものかもしれない。なお、 $P_6 \cdot P_7 \cdot P_8$ では柱度が確認できた。

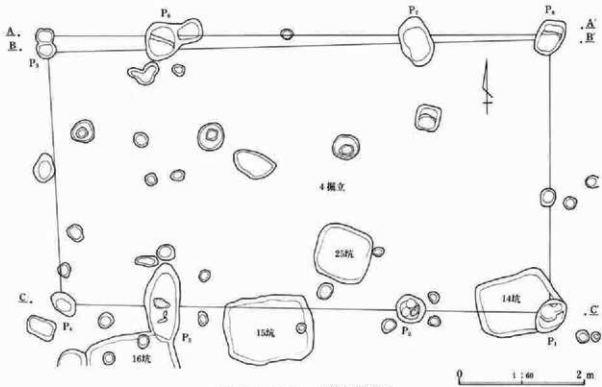
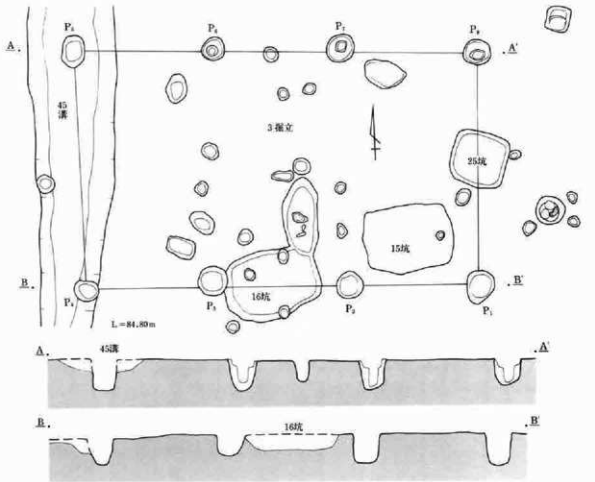
4号掘立柱建物は3号の $P_1 \cdot P_2$ を結ぶ延長線を北東に2.1mずらした位置にある。この延長線は4号の $P_1 \cdot P_2$ を通っており、両建物の関係を明示している。4号は東西3間(北辺8m、南辺7.8m)、南北1間(東辺4.1m、西辺4m \times 4.2m)の、東西方向に長軸をもつ建物である。3号に比べてひと回り規模が大きく、両長辺中央の柱間を短軸とほぼ同規模に広くとっている。ほとんどの柱に重複が認められることから、建て替えが行われたことが判る。なお、南北に細長い掘形をもつ P_3 の覆土中から、第448図に示した5点の遺物が一括出土しており、同じく P_3 と P_2 の上面には扁平な円礫が認められた。

5号掘立柱建物(第451図)は、区画内のほぼ中央の西寄りに位置する。東西3間(北辺6.6m、南辺6.5m)、南北1間(東辺3.5m、西辺3.5m)の、東西方向に長軸をもつ長方形の建物で、3号掘立柱建物とほぼ同規模である。東西の柱間は、北辺・南辺ともほぼ2.2mに統一されている。 P_1 と P_2 の外側に接する柱を使用する案も考えられるが、平行四辺形状にやや歪んでしまう。なお、 P_1 の外側に接する柱には、底面付近に根石状の扁平礫が認められる。

以上の3棟の掘立柱建物は、規模の点では多少の違いは認められるが、1間 \times 3間の柱間で東西に長軸をとる共通性を有しており、一定期間にわたって存在した一群の建物と考えることができる。建物からは時期を特定できる遺物の出土は認められなかったが、本地区では中世後半から近世前半の遺物が主体を占めること、礎石をもたないことなどから、中世後半から近世初頭の建物群と考えておきたい。

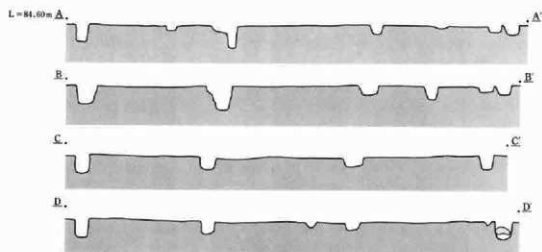
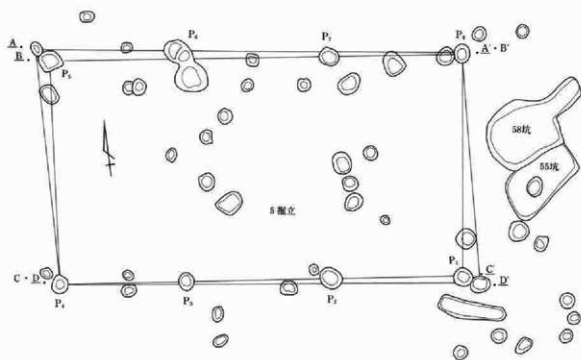
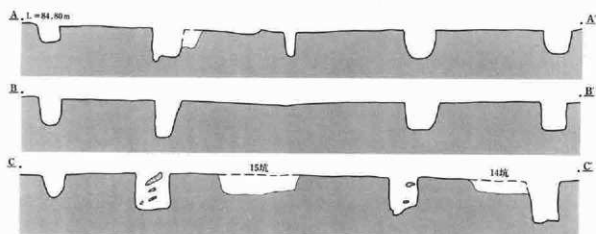


第449図 5区4号掘立柱建物出土遺物



第450図 5区3・4号掘立柱建物

IV 中・近世の調査

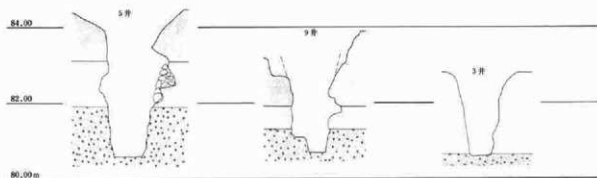
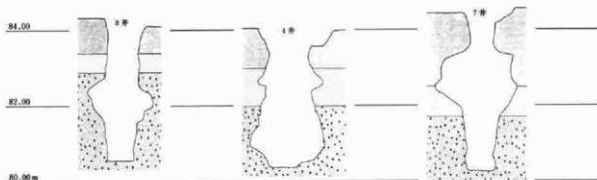
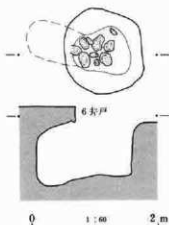


第451図 5区5号掘立柱建物

0 1:60 2m

井戸 (第452図～第455図)

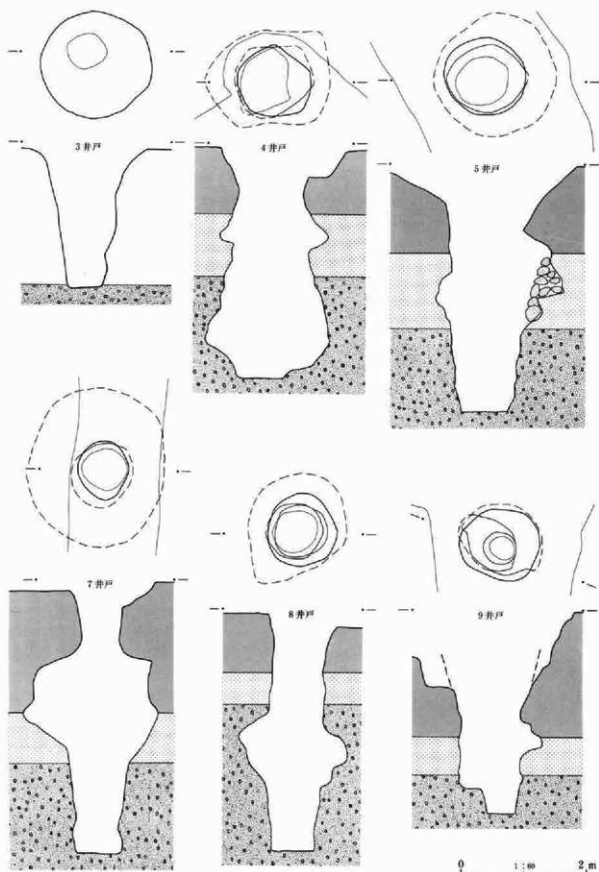
合計7基を確認したが、6号としたものは他に較べて浅く、横穴状の掘り込みをもつことから、土坑か獣穴と考えられる。6基のうち3号は低地に位置し、As-Bを切って築かれている。4号は5号掘立柱建物の南側5mに、5号は3号掘立柱の南側5mに、6号は5号掘立柱の東側8mで43号溝にかかり、7号は4号掘立柱の北側3mで43号溝にかかり、8号は4号井戸の東側5mに各々位置しており、いずれも掘立柱建物との関連が指摘できる。井戸の規模は、底面部分の直径が3号は55cm、4号・5号・7号・8号が70cm、9号が45cmで、確認面からの深さは3号が2.2m、4号が3.65m、5号が3.9m、7号が4.3m、8号が3.8m、9号が3.2mである。いずれも使用時あるいはその後の崩落が認められるが、7号・8号の上半部から考えて、底面直径とはほぼ同径の円筒状を呈していたと考えられる。微高地上の井戸は、いずれも透水層である基盤の砂礫層を深く掘り込んでおり、調査時にも湧水が認められた。低地部の3号は砂礫層上面で停止しているが、この部分で十分水が得られたのであろう。なお、5号・7号では中層で円礫が確認されている。出土遺物は、5号から差第454図1が、7号から3・8・9・11が、8号から2・4～7が、9号から10が出土しており、いずれも中世後半から近世初頭に比定されよう。なお、8号井戸の底面付近から、男性の人骨1体が出土している(科学分析編9参照)。



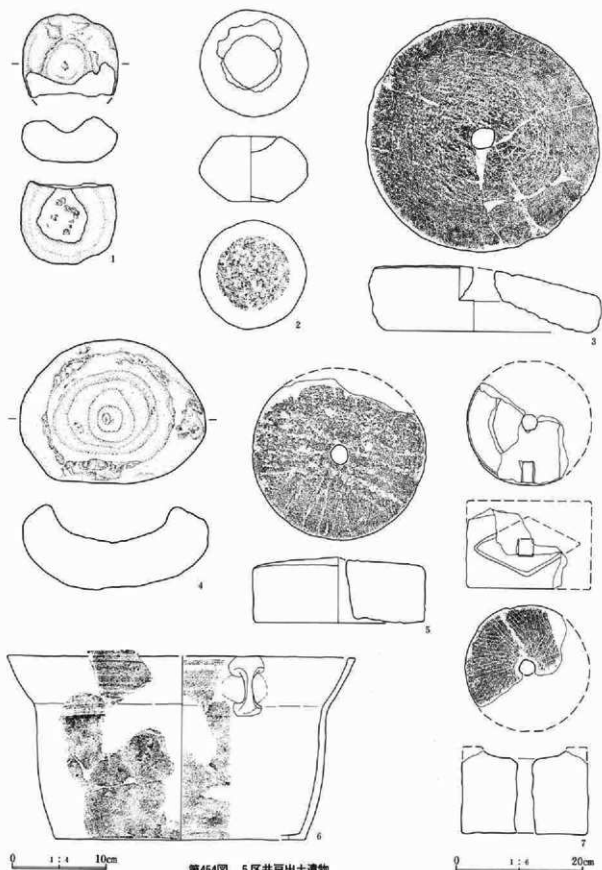
第452図 井戸の深さと透水層



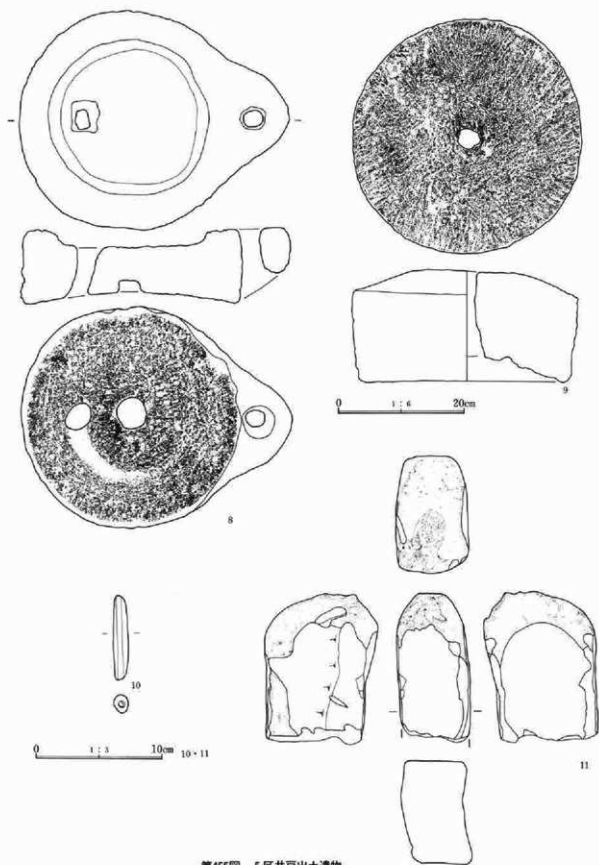
IV 中・近世の調査



第453図 5区中・近世井戸



第454図 5区井戸出土遺物
(1: 5号、2・4~7: 8号、3: 7号)

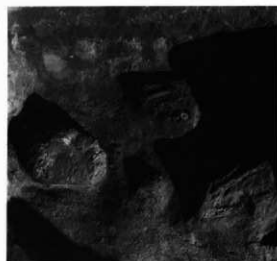
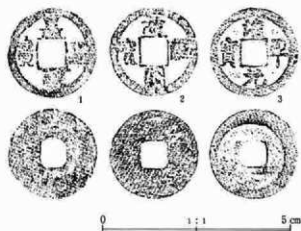
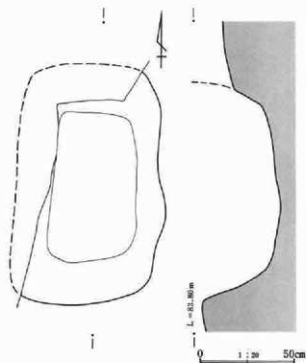


第455図 5区井戸出土遺物
(8・9・11: 7号、10: 9号)

墓墳

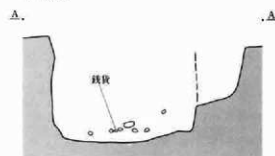
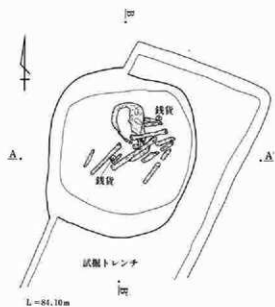
微高地から南側低地に変換する位置から2基の墓墳が確認された。埋葬形態は異なるが1.2mの至近距離にあり、伴出した銭貨から中世の近接した時期の墓墳と考えられる。

南側に位置する1号墓墳は、東西約80cm、南北約1.3m、確認面からの深さ45cmの、南北方向に長軸をとる長方形の掘り込みをもつ。頭蓋骨および体肢骨の一部がかろうじて残存しており、その状態から、頭部を北にして、西向きの横伏埋葬されたものと考えられる。なお、体肢骨の腹部付近から銭貨3点が出土した。2号墓墳は東西80cm、南北90cm、確認面からの深さ55cmの方形状の掘り込みをもつ。骨は頭部が後頭部を上にして北側にあり、四肢が折り重なるような状態で検出されたことから、北向きの座位であったものが、正面に倒れ込んだものと考えられる。当人骨は分析の結果、熟年期の女性で、残存していた17本の歯のうち6本が虫歯であることが判明している。なお、骨とともに4点の銭貨が出土している。

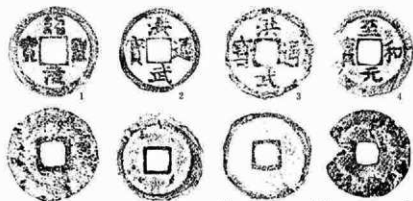


第456図 5区1号墓墳

IV 中・近世の調査



0 1 : 20 50cm



第457図 5区2号墓墳

土坑 (第9表、第458図～第461図)

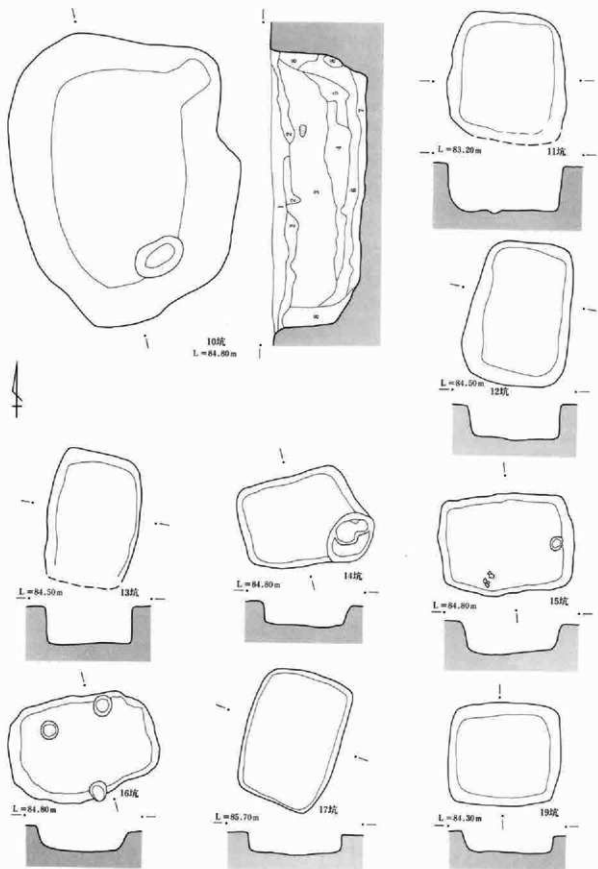
第9表に示した45基を確認した。出土遺物を伴うものはほとんどなく、時期を確定する材料に乏しいが、大半が先述の区画内に集中しており、掘立柱建物を中心とする一連の遺構群と考えられる。埋土にAs-Bを多く含むものやブロック混土で埋設するものが少数あり、パターン化を試みたが把握しきれず断念した。形態は、10号・31号・63号などの特殊なものを除くと、長方形・方形・円形の3種があり、長方形と円形ではさらに大・中・小の3種が認められる。この平面形を中心とするパターンと埋土のパターンを組み合わせれば、今後この種の遺構についても取り扱いが可能となるだろう。なお、区画内からはずれる47号・52号・54

第9表 中・近世土坑一覧

土坑 No	位置	平面形	縦 長軸×短軸×深さ (cm)
10	5区	楕円形	308 × 244 × 102
11	5区	長方形	(136) × 128 × 50
12	5区	長方形	152 × 108 × 38
13	5区	長方形	(140) × 100 × 40
14	5区	長方形	128 × 96 × 25
15	5区	長方形	142 × 106 × 35
16	5区	楕円形	160 × 112 × 24
17	5区	長方形	142 × 102 × 23
19	5区	正方形	120 × 110 × 20
20	5区	長方形	140 × 88 × 28
21	5区	長方形	128 × 108 × 26
22	5区	楕円形	138 × 120 × 6
23	5区	円形	110 × 103 × 22
24	5区	長方形	142 × 66 × 20
25	5区	正方形	90 × 86 × 14
26	5区	円形	82 × 74 × 12
28	5区	円形	84 × 72 × 10 (18)
30	5区	円形	100 × 90 × 12
31	5区	楕円形	312 × 66 × 16
32	5区	長方形	(114) × 80 × 4
33	5区	円形	98 × (96) × 22
34	5区	正方形	106 × 92 × 16
35	5区	円形	82 × 80 × 4

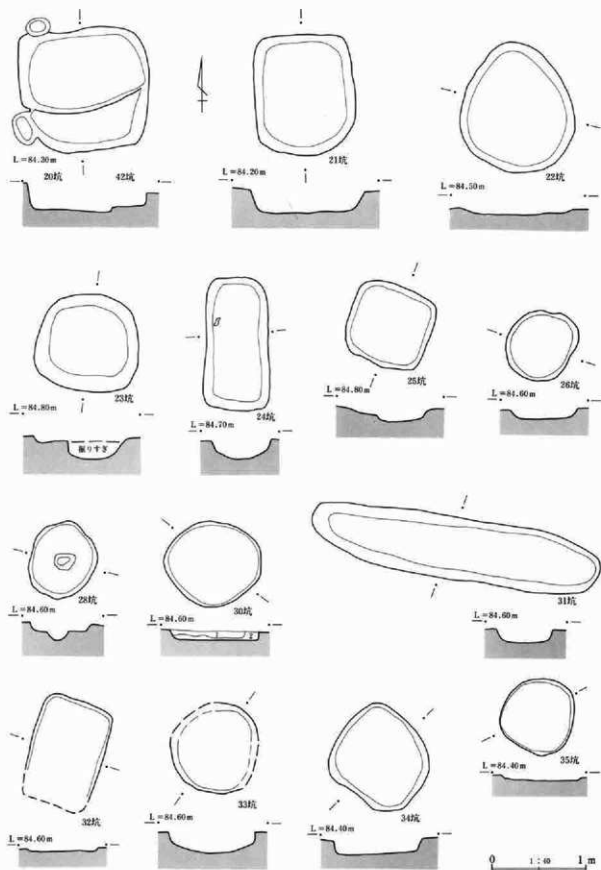
土坑 No	位置	平面形	縦 長軸×短軸×深さ (cm)
36	5区	楕円形	126 × 106 × 13
37	5区	楕円形	138 × 120 × 16
38	5区	楕円形	164 × 138 × 34
40	5区	長方形	140 × 116 × 16
41	5区	楕円形	102 × 70 × 52
42	5区	□	130 × □ × 18
43	5区	円形	76 × 66 × 12
44	5区	長方形	122 × 66 × 2
45	5区	円形	76 × 75 × 8
47	5区	長方形	122 × 73 × 30
48	5区	円形	104 × 100 × 26
52	5区	長方形	98 × 64 × 16
54	5区	長方形	86 × 64 × 30
55	5区	長方形	128 × 72 × 7
58	5区	長方形	114 × 100 × 36
59	5区	長方形	112 × 80 × 42
61	5区	長方形	140 × 68 × 63
62	5区	長方形	127 × □ × 58
63	5区	円形	92 × 86 × 168
64	5区	円形	158 × 136 × 42
65	5区	正方形	92 × 84 × (58)
67	5区	長方形	(80) × 62

IV 中・近世の調査



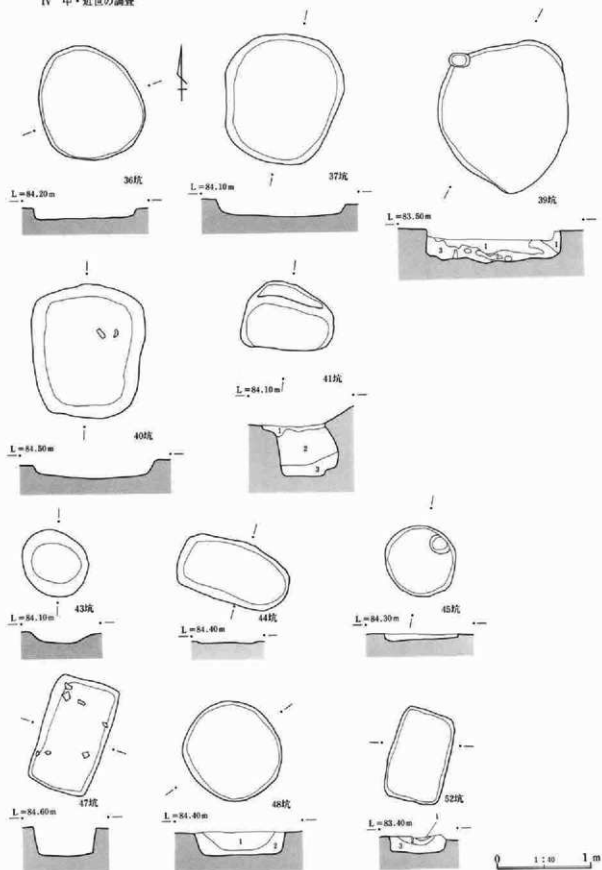
第458図 5区中・近世土坑(1)

5. 5区の調査



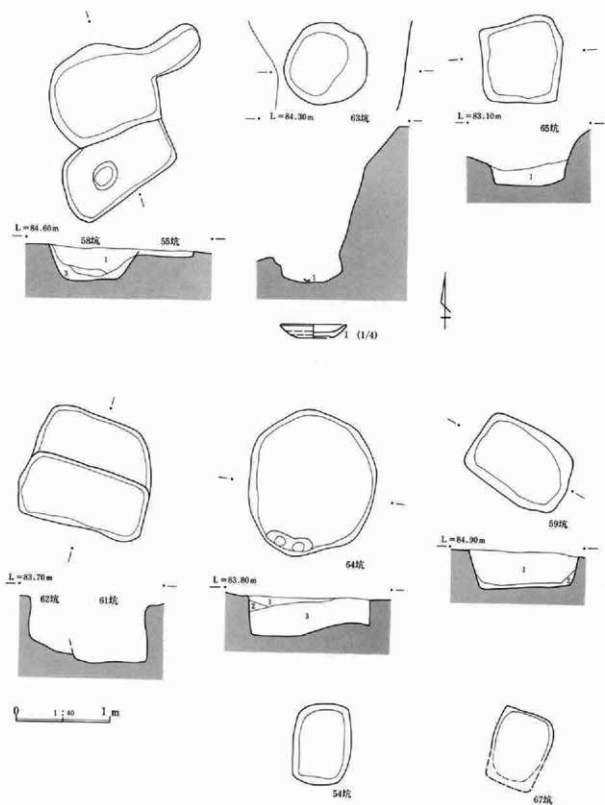
第459図 5区中・近世土坑(2)

IV 中・近世の調査

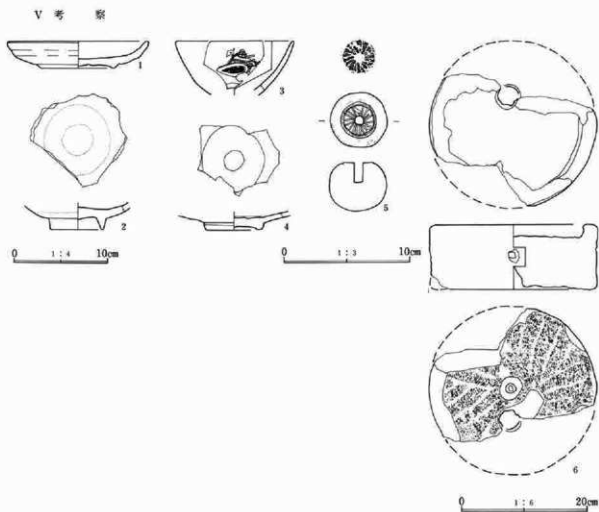


第460図 5区中・近世土坑(3)

5. 5区の調査



第461図 5区中・近世土坑(4)



第462図 5区中・近世遺構外出土遺物

号・67号では、底面を中心に多量の炭化材片と焼土ブロックが認められ、これらは墓墳と関連する可能性が高い。

第462図に5区遺構外出土の中・近世遺物を示した。このうち5は石製であるが、これと近似した土製品が42号・43号溝から出土している（第447図98）。

V 考 察

1. 花積下層式土器について

本遺跡では前期初頭花積下層式期の集落が確認された。集落の全貌を把握するまでには至らなかったが、住居6軒、土坑14基、集石土坑22基、配石8基と包含層が確認され、中央部の配石群を中心に住居群が環状に配置され、その外周を包含層が取り巻く形態が想定された。しかし、この集落形態を検討するには、各遺構および包含層出土土器の型式学的検討が必要となる。ここではその前提として、本遺跡出土花積下層式土器の文様と器形との関係、および文様の施文単位について、観察結果をまとめておきたい。

(1) 文様と器形

本遺跡出土花積下層式土器の分類・接合作業を進めていくなかで、文様要素・文様構成にいくつかのパターンは存在するものの、基本構造はほとんど変わらず、いたってシンプルである印象を持った。それは器形についても同様である。ここでは、文様と器形の類型化とその組み合わせについて若干の検討を試み、観察結果にもとづく1つの試案として書きとめておきたい。

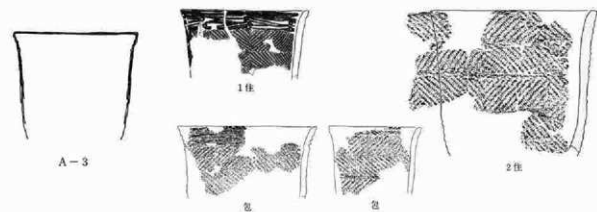
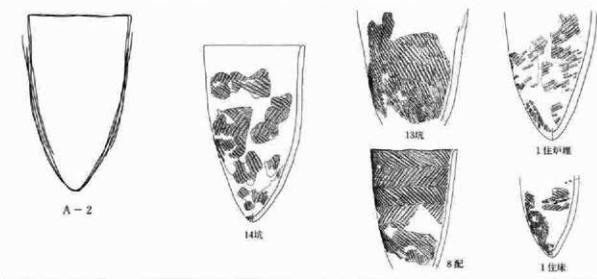
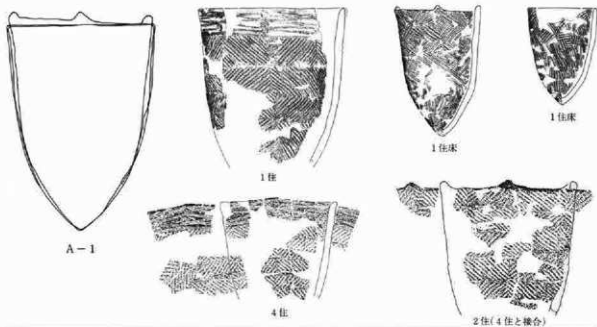
まず文様構成について、口縁部文様帯をもつタイプを中心に見てみよう。口縁部文様帯は燃糸丘痕で菱形文を構成するものがほとんどで、他に沈線と同様の文様を構成する一群も僅かに出土している。文様帯の幅は狭い一群と広い一群とがあり、前者をAタイプ、後者をBタイプとし、沈線の一群をCタイプとする。

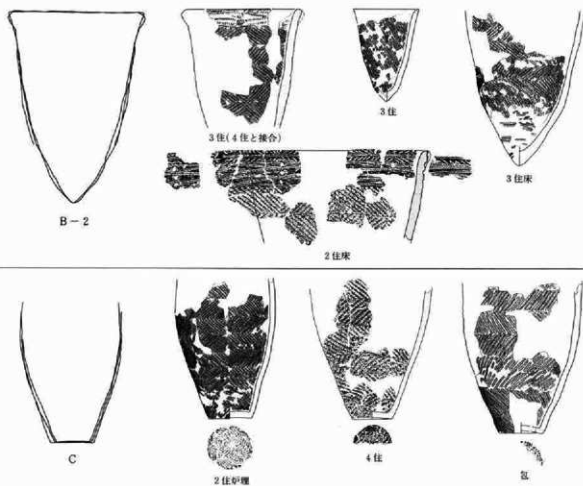
Aタイプには2つの類型がある。1つは燃糸丘痕のみで文様を構成するタイプで、1号住居2が代表例である。燃糸はRとLを合わせた矢羽根状丘痕を使用し、渦巻文は文様単位を示す4分割の部分に3個づつ、その間には2個づつを配するのが基本である。なお、文様単位を示す3個のうち、最上位の渦巻文の部分には円形の突起状貼付文が施されている。胴部文様は施文幅の広い菱形羽状縄文に限られる。これをA1タイプとする。もう1つは、A1タイプと基本構成は同一であるが、口唇部下に隆帯をめぐらしたり、口唇部に刻目を付ける一群で、2号住居1や3号住居1が代表例である。口唇下に隆帯をめぐめるものでは、口唇部と隆帯に逆方向の斜位の刻目を施して、矢羽根状に構成するものが多い。また、文様単位を示す渦巻文の上位では隆帯と口唇部を肥厚させ、この部分で斜位の刻目は方向を変えている。これはA1タイプの突起状貼付文に対応する。また、渦巻文間に縄文原体の端部刺突を施すものや、渦巻文の位置に同刺突を代用するものもある。胴部文様はA1タイプと同様である。これをA2タイプとする。

Bタイプにも2つの類型がある。1つは、A2タイプと基本構成はほとんど同じで、文様帯下にも刻目を施した隆帯をめぐらす一群で、3号住居5や5号住居5が好例である。全体の構成がわかる例が少ないが、3号住居5では矢羽根状燃糸丘痕を複数条で集合施文しており、5号住居5では渦巻文の数が3個以上に増加して多段構成となっている。これらの変化は、文様帯幅の拡大に伴って、基本的構成を変えずに空白を埋める必要性に対応したものと考えられ、この一群の特徴と言ってよいだろう。これをB1タイプとする。もう1つは、口唇部下に刻目を施した隆帯をめぐらして文様帯を分帯する一群で、4号住居2および4が代表例である。重畳する菱形文による構成は他のタイプと共通するが、燃糸はやや太めのものを1本単位で使用し、燃糸丘痕間に斜位の刻目を伴った施文を特徴としている。また、胴部文様は施文幅の狭い羽状縄文で構成される。これをB2タイプとする。

Cタイプは第71図16~20が本遺跡出土の全てである。文様構成は、集合沈線による重畳する菱形文や鋸歯

V 考 察

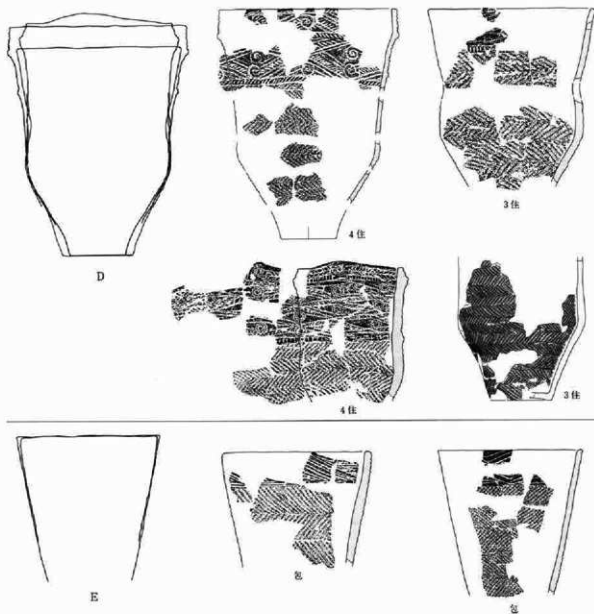




状文であり、燃承圧痕施文のタイプとの共通性が指摘できる。胴部文様は菱形羽状と羽状とがある。なお、19は波状口縁タイプである。

次に器形を見てみよう。出土土器のなかから器形がある程度読みとれるものを対象に、消え期の大小にかかわらず、シルエットの共通性をもとに抽出したのが、ここに図示した7つのタイプである。C・E以外の各タイプはいずれも大きさの異なる器種を含んでおり、A-1とB-1・2は口縁部文様帯をもつタイプともたないタイプを含んでいる。このことは、土器の大・小や文様帯の有無を越えたシルエットモデルが存在することを示している。A-1タイプはやや太めの砲弾型尖底深鉢、A-2はA-1の細身のタイプ、B-1はA-1の口縁部が弱く外反するタイプ、B-2はB-1と近似するが、底部から口縁部に向かって全体に外傾するタイプ、Cは胴下半が弱くふくらむ細身の平底タイプ、Dは胴下半がくの字状に突出するタイプで、内折する口縁部も特徴の1つである。Eは底部から直線的に開口する平底のタイプであろう。当然のことながら、この7タイプに含まれないものも少数存在するが、ここではふれない。

以上の文様と器形の間関係を見てみると、器形A-1に文様A1、器形B-1・2に文様A2・B1、器形Dに文様B2、器形Eに文様Cと各々対応関係が認められる。器形A-2には対応する口縁部紋様をもつ土器がなく、施文幅の広い羽状縄文と斜縄文の一群のみが認められる。器形Cは施文幅の広い菱形羽状、羽状縄文の一群に対応するが、いずれも胴上半部を欠失している。



本遺跡出土花積下層式土器は、口縁部文様帯幅が狭く、文様は矢羽根状燃糸圧痕による通常3段の菱形文で構成される一群を主体としており、胴部は施文幅の広い菱形羽状縄文で構成される尖底土器を特徴としている。このような土器は関東地方では今のところ出土例が少なく、花積下層式土器のなかでも古い段階に位置づけられよう。一方、器形Dの胴部下半がくの字状に突出する器形、文様B2の口唇部下に分帯された文様帯、燃糸圧痕間の斜位の刻み目、胴部の施文幅の狭い羽状縄文等の特徴は、新しい段階の要素である。この文様B2の一群に見られる刻み目を施した陸帯は文様A2・B1にも認められ、口縁部文様帯の拡大という点では文様B1も同様の要素をもっている。このように見えてくると、新しい要素をもたない文様A1が最も古く、その一部をもつ文様A2・B1がそれに次ぎ、文様B2が最も新しい一群と考えることができる。これを器形に置換すると、A-1、B-1・2、Dの順になる。さらに、器形A-2の土器群は器形A-1の土器群に対応するものと思われ、器形C・Eの土器群は胴部縄文の施文幅が広く、菱形羽状縄文を含むこ

とからB-1・2に対応すると考えられる。以上の見方を前提にすると、器形A-1・2タイプを主体とする1号住居が最も古く、器形Dを含まない2号・5号住居がこれに次ぎ、3号・4号住居が新しいということになる。ただし、土器の接合関係では、2号住居と4号住居に1例、3号住居と5号住居に1例、3号住居と4号住居に2例の接合例が存在しており、これらが時間差を示すか否かについては、改めて検討する機会を持ちたい。

(2) 文様の施文順位

縄文土器の観察項目の1つに、文様の施文順位がある。近年の大規模開発の調査では膨大な量の遺物を相手にするため、ともすると見過ごされがちだが、そこに思いもよらぬ共通性を見出すこともある。ここに示すケースも当初から施文順位に着目していた訳ではなく、尖底土器の胴部下半で縄文の構成が大きく変化する一群の観察から派生した結果である。

本遺跡出土の花横下層式土器には、文様の施文順位に一定の手法が認められる。これは尖底・平底の底部形相の違い、あるいは先に述べた文様・器形の違いにかかわらず、ほぼ全出土土器に認められる手法と言っておく。口縁部文様帯の施文は、基本的に胴部縄文の施文後に行われるが、口縁部文様についてはここでは扱わない。

図に示した矢印は、縄文の切り合い関係に基づく施文の方向を示している。縄文帯の施文は、胴部上半では口縁部から底部方向に向かって順に施されるが、底部付近は逆に底部から口縁部方向に施されるものが多く、各々の矢印の方向はスクリーントーンで示した部分にいきつく。つまり、この部分が最終施文帯であり、しかも大半の土器がほぼ同じ部位にある点が注目される。

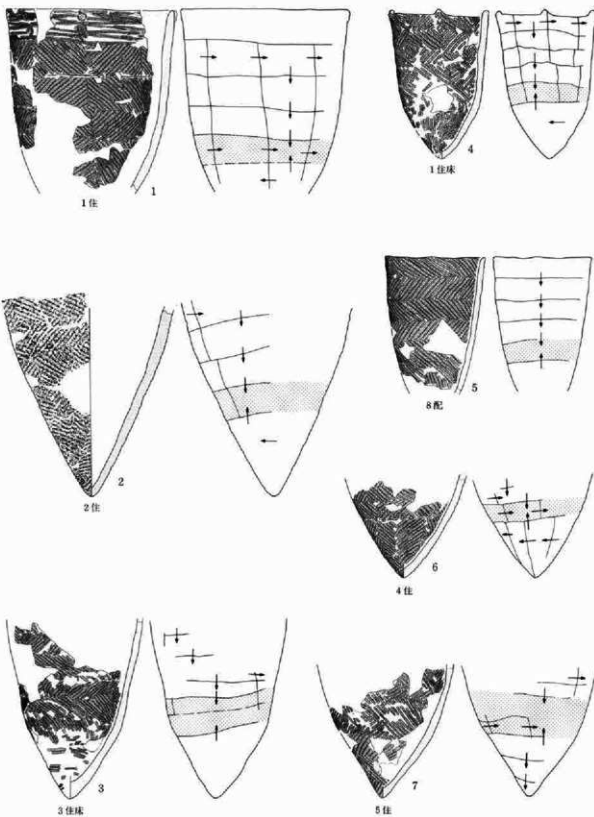
尖底タイプでは、前述のように底部付近で縄文の構成が変化するものが多く、帯状施文となるものは少ないが、最終施文帯はいずれも変換部の上位にあたっている。1は尖底部の施文が不明だが、菱形羽状構成の最終帯がそれにあたっている。2～4・6・7は底部付近で縄文の構成が変化する一群で、いずれも胴部上半は菱形羽状縄文で構成され、底部付近の施文は2・6が縦位羽状、3は横走、4は縦走、7は羽状となっているが、いずれも最終施文帯は菱形羽状構成の最下位に置かれている。なお、3・7では最終施文帯の部分のみが幅広となり、施文に乱れが生じている。このような傾向は1・5や平底タイプの9・13にも認められ、9ではその下位の施文も幅広にしてバランスをとり、13ではその下位を羽状構成に変換している。

また、縄文一帯の施文順が観察しやすい菱形羽状構成や縦位羽状構成の土器では、いずれも胴部上半の施文が左から右方向に順に施されるのに対し、最終施文帯の下位の施文は逆方向の施文順となっている。

以上の事実から、ここに示した土器は胴部上位と底部を別々に作成し、最終施文帯部分で接合する作成方法をとっていたと考えてまちがいないだろう。残念ながら本遺跡出土の花横下層式土器は、接合痕の観察がむずかしく、この部分で接合していることを直接に観察することはできなかった。しかし、3・4・7・11・14などは、この部分が肥厚して歪みが生じており、ここに接合部が存在すると考えてよいだろう。

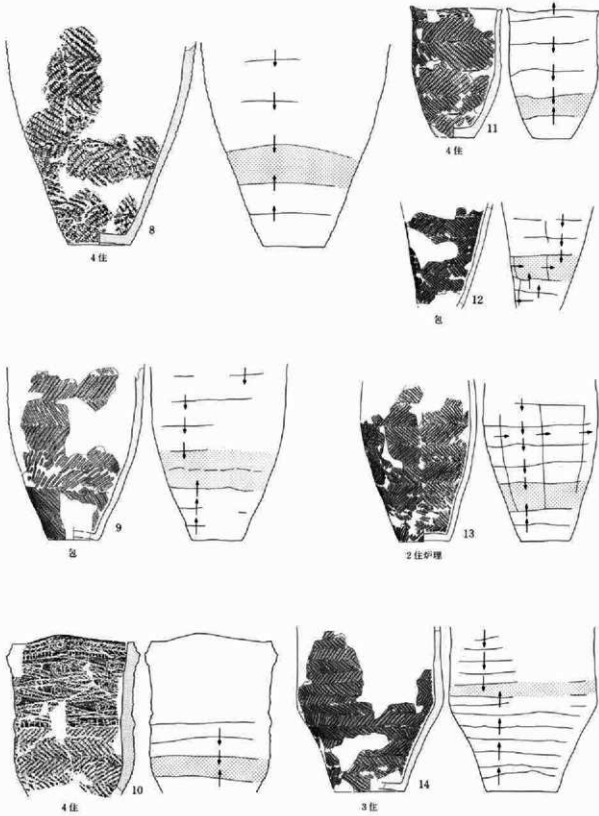
尖底タイプを主とする底部付近の施文変化は、以上の製作手法と連動するものであり、本遺跡出土の花横下層式土器の大きな特徴と言える。

V 考 察



胴部縄文の施文順位(1)

1. 花横下層式土器について



胴部縄文の施文順位(2)

2. 1 H水田を埋める氾濫堆積物について

本遺跡の調査では10面の水田が確認されており、その大半は粕川の氾濫堆積層で埋没したものであった。赤城山南麓地域を流下する中、小河川は、河底勾配が急なため鉄砲水が出やすく、粕川についても氾濫にかかわる多くの記録が残されている。本遺跡の調査結果は、その記録を追加するかたちとなったが、確認された河川氾濫のうち最も規模の大きいのが1 H水田時のものである。この氾濫堆積層は今回の調査区の全域に認められ、粕川寄りの最も厚い部分では45cmの層厚が認められた。おそらく遺跡全域を埋めつくしたであろう。また、他の氾濫堆積層がいずれも白色系の均質なシルト砂であるのに対し、1 H水田時の堆積層は軽石やローム塊を多量に含むよごれた黄褐色ローム質土であり、容易に他と識別できる特徴的な土質である。ローム塊は直径20cm前後の大形のものも認められることから、上流域の山体崩壊を伴う氾濫であったことが予測された。

一方、昭和55年に発掘調査が実施された新里村天笠南遺跡を契機に、赤城山南麓地域では発掘調査で地割れの確認が相次いだ。地割れの多くは、6世紀中葉降下した榛名-伊香保テフラ(Hr-I)を切り、上面に天仁元年(1108年)降灰の浅間B軽石(As-B)をのせることから、これらが同一の地震による現象であろうとの想定のもとに、発掘調査と山崩れ堆積物の分布調査による追究が続けられた。そして、この2つの現象と同時に発生した泥流堆積物が確認され、これらの現象が『類聚国史』に記録されている弘仁九年(818)七月に同地域を襲った大地震によるものであることが明らかにされた(資料集『赤城山麓の歴史地震-弘仁九年に発生した地震とその災害-』1991 群馬県新里村教育委員会)。それによると、山崩れ堆積物は赤城山南麓地域の標高200~800mの範囲に集中し、荒砥川、粕川、蕨沢、鑄木川、早川などの河川上流の谷底部にも分布しているという。このうち蕨沢川と鑄木川は粕川の支流であり、いずれも本遺跡の上流で合流している。また、地割れは標高100~300mの範囲に集中している。

同書によれば、鑄木川沿いに位置する新里村砂田遺跡では、泥流堆積物で覆われた水田と地割れが確認されている。泥流で埋没した水田では人の足跡とともに、牛と思われる偶蹄目の足跡が多数検出されており、同一の泥流で埋没した水路(1号溝)底面からは、9世紀第1四半期に比定される土器が多量に出土している。蕨沢川沿いに位置する新里村蕨沢遺跡でも、砂田遺跡と同一の泥流で埋没した水田が広範囲に確認されている。この水田は、ほぼ等間隔に区分された南北方向に直線的にのびるアゼを基本に、その間を梯子状に区して東西に細長い水田区画を基調としている。東西方向のアゼは、地形の傾斜により弧状となる部分もあるが、基本となる南北アゼは一直線にのびている。また、南北方向のアゼは真北よりやや東へふれている。未報告のため詳細は不明だが、この両遺跡と本遺跡の1 H水田には共通する点が多い。まず両遺跡を埋没した泥流はロームを主体としており、本遺跡のローム質土と酷似している。蕨沢遺跡の水田の基本形態は本遺跡の1 H水田と一致しており、砂田遺跡の田面に認められた牛と思われる偶蹄目の足跡は、本遺跡1 H水田でも多量に認められた。また、本遺跡1 H水田から出土した土器の多くは、砂田遺跡の水路底面から出土した土器群と年代的に一致する。以上のことから、本遺跡の1 H水田を埋めた氾濫堆積物は、新里村砂田遺跡および蕨沢遺跡を埋没した泥流と同一のものと考えられる。1 H水田の下位には6世紀初頭に降灰した榛名-淡川テフラ(Hr-S)がプライマリーな状態で確認されており、氾濫堆積物の上面には黒褐色土をはきんで浅間B軽石(As-B)が堆積している点も、両遺跡と共通している。つまり、弘仁九年(818)七月に赤城山南麓地域を襲った大地震により発生した泥流は、鑄木川沿いの砂田遺跡と蕨沢川沿いの蕨沢遺跡を埋めて両河川沿いを流下し、粕川沿いの泥流と合流して本遺跡にまで到達したと考えられる。弘仁九年に発生した

地震による災害を受けた、現地点では最も下流に位置する遺跡として、前記資料集に追加していきたい。

3. 五目牛滑水田遺跡に認められた条里地割りの施行年代について

I H水田の発掘調査が進むにつれて、南北方向に直線的にのびる大アゼ（3区）の存在、大アゼの西側に平行してほぼ等間隔に区切る数条の南北アゼ（4区）、大アゼの東側約109mに位置する南北走向の132号溝（4区）の存在等が判明し、この水田がいわゆる「条里水田」に該当するのではないかと考えるに至った。しかし、そのことを明確にするには「坪」にあたる方格地割りの存在と、方格地割りが一定範囲に及んでいるかを確認する必要があるが、発掘調査の範囲は南北50～60mに限られている。そこで、すでに調査が終了した中・近世の溝と圃場整備以前の地形図を、I H水田の基本ラインと照合することにした。

照合の結果、大アゼは中・近世の8～10号溝と重なり、さらに地形図の水路とも照合可能であり、また132号溝は中・近世の111～113号溝と重なり、さらに地形図の水路と照合できることが判明した（付図25・26参照）。もちろん各段階で多少のズレは生じているが、坪の基本ラインと想定した大アゼと132号溝は、いずれも圃場整備以前まで踏襲されていたと考えてよいだろう。ちなみに、132号溝の東側約109mには中・近世の45号・47号溝があり、これも地形図の水路と照合できることから方格地割りにあたると考えられるが、I H水田時の手がかりは得られていない。

これらの基本ラインをもとに、圃場整備以前の地形図に109mの方格線をのせて見ると、本遺跡の立地する五目牛の低平地のなかに認められる主要道や水路、そして水田区画は、若干のズレを見せながらも方格線に重なる部分が多いことが判かる（付図24参照）。ここでは、発掘調査で得られた基本ラインをもとに方格線の位置を決め、地形図の地割りと照合しながら、国家座標に対して $N+10^\circ$ で方格線を設定した。方格地割りの認められる範囲については、今回は検討していないが、少なくとも五目牛の低平地の範囲には方格地割りが存在したと言っただろう。

以上の検討から、I H水田の大アゼと132号溝は坪の基本ラインにあたる事が判明し、方格地割りが一定範囲の広がりをもつことが確認できた。そこで、大アゼの延長と坪の交点の確認を目的として、3区大アゼの南側延長上に拡張区を設定した。発掘調査の結果、大アゼおよび中・近世の8～10号溝の延長は確認できたが、坪交点と想定される部分は、中・近世あるいはそれ以降の溝等により削平されていることが判明した。このことは、坪交点とその後に踏襲されていたことを示していると言えよう。

五目牛滑水田遺跡では、I H水田以前に7面の水田が確認されている。これらの水田は、いずれも地形面の傾斜に沿って造成した小区画水田であった。I H水田に最も近い2 H水田では比較的大きな区画も認められるが、地形面の傾斜に沿った造成方法と言う点では、それ以前の水田と変わりがない。これに対し、I H水田は南北方向の大アゼ・大溝（132号溝）を基準に、その間を同方向の小アゼで等間隔に区割りし、さらに東西方向の小アゼでその間を区画すると言う規格性を有しており、それ以前の水田のあり方とは明らかに異なった、まさに切り盛りを伴う「区画整理」を施行した水田と言っただろう。そして、水田区画のなかに認められる区画の乱れは、施行後の時間の経過を示していると考えられる。本水田は、先述のように弘仁九年（818）の大地震により発生した混流で埋没しており、水田面から出土した土器の年代もほぼこれに一致している。そして、大アゼ内および132号溝から出土した土器はそれらよりも古く、8世紀後半の年代を示していることから、I H水田の造成は8世紀代に施行されたと考えてよいだろう。埋没時の水田に認められる区画の乱れ（施行後の時間の経過）は、この時間差を示していると言えよう。

第10表 整穴住居外形寸法表

住居	長軸(A)m	短軸(B)m	長軸比A/B
2	5.56	5.53	1.00
3	4.76	4.36	1.09
11	5.68	5.22	1.08
16	8.18	8.04	1.01
17	3.22	3.20	1.00
18	—	—	—
19	4.82	4.40	1.09
20	5.08	4.44	1.14
1	5.96	5.70	1.04
4	—	—	—
5	4.60	3.64	1.26
6	4.32	3.38	1.27
7	4.56	3.50	1.30
8	5.58	5.40	1.03
9	7.12	6.40	1.11
10	4.42	4.22	1.04
12	2.80	2.80	1.00
13	4.82	4.00	1.20
15	—	—	—
21	—	—	—
22	—	—	—
23	—	—	—
24	—	—	—
25	5.48	3.58	1.53

住居	長軸(A)m	短軸(B)m	長軸比A/B
26	4.68	4.58	1.02
27	3.54	3.08	1.14
28	4.32	3.52	1.22
29	3.60	3.22	1.11
30	4.48	4.26	1.05
31	2.00	1.90	1.05
32	4.40	3.80	1.15
33	4.16	3.56	1.16
34	4.04	3.32	1.21
35	5.38	4.90	1.09
36	3.24	2.28	1.42
37	3.54	3.30	1.07
38	4.46	4.30	1.03
39	6.24	6.16	1.01
40	—	—	—
41	5.50	5.26	1.04
42	4.44	4.20	1.05
43	2.00	1.86	1.07
44	3.56	3.54	1.00
45	5.40	5.38	1.00
46	5.19	4.90	1.05
47	4.40	4.22	1.04
48	3.70	3.64	1.01
49	4.72	4.82	1.09

第11表 整穴住居外形分類基準

上段：長軸長 (單位 m)

下段：長軸比(長軸長/短軸長)

規模 \ 形状	正方形	橫長長方形	縱長長方形
超大型	6.5以上 1.0~1.1未満	6.5以上 1.1以上	6.5以上 1.1以上
大型	5.4~6.5未満 1.0~1.1未満	5.4~6.5未満 1.1以上	5.4~6.5未満 1.1以上
中型	4.3~5.4未満 1.0~1.1未満	4.3~5.4未満 1.1以上	4.3~5.4未満 1.1以上
小型	3.2~4.3未満 1.0~1.1未満	3.2~4.3未満 1.1以上	3.2~4.3未満 1.1以上
超小型	3.2未満 1.0~1.1未満	3.2未満 1.1以上	3.2未満 1.1以上

第12表 古代型穴住居一覽

■14号住居は欠番

住居	グリッド	規模・形状	柱穴	竈(炉)	貯蔵穴	面積(m ²)	方位	年代	
2	R-36	大形正方形	4個	—	—	31.65(推定)	—	4C後	
3	P-36	中形正方形	なし	—	北東隅	22.57(推定)	+90°	4C後	焼土
11	Q-37	大形正方形	4個	—	南西隅	31.96(推定)	-84°	4C後	灰?
16	P-38	超大形正方形	4個	—	—	67.60(推定)	—	4C後	周溝、梯子穴
17	Q-37	小形正方形	なし	—	—	9.62	—	4C後	焼土
18	P-34	—	なし	—	—	9.64(推定)	—	4C後	焼失、周溝
19	N-34	中形正方形	なし	—	—	11.02(推定)	—	4C後	焼失
20	P-35	中形縦長長方形	4個	西柱穴間	南西隅	20.55	-120°	4C後	焼失、周溝
1	S-36	大形正方形	4個	東壁南	南東隅	28.63	+83°	7C前	建替、周溝
4	S-38	—	—	—	—	—	—	—	—
5	S-38	中形縦長長方形	なし	東壁中央	なし	14.98	+115°	8C前	
6	R-38	中形縦長長方形	2個?	東壁南	なし	13.54	+118°	8C前	1号・7号住を切る
7	R-38	中形横長長方形	1個	東壁南	なし	14.91	+120°	7C後	周溝、6号住に切られる
8	Q-38	大形正方形(變形状)	なし	東壁中央	なし	28.00	+94°	8C前	焼失、9号・23号住を切る
9	Q-38	超大形縦長長方形	4個	東壁南	南東隅	40.74	+91°	6C後	建替、8号住に切られる
10	Q-38	中形正方形	4個	西壁南	なし	16.68	-90°	7C後	建替(東壁南に旧カマド)
12	S-31	超小形正方形	なし	東壁中央	東隅	6.64	+43°	7C後	
13	Q-39	中形横長長方形	4個	西壁中央	なし	17.88	-93°	7C中	
15	P-38	—	—	—	—	—	—	7C後	
21	M-32	—	—	—	—	—	—	7C後	
22	P-36	—	—	—	—	—	—	—	3住に切られる
23	Q-38	—	—	—	—	—	—	7C前	
24	S-30	—	—	—	—	—	—	—	—
25	Q-30	大形横長長方形	4個	北壁東	東隅	—	+34°	7C中	建替
26	Q-29	中形正方形	4個	西壁南	南西隅	17.14	-121°	8C前	周溝
27	P-25	小形横長長方形	なし	北壁東	北東隅	8.52	+11°	7C中	周溝
28	P-30	中形横長長方形	なし	東壁南	なし	13.49	+83°	7C後	
29	P-30	小形縦長長方形	なし	東壁中央	なし	7.90	+91°	8C前	カマド軸側に變埋設
30	Q-30	中形正方形	なし	東壁南	なし	12.97	+74°	8C前	
31	P-31	超小形正方形(不正)	なし	東壁	なし	2.58	+96°	—	
32	P-29	中形縦長長方形	なし	東壁中央	なし	11.75	+84°	7C後	
33	O-28	小形横長長方形	なし	東壁中央	なし	12.71	+91°	8C前	
34	P-30	小形縦長長方形	なし	北壁西	なし	5.07	+49°	7C後	
35	Q-29	中形正方形	4個	東壁南	南東隅	21.84	+88°	8C前	
36	O-28	小形縦長長方形	なし	東壁中央	なし	10.74	+89°	7C後	退出部有り
37	N-29	小形正方形	なし	東壁南	なし	11.77(推定)	+90°	8C前	38号住を切る
38	N-29	中形正方形	4個	東壁中央	なし	18.34	+73°	8C前	建替(カマド2個)
39	N-31	大形正方形	4個	西壁中央	なし	34.15	-89°	7C中	建替(カマド2個)焼失
40	M-31	—	なし	東壁	—	—	+109°	8C前	39号住を切る
41	M-30	大形正方形?	4個	東壁南	南東隅	25.50(推定)	+95°	6C後	建替 焼失か?
42	M-29	中形正方形	なし	東壁中央	南東隅	14.95	+91°	7C中	
43	M-29	超小形正方形(不正)	なし	東壁中央	なし	2.19	+90°	—	
44	N-28	小形正方形	なし	東壁南	南東隅	11.48	+90°	8C前	焼失
45	N-27	大形正方形	4個	東壁中央	南東隅	25.22	+90°	7C中	
46	N-28	中形正方形	4個	西壁中央	なし	22.08	-89°	6C後	周溝
47	M-22	中形正方形	4個	東壁南	南東隅	12.40	+99°	7C中	建替、周溝
48	L-23	小形正方形	なし	東壁中央	南東隅	11.50	+88°	7C後	
49	K-24	中形正方形	4個	北壁東	北東隅	17.54	+20°	7C中	

遺物觀察表

2号住居跡

採掘番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第169図1 P L-251	土師器 埴	+15 ㄥ	黒・白色鉱物	酸化焰	鈍い黄橙	口縁部横撫で。外底寛削り。口縁部下段による凹線。	
第169図2 P L-251	土師器 埴	+3 底部欠	黒・白色鉱物	酸化焰	鈍い黄橙	口縁部横撫で。外底寛削り後粗い撫で。	
第169図3	土師器 壺	+52.5 小片	黒色鉱物少	酸化焰	淡黄	口縁部折り返す。端部のみ強い横撫で。外面端部下位指頭圧痕。口縁部内面刷毛後寛削り。	
第169図4 P L-251	土師器 台付壺	ㄥ	白色鉱物多 赤色粒	酸化焰	鈍い黄橙	口縁部肥厚。外面刷毛の間隔粗く、間に寛削り残る。肩部外面一部横撫で。	
第169図5 P L-251	土師器 壺台	+23 ㄥ	白色鉱物少 赤色粒	酸化焰	橙	2段3方選かし。端部横撫で後、外面縦位寛磨き。内面磨削り。	
第169図6	土師器 壺	+21~27 破片	黒色鉱物少	酸化焰	鈍い橙	口縁部横撫で。外面刷毛後粗い撫で。内底粗い磨き。体部内面磨き。	
第169図7	土師器 台付壺	+14 ㄥ	白色鉱物多	酸化焰	灰黄橙	口縁部内面凹む。肩部外面横撫でにより一部刷毛を消す。	

3号住居跡

採掘番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第170図1	土師器 小壺 蓋	建部 破片	黒色鉱物少	酸化焰	鈍い黄橙	口縁部横撫で。内面磨き。外面刷毛後磨き。	
第170図2 P L-251	土師器 台付壺	+6 ㄥ	黒・白色鉱物多	酸化焰	鈍い黄橙	肩部外面間隔のやや粗い刷毛。底削り一部見える。内面内面指圧痕。	
第170図3 P L-251	土師器 台付壺	貯蔵穴 一部欠	黒・白色鉱物多	酸化焰	鈍い橙	台部内面横撫で。外面刷毛。台端部内面折り返す。	
第170図4 P L-251	土師器 台付壺	+8.5 破片	黒・白色鉱物多	酸化焰	淡黄	外面刷毛後台部横撫で。端部内面折り返す。台部天井部磨き多く付着。	
第170図5 P L-251	土師器 壺	+7.5 破片	白色鉱物少	酸化焰	鈍い黄橙	外面縦位磨削り。内面不定方向磨削り。外底粉状。	
第170図6 P L-251	土師器 壺	+6 底部	白色鉱物少	酸化焰	鈍い黄橙	外面縦位磨削り。内面寛削り後磨き。	
第170図7 P L-251	土師器 壺	+1 ㄥ	黒・白色鉱物多	酸化焰	灰褐	外面刷毛。内面横撫で。指圧痕多い。	
第170図8 P L-251	砥石	+12	アブライト			1面使用。使用部分はほぼ平坦。	1,550 g

11号住居跡

採掘番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第172図1	土師器 埴	埋土 破片	黒色鉱物微 白色粒	酸化焰	鈍い赤褐	口縁部横撫で。外面寛削り。内面縦磨き。全面赤色塗彩。	
第172図2 P L-251	土師器 高杯	+2 端部ㄥ	白色鉱物微	酸化焰	褐灰	胴部内面横撫で。他は寛磨き。	
第172図3	土師器 台付壺	+3 一部欠	白色鉱物多	酸化焰	淡黄	口縁部横撫で。肩部外面間隔の開いた刷毛。刷毛の間に寛削り見える。内面横撫で。指圧痕残る。	
第172図4 P L-251	土師器 台付壺	+2 一部欠	黒・白色鉱物	酸化焰	黒褐	胴部内面刷毛。体部外面粗い刷毛。	
第172図5 P L-251	土師器 台付壺	床面~+2 貯蔵穴 台部欠	白色鉱物多	酸化焰	灰黄褐	口縁部内面凹む。体部外面刷毛。肩部刷毛の磨目部分に、下の底削り見える。また、中位には、撫でが認められる。	
第172図6 P L-251	土師器 台付壺	+2.貯蔵穴 ㄥ	白色鉱物多	酸化焰	灰黄褐	口縁部横撫で。外面刷毛。刷毛の間に寛削り見える。内面横撫で。指圧痕残る。	
第172図7 P L-251	土師器 台付壺	+8 ㄥ	白色鉱物多	酸化焰	鈍い黄橙	外面刷毛を撫で消す。内面横撫で。端部折り返す。底部内面と台部天井部多く付着。	
第172図8 P L-251	土師器 台付壺	+1 ㄥ	白色鉱物多	酸化焰	鈍い褐	外面刷毛撫で消す。台端部折り返す。	

遺物観察表

11号住居跡

押出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第172図9 P L-251	台石	彫形	粗粒安山岩			上面と側面の一部平滑。一部に擦痕。	18,000 g

16号住居跡

押出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第176図1	土師器 壺	+37 ㄨ	黒色鉱物微	酸化焰	鈍い橙	口縁部、体部外面磨き。体部内面撫で。屈曲部外面横位置磨き。	
第176図2 P L-251	土師器 埴	+32 ㄨ欠	白色鉱物少	酸化焰	鈍い黄橙	口縁部横撫で。底部外面磨削り。底部内面直削り後粗い撫で。	
第176図3 P L-251	土師器 壺	床面 破片	黒色鉱物少	酸化焰	浅黄橙	口縁部横撫で。体部内外面撫で。	
第176図4 P L-251	土師器 壺	床面～+39 体部欠	白色鉱物多	酸化焰	鈍い橙	受け口状口縁。肩部以下外面磨削り。	
第176図5 P L-251	土師器 器台	+13 破片	白色鉱物微	酸化焰	橙	内外面丁寧な磨き。赤色塗彩。	
第176図6	土師器 壺	+32 ㄨ	白色鉱物	酸化焰	鈍い橙	有段口縁。口縁部横撫で。	
第176図7 P L-252	土師器 台付壺	埋土 体部欠	白色鉱物多	酸化焰	鈍い黄橙	口縁部曲中や鈍い。外面刷毛や平刷り。	
第176図8 P L-252	土師器 壺	埋土 破片	白色鉱物	酸化焰	灰褐	受け口状口縁。肩部外面刻み。内面磨き。一部刷毛残る。外面横撫で。	
第176図9 P L-252	土師器 台付壺	+30 ㄨ	白色鉱物多	酸化焰	鈍い黄橙	口縁はほとんど屈曲しない。外面刷毛後一部撫で。	
第176図10	土師器 不詳	+1 底部完	台付壺と同じ胎土。	酸化焰	鈍い橙		
第176図11 P L-252	土師器 台付壺	埋土 口縁部	白色鉱物多	酸化焰	鈍い橙	口縁部の屈曲弱い。肩部外面刷毛。肩部内面撫で。	
第176図12	土師器 壺	+30 ㄨ	白色鉱物	酸化焰	鈍い黄橙	口縁部「S」字状。外面刷毛状の刷毛。	
第176図13 P L-252	土師器 台付壺	ビット内 台部	白色鉱物多	酸化焰	鈍い橙	外面刷毛をほぼ等間隔に撫で消す。端部折り返す。内面撫で。天井部砂多く付着。	
第176図14	土師器 壺	+37 底部	白色鉱物	酸化焰	鈍い橙	底部外面くぼむ。外面粗い撫で。内面丁寧な撫で。	
第176図15	土師器 台付壺	+27、28.5 台部欠	白色鉱物多	酸化焰	鈍い橙	外面刷毛をほぼ等間隔に撫で消す。端部折り返す。内面撫で。天井部砂多く付着。	
第176図16 P L-252	土師器 壺	床面、+28 破片	鉱物多	酸化焰	鈍い橙	有段口縁で、端部は内側に折れる。内面刷毛後横位置磨き。外面刷毛後縦位置磨き。外面磨目4本以上1単位、単位数不明。	

17号住居跡

押出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第177図1 P L-252	土師器 器台	床下土坑	黒・白色鉱物微	酸化焰	明赤褐	器表磨き。	

18号住居跡

押出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第178図1 P L-252	土師器 台付壺	貯蔵穴 ㄨ欠	白色鉱物多	酸化焰	鈍い黄橙	口縁部曲中鈍い。肩部外面刷毛間隔があく。刷毛間に磨削り見える。	
第178図2 P L-252	土師器 台付壺	床面 口縁一部欠	黒・白色鉱物少	酸化焰	鈍い橙	体部外面や中置れた刷毛目。体部内面押痕。外面横撫で。	
第178図3 P L-252	土師器 台付壺	貯蔵穴 ㄨ欠	白色鉱物多	酸化焰	浅黄橙	刷毛は細かく、単位が短い。口縁部は屈曲ではなく、湾曲に近い。	

18号住居跡

押戻番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第178図4 P.L.-252	土師器 台付壺	貯蔵穴 片欠	白色黏物多	酸化焰	鈍い黄褐色	外面刷毛をほぼ等間隔で消す。肩部折り返す。内面無で。天井部砂多く付着。	

19号住居跡

押戻番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第179図1 P.L.-252	磁石	+1.5	粗粒安山岩			上面のみ使用。断面三角の条痕。	500g
第180図2 P.L.-253	土師器 台付壺	床面 一部欠	白色黏物多	酸化焰	鈍い橙	刷毛は細かく、単位が短い。刷毛の間に荒削り見える。	
第180図3 P.L.-253	土師器 台付壺	+3 口縁一部欠	白色黏物多	酸化焰	鈍い橙	最大径部分外面は通常の細かい刷毛。その上下は櫛状の刷毛。後者が新しい。刷毛の間には荒削りが見える。台端部折り返す。	
第180図4 P.L.-253	土師器 台付壺	床面 一部欠	白色黏物	酸化焰	鈍い黄褐色	口縁部弱い屈曲。体部外面全面刷毛調整であるが、部分的に下の荒削り直残。	
第180図5 P.L.-252	土師器 台付壺	床面 一部欠	白色黏物多	酸化焰	赤	肩部刷毛上位2条の横位線で、下位横位刷毛。肩部刷毛の間に荒削り見える。	
第180図6 P.L.-253	土師器 台付壺	床面、+1.5 一部欠	黒・白色黏物	酸化焰	鈍い黄褐色	刷毛調整部分的で荒削りや櫛でが明確。底部内面と台部天井部砂付着。	
第180図7 P.L.-252	土師器 台付壺	+5、7 一部欠	白色黏物多	酸化焰	灰褐色	外面「く」の字状刷毛。体部下位接合部以下内外面器変れる。台部天井部砂付着。	
第180図8 P.L.-252	土師器 台付壺	+8 片	白色黏物多	酸化焰	鈍い橙	肩部内面刷毛状工具による櫛で1条。他は櫛で。	
第180図9 P.L.-252	土師器 埴	+15 口縁片欠	黒・白色黏物 赤色粒微	酸化焰	鈍い黄褐色	口縁部横撫で。肩部外面撫で。底部外面荒削り。内面無で。	
第180図10 P.L.-253	土師器 台付壺	床面 一部欠	白色黏物多	酸化焰	赤褐色	外面刷毛はやや短く、方向も異なる。肩部に横位刷毛1条。内面下位黒度。	
第180図11 P.L.-253	土師器 台付壺	床面、+1 底部欠	黒・白色黏物	酸化焰	鈍い橙	口縁部「S」字状。口縁部横撫で。頸部外面15条の刷毛。外面荒削り後撫で。下位は荒削り残る。内面粗い撫で。指圧痕残る。	
第180図12 P.L.-253	土師器 壺	埋土 底部	白色黏物	酸化焰	灰黄褐色	底部外面くぼむ。くぼみに砂付着。内面刷毛。底部内面砂を多く含む粘土塗り付ける。	
第180図13 P.L.-252	土師器 壺	+22 体部下位	黒・白色黏物 赤色粒微	酸化焰	鈍い橙	外面荒削り。内面上位丁寧な器撫で。下位丁寧な撫で。	

20号住居跡

押戻番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第183図1 P.L.-253	土師器 埴	貯蔵穴 片欠	黒・黒・白色黏物 赤色粒	酸化焰	鈍い赤褐色	口縁部・外面磨き。体部内面荒削り工具による撫で。	
第183図2 P.L.-253	土師器 埴	-2	黒・白色黏物	酸化焰	鈍い黄褐色	口縁部横撫で。口縁部外面下位刷毛消し残す。他は撫で。体部外面くぼむ。	
第183図3 P.L.-253	土師器 壺台	埋土 破片	黒・白色黏物	酸化焰	明黄褐色	内面刷毛による成型後撫で。外面撫で。	
第183図4 P.L.-253	土師器 壺	+3.5 口縁部	黒・白色黏物	酸化焰	鈍い橙	口縁部横撫で。口縁部折り返し、外面撫で。口縁部・肩部内面刷毛後一部撫で。肩部内面指圧痕多く残る。	
第183図5 P.L.-253	土師器 台付壺	床面～+3 台部欠	白色黏物 白色粒	酸化焰	鈍い黄褐色	口縁部横撫で。内外面浅い刷毛。	
第183図6 P.L.-253	土師器 高杯	床面 脚部	黒・白色黏物少	酸化焰	灰黄褐色	内外面刷毛。体部横撫で。外面上部撫で。	
第183図7 P.L.-253	土師器 台付壺	+9	白色黏物多	酸化焰	鈍い褐色	口縁部横撫で。外面刷毛。外面の荒削りは殆ど見えない。	
第183図8 P.L.-253	土師器 壺	+11 片	黒・白色黏物	酸化焰	鈍い赤褐色	口縁部横撫で。外面細かい刷毛。外面3条の焼成後切り込み。切り込みの一部は内面に通ずる。内面粗い刷毛後粗い撫で。	

遺物観察表

20号住居跡

探検番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第183図9 P.L-253	土師器 壺	掘形 片欠	黒・白色臍物	酸化焰	鈍い褐色	口縁部は受口状。外面やや乱れた刷毛、刷毛下の差別り部分に残る。内面刷毛。	
第183図10 P.L-253	土師器 台付壺	床面、床下	黒・白色臍物	酸化焰	鈍い赤褐色	口縁部「S」字状を呈さない。外面刷毛乱れる。台部外面刷毛全て削で消す。台端部折り返さない。	
第183図11	台石	床面	粗粒安山岩			上面平滑。一部磨痕。	6,450g

1号住居跡

探検番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第187図1	土師器 杯	+42 片	白色臍物微	酸化焰	鈍い橙	体部内面から口縁部外面横撫で。底部外面磨削り。	
第187図2	土師器 杯	+28 片	白色臍物微 金色臍物多	酸化焰	鈍い橙	体部内面から口縁部外面木口状工具による横撫で。底部外面磨削り。	
第187図3 P.L-254	土師器 杯	埋土 口縁一部欠	白色臍物微	酸化焰	鈍い橙	体部内面から口縁部外面木口状工具による横撫で。底部外面磨削り。	
第187図4 P.L-254	土師器 杯	+44.5 口縁片欠	白色臍物微	酸化焰	鈍い橙	体部内面から口縁部外面横撫で。底部外面磨削り。	
第187図5 P.L-254	土師器 杯	+37.5 口縁片欠	白色臍物	酸化焰	鈍い橙	体部内面から口縁部内面横撫で。撫で上げ板1箇所。口縁部外面木口状工具による横撫で。口縁端部内面浅い沈線1先延る。	
第187図6 P.L-254	土師器 杯	床面 口縁一部欠	黒・白色臍物	酸化焰	鈍い褐色	体部内面から口縁部外面横撫で。内外面の撫で痕一致。内面放射状の磨痕。	
第187図7 P.L-254	土師器 杯	+44.5 片	黒・白色臍物	酸化焰	鈍い黄褐色	体部内面から口縁部外面横撫で。口縁部外面接合痕。内面黒色処理。	
第187図8	土師器 壺	床面、+1 高部	白色臍物多	酸化焰	鈍い橙	外面磨削り。内面撫で。	
第187図9 P.L-255	土師器 壺	電燈 底部欠	黒・白色臍物多	酸化焰	鈍い褐色	口縁部外縁。口縁部横撫で。外面磨削り。内面磨撫で後撫で。	
第187図10 P.L-254	土師器 壺	電燈 完形	黒・白色臍物多	酸化焰	鈍い褐色	口縁部外反。端部内面くぼむ。外面磨削り。内面磨撫で後接合撫で。	
第187図11 P.L-254	土師器 壺	電燈、+6 下部欠	黒・白色臍物多	酸化焰	鈍い褐色	口縁部外縁。口縁部横撫で。外面磨削り。内面磨撫で後撫で。	
第188図12 P.L-255	土師器 壺	電天井 下部欠	黒・白色臍物多	酸化焰	鈍い橙	口縁部横撫で。撫で上げ板1箇所。端部下位外面木口状工具による横撫で。	
第188図13 P.L-255	土師器 壺	電燈 底部欠	黒・白色臍物多 赤色粒微	酸化焰	浅黄褐色	口縁部外縁。口縁部横撫で。外面磨削り。内面磨撫で後撫で。	
第188図14 P.L-254	土師器 壺	-2.5 一部欠	白色臍物多	酸化焰	鈍い褐色	口縁部外反。外面磨削り。内面磨撫で後撫で。体部最大径中位にある。	
第188図15 P.L-254	土師器 壺	-4 下部欠	白色臍物	酸化焰	鈍い橙	口縁部外反。外面磨削り。内面磨撫で後丁寧な撫で。	
第188図16 P.L-254	土師器 壺	電天井 体部欠	黒・白色臍物多 赤色粒	酸化焰	橙	口縁部外縁。口縁部横撫で。体部外面磨削り。	
第188図17 P.L-254	土師器 壺	電天井 口縁一部欠	黒・白色臍物多 白色粒少	酸化焰	鈍い橙	口縁部外反。全体に器面荒れる。体部外面磨削り。	
第188図18 P.L-255	土師器 壺	電天井 完形	黒・白色臍物	酸化焰	鈍い橙	口縁部外反。外面磨削り。内面磨撫で後撫で。口縁端部内面僅かにくぼむ。	
第188図19 P.L-254	土師器 高杯	埋土 脚部	黒・白色臍物	酸化焰	鈍い橙	筒部内面磨削り後撫で。筒部外面撫で後閉鎖のあいた磨痕。杯部内面黒色処理。木黒痕残る。	
第188図20 P.L-255	土師器	窰内	黒・白色臍物少	酸化焰	鈍い橙	片欠皿。	489g

5号住居跡

探検番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第190図1	土師器 杯	埋土 破片	白色臍物微	酸化焰	鈍い橙	口縁部横撫で。底部外面磨削り。	

5号住居跡

探跡番号 図版番号	類別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第190図2 P L-255	須恵器 蓋	埋土 破片	黒色粘質土出す	還元焰 並質	灰白	轆轤整形（右回転）。天井自然釉付着。	
第190図3 P L-255	須恵器 蓋	埋土 破片	白色灰物	還元焰 軟質	灰白	轆轤整形（右回転）。	

6号住居跡

探跡番号 図版番号	類別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第193図1 P L-255	土師器 杯	+2、8 口縁写欠	黒・白色灰物	酸化焰	橙	口縁部内縁。口縁部下型肌。器表荒れる。	
第193図2 P L-255	土師器 杯	+2 口縁写欠	黒・白色灰物	酸化焰	橙	体部内面から口縁部外面横撫で。内面のみ撫で上げ痕1箇所。口縁部下型肌。底部外面荒削り。	
第193図3 P L-255	土師器 杯	床面、+2.5 写欠	黒・白色灰物微	酸化焰	鈍い橙	体部内面から口縁部外面横撫で。内面のみ撫で上げ痕1箇所。口縁部端部処理2箇所。口縁部下型肌。	
第193図4 P L-255	須恵器 蓋	埋土 小片	白色灰物	還元焰 並質	黄灰	口縁部内面返り小さい。	
第193図5 P L-255	土師器 甕?	+2.5 口縁部	白色灰物多	酸化焰	鈍い黄橙	口縁部横撫で。撫で上げ痕1箇所。体部外面荒削り。	流入
第193図6 P L-255	土師器 台付甕	+1,7.5 写	黒・白色灰物	酸化焰	鈍い黄	外面のみ器表荒れる。	
第193図7 P L-256	土師器 甕	+7 写	白色灰物 金色灰物多	酸化焰	橙	外面荒削り。内面荒撫で後撫で。	
第193図8 P L-255	土師器 甕	+1.5 破片	黒・白色灰物多	酸化焰	鈍い赤褐	口縁部横撫で。体部内面荒撫で後撫で。外面荒削り。	
第193図9 P L-255	土師器 甕	+2,6.5 写	白色灰物多	酸化焰	橙	口縁部僅かに受け口状。体部外面荒削り。内面荒撫で後撫で。	
第193図10 P L-256	紡錘車	+1	滑石				32.5g
第193図11 P L-255	磁石	床面	粗粒安山岩			敲打痕。	690g
第193図12 P L-255	磁石	+1	砥沢石			大型の提碁石。	300g
第193図13 P L-255	置碁石	埋土	粗粒安山岩			写欠損み。4面使用。	1,600g

7号住居跡

探跡番号 図版番号	類別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第195図1 P L-256	土師器 杯	+8、24 口縁写欠	黒・白色灰物	酸化焰	橙	体部内面から口縁部外面横撫で。内面のみ撫で上げ痕1箇所。底部外面荒削り。	
第195図2 P L-256	土師器 杯	+30 写	黒・白色灰物	酸化焰	橙	口縁部内縁。口縁部下型肌。底部外面荒削り。	
第195図3 P L-256	土師器 杯	床面 小片	白色灰物	酸化焰	橙	口縁部内縁。外面口縁部以下荒削り。	
第195図4 P L-256	鉄鏝	+11 完形。					
第195図5 P L-256	磁石	+19	粗粒安山岩			上面、木口、側面中央敲打痕。	360g

23号住居跡

探跡番号 図版番号	類別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第198図1 P L-260	土師器 杯	埋土 写	白色灰物微	酸化焰	鈍い橙	器表厚肌。底部外面荒削り。	

遺物観察表

8号住居跡

押出番号 図版番号	類別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第199図1 P L-256	土師器 杯	埋土 瓦	黒・白色鉱物	酸化焰	鈍い橙	体部内面から口縁部外面横撫で。端部のみ強い横撫で。内面放射状の磨き。	
第199図2 P L-256	土師器 杯	埋土 瓦	黒・白色鉱物多	酸化焰	明赤褐	口縁部外傾。口縁部横撫で。端部のみ強い横撫で。	
第199図3 P L-256	土師器 杯	+9、23 瓦	黒・白色鉱物少	酸化焰	橙	体部内面から口縁部外面横撫で。口縁部外面横撫で、工具の止め痕あり。	
第199図4 P L-256	土師器 杯	+33 瓦	黒・白色鉱物少	酸化焰	灰白	底部内面から口縁部外面横撫で。口縁部外反。底部磨盤1mmと薄い。	
第199図5 P L-256	土師器 杯	+3 口縁欠	黒・白色鉱物少	酸化焰	鈍い橙	体部内面から口縁部外面横撫で。内面横撫では体部からの撫で上げ痕1箇所。	
第199図6 P L-256	土師器 杯	埋土 瓦	黒・白色鉱物少	酸化焰	鈍い赤褐	体部内面から口縁部外面横撫で。内面横撫では体部からの撫で上げ痕1箇所。外面横撫では木口状工具と思われる。口縁部外面には横撫でが及んでいないため外傾する。	
第199図7 P L-256	土師器 杯	床割 完形	黒・白色鉱物	酸化焰	橙	器表やや摩滅。体部内面から口縁部外面横撫で。口縁部外面型削。	
第199図8 P L-256	土師器 杯	床面 口縁一部欠	黒・白色鉱物少	酸化焰	鈍い橙	内面磨表新漉。口縁部外面型削。	
第199図9 P L-256	土師器 杯	+30 瓦	黒・白色鉱物少	酸化焰	鈍い橙	器表やや摩滅。底部外面磨削り。	
第199図10	須恵器 壺	埋土 瓦	白色鉱物少	還元焰 硬質	灰	横紐整形(右回転)。天井部外面回転磨削り。外面自然釉付着。	
第199図11	土師器 杯	+34 瓦	黒・白色鉱物少 赤色粒	中性焰	灰白	体部内面から口縁部外面横撫で。内面横撫で工具の止め痕1箇所。	
第199図12	土師器 鉢	埋土 破片	黒・白色鉱物微	酸化焰	灰黄褐	口縁部内傾。内面横撫で後磨き。	
第199図13 P L-256	土師器 杯	埋土 小片	黒・白色鉱物少	酸化焰	鈍い橙	底部内面布目。	
第199図14 P L-256	土師器 壺	+31 瓦	黒・白色鉱物少	酸化焰	鈍い橙	口縁部僅かに外反。口縁部横撫で。外面磨削り。器表摩滅。	
第199図15 P L-256	土師器 壺	埋土 破片	白色鉱物少 赤色粒微	酸化焰	鈍い赤褐	口縁部横撫で。端部外反。外面磨削り。器表やや摩滅。	
第199図16 P L-256	土師器 壺	+2 完形	黒・白色鉱物少	酸化焰	灰褐	口縁部外傾。口縁部横撫で。内面横撫での撫で上げ痕跡1箇所。外面横撫での撫で上げはない。	
第199図17 P L-256	土師器 壺	+12~15 体部以下欠	黒・白色鉱物	酸化焰	明赤褐	口縁部横撫で。端部強い横撫で。外面磨削り。	
第199図18	土師器 壺	+30 破片	黒・白色鉱物	酸化焰	鈍い橙	口縁部内傾。体部内面磨削で後撫で。外面磨削り。	
第199図19	土師器 壺	+34 破片	黒・白色鉱物	酸化焰	鈍い橙	外面磨削り。内面撫で。指圧痕多い。	
第199図20 P L-256	土師器 壺	+2~15、 壺内欠	黒・白色鉱物多	酸化焰	鈍い褐	外面磨削り。外面器表丸れる。底部外面木葉痕か。内面粗い磨盤で、器面凹凸多い。	
第199図21 P L-257	土師器 壺	+3~52 瓦	黒・白色鉱物多	酸化焰	鈍い赤褐	口縁部外傾。口縁部横撫で。体部外面磨削り。内面磨盤で後撫で。	
第199図22 P L-256	土師器 壺	+19~37 口~胴部欠	黒・白色鉱物少 赤色粒微	酸化焰	橙	口縁部受口状。器表摩滅。	
第199図23 P L-256	刀子	埋土				両端欠損。磨削部木質残る。	
第200図24 P L-257	磁石	+24	粗粒安山岩			上面のみ使用。	4,700 g
第200図25 P L-257	凹石	埋土	粗粒安山岩			両面ややくぼむ。	550 g
第200図26 P L-257	凹石	+12	粗粒安山岩			上面のみくぼむ。	580 g
第200図27 P L-257	磁石	+16	粗粒安山岩			木口面を使用。	770 g
第200図28 P L-257	凹石	+30	粗粒安山岩			側面を使用。	570 g

8号住居跡

押出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第206図29 P.L.-257	磁石	+57	紙沢石			3面を使用。	160g
第206図30 P.L.-257	凹石	+25	粗粒安山岩			両面と1側面を使用。	420g

9号住居跡

押出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第203図1 P.L.-257	土師器 杯	+7 ㄥ欠	白色鉱物微	酸化焰	鈍い赤褐	体部内面から口縁部外面横撫で。底部外面削り。	
第203図2 杯	土師器	床面、掘形 ㄥ	黒・白色鉱物	酸化焰	鈍い橙	口縁部横撫で。口縁部下植物茎状工具で沈線。沈線にはほぼ2cm毎に工具の止め痕。	
第203図3 P.L.-257	土師器 壺	+19、29 ㄥ	黒・白色鉱物多	酸化焰	鈍い橙	口縁部僅かに外反。体部外面削り。内面横撫で後撫で。	
第203図4 土師器 高杯	土師器	埋土 破片	白色鉱物	酸化焰	鈍い橙	口縁部横撫で。体部外面横撫で。底部内面放射状磨き。	
第203図5 P.L.-257	土師器 甕	+6、7 ㄥ	黒・白色鉱物微	酸化焰	鈍い黄橙	口縁部外傾。外面器表剥離。内面横撫で後撫で。	
第203図6 P.L.-257	土師器 壺	貯蔵穴 ㄥ	白色鉱物多	酸化焰	鈍い黄橙	外面削り。内面撫で。	
第203図7 P.L.-257	勾玉	+8	玉髓			下半欠損。	3.6g
第203図8 P.L.-257	紡錘車	+8	滑石			一部欠損。	18.9g
第203図9 P.L.-257	鉄鏃	-13				完形。中程で「く」の字状に折れ曲がる。	
第203図10 P.L.-257	刀子	竈内				茎欠損。	
第203図11 P.L.-257	刀子	埋土				茎部分。茎欠損。	

10号住居跡

押出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第206図1 P.L.-258	土師器 杯	+24、28 ㄥ	白色鉱物微	酸化焰	明赤褐	口縁部内傾。内外面器表剥離。	
第206図2 土師器 杯	土師器	埋土 破片	黒・白色鉱物微	中性焰	灰白	口縁部外反。体部内面から口縁部外面横撫で。底部外面器表剥離。	
第206図3 P.L.-258	土師器 杯	+2.5 口縁欠	白色鉱物微	酸化焰	鈍い赤褐	口縁部内湾。口縁部横撫で。内外面同一箇所で撫で上げる。撫で上げ箇所では内面端部内傾しない。	
第206図4 P.L.-258	土師器 杯	+13 ㄥ	黒・白色鉱物少	酸化焰	鈍い橙	口縁部内傾。体部内面から口縁部外面横撫で。体部外面削り。	
第206図5 土師器 鉢	土師器	埋土 破片	白色鉱物微	酸化焰	鈍い赤褐	口縁部内傾。体部内面から口縁部外面横撫で。内面横撫で撫で上げ痕1箇所。口縁部下型肌。	
第206図6 土師器 鉢	土師器	+18 破片	黒・白色鉱物少	酸化焰	淡黄	口縁部横撫で。内面のみ撫で上げ痕1箇所。横撫で後放射状磨き。	
第206図7 P.L.-257	土師器 鉢	+5.5 口縁欠	黒・白色鉱物 金色鉱物多	酸化焰	橙	口縁部内傾。内面器表剥離。口縁部横撫で。	
第206図8 P.L.-257	須恵器 蓋	埋土 ㄥ	白色鉱物	還元焰 並貫	灰白	縦輪整形(右回転)。口縁部返り。天井部回転削り。つまみ欠損。	
第206図9 土師器 高杯	土師器	埋土 破片	黒・白色鉱物	酸化焰	明赤褐	外面削り。胴部内面削り後撫で。杯部内面器表剥離。	
第206図10 土師器 壺	土師器	+15 ㄥ	黒・白色鉱物	酸化焰	灰褐	外面削り。内面横撫で後撫で。	

遺物観察表

10号住居跡

探訪番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第206図11 P L—257	土師器 甕	埋土 片	黒・白色鉱物	酸化焰	鈍い赤褐	外面寛削り。内面寛削で後削で。	
第206図12 P L—257	土師器 甕	床面 片	黒・白色鉱物少	酸化焰	橙	器表厚減。口縁部横削で。体部外面寛削り。	
第206図13	土師器 甕	埋土 破片	黒・白色鉱物 赤色粒微	酸化焰	橙	口縁部外傾。口縁部横削で。	
第206図14	土師器 甕	+30 破片	黒・白色鉱物多	酸化焰	鈍い橙	口縁部外反。底部内面くぼむ。	
第206図15 P L—258	磁石	+5.5	粗粒安山岩			両面の広い範囲を使用。	540 g
第206図16 P L—258	刀子	+6.5				基爪欠損。轆区。	

12号住居跡

探訪番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第208図1 P L—258	土師器 杯	+31 片	黒・白色鉱物少	酸化焰	鈍い橙	口縁部内傾。口縁部横削で。底部外面寛削り。	
第208図2 P L—258	土師器 杯	+17 片	黒・白色鉱物多	酸化焰	鈍い橙	体部内面から口縁部外面横削で。内面横削で 掘り上げ痕1箇所。口縁部下至肌。	
第208図3 P L—258	土師器 杯	+15 片	黒・白色鉱物少	酸化焰	橙	器表厚減。底部外面寛削り。	
第208図4	土師器 甕	埋土 破片	白色鉱物多	酸化焰	鈍い橙	口縁部外傾。口縁部横削で。外面上位のみ木 口状工具?による横削で。	
第208図5	土師器 甕	床面 台部	黒・白色鉱物	酸化焰	鈍い黄橙	台部下半横削で。外面上半部削り?内面上半 寛削り後削で。外面上半部表荒れる。	

13号住居跡

探訪番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第212図1 P L—258	土師器 杯	掘形 一部欠	黒・白色鉱物	酸化焰	鈍い赤褐	体部内面から口縁部外面横削で。	
第212図2 P L—258	土師器 杯	掘形 一部欠	黒・白色鉱物少	酸化焰	鈍い橙	体部内面から口縁部外面横削で。底部外面寛 削り部分に黒斑。	
第212図3 P L—258	土師器 杯	床面 一部欠	黒・白色鉱物少	酸化焰	鈍い赤褐	体部内面から口縁部外面横削で。	
第212図4 P L—259	土師器 杯	床面 完形	黒・白色鉱物少 金色鉱物	酸化焰	鈍い赤褐	体部内面から口縁部外面横削で。平面形器む。	
第212図5 P L—258	土師器 杯	堀内 完形	黒・白色鉱物少	酸化焰	橙	体部内面から口縁部外面横削で。	
第212図6 P L—258	土師器 杯	掘形 完形	黒・白色鉱物微	酸化焰	鈍い橙	体部内面から口縁部外面横削で。底部内面黒 斑。	
第212図7 P L—259	土師器 杯	掘形 完形	黒・白色鉱物少	酸化焰	鈍い黄橙	体部内面から口縁部外面横削で。内面横削で 体部分から削であげる。底部外面虫食い状に 剥離。	
第212図8 P L—258	土師器 杯	掘形 片	黒・白色鉱物少	酸化焰	鈍い黄橙	体部内面から口縁部外面横削で。器表やや厚 減。	
第212図9 P L—258	土師器 杯	床面 片	黒・白色鉱物	酸化焰	鈍い赤褐	体部内面から口縁部外面横削で。器表虫食い 状に厚減。	
第212図10	土師器 杯	+17 片	黒・白色鉱物少	酸化焰	鈍い赤褐	体部内面から口縁部外面横削で。	
第212図11 P L—258	須恵器 蓋	+25 一部欠	黒・白色鉱物	還元焰 並置	灰	輪縁整形(右回転)。天井部回転削り。口縁 部内面の返り小さい。	
第212図12	土師器 甕	埋土 底部	黒・白色鉱物少	酸化焰	黒褐	内面横削で。	
第212図13	土師器 甕	+3 小片	黒・白色鉱物少 赤色粒微	酸化焰	鈍い褐	口縁部横削で。	

13号住居跡

探跡番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第212図14 P L-259	須恵器 壺	+13 片欠	白色黏物	還元焰 並質	褐灰	罐體整形(右回転)。	
第212図15 P L-259	須恵器 壺	+18 小片	黒・白色黏物少	還元焰 並質	灰白	罐體整形(右回転)。肩部外面細かいカキ目。	
第212図16 P L-259	土師器 高杯	+28 片	黒・白色黏物微	酸化焰	鈍い赤褐	口縁部横撫で。杯部内面丁寧な撫で。杯部外面磨削り後粗い撫で。	
第212図17 P L-259	土師器 壺	窠内 完形	黒・白色黏物微 金色黏物多	酸化焰	灰白	内面丁寧な撫で。底部外面黒灰。	
第212図18 P L-259	土師器 壺	窠に設置 一部欠	黒・白色黏物	酸化焰	灰黄	口縁部外反。口縁部横撫で。口縁部下位内面斜め撫で。	
第212図19 P L-259	土師器 壺	床面 片欠	黒・白色黏物少	酸化焰	灰黄	口縁部横撫で。内面撫で。内面黒灰。	
第212図20 P L-259	土師器 壺	窠天井 完形	黒・白色黏物	酸化焰	鈍い褐	口縁部外傾。内面磨削り状の寛撫で。外面粘土多く付着。	
第213図21 P L-259	土師器 壺	窠に設置 口縁片欠	黒・白色黏物	酸化焰	鈍い赤褐	口縁部外傾。口縁部横撫で。体部外面黒灰。	
第213図22 P L-259	土師器 壺	胎形 一部欠	黒・白色黏物少	酸化焰	鈍い橙	口縁部横撫で。口縁部内面虫食い状に刺刺。底部外面黒灰。	
第213図23 P L-259	土師器 台付壺	床面 片欠	黒・白色黏物	酸化焰	灰褐	口縁部横撫で。器表反れる。体部内面焦げ付き痕。	
第213図24 P L-259	土師器 壺	窠壁材 一部欠	黒・白色黏物	酸化焰	鈍い橙	口縁部外傾。口縁部横撫で。	
第213図25 P L-259	土師器 壺	窠壁材 一部欠	黒・白色黏物 赤色粒少	酸化焰	鈍い橙	口縁部外傾。口縁部横撫で。体部下位内面接合痕。	
第213図26 P L-259	土師器 壺	窠天井 口縁片欠	黒・白色黏物 赤色粒少	酸化焰	鈍い橙	口縁部外傾。口縁部横撫で。内面寛撫で。	
第213図27 P L-260	砥石	+8	ひん岩			木口を使用。	820 g
第214図28 P L-260	砥石	床直	粗粒安山岩			木口と上面を使用。刃物痕。	350 g
第214図29 P L-260	砥石	+25	粗粒安山岩			側面、木口、上面を使用。	360 g
第214図30 P L-260	棒状押	+24	ホルンフェルス			両側面を使用。	550 g
第214図31 P L-260	磨石状石製 品	46ミソ内	粗粒安山岩			敲打痕。	260 g

15号住居跡

探跡番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第215図1 P L-260	土師器 杯	+14 口縁一部欠	白色黏物微 赤色粒微	酸化焰	橙	口縁部外傾。体部内面から口縁部外面横撫で。底部外面磨削り。	
第215図2 P L-260	須恵器 短頸壺	+5 口縁欠	白色黏物	還元焰	灰	体部から底部器壁厚い。罐體整形(右回転)。底部外面磨削り。	
第215図3 P L-260	土師器 高杯	+36 脚部	黒・白色黏物少	酸化焰	明赤褐	裾部強い横撫で。筒部内面磨削り。筒部外面磨削り後撫で。	
第215図4 P L-260	埴輪 内筒	埋土 小片	黒・白色黏物少 赤色粒	酸化焰 軟質	明赤褐	外面磨削り毛後整記号。	

21号住居跡

探跡番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第216図1 P L-260	土師器 杯	+63 片	黒・白色黏物少	酸化焰	鈍い赤褐	口縁部内傾。体部内面から口縁部外面横撫で。体部外面磨削り。	
第216図2 P L-260	土師器 杯	埋土 片	黒・白色黏物微	酸化焰	鈍い赤褐	口縁部内傾。体部内面から口縁部外面横撫で。内面横撫で撫で上げ痕1箇所。	

遺物観察表

21号住居跡

棟号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第216図3 P L-260	土師器 杯	+59 破片	黒・白色鉱物微	酸化焰	鈍い橙	口縁部内傾。体部内面から口縁部外面横撫で。	
第216図4	土師器 甕	埋土 瓦	黒・白色鉱物多	酸化焰	明褐	口縁部外傾。器表摩滅。	
第216図5 P L-260	刀子					茎部分。	
第216図6 P L-260	土師 器		黒・白色鉱物少	酸化焰	黄橙	端部欠損。	871 g
第216図7 P L-260	棒状鏃	埋土	ホルンフェルス			両端欠損。上面敲打痕。	800 g
第216図8 P L-260	砥石	+16	角閃石安山岩			側面と木口を使用。	460 g

22号住居跡

棟号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第217図1	土師器 杯	埋土 破片	白色鉱物微	酸化焰	残黄橙	口縁部外傾。器表摩滅。体部内面から口縁部外面横撫で。	
第217図2	土師器 鉢	埋土 破片	黒・白色鉱物	酸化焰	鈍い橙	口縁部内傾。器表摩滅。	

24号住居跡

棟号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第220図1 P L-260	土師器 杯	埋土 瓦	黒・白色鉱物少	酸化焰	鈍い赤褐	口縁部僅かに外反。体部内面から口縁部外面横撫で。内面横撫で撫で上げ痕1箇所。	
第220図2	土師器 杯	鉤形 口縁欠	黒・白色鉱物少	酸化焰	鈍い橙	口縁部外反。体部内面から口縁部外面横撫で。	
第220図3 P L-260	土師器 杯	床面 瓦	黒・白色鉱物少	酸化焰	鈍い褐	口縁部外反。体部内面から口縁部外面横撫で。内外面同一箇所に撫で上げ痕1箇所。	
第220図4 P L-260	土師器 杯	+5、6.5 口縁一部欠	黒・白色鉱物微	酸化焰	橙	口縁部外傾。体部内面から口縁部外面横撫で。	
第220図5 P L-260	土師器 杯	床面～+16 一部欠	黒・白色鉱物少	酸化焰	橙	口縁部小さく外反。体部内面から口縁部外面横撫で。	
第220図6	土師器 甕	埋土 破片	黒・白色鉱物少	酸化焰	鈍い赤褐	口縁部横撫で。内外面同一箇所に撫で上げ痕1箇所。	
第220図7	土師器 鉢	甕、+3～ 10 瓦	黒・白色鉱物	酸化焰	橙	口縁部外反。体部内面横撫で後撫で、下位は粗い撫で。	
第220図8	土師器 甕	+4.5 破片	黒・白色鉱物少	酸化焰	鈍い黄橙	口縁部外傾。端部付近接合痕。肩外面直削り。肩部内面横撫で後撫で。	
第220図9	土師器 甕	埋土 破片	黒・白色鉱物	酸化焰	黒褐	外面直削り。底部外面木炭灰。	
第220図10	土師器 甕	埋土 破片	黒・白色鉱物	酸化焰	鈍い黄橙	外面直削り。底部外面木炭灰。	
第220図11 P L-260	球状製品		鉄製			完形。	
第220図12 P L-260	砥石	+8	粗粒安山岩			上面のみ備かに使用。	320 g

25号住居跡

棟号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第222図1 P L-260	土師器 杯	+13.5 瓦	黒・白色鉱物	酸化焰	橙	口縁部外反。体部内面から口縁部外面横撫で。	

25号住居跡

探函番号 図版番号	類別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第222図2 P L-260	土師器 杯	+2, 8.5 ㄥ	黒・白色鉱物多	酸化焰	橙	器表やや厚減。体部内面から口縁部外面横撫で。口縁部歪む。	
第222図3	土師器 杯	埋土 ㄥ	黒・白色鉱物多	酸化焰	明褐色	口縁部外反。体部内面から口縁部外面横撫で。器壁やや厚い。	
第222図4	土師器 杯	埋土 ㄥ	黒・白色鉱物多	酸化焰	鈍い黄褐色	体部内面から口縁部外面横撫で。口縁部内面強い横撫で。口縁部下外面浅い沈線。	
第222図5	土師器 杯	埋土 破片	黒・白色鉱物多	酸化焰	灰白	体部内面から口縁部外面横撫で。体部器壁薄い。	
第222図6 P L-260	土師器 杯	+3.5 ㄥ	黒・白色鉱物	酸化焰	鈍い赤褐色	器表厚減。体部外面磨削り。	
第222図7	土師器 鉢	+22 ㄥ	黒・白色鉱物	酸化焰	橙	器表厚減。体部外面磨削り。	
第222図8	土師器 鉢	床面 破片	白色鉱物微	酸化焰	橙	体部内面から口縁部外面横撫で。外面磨削り。	
第222図9 P L-260	土師器 壺	埋土 破片	黒・白色鉱物多	酸化焰	鈍い橙	口縁部外反。口縁部横撫で。体部外面磨削り。	
第222図10	土師器 壺	埋土 ㄥ	黒・白色鉱物多	酸化焰	鈍い橙	口縁部外反。口縁部横撫で。外面磨削り。	
第222図11	土師器 壺	+13 ㄥ	白色鉱物多 金色鉱物多	酸化焰	鈍い橙	口縁部外反。口縁部横撫で。器部強い横撫で。口縁部に比して体部器壁薄い。	
第222図12 P L-260	須恵器 壺	埋土 ㄥ	黒・白色鉱物微	還元焰 軟質	灰白	口縁部内面から外面器表剥離。外面格子甲。内面当て具は同心円状の格子。	
第222図13	土師器 台付壺?	+12.5 台部	黒・白色鉱物多	酸化焰	鈍い赤褐色	器表厚減し調整痕不明。	
第222図14 P L-260	須恵器 蓋	埋土 ㄥ	白色鉱物	還元焰 並質	灰	輪軸整形(右回転)。天井部回転置削り。天井部自然釉付着。	
第222図15 P L-260	須恵器 杯	+32.5 ㄥ	黒・白色鉱物少	還元焰 並質	灰	輪軸整形(右回転)。底部回転置削り後撫で。高台貼り付け。	

26号住居跡

探函番号 図版番号	類別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第225図1 P L-261	土師器 杯	床面 口縁ㄥ欠	黒・白色鉱物	酸化焰	灰黄褐色	体部内面から口縁部外面横撫で。内面放射状磨削。底部外面を磨き黒色。	
第225図2 P L-261	土師器 杯	埋土 ㄥ	黒・白色鉱物少	酸化焰	灰	体部内面から口縁部外面横撫で。外面磨削り。	
第225図3	土師器 杯	埋土 ㄥ	白色鉱物	酸化焰	鈍い褐色	口縁部僅かに外反。体部内面から口縁部外面横撫で。口縁部外面横撫で工具止め痕1箇所あり。口縁部内面沈線1条。外面の一部を磨き黒色。	
第225図4 P L-261	土師器 杯	埋土 ㄥ	黒・白色鉱物微	酸化焰	橙	口縁部僅かに内傾。体部内面から口縁部外面横撫で。底部外面黒蒸。底部器壁薄い。	
第225図5	土師器 杯	埋土 ㄥ	黒・白色鉱物	酸化焰	橙	器表厚減。	
第225図6 P L-261	土師器 杯	埋土 ㄥ欠	白色鉱物	中性焰	灰白	体部内面から口縁部外面横撫で。内面黒色。	
第225図7	土師器 壺	貯蔵穴 破片	黒・白色鉱物	酸化焰	灰白	口縁部横撫で。口縁部外部接合痕、接合痕部分で外面屈曲。	
第225図8	土師器 鉢or瓶	+4.5 ㄥ	黒・白色鉱物	酸化焰	鈍い橙	口縁部外反。口縁部横撫で。外面磨削り。内面磨削で後撫で。	
第225図9	土師器 壺?	-3、+3 底部	黒・白色鉱物多	酸化焰	鈍い褐色	底部?丸底。外面置削り。内面上半表面剥離。	
第225図10 P L-261	土師器 壺	貯蔵穴 ㄥ	黒・白色鉱物	酸化焰	橙	口縁部外反。口縁部横撫で。外面磨削り。内面磨削で後撫で。	
第225図11 P L-261	土師器 壺	+6 ㄥ	黒・白色鉱物	酸化焰	鈍い褐色	口縁部横撫で。内面のみ撫で上げ痕跡1箇所。	
第225図12 P L-261	磁石	-1	粗粒安山岩			側面のみ使用。	400 g

遺物観察表

26号住居跡

採掘番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第225図13 P L-261	凹石	埋土	粗粒安山岩			上面と側面の2面を使用。	640g
第225図14 P L-261	砥石	-1	粗粒石			3面使用。	160g

27号住居跡

採掘番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第226図1 P L-261	土師器 壺	甕壁 底部欠	黒・白色鉱物多	酸化焰	鈍い橙	口縁部緩く外反。口縁部横撫で。器表荒れる。一方のみ外面側による赤変。	
第226図2 P L-261	土師器 台付甕	+5.5 体部欠	黒・白色鉱物少	酸化焰	鈍い橙	底部丸底。台部上平から底部まで。台袖横撫で。底部内面丁寧な撫で。	
第226図3 P L-261	土師器 甕	甕壁 完形	黒・白色鉱物 赤色粒微	酸化焰	鈍い橙	口縁部強い横撫で。器表摩滅。内面荒撫で。	

28号住居跡

採掘番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第228図1 P L-261	土師器 杯	+12 完形	黒・白色鉱物	酸化焰	橙	口縁部内凹。器表摩滅。体部外面荒削り。	
第228図2 P L-262	土師器 杯	+2.5 片欠	黒・白色鉱物少	酸化焰	橙	口縁部内凹。体部内面から口縁部外面横撫で。体部外面荒削り。	
第228図3 P L-262	土師器 杯	埋土 片欠	黒・白色鉱物	酸化焰	橙	口縁部ほぼ直立。器表摩滅。体部外面荒削り。	
第228図4 P L-261	土師器 杯	+11、15 完形	黒・白色鉱物少	酸化焰	橙	器表摩滅。体部外面荒削り。	
第228図5 P L-262	土師器 杯	埋土 片欠	黒・白色鉱物少 赤色粒微	酸化焰	橙	口縁部内凹。体部内面から口縁部外面横撫で。体部外面荒削り。	
第228図6 P L-261	土師器 杯	+7 片欠	黒・白色鉱物少 赤色粒微	酸化焰	橙	口縁部僅かに内湾。器表摩滅。体部外面荒削り。	
第228図7 P L-262	土師器 杯	埋土 口縁片欠	黒・白色鉱物	酸化焰	橙	口縁部内凹。体部外面荒削り。体部外面帯状の赤変めぐる。	
第228図8 P L-261	土師器 杯	埋土 口縁片欠	黒・白色鉱物少	酸化焰	橙	口縁部僅かに内湾。器表摩滅。体部外面荒削り。	
第229図9 P L-261	土師器 杯	床面 完形	黒・白色鉱物	酸化焰	橙	口縁部内凹。器表虫食い状に剥離。体部外面荒削り。	
第229図10 P L-261	土師器 杯	床面 片欠	黒・白色鉱物	酸化焰	橙	口縁部内凹。体部内面から口縁部外面横撫で。内面横撫で帯で上げ痕1箇所。外面横撫で工具止痕1箇所。	
第229図11	土師器 皿	埋土 片	白色鉱物	酸化焰	橙	口縁部外反。器表摩滅。体部外面荒削り。	
第229図12	土師器 鉢	埋土 片	黒・白色鉱物少	酸化焰	橙	口縁部外反。内面器表剥離。口縁部横撫で。	
第229図13	土師器 甕	埋土 破片	黒・白色鉱物少 金色鉱物	酸化焰	鈍い橙	口縁部横撫で。口縁部外反。	
第229図14	土師器 甕	埋土 破片	黒・白色鉱物	酸化焰	橙	口縁部外反。口縁部横撫で。端部強い横撫で。	
第229図15 P L-262	土師器 甕	床面 底部	黒・白色鉱物多	酸化焰	橙	外面荒削り。内面撫で。	
第229図16	土師器 甕	埋土 破片	黒・白色鉱物	酸化焰	淡黄	口縁部外反。口縁部横撫で。	
第229図17 P L-262	棒状物	床直	粗粒安山岩				400g
第229図18 P L-262	砥石	埋土	粗粒石			提砥石。穿穴部分を除き使用。	100g

28号住居跡

採回番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第229回19 P.L.-262	棒状牌	+2	粗粒安山岩				320g
第229回20 P.L.-262	砥石	床直	粗粒安山岩			3面使用。	360g
第229回21 P.L.-262	鉄鏝					茎。	

29号住居跡

採回番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第231回1 P.L.-262	土師器 杯	+29 完形	黒・白色鉱物多	酸化焰	橙	器表厚膜。口縁部下皿肌。体部外面寛削り。	
第231回2 P.L.-262	土師器 杯	+7 一部欠	黒・白色鉱物少	酸化焰	橙	体部内面から口縁部外面横線で。内面横線で撫で上げ痕1箇所。	
第231回3 P.L.-262	土師器 杯	埋土 ㊦	黒・白色鉱物少	酸化焰	鈍い橙	体部内面から口縁部外面横線で。体部器壁厚い。	
第231回4 P.L.-262	土師器 杯	埋土 ㊦	黒・白色鉱物少	酸化焰	橙	体部内面から口縁部外面横線で。体部外面寛削り。	
第231回5 P.L.-262	土師器 杯	埋土 ㊦	黒・白色鉱物少	酸化焰	鈍い橙	口縁部内凹。体部内面から口縁部外面横線で。	
第231回6 P.L.-262	土師器 皿	埋土 ㊦	白色鉱物微	酸化焰	明赤褐	口縁部外反。体部内面から口縁部外面横線で。	
第231回7 P.L.-262	土師器 皿	床面 ㊦	黒・白色鉱物少	酸化焰	橙	口縁部外反。口縁部体部内面から口縁部外面横線で。内面横線で撫で上げ痕1箇所。	
第231回8 P.L.-262	土師器 杯	+16 ㊦	黒・白色鉱物	酸化焰	橙	体部内面から口縁部外面横線で。	
第231回9 P.L.-262	土師器 杯	+3 ㊦	黒・白色鉱物少	酸化焰	橙	体部内面から口縁部外面横線で。口縁部近む。	
第231回10 P.L.-262	土師器 杯	埋土 ㊦	黒・白色鉱物少	酸化焰	橙	体部内面から口縁部外面横線で。外面寛削り。	
第231回11 P.L.-262	土師器 罌	肥形床直 一部欠	黒・白色鉱物	酸化焰	鈍い橙	口縁部外傾。口縁部横線で。口縁部内面撫で上げ痕1カ所。体部外面粘土付着。粘土付着部分以下外面風変。	

30号住居跡

採回番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第233回1 P.L.-262	土師器 杯	+3.5 完形	黒・白色鉱物	酸化焰	橙	口縁部外反。器表厚膜。平面楕円形。	
第233回2 P.L.-262	土師器 杯	+16.5 ㊦	黒・白色鉱物微	酸化焰	鈍い橙	口縁部外反。体部内面から口縁部外面横線で。	
第233回3 P.L.-262	土師器 杯	+22 口縁欠	黒・白色鉱物少	酸化焰	橙	口縁部外反。体部内面から口縁部外面横線で。	
第233回4 P.L.-263	土師器 杯	+14.5 口縁欠	黒・白色鉱物少	酸化焰	鈍い橙	体部内面から口縁部外面横線で。口縁部内面油漉1箇所。内面横線で撫で上げ痕1箇所。	
第233回5 P.L.-263	須志器 杯	埋土 ㊦	白色鉱物多	還元焰 並質	灰	機械整形(右回転)。底部切り離し不明。高台貼り付け。	
第233回6 P.L.-263	刀子	埋土				切先と茎先端欠損。茎実残存。	
第233回7 P.L.-263	刀子	埋土				刃区。	
第233回8 P.L.-263	鉄鏝					着柄部木質良好。	
233回9 P.L.-263	砥石	+23	粗粒安山岩			1面のみ僅かに使用。	360g

遺物観察表

30号住居跡

採掘番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第238図10 P.L.-263	砥石	+20	粗粒安山岩			断面のみ僅かに使用。	500g

31号住居跡

採掘番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第238図1 P.L.-263	土師器 甕	埋土 瓦	黒・白色鉱物	酸化焰	鈍い黄橙	口縁部外傾。口縁部横撫で。口縁部外面接合痕跡明確。	
第238図2	土師器 甕	埋土 瓦	黒・白色鉱物 赤色粒少	酸化焰	鈍い黄橙	口縁部外傾。口縁部横撫で後体部外面歪なり。	

32号住居跡

採掘番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第238図1 P.L.-263	土師器 杯	床面 口縁欠	黒・白色鉱物	酸化焰	鈍い橙	体部内面から口縁部外面横撫で。内面撫で上げ痕1箇所。	
第238図2 P.L.-263	土師器 杯	+8 瓦	黒・白色鉱物少 赤色粒微	酸化焰	鈍い赤褐	体部内面から口縁部外面横撫で。器表摩滅。	
第238図3 P.L.-263	土師器 杯	竈 口縁欠	黒・白色鉱物 赤色粒	酸化焰	鈍い橙	体部内面から口縁部外面横撫で。内面撫で上げ痕1箇所。口縁部下型乳。	
第238図4 P.L.-263	土師器 杯	+20 口縁一部欠	黒・白色鉱物	酸化焰	鈍い橙	体部内面から口縁部外面横撫で。内面撫で上げ痕1箇所。口縁部内溝。	
第238図5	土師器 甕	+6 瓦	黒・白色鉱物	酸化焰	鈍い赤褐	口縁部外反。口縁部横撫で。	
第238図6 P.L.-263	台石	+19	粗粒安山岩			上面を広く使用。	3,020g
第238図7 P.L.-263	砥石	+0.5	粗粒安山岩			上面を使用。	1,180g

33号住居跡

採掘番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第238図1	土師器 甕	埋土 破片	黒・白色鉱物多 赤色粒微	酸化焰	鈍い赤褐	口縁部外傾。口縁部横撫で。頸部強い横撫で。	
第238図2 P.L.-263	土師器 杯	+30 瓦	黒・白色鉱物 赤色粒微	酸化焰	橙	体部内面から口縁部外面横撫で。口縁部下型乳。口縁部から体部外面帯状の内形赤変。	
第238図3 P.L.-263	刀子	埋土				切先と茎灰欠損。はばき残る。	
第238図4 P.L.-263	鉄製金具	埋土				足金物か?	
第238図5 P.L.-263	砥石	埋土	砥沢石			4面使用。	190g

34号住居跡

採掘番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第239図1	土師器 杯	埋土 瓦	黒・白色鉱物少 赤色粒微	酸化焰	鈍い赤褐	口縁部内溝。器表摩滅。	
第239図2	土師器 壺	+3 体部瓦	黒・白色鉱物多	酸化焰	淡黄	外面歪なり。内面撫で。内面接合痕。	
第239図3 P.L.-263	土師器 甕	埋土 瓦	黒・白色鉱物	酸化焰	鈍い褐	口縁部外傾。口縁部強い横撫で。	

35号住居跡

探検番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第242図1 P L-264	土師器 杯	埋土 瓦	黒・白色紅物微	酸化焰	橙	口縁部僅かに内傾。体部内面から口縁部外面横撫で。口縁部下型。	
第242図2 P L-264	土師器 杯	埋土 瓦	黒・白色紅物微	酸化焰	橙	口縁部内傾。体部内面から口縁部外面横撫で。	
第242図3 P L-264	土師器 鉢	掘形 破片	黒・白色紅物少 赤色粒微	酸化焰	橙	口縁部内傾。体部内面から口縁部外面横撫で。内面虫食い状に器表剥離。	
第242図4 P L-264	土師器 杯	埋土 瓦	黒・白色紅物少 赤色粒微	酸化焰	橙	体部内面から口縁部外面横撫で。内面横撫で撫で上げ痕1箇所。	
第242図5 P L-264	土師器 杯	+29 瓦	黒・白色紅物少	酸化焰	橙	体部内面から口縁部外面横撫で。内面横撫で撫で上げ痕1箇所。	
第242図6 P L-264	土師器 杯	+29 口縁欠	黒・白色紅物少	酸化焰	鈍い橙	体部内面から口縁部外面横撫で。内面横撫で撫で上げ痕1箇所。器表虫食い状に剥離。	
第242図7 P L-264	土師器 杯	+33 口縁欠	黒・白色紅物微 赤色粒微	酸化焰	橙	口縁部内傾。体部内面から口縁部外面横撫で。器表摩滅。	
第242図8 P L-264	土師器 皿	竪縁 口縁欠	黒・白色紅物 赤色粒	酸化焰	橙	口縁部外反。体部内面から口縁部外面横撫で。	
第242図9 P L-264	須恵器 杯	+32 瓦欠	白色紅物、礫 灰色粒	還元焰 軟質	灰	縁部整形(右回転)。底部回転削り。底部内面磨滅白凸部摩滅。	
第242図10 P L-264	土師器 杯	掘形、甕 口縁欠	黒・白色紅物少	酸化焰	橙	口縁部内傾。器表摩滅。	
第242図11 P L-264	土師器 杯	床面 口縁欠	黒・白色紅物少	酸化焰	鈍い橙	口縁部内傾。器表摩滅。口縁部下型。	
第242図12 P L-264	土師器 杯	+42 口縁欠	黒・白色紅物少	酸化焰	橙	口縁部内傾。体部内面から口縁部外面横撫で。内面撫で上げ痕1箇所。	
第242図13 P L-264	土師器 鉢	床面 口縁欠	黒・白色紅物 赤色粒	酸化焰	橙	口縁部内傾。器表摩滅。口縁部下型。	
第242図14 P L-264	土師器 皿	掘形、+4、 +10 口縁欠	黒・白色紅物	酸化焰	橙	口縁部外反。体部内面から口縁部外面横撫で。底部外面風斑。	
第242図15 P L-264	土師器 鉢	-2.5 瓦欠	黒・白色紅物	酸化焰	橙	口縁部内傾。器表摩滅。	
第242図16 P L-264	土師器 甕	貯蔵穴、+ 11口~割部	黒・白色紅物 赤色粒	酸化焰	明赤褐	口縁部外反。口縁部内面やや摩滅。口縁部横撫で。	
第242図17 P L-264	須恵器 長頸瓶	埋土 瓦欠	白色紅物微 灰色粒多	還元焰 硬質	灰白	縁部整形(右回転)。肩部補伏工具による列点剥突。外面肩部以下回転削り。外面自然釉。	
第242図18 P L-264	土師器 甕	+23、42 瓦	黒・白色紅物	酸化焰	橙	口縁部外傾。肩部強い横撫で。器表剥離。	
第243図19 P L-264	土師器 甕	埋土 瓦欠	黒・白色紅物 赤色粒多	酸化焰	鈍い橙	口縁部外反。口縁部横撫で。口縁部内面接合痕明瞭。体部内面横撫で。	
第243図20 P L-265	土師器 甕?	掘形、+12 破片	黒・白色紅物 白色粒	酸化焰	鈍い橙	口縁部横撫で。外面削り。	
第243図21 P L-264	土師器 甕	床面 兜形	黒・白色紅物	酸化焰	鈍い橙	口縁部横撫で。肩部強い横撫でにより受け口状となる。	
第243図22 P L-264	磁石	床直	粗粒安山岩			上面と側面使用。	460 g
第243図23 P L-264	磁石	+1	粗粒安山岩			木口に敲打痕。	480 g
第243図24 P L-264	磁石	-2	粗粒安山岩			上面と両木口を使用。	550 g
第243図25 P L-264	磁石	-15	粗粒安山岩			側面を多く使用。	350 g
第243図26 P L-265	刀子	+40				切先と釜灰欠損。はばき残存。	
第243図27 P L-265	鉄鏃	+40				釜端欠損。	
第243図28 P L-265	刀子	+6				刃部小片。	

遺物観察表

36号住居跡

棟号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第245図1 P L-265	土師器 杯	床面～+3 一部欠	黒・白色鉱物少	酸化焰	鈍い橙	口縁部内側、体部内面から口縁部外面横撫で。内面撫で土付痕1箇所。	
第245図2 P L-265	土師器 杯	+29 口縁欠	黒・白色鉱物少 金色鉱物少	酸化焰	鈍い褐	体部内面から口縁部外面横撫で。口縁部下腹肌。	
第245図3 P L-265	土師器 杯	+13.5 片欠	黒・白色鉱物少	酸化焰	鈍い橙	体部内面から口縁部外面横撫で。口縁部下腹肌。	
第245図4 P L-265	土師器 杯	埋土 片	黒・白色鉱物	酸化焰	鈍い橙	器表準減。	
第245図5	土師器 杯	埋土 片	黒・白色鉱物少	酸化焰	橙	器表準減。体部外面磨削り。	
第245図6 P L-265	土師器 杯	埋土 片欠	黒・白色鉱物少	酸化焰	橙	体部内面から口縁部外面横撫で。口縁部下腹肌。	
第245図7 P L-265	土師器 杯	床面、+1 口縁欠	黒・白色鉱物少	酸化焰	鈍い赤褐	口縁部内側、体部内面から口縁部外面横撫で。	
第245図8 P L-265	土師器 壺	+12、35 片	黒・白色鉱物	酸化焰	明黄褐	口縁部外反。口縁部横撫で。端部強い横撫で。体部外面磨削り。内面器表削離。	
第245図9 P L-265	鉄針					先端部欠損。	
第245図10 P L-265	鉄釘					両端欠損。	
第245図11 P L-265	礫石	+4	粗粒安山岩			木口の一部のみ使用。	750 g
第245図12 P L-265	礫石?	カマド	粗粒安山岩			中央に穿孔。表面磨れる。	70 g

37・38号住居跡

棟号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第248図1 P L-265	土師器 杯	+4 口縁一部欠	黒色鉱物	酸化焰	橙	内面器表準減。口縁部横撫で。	
第248図2	土師器 杯	掘形 破片	黒・白色鉱物少	酸化焰	鈍い黄橙	体部内面から口縁部外面横撫で。口縁部下腹肌。	
第248図3 P L-265	土師器 杯	床面 片	白色鉱物微	酸化焰	橙	器表準減。体部外面磨削り。	
第248図4	土師器 杯	埋土 片	黒・白色鉱物少	酸化焰	鈍い橙	口縁部内側、体部内面から口縁部外面横撫で。	
第248図5 P L-265	土師器 杯	床面 片欠	黒・白色鉱物少	酸化焰	鈍い赤褐	口縁部僅かに内湾。	
第248図6	土師器 杯	+6 片	黒・白色鉱物少	酸化焰	橙	器表準減。	
第248図7 P L-266	土師器 杯	+10 小片	黒・白色鉱物	酸化焰	鈍い赤褐	口縁部ほぼ直立。器表準減。	
第248図8 P L-265	土師器 皿	+7 体部一部欠	黒・白色鉱物少	酸化焰	橙	口縁部外反。器表準減。泥みにより平面形楕円形。	
第248図9 P L-265	須恵器 杯	竪 破片	黒色鉱物	還元焰 軟質	灰白	輪縁整形(右回転)。底部切り離し不明。高台貼り付け。	
第248図10	土師器 壺	埋土 破片	黒色鉱物微 白色鉱物	酸化焰	明赤褐	口縁部外反。口縁部横撫で。端部強い横撫で。外面横位置削り。	
第248図11 P L-265	土師器 付冴	床面 片欠	白色鉱物多	酸化焰	鈍い橙～ 灰褐	口縁部外反。口縁部横撫で。器表準減。外面磨削り。右端部横撫で。	
第248図12 P L-265	土師器 壺	床面 体部欠	黒・白色鉱物	酸化焰	鈍い橙	口縁部外反。口縁部横撫で。外面磨削り、横、斜め。	
第248図13 P L-266	土師器 壺	掘形 片	白色鉱物 白色粒	酸化焰	鈍い黄橙	口縁部外反。口縁部横撫で。内面木口状工具による撫で。口縁部外面下指圧痕。	

39号住居跡

押図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第25281 P L-266	土師器 杯	床面 完形	黒・白色鉱物少	酸化焰	鈍い橙	口縁部僅かに外反。体部内面から口縁部外面 横撫で。内面撫で上げ痕1箇所。	8、12と重 なる。
第25282 P L-266	土師器 杯	床面 瓦欠	黒・白色鉱物少	酸化焰	鈍い橙	口縁部外傾。器表厚減。洗き彫れ2箇所。	
第25283 P L-266	土師器 杯	床面 完形	黒・白色鉱物少 金色鉱物	酸化焰	橙	体部内面から口縁部外面横撫で。内面撫で上 げ痕1箇所。口縁部外面歪み肌残る。	5、7と重 なる。
第25284 P L-266	土師器 杯	床面 完形	黒・白色鉱物少	酸化焰	鈍い橙	口縁部外傾。体部内面から口縁部外面横撫で。 内面撫で上げ痕1箇所。	14、15と重 なる。
第25285 P L-266	土師器 杯	床面 完形	黒・白色鉱物少	酸化焰	鈍い橙	体部内面から口縁部外面横撫で。内面横撫で 体部から撫で上げる。	3、7と重 なる。
第25286 P L-266	土師器 杯	床下土坑 完形	黒・白色鉱物	酸化焰	鈍い橙	体部内面から口縁部外面横撫で。内面横撫で 体部から撫で上げる。	
第25287 P L-266	土師器 杯	床面 完形	黒・白色鉱物少 赤色鉱物	酸化焰	橙	器表厚減。口縁部歪み槽円形。口縁部外面の み横撫で残る。	3、5と重 なる。
第25288 P L-266	土師器 杯	床面 完形	黒・白色鉱物 赤色粒	酸化焰	橙	体部内面から口縁部外面横撫で。内面撫で上 げ痕1箇所。	1、12と重 なる。
第25289 P L-266	土師器 杯	掘形 片	黒・白色鉱物少	酸化焰	灰褐	体部内面から口縁部外面横撫で。口縁部外面 型削。	
第25290 P L-266	土師器 杯	埋土 完形	黒・白色鉱物	酸化焰	鈍い橙	口縁部内面から底部外面器表虫食い状に剥 離。底部内面磨痕で痕。口縁部内面比線1条。	
第25291 P L-266	土師器 杯	+51 片	黒・白色鉱物微	酸化焰	鈍い橙	口縁部内傾。体部内面から口縁部外面横撫で。 底部外面磨痕。	
第25292 P L-266	土師器 杯	床面 完形	黒・白色鉱物少	酸化焰	橙	口縁部小さく内湾。内面器表厚減。	1、8と重 なる。
第25293 P L-266	土師器 杯	床面 片	黒色鉱物微	酸化焰	鈍い赤褐	口縁部内湾。器表厚減。口縁部一部に塗布さ れた？黒色物質残存。	
第25294 P L-266	土師器 杯	床面 完形	黒・白色鉱物少	酸化焰 一部還元	橙	口縁部内傾。底部丸み気味。体部内面から口 縁部外面横撫で。	4、15と重 なる。
第25295 P L-266	土師器 杯	床面 完形	黒・白色鉱物	酸化焰	橙	器表や厚減。体部内面から口縁部外面横撫 で。	4、14と重 なる。
第25296 P L-266	土師器 杯	床面 完形	黒色鉱物多 白色鉱物	酸化焰	鈍い黄橙	体部内面から口縁部外面横撫で。外面2段の 横撫でにより中位僅かに突出。外面上段横撫 で撫で上げ痕1箇所。底部外面虫食い状に剥 離。	
第25297 P L-266	土師器 杯	埋土 片	黒・白色鉱物微	酸化焰	鈍い橙	体部内面から口縁部外面横撫で。口縁部歪み 著しい。	
第25298 P L-266	土師器 杯	+28 完形	黒・白色鉱物	酸化焰	灰白	口縁部内傾。体部内面から口縁部外面横撫で。 体部内面木口状工具による横撫で。工具止め 痕約3.5cm間隔。内面放射状に磨き。	
第25299 P L-266	土師器 杯	埋土 片	黒・白色鉱物少	酸化焰	鈍い黄橙	口縁部小さく内湾。体部内面から口縁部外面 横撫で。内面放射状に磨き。	
第25300 P L-266	土師器 杯	埋土 片	黒・白色鉱物少	酸化焰	鈍い橙	口縁部内傾。体部内面から口縁部外面横撫で。	
第25301 P L-266	土師器 鉢	埋土 破片	黒・白色鉱物少	酸化焰 断面還元	橙	口縁部小さく内湾。器表厚減。	
第25302 P L-266	須恵器 蓋	+5 片	白色鉱物微	還元焰 硬質	灰	轆轤整形(右回転)。天井部発掘有り。口縁部沈 線1条。	
第25303 P L-266	土師器 甕	竈壁 一部欠	黒・白色鉱物 赤色粒微	酸化焰	鈍い橙	口縁部外傾。口縁部外面接合痕。内面磨痕で。 後撫で。	
第25304 P L-266	土師器 甕	竈壁 底部欠	黒・白色鉱物多	酸化焰	鈍い橙	口縁部僅かに外反。外面器表剥離。内面磨痕 で後撫で。	
第25305 P L-266	土師器 甕	竈天井 一部欠	黒・白色鉱物多 白・赤色粒多	酸化焰	鈍い黄橙	口縁部外反。口縁部外面横撫で撫で上げ痕1 箇所。口縁部内面器表剥離。	
第25306 P L-266	土師器 甕	埋土 底部	黒・白色鉱物少	酸化焰	鈍い橙	底部高気穴突出。高気穴発掘有り後撫で。外面 磨削有り。	
第25307 P L-266	土師器 甕	埋土 底部	黒・白色鉱物	酸化焰	鈍い赤褐	外面磨削有り。底部外面木葉状。内面磨痕で後 撫で。	

遺物収容表

39号住居跡

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第254図28 P L-266	土師器 壺	埋土 底部	黒・白色黏物	酸化焰	灰黄	外面磨削り。底部外面木葉状。内面磨削で後撫で。	
第254図29	土師器 壺	埋土 ㄥ	黒・白色黏物	酸化焰	明赤褐	外面磨削り。底部外面木葉状。内面磨削で後撫で。	
第254図30 P L-267	土師器 壺	竈天井 体部写欠	黒・白色黏物多 赤色粒	酸化焰	鈍い橙	口縁部外反。口縁部横撫で。器表やや剥離。	
第254図31 P L-267	土師器 壺	竈天井 底部写欠	黒・白色黏物多 赤色粒	酸化焰	鈍い褐	頸部くびれる。他に比べて器高低い。口縁端部鈍い横撫で。	
第254図32 P L-267	土師器 壺	竈内 底部欠	黒・白色黏物	酸化焰	鈍い橙	口縁部歪む。体部外面粘土付着。体部内面磨削で。	
第254図33 P L-263	土師器 台付壺	-7 一部欠	黒・白色黏物	酸化焰	灰褐	器壁厚い。台裾は広がる。口縁部横撫で。外面磨表厚敷。	
第254図34 P L-267	砥石	床直	粗粒安山岩			刃物痕と考えられる条線多数。	1,050 g
第254図35 P L-267	棒状礫	床直	粗粒安山岩			両側面使用。	540 g
第254図36 P L-267	砥石	-8	粗粒安山岩				220 g
第254図37 P L-267	台石	+46	ホルンフェルス			上面平滑。	1,530 g
第254図38 P L-267	礫石	床直	粗粒安山岩			両側面使用。	600 g

40号住居跡

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第255図1 P L-268	土師器 杯	床直 完形	白色黏物微	酸化焰 硬質	橙	平直。器表厚敷。体部内面沈線付位置磨き。器壁に触れると胎土粉が付着するが、叩くと高い音がする程硬質。	
第255図2 P L-268	土師器 杯	+13 ㄥ	黒・白色黏物	酸化焰	橙	口縁部外反。内面器表厚敷。口縁部下型跡。	
第255図3	土師器 杯	+13 ㄥ	黒・白色黏物少 金色黏物	酸化焰	橙	口縁部内反。体部内面から口縁部外面横撫で。	

41号住居跡

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第258図1 P L-268	土師器 杯	埋土 完形	白色黏物微	酸化焰	灰白	平底気味。口縁部内面撫で上げ痕1カ所。口縁部外面中位擦合痕。	
第258図2 P L-268	土師器 杯	埋土 口縁写欠	黒・白色黏物	酸化焰	灰褐	口縁部内面ややくぼむ。内面から口縁部外面横撫で。	
第258図3 P L-268	土師器 杯	埋土 口縁写欠	白色黏物微	酸化焰	鈍い橙	口縁部外反後縁部内折。器表厚敷。口縁部外面型跡僅かに残る。	
第258図4 P L-268	土師器 杯	+1 口縁写欠	白色黏物微 赤色粒	酸化焰	鈍い橙	器表厚敷。口縁部やや歪む。	
第258図5 P L-269	土師器 鉢	+12 ㄥ	白色黏物 赤色粒	酸化焰	鈍い黄橙	内面器表厚敷。口縁部外面横撫で。口縁端部部分的に外反。体部から底部外面磨削り。	
第258図6 P L-268	土師器 杯	埋土 ㄥ	黒・白色黏物	酸化焰	鈍い橙	体部内面から口縁部外面横撫で。口縁部外面中位。頸部内面沈線各1条。	
第258図7 P L-268	土師器 杯	埋土 ㄥ	黒・白色黏物	酸化焰	鈍い褐	口縁部直立。体部内面から口縁部外面横撫で。	
第258図8 P L-268	土師器 椀	+2、13 口縁一部欠	黒・白色黏物	酸化焰	橙	口縁部外反。体部内面から口縁部外面横撫で。口縁端部内面沈線1条。外面保付着。底部内面丁寧な撫で調整。	
第258図9 P L-269	土師器 壺	埋土 小片	白色黏物 赤色粒	酸化焰	黄橙	器表厚敷。口縁部外反。	

41号住居跡

押図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第258図10 P.L.-268	土師器 甕	床、+2 底部欠	黒・白色鉱物	酸化焰	鈍い橙～ 明赤褐	体部外面やや厚膩。口縁部横撫で。	
第258図11 P.L.-268	土師器 甕	竈内 一部欠	黒・白色鉱物 赤・白色粒	酸化焰	鈍い黄橙 ～鈍い赤 褐	口縁部外反。内外面全面粘土付着。竈天井芯 材か？	
第258図12 P.L.-269	土師器 台付甕	埋土 ㄥ	白色鉱物多	酸化焰	灰褐	筒部内面磨削り。筒部外面横撫で、袖部横撫で。 底部内面黒色。	
第258図13 P.L.-269	土師器 台付甕	埋土 ㄥ	黒・白色鉱物 赤色粒微	酸化焰	鈍い赤褐	口縁部外反。口縁部外面器表磨滅。器形から 台付と考えられる。	
第258図14 P.L.-268	土師器 甕	床～+31 ㄥ欠	黒・白色鉱物少 赤色粒少	酸化焰	明赤褐	口縁部横撫で。内外面粗い荒磨り。底部下端 1対の小孔。	
第258図15 P.L.-269	鉄鎌？	小片				鎌刀部の破片か。	

43号住居跡

押図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第262図1	土師器 鉢	+5 ㄥ	黒・白色鉱物	酸化焰	灰褐	口縁部外反。口縁部横撫で、工具止め痕1カ 所。体部内面、口縁部横撫で後に撫で。	

42号住居跡

押図番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第263図1 P.L.-269	土師器 杯	床面 完形	白色鉱物 赤色粒	酸化焰	橙	口縁部外反。器表やや厚膩。体部内面から 口縁部外面横撫で。口縁部やや歪む。	
第263図2 P.L.-270	土師器 杯	床面 完形	黒・白色鉱物	酸化焰	灰白	口縁部内傾。器壁厚い。体部内面から口縁部 外面横撫で。口縁部高低差5mm。	
第263図3 P.L.-270	土師器 杯	+4 完形	白色鉱物	酸化焰	橙	口縁部外反。体部内面から口縁部外面横撫で。 器表やや厚膩。	
第263図4 P.L.-269	土師器 杯	+2 口縁ㄥ欠	黒・白色鉱物少 赤色粒	酸化焰	橙	口縁部やや外反。器表厚膩。	
第263図5 P.L.-270	土師器 杯	竈袖石密着	黒・白色鉱物 赤色粒微	酸化焰	橙	口縁部内傾。体部内面から口縁部外面横撫で。 体部外面磨削り。	
第263図6 P.L.-269	土師器 杯	埋土 ㄥ欠	黒・白色鉱物少 赤色粒	酸化焰	橙	口縁部外反。体部内面から口縁部外面横撫で。 器表やや厚膩。	
第263図7 P.L.-269	土師器 杯	床面 完形	黒・白色鉱物	酸化焰	橙	口縁部外反。器表厚膩。	
第263図8 P.L.-270	土師器 杯	床面 完形	黒・白色鉱物少	還元焰	褐灰	器表虫食い状に割壊。体部内面から口縁部外 面横撫で。	
第263図9 P.L.-270	土師器 杯	+25 完形	黒・白色鉱物多 赤色粒多	酸化焰	橙	口縁部僅かに外反。体部内面から口縁部外面 横撫で。	
第263図10 P.L.-269	土師器 鉢	+4 ㄥ	黒・白色鉱物少 赤色粒	酸化焰	明赤褐	口縁部内傾。体部内面から口縁部外面横撫で。	
第263図11 P.L.-269	土師器 甕	+4 完形	黒・白色鉱物多 赤色粒微	酸化焰	鈍い褐	口縁部外傾。口縁部横撫で。体部内面磨削り、 下位は丁寧な撫で。	
第263図12 P.L.-269	土師器 甕	+13 口縁ㄥ欠	黒・白色鉱物	酸化焰	鈍い黄橙	口縁部外傾。口縁部横撫で。口縁部外面接合 痕。体部内面丁寧な撫で。	
第263図13 P.L.-270	土師器 甕	+3、14 ㄥ欠	黒・白色鉱物 赤色粒微	酸化焰	灰白	口縁部外反。口縁部横撫で。内面磨削り。体 部下位与胎土の色調が白い。	
第263図14 P.L.-269	土師器 甕	+13 体部ㄥ欠	黒・白色鉱物 赤色粒微	酸化焰	鈍い黄橙	口縁部外反。口縁部横撫で。内面磨削り後撫 で。体部下位1/3胎土の色調が白い。	
第264図15 P.L.-269	土師器 甕	+7 完形	黒・白色鉱物多 赤色粒	酸化焰	鈍い橙	口縁部「く」の字状に外反。口縁部横撫で。 内面丁寧な撫で。	
第264図16 P.L.-270	土師器 甕	+13 上半欠	黒・白色鉱物少 赤色粒微	酸化焰	灰黄	外面荒磨り。内面磨削り。	
第264図17 P.L.-269	土師器 甕	床面 完形	黒・白色鉱物 赤色粒微	酸化焰	灰白	口縁部外傾。外面粗い荒磨りのため、7段の 組作り痕残る。内面も粗い荒撫で。	

遺物観察表

42号住居跡

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第264図18 P L-270	土師器 甕	床面 一部欠	黒・白色鉱物 赤色粒微	酸化焰	鈍い橙	口縁部横撫で後に一部変形若しくは亀裂を修正したような跡が1カ所。底部外面微かに木葉痕。口縁端部強い横撫で。	
第264図19 P L-269	土師器 甕	床面 体部欠	黒・白色鉱物 赤色粒微	酸化焰	鈍い橙	口縁端部外反。器表やや摩滅。内面荒撫で。	
第264図20 P L-270	土師器 甕	床、+5 体部欠	黒・白色鉱物	酸化焰	鈍い黄橙	口縁部外反。口縁端部強い横撫で。口縁部外面接合痕。底部外面木葉痕。	
第264図21 P L-270	土師器 甕	+2、11 体部欠	黒・白色鉱物 赤色粒	酸化焰	鈍い赤褐色	口縁部外反。口縁部横撫で。内面撫で。甕天井構築材か。	
第264図22 P L-270	土師器 甕	床面 体部下位	黒・白色鉱物 赤色粒微	酸化焰	鈍い橙	内面荒撫で。外面荒削り。甕天井構築材か。	
第265図23 P L-270	土師器 甕	床面 一部欠	黒・白色鉱物 赤色粒	酸化焰	鈍い橙	口縁端部強い横撫で。器表やや摩滅。内面黒変。	
第265図24 P L-270	土師器 甕	床面 底面欠	黒・白色鉱物 赤色粒	酸化焰	鈍い赤褐色	口縁部外反。端部立ち上がる。口縁部横撫で。内面荒撫で。甕天井構築材か。	
第265図25 P L-271	敲石	床直	粗粒安山岩			側面敲打痕。	520 g
第265図26 P L-271	敲石	埋土	粗粒安山岩			周縁に敲打痕。	250 g
第265図27 P L-271	敲石	床直	粗粒安山岩			側面と上面に敲打痕。	400 g
第266図28 P L-271	敲石	-2	粗粒安山岩			側面と木口に敲打痕。	420 g
第266図29 P L-271	棒状礫	埋土	粗粒安山岩				450 g
第266図30 P L-271	敲石	床直	粗粒安山岩			側面と上面の一部に敲打痕。	660 g
第266図31 P L-271	敲石	床直	粗粒安山岩			側面敲打痕。	550 g

44号住居跡

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第268図1 P L-271	土師器 杯	+3 完形	黒・白色鉱物 赤色粒	少酸化焰	鈍い褐色	体部内面から口縁部外面横撫で。内面横撫で撫で上げ痕1カ所。口縁部下型肌。	
第268図2 P L-271	土師器 杯	+27 片	黒・白色鉱物微 赤色粒微	酸化焰	鈍い橙	口縁部僅かに外反。器表摩滅。	
第268図3 P L-271	土師器 杯	埋土 小片	白色鉱物 赤色粒微	酸化焰	鈍い橙	口縁部僅かに外反。体部内面から口縁部外面横撫で。口縁部下型肌。	
第268図4 P L-271	土師器 杯	+26 片	黒・白色鉱物少 赤色粒微	酸化焰	橙	口縁部僅かに外反。体部内面から口縁部外面横撫で。	
第268図5 P L-271	土師器 杯	+21 片欠	白色鉱物多	酸化焰	鈍い橙	口縁部高い。体部内面から口縁部外面横撫で。口縁端部のみ強い横撫で。口縁部外面僅かに型肌残る。	
第268図6 P L-271	土師器 杯	床面 一部欠	黒・白色鉱物	酸化焰	鈍い橙	平底。外面口縁部下型削り。器表摩滅。底部周縁ラセン状。体部内面放射状痕。体部外面型肌僅かに残る。底部外面粘土層合痕。	
第268図7 P L-271	須恵器 蓋	床面 完形	白色鉱物 赤色粒	酸化焰 差貫	明赤褐色	輪縁整形(右回転)。天井部右回転削り。	
第268図8 P L-271	須恵器 蓋	埋土 片欠	黒・白色鉱物 微	還元焰	灰黄	輪縁整形(右回転)。天井部右回転削り。	
第268図9 P L-272	土師器 甕	器形、+3 一部欠	黒・白色鉱物 赤色粒少	酸化焰	明赤褐色	口縁部やや内凹。口縁部外面接合痕明瞭。器表やや摩滅。	
第268図10 P L-271	土師器 甕	床直 片	白色鉱物	酸化焰	赤褐色	口縁部横撫で。内面荒撫で。	
第268図11 P L-271	土師器 甕	器形 片欠	黒・白色鉱物 赤色粒微	酸化焰	鈍い赤褐色	口縁部外反。器表やや摩滅。	

45号住居跡

棟別番号 図版番号	類別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第271図1 P L-272	土師器 杯	+23、32 Ⅲ	白色鉱物微	酸化焰	明褐色	口縁部外反。器表摩滅。平面形楕円形に歪む。	
第271図2 P L-272	土師器 杯	+29 Ⅲ	白色鉱物	酸化焰	鈍い橙	口縁部外反。体部内面から口縁部外面横撫で。 口縁端部内面脱皮。	
第271図3 P L-272	土師器 杯	埋土 Ⅲ	黒・白色鉱物	酸化焰	橙	口縁部僅かに内傾。口縁部横撫で。内面撫で 上げ直1カ所。口縁部下型肌。	
第271図4 P L-272	土師器 杯	+49 Ⅲ	白色鉱物微	酸化焰	明赤褐色	口縁部外反。器表摩滅。	
第271図5 P L-272	土師器 杯	埋土 Ⅲ	黒・白色鉱物	酸化焰	橙	体部内面から口縁部外面横撫で。口縁部下型 肌。底部外黒色。	
第271図6 P L-272	土師器 鉢?	埋土 小片	黒・白色鉱物少	酸化焰	灰黄	口縁部僅かに外反。体部内面から口縁部外面 横撫で。	
第271図7 P L-272	土師器 杯	埋土 一部欠	黒・白色鉱物少 金色鉱物	酸化焰	明赤褐色	口縁部外反。底部外面突出し、木葉板残る。 体部内面から口縁部外面横撫で。体部外面寛 削りなく、全面に脱皮。	
第271図8 P L-272	土師器 鉢?	+8、10 小片	黒・白色鉱物少 赤色粒少	酸化焰	鈍い黄褐色	口縁部歪む。器表摩滅。	
第271図9	須恵器 鉢	+59 小片	白色鉱物	還元焰 軟質	灰	輪軸整形(右回転)。底部から体部下端右回転 削り。盛り付け高台。	
第271図10	須恵器 壺	+2、～65 Ⅲ	白色鉱物	還元焰 堅質	鈍い黄褐色	口縁部外反。体部外面叩後磨目。内面同心内 当具。底部内面撫で。	
第271図11 P L-272	土師器 壺	+6～18 小片	黒・白色鉱物多	酸化焰	橙	器表摩滅。口縁部上半強い横撫で。内面脱皮 で。	
第271図12 P L-272	土師器 壺	+14、35 Ⅲ欠	黒・白色鉱物 赤色粒	酸化焰	橙	口縁部僅かに外反。口縁部横撫で。内面脱皮 り。	
第271図13 P L-272	土師器 壺	+56 Ⅲ	白色鉱物	酸化焰	橙	器表摩滅。口縁端部小さく外に折り返す。外 面脱皮り。	
第272図14 P L-272	四石	+22	粗粒安山岩			敲打直くぼむ。	600 g
第272図15 P L-272	四石	床面	粗粒安山岩			敲打直くぼむ。	430 g
第272図16 P L-272	礫石	+55	粗粒安山岩				250 g
第272図17 P L-272	鉄鏃					両端部欠損。くの字に折れ曲がる。	

46号住居跡

棟別番号 図版番号	類別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第274図1 P L-273	磁石	-7	粗粒安山岩			側面と木口に敲打痕。	350 g
第274図2 P L-273	磁石	+6	粗粒安山岩			端部欠損。	770 g
第275図3 P L-272	土師器 杯	+4 一部欠	黒・白色鉱物	酸化焰	鈍い橙	口縁部外反。体部内面から口縁部外面横撫で。 内外面横撫で同一箇所まで撫で上げる。	
第275図4 P L-273	土師器 杯	+3 Ⅲ	黒・白色鉱物少	酸化焰	橙	器表摩滅。口縁部歪む。器壁薄い。	
第275図5 P L-273	土師器 杯	床面、+13 口縁一部欠	白色鉱物	酸化焰	橙	口縁部僅かに外反。器表摩滅。	
第275図6 P L-272	土師器 杯	+6、形 欠	黒・白色鉱物	酸化焰	鈍い橙	口縁部小さく外傾。体部内面から口縁部外面 横撫で。	
第275図7 P L-273	土師器 杯	+4 口縁一部欠	黒・白色鉱物少	酸化焰	灰白 内面黒	口縁部外反。体部内面から口縁部外面横撫で。 口縁部歪む。	
第275図8 P L-273	土師器 杯	床面 口縁Ⅲ欠	黒・白色鉱物少	酸化焰	鈍い赤褐色	底部内面から口縁部外面横撫で。内面横撫で 底部からの撫で上げ痕跡1カ所。口縁端部強い 横撫で。口縁部外面脱皮。	

遺物観察表

46号住居跡

押戻番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第275図9 P.L.—273	土師器 杯	楕形 小片	白色鉱物多	酸化焰	褐色	口縁部横撫で。体部外面磨削り。	
第275図10 P.L.—273	土師器 杯	+4 片欠	黒・白色鉱物少 赤色粒散	酸化焰	明赤褐色	口縁部緩く外反。器表摩滅。	
第275図11 P.L.—273	土師器 杯	床面、+10 片	白色鉱物微	酸化焰	橙	断面薄元焰。器表摩滅。	
第275図12 P.L.—273	土師器 杯	+27 片	白色鉱物	酸化焰	鈍い橙 内面橙	口縁部外反。口縁部外縁。平面楕円形に至む。器表摩滅。	
第275図13 P.L.—273	土師器 杯	床面へ+17 完形	黒・白色鉱物 赤色粒少	酸化焰	鈍い橙	口縁部内傾。体部内面から口縁部外面横撫で。口縁部横撫で撫で上げ痕1カ所。底部内面放射状筋文。	
第275図14 P.L.—273	土師器 壺?	+3 一部欠	白色鉱物	酸化焰	橙	体部外面から口縁部内面横撫で。口縁部下沈縁走る。	
第275図15 P.L.—273	土師器 壺	+16 片	白色鉱物多	酸化焰	鈍い赤褐色	内面磨撫で。外面磨削り。	
第275図16 P.L.—273	土師器 壺	床面 片	黒・白色鉱物少	酸化焰	鈍い橙 内面灰	器表摩滅。口縁部緩く外反。	
第275図17 P.L.—273	土師器 壺	楕形 片	黒・白色鉱物 赤色粒	酸化焰	鈍い赤褐色	口縁部外反。口縁部横撫で。内面横撫で。	
第275図18 P.L.—273	土師器 壺	床面、+7 底部	黒・白色鉱物	酸化焰	鈍い黄褐色	内面横撫で。外面磨削り。	

47号住居跡

押戻番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第277図1 P.L.—274	土師器 壺	壺壁材 一部欠	黒・白色鉱物	酸化焰	鈍い赤褐色	口縁部外反。口縁部横撫で。内面横撫で撫で上げ痕1カ所。	
第277図2 P.L.—274	土師器 壺	壺壁材 一部欠	黒・白色鉱物 赤色粒	酸化焰	鈍い橙	口縁部外反。内面磨撫で。底部外面部分的に横付着。	
第277図3 P.L.—274	罌子	埋土				鉄製品。片欠。	
第277図4 P.L.—274	不明鉄製品	埋土				両端欠損。1カ所円穴。	
第278図5 P.L.—274	土師器 杯	+19 片欠	黒・白色鉱物少	酸化焰	明赤褐色	内面虫食い状に剥離。体部内面から口縁部外面横撫で。	
第278図6 P.L.—274	土師器 杯	+6 片欠	白色鉱物	酸化焰	橙	体部内面から口縁部外面横撫で。底部外面型肌残る。	
第278図7 P.L.—274	土師器 杯	+23、楕形 一部欠	白色鉱物 金色鉱物	酸化焰	明赤褐色	体部内面磨撫で横撫で。体部内面から口縁部外面横撫で撫で上げ痕1カ所。	
第278図8 P.L.—274	土師器 杯	+3、15 片欠	黒・白色鉱物	酸化焰	橙	体部内面から口縁部外面横撫で。内面横撫で。体部と口縁部間所で撫で上げる。口縁部外面横撫で部分非常に少ない。	
第278図9 P.L.—274	土師器 杯	+5 片欠	黒・白色鉱物少	酸化焰	明赤褐色	口縁部僅かに内湾。体部内面から口縁部外面横撫で。	
第278図10 P.L.—274	土師器 杯	+3—18 一部欠	黒・白色鉱物少	酸化焰	橙	器表摩滅。口縁部下垂。底部外面黒斑。平面楕円形形に至む。	
第278図11 P.L.—274	土師器 杯	+13 完形	黒・白色鉱物少	酸化焰	明赤褐色～ 赤灰	断面薄元焰。器表摩滅。体部内面から口縁部外面横撫で。口縁1カ所片口状に至む。内面横撫で撫で上げ部分は内面の屈曲がない。	
第278図12 P.L.—274	土師器 杯	埋土 一部欠	黒・白色鉱物少	酸化焰	橙	体部内面から口縁部外面横撫で。口縁部外面体部との境に段差。外面体部上位型肌。	
第278図13 P.L.—274	土師器 杯	+14 完形	黒・白色鉱物	酸化焰	橙	体部内面から口縁部外面横撫で。内面横撫で撫で上げ痕1カ所。体部上位型肌。	
第278図14 P.L.—274	土師器 杯	+2、9、電 片	黒・白色鉱物	酸化焰	橙	器表摩滅。	
第278図15 P.L.—274	土師器 杯	床面 小片	黒・白色鉱物少	酸化焰	橙	体部内面から口縁部外面横撫で。体部から底部外面磨削り。	

47号住居跡

探函番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第278図16	土師器 杯	+9 Ⅹ	黒・白色鉱物少	酸化焰	明赤褐	口縁部外面段差。体部内面から口縁部外面横撫で。内面横撫で体部から口縁に1箇所撫で上げる。	
第278図17	土師器 杯	埋土 Ⅹ	黒・白色鉱物少	酸化焰	橙	口縁部部外反。器表摩滅。	
第278図18	土師器 杯	埋土 Ⅹ	黒・白色鉱物微	酸化焰	鈍い赤褐	口縁部外面段差。体部内面から口縁部外面横撫で。	
第278図19	土師器 壺	壺 Ⅹ	黒・白色鉱物	酸化焰	明赤褐	口縁部「コ」の字状に外反。口縁部器表剥離。内面塗撫で。	
第278図20 P L-274	凹石	+2.5	粗粒安山岩			敲打痕。	360 g
第278図21 P L-274	敲石	+6.5	粗粒安山岩			両側面敲打痕。	600 g

48号住居跡

探函番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第279図1 P L-275	土師器 杯	埋土 完形	黒・白色鉱物少	酸化焰	鈍い橙	体部内面から口縁部外面横撫で。	
第279図2 P L-274	刀子					基本貫残る。検区。	

49号住居跡

探函番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第282図1 P L-275	土師器 杯	埋土 一部欠	黒・白色鉱物少	酸化焰	橙	口縁部内傾。体部内面から口縁部外面横撫で。器表やや摩滅。	
第282図2	土師器 杯	埋土 Ⅹ	黒・白色鉱物	酸化焰	橙	口縁部小さく外反。体部内面から口縁部外面横撫で。	
第282図3 P L-275	土師器 壺	床面、+10 Ⅹ	黒・白色鉱物	酸化焰	鈍い褐	口縁部外反。口縁部横撫で。口縁部強い横撫で。内面塗撫で。	
第282図4 P L-275	土師器 壺	床面 底部欠	黒・白色鉱物	酸化焰	鈍い褐	口縁部外傾。口縁部横撫で。口縁部中位紐作り痕。内面塗撫で。	
第282図5 P L-275	土師器 壺	壺底 底面欠	白色鉱物	酸化焰	鈍い橙～ 鈍い赤褐	口縁部外反。口縁部横撫で。内外面同一箇所 で撫で上げる。	
第282図6 P L-275	土師器 壺	床面 赤色粒微	黒・白色鉱物	酸化焰	橙～ 鈍い橙	口縁部外反。口縁部横撫で。内面横撫で撫で 上げ痕1カ所。	
第282図7 P L-275	土師器 壺	床面 Ⅹ	黒・白色鉱物	酸化焰	鈍い橙	口縁部部外反。口縁部横撫で。	
第282図8 P L-275	土師器 壺	壺 体部欠	黒・白色鉱物 赤色粒	酸化焰	鈍い橙	口縁部外傾。端部外反。口縁部横撫で。内面 撫で上げ痕1カ所。内面塗撫で。	
第282図9 P L-275	土師器 壺	床面 一部欠	黒・白色鉱物少	酸化焰	鈍い橙	口縁部外傾。口縁部横撫で。口縁部中位紐作り 痕。体部以下内外面器表剥離。内面塗撫で。	
第282図10 P L-275	土師器 壺	壺天井材 底面一部欠	黒・白色鉱物	酸化焰	明赤褐	口縁部外反。口縁部横撫で。内面撫で上げ痕 1カ所。内面塗撫で。	
第282図11 P L-275	須恵器 壺	+9 Ⅹ	白色鉱物	還元焰 並貫	灰黄褐	断面酸化焰。楕圓形(右回転)。外面平行印 痕跡目。内面同心円当て具。口縁部部下沈線 1条。	
第282図12 P L-275	敲石	+14	滑粒安山岩			木口僅かに敲打痕。	700 g
第282図13 P L-275	砥石	床	粗粒安山岩			1/2欠損。上面僅かに磨れる。	250 g

遺物観察表

9号掘立柱建物

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第285図1	土師器 壺	P ₁ 片	黒・白色黏物 赤色粒微	酸化焰	橙	口縁部僅かに内湾。胴部内面から口縁部外面 横撫で。口縁部外面寛大なる。口縁部内面 厚減。	

12号掘立柱建物

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第286図1	土師器 杯	P ₁ 片	黒・白色黏物少	酸化焰	橙	口縁部外傾。器表厚減。	

14号掘立柱建物

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第288図1	土師器 杯	P ₁ 片欠	黒・白色黏物微 赤色粒微	酸化焰	鈍い橙	口縁部直立。外面口縁部下低い段差。器表片 黒色。	

18号掘立柱建物

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第290図1	土師器 杯	P ₁ 小片	黒・白色黏物少	酸化焰	赤褐	口縁部下位外反。体部内面から口縁部外面横 撫で。	

19号掘立柱建物

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第291図1	土師器 壺	P ₁ 小片	黒・白色黏物少	酸化焰	鈍い橙	口縁部外傾。口縁部横撫で。内面厚減で。	

2号竅穴

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第295図1	土師器 杯	小片	黒・白色黏物微	酸化焰	鈍い橙	口縁部僅かに内湾。体部内面から口縁部外面 横撫で。口縁部外面横撫でによる2段の段差。 口縁部内傾。体部内面から口縁部外面横撫で。 外面口縁部下厚肌。	
第295図2	土師器 杯	小片	黒・白色黏物少	酸化焰	橙	口縁部外反。器表厚減。	
第295図3	土師器 壺	小片	黒・白色黏物	酸化焰	鈍い橙	口縁部外傾。口縁部横撫で。口縁部外面粘土 付着。内面厚減で。	

1号特殊遺構

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第296図1 P L-276	土師器 鉢	片	黒・白色黏物少	酸化焰	鈍い橙	口縁部小さく内傾。体部内面から口縁部外面 横撫で。口縁部外面粘土接合部。	
第296図2 P L-276	土師器 杯	片	白色黏物微	酸化焰	橙	口縁部小さく外反。体部内面から口縁部外面 横撫で。外面口縁部下厚肌。	
第296図3 P L-276	土師器 杯	片	黒・白色黏物 赤色粒微	酸化焰	橙	口縁部外反。器表厚減。	
第296図4	土師器 杯	小片	黒・白色黏物少	酸化焰	鈍い黄橙	口縁部外傾。体部器壁薄い。体部内面から口 縁部外面横撫で。内面黒色。	
第296図5	土師器 壺	小片	黒・白色黏物	酸化焰	橙	口縁部外傾。口縁部厚微横撫で。	

4号特殊遺構

採回番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第298図1 P L-276	土師器 杯	一部欠	黒・白色鉱物少	酸化焰	鈍い橙	口縁部僅かに外反。体部内面から口縁部外面横撫で。外面口縁部下僅かに彫肌。	
第298図2 P L-276	土師器 杯	一部欠	白色鉱物 金色鉱物少	酸化焰	橙	口縁部小さく外反。体部内面から口縁部外面横撫で。外面器表摩滅。	
第298図3 P L-276	土師器 杯	一部欠	黒・白色鉱物少 金色鉱物微	酸化焰	鈍い橙	口縁部僅かに外反。体部内面から口縁部外面横撫で。内面横撫で撫で上げ痕1カ所。外面口縁部下彫肌。	

5号特殊遺構

採回番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第299図1 P L-276	土師器 甕	小片	黒・白色鉱物 赤色粒	酸化焰	橙	口縁部外傾。口縁部横撫で。肩部強い横撫で。内面器表摩滅。	
第299図2 P L-276	土師器 甕		黒・白色鉱物 赤色粒	酸化焰	鈍い橙	口縁部外傾。口縁部横撫で。肩部強い横撫で。外面器表摩滅。内面見撫で。	

1号群記

採回番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第302図1 P L-276	土師器 杯	片	白色鉱物	酸化焰	橙	口縁部僅かに外反。体部内面から口縁部外面横撫で。器表摩滅。	
第302図2 P L-276	土師器 杯	一部欠	黒・白色鉱物微 赤色粒微	酸化焰	鈍い橙	口縁部僅かに外傾。体部内面から口縁部外面横撫で。内面横撫で撫で上げ痕1カ所。底部外面型肌残る。	
第302図3 P L-276	土師器 杯	口縁一部欠	黒・白色鉱物微 赤色粒	酸化焰	橙	口縁部外反。内面器表摩滅。	
第302図4 P L-276	土師器 杯	片	黒・白色鉱物微 赤色粒微	酸化焰	鈍い赤褐	口縁部僅かに内傾。体部内面から口縁部外面横撫で。	
第302図5 P L-276	土師器 杯	口縁一部欠	黒・白色鉱物微	酸化焰	鈍い赤褐	口縁部外反。体部内面から口縁部外面横撫で。内面器表摩滅。	
第302図6 P L-276	土師器 杯	片欠	黒・白色鉱物少 赤色粒多	酸化焰	橙	口縁部外傾。断面図は近ん部分を図。内面摩滅。	
第302図7 P L-276	土師器 杯	片	黒・白色鉱物	酸化焰	橙	口縁部外反。体部内面から口縁部外面横撫で。器表摩滅。	
第302図8 P L-276	土師器 杯	口縁片 底部片	黒・白色鉱物少	酸化焰	褐灰	口縁部僅かに内傾。体部内面から口縁部外面横撫で。口縁部内面洗い沈線。	
第302図9 P L-276	土師器 鉢	片欠	黒・白色鉱物微	酸化焰	鈍い橙	口縁部内傾。体部内面から口縁部外面横撫で。	
第302図10	土師器 杯	片	黒・白色鉱物少	酸化焰	橙	口縁部僅かに外反。体部内面から口縁部外面横撫で。器表摩滅。	
第302図11	土師器 杯	片	白色鉱物微 赤色粒	酸化焰	橙	口縁部外傾。器表摩滅。	
第302図12 P L-276	土師器 杯	片	黒・白色鉱物微 赤色粒微	酸化焰	橙	外面口縁部下低い段。体部内面から口縁部外面横撫で。器表摩滅。底部外面黒斑。	
第302図13 P L-276	土師器 杯	口縁一部 底部片	黒・白色鉱物少	酸化焰	明褐	口縁部内傾。体部外面磨りなく型肌。内面器表摩滅。	
第302図14 P L-276	土師器 杯	片	白色鉱物	酸化焰	橙	器表摩滅。体部内面から口縁部外面横撫で。底部外面磨りなく型肌明瞭。	
第302図15 P L-276	土師器 杯	片	黒・白色鉱物少 赤色粒少	酸化焰	橙	口縁部僅かに内傾。体部内面から口縁部外面横撫で。口縁部～体部外面型肌。	
第302図16	土師器 杯	小片	黒・白色鉱物少 金色鉱物少量	酸化焰	鈍い橙	口縁部外反。体部内面から口縁部外面横撫で。内面横撫で撫で上げ痕1カ所。	
第302図17 P L-276	土師器 杯	片	黒・白色鉱物少	酸化焰	橙	口縁部外反。体部内面から口縁部外面横撫で。底部外面型肌残る。	
第302図18 P L-276	土師器 杯	小片	黒・白色鉱物少	酸化焰	鈍い黄橙	口縁部内傾後端部外反。体部内面から口縁部外面横撫で。断面黒灰色。	

遺物観察表

1号窯記

調査番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第302図19 P L-276	土師器 鉢	小片	黒・白色紅物少	酸化焰	鈍い赤褐色	口縁部ほぼ直立。体部内面から口縁部外面横撫で。	
第302図20 P L-276	土師器 高杯	口縁小片 筒部写	黒・白色紅物	酸化焰	浅黄褐色	口縁部下位～筒部外面磨削。口縁部、袖部横撫で。外面横撫で工具止め或複数。筒部内面粗作或刷磨、部分的に強い撫で。	
第302図21 P L-276	土師器 甕	写	黒・白色紅物少 赤色粒微	酸化焰	鈍い橙	口縁部直立。口縁部横撫で。口縁部～肩部外面赤褐色。底部外面黒塗。	
第302図22 P L-276	土師器 甕	写	黒・白色紅物少 赤色粒	酸化焰	鈍い橙	口縁部僅かに外反。口縁部横撫で。体部最大径は上位に位置。	
第302図23 P L-276	土師器 甕	口縁一部 体部写	黒・白色紅物少 赤色粒	酸化焰	橙	口縁部僅かに外反。体部歪む。体部外面赤褐色。底部外面黒塗。断面灰色。	
第302図24 P L-276	土師器 甕	写	黒・白色紅物	酸化焰	鈍い橙	口縁部歪む。鉢形を呈する？口縁部横撫で。内面磨撫で。	
第302図25 P L-276	土師器 甕	写	黒・白色紅物 石灰粒	酸化焰	暗灰黄	口縁部内縁後端部外反。口縁部横撫で。底部外面黒塗。	
第302図26	土師器 甕	写	黒・白色紅物少 赤色粒微	酸化焰	浅黄	外面器表摩滅。内面丁寧な撫で。底部外面木葉痕。	
第303図27	土師器 鉢or甕	小片	黒・白色紅物少 石灰粒目立つ	酸化焰	明赤褐色	口縁部大きく開く。内面丁寧な撫で。	
第303図28 P L-277	土師器 甕	写	黒・白色紅物 赤色粒微	酸化焰	灰白	口縁部外傾。口縁部外面上位粗作り肌。内面磨撫で。	
第303図29 P L-277	土師器 甕	写	黒・白色紅物 赤色粒微	酸化焰	橙	口縁部外反。体部外面粘土付着。	
第303図30 P L-277	須恵器 不詳	底部	白色紅物	還元焰 軟質	灰	底部回転糸切無調整。底部内面撫で。	
第303図31 P L-277	刀子					切先。	
第303図32 P L-277	不明鉄製品					両端欠損。	

2号窯記

調査番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第309図1	土師器 杯	小片	黒・白色紅物少	酸化焰	橙	口縁部外反。器表摩滅。体部内面から口縁部外面横撫で。	
第309図2 P L-277	土師器 杯	写欠	黒・白色紅物微	酸化焰	鈍い橙	口縁部小さく外反。体部内面から口縁部外面横撫で。器表やや摩滅。	
第309図3	土師器 杯	写	黒・白色紅物少 赤色粒微	酸化焰	橙	口縁部僅かに外反。口縁部外面横撫でによる2段の段差。体部内面から口縁部外面横撫で。	
第309図4 P L-277	土師器 杯	写	黒・白色紅物少	酸化焰	灰白	口縁部僅かに内湾後に外反。体部内面から口縁部外面横撫で。内面横撫で撫で上げ痕1カ所。	
第309図5 P L-277	土師器 杯	口縁一部欠	黒・白色紅物少	酸化焰	橙	口縁部直立。外面口縁部下横撫でにより段差。体部内面から口縁部外面横撫で。	
第309図6 P L-277	土師器 杯	写	黒・白色紅物少	酸化焰	橙	口縁部僅かに内傾。体部内面から口縁部外面横撫で。器表やや摩滅。	
第309図7 P L-277	土師器 杯	写	黒・白色紅物微 赤色粒微	酸化焰	鈍い赤褐色	口縁部内傾。体部内面から口縁部外面横撫で。底部外面型肌。	
第309図8	土師器 杯	写	黒・白色紅物少	酸化焰	橙	口縁部内傾。体部内面から口縁部外面横撫で。内面横撫で撫で上げ痕1カ所。	
第309図9 P L-277	土師器 杯	写	黒・白色紅物微 赤色粒微	酸化焰	橙	口縁部内傾。体部内面から口縁部外面横撫で。内面器表食い状に剥離。	
第309図10 P L-277	土師器 杯	写	黒・白色紅物少 赤色粒微	酸化焰	橙	口縁部内傾。体部内面から口縁部外面横撫で。内面器表摩滅。	
第309図11	土師器 杯	写	黒・白色紅物	酸化焰	橙	口縁部僅かに内傾。体部内面から口縁部外面横撫で。内面横撫で撫で上げ痕1カ所。	
第309図12 P L-277	土師器 杯	写欠	黒・白色紅物少	酸化焰	橙	底部半球形。体部内面から口縁部外面横撫で。	

2号祭記

押印番号 図版番号	類別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第3090213	土師器 杯	小片	黒・白色紅物少	酸化焰	橙	口縁部ほぼ直立。体部内面から口縁部外面横 断で。内面横断で撫で上げ痕1カ所。	
第3090214 P L-277	土師器 杯	口縁欠	黒・白色紅物微 赤色粒微	酸化焰	橙	口縁部内傾。体部内面から口縁部外面横断で。 内面器表厚減。	
第3090215 P L-277	土師器 杯	一部欠	黒・白色紅物	酸化焰	橙	口縁部僅かに内傾。体部内面から口縁部外面 横断で。内面横断で撫で上げ痕1カ所。	
第3090216 P L-277	土師器 杯	片	黒・白色紅物	酸化焰	橙	口縁部内傾。器表厚減。底部外面厚減。	
第3090217 P L-277	土師器 杯	欠	黒・白色紅物少	酸化焰	鈍い褐	口縁部やや内傾。体部内面から口縁部外面横 断で。	
第3090218	土師器 杯	片	黒・白色紅物少	酸化焰	橙	口縁部ほぼ直立。体部内面から口縁部外面横 断で。底部外面弧状に型肌。	
第3090219 P L-277	土師器 杯	完形	黒・白色紅物少	酸化焰	鈍い橙	口縁部小さく内傾。内面器表厚減。	
第3090220 P L-277	土師器 杯	片	黒・白色紅物少 赤色粒少	酸化焰	橙	口縁部内傾。体部内面から口縁部外面横断で。 口縁部下型肌。	
第3090221	土師器 杯	片	黒・白色紅物少 赤色粒少	酸化焰	橙	口縁部僅かに内傾。体部内面から口縁部外面 横断で。	
第3090222	土師器 杯	小片	白色紅物微	酸化焰	淡黄	口縁部僅かに内傾。器表厚減。	
第3090223 P L-277	土師器 杯	片	黒・白色紅物少 赤色粒少	酸化焰	鈍い褐	口縁部内傾。体部内面から口縁部外面横断で。 内面器表やや厚減。	
第3090224 P L-277	土師器 杯	欠	黒・白色紅物少 赤色粒少	酸化焰	鈍い褐	口縁部内傾。体部内面から口縁部外面横断で。 底部外面厚減。	
第3090225	土師器 杯	小片	黒・白色紅物微 赤色粒微	酸化焰	橙	口縁部外面厚く。体部薄。体部内面から口 縁部外面横断で。	
第3090226 P L-277	土師器 杯	片	黒・白色紅物少 赤色粒微	酸化焰	橙	体部内面から口縁部外面横断で。器表やや厚 減。口縁部下僅かに型肌残る。	
第3090227	土師器 杯	小片	黒・白色紅物 赤色粒	酸化焰	赤褐	口縁部内傾。体部内面から口縁部外面横断で。 内面器表土食い状に刺窟。	
第3090228 P L-277	土師器 杯	片	黒・白色紅物少	酸化焰	橙	口縁部僅かに内傾。体部内面から口縁部外面 横断で。口縁部下僅かに型肌残る。	
第3090229 P L-277	土師器 杯	片	黒・白色紅物微 赤色粒微	酸化焰	明赤褐	口縁部僅かに内傾。体部内面から口縁部外面 横断で。底部外面型肌残る。	
第3090230 P L-277	土師器 杯	片	黒・白色紅物少	酸化焰	鈍い褐	口縁部内傾。体部内面から口縁部外面横断で。 内面器表厚減。底部外面型肌残る。	
第3090231 P L-277	土師器 杯	片	白色紅物微	酸化焰	明褐	口縁部内傾。体部内面から口縁部外面横断で。 底部外面器表厚減。	
第3090232 P L-277	土師器 杯	片	白色紅物 チャート粒少	酸化焰	明赤褐	口縁部直立。内面滑文。	
第310233 P L-277	土師器 杯	口縁欠	黒・白色紅物少	酸化焰	橙	口縁部僅かに内傾。内面器表厚減。口縁部外 面粘土接合痕。	
第310234	土師器 杯	片	黒・白色紅物少 赤色粒微	酸化焰	橙	口縁部内傾。体部内面から口縁部外面横断で。 器表やや厚減。	
第310235 P L-277	土師器 杯	口縁欠	黒・白色紅物少	酸化焰	橙	口縁部内傾。体部内面から口縁部外面横断で。 底部外面型肌一部残る。	
第310236 P L-277	土師器 鉢	片?	黒・白色紅物少	酸化焰	橙	底部内面以外器表厚減。口縁部も明瞭では ない。底部内面丁寧な態で。	
第310237 P L-277	土師器 鉢	片	黒・白色紅物少	酸化焰	橙	口縁部内傾。体部内面から口縁部外面横断で。 器表やや厚減。外面口縁部下型肌。	
第310238 P L-278	土師器 鉢	片	黒・白色紅物少	酸化焰	橙	口縁部小さく内傾。体部内面から口縁部外面 横断で。外面口縁部下型肌残る。	
第310239 P L-278	土師器 鉢	欠	黒・白色紅物	酸化焰	鈍い橙	口縁部ほぼ直立。器表厚減。外面口縁部下型 肌。	
第310240 P L-278	土師器 鉢	片	黒・白色紅物微	酸化焰	橙	口縁部小さく内傾。器表厚減。体部内面から 口縁部外面横断で。底部内面やや平直。	
第310241 P L-278	土師器 鉢	欠	黒・白色紅物少	酸化焰	橙	口縁部内傾。体部内面から口縁部外面横断で。 外面口縁部下型肌残る。	

遺物観察表

2号窯記

検出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第310842 P L-278	土師器 高杯	筒部	黒・白色鉱物少 赤色粒微	酸化焰	鈍い黄橙	外面磨削り。内面絞り目。	
第310843 P L-278	土師器 壺	肩	黒・白色鉱物	酸化焰	明赤褐	口縁部直立。体部張る。器表やや厚減。	
第310844 P L-278	土師器 壺	肩欠	黒・白色鉱物少	酸化焰	鈍い橙	口縁部外傾。器表やや厚減。最大径体部下位。	
第310845 P L-278	土師器 壺	肩	黒・白色鉱物	酸化焰	橙	口縁部外反。体部張らない。体部外面彫肌僅かに残る。	
第310846	土師器 台付壺?	小片	黒・白色鉱物	酸化焰	橙	台裾部横断で。	
第310847 P L-278	土師器 壺	肩	黒・白色鉱物	酸化焰	黄褐	口縁部器壁厚い。器表厚減。口縁部歪む。	
第310848 P L-278	土師器 壺	肩	黒・白色鉱物 赤色粒	酸化焰	橙	口縁部外傾。口縁部強い横断で。器表厚減。	
第310849 P L-278	土師器 壺	小片	黒・白色鉱物多	酸化焰	橙	口縁部外傾。口縁部強い横断で。	
第310850 P L-278	土師器 壺	肩欠	黒・白色鉱物 赤色粒微	酸化焰	鈍い橙	口縁部外傾。器表厚減。内面磨削で。	
第310851	土師器 壺	小片	黒・白色鉱物	酸化焰	明赤褐	口縁部外傾。口縁部横断で。内面磨削で。	
第310852	土師器 壺	肩	黒・白色鉱物 石灰少	酸化焰	鈍い橙	口縁部外傾。口縁部横断で。内面磨削で。	
第310853 P L-278	土師器 壺	肩欠	黒・白色鉱物	酸化焰	鈍い黄橙	口縁部外反。口縁部外面粗作り痕。内面磨削で。	
第310854 P L-278	土師器 壺	肩	黒・白色鉱物 赤色粒	酸化焰	黄橙	口縁部外反。口縁部横断で。内面磨削で。	
第311855	土師器 壺	口縁欠 体部中位欠	黒・白色鉱物	酸化焰	橙	内面磨削で。外面磨削り。体部下位接合痕。	
第311856 P L-278	土師器 壺	肩欠	黒・白色鉱物多 赤色粒	酸化焰	橙	口縁部外反。口縁部強い横断で。口縁部歪む。内面磨削で。	
第311857 P L-278	土師器 壺	一部欠	黒・白色鉱物 赤色粒微	酸化焰	明赤褐	口縁部外反。器壁やや厚い。口縁部強い横断で。器表厚減。	
第311858 P L-278	土師器 壺	肩	黒・白色鉱物 赤色粒	酸化焰	明褐	口縁部外反。口縁部強い横断で。内面磨削で。	
第311859 P L-279	土師器 壺	肩	黒・白色鉱物	酸化焰	明赤褐	口縁部外反。器表厚減。頸部外面窪み当り痕。	
第311860 P L-279	土師器 壺	肩	白色鉱物 赤色粒	酸化焰	橙	口縁部外傾。口縁部横断で。内面磨削で裏で上げ直しを所。	
第311861 P L-279	土師器 壺	肩	黒・白色鉱物 赤色粒微	酸化焰	褐灰	口縁部「コ」の字状。口縁部強い横断で。	
第311862 P L-278	土師器 壺	肩	黒・白色鉱物 赤色粒	酸化焰	明赤褐	口縁部外反。口縁部上横断で。口縁部器表厚減。内面磨削で。	
第311863 P L-279	土師器 壺	肩欠	黒・白色鉱物	酸化焰	橙	口縁部外反。体部内面磨削で。	
第311864 P L-279	土師器 壺	小片	黒・白色鉱物 石灰粒	酸化焰	鈍い黄橙	口縁部外傾。口縁部外面中位接合痕。内面磨削で。	
第311865 P L-278	土師器 壺	肩	黒・白色鉱物 赤色粒微	酸化焰	橙	口縁部外反。口縁部横断で。内面斜め無で。	
第312866 P L-279	須恵器 蓋	肩欠	白色鉱物 灰色粒	還元焰 軟質	灰白	銀欠損。天井部外面回転彫り後推で。	
第312867 P L-279	須恵器 短頸壺	肩欠	白色鉱物	還元焰 軟質	灰黄褐	輪縁整形。器表やや厚減。	
第312868 P L-279	須恵器 壺	底部	白色鉱物	還元焰 軟質	灰	底部外面静止糸切り。内面器表刻離。	
第312869 P L-279	須恵器 杯	底部	白色鉱物微	還元焰 軟質	灰	輪縁整形。底部外面回転彫り。	
第312870 P L-279	須恵器 壺	肩	白色鉱物少	還元焰 並質	褐灰	口縁部強い沈れ。外面叩後推で。内面同心円当て具。	

2号祭記

拝啓番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第312図71	須恵器 壺	瓦	白色鉱物少	還元焰 並質	灰	外面格子状凹。内面同心円当て瓦。	
第312図72 P.L.-279	不明鉄製品					完形?	

3号祭記

拝啓番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第314図1 P.L.-279	土師器 杯	口縁一部 底部瓦	黒・白色鉱物 赤色粒微	酸化焰	鈍い橙	口縁部下位外反。体部内面から口縁部外面横 撫で。底部内面直撫で。	
第314図2 P.L.-279	土師器 杯	瓦欠	黒・白色鉱物微 金色鉱物	酸化焰	鈍い橙	口縁部外反。体部内面から口縁部外面横撫で。 内面横撫で撫で上げ痕1カ所。底部外面足肌 痕残る。	
第314図3 P.L.-279	土師器 杯	完形	白色鉱物微 金色鉱物多	酸化焰	鈍い橙	口縁部ほぼ直立。体部内面から口縁部外面横 撫で。内面横撫で撫で上げ痕1カ所。	
第314図4 P.L.-279	土師器 杯	完形	白色鉱物微 金色鉱物多	酸化焰	橙	口縁部直立。体部内面から口縁部外面横撫で。 内面器表摩滅。外面口縁部下直削。	
第314図5 P.L.-279	土師器 杯	口縁瓦欠	黒・白色鉱物微	酸化焰	鈍い橙	口縁部内傾。体部内面から口縁部外面横撫で。 内面器表摩滅。	
第314図6 P.L.-279	土師器 杯	口縁一部 体部欠	白色鉱物微	酸化焰	鈍い橙	口縁部外傾。口縁部歪む。体部内面から口縁 部外面横撫で。底部外面弧状に磨り残る。	
第314図7 P.L.-279	土師器 杯	瓦	黒・白色鉱物微	酸化焰	鈍い橙	口縁部僅かに内傾。体部内面から口縁部外面 横撫で。底部外面黒面点。	
第314図8 P.L.-279	土師器 杯	瓦	黒・白色鉱物 石灰粒	酸化焰	明赤褐	口縁部やや外傾。体部内面から口縁部外面横 撫で。外面口縁部下黒面。	
第314図9 P.L.-279	土師器 杯	瓦	黒・白色鉱物少	酸化焰	橙	口縁部外反。口縁部外面横撫でにより2段の 段差。体部内面から口縁部外面横撫で。	
第314図10 P.L.-279	土師器 杯	瓦	黒・白色鉱物少	酸化焰	橙	口縁部小さく外反。体部内面から口縁部外面 横撫で。	
第314図11 P.L.-279	土師器 杯	瓦	黒・白色鉱物少	酸化焰	明褐	口縁部歪む。体部内面から口縁部外面横撫で。 底部外面磨り残る。	
第314図12 P.L.-279	土師器 杯	小片	黒・白色鉱物微	酸化焰	明赤褐	器表摩滅。	
第314図13 P.L.-279	土師器 壺	底部	黒・白色鉱物少 石灰粒	酸化焰	赤褐	底部内面撫で。底部外面粗い撫で。	

1号古墳周壕

拝啓番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第319図1 P.L.-280	須恵器 脚付長頸瓶	瓦〜瓦	白色鉱物少	還元焰 硬質	灰	口縁部内傾。短部沈線1条。口縁部中位。下 端外面3条の沈線。体部外面は2、3状の沈 線彫刻点刺突。脚部は三角と方形の2段透かし。 1段目の透かしは3方。2段目は3方か?	
第319図2 P.L.-280	須恵器 高杯	瓦欠	黒・白色鉱物 灰色粒	還元焰 軟質	淡黄	透かしは1段3方。底部内面粗作り痕残る。	
第319図3 P.L.-280	須恵器 高杯	筒部瓦 横部一部	白色鉱物多	還元焰 並質	灰	縦線彫形(右回転)。透かしなし。外面中位突 帯両側に沈線。筒部内面撫で。	
第319図4 P.L.-280	須恵器 無蓋高杯	小片	白色鉱物少	還元焰 軟質	褐灰	縦線彫形(右回転)。底部僅かに脚部接合痕残 る。	
第319図5 P.L.-280	須恵器 杯蓋	瓦欠	白色鉱物多	還元焰 軟質	褐灰	天井部右回転磨削り。	
第319図6 P.L.-280	須恵器 杯	小片	白色鉱物少	還元焰 並質	灰	指示したより口縁部は立ち、底部も丸底気味 となるであろう。底部外面手持ち磨削り。	
第319図7 P.L.-280	須恵器 杯	口縁瓦欠	黒・白色鉱物	還元焰 軟質	灰	口縁部は短く内傾。外面は受部直下まで磨削 り。	

遺物観察表

1号古墳周堀

発掘番号 図版番号	類別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第319図8 P L-280	須恵器 杯	小片	白色黏物少 灰色粒	還元焰 軟質	灰	体部と底部は接合せず同上還元。口縁端部僅かに外反。貼り付け高台。	
第319図9 P L-280	須恵器 台付壺	片	白色黏物微	還元焰 軟質	灰	台接合部カキヤブリ。	
第319図10 P L-280	須恵器 鉢	片	白色黏物	還元焰 軟質	灰	口縁部内傾。外面口縁部下沈線1条。外面体部下端、底部置削り。埋存部内面に使用痕なし。	
第319図11 P L-280	須恵器 短冊壺	片	黒・白色黏物	還元焰 軟質	灰白～オリーブ黒	口縁部外面沈線2条。体部最大径以下螺旋状カキ目。	
第319図12	須恵器 提瓶?	片	白色黏物微 灰色粒微	還元焰	灰白	頸部整形(右回転)。体部横部分的に置削り。体部横張り付け部分で欠損。	
第319図13 P L-280	須恵器 壺	片～片	白色黏物微	還元焰 硬質	緑灰	肩部外面自然軸。体部下端、底部外面右回転置削り。白色塵吹き出す。	
第320図14 P L-281	土師器 高杯	片	白色黏物微	酸化焰	橙	外面置削り。杯部内面丁寧な撫で。脚部内面置削り。	
第320図15 P L-280	土師器 杯	片 口縁一部	黒・白色黏物少	酸化焰	浅黄橙 内面黒	口縁部下位外反。体部内面から口縁部外面横撫で。底部外面部表摩滅。内面黒色。黒色部分は断面新玉まで及ぶ。	
第320図16 P L-281	土師器 杯	片	黒・白色黏物微	酸化焰	黒褐	口縁端部内傾。体部内面から口縁部外面横撫で。外面磨表のみ黒灰色。	
第320図17	土師器 杯	小片	黒・白色黏物微 石英粒少	酸化焰	鈍い黄橙	口縁部外反。外面口縁部下段差。内面横撫で撫で上げ傷1カ所。断面黒灰色。	
第320図18 P L-281	土師器 杯	片	黒・白色黏物少	酸化焰	橙	口縁部外傾。口縁部横撫で。口縁部外面横撫でにより投差。	
第320図19 P L-281	土師器 杯	底部欠 口縁一部	黒・白色黏物少	酸化焰	黒褐	口縁部下位外反。体部内面から口縁部外面横撫で。	
第320図20 P L-280	土師器 杯	片	黒・白色黏物少	酸化焰	浅黄橙	口縁部外傾。口縁内面下位器厚増す。体部内面から口縁部外面横撫で。	
第320図21	土師器 杯	小片	黒・白色黏物微	酸化焰	鈍い黄橙	口縁部外傾。口縁部横撫で。体部内面置撫で底。外面置撫で状の置削り。	
第320図22 P L-280	土師器 杯	片	黒・白色黏物微 赤色粒微	酸化焰	橙	口縁部外反。器表摩滅。	
第320図23 P L-280	土師器 杯	片欠	黒・白色黏物微	酸化焰	橙	口縁部下位外反。器表摩滅。底部外面型肌状に残る。	
第320図24 P L-281	土師器 杯	片	黒・白色黏物少 赤色大粒	酸化焰	鈍い赤褐	口縁部下位外反。体部内面から口縁部外面横撫で。外面口縁部下端沈線状に2条くぼむ。	
第320図25 P L-281	土師器 杯	片	黒・白色黏物少 金色黏物	酸化焰	橙	口縁部外反。体部内面から口縁部外面横撫で。内面器表虫食い状に剥離。	
第320図26 P L-280	土師器 杯	片	黒・白色黏物 赤色粒	酸化焰	浅黄橙	体部器壁薄いが口縁部は厚い。器表摩滅。	
第320図27 P L-280	土師器 杯	片	黒・白色黏物少	酸化焰	鈍い橙	口縁部僅かに外反。体部内面から口縁部外面横撫で。器表やや摩滅。	
第320図28 P L-281	土師器 杯	底部完 口縁一部	黒・白色黏物少	酸化焰	明灰黄	口縁部外反。口縁部横撫で。口縁部と体部の境不明瞭。底部内面置撫で痕。	
第320図29	土師器 杯	片	黒・白色黏物微	酸化焰	橙	口縁部短い。器表摩滅。	
第320図30	土師器 杯	小片	黒・白色黏物少	酸化焰	鈍い褐	口縁部短く内湾。器表虫食い状に剥離。	
第320図31 P L-281	土師器 杯	片	黒・白色黏物	酸化焰	灰黄橙	口縁部内湾。器表摩滅。底部断面黒灰色。	
第320図32 P L-280	土師器 鉢	片欠	黒・白色黏物少 赤色粒微	酸化焰	橙	口縁部短く内湾。体部内面から口縁部外面横撫で。外面口縁部下型肌。	
第320図33 P L-280	土師器 鉢	片	黒・白色黏物少	酸化焰	鈍い橙	口縁部外反。体部内面から口縁部外面横撫で。器表やや摩滅。外面口縁部下型肌。	
第320図34 P L-281	土師器 壺	片	黒・白色黏物微 赤色粒微	酸化焰	明褐	口縁部外傾。器表摩滅。	

1号古墳周堀

探出番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第320図33 P.L.-280	土師器 甕	瓦欠	黒・白色鉱物少	酸化焰	灰黄	口縁部「コ」の字状。胴部内面から口縁部外面横撫で。外面横撫で2段に行うため、外面中央に段差。外面下段横撫で工具止め痕等間隔にあり、簾状文に似る。瓦文外面2、3条の沈線。	
第320図36 P.L.-280	土師器 甕	瓦	黒・白色鉱物	酸化焰	鈍い橙	口縁部外反。口縁部横撫で。外面粗い荒磨き。体部内面縦文磨撫で。	
第320図37 P.L.-280	土師器 甕	瓦	黒・白色鉱物	酸化焰	鈍い橙	口縁部外反。口縁部横撫で。端部のみ強い。内面粗い磨撫で。	
第320図38 P.L.-281	土師器 甕	瓦	黒・白色鉱物少 石英粒目立つ	酸化焰	鈍い黄橙	口縁部外反。口縁部横撫で。外面横撫で工具止め痕1カ所。内面横撫で撫で上げ痕1カ所。	
第320図39 P.L.-281	土師器 甕	瓦欠	黒・白色鉱物少	酸化焰	鈍い橙	口縁部外反。口縁部内面横撫で後横撫で。内面丁寧な磨で。体部外面黒面。	
第320図40 P.L.-281	白玉		滑石			完形。	
第320図41 P.L.-281	土鉢		黒・白色鉱物	酸化焰	鈍い橙	瓦欠損。	4.89g
第320図42 P.L.-281	土鉢		黒・白色鉱物	酸化焰	橙	瓦欠損。	5.33g
第321図43 P.L.-281	埴輪 円筒	小片	白色鉱物 赤色粒多	酸化焰		断面灰色。口縁部横撫で。端部くぼむ。外面器表刺刺。外面粗い縦刷毛。内面無。	
第321図44 P.L.-281	埴輪 円筒	小片	白色鉱物 赤色粒微	酸化焰		口縁部横撫で。くぼむ。内面斜め刷毛。外面縦刷毛。外面荒磨。	
第321図45 P.L.-281	埴輪 円筒	小片	白色鉱物 灰色粒	還元焰		タガ低い。外面縦刷毛。内面斜め刷毛。	
第321図46 P.L.-281	埴輪 円筒	小片	白色鉱物 赤色粒多	酸化焰		タガ低い。外面縦刷毛。内面斜め刷毛後撫で。	
第321図47 P.L.-281	埴輪 円筒	小片	白色鉱物 赤色粒多	酸化焰		断面灰色。外面縦刷毛後タガ撫で付け。	
第321図48 P.L.-282	磁石		粗粒安山岩			上面敲打痕。	330g
第321図49 P.L.-282	石彫状製品		粗粒安山岩			両面くぼむ。片目が著しい。	520g
第321図50 P.L.-282	不明石製品		粗粒安山岩			写物によると思われるキズあり。	650g
第321図51 P.L.-282	圓磁石		粗粒安山岩			上面磨れる。	1,260g
第322図1 P.L.-282	金環	石室擾乱部				銅地金金貼り。木口に金の絞り目。写程金割がれる。完形。	
第322図2 P.L.-282	鉄製耳環	石室擾乱部				地金のみ遺存か？ 完形。	
第322図3 P.L.-282	土製丸玉	石室擾乱部	白色鉱物微		黒	表面磨き光沢有す。	
第322図4 P.L.-282	土製丸玉	石室擾乱部	白色鉱物微		黒	表面磨き光沢有す。	
第322図5 P.L.-282	土製丸玉	石室擾乱部	白色鉱物微		黒	表面磨き光沢有す。	
第322図6 P.L.-282	土製丸玉	石室擾乱部	白色鉱物微		黒	表面磨き光沢有す。	
第322図7 P.L.-282	土製丸玉	石室擾乱部	白色鉱物微		黒	表面磨き光沢有す。	
第322図8 P.L.-282	勾玉	石室擾乱部	玉髓			完形。	
第322図9 P.L.-282	鉄鏃	石室擾乱部				両端欠損。	
第322図10 P.L.-282	鉄鏃	石室擾乱部				先端部尖損。基に本質。	
第322図11 P.L.-282	鉄鏃	石室擾乱部				基欠損。	

遺物観察表

1 古墳石室掘乱部分

押印番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第32図12 P L—282	鉄鏃					墓欠損。	
第32図13 P L—282	目抜目釘					木質遺存。	
第32図14 P L—282	目抜目釘					木質遺存。	
第32図15 P L—282	はばき					半分欠損。内面に木質残る。	
第32図16 P L—282	鞘口					端部欠損。内面に木質残る。	
第32図17 P L—282	鉄刀					中央部で折れ、身と着柄部に木質遺存。	
第32図18 P L—283	埴輪 人物	小片	黒・白色鉱物 赤色粒多	酸化焙		衣服の裾部分破片。太刀、鞘を付ける正装男子。墓物は割断。彩色なし。	
第32図19 P L—283	埴輪 馬	耳	白色鉱物 赤色粒多	酸化焙		端部欠損。基部は接合部から割断。外面刷毛。	
第32図20 P L—283	埴輪 馬	鞍 小片	黒・白色鉱物少 赤色粒	酸化焙		あおり部分。表面には粘土帯を貼り、刷毛目残る。	
第32図21 P L—283	埴輪 馬	槽	黒・白色鉱物少 赤色粒	酸化焙		素環の破板部分。	
第32図22 P L—283	埴輪 形象	小片	白色鉱物 赤色粒	酸化焙		衣裏共に粗い刷毛。	
第32図23 P L—283	埴輪 鞍	小片	黒・白色鉱物少 赤色粒	酸化焙		矢を表した部分は殆ど割断。	
第32図24 P L—283	埴輪 形象	小片	白色鉱物少 赤色粒	酸化焙		表面刷毛。低い粘土帯貼り付け。	
第32図25 P L—283	埴輪 形象	小片	白色鉱物 赤色粒多	酸化焙		表面タガ状の突帯2条。内面無で。	
第32図26 P L—283	埴輪 形象	小片	白色鉱物微 赤色粒多	酸化焙		低い突帯貼り付け。蓋による割断1条。粘土紐割断痕跡1条。	
第32図27 P L—283	埴輪 形象	小片	黒・白色鉱物 赤色粒	酸化焙		表面低い突帯と粘土紐貼り付け。表面粗い刷毛。	
第32図28 P L—284	埴輪 円筒	小片	黒・白色鉱物 赤色粒	酸化焙		外面刷毛。透かし一部残存。	
第32図29 P L—284	埴輪 円筒	小片	白色鉱物 赤色粒	酸化焙		外面刷毛。内面斜め撫で。	
第32図30 P L—283	埴輪 円筒	耳	黒・白色鉱物 赤色粒	酸化焙		外面刷毛。内面斜め撫で。	
第32図31 P L—283	埴輪 円筒	小片	黒・白色鉱物 赤色粒	酸化焙		外面刷毛。内面斜め撫で。	
第32図32 P L—284	土師器 埴	小片	黒・白色鉱物 赤色粒	酸化焙	鈍い褐色	口縁部僅かに内溝。口縁部内みぞ。器底厚減。	
第32図33 P L—284	土師器 壺	耳欠	黒・白色鉱物	酸化焙	浅黄	外面尻周りを撫で、体部外面黒灰。	
第32図34 P L—284	土師器 壺	口縁耳欠 体部一部	黒・白色鉱物	酸化焙	鈍い黄褐色	体部外面～口縁部内面刷毛。口縁部のみ横撫で。体部外面一部見磨き。内面撫で。	
第32図35 P L—284	土師器 甔	耳欠	黒・白色鉱物	酸化焙	鈍い黄褐色	口縁部内面に折り返す。底部外面見磨き。体部外面～内面刷毛。口縁部横撫で。	
第32図36 P L—284	土師器 甔	耳	黒・白色鉱物 赤色粒微	酸化焙	鈍い褐色	口縁部横撫で。体部外面尻周りを刷毛。内面撫で。	
第32図37 P L—284	土師器 杯	耳	白色鉱物少	酸化焙	浅黄褐色	口縁部外面横撫でにより2段の段差。体部内面から口縁部外面横撫で。	
第32図38 P L—284	土師器 杯	口縁耳欠	白色鉱物微	酸化焙	浅黄	口縁部外反。体部内面から口縁部外面横撫で。底部外面放射状接合痕？	
第32図39 P L—284	軟質陶器 茶釜形	小片	白色鉱物微	還元焰 並貫	灰黒	口縁部やや外傾。体部に受口状の火よけ。火よけ下に断面三角形の突帯。突帯下に厚付着。火よけ下は黒変。	在地製品

1 古墳石室攪乱部分

探函番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第325図40 P L-284	陶器 細し皿	底部	4mm程の濃微	酸化焰 並質		内面黒し目。内面目縁5カ所。体部外面灰釉。瀬戸美濃系右回転糸切無調整。	
第325図41	軟質陶器 不詳	片	白色軟物	還元焰 軟質	灰黒	内面無で。体部外面薄磨き。底部砂状か。	在地製品
第325図42	陶器 皿	片	やや緻密。	還元焰 並質		底部外面薄磨。露胎部分褐色。灰色の灰釉。慶長、元和頃の唐津は器内では希少例。	唐津系
第325図43 P L-284	銭貨					洪武通寶	
第325図44 P L-284	銭貨					祥符通寶	
第325図45 P L-284	石臼		粗粒安山岩			粉砕白の上白片。	280 g
第325図46 P L-284	石塔		濃緑質質凝灰岩				
第325図47 P L-284	空風輪		濃緑質質凝灰岩				1,200 g
第325図48 P L-284	火輪		濃緑質質凝灰岩				10,000 g

5 区49号土坑

探函番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第327図1 P L-284	土師器 杯	埋土	黒・白色軟物少	酸化焰	橙	口縁部内湾。体部内面から口縁部外面横撫で。口縁部下煎肌。	
第327図2 P L-284	土師器 杯	埋土	黒・白色軟物	酸化焰	橙	口縁部僅かに内湾。体部内面から口縁部外面横撫で。露胎準直。	
第327図3 P L-284	土師器 杯	埋土 一部欠	黒・白色軟物少	酸化焰	明赤褐	口縁部直立。体部内面から口縁部外面横撫で。内面横撫で無で上げ痕1カ所。	

5 区60号土坑

探函番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第328図1 P L-285	置紙石		粗粒安山岩			側面の隙れが著しい。	1,500 g
第328図2 P L-284	須恵器 壺	埋土 小片	黒・白色軟物 灰色粒	還元焰 軟質	灰	有段口縁。口縁部外面下位波状文。	
第328図3 P L-285	巖石		砂岩			木口と上面に敲打痕。	
第329図4 P L-284	須恵器 壺	口縁一部 体部欠	白色軟物少	還元焰 硬質	暗オリーブ 灰	口縁部短く、端部を下に折り返す。外面平行状印後横位磨目。外面自然釉流れる。底部外面焼き台塔着部分歪む。	
第330図5 P L-285	須恵器 壺	埋土	白色軟物少	還元焰 並質	灰	口縁端部内湾。口縁部外面沈線2条。口縁部外面波状文2カ所。	5区1区 水田と接合
第330図6 P L-285	須恵器 壺	埋土	白色軟物多	還元焰 軟質	灰	口縁端部受口状。口縁端部、中位外面2条の沈線で突等を表現。外面印後磨目。底部内面無で。	5区1区 水田と接合
第331図7 P L-285	須恵器 壺	埋土	白色軟物少	還元焰 並質	灰	口縁端部受口状。口縁部外面沈線2条。外面中位沈線下に低い突部。波状文2条。	
第331図8 P L-285	須恵器 壺	埋土	白色軟物	還元焰 並質	オリーブ 黒	底部外面印後横で後磨目。内面同心円当て具。底部内面無で。	
第332図9 P L-285	須恵器 壺	埋土 欠	白色軟物	還元焰 並質	灰	口縁端部受口状。端部外面沈線2条。頸部外面波状文後1条の沈線。	
第332図10 P L-285	須恵器 壺	埋土 欠	白色軟物	還元焰 並質	灰	口縁端部、中位外面2条の沈線で突等表現。5区1区水田と接合 頸部外面印後横で後磨目。内面同心円当て具。	5区1区 水田と接合
第332図11 P L-285	須恵器 壺	埋土 底部	白色軟物	還元焰 並質	灰	外面印後磨部無で。内面同心円当て具。	

遺物観察表

5区66号土坑

採回番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第333回1 P.L.-285	須恵器 杯	口縁欠	白色灰物 灰色粒	還元焰 軟質	灰白	楕圓盤形(右回転)。回転糸切後高台張り付け。	

5区85号溝

採回番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第339回1 P.L.-285	土師器 杯	埋土 口縁一部欠	黒・白色灰物少	酸化焰	鈍い黄橙	口縁部外傾。体部内面から口縁部外面横撫で。 口縁部外面横撫でによる段差。底部外面黒斑。	
第339回2	土師器 壺	埋土 片	白色灰物微	酸化焰	浅黄橙	口縁部部外反。口縁部部、下位強い横撫で。 器表厚減。	
第339回3 P.L.-285	土師器 壺	埋土 一部欠	黒・白色灰物 赤色粒微	酸化焰	鈍い赤褐	口縁部横撫で。内面横撫で撫で上げ痕1カ所。 体部外面やや粗い磨き。内面丁寧な磨きで。	
第339回4 P.L.-285	土師 土師	埋土	黒・白色灰物少	酸化焰	鈍い黄橙	底部欠損。	12.17 g
第339回5 P.L.-285	土師	埋土	黒・白色灰物	酸化焰	橙	1/2欠損。	6.8 g
第339回6 P.L.-285	土師	埋土	黒・白色灰物少	酸化焰	橙	1/2欠損。	7.48 g
第339回7 P.L.-285	土師	埋土	黒・白色灰物少	酸化焰	橙	小片。	1.03 g
第339回8 P.L.-285	土師	埋土	黒・白色灰物少	酸化焰	鈍い黄橙	完形。	17.27 g
第339回9 P.L.-285	土師	埋土	黒・白色灰物	酸化焰	橙	底部欠損。	17.61 g
第339回10 P.L.-285	土師	埋土	黒・白色灰物少	酸化焰	橙	完形。	16.11 g
第339回11 P.L.-285	土師	埋土	黒・白色灰物少	酸化焰	橙	完形。	14.60 g
第339回12 P.L.-285	土師	埋土	黒・白色灰物少	酸化焰	浅黄橙	完形。	11.37 g
第339回13 P.L.-285	土師	埋土	黒・白色灰物少	酸化焰	鈍い橙	完形。	11.70 g
第339回14 P.L.-285	土師	埋土	黒・白色灰物少	酸化焰	橙	完形。	12.77 g
第339回15 P.L.-285	土師	埋土	黒・白色灰物少	酸化焰	橙	完形。	14.99 g

4区遺物確認面

採回番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第348回1	土師器 杯	口縁一部 底部欠	黒・白色灰物少 赤色粒微	酸化焰	暗褐	口縁部内傾。体部内面から口縁部外面横撫で。 底部半球形に近い。	
第348回2	土師器 杯	小片	黒・白色灰物少	酸化焰	明赤褐	口縁部僅かに外反。体部内面から口縁部外面 横撫で。底部内面横撫で痕。	
第348回3	土師器 杯	小片	黒・白色灰物少	酸化焰	浅黄	口縁部外反。体部内面から口縁部外面横撫で。	
第348回4 P.L.-285	須恵器 杯	欠	白色灰物微	還元焰 軟質	鈍い黄	口縁部内傾。底部外面回転糸削り。楕圓盤形 (右回転)。	
第348回5 P.L.-285	鉄製耳環	完形				地金か?	
第348回6 P.L.-285	磁石		粗粒安山岩			4面使用。	130 g
第348回7 P.L.-285	磁石		粗粒石				380 g

2 区旧河道

採掘番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第35区1 P L-286	土師器 壺	小片	黒・白色紅物少	酸化焰	鈍い黄橙	外面状底状の刷毛。内面縦撫で。口縁端波状文。	
第35区2 P L-286	土師器 壺	小片	黒・白色紅物 赤色粒	酸化焰	褐	口縁部内面から肩部外面横撫で。内面荒削り。	

1 区旧河道

採掘番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第35区1 P L-286	土師器 壺	片～片	黒・白色紅物少	酸化焰	赤褐	二重口縁。口縁部器表虫食い状に刺摩。口縁部哨文状の残磨き。体部内面撫で。体部外面下位置削り。	
第35区2 P L-286	土師器 壺	一部欠	黒・白色紅物少 赤色粒微	酸化焰	橙	口縁端部外反。口縁部横撫で。端部強い横撫で。体部外面撫で。底部荒削り。頸部内面荒撫で後撫で。	
第35区3 P L-286	土師器 杯	一部欠	黒・白色紅物少 赤色粒	酸化焰	橙	口縁部内傾。器表摩滅。	
第35区4 P L-286	土師器 壺	片欠	白色紅物 赤色粒	酸化焰	鈍い黄橙	口縁部外反。口縁部横撫で。内面明瞭な荒撫で。後部分的に撫で。口縁部やや摩滅。	

3 区旧河道流木付近

採掘番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第35区1 P L-286	土師器 器台?	片	黒・白色紅物微 緻密	酸化焰	明赤褐	断面灰白色。器表丁寧な磨き。	
第35区2 P L-286	土師器 鉢	口縁片欠	黒・白色紅物 石灰粒少	酸化焰	鈍い黄橙	口縁部横撫で。内外面工具による撫で。	

3 区 H 水田耕作土下

採掘番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第360区1 P L-286	弥生 壺	小片	黒・白色紅物 赤色粒微	酸化焰	明赤褐	肩部外面波状文。後頸部外面右回り磨文状。外面刷毛。内面撫で。	
第360区2 P L-286	弥生 壺	口縁一部 体部片欠	黒・白色紅物 赤色粒微	酸化焰	鈍い赤褐	口縁部～肩部波状文。内面撫で。外面器表摩滅。	

3 区 H 水田

採掘番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第365区1 P L-286	土師器 壺	一部欠	黒・白色紅物	酸化焰	鈍い橙	口縁部直線的。肩部外面横刷毛。底部内面刷毛。	
第365区2 P L-286	土師器 壺	片	黒・白色紅物	酸化焰	鈍い黄橙	外面底部付近荒削り。内面器表摩滅。	
第365区3	土師器 台付壺	片欠	黒・白色紅物 赤色粒微	酸化焰	鈍い黄橙	外面刷毛後台部のみ撫で。台端部折り返す。底部内面摩滅。	
第365区4 P L-286	磨製石鏃		珪質礫片岩			荒破もしくは返刺欠損。	2.4g

3 区 H 水田

採掘番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第368区1 P L-287	土師器 杯	一部欠	白色紅物微	酸化焰	明赤褐	口縁部高く直立。口縁端部小さくくぼむ。底部外面荒削り丁寧。	

遺物観察表

3区4号水田(18号溝)

採回番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第377図1 P L-287	土師器 杯	口縁写欠	黒・白色鉱物微 赤色粒微	酸化焙	浅黄	断面黒灰色。口縁部外面中位部厚増す。体部内面から口縁部外面横撫で。口縁部外面褐色の火摩状痕。	
第377図2 P L-287	土師器 杯	写	黒・白色鉱物微 赤色粒微	酸化焙	鈍い黄橙	口縁部外面器厚増す。体部内面から口縁部外面横撫で。口縁部外面下位幅7mmの木口状工具止め痕6カ所。	
第377図3 P L-287	土師器 鉢	完形	黒・白色鉱物少 赤色粒微	酸化焙	鈍い橙	体部内面から口縁部外面横撫で。内面横撫で撫で上げ痕1カ所。口縁部外面粘土接合痕。	
第377図4 P L-287	土師器 甕	完形	黒・白色鉱物 赤色粒微	酸化焙	鈍い橙	口縁部外反。口縁部横撫で。内面横撫で。	
第377図5 P L-287	土師器 甕	一部欠	黒・白色鉱物	酸化焙	鈍い橙	口縁端部内面くぼむ。口縁端部強い横撫で。口縁部外反。底部外面木葉痕。	

3区4号水田

採回番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第377図6 P L-287	土師器 甕	19号溝 底部	黒・白色鉱物多	酸化焙	鈍い黄橙	内面横撫で。底部内面横撫で後撫で。	
第377図7 P L-287	土師器 鉢	19号溝 小片	白色鉱物微 緻密	酸化焙	明黄褐色	口縁部外反。体部内面から口縁部外面横撫で。	
第377図8 P L-287	須恵器 杯	水田面 口縁写 底部写欠	白色鉱物	還元焙 辻貫	灰褐色	内面は酸化焙。底部丸底。底部と体部境不明瞭。底部左回転寛削り。轆轤形(左回転)。口縁端部外反。口縁部外面2条の沈線。	

3区2号水田

採回番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第382図1	須恵器 杯	水田面 写欠	白色鉱物	還元焙 軟質	灰オリーブ	外面右回転寛削り。	
第382図2	土師器 甕	28号溝	黒・白色鉱物少	酸化焙	灰白	口縁部外反。口縁部横撫で。内面横撫で撫で上げ痕1カ所。体部内面最高3.7cm幅の寛撫で。	

5区2号水田耕作土下

採回番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第385図1 P L-287	土師器 杯	写	黒・白色鉱物微	酸化焙	明赤褐色	口縁部外反。口縁部外面横撫でにより突出。口縁部横撫で。	
第385図2 P L-287	土師器 杯	写	白色鉱物微	酸化焙	橙	口縁部外反。口縁部外面横撫でにより突出。体部内面から口縁部外面横撫で。	
第385図3 P L-287	土師器 杯	写	黒・白色鉱物少	酸化焙	橙	口縁部外反。体部内面から口縁部外面横撫で。	
第385図4 P L-287	土師器 杯	写	黒・白色鉱物微	酸化焙	明褐色	口縁部短く直立。体部内面から口縁部外面横撫で。	
第385図5 P L-287	土師器 杯	写	黒・白色鉱物少 赤色粒	酸化焙	橙	口縁部僅かに内傾。体部内面から口縁部外面横撫で。	
第385図6 P L-287	土師 杯	端部少欠	黒・白色鉱物	酸化焙	橙		9.25 g
第385図7 P L-287	土師 杯	完形	白色鉱物微	酸化焙	橙		12.96 g
第385図8 P L-287	土師 杯	1/2欠	黒・白色鉱物少	酸化焙	鈍い橙		6.02 g

3区1H水田耕作土下

神岡番号 図版番号	類別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第388図1 P.L-287	土師器 杯	片	黒・白色紅物少	酸化焰	鈍い橙	口縁部外反。器表摩滅。	
第388図2 P.L-287	土師器 杯	片欠	黒・白色紅物少	酸化焰	鈍い赤褐色	口縁部部分的に僅かに外反。体部内面から口縁部外面横撫で。外面口縁部下段削りなく彫肌。	

2・3区1H水田

神岡番号 図版番号	類別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第401図1 P.L-287	土師器 杯	片	黒・白色紅物少	酸化焰	橙	口縁部僅かに内湾。体部内面から口縁部外面横撫で。口縁部内面横撫で撫で上げ痕1カ所。見かけの土器回転左（殆どは右）。	
第401図2 P.L-287	土師器 杯	片欠	黒・白色紅物微	酸化焰	橙	口縁部小さく内湾。器表摩滅。	
第401図3 P.L-287	土師器 杯	片	黒・白色紅物少	酸化焰	褐	口縁部外傾。体部外面押印状。底部外面削り有り。	

2・3区1H水田

神岡番号 図版番号	類別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第401図4	須恵器 杯	底部	白色紅物	還元焰 並質	灰	轆轤整形（右回転）。底部右回転糸切無調整。	
第402図5 P.L-288	土師器 杯	一部欠	黒・白色紅物少	酸化焰	鈍い橙	口縁部僅かに内湾。体部内面から口縁部外面横撫で。底部平底気味。	
第402図6 P.L-288	土師器 杯	一部欠	黒・白色紅物微	酸化焰	鈍い赤褐色	口縁部外反。底部内面から口縁部外面横撫で。平底。体部外面削りなく彫肌。	

4区132号溝

神岡番号 図版番号	類別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第405図1 P.L-288	土師器 鉢	片	黒・白色紅物少	酸化焰	鈍い橙	口縁部小さく内湾。体部内面から口縁部外面横撫で。	
第405図2 P.L-288	須恵器 壺	体部以下	黒・白色紅物	酸化焰	灰	黒色紅物吹き出す。体部外面回転彫削り。台部分重む。	

5区1H水田

神岡番号 図版番号	類別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第412図1	須恵器 蓋	小片	白色紅物少	還元焰 並質	灰	轆轤整形（右回転）。天井部回転削り。返り小さい。	
第412図2	須恵器 蓋	小片	黒・白色紅物少	還元焰 軟質	灰	器高低い。天井部回転削り有り。	
第412図3 P.L-288	須恵器 杯	口縁一部 底部片	白色紅物少	還元焰 並質	灰	轆轤整形。口縁部外反。低い張り付け高台。断面酸化焰。	
第412図4 P.L-288	須恵器 杯	片	白色紅物	還元焰 並質	褐灰	轆轤整形。口縁部緩く外反。底部外面右回転削り有り。やや高い角高台。断面酸化焰。	
第412図5	須恵器 杯	片	白色紅物。靱石 灰色粒多	還元焰 軟質	灰	轆轤整形（右回転）。底部回転糸切り。	
第412図6 P.L-288	須恵器 杯	片	白色紅物。靱石 灰色粒多	還元焰 軟質	褐灰	轆轤整形（右回転）。底部回転糸切り。	
第412図7 P.L-288	須恵器 高杯	片	白色紅物	還元焰 並質	灰	方形3方達し。裾部外面底による2・3条の沈線。	
第412図8 P.L-288	須恵器 壺	片	黒・白色紅物少	還元焰 硬質	灰	轆轤整形。肩部外面4点1単位の列点刺突。	

遺物観察表

5区1H水田

押戻番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第412図9 P.L.-288	須恵器 壺	Ⅰ	白色灰物	還元焰 並貫	鈍い赤褐	口縁端部沈線1条。口縁部外面波状文。肩部 外面クシによるカキ目。内面同心円当て具痕。	
第412図10 P.L.-288	須恵器 壺	口縁一部 Ⅰ	黒・白色灰物少	還元焰	灰	輪縁整形。上部自然釉降下。肩部外面カキ目 軸により不明瞭。底部外面印目。	
第412図11 P.L.-288	土師	1/3欠	黒・白色灰物少	酸化焰	抜い黄		10.50g
第412図12 P.L.-288	土師	2/3欠	黒・白色灰物少	酸化焰	橙		3.15g
第412図13 P.L.-288	土師	端部少欠	黒・白色灰物少	酸化焰	鈍い赤褐		13.74g
第412図14 P.L.-288	土師	端部少欠	黒・白色灰物	酸化焰	橙		14.17g
第412図15 P.L.-288	初踏草	一部欠	紙灰石				36.9g

5区As-B層直下出土腰刀

押戻番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第421図1 P.L.-288	腰刀	墓穴				目釘穴1カ所残存。樋と形柄あり。短落。刀 区と横区あり。	11世紀代 区と横区あり。

5区遺構外

押戻番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第422図1	埴輪 柄	小片	白色灰物	酸化焰		外面刷毛。沈線による彫像文あり。	
第422図2	埴輪 柄	小片	白色灰物 赤色粒	酸化焰		外面刷毛。縦位の指痕で数条あり。	
第422図3	埴輪 太刀	小片	白色灰物 赤色粒	酸化焰		勾玉に付く三輪玉の表現が認められる。	
第422図4	埴輪 人物	小片	白色灰物 赤色粒	酸化焰		器表面。粘土紐2本張り付け。胴の一部。	
第422図5	埴輪 円筒	小片	黒・白色灰物 赤色粒	酸化焰		外面刷毛。タガ幅広い。タガに正直1カ所。	
第422図6	埴輪 不詳	小片	白色灰物 赤色粒	酸化焰		外面刷毛。内面斜の刷毛。焼成前穿穴2カ 所。	
第422図7	土師	Ⅱ欠	黒・白色灰物少	酸化焰	鈍い橙		4.22g
第422図8	土師	片形	黒・白色灰物少	酸化焰	橙		13.26g
第422図9	須恵器 蓋	一部	白色灰物微 灰色粒	還元焰 硬質	灰	輪縁整形(右回転)。天井部右回転量削り。返 り短い。	

3区6号溝

押戻番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第427図1 P.L.-302	埴輪陶器 不詳	口縁欠	灰白色で緻密	中性焰 軟質		小さい碗型を呈するが、内面のみ箱輪。外面 輪縁目顯著。底部右回転余切無蓋部。	
第427図2 P.L.-302	青磁 皿	小片	灰白色で緻密	還元焰 硬質		底部内面クシ目。内外面光沢のある青磁輪。	同安曇系
第427図3 P.L.-302	染付磁器 飯碗	Ⅱ欠	白色	磁化		銅版転写で外面5枚目。底部内面三友、口縁 部内面埋埋文。	瀬戸美濃 大正
第427図4 P.L.-302	青磁 香炉	Ⅰ	白色	磁化		口縁部内面から外面青磁輪	肥前?
第427図5	青磁?	Ⅰ	青灰色	磁化		肥前の陶胎染付に似た輪。貫入。底部内面輪 擦り取る。高台端部内無釉。輪縁左回転。	中国? 時期不詳
第427図6	焼締陶器 壺	小片	灰白色	還元焰 並貫		受け口状口縁。	常滑系 13C前半
第427図7 P.L.-302	陶器 蓋鉢	Ⅰ	白色灰物少質	酸化焰 軟質		内面磨目。箱輪。外面のみ拭い取る。	瀬戸美濃

3区6号溝

探出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第427図8 P.L.-302	焼締陶器 摺鉢	小片	白色灰物微 緻密	硬質		内面不規則な摺目。体部外面輪轆目。	製作地不詳 中世
第427図9 P.L.-302	磁器 戸車	片	黒色粒少	磁化 硬質		輪部、周辺施釉。施釉部分磨る。	製作地不詳 19C以降
第427図10 P.L.-302	石製品 硯					1面は周縁を削る。他面は端から3cmに直線を削み、「六」と刻む。	
第427図11 P.L.-302	燻瓦 転用品	?	黒・白色灰物少	還元焰		器表磨き。周縁磨って形を整える。真空土庫機を使用。	昭和
第427図12 P.L.-302	十能瓦	片	黒・白色灰物少	還元焰 並質		凸面砂鉢。凹面丁寧な磨で、周縁無で。	小泉? 大正

3区8、9、10号溝

探出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第428図1	陶器染付 瀝	小片	灰色	並質		貫入。白土掛け。模蘭山水文。	肥前 18C前半
第428図2	陶器染付 瀝	底部	灰色	並質		貫入。白土掛け。模蘭山水文?。	肥前 18C前半
第428図3	陶器 菊皿	片	灰白色 やや緻密	還元焰 硬質		内面彫押しによる菊花。灰釉。口縁部刷線輪流し。内面目尻1カ所。高台端部内無軸。	美濃 17C
第428図4 P.L.-302	キセル櫃首					刷製。	

4区111～113号溝

探出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第433図1 P.L.-303	不明石製品	粗粒安山岩				2カ所くぼむ。くぼみに敲打痕。	28,600g
第433図2 P.L.-302	五輪塔 水輪	完形	流紋岩質凝灰岩			上部くぼむ。	13,450g
第433図3 P.L.-302	五輪塔 火輪	一部欠	粗粒安山岩				7,500g
第433図4	染付磁器 瀝	小片	白色。	磁化 硬質		類反碗。	瀬戸美濃 19C前半
第433図5	染付磁器 瀝	片	灰白色	磁化 硬質		外面濃い呉須で装文。	肥前? 19C前半
第433図6	染付磁器 瀝	小片	灰白色	磁化 硬質		コンニャク版による模文。	肥前 18C前半
第433図7	陶器 拳骨茶碗	片	灰白色	還元焰 並質		鉄軸。体部中に長石混す。	瀬戸美濃 18C中
第433図8	陶器 瀝	小片	やや緻密	並質		内外面白土。外面刷毛により波状文。	唐津 18C
第433図9	陶器 瀝	底部	やや緻密	軟質		胎輪。外面高台盤以下無軸。	瀬戸美濃 18C中
第434図10 P.L.-302	陶器 灯明皿	片	白色灰物	焼成不良 軟質		胎輪?外面口縁部下無軸。底部外面基部高底に瀬戸美濃磨る。灯芯支え部分欠損。	瀬戸美濃 18C中
第434図11	青磁 皿?	片	青灰色	磁化 焼成不良		蛇の目凹部高台。青磁輪。	製作地不詳
第434図12 P.L.-301	陶器 摺鉢	小片	白色灰物	酸化焰 並質		片口部小片。外面口縁部下回転削り。器表泥壁磨る。18C後半～19C前半。	堺・明石系
第434図13 P.L.-301	陶器 摺鉢	小片	緻。やや粗い	酸化焰 並質		内面摺目。外面回転削り。器表磨鉢。	瀬戸美濃 江戸
第434図14 P.L.-301	軟質陶器 摺鉢	小片	白色灰物	還元焰 硬質		内面から口縁部外面換磨で。体部外面磨で。体部内面下位使用により摩滅。軟質陶器としては焼き締まる。	在地製品? 中世

遺物観察表

4区111～113号溝

碑記番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第434図15	焼締陶器 壺	小片	白色紅胎物多 赤色粒少	還元焰 並貫		外面平行叩。外面自然釉。12C後半～13C前半。	麗美
第434図16 P L—302	軟質陶器 内耳筒	片	白色胎物 赤色粒微	酸化焰 並貫		口縁部内面下段部。断面鈍角。耳細い。	在地製品 16C
第434図17	軟質陶器 胎筒?	小片	黒・白色胎物	酸化焰 軟貫		口縁部破片でやや外傾く。	在地製品 江戸?
第434図18	須恵器 壺	小片	白色胎物	還元焰 並貫	灰白	口縁部外反。口縁部外面3段の小判形列点刺突。	

5区44～46号溝

碑記番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第437図1 P L—302	埴輪 家形	44号溝 小片	黒・白色胎物少 赤色粒少	酸化焰		かつお木。棟接合部分から割離。	
第437図2 P L—302	埴輪 円筒	小片	白色胎物 赤色粒微	酸化焰		外面縦筋。内面撫で。	
第437図3	染付磁器 貫形碗	44号溝 片～片	白色	磁化		底部内面種な五弁花唐く。高台胎縁線1条。18C後半～19C初頭。	肥前
第437図4 P L—302	陶器 皿	46号溝 片	白色胎物多	硬貫		口縁部灰釉。底部内面鉄絵。底部内面灰釉?薄い。体部外面以下回転旋削り。	美濃 17C
第437図5 P L—302	磁石		磁石			端部欠損。	50g
第437図6 P L—302	磁石状石製品		粗粒安山岩			敲打痕くぼむ。	1,000g

5区42・43号溝

碑記番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第439図1	青磁 碗	43号溝 小片	灰白色	磁化		外面片形りによる鎮座弁文。	龍泉窯系 13C
第439図2	青磁 碗	43号溝 小片	灰白色	やや焼成 不良		外面片形りによる鎮座弁文。	龍泉窯系 13C
第439図3	青磁 碗	43号溝 片	青灰色	磁化		底部器壁厚い。高台内から端部無軸。	龍泉窯系 13～14C

5区42・43号溝

碑記番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第439図4	土師質土器 片	43号溝 片	黒・白色胎物少 赤色粒微	酸化焰		底部外面砂痕?	在地製品 中世
第439図5	土師質土器 皿	43号溝 小片	黒・白色胎物 赤色粒微	酸化焰		底部外面回転糸切り無調整。	在地製品 中世
第439図6 P L—302	土師質土器 皿	43号溝 口縁片	黒・白色胎物 赤色粒微	酸化焰		体部外反。底部左回転糸切り無調整。底部内面撫で。	在地製品 中世
第439図7	軟質陶器 手箱?	43号溝 小片	黒・白色胎物少	中性焰		断面黒灰色。内面黒塗。底部外面砂痕。	在地製品 江戸
第439図8 P L—302	軟質陶器 罐鉢	43号溝 小片	白色胎物	還元焰 軟貫		口縁部受口状。口縁部平坦。肥厚部分縁線。	在地製品 中世
第439図9	軟質陶器 罐鉢	43号溝 小片	白色胎物少	還元焰 軟貫		口縁部受口状。口縁部、外面は8に比して丸味を帯びる。	在地製品 中世
第439図10	軟質陶器 火鉢	43号溝 小片	黒・白色胎物	酸化焰 軟貫		口縁部肥厚。端部内面内湾。焼成前の小穴。	在地製品 中世
第439図11 P L—302	軟質陶器 罐鉢	43号溝 小片	白色胎物 灰色粒少	還元焰 軟貫		口縁部丸味を帯びてやや内湾。内面から口縁部外面回転縁線撫で。	在地製品 中世

5区42・43号溝

探出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第439812	軟質陶器 鏝鉢	43号溝 小片	白色鉱物少	還元焰 軟質		口縁内部に折れる。内面から口縁部外面 回転横撫で。	在地製品 中世
第439813	軟質陶器 鏝鉢	43号溝 小片	白色鉱物少 金色鉱物	酸化焰 軟質		口縁部内面内側に折れる。器表厚減。	在地製品 中世
第439814 P.L.-302	軟質陶器 鏝鉢	43号溝 小片	白色鉱物	還元焰 並質		口縁部外面を持ち厚。内面から口縁部 外面回転横撫で。	在地製品 中世
第439815	焼締陶器 鏝鉢?	43号溝 小片	白色鉱物多 並質	還元焰		外面強で。内面回転横撫で。	地方窯 中世
第439816	焼締陶器 鏝鉢	43号溝 小片	白色鉱物 白色針状物微	還元焰 軟質		砂底。内面回転横撫で。内面下位使用により 厚減。面目なし。	在地製品 中世
第439817	軟質陶器 内耳鍋	43号溝 小片	白色鉱物 赤色粒微	酸化焰 並質		口縁部下小片。内面小さい段差。外面付着。	在地製品 中世
第439818 P.L.-302	軟質陶器 内耳鍋	43号溝 小片	黒・白色鉱物少 金色鉱物多	還元焰 軟質		器壁薄。口縁部外反。器表やや厚減。耳部 欠損。	在地製品 中世
第439819	軟質陶器 内耳鍋	43号溝 小片	黒・白色鉱物少 金色鉱物多	還元焰 軟質		口縁部やや内湾。器表やや厚減。	在地製品 中世
第440820	陶器 菊皿	43号溝 片	粗い	軟質		全面長石粒。内面型押し、外面丸ノミで花卉 表す。	瀬戸美濃 16C後半
第440821 P.L.-303	陶器 輪売皿	43号溝 片	白色鉱物	硬質		口縁部外反。高台脇以下無輪。底部内面輪状 に反転盛り取る。	瀬戸美濃 17C後半
第440822	陶器 皿	43号溝 片	白色鉱物少	軟質 焼成不良		口縁内面のみの反転?底部内面鉄絵。体部外面 回転直削り。	美濃 17C
第440823 P.L.-303	陶器 皿	42号溝 片～欠	白色鉱物	硬質		反輪。口縁部外反。高台脇以下無輪。削り出 し高台。口縁部歪む。	美濃 17C
第440824	陶器 灯明受皿	43号溝 片	緻密 灰白色	硬質		受壁厚。胴輪。外面口縁部以下輪状削り取る。	瀬戸美濃 19C?
第440825	陶器 天目茶碗	43号溝 片	灰白色	軟質		外面腰部以下無輪。輪軸。	瀬戸美濃 16C後半
第440826 P.L.-303	陶器 天目茶碗	43号溝 片～欠	やや緻密	並質		器高やや低い。外面腰以下無輪。鉄軸部分的 に掛からない。	瀬戸美濃 16C後半
第440827	陶器 天目茶碗	43号溝 片	緻密	硬質		光沢のある鉄軸。腰部外面無輪。	瀬戸美濃 17C
第440828	陶器 天目茶碗	43号溝 底部	やや粗い。	並質		光沢のない鉄軸。外面腰以下鉄化粧。高台内 削り込む。高台端部厚減。	瀬戸美濃 16C後半
第440829 P.L.-303	陶器 鏝鉢	43号溝 片	やや緻密	並質		口縁部内面に折り返す。胴輪。外面底部付 近輪状削り取る。	瀬戸美濃 18C
第440830 P.L.-303	陶器 鏝鉢	42・43号溝	白色鉱物	並質		外面口縁部下回転横撫で。無輪。 18C後半～19C前半。	堺、明石
第440831 P.L.-303	陶器 鏝鉢	43号溝 片	緻密	並質		口縁部外反し、端部「N」字状。体部外面回 転直削り。胴輪。外面底部輪状削り取る。	瀬戸美濃 17C後半
第440832 P.L.-303	陶器 鏝鉢	43号溝 小片	黒・白色鉱物	硬質		外面体部下端回転横撫で。下位押注瓦。上位 回転横撫で。底部外面砂底。体部下位目録2 カ所。	丹羽? 江 ²

5区42・43号溝

探出番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第440833 P.L.-303	軟質陶器 焙烙	42・43号溝 小片	黒・白色鉱物 赤色粒	酸化焰 軟質		体部外面下半から底部型肌。体部外面中位接 合痕。底部内面撫で。内面体部と底部境目の 接合痕。体部外面のみ煤付着。	在地製品 江 ²
第440834 P.L.-303	軟質陶器 焙烙	43号溝 片	黒・白色鉱物	中性焰 軟質		体部外面下半から底部型肌。体部外面中位接 合痕。底部内面撫で。体部外面のみ煤付着。	在地製品 江 ²
第440835 P.L.-303	軟質陶器 焙烙	43号溝 片	黒・白色鉱物	中性焰 軟質		体部外面下半から底部型肌。体部外面中位接 合痕。底部内面撫で。体部外面のみ煤付着。	在地製品 江 ²
第441836 P.L.-304	陶器 鍋	43号溝 片欠	緻密	硬質		型作り。2カ所に低い取っ手。底部外面同芯 内の凹凸。光沢のある黒色軸。体部下位以下 無輪。体部外面下に「紋955」の模刻番号。	美濃 戦時中

遺物販売表

5区42・43号溝

押戻番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第441837	陶器 罎	43号溝 片	緻密	硬質		口縁部僅かに内凹。灰釉。高台盤以下無釉。瀬戸表漬 倍染の可能性もある。	瀬戸表漬 19C
第441838	染付磁器 丸罎	43号溝 片	緻密 淡い灰白色	磁化		軸白濁。須臾黒灰色に着色。高台端部欠損。 18C後半～19C初頭。	地方窯 肥前
第441839	染付磁器 罎	43号溝 片	灰白色	磁化		雪輪梅樹文。17C末～18C中。	
第441840	陶器 罎	43号溝 天井部	灰色 緻密	硬質		鉾端部と周辺、内面に目後疵(砂)付着。鉾 内一部無釉。	地方窯 19C
第441841 P L-304	須恵器 短頸壺	43、46号溝 片	白色磁物	還元焰 並質	灰白	体部器壁厚く、口縁部薄い。	
第441842	須恵器 罎	42号溝 小片	黒・白色磁物少	還元焰 並質	灰	糠糠整形。外面赤帯上2条を沈線により表現。 下1条は低い突帯を沈線により強調。	
第441843 P L-304	須恵器 鉢	43号溝 片	白色磁物多	還元焰 硬質	灰	口縁端部沈線。外面赤線。底部焼成前に割離。 内面使用痕なし。	
第441844 P L-304	須恵器 鉢	43号溝 片	黒・白色磁物少	還元焰 並質	灰	底部外面施で後復削り。底部内面使用により やや平舌。	
第441845 P L-304	灰吹陶器 筒or瓶	43号溝 片	黒色粒少	還元焰 並質	灰白	内面全面施釉。低い角高台。底部外面目撃1 カ所。黒帯14号並式。	衆投資
第441846 P L-304	須恵器 壺類	43号溝 小片	白色磁物少	還元焰 並質	灰白	外面焼成前の寛骨き。周辺の灰は1本。鉾端 状部分は2本1単位。	
第441847 P L-304	須恵器 壺	43号溝 片	黒・白色磁物少	還元焰 並質	灰白	口縁部外面断面3角の突帯。肩部外面叩目。 内面同心芯円当て具。	
第441848	須恵器 壺	43号溝 片	白色磁物	還元焰 並質	オリーブ 灰黒	口縁部外面断面3角の突帯。肩部外面叩目。 内面同心芯円当て具。	
第442849 P L-304	埴輪 人物	43号溝 腹下半	黒・白色磁物 赤色粒	酸化焰 並質		左目下、右目内側残存。下顎・鼻先端一部欠 損。	
第442850 P L-304	埴輪 形象	43号溝 鉢	黒・白色磁物少 赤色粒	酸化焰 並質		団子状の胎土に窪で切り込みを入れる。接合 部文から割離。尻に行くのであろう。	
第442851 P L-304	埴輪 太刀	43号溝 把面	黒・白色磁物 赤色粒	酸化焰 軟質		表面刷毛目。中央に円孔あり。	
第442852 P L-304	埴輪 瓶	43号溝 小片	黒・白色磁物 赤色粒	酸化焰 軟質		頸の緒部分。表面周縁に沿って沈線。内面刷 毛後一部施で。	
第442853 P L-304	埴輪 瓶	43号溝 小片	黒・白色磁物 赤色粒	酸化焰 並質		頸の緒部分。表面周縁に沿って沈線。内面刷 毛後一部施で。	
第442854 P L-304	埴輪 瓶	43号溝 小片	白色磁物 赤色粒	酸化焰 並質		頸の背板左下部。接合部分から割離。	
第442855 P L-304	埴輪 瓶	43号溝 小片	白色磁物 赤色粒	酸化焰 並質		頸の背板右下部破片。接合部分から割離。	
第442856 P L-304	埴輪 形象	43号溝 小片	黒・白色磁物 赤色粒	酸化焰 軟質		機材埴輪の胴部、あるいは太刀の胴部か？	
第442857 P L-304	埴輪 形象	43号溝 小片	黒・白色磁物少 赤色粒	酸化焰 軟質		横断面は円形で側面文が施される。人物か器 の一部。	
第443858 P L-305	埴輪 馬	43号溝 小片	黒・白色磁物少	酸化焰 軟質		内外型刷毛目。残存部に円孔1カ所。腹部で あろう。	
第443859 P L-305	埴輪 形象	43号溝 小片	白色磁物 赤色粒微	酸化焰 軟質		外面刷毛。内面無で。ヒレ状の突帯が付く。	
第443860 P L-305	埴輪 円筒	43号溝 小片	黒・白色磁物少 赤色粒微	酸化焰 並質		外面刷毛目。内面刷毛。口縁部横線で。外 面窠記号。	

5区42号・43号溝

押戻番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第443861 P L-305	埴輪 円筒?	43、44号溝 小片	黒・白色磁物少 赤色粒微	酸化焰 軟質		口縁部外反。外面刷毛目後刷毛。	
第443862 P L-305	埴輪 円筒	43号溝 小片	黒・白色磁物少 赤色粒	酸化焰 並質		口縁端部横線で。外面刷毛目。下部にタガ張 り付け時施で。	

5区42・43号溝

探検番号 図版番号	類別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第443853 P.L.-305	埴輪 円筒	43号溝 小片	黒・白色鉱物 赤色粒	酸化焰 軟質		外面刷毛。外面寛記号。	
第443854 P.L.-305	埴輪 円筒	43号溝 小片	黒・白色鉱物少 赤色粒	酸化焰 並質		外面寛記号。	
第443855 P.L.-305	埴輪 円筒	43号溝 小片	黒・白色鉱物少 赤色粒	酸化焰 軟質		口縁端部浅くくぼむ。外面寛記号。	
第443856 P.L.-305	埴輪 円筒	43号溝 小片	黒・白色鉱物少 赤色粒微	酸化焰 軟質		器壁薄い。	
第444867 P.L.-306	埴輪 円筒	43号溝 小片	黒・白色鉱物少 赤色粒	酸化焰 並質		外面刷毛。内面斜め刷毛後撫で。	
第444868 P.L.-306	埴輪 円筒	43号溝 片	黒・白色鉱物 赤色粒	酸化焰 軟質		外面刷毛。内面撫で。基部外面刷毛後撫で。	
第444869 P.L.-306	埴輪 円筒	43号溝 片	黒・白色鉱物少 赤色粒	酸化焰 軟質		外面刷毛。内面斜め撫で。	
第444870 P.L.-305	埴輪 円筒	43号溝 小片	黒・白色鉱物 赤色粒	酸化焰 軟質		外面刷毛。内面撫で。	
第444871 P.L.-306	埴輪 円筒	43号溝 片	白色鉱物 赤色粒微	酸化焰 軟質		外面刷毛。内面撫で。	
第444872 P.L.-306	埴輪 円筒	43溝、石室 基部	黒・白色鉱物少 赤色粒	酸化焰 軟質		外面刷毛。内面撫で。	
第444873 P.L.-305	埴輪 円筒	43号溝 小片	黒・白色鉱物少 赤色粒多	酸化焰 軟質		器表摩滅。	
第444874 P.L.-305	埴輪 円筒	43号溝 小片	白色鉱物少 赤色粒少	酸化焰 並質		外面刷毛後寛記号。	
第444875 P.L.-305	埴輪 円筒	42号溝 小片	黒・白色鉱物少 赤色粒少	酸化焰 軟質		外面刷毛。内面撫で。器表摩滅。	
第444876 P.L.-305	埴輪 円筒	43号溝 小片	黒・白色鉱物少 灰色粒少	還元焰 軟質		外面刷毛。内面撫で。須恵貫埴輪ではない。	
第444877 P.L.-305	埴輪 円筒	43号溝 小片	白色鉱物微 赤色粒多	酸化焰 軟質		外面刷毛。内面撫で。	
第445878 P.L.-306	瓦 平瓦	43号溝 小片	白色鉱物少	還元焰 並質	灰白	表面布目。周縁撫で。端部寛削り、端部2次 利用のためか平滑。裏面菱形印き。	8 C代
第445879 P.L.-306	瓦 平瓦	43号溝 小片	黒・白色鉱物微	還元焰 軟質	灰白	表面布目のみ赤切り状条線。裏面寛撫ででの 格子印き。	8 C代
第445880 P.L.-306	瓦 平瓦	43号溝 小片	黒・白色鉱物	酸化焰 軟質	灰	表面撫で。裏面赤切り痕残る。器表摩滅。	中世
第445881 P.L.-306	瓦 丸瓦	43号溝 片	黒・白色鉱物少 灰色粒	軟質	灰白	表面磨りかたど撫で消す。裏面布目。倒縁、 木口寛削り後撫で。	中世
第445882 P.L.-306	瓦 平瓦	43、46号溝 片	黒・白色鉱物少 灰色粒	還元焰 軟質	灰白	表面撫で。裏面赤切り痕多く残る。	中世
第446883 P.L.-307	砥石	43号溝 端部欠	砥沢石			1面使用。調整時の型が残る。	100 g
第446884 P.L.-306	砥石	43号溝 欠	砥沢石			2面使用。	170 g
第446885 P.L.-307	砥石	43号溝 欠	砥沢石			2面使用。	40 g
第446886 P.L.-306	砥石	43号溝 端部欠	砥沢石			3面使用。	77.4 g
第446887 P.L.-307	砥石	43号溝 完形	粗粒安山岩			断面三角形の刃物痕。	1,300 g
第446888 P.L.-306	円盤状石製 品	43号溝 完形	粗粒安山岩			表面と周縁は摺って整える。	190 g
第446889 P.L.-307	磨石状石製 品	43号溝 完形	粗粒安山岩			表面磨って整える。	550 g

遺物観察表

5区42号・43号溝

拝見番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第446図90 P L-307	四付石製品	43号溝 完形?	粗粒安山岩			粉挽下白の転用品。	2,600 g
第446図91 P L-307	石鉢	43号溝 小片	粗粒安山岩				490 g
第446図92 P L-307	石鉢	43号溝 小片	粗粒安山岩			内面丁寧な仕上げ。外面ハツリ仕上げ。小型で器壁薄い。	350 g
第447図93 P L-307	蔽石状石製品	43号溝 完形	粗粒安山岩			木口織打痕。	500 g
第447図94 P L-307	蔽石状石製品	43号溝 完形	粗粒安山岩			木口織打痕。	500 g
第447図95 P L-307	四石状石製品	43号溝 完形	粗粒安山岩			表面織打によりくぼむ。	900 g
第447図96 P L-307	不明石製品	43号溝 片	粗粒安山岩			表面織打によりくぼむ。	450 g
第447図97 P L-307	石仏	43号溝 頭部片	粗粒安山岩				8,000 g
第447図98 P L-307	円孔付球状製品	完形				貫通しない円穴。	87.4 g
第447図99 P L-307	羽口	43号溝 小片					
第447図100 P L-307	不明鉄製品	43号溝 破片					
第447図101 P L-307	不明鉄製品	43号溝 破片					
第447図102 P L-307	鐵貨	43号溝				元祖開寶	

5区110号溝

拝見番号 図版番号	種類 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第448図1	軟質陶器 香が	埋土 片	黒・白色鉱物少 赤色粒微	酸化焰 軟質		底部外面左回転未切り痕。圧痕により殆ど消える。底部内面非常に強い撫で。	在地製 中世
第448図2 P L-307	軟質陶器 内耳鍋	埋土 小片	白色鉱物少 金色鉱物	酸化焰 並質		口縁部内面下段発。口縁部横撫で。内面撫で。	在地製 中世
第448図3	軟質陶器 内耳鍋	埋土 小片	白色鉱物 赤色粒少	酸化焰 並質		口縁部内面下部強い段差。口縁部横撫で。	在地製 中世
第448図4	軟質陶器 内耳鍋	埋土 小片	白色鉱物 赤色粒微	酸化焰 軟質		口縁部横撫で。外面保付着。	在地製 中世
第448図5	軟質陶器 内耳鍋	埋土 小片	白色鉱物 金色鉱物	酸化焰 軟質		器壁薄く、口縁部短い。	在地製 中世
第448図6	軟質陶器 内耳鍋	埋土 小片	白色鉱物 赤色粒	酸化焰 軟質		体部器高低い。平底か丸底か不明。体部外面下端彫削り。外面荒削り上保付着。	在地製 中世
第448図7 P L-307	砥石	端部欠	砥沢石			3面使用。	200 g
第448図8 P L-307	茶臼上臼	上部欠	粗粒安山岩			目不明瞭。片減りする。本来の引手穴と反対側にも引手穴状の穴1か所。	2,400 g
第449図1 P L-307	砥石	完形	砥沢石			3方に調整時のノミ痕。	150 g
第449図2 P L-308	砥石	片	粗粒安山岩			2面使用。	430 g
第449図3 P L-307	瓦	小片	黒・白色鉱物少	還元焰	灰白	布圧痕。	430 g

5区4号独立柱建物

棟号番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第449図4 P.L.-308	鍾状石製品	完形				内面を打ち欠く。	350g
第449図5 P.L.-307	キセル吸口	完形				銅製。	

5区井戸

棟号番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第454図1 P.L.-308	凹付石製品	5号井戸 片欠	粗粒安山岩			敲打により1面くぼむ。	1,800g
第454図2 P.L.-308	水輪	8号井戸 完形	粗粒安山岩				12,200g
第454図3 P.L.-308	下白	7号井戸 完形	粗粒安山岩			片減り著しい。	16,250g
第454図4 P.L.-309	石鉢状石製品	8号井戸 完形	粗粒安山岩				9,500g
第454図5 P.L.-308	下白	8号井戸 一部欠	粗粒安山岩			目が微かに残る。片減り。	9,850g
第454図6 P.L.-308	軟質陶器 内耳鍋	8号井戸 小片	白色磁物 金色藍物	酸化焰 並質		口縁部屈曲。口縁部横撫で。体部外面下端横撫で。	在地製 中世
第454図7 P.L.-308	茶白上白	8号井戸 片	粗粒安山岩			周縁良く磨れる。	3,800g
第455図8 P.L.-309	上白	7号井戸 完形	粗粒安山岩			引手穴作り出し。	18,200g
第455図9 P.L.-309	下白	7号井戸 完形	粗粒安山岩			周縁に目が僅かに残る。	28,800g
第455図10 P.L.-309	土鍔	9号井戸 完形	黒・白色磁物少	酸化焰	黄い橙		11.75g
第455図11 P.L.-309	磁石	7号井戸 片	粗粒安山岩			4面使用。	800g

5区1号墓墳

棟号番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第456図1 P.L.-309	鏡貨	完形				□□貫	
第456図2 P.L.-309	鏡貨	完形				元祐通貫	
第456図3 P.L.-309	鏡貨	完形				治平元貫	

5区2号墓墳

棟号番号 図版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第457図1 P.L.-309	鏡貨	完形				紹聖元貫	
第457図2 P.L.-309	鏡貨	完形				拱武通貫	
第457図3 P.L.-309	鏡貨	完形				拱武通貫	
第457図4 P.L.-309	鏡貨	一部欠				至和元貫	

遺物観察表

中・近世土坑

採掘番号 区版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第461図1	陶器 灯明皿	63号土坑 写欠	やや緻密	並貫		底部唇筒底状に削り込む。高台縁部を除き灰釉。	瀬戸美濃か 江戸

5区中・近世遺構外

採掘番号 区版番号	種別 器種	出土位置 遺存状態	胎土	焼成	色調	器形・技法等の特徴	備考
第462図1	陶器 丸皿	口縁写 高部写	緻密	酸化焰 軟貫		高台縁以下無釉。長石釉。	美濃 17C
第462図2	磁器 皿	底部	灰白色	磁化		底部内面蛇の目軸割ぎ。高台縁以下無釉。透明釉。17C後半～18C前半	肥前
第462図3	磁器 碗	小片	白色	磁化		外面上縁割がれる。文様は戦車。	瀬戸美濃 戦時中
第462図4	陶器 皿	高部	灰白色	並貫		底部回転糸切り後削り出し高台。底部内面蛇の目軸割ぎ。青緑釉。高台縁以下無釉。17C後半～18C前半	唐津系
第462図5	円孔付球状 石製品		アイサイト				106 g
第462図6	上白	写	粗粒安山岩			目粗い。	5,050 g

写 真 图 版



1 2号住居 全景



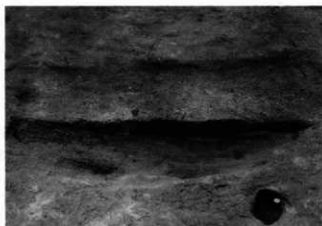
2 同 遺物出土状況



3 同 2



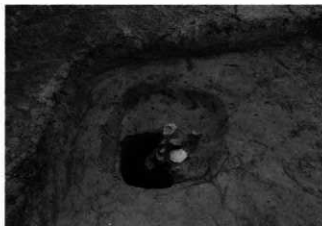
4 同 埋没土



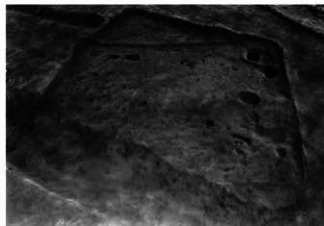
5 同 炉



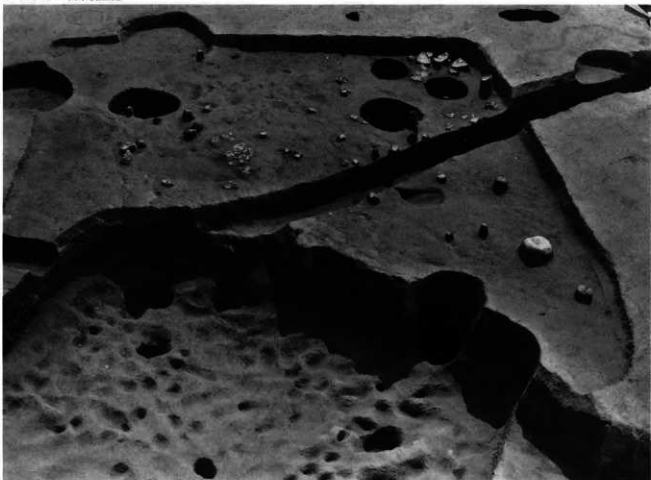
6 3号住居 全景



7 同 貯蔵穴



8 同 撮影



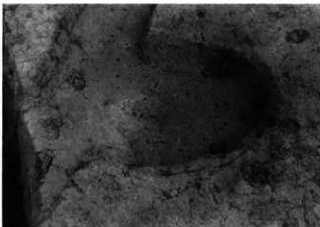
1 11号住居 遺物出土状況



2 罎1



3 罎1



4 罎4



5 罎掘形



1 16号住居 遺物出土状況



2 同 梯子穴



3 同 2



4 同 2



5 同 1 床面出土遺物

PL116 古代住居



1 16号住居 西側縁辺床面の状況



2 焼土化した床面



3 同1 攝形



4 同3



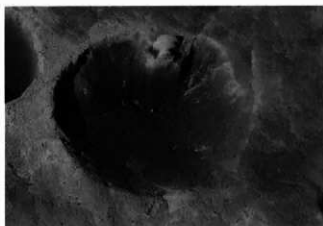
5 同 攝形全景



1 17号住居 全景



2 同 掘形



3 同 床下土坑



4 18号住居 全景



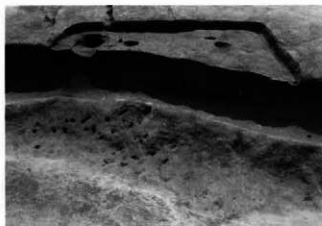
5 同 貯蔵穴上面の遺物出土状況



6 同 貯蔵穴



7 同 床面出土の遺物



8 同 掘形



1 19号住居 遺物・炭化材の出土状況



2 同1



3 同1



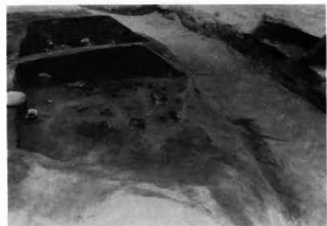
4 同1



5 同1



1 20号住居 遺物・炭化材・焼土の出土状況



2 同 埋没土の状況



3 同 1



4 同 1



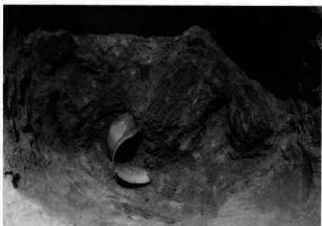
5 同 1



1 20号住居 遺物・炭化材・焼土の出土状況



2 同 1



3 同 1 貯蔵穴内



4 同 貯蔵穴内埋没土の状況



5 同 全景



1 5区 古代の遺構全景



2 1号住居 全景



1 1号住居 遺物出土状況



2 同 カマド竈の埋没状況



3 同 竈全景



4 同 竈撮形



5 同 貯蔵穴



6 4号住居全景



7 同 撮形



8 同 床下土坑！埋没土の状況



1 5号住居 全景



2 同 覆全景



3 同 掘形全景



4 同 床下土坑の調査状況



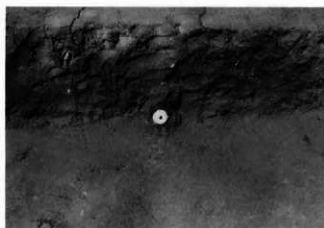
5 同 床下土坑2の埋没土の状況



1 6号住居 全景



2 同 磁石の出土状況



3 同 紡錘車の出土状況



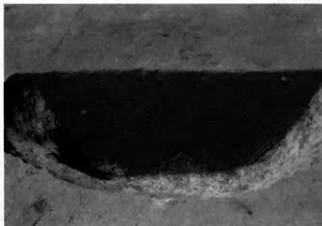
4 同 掘全景



5 同 掘形全景



1 6号住居 床下の調査状況



2 同 床下土坑1の埋没状況



3 7号住居 全景



4 同 遺物の出土状況



5 同4 竈周辺



6 同 竈の埋没状況



7 同 撮影全景



8 同 床下で確認された柱穴



1 18号住居 遺物の出土状況



2 同1



3 同1



4 同 住居に投げこまれた礫群の調査



5 同4



1 8号住居 礎群下出土の遺物と炭化材



2 同 礎全景



3 同 竈わき床面出土の土器



4 同1 礎群下出土の炭化材



5 同 竈場形の調査



1 9号住居 全景



2 竈



3 同 竈撮形の調査



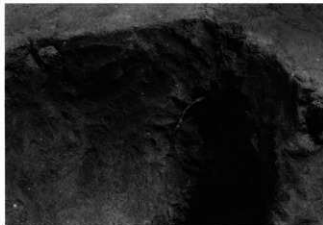
4 同 竈下の状況



5 同 竈下勾玉の出土状況



1 9号住居 貯蔵穴全景



2 同1 鉄器の出土状況



3 同 床下土坑3の埋没状況



4 同 床下土坑4の埋没状況



5 同 撮影全景



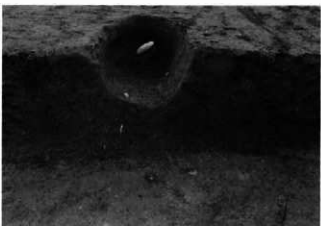
1 10号住居 全景



2 同 竈



3 同 2 埋没状況



4 同 旧竈



5 同 掘形全景



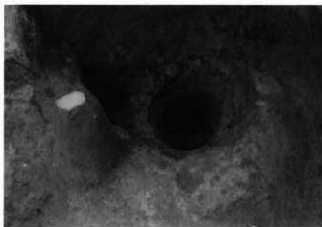
1 12号住居 全景



2 同 竈



3 同2 埋没状況



4 同 貯蔵穴



5 同 掘形全景



1 12号住居 床下の調査状況



2 同 竈下の状況



3 13号住居 全景



4 同 遺物の出土状況



5 同 床面出土遺物の状況



1 13号住居 竈



2 同 竈の使用状況 (手前から)



3 同2 (煙道部から)



4 同 住居床下の状況



5 4区全景 (上方が5区)



1 15号住居



2 同 1



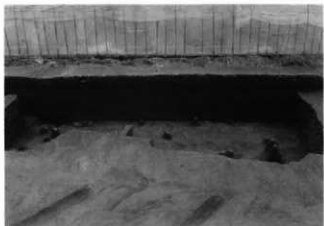
3 21号住居 全景



4 同 埋没土の状況



5 24号住居 全景



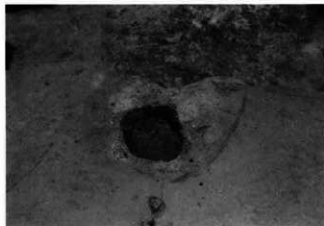
1 24号住居 埋没状況



2 同 東壁部分



3 同 遺物の出土状況



4 同 竈煙道 (上方から)



5 同 竈の埋没状況



6 同 竈全景



7 同 貯蔵穴



8 同住居 撮形



1 25号住居 全景



2 岡 埋没状況



3 岡 壺



4 岡 壺 袖石



5 岡住居 調査風景



1 26号住居 全景



2 同 埋没状況



3 同 竈



4 同 竈使用面下の状況



5 同住居 竈形



1 27号住居 全景



2 同 竈の確認状況



3 同住居の埋没状況



4 同 竈の埋没状況



5 同 竈全景



6 同 東壁下床面出土の土器



7 同 南西隅床面出土の棒状物



8 28号住居 南東隅床面出土の棒状物



1 28号住居 全景



2 同住居の埋没状況



3 同 竈



4 同 東壁際遺物の出土状況



5 同 竈袖石



1 29号住居 全景



2 同住居の埋没状況



3 同 竈



4 同 竈右袖下埋設土器



5 同 床下の調査状況



1 30号住居 全景



1 同住居の埋没状況



2 同 東壁際の遺物出土状況



3 同 窟



4 同 床下の調査状況



1 31号住居 全景



2 2号住居の埋没状況



3 3号 遺物の出土状況



4 4号 竈



5 32号住居 全景



1 32号住居 埋没状況



2 同 窟



3 同 窟の埋没状況



4 同 床下の調査状況



5 33号住居 全景



1 33号住居 埋没状況



2 同 竈



3 同 床下の調査状況



4 同 3



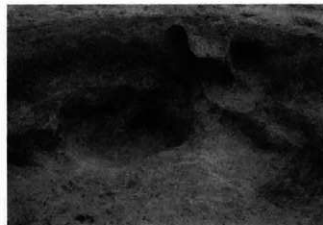
5 34号住居 全景



6 同住居 埋没状況



7 同 竈



8 同 南東隅の状況



1 35号住居 全景



2 同住居 埋没状況



3 同 甕の埋没状況



4 同 甕全景



5 同 甕右袖隙の埋設土器



1 35号住居 貯蔵穴



2 同 電袖に使用された長巻



3 同 竈使用面下の状況



4 同 床下の確認状況



5 同 床下の調査状況



1 36号住居 全景



2 同 遺物の出土状況



3 同 北西隅床面出土の棒状礎



4 同 礎



5 同住居 撮影



1 37号(右)・38号(左)住居 全景



2 同住居の重複状況



3 37号住居 竈（煙道部に土器を使用している）



4 同 竈袖石



5 同 竈支脚に使用された土器



1 37号・38号住居 掘形



2 38号住居 新旧電使用面下の調査状況



3 39号住居 全景



4 両住居 埋没状況



5 両4 部分



1 39号住居 竈



2 同 竈右側床面出土の土器



3 同 柱の根元に重ねて置かれた杯



4 同 旧竈



5 同 旧竈使用面下の状況



6 同 新竈使用面下の状況



7 同 6



8 同住居 掘形



1 40号住居 全景



2 39号(手前)・40号(奥)住居 重複状況



3 40号住居 竈



4 両竈 埋没状況



5 41号住居 全景

PL 152 古代住居



1 41号住居 埋没状況



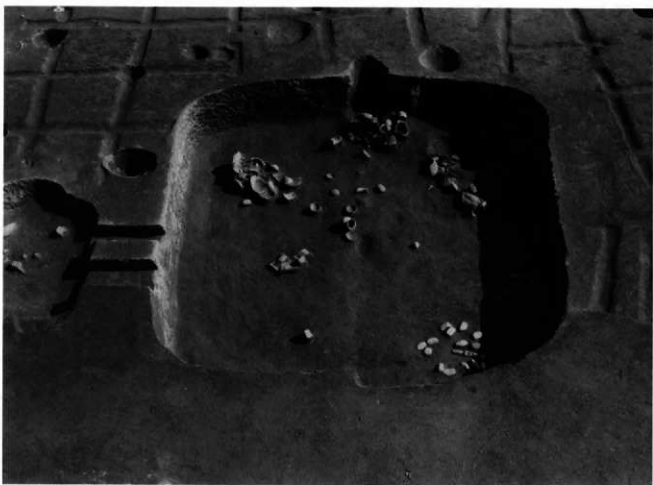
2 罏



3 罏 煙道の断面



4 同住居 撮形



5 42号住居 全景



1 42号住居 埋没状況



2 同 遺物の出土状況



3 同 2



4 同 2



5 同 竈前の遺物出土状況



6 同 竈



7 同住居 撮影



8 43号住居 全景



1 44号住居 全景



2 同 南壁下遺物出土状況



3 同 竈周辺の遺物出土状況



4 同3



5 同住居 撮影



1 45号住居 全景



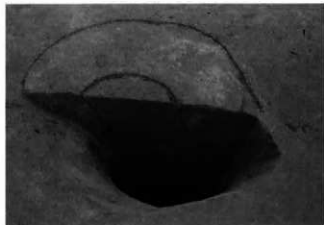
2 同 遺物の出土状況



3 同住居 撮影



4 同 竈



5 同 柱穴の柱痕



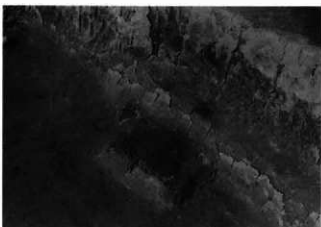
1 46号住居 全景



2 同 竈



3 同 北壁際遺物出土状況



4 同 南壁際ベンガラの出土状況



5 同住居 撮影



1 47号住居 全景



2 同 埋没状況



3 同 南壁際遺物出土状況



4 同 窟



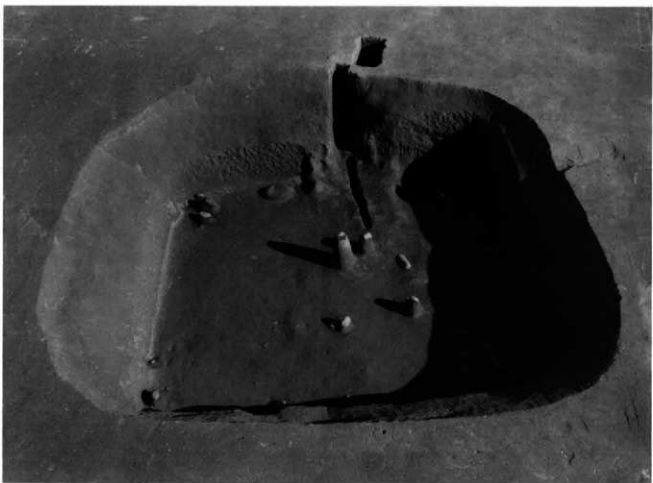
5 同 窟使用面下の状況



1 47号住居 柱穴際の礎



2 同住居 撮形



3 48号住居 全景



4 同住居 埋没状況



5 同 南壁際遺物出土状況



1 48号住居 墓の埋没状況



2 同 竈煙道部（横から）



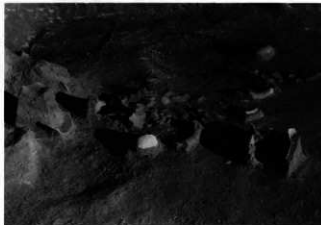
3 同 2（煙出し部分）



4 同 2（炊き口部から）



5 49号住居 全景



1 49号住居 竈前床面出土の土器



2 同住居 埋没状況



3 同2 中央部分



4 同 竈と貯蔵穴



5 同 竈



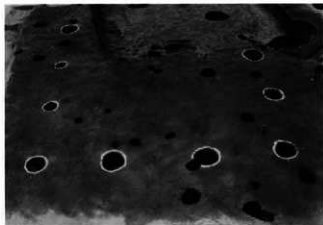
6 同 竈袖に使用された土器



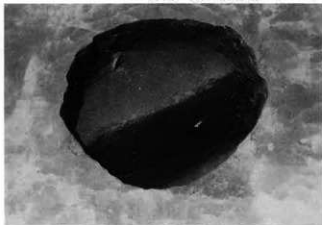
7 同 竈下撮影に残る痕跡



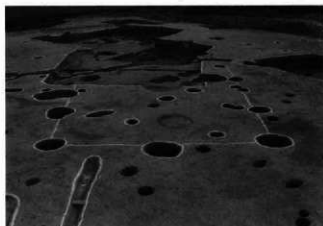
8 同住居 撮影



1 6号掘立柱建物



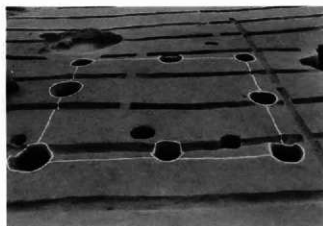
2 同 柱穴埋没土



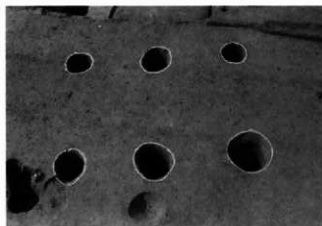
3 7号掘立柱建物



4 同 柱穴埋没土



5 9号掘立柱建物



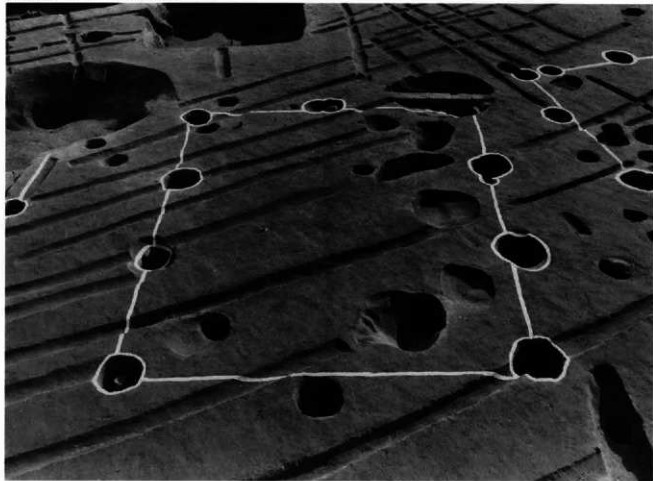
6 10号掘立柱建物



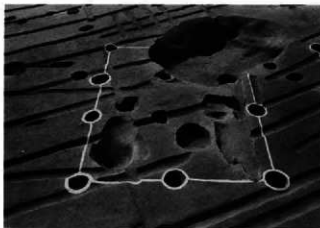
7 12号掘立柱建物 柱穴内の土器



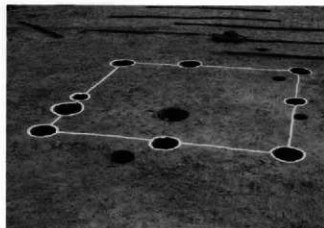
8 同7 柱穴内の罎



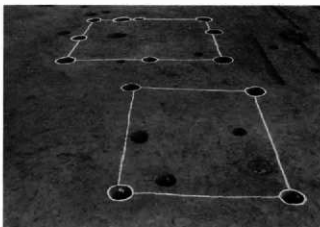
1 12号掘立柱建物



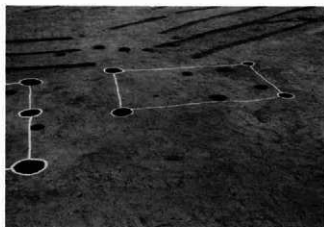
2 13号掘立柱建物



3 14号掘立柱建物



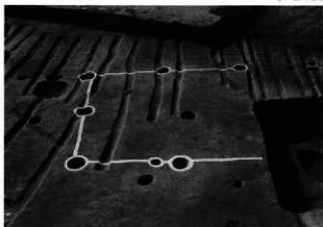
4 14号(上)・15号(下)掘立柱建物



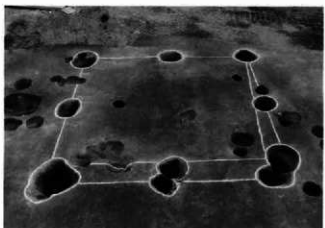
5 15号掘立柱建物



1 16号・17号掘立柱建物



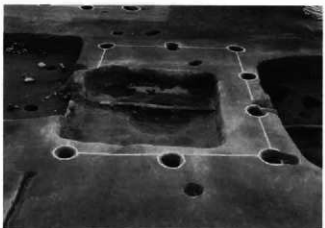
2 18号掘立柱建物



3 19号掘立柱建物



4 20号掘立柱建物



5 21号掘立柱建物



6 22号掘立柱建物



7 1号竪穴状遺構



8 図7



1 2号竪穴状遺構 全景



2 同 出土遺物



3 同 埋没状況



4 同 3



5 同 3 黄灰色粘質シルト層面



1 1号特殊遺構



2 2号特殊遺構



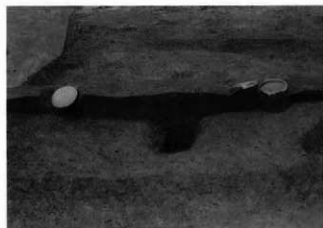
3 3号(上方)・4号(下方)特殊遺構



4 3号特殊遺構



5 4号特殊遺構



6 同5 断面



7 5号特殊遺構



8 同7 断面



1 1号祭祀跡 全景（東から）左側の壇は1号古墳周堀



2 同1（西から）



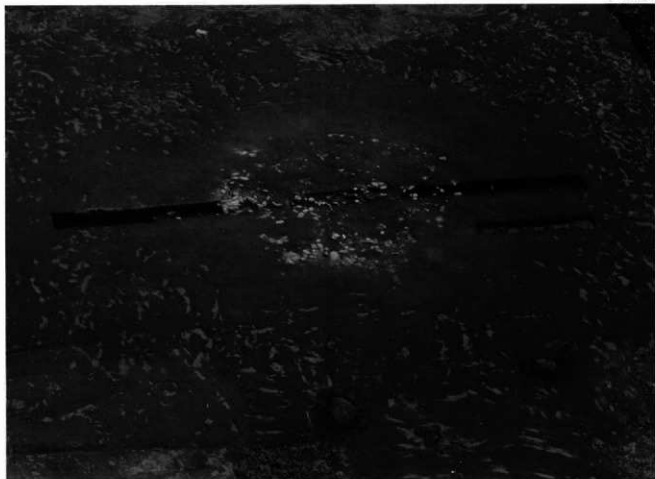
3 同 遺物分析範囲に認められた落ち込み



4 同 落ち込み内の遺物



5 同4



1 2号祭祀跡 確認状況 (As-B 直下面)



2 同 全景



1 2号祭祀跡 全景



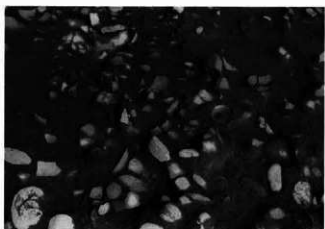
2 同 部分



3 同 2



4 同 2



5 同 2



1 2号祭祀跡 最下面の遺物出土状況



2 同1 部分



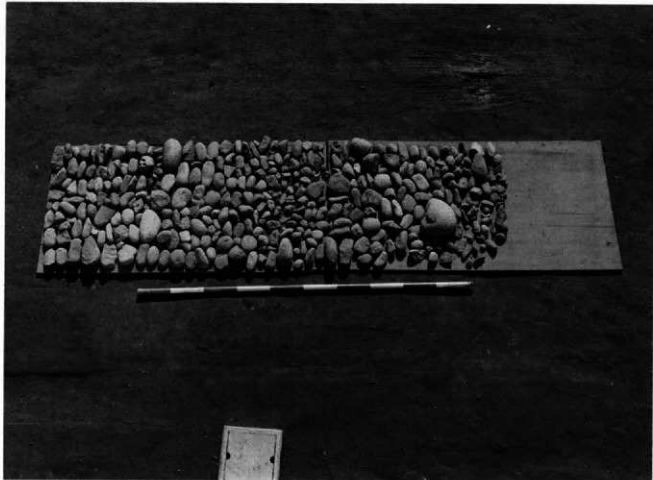
3 同2



4 同 土層断面 (中央付近)



5 同4 (東側)



1 2号祭祀跡 出土物の総量



2 3号祭祀跡 全景



3 同2 細片を取りざった状態



4 同3 部分



5 同3 最下面の状態



1 1号古墳の選地



2 1号古墳 全景



1 1号古墳 調査風景



2 同 周堀内遺物出土状況(西側)



3 同2 (北側)



4 同 周堀の状況(前方部西側から)



5 同3 後円部周堀内(東から)



1 1号古墳 周堀埋没状況



2 同1



3 同1



4 同1



5 同 石室攪乱部 全景



1 1号古墳 石室攪乱部確認状況



2 同1 調査状況



3 同2



4 同2



5 同 石室の攪乱状況



6 同5



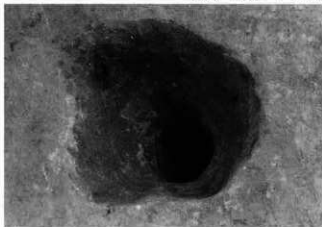
7 同5



8 同5



1 51号土坑 埋没土



2 同 全景



3 56号土坑 埋没土



4 同 全景



5 119~122号土坑



6 119号(右)・120号(左)土坑 確認状況



7 119号土坑 確認状況



8 同 埋没土



1 119号土坑 全面に粘質土を貼り付けている



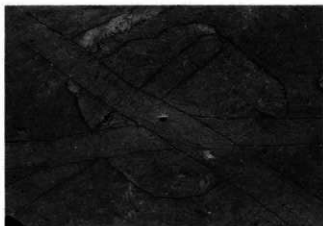
2 同 貼られた粘質土の厚み



3 同 粘質土を取りざった状態



4 120号土坑 土層断面



5 121号土坑 確認状況



6 同 埋没土



7 同 完掘状況



8 122号土坑 埋没土



1 49号土坑



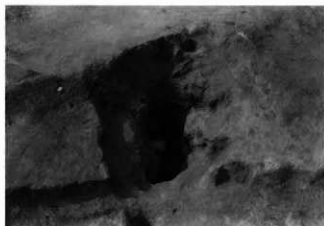
2 60号土坑 埋没状况



3 同 遗物出土状况



4 同 3



5 同 晃掘状况



6 66号土坑 晃掘状况



7 同 埋没土



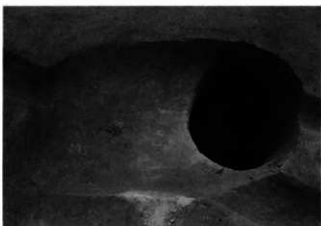
8 70号土坑



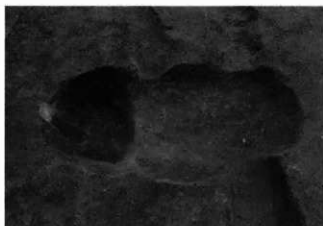
1 70号·85号土坑



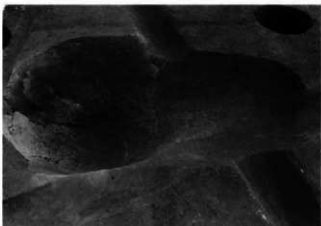
2 71号土坑



3 87号土坑



4 88号·89号土坑



5 91号·92号土坑



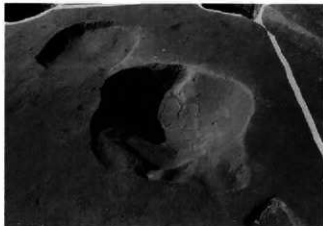
6 93号土坑



7 95号·96号土坑



8 97号土坑



1 98号土坑



2 100号·101号土坑



3 102号土坑



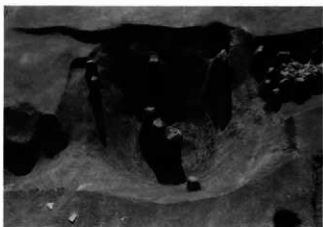
4 104号土坑



5 106号土坑



6 109号土坑



7 141号土坑



8 同 埋没土



1 3区微高地上の溝 全景



2 岡 62・63号溝



3 岡 71号溝



4 岡 72号溝



5 岡 73号・74号溝



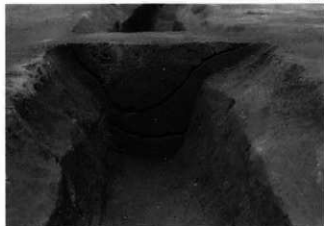
6 岡 74号溝



7 岡 79号溝



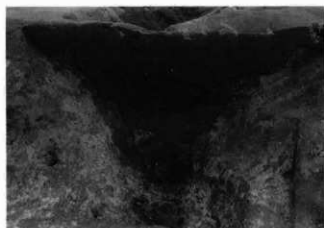
1 5区 51号溝



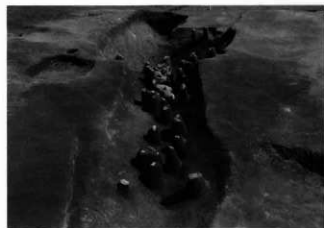
2 同 塚没土



3 5区 85号溝



4 同 塚没土



5 同 遺物の出土状況



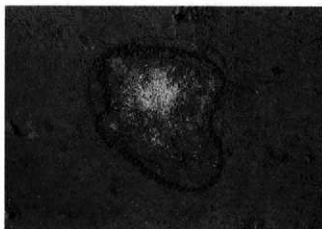
6 同 5 部分



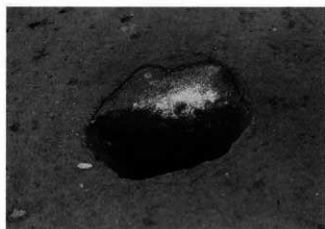
7 同 5 部分



1 3区微高地 浅間C 軽石の落ち込み調査状況



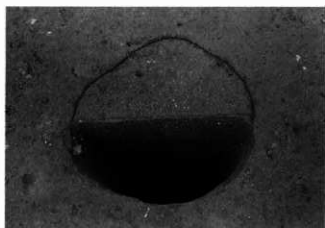
2 同1 平面確認状況



3 同 断面



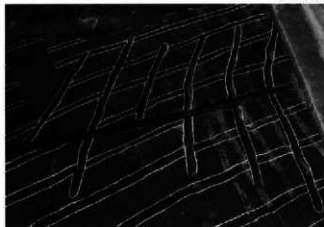
4 同2



5 同3



1 3区微高地 I期畝 (南から)



2 同1 (東から)



3 同 II期畝確認状況 (西から)



4 同3 (北から)



5 同3



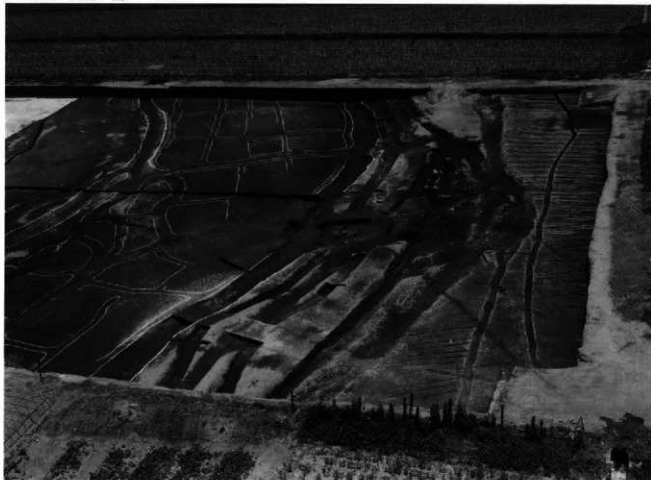
6 同3 手前はIII期畝



7 同3 II期畝に伴う落ち込み確認状況



8 同7 完掘状況



1 3区微高地 II期墓 全景(南から)



2 同 II期墓を覆う白色シルト(泥濘層)



1 3区嶺高地 Ⅲ期畠全景(南から)



2 同 確認状況



3 同 2



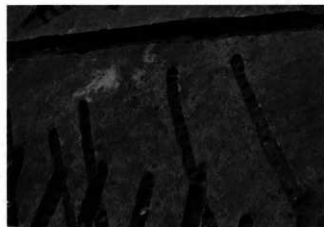
4 同 2



5 同 突撤状況



6 同 5



7 同 5 サクの底面に跡痕が見られる



1 4区II期畠(東から)



2 同1(南から)



3 4区畠 断面



4 同3



5 同3



1 4区Ⅲ期畠 全景（東から）



2 同1（西から）中央を横断するのは1号道



1 4区田期島と道（北から中央の道は1号道）



2 1号道（南から、正面は洞山）



3 2号道（左手は131・132号溝）



4 3号道（南から、正面は洞山）



5 岡4部分



1 4区田湖島 重複状況(東から)



2 同1(北から)



3 同1 確認状況(北から)



4 同1



5 同4 サクの状況



1 4区南西隅Ⅲ期竈の重複状況(東から) 白線はⅡ期竈



2 同Ⅰ Ⅲc期竈



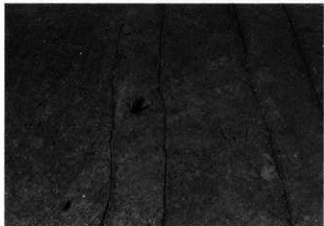
3 同Ⅰ Ⅲb期竈



4 同Ⅰ Ⅲd期竈



5 同Ⅰ Ⅲa期竈



1 4区III期畠 確認状況



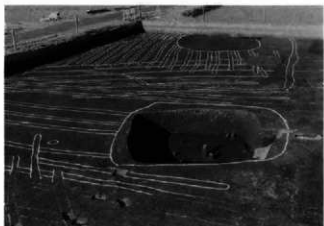
2 同1



3 同1



4 同1 北西部 右手の高まりは1号特殊遺構



5 同1 北西部 中央の住居は48号住居



6 同1 中央部 手前の住居は46号住居



7 同1 南東部 手前の住居は26号住居



8 5区III期畠 確認状況



1 5区低地 墓の確認状況 全景(東から)



2 同1 断面



3 同1 断面



4 同1 西側部分(南から)



5 同1 東側部分(南から)



1 5区低地 III期畠 西半部



2 岡 I 東半部



3 岡 I III d - III e 期



4 岡 II 期畠



5 岡 III b 期畠



6 岡 I 期畠



7 岡 畠下の確認調査



8 岡 7 土層断面 畠下にFA層確認



1 | 区旧河道 全景 (南から)



2 | 区旧河道埋没前の状況。調査時も湛潤であり、水みちとなっていることが判かる。



1 I区旧河道 FA下砂層最下部出土(3)



2 同1



3 同 旧河道縁辺部土器の出土状況



4 同3 土器(2)



5 同3 土器(4)



6 同3 土器(1)



7 I区旧河道に倒れた木



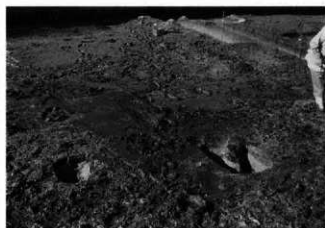
8 同7



1 | 区旧河道調査風景



2 同1



3 同杭 確認状況



4 同3



5 同3



1 1区旧河道 杭確認状況



3 同1



2 同1



4 同1



5 同1



6 同1



7 同1



1 | 区旧河道 東壁土層断面



2 | 同1



3 | 同1



4 | 同1 流木の出土状況



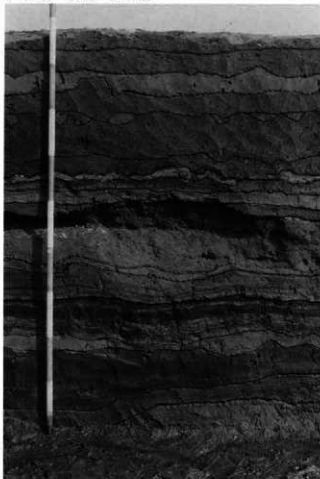
5 | 同1 FA下泥濘層の状態



1 2区旧河道 FA下砂層堆積前の状況



2 2区旧河道 東壁土層断面



1 2区旧河道 東壁土層断面



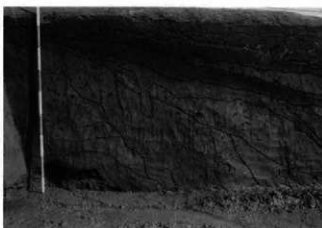
2 同1 最下部に基盤の砂層が見える



3 同1 下層に流木が見られる



4 同1 北側の立ち上がり



5 同4



6 大型の流木



7 同1 一夜にして池と化した旧河道



1 3区旧河道 調査状況



2 同1 土層断面



3 同1 流木の出土状況



4 同1 黒色粘質土シルト層から土器出土



5 同4 中央のベルト上手前に土器がある



1 3区8H水田耕土下で確認された水路と水田区画の痕跡



2 同1 上方が8H水田、下方が耕土下の痕跡



3 同2 8H水田耕土下の確認面



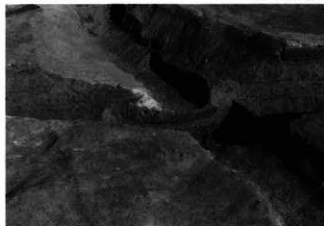
4 同1 147号溝



5 同1 小円礫の出土状況



1 8H水田に伴う117号溝(3区)



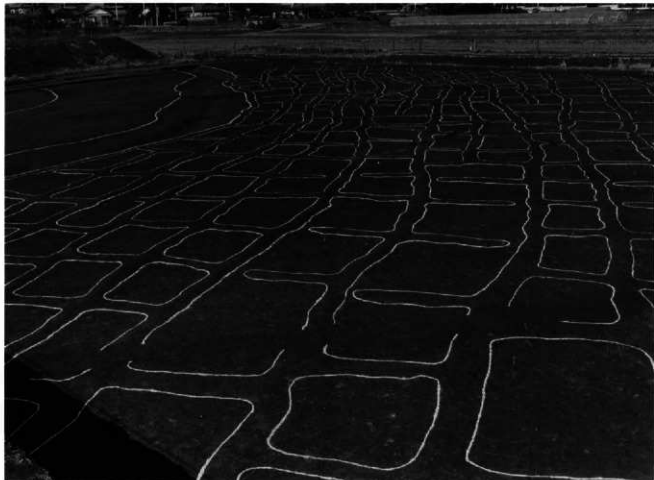
2 同1断面



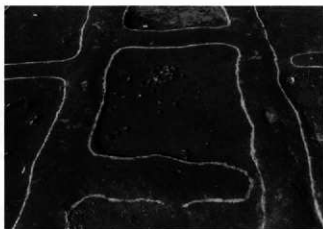
3 8H水田耕土の層厚(3区)



4 3区8H水田 全景



1 3区8H水田の区画



2 同1



3 同1



4 3区8H水田耕土内遺物出土状況



5 同4



1 3区7H水田 全景 (西半は6H水田)



2 同1 6H水田との比較 (左上上方が6H水田、手前が7H水田、比高差は5cm程度)



1 3区7H水田 水田区画と水路



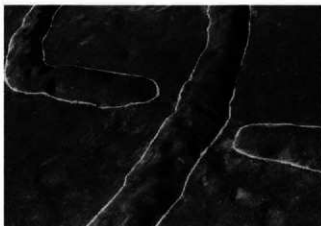
2 同1



3 同1



4 同1 アゼの状態



5 同4



6 同1 アゼ上の足跡



7 同1 6H水田(上方)と7H水田(下方)の重複状況



8 同1 7H水田の耕土



1 3区6H水田 6H層（白色シルト）と水田面の状態



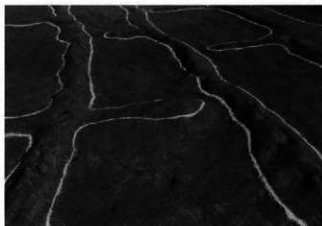
2 同1 全景（南から）



1 3区6H水田の区画



2 同1 支用部分



3 同1



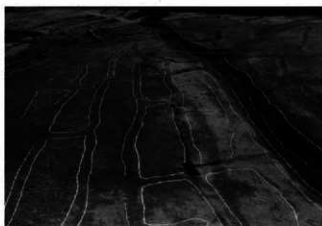
4 同2



5 同1 アゼ上の足跡



6 同1 耕土



7 3区5H水田の区画



8 同7 耕土



1 3区5H水田 全景



2 同1



1 3区東半4H水田 全景(東から)



2 同1(北から)



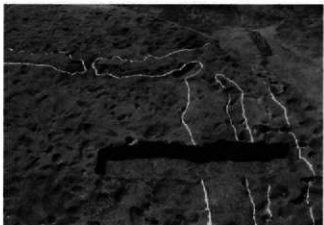
1 3区西側旧河道上面の4H水田 全景



2 3区東半4H水田



3 同2



4 同2 水田圃の状態



5 同2 アゼの確認状態



1 3区4H水田 90号溝に伴う6号水溜



2 同 19号に伴う1~3号水溜



3 同 19号溝内の礎



4 同 90号溝内の敷石



5 同 4



1 3区4H水田 19号溝



2 同1



3 同1



4 同1



5 同 18号・19号溝の合流部分



6 同5



7 同 19号溝 土器(6)の出土状況



8 同7



1 3区4H水田 18号溝



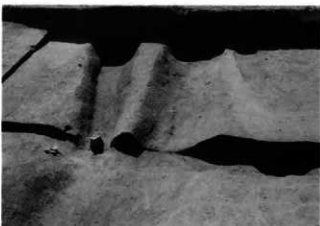
2 同 18号溝 土器(3・4・5)の出土状況



3 同2



4 同2



5 同 18号溝 土器(1・2)の出土状況



6 同5



7 同 64号溝



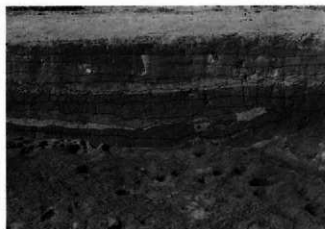
8 同7



1 2区2H水田 全景(東から)



2 岡 アゼと水田面の状況(手前は1H水田)

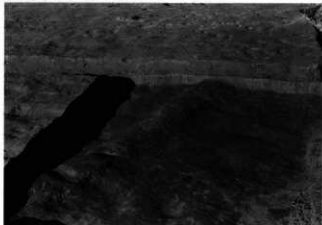


3 岡 2H層と水田耕土(2区西壁)



4 岡2

PL216 古代 水田



1 2区2H水田 2H層とアゼ（上方は1H水田面）



2 同 水口の状態



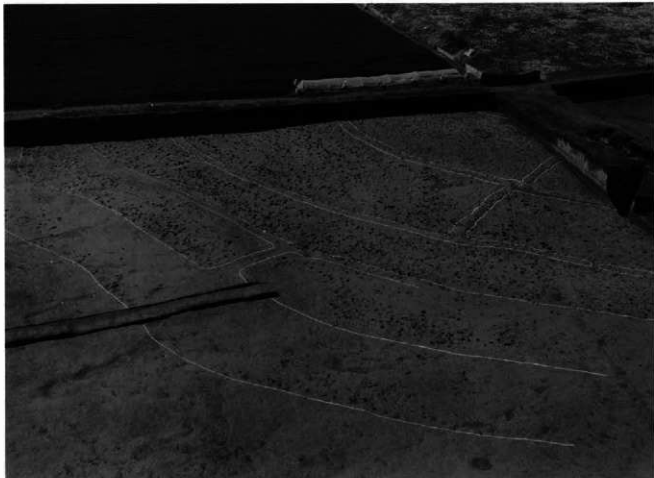
3 同2



4 同2



5 3区2H水田 全景（東から）



1 3区西側旧河道上面の2H水田



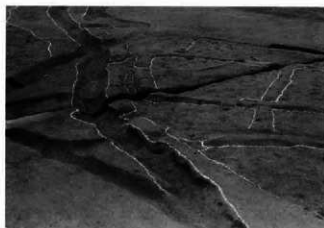
2 同1 調査風景



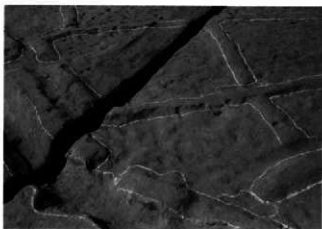
1 3区中央部の2H水田



2 同1



3 同1



4 同1



5 同1



1 3区2H水田 28号溝の確認状況(中央)



2 同 28号溝 完備状況



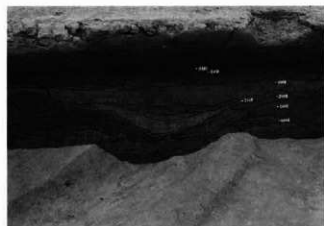
3 同 28号溝 土器(2)の出土状況



4 同 28号溝 埋没土



5 同 30号溝



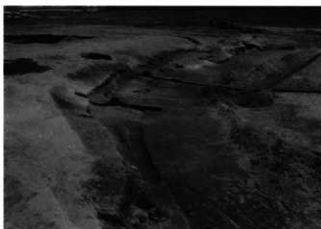
6 同 5 (北壁)



7 同 5 埋没土



1 5区2H水田 全景(西から)



2 岡 58・59号溝



3 岡2 (南壁断面)



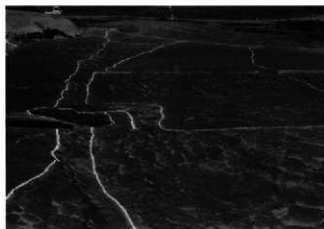
4 5区2H水田 水口1



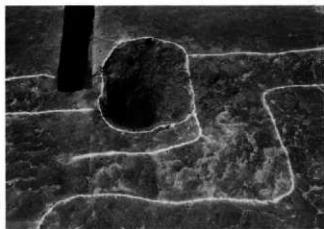
5 岡4 埋没土



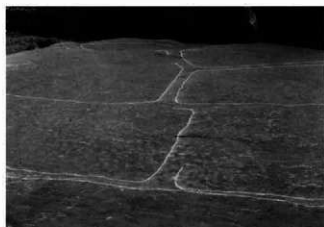
1 5区2H水田



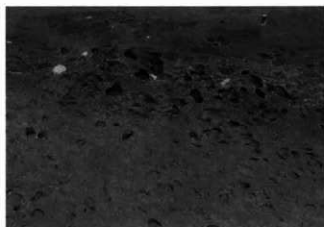
2 同1 縁辺部の段差



3 同1 水口2



4 同1 南北方向アゼの状況



5 同1 水田面に残る足跡



1 5区2H水田 83号溝確認状況



2 同1



3 同1 埋没状況



4 同1 2H水田耕土下での再確認



5 同4 発掘状況



6 同5



7 同5 先端部に付く水落ち状のくぼみ



8 同7 発掘状況



1 2区1H水田耕土下 12・13・14号溝 確認状況



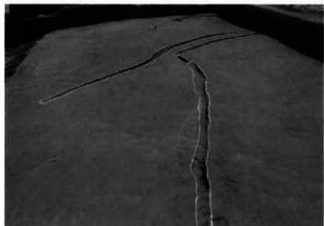
2 同 12号溝の切り込み面



3 同 13・14号溝



5 同 12号溝



4 同 31号溝



6 同 13・31号溝の切り込み面



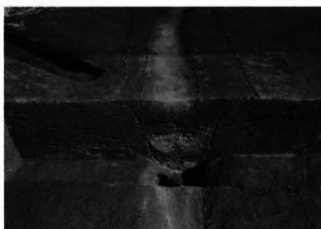
7 同 13号溝底面に残る鋤痕



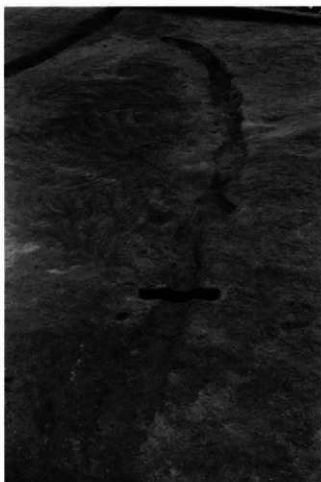
1 3区IH水田耕土下15号溝



3 同 29号溝



2 同1 埋没状況



4 同 26号溝



5 同 27号溝



1 3区IH水田耕土下 21号溝



2 岡 22号溝



3 岡 24号溝



4 岡 25号溝



5 岡 4



1 I区IH水田 全景(南から)



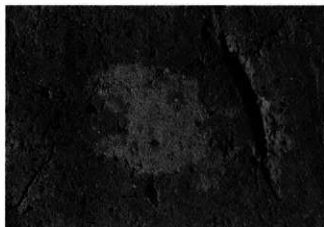
2 同 牛の足跡の調査



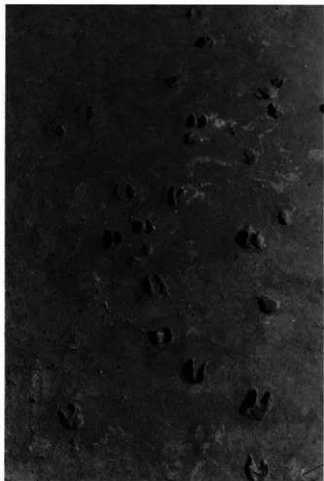
3 同2



4 同2



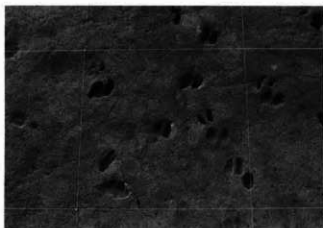
5 同2



1 I区IH水田 牛の足跡



2 同1



3 同1



4 同1 確認状況



5 同1



6 同1



7 同1



1 2・3区I H水田 全景(西から)中央よりやや上方に大アゼ(横方向)、中央部縦方向にのびるのが半折りの小アゼ



2 2区I H水田 南北方向アゼの走向



3 同1



4 同2



1 2区1H水田(上面)と2H水田(下面)の重畳状態



2 同1



3 2区1H水田 人の足跡確認状況



4 同3 1H層を取りさった状態



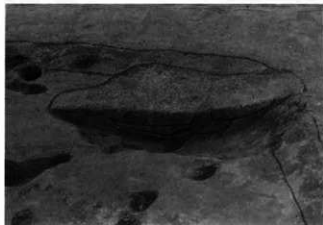
5 2区1H水田 牛の足跡確認状況



6 同5 1H層を取りさった状態



1 2区1H水田 水田面出土の土器(4)



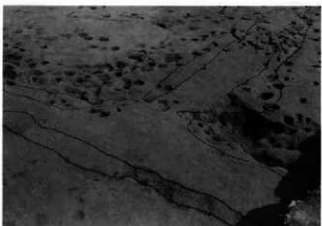
2 2区1H水田 水口2



3 同2



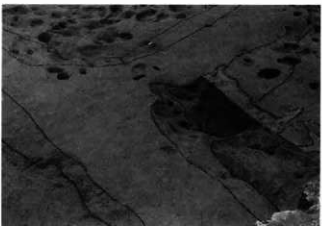
4 同2



5 同 水口7



6 同5



7 同5



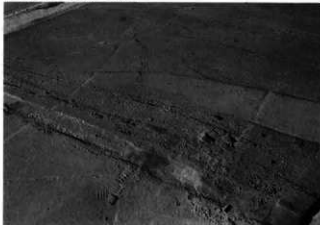
8 同 水口10・11



1 1～3区IH水田 全景（北側上空から）



2 同1（東から）



1 3区IH水田 大アゼ付近の状況



2 同 段差のないアゼの確認状況



3 3区IH水田 大アゼ(南から) 遠方の山は洞山



4 同3 全景



5 同3 大アゼ前平部の状況



6 同5 前平部を埋めるIH層



7 同5 完礫状況



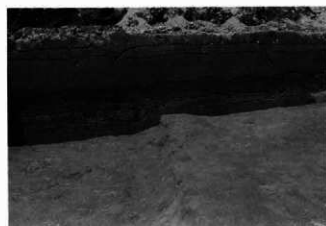
8 同5 前平部に流れついた球状ローム塊



1 3区IH水田 大アゼ断面A(北壁)



2 同1 近接



3 3区IH水田 小アゼの断面



4 同3



5 同3



6 3区IH水田面を覆うIH層



7 3区IH水田 側面に鋤痕を残す小アゼ



8 同7



1 3区IH水田 水口3 確認状況



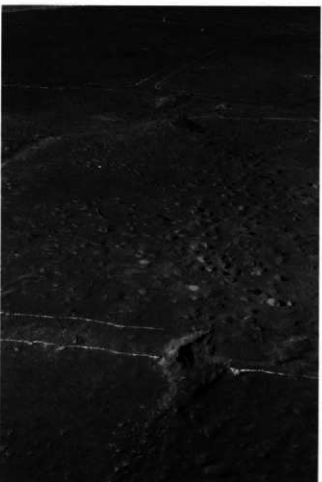
2 同1 完備状況



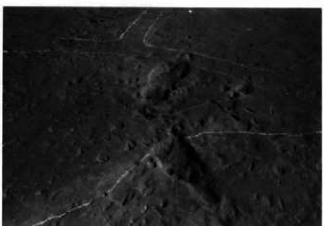
3 同 水口5・6 確認状況



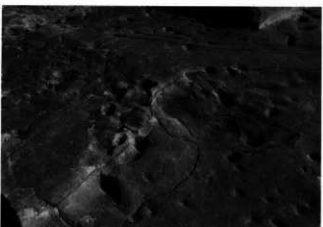
4 同3 完備状況



5 同 水口15・18・19



6 同 水口18・19



7 同 水口24



1 3区IH水田 大アゼ際を歩行する人の足跡



2 同1



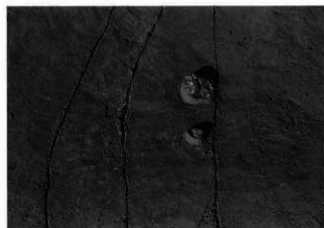
3 同 小アゼ上から水田面を横断する人の足跡



4 同1



5 3区IH水田 大アゼ下の調査



6 同 大アゼ内土器(2)の出土状況



7 同 小アゼ内土器(3)の出土状況



8 同 耕土で埋没した水口内土器(5)の出土状況



1 3区I H水田 大アゼ断面B



2 同I



3 同 大アゼ内出土の竈



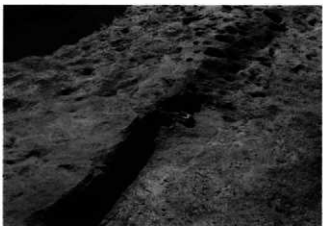
4 同 大アゼ断面E



5 3区南拡張区I H水田 大アゼの状況



6 同5 北側断面



7 同5 大アゼ際土器(6)の出土状況



8 同7



1 4区IH水田(東から)



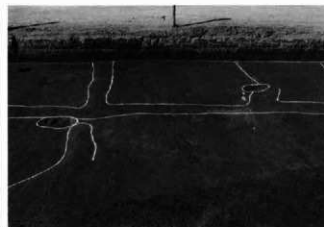
2 4区IH-1水田 全景(南から)



3 4区IH-2水田 全景(南から) 手前は耕土下の畠



4 同3 水田の区画状況



5 同3 アゼと水口



1 I区IH水田 4号溝



2 同I 4号溝確認状況



3 3区IH水田 7号溝(右側は6号溝)



4 同3 (南から)



5 同3 南壁断面



6 4区IH水田 I31~I33号溝



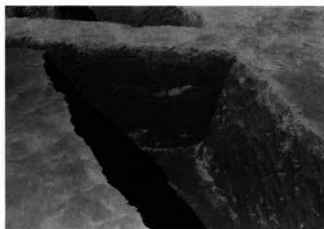
7 同6



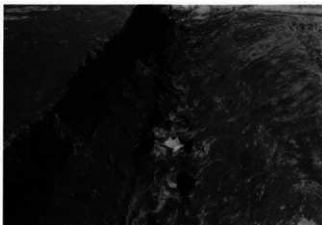
1 4区I H水田 131~134号溝 全景(南から) 遠方の山は洞山



2 同 132・134号溝



3 同 134号溝



4 同 132号溝 土器(2)の出土状況



5 同 4



1 4区1H畠(南から)



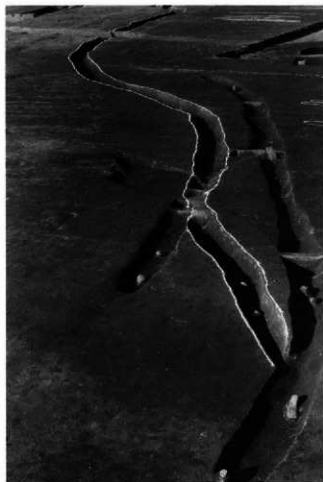
2 同1(東から)



3 同1(東から)



4 4区1H畠 154号溝



5 同 152号溝



6 同 152・154号溝の重複状況



7 同 152号溝出土の礫



1 4区1H畠(1号区画畠)



2 同 確認状況



3 同 断面



4 同3



5 同 撮形



6 同 付属する溝



7 4区1H畠(2号区画畠)



8 同7



1 4区IH畠(2号区面畠) 畠形



2 同 付属する溝



3 4区IH畠 156・157号溝



4 同 156号溝埋没土



5 同 157号溝埋没土



6 同 5



7 同 158号溝



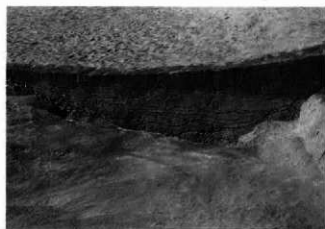
8 159号溝



1 5区IH水田 確認状況(東から)上面はAs-B下面。手前に散乱する礫は36号溝内からかき出された基盤層の礫。



2 同 36号溝内からかき出された基盤層の礫(断面状況)



3 同 36号溝上面の土層堆積状況



4 同 水田面を覆うIH層



5 同 IH層の層厚



1 5区IH水田 36号溝の調査状況



2 同 1



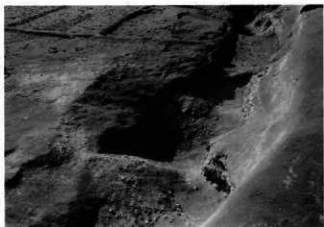
3 同 1



4 同 36号溝底面の状況



5 同 36号溝底面に流れ込んだIH層に伴うローム塊



1 5区IH水田 36号溝内地山礫の堆積状況



2 同 断面



3 同 2



4 同 2



5 5区IH水田 36号溝全景 36号溝は水田を壊して掘削されている。



1 5区IH水田 調査状況



2 同 IH層中の球状ローム塊



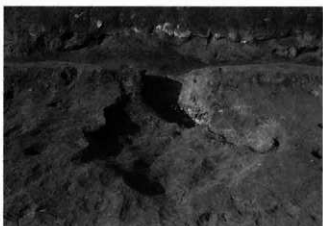
3 同 37号溝の調査



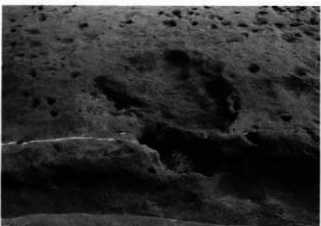
4 同 水田面検出状況



5 同 1号水口確認状況



6 同 5 完掘状況



7 同 6



8 同 37号溝と36号溝の関係



1 5区IH水田 全景(東から)



2 同1(西から)



3 同 直線的な南北アゼ



4 同 くい違う東西アゼ



5 同 変則的なアゼ交点



1 1区 As-B下水田 全景（東から） 片側に溝を伴うアゼが見られる。



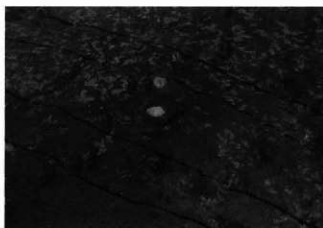
2 同 1（南から）



3 同 水田面の調査風景



4 同 水田面の状態



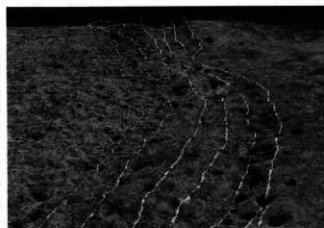
5 同 アゼ上に置かれた礎



1 1区 As-B下水田 西側縁辺のアゼ



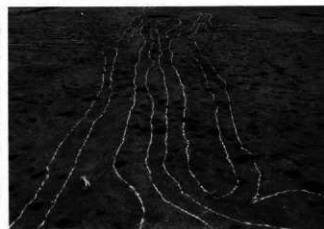
2 同 片側に溝を伴うアゼ



3 同 2



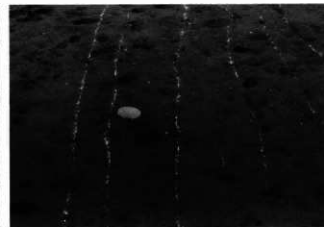
4 2区 As-B下水田 全景(東から)



5 同 中央に溝を伴う大アゼ



6 同 田面とアゼの状態



7 同 アゼ上に置かれた様



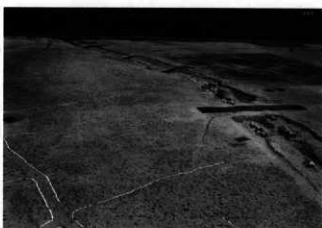
1 3区 As-B下水田



2 同1 水田面とアゼの状況



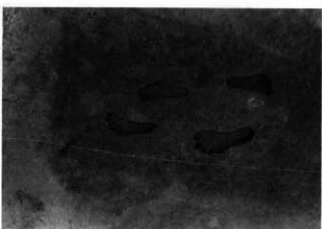
3 4区 As-B下水田



4 同3



5 同3 人の足跡確認状況



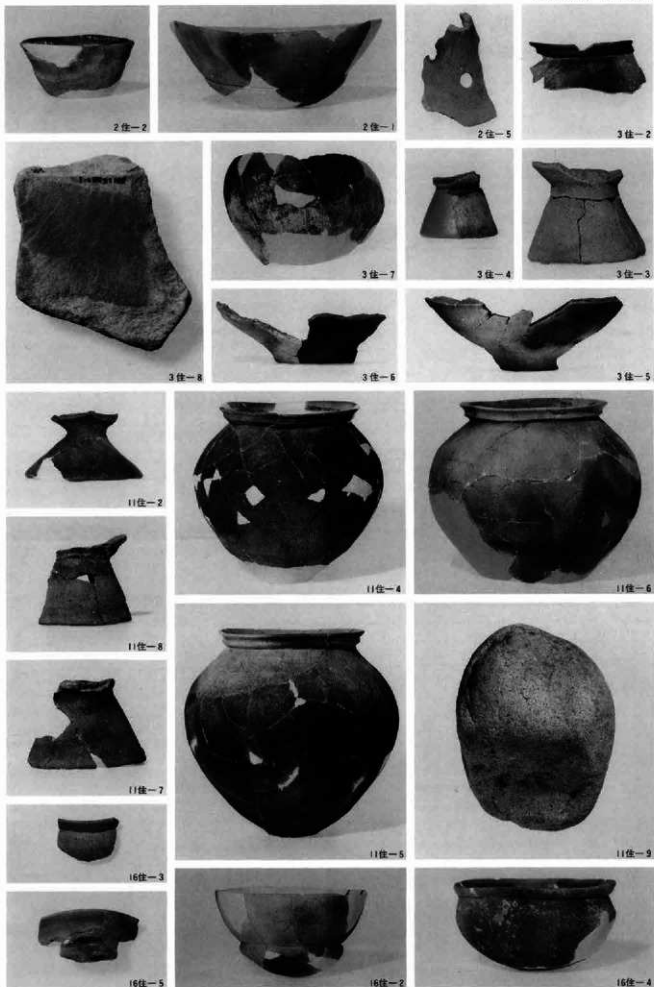
6 同5 完掘状況

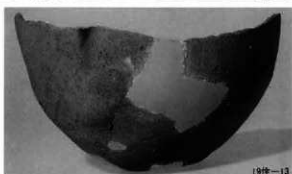
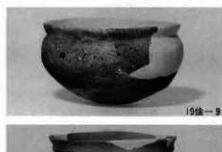
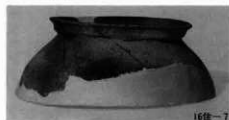
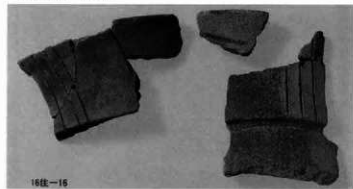


7 5区 As-B下の調査風景



8 5区 As-B 直下 短刀(第421圖)の出土状況







P L 254 古代



1 住-3



1 住-4



1 住-7



1 住-5



1 住-19



1 住-14



1 住-6



1 住-18



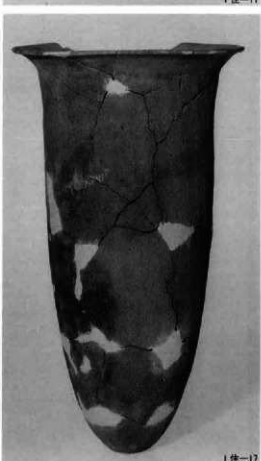
1 住-10



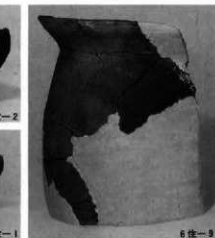
1 住-15

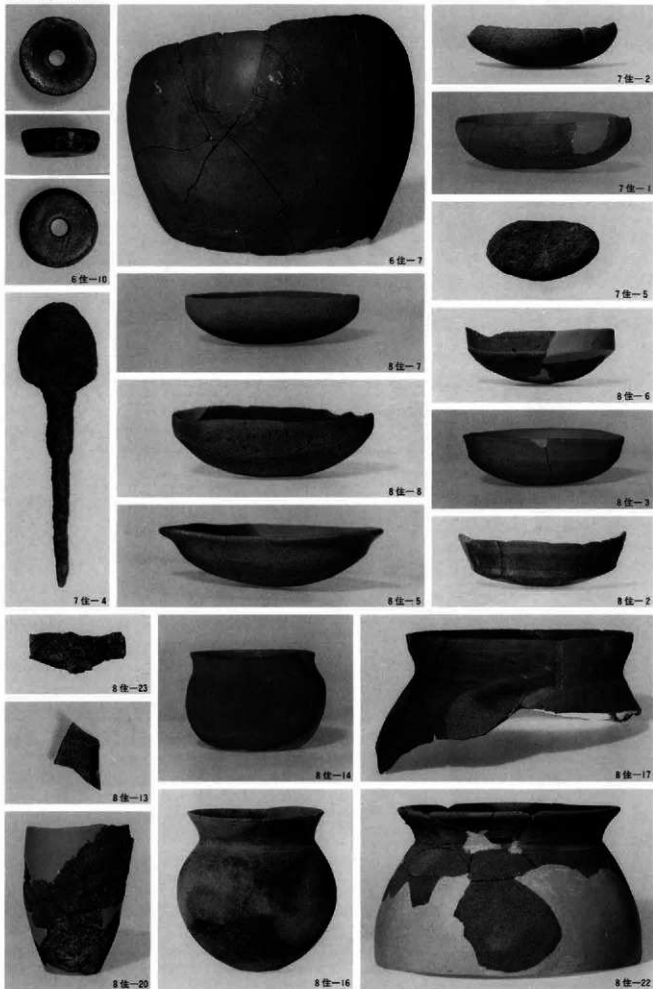


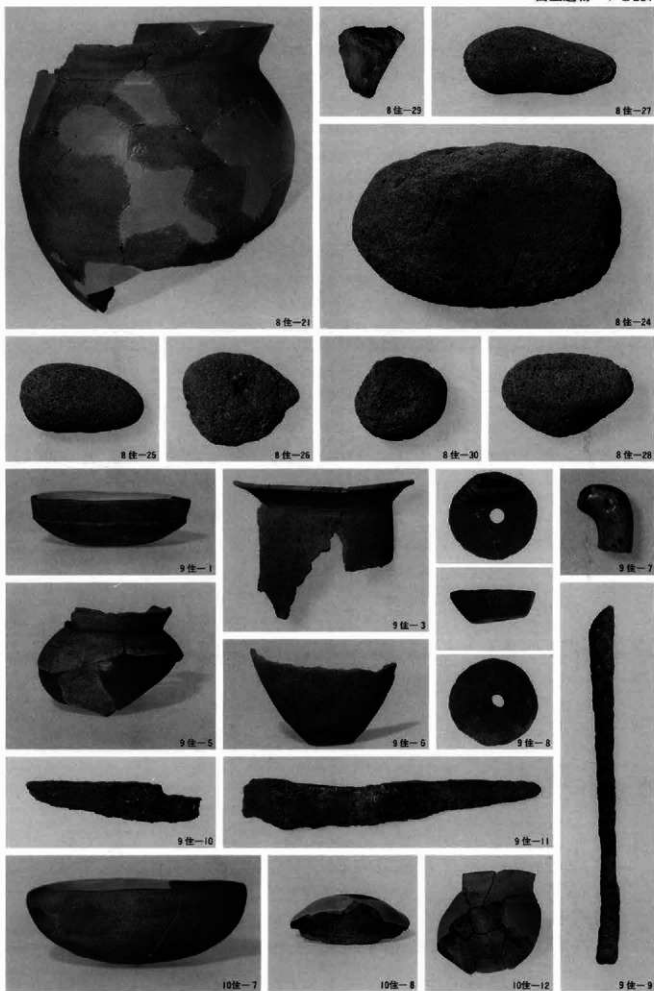
1 住-11



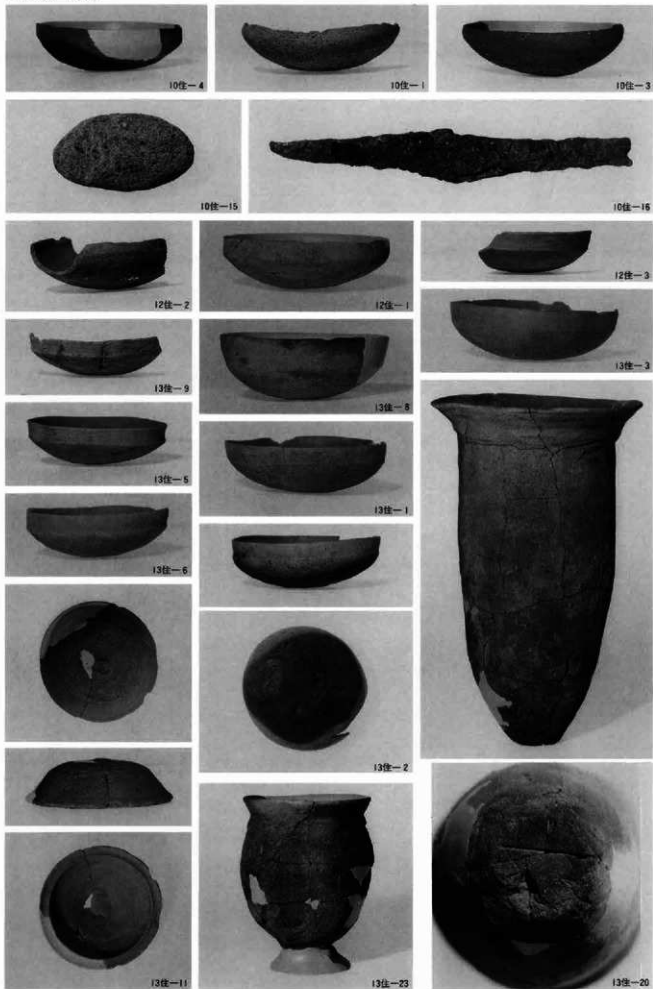
1 住-17





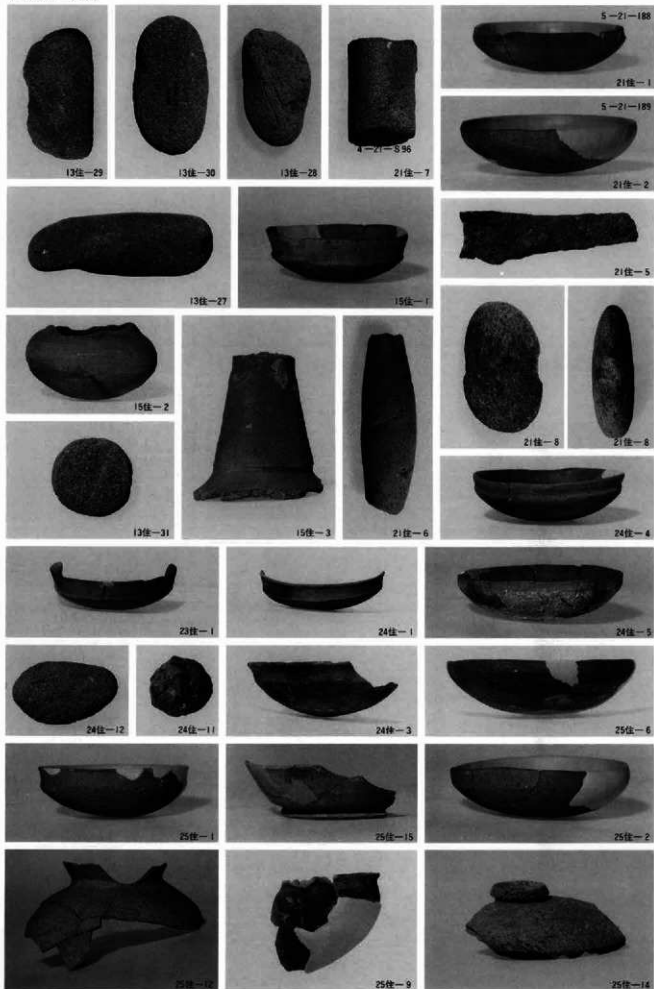


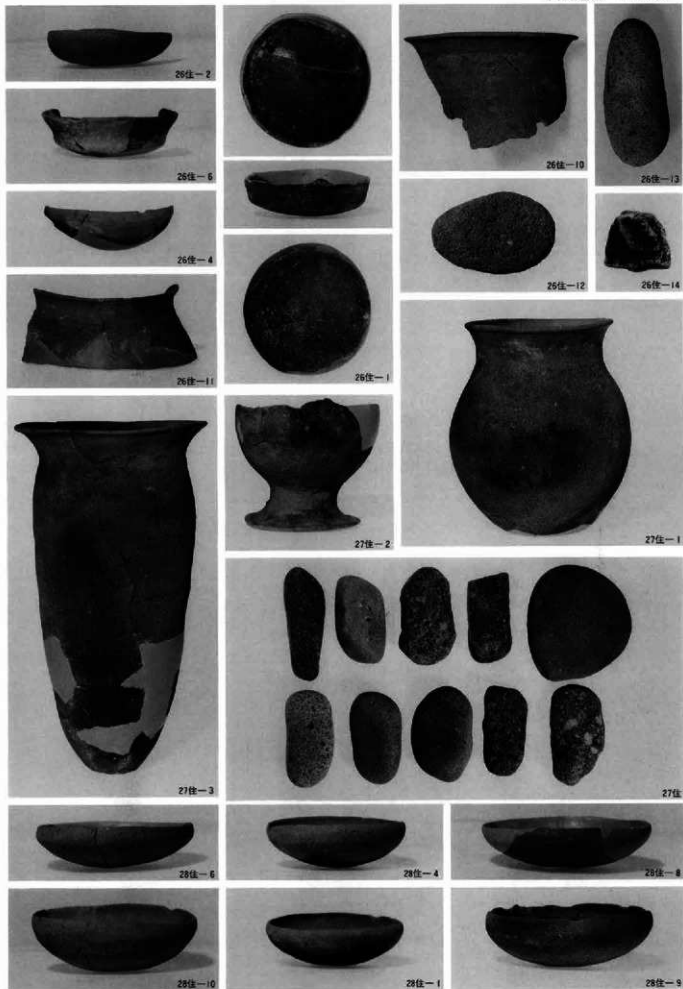
8~10号住居出土遺物



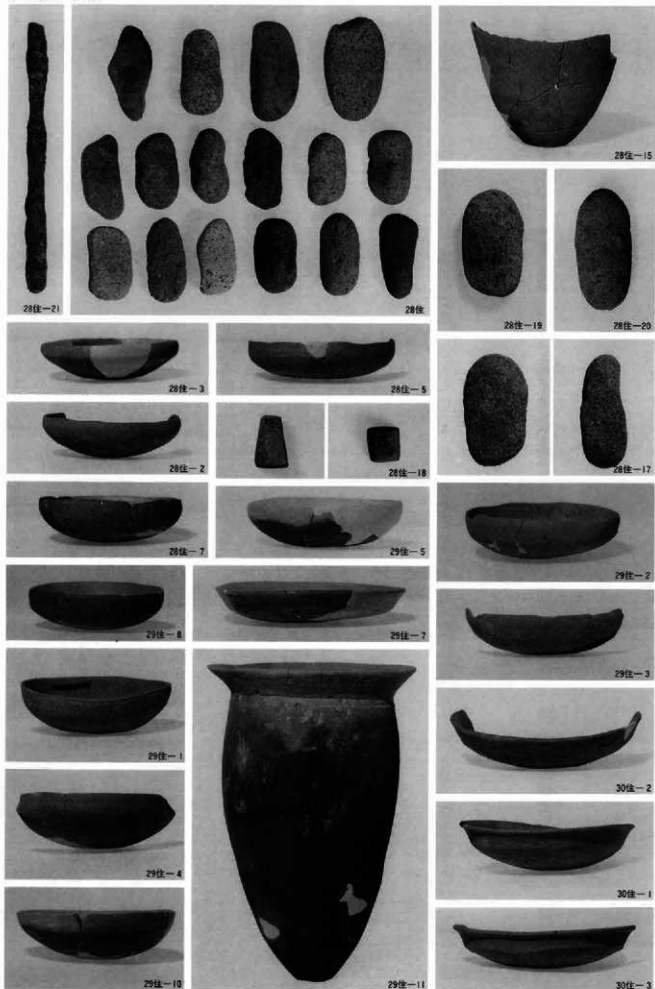


P L 260 古代

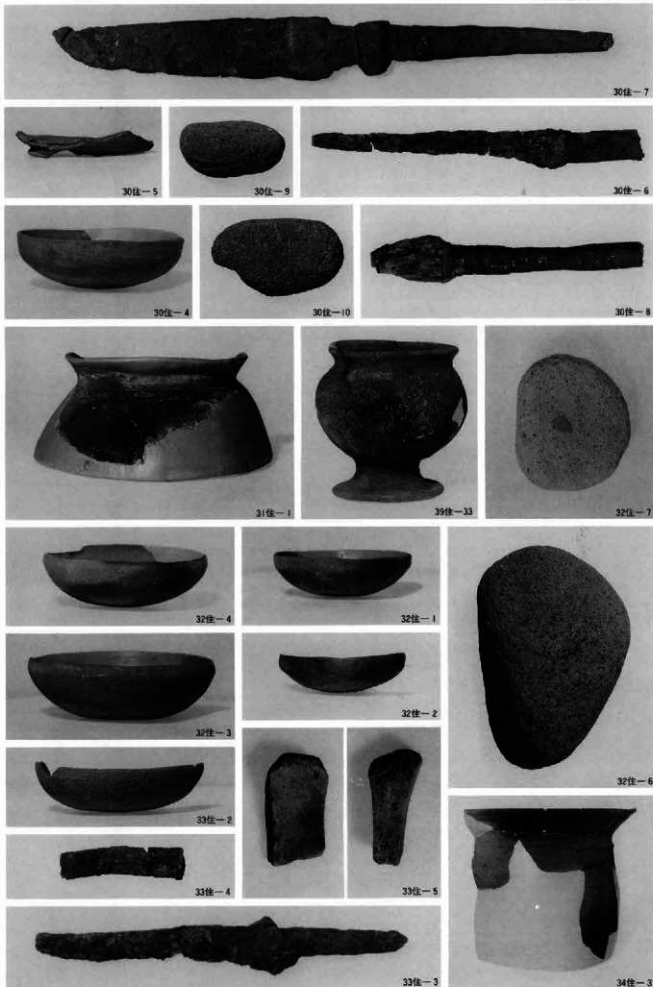


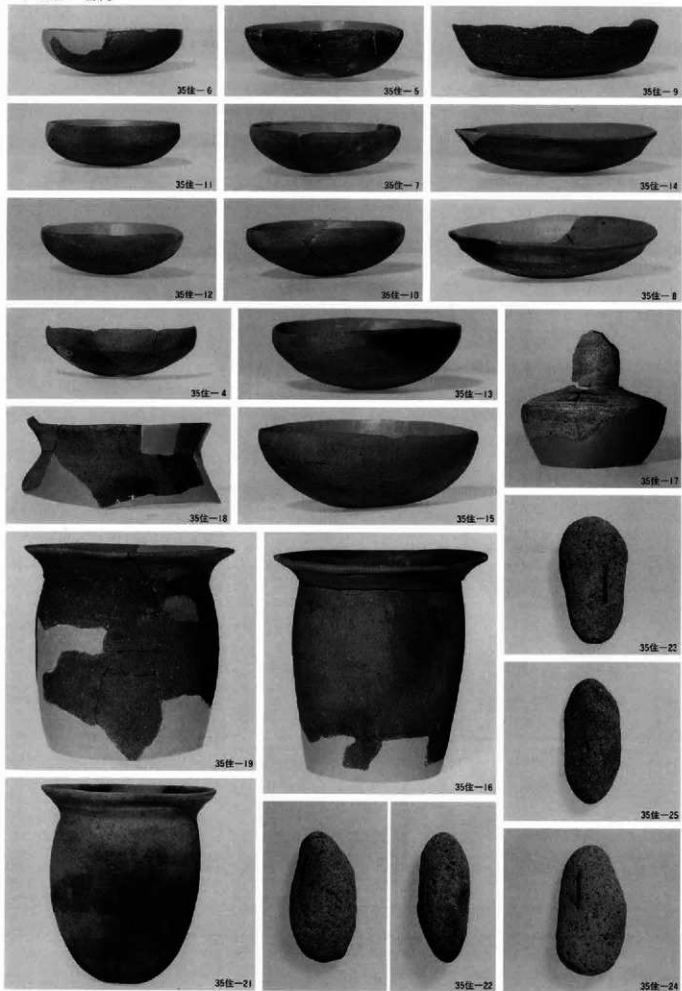


26~28号住居出土遺物

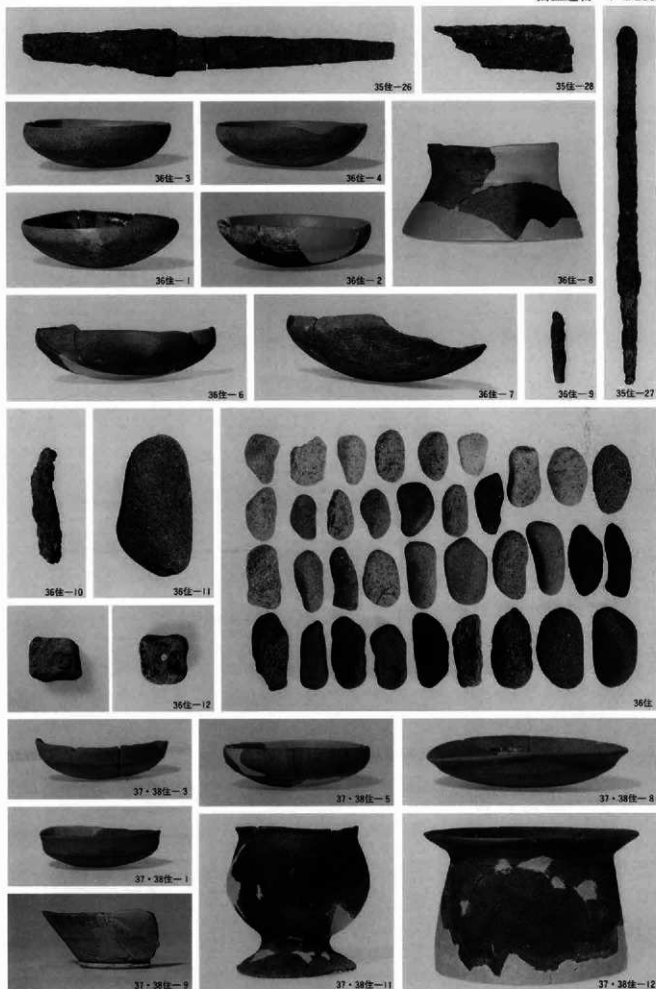


28~30号住居出土遺物

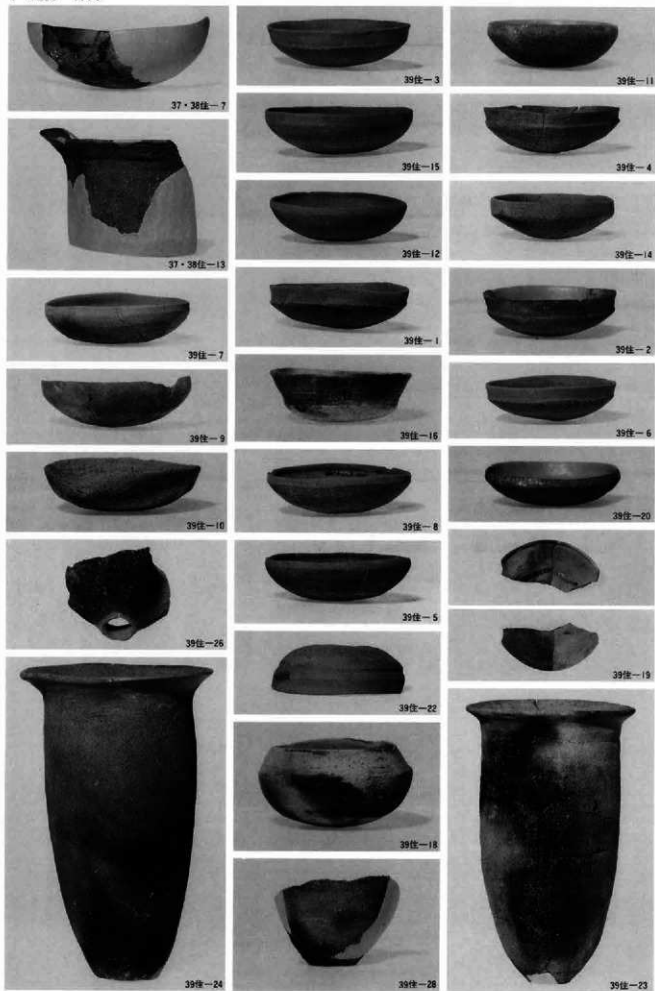




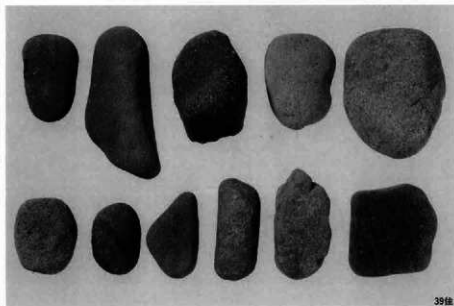
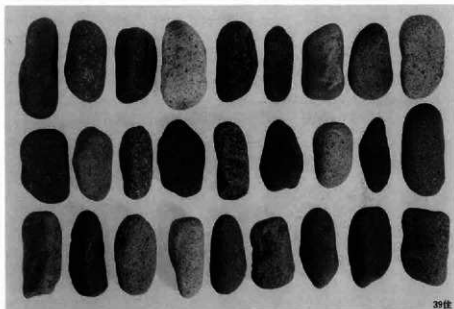
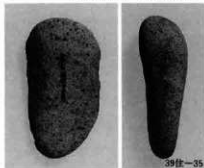
35号住層出土遺物

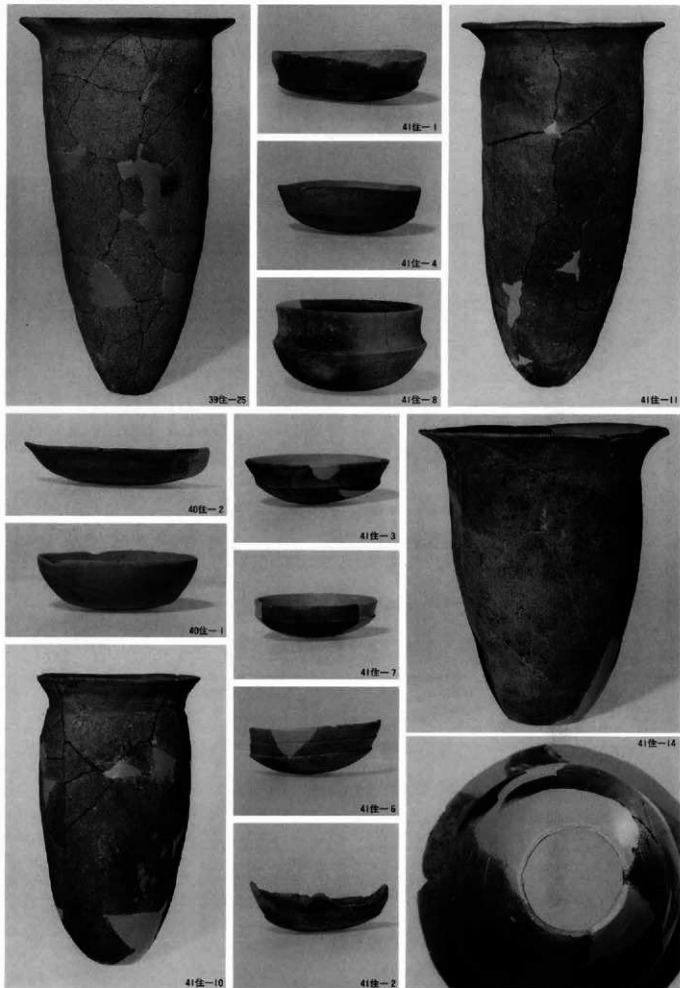


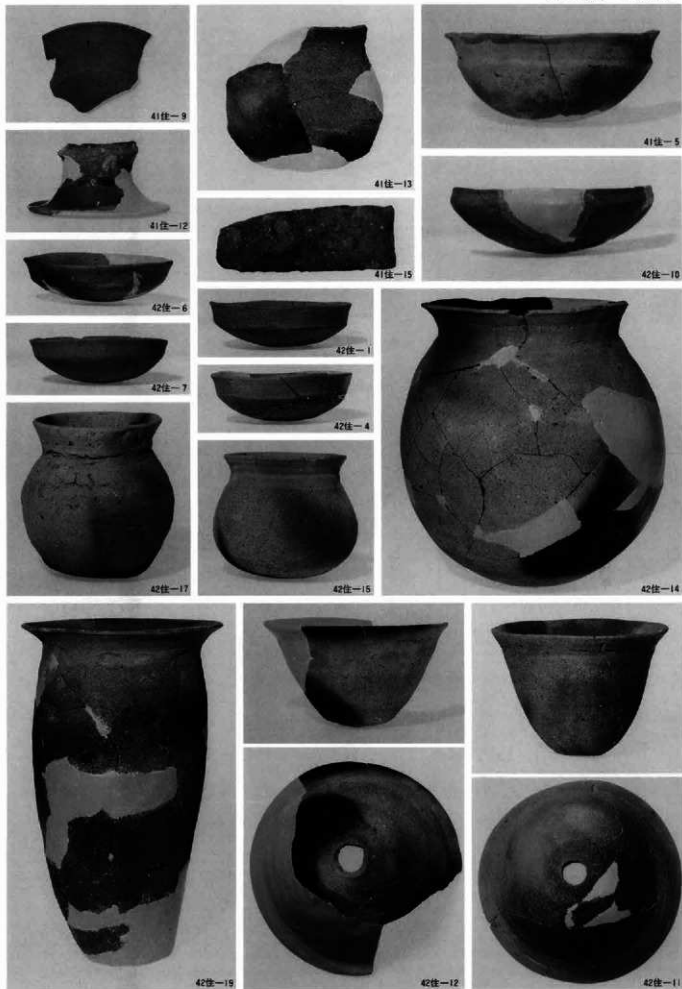
35~38号住層出土遺物



37～39号住居出土遺物

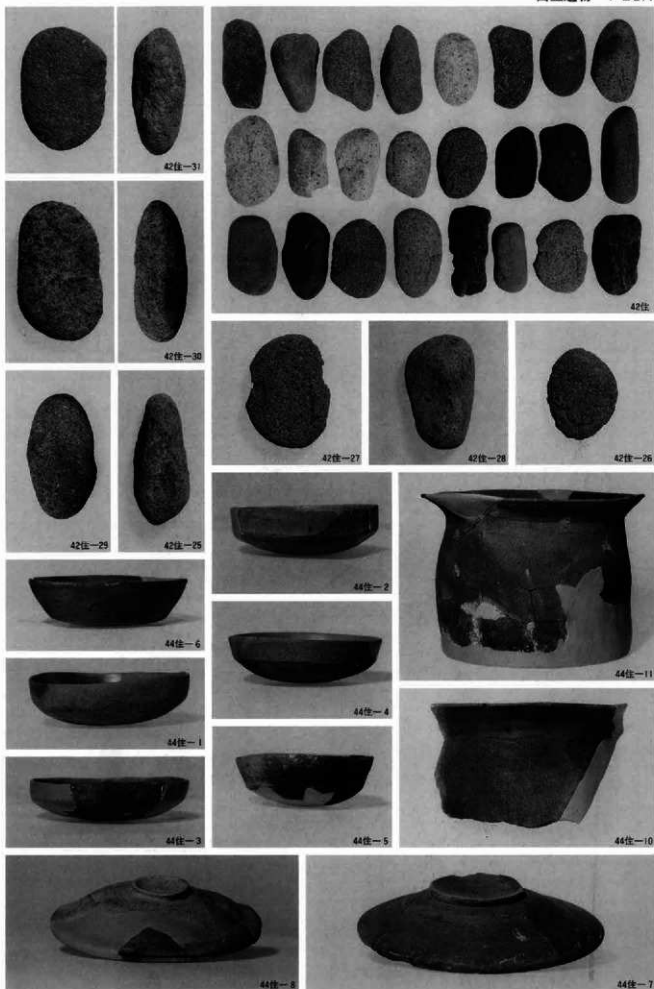




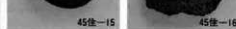
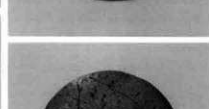
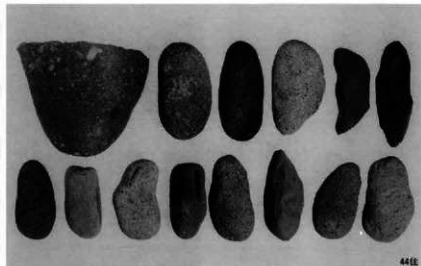


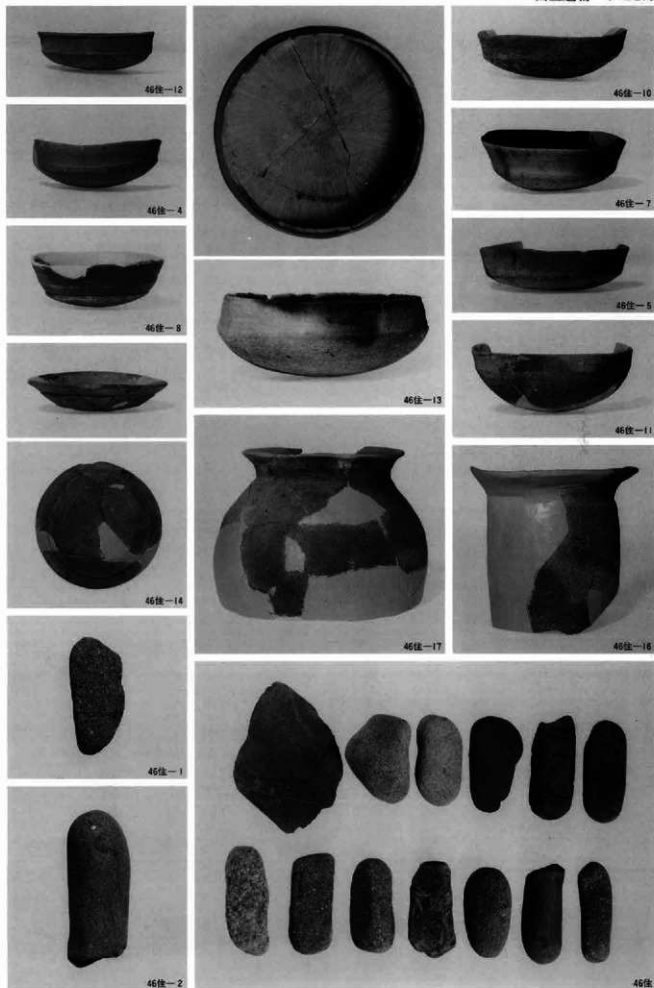
41・42号住居出土遺物



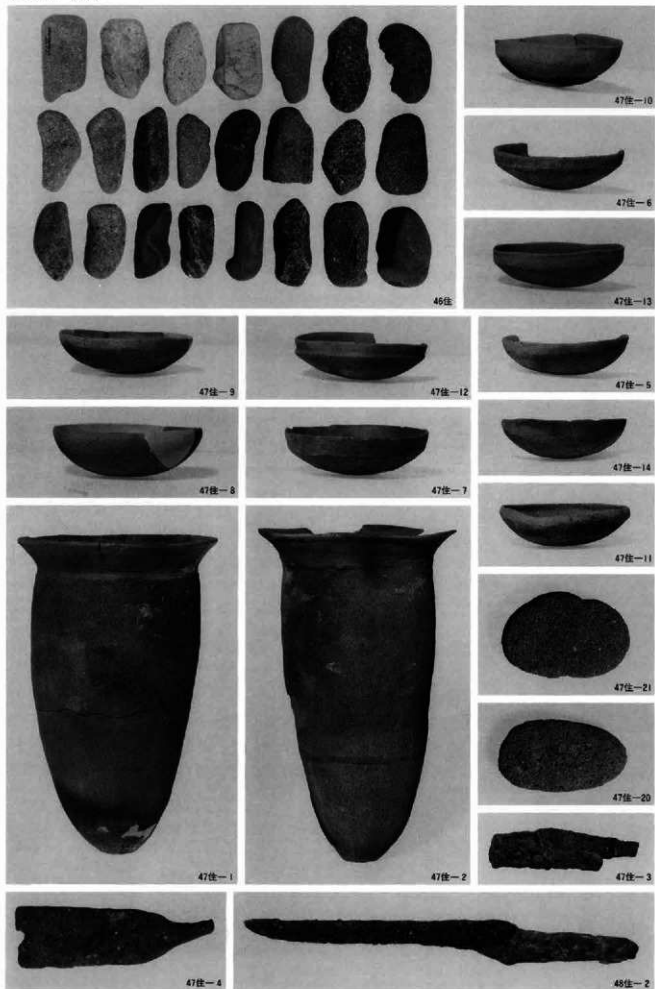


42・44号住居出土遺物





46号住居出土遺物



46~48号住居出土遺物



48住-1



49住-1



49住-2



49住-9



49住-3



49住-5



49住-6



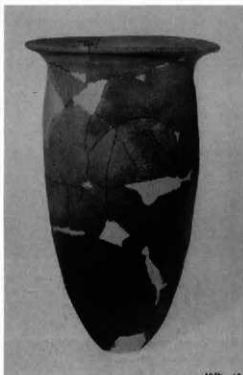
49住-4



49住-7



49住-8



49住-10



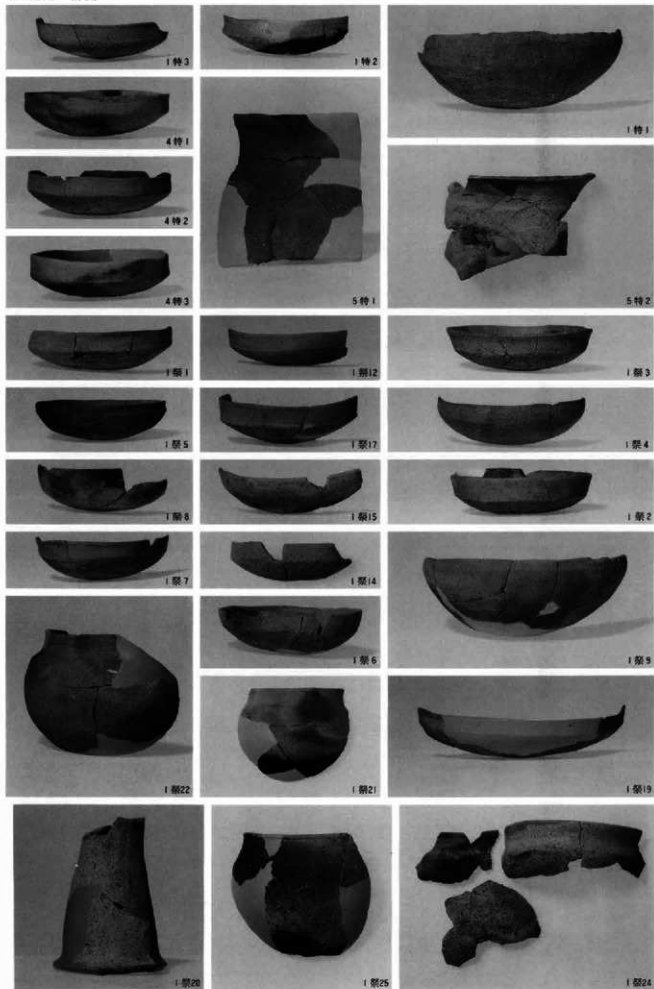
49住-11

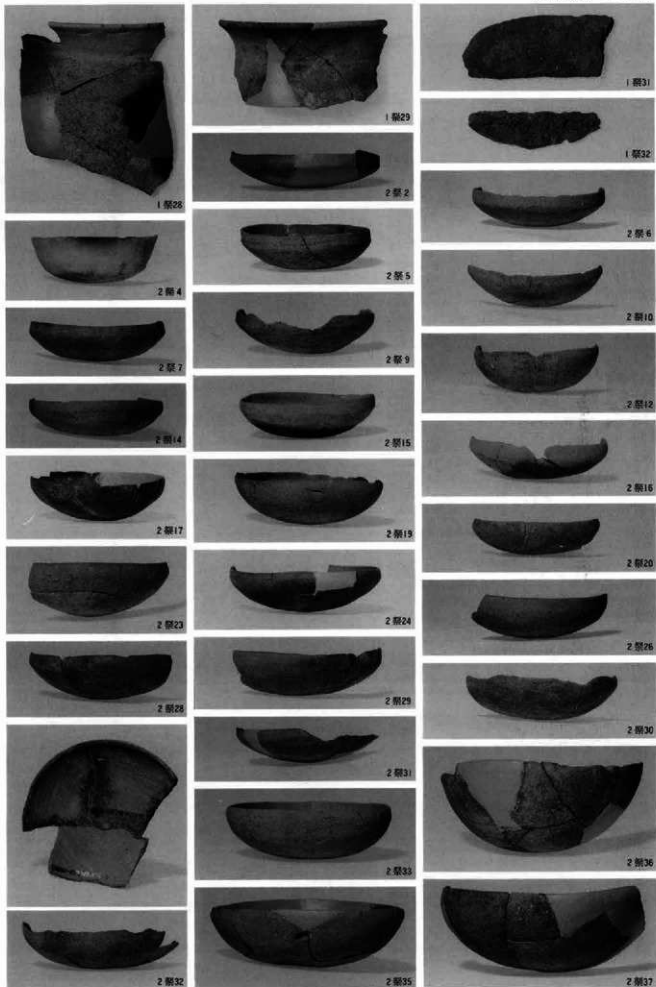


49住-12



49住-13

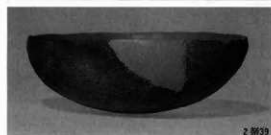




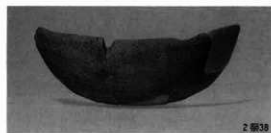
1・2号祭祀跡出土遺物



2 祭41



2 祭39



2 祭38



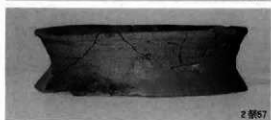
2 祭40



2 祭56



2 祭62



2 祭57



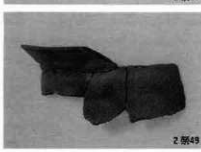
2 祭43



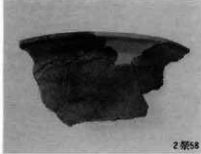
2 祭54



2 祭47



2 祭49



2 祭58



2 祭65



2 祭42



2 祭45



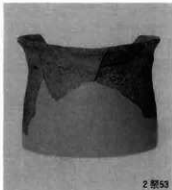
2 祭44



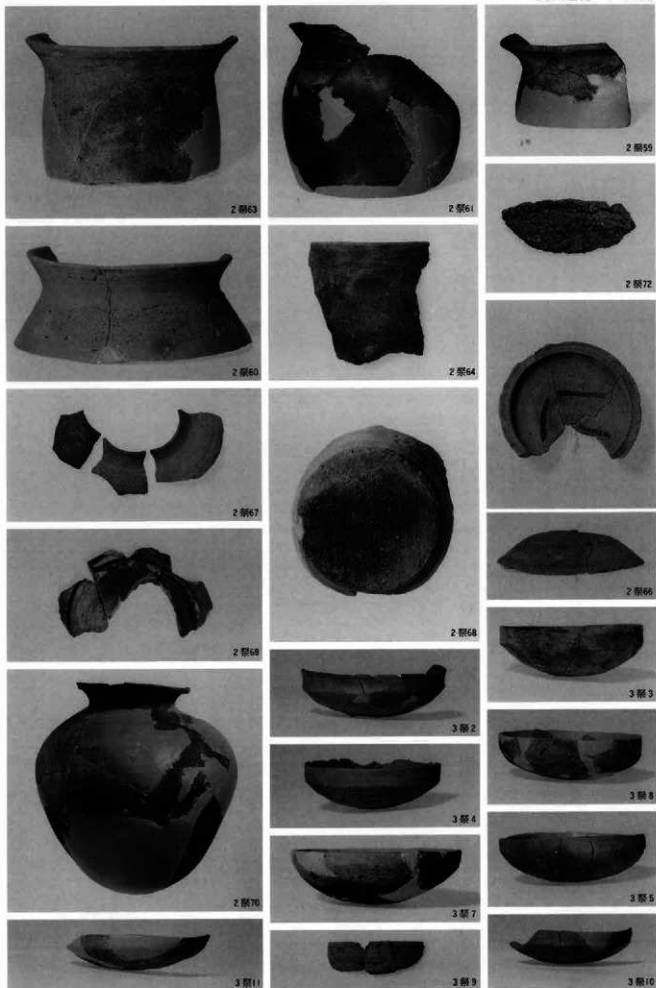
2 祭50



2 祭48



2 祭53



2・3号祭祀跡出土遺物



古墳周壺 1



古墳周壺 9



古墳周壺 13



古墳周壺 7



古墳周壺 10



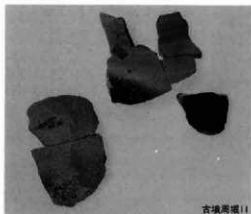
古墳周壺 4



古墳周壺 5



古墳周壺 8



古墳周壺 11



古墳周壺 2



古墳周壺 3



古墳周壺 27



古墳周壺 22



古墳周壺 33



古墳周壺 26



古墳周壺 15



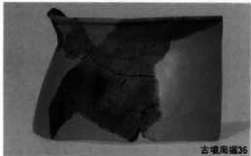
古墳周壺 32



古墳周壺 20



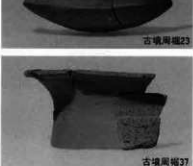
古墳周壺 23



古墳周壺 36



古墳周壺 35



古墳周壺 37



古墳周堀24



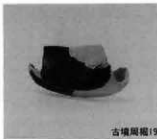
古墳周堀25



古墳周堀31



古墳周堀16



古墳周堀19



古墳周堀18



古墳周堀34



古墳周堀39



古墳周堀28



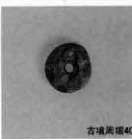
古墳周堀14



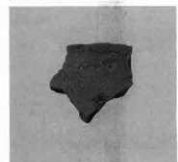
古墳周堀38



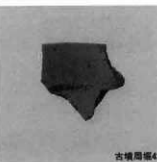
古墳周堀41・42



古墳周堀40



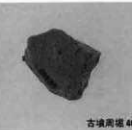
古墳周堀43



古墳周堀43



古墳周堀46



古墳周堀46



古墳周堀47



古墳周堀47



古墳周堀44



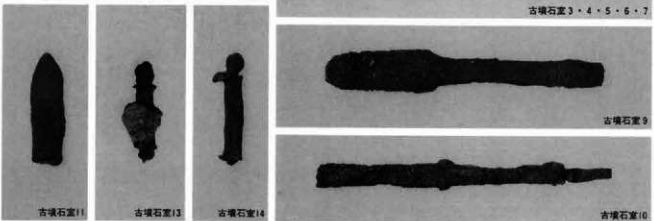
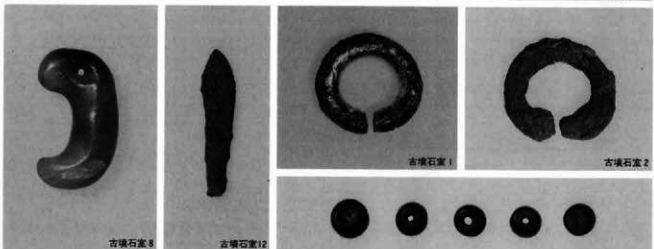
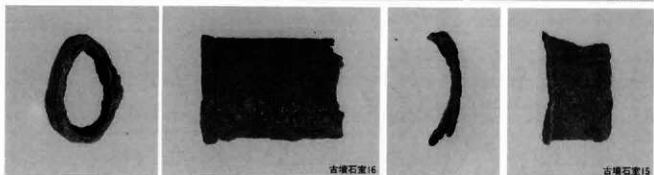
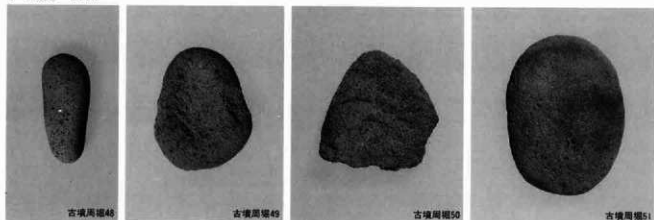
古墳周堀44

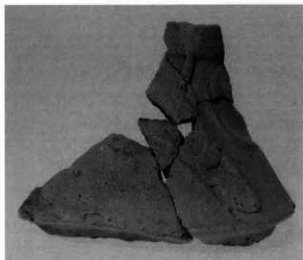


古墳周堀45

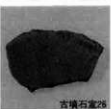


古墳周堀45





古墳石室20



古墳石室19

古墳石室28



古墳石室23

古墳石室21

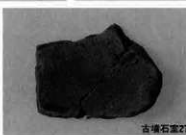
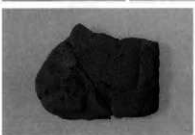


古墳石室20



古墳石室22

古墳石室26

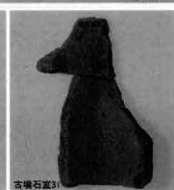


古墳石室18

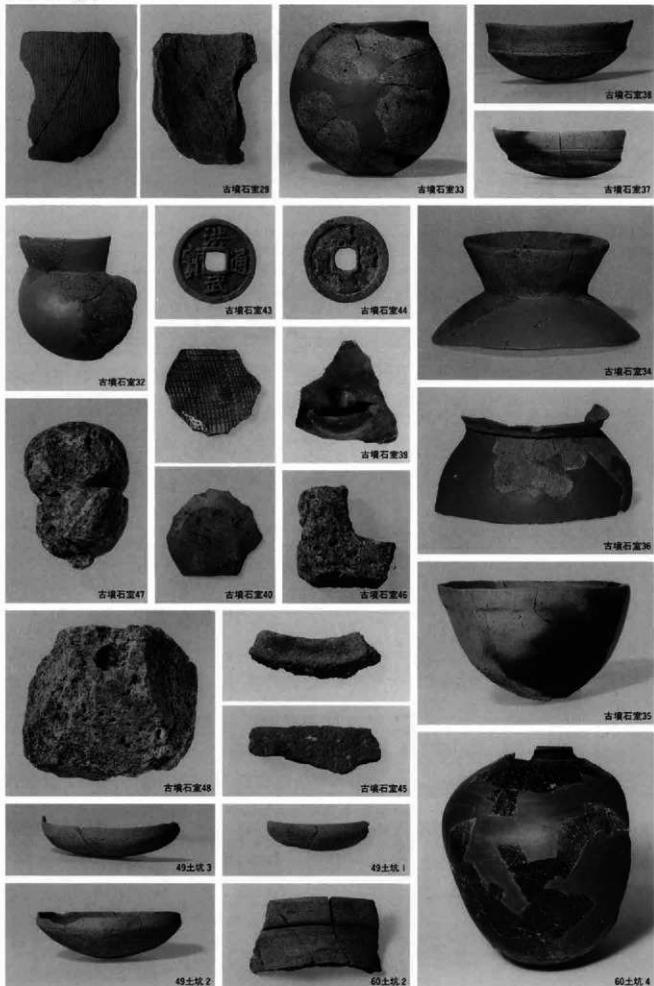
古墳石室27



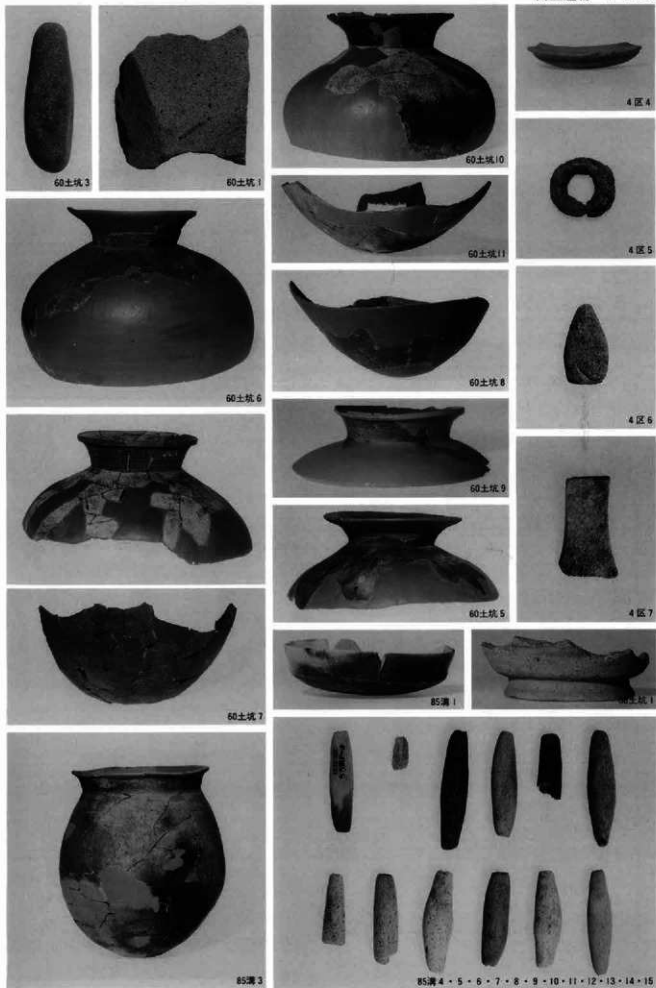
古墳石室24



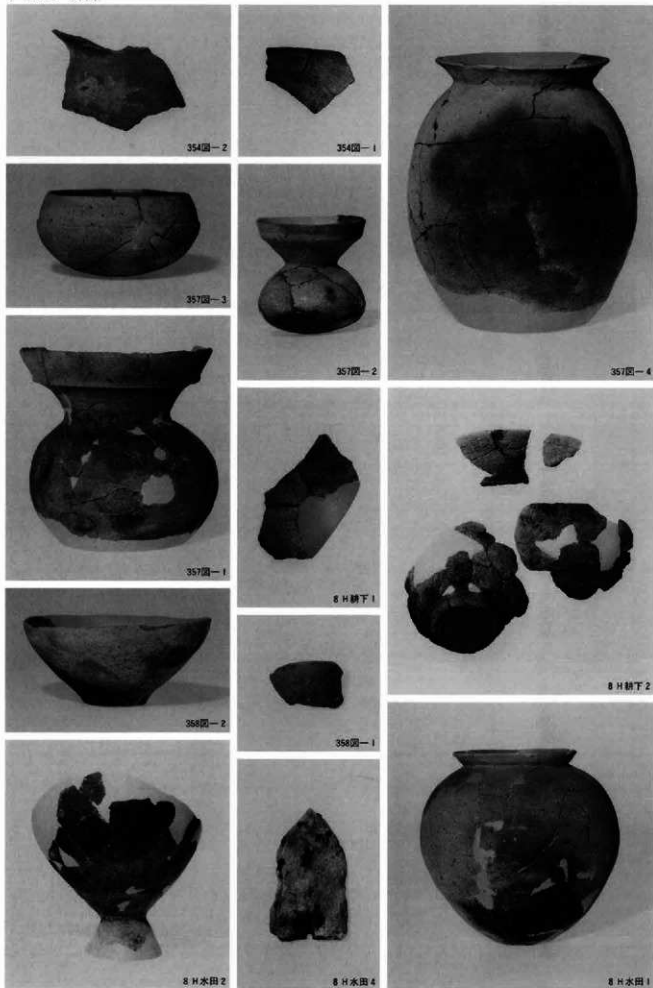
古墳石室31



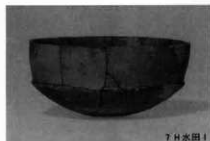
古墳石室 49・60号土坑出土遺物



60·66号土坑 85号溝 4区遺構確認面出土遺物



1 ~ 3 区旧河道 8 H 水田出土遺物



7 H 水田 1



4 H 水田 2



4 H 水田 1



4 H 水田 7



4 H 水田 8



2 H 水田跡下 (5区) 4



1 H 水田跡下 (3区) 2



1 H 水田 (2-3区) 1



4 H 水田 4



4 H 水田 6



2 H 水田跡下 (5区) 5



2 H 水田跡下 (5区) 2



2 H 水田跡下 (5区) 3



1 H 水田跡下 (3区) 1



1 H 水田 (2-3区) 3



4 H 水田 5



4 H 水田 3



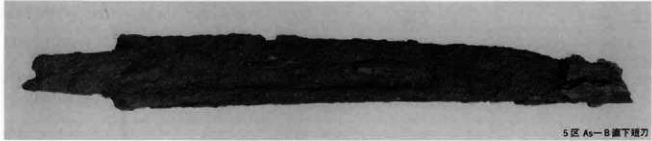
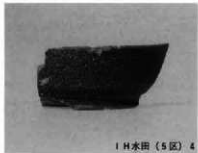
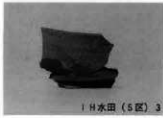
2 H 水田跡下 (5区) 1



2 H 水田跡下 (5区) 6・7・8



1 H 水田 (2-3区) 2



5区 As-B 遺下短刀



1 2区1～3号溝 全景



2 同1 土層断面



3 2区3号溝と1号土坑の重複



4 同2区3号溝断面 (南壁)



5 3区8～10号溝 全景



1 3区6号溝 全景(右側)



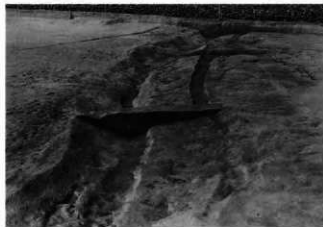
2 同1 溝内の杭列



3 同1 埋没状況



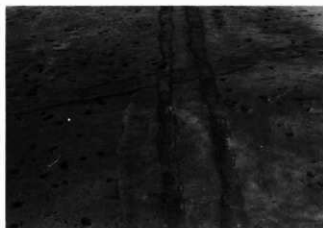
4 4区111~113号溝 全景



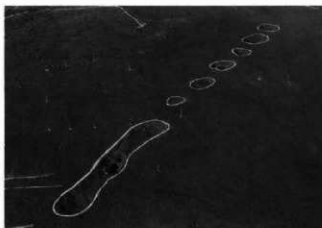
1 3区111~113号溝



2 同1 礎の出土状況



3 4区121・122・123号溝



4 4区137号溝



5 4区136号溝



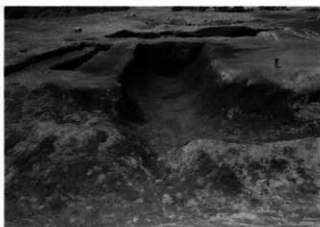
6 4区139号溝



1 5区43・44・53号溝 Aセクション



2 同1 Bセクション



3 5区44号溝



4 同3



5 5区45号溝



6 5区46号溝



7 5区53号溝



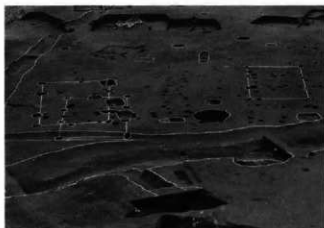
8 5区110号溝



1 5区中・近世の遺構 全景（東から）



2 同1 3～5号掘立柱建物の配置（東から）



3 同2（西から）



4 同1（西から）



5 5区52号遺構全景



1 3区1号井戸 (大アゼの左側)



2 3区2号井戸



3 5区3号井戸



4 同3 完掘状況



5 5区4号井戸



6 同5 完掘状況



7 同5 底面付近の砂織層



8 5区5号井戸



1 5区6号井戸



2 岡1 底面付近出土の糠



3 5区7号井戸



4 岡3 底面付近出土の石臼



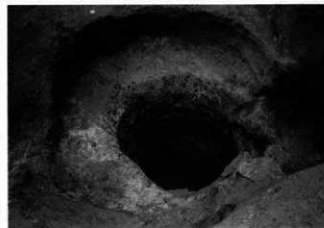
5 5区8号井戸



6 岡5 底面付近出土の人骨



7 5区9号井戸



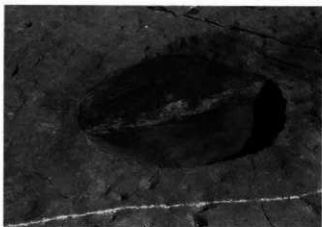
8 岡7 完掘状況



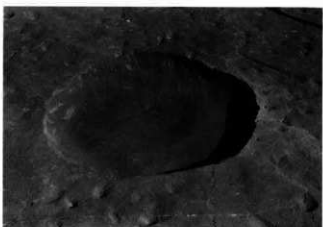
1 2区1号土坑



2 2区2号土坑



3 3区3号土坑



4 同3



5 3区4号土坑



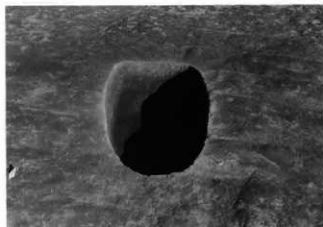
6 5区10号土坑



7 5区11号土坑



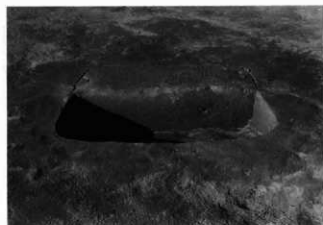
8 5区12号土坑



1 5区13号土坑



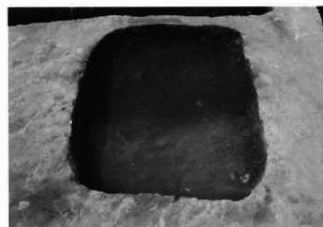
2 5区14号土坑



3 5区15号土坑



4 5区16号土坑



5 5区17号土坑



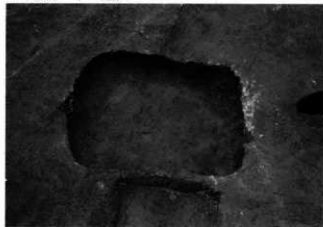
6 5区19号土坑



7 5区20·42号土坑



8 同7



1 5区21号土坑



2 5区22号土坑



3 5区23号土坑



4 5区31号土坑



5 5区33号土坑



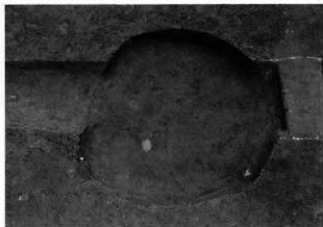
6 5区34号土坑



7 5区35号土坑



8 5区36号土坑



1 5区37号土坑



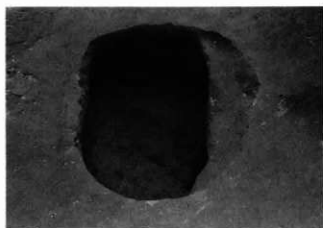
2 5区39号土坑



3 5区40号土坑



4 5区41号土坑



5 同4 完掘状况



6 5区47号土坑



7 同6 完掘状况



8 5区48号土坑



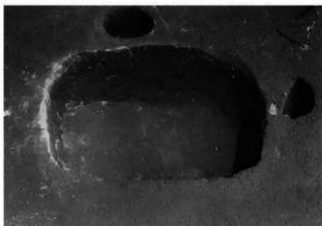
1 5区52号土坑



2 5区54号土坑



3 5区55号土坑 59号土坑



4 5区59号土坑



5 5区61号土坑



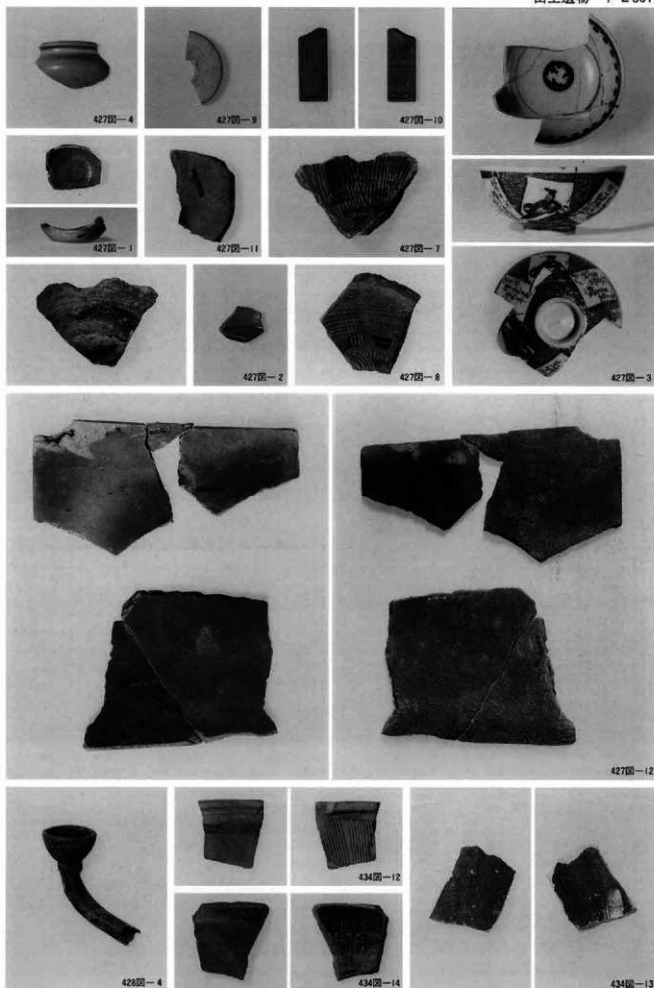
6 5区67号土坑

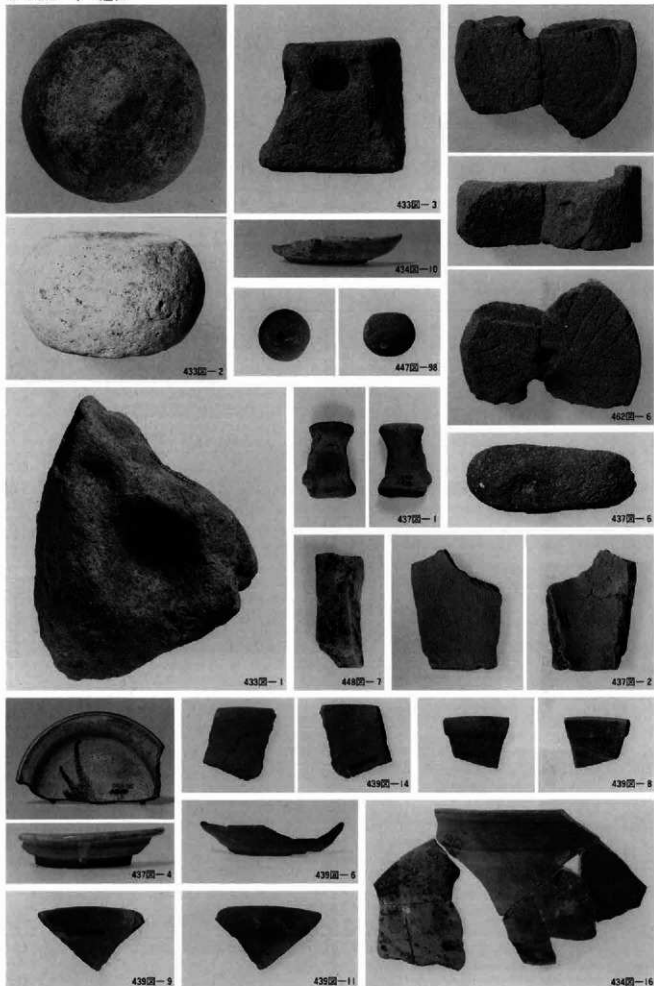


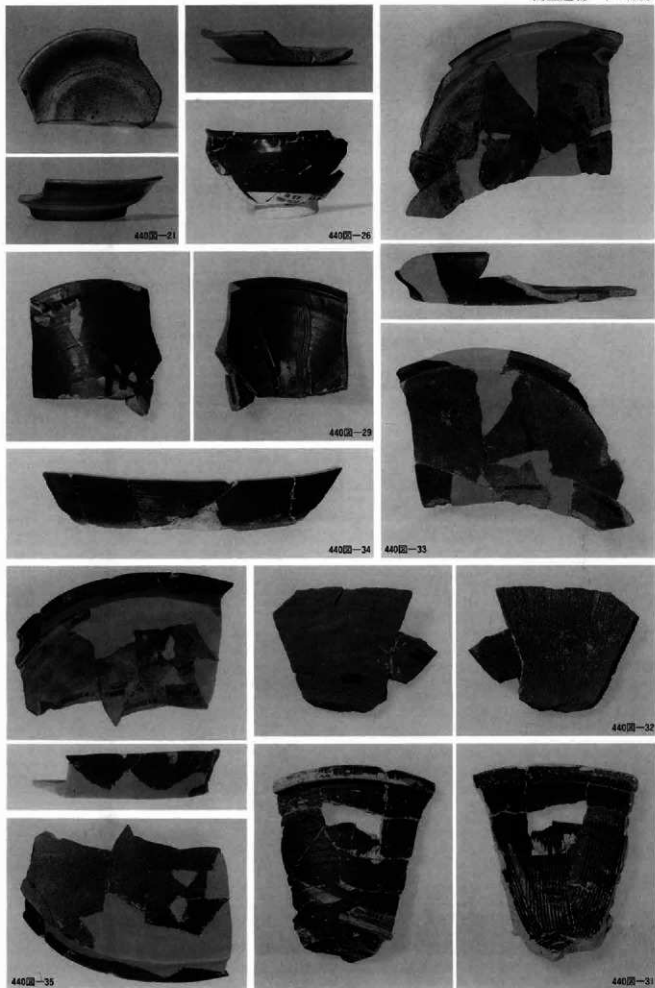
7 5区63号土坑



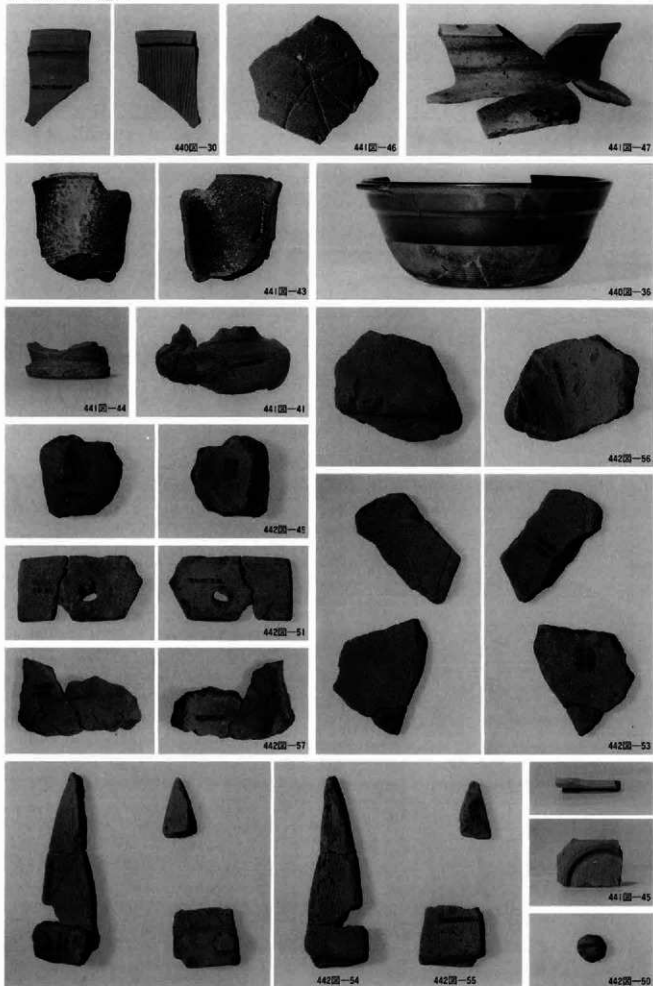
8 图7



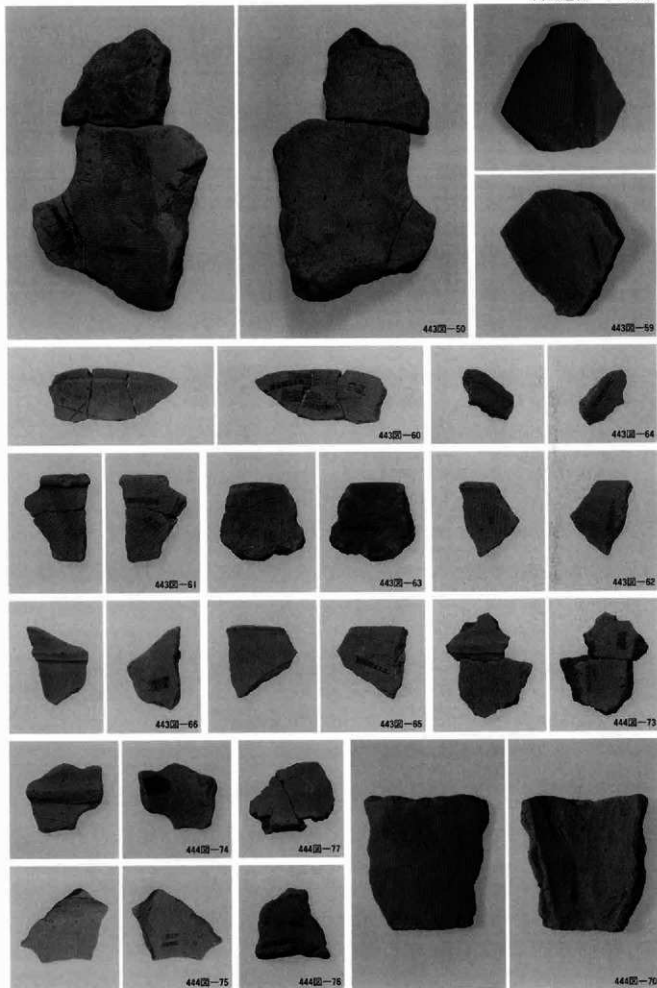




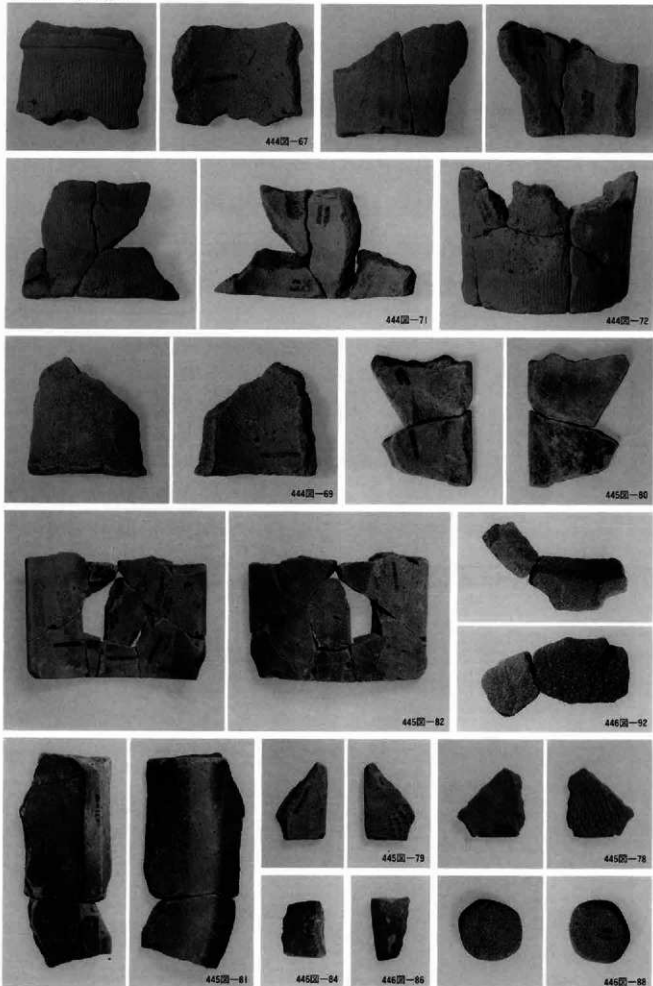
5区出土遺物



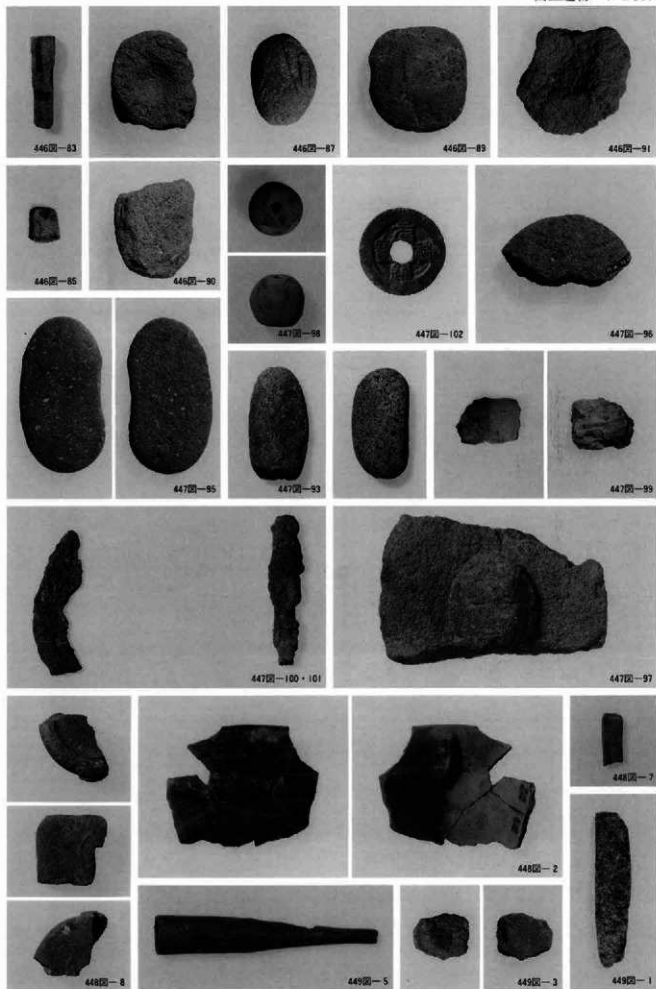
5区出土遺物

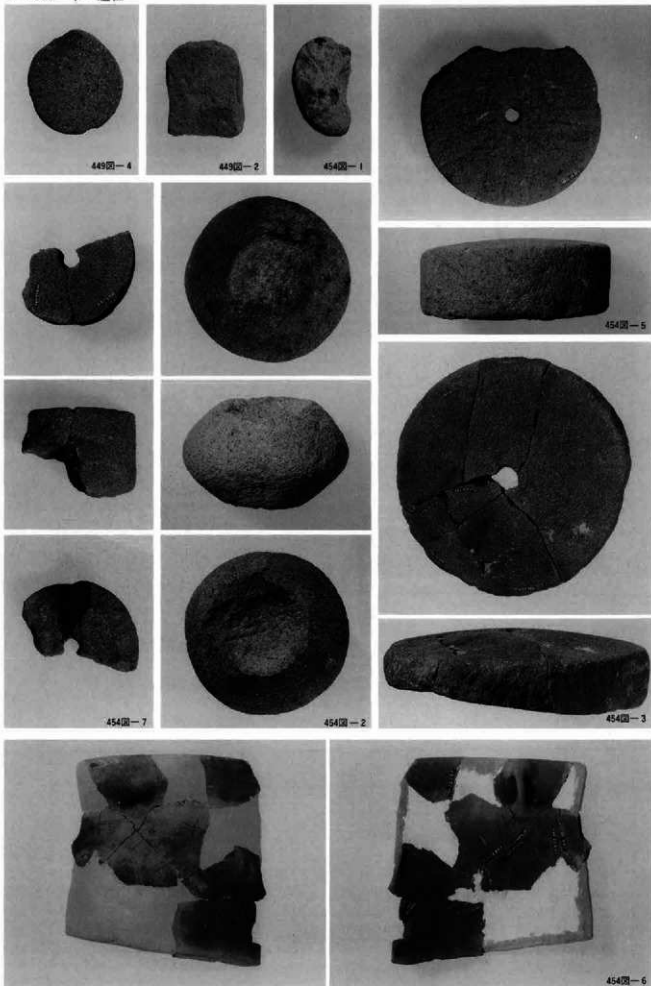


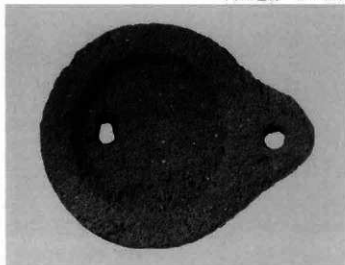
5区出土遺物



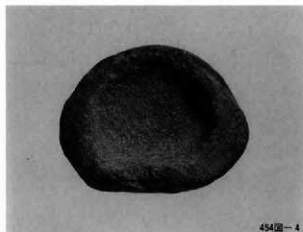
5区出土遗物



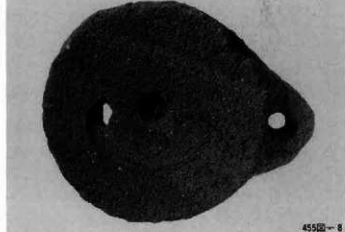




455図-9



454図-4



455図-8



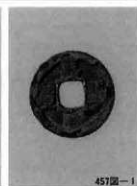
455図-11



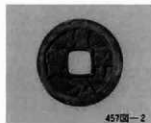
456図-10



457図-4



457図-1



457図-2



457図-3



456図-1・2・3

(財)群馬埋蔵文化財調査事業団
調査報告第144集

五日牛清水田遺跡
(古代・中近世編)

一般国道17号(上武道路)改築工事に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成5年3月20日 印刷

平成5年3月26日 発行

編集・発行／(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北嬭村大字下箱田784番地の2
電話(0279)52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社